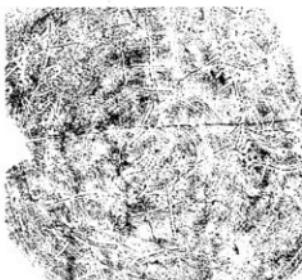


船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡

【第1分冊】

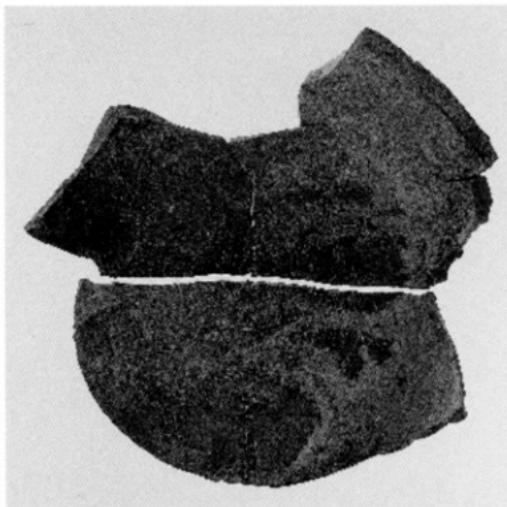


2000

財団法人 岐阜県文化財保護センター

ふなやまきたこふんぐん ふなやまきたこようあとぐん ふなやまきたいせき
船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡

【第1分冊】



2000

財団法人 岐阜県文化財保護センター



船山北 1 号窑出土遗物



船山北 2 号窑出土遗物



船山北 3 号窑出土遗物



船山北 5 号窑灰原出土绿釉陶器



船山北 2・3号窯（左が3号窯・右が2号窯）



船山北 4・5号窯（左が5号窯・右が4号窯）



船山北 3 号墓出土遗物

序

各務原の『須衛』の地はその地名の示すとおり、古くから須恵器を生産した土地として知られています。本報告書はこの『須衛』の地で計画されたVRテクノジャパン開発事業に伴い、当地に所在する船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡の発掘調査を平成5年度から平成8年度にかけて実施した記録及び成果を取りまとめたものです。

計画当初は15基の古墳を調査する予定であったものが、調査の経過により5基の古窯跡ならびに数十基に及ぶ近世墓が新たに確認され、当地の歴史を解明するにあたり新たな成果をあげることができました。とくに鎌倉時代初期の古窯跡である船山北2・3号窯の発見は須恵器の生産で栄えた『須衛』の地のその後を知る上で貴重な資料になると思われます。なかでも船山北3号窯で焼成され、「奉施入 建久五年十月 祐向寺十八日」と記された刻銘陶器の発見は、その製作年代だけではなく納入先もが判明した資料として全国的にみても希有な事例であり、今後の研究の進展に寄与すべき資料として期待されます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、関係各諸機関ならびに各位の温かい御配慮と御協力を頂き、感謝を申し上げます。また、現地における発掘調査においては地元の方々から格別なる御協力を賜ったことをここで厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成12年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 村木光男

例　　言

1. 本書は岐阜県各務原市須衛4丁目地内に所在する船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡（遺跡番号21213-03670～03681・08796～08797・08798～08802・08803）の発掘調査報告書である。
2. 本調査はVRテクノジャパン開発事業に伴うもので、岐阜県土地開発公社から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は岐阜県教育委員会から委託を受けた財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は平成5～8年度に実施し、故大参義一愛知学院大学教授の指導のもとに小木曾文和（平成5・7年度）、市原輝明（平成7年度）、飯沼暢康（平成6年度）、松野晶信（平成5年度）、稻川 威（平成7年度）、長谷川幸志（平成8年度）、藤田英博（平成5～8年度）が担当した。整理調査は平成8～10年度に実施し、大橋弘志（平成8年度）、青木健太郎（平成9年度）、藤田英博（平成8～10年度）が担当した。
4. 本書に記載した遺物の実測は次の者が行った。

加納恭子・川瀬幸子・佐藤まさみ・白垣若代・広瀬千恵美・宗方亜由美・鳥田崇正
青木健太郎・大橋弘志・藤田英博
5. 実測図等のトレースは次の者が行った。

加納恭子・加藤久枝・佐藤まさみ・白垣若代・広瀬千恵美・宗方亜由美
青木健太郎・藤田英博
6. 遺物の写真撮影はフォトスタジオ サトウに委託して行った。
7. 本書の執筆は目次に記してあるとおりで、編集は藤田英博が行った。
8. 水準測量、空中写真測量は㈱イビソクに委託して行った。古墳の石室測量は㈱国際航業に委託して行った。
9. 炭化材の樹種同定及び古地磁気測定などの自然科学分析は㈱パレオラボに委託した。漆片の同定は岐阜県工芸試験場に依頼した。
10. 発掘調査及び報告書作成にあたっては次の方々や諸機関から御助言・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、五十音順）

伊藤 昭・井上喜久男・大熊厚志・大熊茂広・尾野善裕・清田善樹・斎藤孝正・戸崎憲一
長屋幸二・橘崎彰一・西村勝広・藤澤良祐・渡辺博人・山内伸浩・横山住雄・吉岡康暢
各務原市教育委員会・各務原市埋蔵文化財調査センター
11. 発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理などには次の方々の参加・協力を得た。
 - ・補助調査員

平林 知子（平成5年度）・目加田 哲（平成5年度）
尾閔真奈美（平成6・7年度）・河村 千寿（平成7年度）
木俣恵美子（平成6年度）
 - ・発掘作業員

平成5年度

足立美智子・石川美代子・今尾 一明・岩田 稔・遠藤 薫・大橋 圭壱
小野木 学・川瀬 幸子・河村 義幸・倉知 錦重・嶺嶽 豊市・小林 和枝
高田 桂子・長沢 秋雄・長繩とめを・平川 節雄・平脇 萩四・藤崎 工
宮崎 初子・谷藤 利明・吉岡夕紀子

平成 6 年度

足立美智子・石川美代子・石田ふきえ・石田 光枝・今尾 一明・岩田 稔
宇野 京子・宇野 嘉晃・遠藤 薫・大塚 虎男・大西 紀之・大野 孝雄
大橋 圭壱・片桐麻里子・加藤かず子・加藤ちづ子・加藤 裕子・河合 伸悟
河合多美子・川瀬 幸子・川橋 靖子・熊澤喜三郎・栗本 奈弥・嶺嶽 豊市
後藤 謙・近藤 春代・島田 崇正・高田 桂子・高橋 方紀・長沢 秋雄
長繩とめを・長繩 ひさ・中野 青平・平川 節雄・平光智津恵・平脇 萩四
深尾 鈴子・藤崎 工・古田千代美・宮崎 初子・八島 典子・吉岡夕紀子
吉田 隆男

平成 7 年度

相川 真美・安宅 邦子・足立美智子・足立 令子・飯尾かをる・伊神笑美乃
石川美代子・石田 明美・石田ふきえ・石田 光枝・五十川 港・市川あけみ
今尾 一明・岩田 稔・岩本 昭子・宇野 京子・遠藤 薫・太田美代治
大塚 俊一・大塚 虎男・大野 孝雄・大橋 圭壱・小川 悅子・小川 幸枝
小川 祝治・小川 秀・片桐麻里子・加藤かず子・梶野三喜子・可児真由美
金武 插美・苅谷 岩夫・河合 清・河合多美子・河合 宏晃・川崎きみゑ
川崎 房子・川崎 安幸・川瀬 幸子・川瀬 妙子・川田 玲子・北川 政子
熊澤喜三郎・五島 夏子・後藤 謙・後藤 貢・小林 里佳・小原美恵子
近藤 章子・近藤 春代・齊藤 富雄・柴山 沢子・島田 崇正・杉山 仁
杉山 陽子・鈴木 吉彦・世良久美子・高井美和子・高田 桂子・高橋 方紀
田中 禮子・土屋としほ・富田レイ子・友納千代子・中島 太郎・長沢 秋雄
長繩とめを・長繩 ひさ・長繩 保行・中野 青平・中村 政公・丹羽 輝美
丹羽実千代・丹羽 理枝・納土 育子・野田 文子・原 武志・樋口百合子
平川 節雄・平野 光男・平脇 萩四・深尾 鈴子・深尾八重子・藤崎 工
古田千代美・古田八千代・堀 心也・堀 信子・堀 みはる・間宮 洋子
宮崎 初子・八島 典子・山田久仁夫・吉岡夕紀子・吉田 隆男

平成 8 年度

石川美代子・岩本 昭子・大塚 虎男・大橋 圭壱・小川 秀・川崎きみゑ
川崎 安幸・川瀬 幸子・川田 玲子・近藤 春代・齊藤 富雄・柴山 沢子
長繩とめを・長繩 ひさ・中野 青平・深尾 鈴子・堀 みはる・宮崎 初子
吉田 隆雄

・整理作業員

平成 7 年度

西尾 明美・丹羽 香・丹羽 和代

平成8年度

岩間 未起・小田富士子・傴木 文恵・加納 恭子・木下 晴代・小山 則子
白垣 若代・直井江里子・樋口 弘子・日比野登美子・広瀬千恵美・堀 信子
米津 光枝

平成9年度

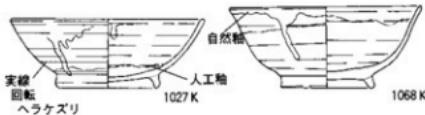
傴木 文恵・加納 恭子・川瀬 幸子・木下 晴代・小山 則子・白垣 若代
棚橋 朝子・樋口 弘子・日比野登美子・広瀬千恵美・堀 信子・米津 光枝
平成10年度

浅野紀美代・石野理恵子・傴木 文恵・加藤 久枝・加納 恭子・小山 則子
川瀬 幸子・酒向 邦子・佐藤まさみ・白垣 若代・竹内 恒子・直井江里子
広瀬千恵美・広瀬みどり・森田 政子・宗方亜由美・米津 光枝

12. 調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡例

1. 遺物挿図の縮尺は土器は1/3を基本とするが、鉢・甕など大型のものについては1/4もしくは1/6を用いた。また、土器の小破片には1/2を用いた。石器・石製品・鉄製品・錢貨類は2/3、1/2、1/3のいずれかである。スケールはそれぞれ添付した。
2. 遺物番号は1番から通番を付した。遺物のうち土器の遺物番号の末尾にH・S・K・Yをつけた。その意味はH…土師器、S…須恵器、K…灰釉陶器、Y…山茶碗を表す。
3. 須恵器・灰釉陶器・山茶碗の回転ヘラ削り調整における稜線は実線で表記した。なお、人工釉の表記は下記の模式図の通りである。



4. 遺構挿図の縮尺は次の通りで、それぞれにスケールを添付した。

・全体図 … 1/100・1/200	・石室 … 1/40
・窯体 … 1/80	・住居跡 … 1/50
・近世墓 … 1/20	
5. 遺構の略号は下記の通り用いた。

・住居跡 … SB	・溝 … SD
・土坑 … SK	・墓 … SZ
・その他 … SX	

なお、古墳及び窯体には略号を用いず、古墳は船山北1号古墳から、窯体は船山北1号古窯跡から通番を付して使用する。各窯体に付随すると考えられる遺構は、各窯体ごとに通番を付し、通番の後の（）内の数字はそれらの遺構が所属する窯体を意味する。（SX01（1） 1号窯のSX01、SKA01（1） 1号窯のSKA01など）
6. 写真図版中にある遺物写真的番号は遺物挿図における番号と同一である。なお、番号が付していないものは遺物挿図に掲載しなかった遺物である。
7. 本書で使用した土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1996『新版 標準土色帳』日本色研事業株式会社に従った。

目 次

(第1分冊)

序

例 言

第1章	調査の経緯	(藤田英博) 1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	発掘調査の経緯と経過	1
第2章	遺跡周辺の地理的・歴史的環境	(藤田) 12
第3章	遺構概要と基本層序	(藤田) 16
第1節	遺構概要	16
第2節	基本的層序	16
第4章	遺構と遺物	18
第1節	旧石器・縄文・弥生時代の遺構と遺物	18
第1項	石器類	(青木健太郎) 18
第2項	弥生土器	(藤田) 23
第2節	古墳時代前期の遺構と遺物	(藤田) 48
第3節	古墳群	(藤田) 54
第4節	古代～中世の遺構と遺物(古窯跡)	(藤田) 166
第5節	中・近世墓の遺構と遺物	(藤田) 326
第6節	その他の遺構と遺物	(藤田) 355

(第2分冊)

第5章	自然科学分析	1
第1節	放射性炭素年代測定	(山形秀樹) 1
第2節	焼成年代推定	(藤根 久) 2
第3節	山茶碗の蛍光X線分析	(藤根 久) 12
第4節	白色ガラスの蛍光X線分析	(藤根 久) 16
第5節	船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡出土炭化材の樹種同定(植田弥生・藤根久)	18
第6節	船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡の花粉化石群集	(新山雅広) 31
第6章	考 察	35
第1節	下呂石の石器群と剥片剥離技術について	(青木) 35
第2節	古墳群について	(藤田) 41
第3節	古窯跡出土の遺物について	(藤田) 45
第4節	古代の文字資料の検討	(近藤大典) 58
第5節	3号窯出土の刻銘陶器について	(小塙康真) 60

挿図目次

(第1分冊)

第1図 調査区域設定図	3	第29図 SX12出土遺物・平面図・断面図	52
第2図 調査区域全図及びグリッド杭設定図	7	第30図 SB01・02周辺出土遺物	53
第3図 調査遺跡位置図	12	第31図 古墳出土須恵器分類図	54
第4図 周辺遺跡分布図	13	第32図 1号墳平面図	55
第5図 基本層序	17	第33図 1号墳丘断面図	57
第6図 東埋没谷出土弥生土器	23	第34図 1号墳石室展開図	61
第7図 ナイフ形石器・石鏃(1)	24	第35図 1号墳石室内出土須恵器位置図・再利用面	63
第8図 石鏃(2)	25	第36図 2号墳平面図・土師皿・甕出土位置図	65
第9図 石鏃(3)・石錐	26	第37図 2号墳丘断面図	67
第10図 スクレイパー類・楔形石器	27	第38図 2号墳石室展開図	69
第11図 打製石斧・磨石・敲石・凹石類	28	第39図 2号墳石室内遺物出土状況図	73
第12図 砥石	29	第40図 2号墳周辺遺構平面・断面図	76
第13図 RF・UF・石製品類	30	第41図 3号墳平面図及び周溝・SK04・SX04出土遺物位置図	76
第14図 石核(1)	31	第42図 3号墳周溝断面図	79
第15図 石核(2)	32	第43図 3号墳丘断面図	81
第16図 石核(3)	33	第44図 3号墳石室展開図	83
第17図 石核(4)	34	第45図 3号墳石室内出土須恵器位置図	86
第18図 石核(5)	35	第46図 3号墳石室内須恵器出土状況図	87
第19図 剥片(1)	36	第47図 3号墳石室内再利用面出土遺物位置図	88
第20図 剥片(2)	37	第48図 3号墳石室内再利用面遺物出土状況図	89
第21図 石核(142)と剥片(191)との接合資料	46	第49図 SK04・SX04断面図	91
第22図 東埋没谷 石器・弥生土器出土位置図	47	第50図 4号墳平面図及び出土遺物位置図	92
第23図 古墳時代前期の遺構	49	第51図 4号墳石室及び掘り方平面図・断面図	93
第24図 SB01・SB02周辺出土遺物位置図	50	第52図 4号墳周溝断面図	93
第25図 SB01平面図・断面図	50	第53図 6号墳平面図	95
第26図 SB02平面図・断面図	51		
第27図 SX01・02・03平面図・周辺出土遺物位置図	52		
第28図 SX01・02・03周辺出土遺物	52		

第54図	6号墳石室内遺物出土状況図	96
第55図	6号墳石室展開図	97
第56図	6号墳石室掘り方平面図・断面図	
		99
第57図	7号墳平面図	102
第58図	7号墳石室掘り方平面図・断面図及び 墳丘断面図	103
第59図	7号墳石室展開図	105
第60図	7号墳石室内遺物出土状況図	107
第61図	8号墳平面図	109
第62図	8号墳墳丘・周溝断面図	111
第63図	8号墳石室展開図	113
第64図	8号墳石室掘り方平面図	115
第65図	8号墳石室内出土遺物位置図	116
第66図	8号墳石室内再利用面遺物出土状況図	
		117
第67図	9号墳平面図	120
第68図	9号墳石室展開図	121
第69図	9号墳石室掘り方平面図・断面図	122
第70図	9号墳石室内出土遺物位置図	123
第71図	10号墳平面図及び周溝出土遺物位置図	
		125
第72図	10号墳墳丘・周溝断面図	127
第73図	10号墳石室展開図	129
第74図	10号墳石室掘り方平面図	131
第75図	10号墳石室内出土遺物位置図	132
第76図	10号墳石室内礫集中部検出状況図	133
第77図	10号墳石室内再利用面出土遺物位置図	
		134
第78図	10号墳石室内再利用面遺物出土状況図	
		135
第79図	11号墳平面図	139
第80図	11号墳墳丘断面図	141
第81図	11号墳石室展開図	143
第82図	11号墳石室掘り方平面図	145
第83図	11号墳石室内出土遺物位置図	146
第84図	12号墳平面図	147
第85図	12号墳墳丘断面図	148
第86図	12号墳石室展開図	149
第87図	12号墳石室掘り方平面図	151
第88図	12号墳石室内出土遺物位置図	152
第89図	12号墳石室内礫集中部検出状況図	
		153
第90図	12号墳石室内再利用面遺物出土状況図	
		154
第91図	13・14号墳平面図	155
第92図	13号墳石室掘り方平面図・断面図	
		156
第93図	14号墳石室掘り方平面図・断面図	
		157
第94図	14号墳石室展開図	158
第95図	15号墳平面図	161
第96図	15号墳周溝断面図	161
第97図	15号墳石室展開図	162
第98図	15号墳石室掘り方平面図・断面図	
		163
第99図	15号墳石室内遺物出土状況図	164
第100図	4・5号窯全体図	167
第101図	5号窯窯体側面・平面図	171
第102図	5号窯窯体内遺物出土状況図	173
第103図	SK04(5)遺物出土状況図	175
第104図	SX01(5)断面図	176
第105図	4号窯窯体側面・平面図	179
第106図	4・5号窯灰原断面図(1)	181
第107図	4・5号窯灰原断面図(2)	183
第108図	1号窯全体図	221
第109図	1号窯窯体側面・平面図	223
第110図	1号窯附帯施設平面図・断面図(1)	
		227
第111図	1号窯附帯施設平面図・断面図(2)	
		229
第112図	1号窯附帯施設平面図・断面図(3)	
		230
第113図	1号窯附帯施設平面図・断面図(4)	

	231
第114図	1号窯灰原断面図(1).....	232
第115図	1号窯灰原断面図(2).....	233
第116図	2・3号窯全体図.....	265
第117図	2号窯窯体側面・平面図.....	267
第118図	2号窯窯体断面図.....	268
第119図	3号窯窯体側面・平面図.....	281
第120図	3号窯窯体断面図.....	283
第121図	3号窯窯体内遺物出土状況.....	284
第122図	3号窯前庭部平面図・断面図.....	285
第123図	SX01(3)平面図・断面図	286
第124図	2・3号窯灰原断面図(1).....	287
第125図	2・3号窯灰原断面図(2).....	289
第126図	3号窯焼台実測図.....	312
第127図	中・近世墓位置図.....	327
第128図	SZA01・SZA03平面図・断面図	329
第129図	SZA02平面図・断面図	330
第130図	SZA04・SZA05平面図・断面図	331
第131図	SZA06・SZA07平面図・断面図	333
第132図	SZA08・SZA13平面図・断面図	335
第133図	SZA09平面図・断面図	336
第134図	SZA10平面図・断面図	337
第135図	SZA11平面図・断面図	339
第136図	SZA12平面図・断面図	340
第137図	SZA14・SZA16平面図・断面図	341
第138図	SZA15平面図・断面図	343
第139図	SZA17平面図・断面図	345
第140図	SZA18・SZA19・SZA20平面図・断面図	346
第141図	SZA21・SZA22・SZA24平面図・断面図	347
第142図	SZA23・SZB06平面図・断面図	349
第143図	SZB01・SZB02・SZB03平面図・断面図	350
第144図	SZB04・SZB05平面図・断面図	351
第145図	SZC02平面図・断面図	352
第146図	SZC01平面図・断面図	353
第147図	その他の遺構位置図	357
第148図	SD02平面図	359
第149図	SD02断面図	359
第150図	SD02出土遺物	360
第151図	SX05・SX06・SX07平面図・断面図	361
第152図	SX05・SX06出土遺物	362
第153図	SX08・SX10平面図・断面図	365
第154図	SX09・SX11平面図・断面図	366
第155図	東埋没谷ピット位置図	367

(第2分冊)

第156図	Shibuya (1980) による地磁気永年変化曲線	5
第157図	4号窯床面焼土No 7の段階交流消磁気測定結果	6
第158図	焼土1(5)No 8の段階交流消磁気測定結果	7
第159図	各窯跡焼土の残留磁化方向と地磁気永年変化曲線 (Shibuya, 1980)	10
第160図	各遺構焼土の残留磁化方向と地磁気永年変化曲線 (Shibuya, 1980)	11
第161図	山茶碗試料及び基盤粘土のZr/Y-Rb 散布図	15
第162図	SZA11出土の白色ガラス玉 (1867) の蛍光X線スペクトル	17
第163図	花粉化石分布図	33
第164図	古墳群出土遺物(1)	66
第165図	古墳群出土遺物(2)	67
第166図	古墳群出土遺物(3)	68
第167図	古墳群出土遺物(4)	69
第168図	古墳群出土遺物(5)	70
第169図	古墳群出土遺物(6)	71
第170図	古墳群出土遺物(7)	72

第171图	古墳群出土遺物(8) ······	73	第208图	5号窯出土遺物(30)·····	110
第172图	古墳群出土遺物(9) ······	74	第209图	5号窯出土遺物(32)·····	111
第173图	古墳群出土遺物(10) ······	75	第210图	5号窯出土遺物(33)·····	112
第174图	古墳群出土遺物(11) ······	76	第211图	5号窯出土遺物(34)·····	113
第175图	古墳群出土遺物(12) ······	77	第212图	4号窯出土遺物(1)·····	114
第176图	古墳群出土遺物(13) ······	78	第213图	4号窯出土遺物(2)·····	115
第177图	古墳群出土遺物(14) ······	79	第214图	4号窯出土遺物(3)·····	116
第178图	5号窯出土遺物(1) ······	80	第215图	4号窯出土遺物(4)·····	117
第179图	5号窯出土遺物(2) ······	81	第216图	4号窯出土遺物(5)·····	118
第180图	5号窯出土遺物(3) ······	82	第217图	4号窯出土遺物(6)·····	119
第181图	5号窯出土遺物(4) ······	83	第218图	4号窯出土遺物(7)·····	120
第182图	5号窯出土遺物(5) ······	84	第219图	4号窯出土遺物(8)·····	121
第183图	5号窯出土遺物(6) ······	85	第220图	1号窯出土遺物(1)·····	122
第184图	5号窯出土遺物(7) ······	86	第221图	1号窯出土遺物(2)·····	123
第185图	5号窯出土遺物(8) ······	87	第222图	1号窯出土遺物(3)·····	124
第186图	5号窯出土遺物(9) ······	88	第223图	1号窯出土遺物(4)·····	125
第187图	5号窯出土遺物(10) ······	89	第224图	1号窯出土遺物(5)·····	126
第188图	5号窯出土遺物(11) ······	90	第225图	1号窯出土遺物(6)·····	127
第189图	5号窯出土遺物(12) ······	91	第226图	1号窯出土遺物(7)·····	128
第190图	5号窯出土遺物(13) ······	92	第227图	1号窯出土遺物(8)·····	129
第191图	5号窯出土遺物(14) ······	93	第228图	1号窯出土遺物(9)·····	130
第192图	5号窯出土遺物(15) ······	94	第229图	1号窯出土遺物(10)·····	131
第193图	5号窯出土遺物(16) ······	95	第230图	1号窯出土遺物(11)·····	132
第194图	5号窯出土遺物(17) ······	96	第231图	1号窯出土遺物(12)·····	133
第195图	5号窯出土遺物(18) ······	97	第232图	1号窯出土遺物(13)·····	134
第196图	5号窯出土遺物(19) ······	98	第233图	1号窯出土遺物(14)·····	135
第197图	5号窯出土遺物(20) ······	99	第234图	1号窯出土遺物(15)·····	136
第198图	5号窯出土遺物(21) ······	100	第235图	1号窯出土遺物(16)·····	137
第199图	5号窯出土遺物(22) ······	101	第236图	1号窯出土遺物(17)·····	138
第200图	5号窯出土遺物(23) ······	102	第237图	1号窯出土遺物(18)·····	139
第201图	5号窯出土遺物(24) ······	103	第238图	1号窯出土遺物(19)·····	140
第202图	5号窯出土遺物(25) ······	104	第239图	1号窯出土遺物(20)·····	141
第203图	5号窯出土遺物(26) ······	105	第240图	1号窯出土遺物(21)·····	142
第204图	5号窯出土遺物(27) ······	106	第241图	1号窯出土遺物(22)·····	143
第205图	5号窯出土遺物(28) ······	107	第242图	1号窯出土遺物(23)·····	144
第206图	5号窯出土遺物(29) ······	108	第243图	1号窯出土遺物(24)·····	145
第207图	5号窯出土遺物(30) ······	109	第244图	1号窯出土遺物(25)·····	146

第245図	2号窯出土遺物(1).....	147
第246図	2号窯出土遺物(2).....	148
第247図	2号窯出土遺物(3).....	149
第248図	2号窯出土遺物(4).....	150
第249図	2号窯出土遺物(5).....	151
第250図	2号窯出土遺物(6).....	152
第251図	2号窯出土遺物(7).....	153
第252図	2号窯出土遺物(8).....	154
第253図	2号窯出土遺物(9).....	155
第254図	2号窯出土遺物(10).....	156
第255図	3号窯出土遺物(1).....	157
第256図	3号窯出土遺物(2).....	158
第257図	3号窯出土遺物(3).....	159
第258図	3号窯出土遺物(4).....	160
第259図	3号窯出土遺物(5).....	161
第260図	3号窯出土遺物(6).....	162
第261図	3号窯出土遺物(7).....	163
第262図	3号窯出土遺物(8).....	164
第263図	3号窯出土遺物(9).....	165
第264図	3号窯出土遺物(10).....	166
第265図	3号窯出土遺物(11).....	167
第266図	3号窯出土遺物(12).....	168
第267図	3号窯出土遺物(13).....	169
第268図	3号窯出土遺物(14).....	170
第269図	3号窯出土遺物(15).....	171
第270図	3号窯出土遺物(16).....	172
第271図	3号窯出土遺物(17).....	173
第272図	3号窯出土遺物(18).....	174
第273図	3号窯出土遺物(19).....	175
第274図	3号窯出土遺物(20).....	176
第275図	3号窯出土遺物(21).....	177
第276図	3号窯出土遺物(22).....	178
第277図	3号窯出土遺物(23).....	179
第278図	3号窯出土遺物(24).....	180
第279図	3号窯出土遺物(25).....	181
第280図	3号窯出土遺物(26).....	182
第281図	3号窯出土遺物(27).....	183
第282図	3号窯出土遺物(28).....	184
第283図	3号窯出土遺物(29).....	185
第284図	3号窯出土遺物(30).....	186
第285図	3号窯出土遺物(31).....	187
第286図	3号窯出土遺物(32).....	188
第287図	3号窯出土遺物(33).....	189
第288図	3号窯出土遺物(34).....	190
第289図	3号窯出土遺物(35).....	191
第290図	3号窯出土遺物(36).....	192
第291図	3号窯出土遺物(37).....	193

付 図 目 次

付図 1	地形測量図 (S = 1/1000)
付図 2	地形測量図(1) (S = 1/400)
付図 3	地形測量図(2) (S = 1/400)
付図 4	地形測量図(3) (S = 1/400)
付図 5	全体図(1) (S = 1/200)
付図 6	全体図(2) (S = 1/200)
付図 7	全体図(3) (S = 1/200)
付図 8	全体図(4) (S = 1/200)

表 目 次

(第1分冊)

第1表	周辺遺跡一覧表.....	15
第2表	石器の形態別・石材別出土点数.....	19

第3表 石錐欠損率	19	第39表 4・5号窯器種別・土層別出土点数	215
第4表 ナイフ形石器計測表	38	第40表 4・5号窯器種別・地区別出土点数(1)	217
第5表 石錐計測表(1)	38	第41表 4・5号窯器種別・地区別出土点数(2)	219
第6表 石錐計測表(2)	39	第42表 1号窯灰原土層観察表(1)	235
第7表 石錐計測表	40	第43表 1号窯灰原土層観察表(2)	236
第8表 スクレイパー類計測表	40	第44表 碗 I A・I B a類法量分布表	238
第9表 楕形石器計測表	40	第45表 碗 I B b・II A a類法量分布表	240
第10表 打製石斧計測表	40	第46表 碗 II A b・II B類法量分布表	242
第11表 磨石・敲石・凹石類計測表	41	第47表 小碗 I・II類法量分布表	243
第12表 砥石計測表	41	第48表 III I A・I B・I C類法量分布表	244
第13表 RF 計測表	41	第49表 III II A・II B類法量分布表	247
第14表 UF 計測表	42	第50表 1号窯器種別・地区別出土点数・残存率(1)	253
第15表 石製品計測表	42	第51表 1号窯器種別・地区別出土点数・残存率(2)	254
第16表 石核計測表(1)	42	第52表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(1)	255
第17表 石核計測表(2)	43	第53表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(2)	256
第18表 石核計測表(3)	44	第54表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(3)	257
第19表 石核計測表(4)	45	第55表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(4)	258
第20表 剥片計測表(1)	45	第56表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(5)	259
第21表 剥片計測表(2)	46	第57表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(6)	260
第22表 4・5号窯灰原土層観察表(1)	186	第58表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(7)	261
第23表 4・5号窯灰原土層観察表(2)	187	第59表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(8)	262
第24表 坏 I 類底径分布表	189	第60表 碗類法量分布表	270
第25表 坏 I・II 類底部調整観察表	191	第61表 小碗類法量分布表	272
第26表 碗・皿・盤 I・鉢 I 類底部調整観察表	193		
第27表 坏 I 類法量分布表(1)	194		
第28表 坏 I 類法量分布表(2)	195		
第29表 坏 I・II 類法量分布表	196		
第30表 坏 II・碗類法量分布表	197		
第31表 碗類法量分布表	198		
第32表 皿類法量分布表	199		
第33表 蓋 I B類法量分布表	202		
第34表 蓋 II 類法量分布表	203		
第35表 鉢 I 類法量分布表	206		
第36表 鉢 I・盤 I 類法量分布表	207		
第37表 盤 I 類法量分布表	208		
第38表 盤 II・皿類法量分布表	209		

第62表	小皿類法量分布表	273	第80表	3号窯器種別・地区別出土点数(1)	
第63表	2号窯器種別・地区別残存率・出土点数	276			313
第64表	2号窯器種別・土層別残存率・出土点数(1)	277	第81表	3号窯器種別・地区別出土点数(2)	314
第65表	2号窯器種別・土層別残存率・出土点数(2)	278	第82表	3号窯器種別・地区別残存率(1)	315
第66表	2・3号窯灰原土層観察表	292	第83表	3号窯器種別・地区別残存率(2)	316
第67表	碗I類法量分布表	293	第84表	3号窯器種別・土層別出土点数(1)	
第68表	碗II類法量分布表	294			317
第69表	小碗類法量分布表	295	第85表	3号窯器種別・土層別出土点数(2)	318
第70表	小皿類法量分布表	296	第86表	3号窯器種別・土層別出土点数(3)	
第71表	片口鉢I類法量分布表	298			319
第72表	壺II・III類法量分布表	300	第87表	3号窯器種別・土層別出土点数(4)	
第73表	瓶I・II類法量分布表	302			320
第74表	瓶III・IV類法量分布表	302	第88表	3号窯器種別・土層別残存率(1)	321
第75表	鉢I・II類法量分布表	304	第89表	3号窯器種別・土層別残存率(2)	322
第76表	鉢IA・B類底径分布表	305	第90表	3号窯器種別・土層別残存率(3)	323
第77表	鉢III類法量分布表	306	第91表	3号窯器種別・土層別残存率(4)	324
第78表	深皿I類・蓋I類法量分布表	308	第92表	ピット一覧表(1)	368
第79表	深皿II類・蓋II類法量分布表	309	第93表	ピット一覧表(2)	369

(第2分冊)

第94表	残留磁化測定による焼成年代推定	4	・FK10) を再利用した跡 (12~13世紀) から出土した炭化材樹種同定結果	27	
第95表	各窯跡焼土の残留磁化測定結果 (偏角補正前)	8			
第96表	各土坑類焼土の残留磁化測定結果 (偏角補正前)	9	第101表	船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡の古墳石室 (FK 1・FK 2・FK11S・FK12S・FK15S) を再利用した跡 (12~13世紀) から出土した炭化材樹種同定結果	28
第97表	螢光X線分析した山茶碗および粘土試料	12			
第98表	山茶碗試料および基盤粘土の化学組成一覧表	14	第102表	船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡の墓跡 (SZC01・SZC02、中世~近世初期) 出土炭化材樹種同定結果	29
第99表	船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡の須恵器窯 (9世紀前半) の灰原出土炭化材樹種同定結果	26	第103表	船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡の時期・遺構別の出土炭化材	
第100表	船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡の古墳石室 (FK 8・FK 9				

樹種	30	第132表 土器観察表(8)	213
第104表 花粉化石一覧表	32	第133表 土器観察表(9)	214
第105表 石材別質量比（礫石器を除く）	35	第134表 土器観察表(10)	215
第106表 下呂石を用いた石器群の内訳（出土点数による）	36	第135表 土器観察表(11)	216
第107表 石核（下呂石）の形態別質量分布	37	第136表 土器観察表(12)	217
第108表 下呂石剥片類の質量分布	38	第137表 土器観察表(13)	218
第109表 蓋坏A・B・C類の各古墳石室内出土点数	41	第138表 土器観察表(14)	219
第110表 美濃須衛古窯跡群編年表	50	第139表 土器観察表(15)	220
第111表 3号窯器種別新旧対応表	54	第140表 土器観察表(16)	221
第112表 古窯跡出土遺物器種別組成比(1)	55	第141表 土器観察表(17)	222
第113表 古窯跡出土遺物器種別組成比(2)	56	第142表 土器観察表(18)	223
第114表 古窯跡出土遺物器種別組成比(3)	57	第143表 土器観察表(19)	224
第115表 土器観察表(1)	196	第144表 土器観察表(20)	225
第116表 土器観察表(2)	197	第145表 土器観察表(21)	226
第117表 土器観察表(3)	198	第146表 土器観察表(22)	227
第118表 土器観察表(4)	199	第147表 土器観察表(23)	228
第119表 土器観察表(5)	200	第148表 土器観察表(24)	229
第120表 土器観察表(6)	201	第149表 土器観察表(25)	230
第121表 土器観察表(7)	202	第150表 土器観察表(26)	231
第122表 土器観察表(8)	203	第151表 土器観察表(27)	232
第123表 土器観察表(9)	204	第152表 土器観察表(28)	233
第124表 土器観察表(10)	205	第153表 土器観察表(29)	234
第125表 土器観察表(11)	206	第154表 土器観察表(30)	235
第126表 土器観察表(12)	207	第155表 土器観察表(31)	236
第127表 土器観察表(13)	208	第156表 土器観察表(32)	237
第128表 土器観察表(14)	209	第157表 土器観察表(33)	238
第129表 土器観察表(15)	210	第158表 土器観察表(34)	239
第130表 土器観察表(16)	211	第159表 土器観察表(35)	240
第131表 土器観察表(17)	212	第160表 土器観察表(36)	241
		第161表 土器観察表(37)	242
		第162表 土器観察表(38)	243

図 版 目 次

(第2分冊)

図版1 東尾根・東埋没谷全景	図版27 2号窯
図版2 中央尾根全景	図版28 2号窯・3号窯
図版3 2・3号窯全景・中央埋没谷・中央尾根全景	図版29 3号窯・3号窯灰原・SK01(3)
図版4 石器出土状況・SB01・SB02・SX01～03・SD02	図版30 SX01(3)・3号窯灰原
図版5 SD02・1号墳	図版31 3号窯灰原・SX01(3)・3号窯
図版6 1号墳・2号墳・SK01	図版32 SZA01・SZA02・SZA05・SZA06
図版7 2号墳	図版33 SZA08・SZA09・SZA13
図版8 2号墳・SK02・SD01・3号墳	図版34 SZA11・SZA12
図版9 3号墳	図版35 SZA15・SZA17・SZA21・SZA23・SZB03
図版10 3号墳・4号墳	図版36 SZB01・SZB06・SZC01・SZC02
図版11 4号墳・6号墳	図版37 SX05・SX08・SX07・SX09・SX10
図版12 6号墳・7号墳	図版38 ナイフ形石器・石鏃
図版13 8号墳	図版39 石錐・スクレイパー類・楔形石器・打製石斧・磨石類
図版14 8号墳・9号墳	図版40 砥石・RF・UF・石製品・石核①
図版15 9号墳・10号墳	図版41 石核②(下呂石)
図版16 10号墳	図版42 剥片類(下呂石)
図版17 11号墳	図版43 1号墳・2号墳出土遺物
図版18 11号墳・12号墳	図版44 2号墳出土遺物
図版19 12号墳	図版45 2号墳出土遺物
図版20 13号墳・14号墳	図版46 2号墳出土遺物
図版21 14号墳・15号墳	図版47 2号墳出土遺物
図版22 5号窯	図版48 3号墳出土遺物
図版23 SK04(5)・SX01(5)・5号窯灰原・4・5号窯	図版49 3号窯出土遺物
図版24 4号窯・1号窯	図版50 3・6・7号墳出土遺物
図版25 1号窯・SKA03(1)・SX01(1)・SKB07(1)・SKB06(1)・SX01(1)・SD02(1)・SKA04(1)	図版51 6・7・8・9号墳出土遺物
図版26 SKA04(1)・SKA05(1)・1号窯灰原・2号窯	図版52 8号墳出土遺物
	図版53 8号墳出土遺物
	図版54 10号墳出土遺物
	図版55 10号墳出土遺物
	図版56 11・12号墳出土遺物

- 図版57 12・15号墳出土遺物
図版58 古墳群出土遺物
図版59 5号窯出土遺物
図版60 5号窯出土遺物
図版61 5号窯出土遺物
図版62 5号窯出土遺物
図版63 5号窯出土遺物
図版64 5号窯・4号窯出土遺物
図版65 5号窯出土遺物
図版66 5号窯出土遺物
図版67 5号窯出土遺物
図版68 5号窯出土遺物
図版69 5号窯出土遺物
図版70 5号窯出土遺物
図版71 5号窯出土遺物
図版72 5号窯出土遺物
図版73 5号窯出土遺物
図版74 5号窯出土遺物
図版75 5号窯灰原出土遺物
図版76 5号窯灰原出土遺物
図版77 5号窯・4号窯出土遺物
図版78 4号窯出土遺物
図版79 5号窯・4号窯出土遺物
図版80 1号窯出土遺物
図版81 1号窯出土遺物
図版82 1号窯出土遺物
図版83 1号窯出土遺物
図版84 1号窯出土遺物
図版85 1号窯出土遺物
図版86 1号窯出土遺物
図版87 1号窯出土遺物
図版88 1号窯出土遺物
図版89 1号窯出土遺物
図版90 1号窯出土遺物
図版91 1号窯出土遺物
図版92 1号窯出土遺物
図版93 1号窯出土遺物
図版94 1号窯出土遺物
図版95 2号窯出土遺物
図版96 2号窯・3号窯出土遺物
図版97 2号窯出土遺物
図版98 2号窯出土遺物
図版99 2号窯出土遺物
図版100 3号窯出土遺物
図版101 3号窯出土遺物
図版102 3号窯出土遺物
図版103 3号窯出土遺物
図版104 3号窯出土遺物
図版105 3号窯出土遺物
図版106 3号窯出土遺物
図版107 3号窯出土遺物
図版108 3号窯出土遺物
図版109 3号窯出土遺物
図版110 3号窯出土遺物
図版111 3号窯出土遺物
図版112 3号窯出土遺物
図版113 3号窯出土遺物
図版114 3号窯出土遺物
図版115 3号窯出土遺物
図版116 3号窯出土遺物
図版117 3号窯出土遺物
図版118 3号窯出土遺物
図版119 3号窯出土遺物
図版120 3号窯出土遺物
図版121 SD02・SX05・3号墳周溝出土遺物
図版122 SK03・3号墳周溝・4号墳周溝・1号窯灰原・SX04出土遺物
図版123 5・4号窯出土遺物・SZA09出土遺物
図版124 土師皿・伊勢型鍋（近世墓・2号墳周溝・3号窯・1号窯・10号墳出土）
図版125 近世墓出土錢貨・SZA06出土煙管・SZA11ガラス玉
図版126 弥生土器・土師器（東堀没谷・SX12）

- ・SB02周辺・SX01～03周辺)
- 図版127 5号窯出土遺物細部
- 図版128 2・3号窯出土遺物細部
- 図版129 5号窯・1号窯・2号窯出土遺物細部
- 図版130 船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山
北遺跡出土炭化材の樹種同定(1)
- 図版131 船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山
北遺跡出土炭化材の樹種同定(2)
- 図版132 船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山
北遺跡出土炭化材の樹種同定(3)
- 図版133 船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山
北遺跡出土炭化材の樹種同定(4)
- 図版134 船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山
北遺跡出土炭化材の樹種同定(5)
- 図版135 船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山
北遺跡出土炭化材の樹種同定(6)
- 図版136 船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山
北遺跡出土炭化材の樹種同定(7)
- 図版137 産出した花粉化石
- 図版138 産出した花粉化石

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

VRテクノジャパン開発事業は「地域産業の高度化に寄与する特定事業の集積の促進に関する法律」(通称「頭脳立地法」)に基づいた岐阜県頭脳立地構想の枠組のなかで計画された事業である。岐阜県頭脳立地構想は産業の頭脳ともいべき情報処理サービス業、デザイン業、ソフトウェア業、機械設計業などの企業を集積させ、その波及効果により地域産業全体の高度化を目指す構想である。また、VR(バーチャル・リアリティ)などの先端技術の開発とそれに関わる人材育成、あるいは情報提供を図ることも事業のもう一方のねらいとしてあげられている。

その一環となるVRテクノジャパン開発事業の内容はVRテクノセンター及びその周辺の業務用地(VRテクノジャパン)を各務原市須衛町内に整備開発することにあったが、これらの用地内には周知の遺跡である船山北古墳群の古墳計12基(県遺跡地図)が含まれていたため、開発に先立ち、遺跡の記録保存が必要となった。このため、記録保存のための発掘調査は岐阜県土地開発公社から岐阜県教育委員会文化課が委託を受け、さらに岐阜県教育委員会から再委託を受けた(財)岐阜県文化財保護センターが行うこととなった。

なお、開発事業予定地内には各務原市指定遺跡の船山北1号墳があるため、その性格上、1号墳の発掘調査は部分的な調査にとどめ、現状保存を行うこととした。1号墳の周囲には船山北2・3号墳の2基がそれぞれ北側に隣接して位置することから1号墳と合わせて計3基を緑地帯に残すこととした公園化を図ることとなった。

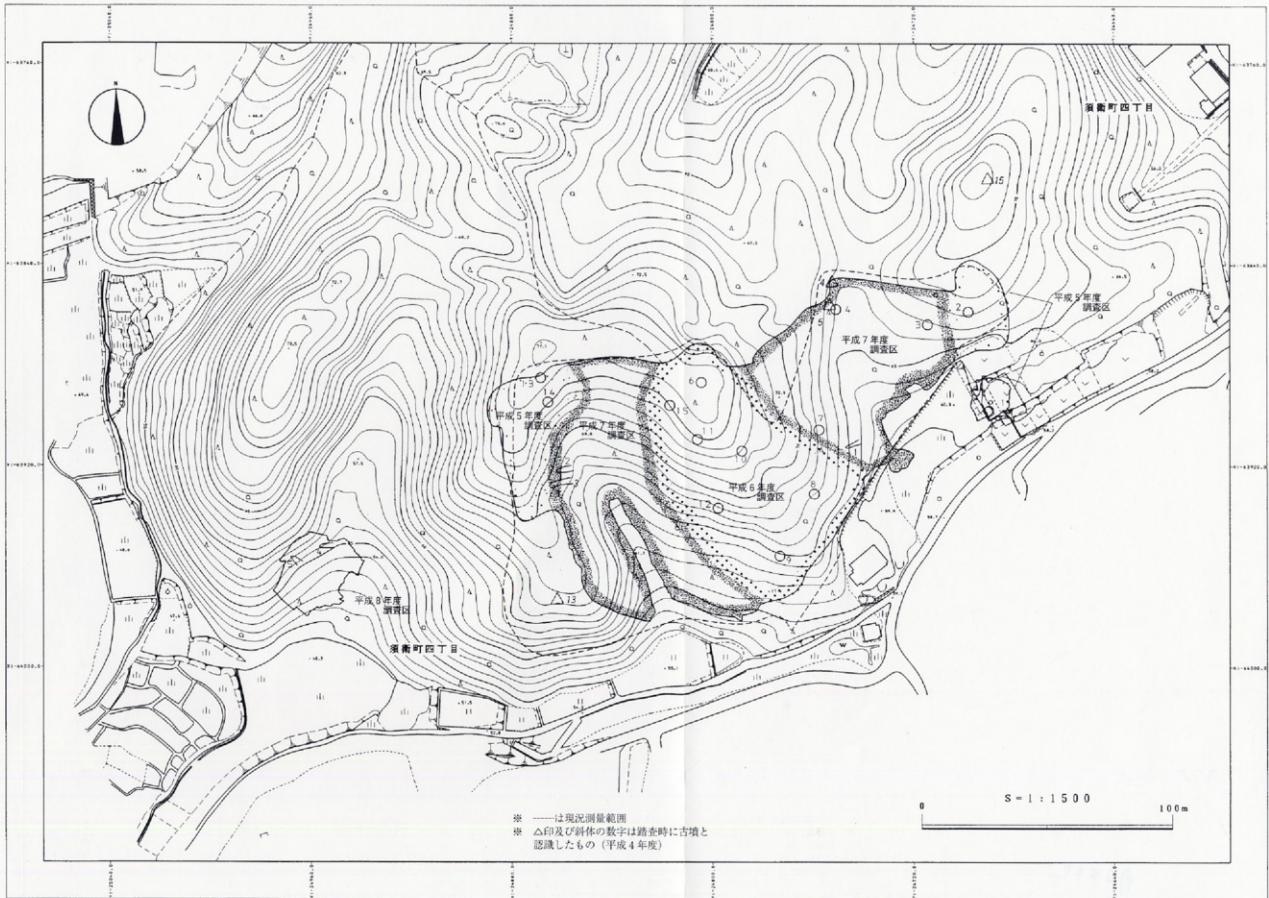
第2節 発掘調査の経緯と経過

発掘調査は平成5年度～平成8年度の4ヶ年度にわたり、調査面積は17,600m²に及ぶ広大なものである。実質的調査期間は中断期間を含むため、2年10ヶ月程度である。その理由の一つはVRテクノジャパン開発事業が計画された平成4年度に、事前に県遺跡地図に記載のある12基の古墳の確認を含めて現地踏査を行った。その結果、古墳の石室の石材露出及び墳丘状の高まりを15基確認したため(第1図)、これらをすべて調査する必要が生じたことに起因する。しかし、現況では用地買収が完了しておらず、これら15基すべての古墳を試掘調査する状況ではなかったため、古墳の有無を確認後に本調査へ入るという手段をとれなかった。また、古墳群に所在する各古墳すべてを調査する必要上から古墳群全体を調査することとし、古墳群全体を一つの遺跡単位として考え、踏査段階で確認した古墳をすべて網羅する範囲で調査区を設定することとした。発掘調査の期間は当初は平成5年度～7年度の3ヶ年で計画されており、平成8年度調査は造成事業着工中に新たに発掘調査を追加したものである。詳細は後述する。

現地での調査は用地買収交渉の進捗状況にあわせて進められたため、調査年度によって調査区が離れる結果となった(第1図)。確認した遺構は古墳は別として各調査年度における通番で処理したが、報告書作成に伴って全調査区を通しての通番に整理変更した。調査におけるグリッドは国土地標に合わせ



写真1 平成7年度調査風景



第1図 調査区域設定図

て5m×5mを設定し、その呼称は南東杭で代表することにした。グリッドの杭名は調査区が広大なため変則的ではあるが、南北方向は1号墳を境にして1号墳から南方向を大文字のアルファベット順(A～Q)とし、北方向を小文字のアルファベット順(a～k)とした。東西方向も1号墳を基点とし西側へ順に1～39の番号を付け、東側へは順に-1～-2の番号を付けた。なお、遺物の取り上げは遺構に伴わない遺物については前述したグリッド設定に基づき、後述する基本層序に従いすべてトータルステーションシステムで取り上げた。

平成5年度の発掘調査は諸般の事情から平成5年6月3日～10月22日及び平成6年1月12日～3月25日の2回に分けて実施した。前半期の調査は全調査区の東端にあたる船山北1号墳・2号墳及びその周辺と平成4年の現地踏査段階で15号墳とした箇所の確認調査を行った。1号墳は市指定遺跡の制約上、現状保存を図るために、調査の内容は石室内及び墳丘の南北・東西のトレンチ調査のみとした。1号墳は古墳群中、最も道路と接近しているためか、その原形をとどめておらず石室はすべて露出していた。墳丘については西側が宅地造成に伴って削平され、東側は畠地として利用されて残存状況は悪く、わずかに南北トレンチ内において石室背後で確認したのみである。周溝は南北トレンチの北側及び東西トレンチの東側で確認した。調査後は石室の崩壊を防ぐため、石室内を土嚢で補填し、石室外側にも土を充填して補強した。2号墳の調査は石室内の埋土除去及び周溝の確認から始めた。周溝は一部墳丘からの流失土が周溝埋土の上に堆積していたために、その確認に手間取りトレンチ調査を先行させながら調査を進めた。その結果、石室背後に周溝が三日月状にめぐることが判明した。石室内は床面から大量の須恵器が出土し、本古墳群中では最も良好な資料を得ることとなった。墳丘の流失土ないしは表土を除去する過程で、2号墳の南東側で溝と土坑各々1基を検出した。これらの遺構は古墳築造期以外の時期の遺構であり、本古墳群の調査が古墳のみの調査で済まないことを示唆する結果となった。15号墳については古墳と認識した墳丘状の高まりは単なる自然地形であることが判明し、その周辺にまったく遺構・遺物を確認できなかったため、古墳及びその他の遺構はないものと判断した。前半期の調査は9月に模型ヘリコプターによる空中写真測量を行い、全体図の図化を図った。後半期の調査は約3ヵ月の中断期間を経て14号墳及びその周辺の調査を行った。14号墳は現状では天井石が残り、その残存状況に期待していたが、石室の損壊が著しく、石室内からの遺物は皆無という予想外の結果に終わった。遺物の出土は調査区南端の斜面に集中し、その大半は後述する基本層序のⅢ層から出土した。そのなかには平成7年度に確認した3号窯に付随する山茶碗片も数片含まれていたが当時の調査においてはそれ程の問題意識をもつには至らなかった。また、ほぼ同じ箇所のⅣ層の地山直上でナイフ形石器が出土したため、付近を精査したが明確な遺構は確認できなかった。縄文時代に属する石錐も合わせて出土しているため、先のナイフ形石器はプライマリーな状態を保持するものではなく、付近からの流れ込みによるものと判断した。14号墳以外の遺構は掘り方のみが残存する古墳と想定される遺構（平成7年度に13号墳と認定）とSZA21・22及びSZC06の計3基の土坑墓を確認した。

平成6年度は6・8・9・10・11・12号墳の計5基が位置する中央の尾根上の調査を行った。調査は平成6年4月の伐採終了後の平成6年5月16日から始めた。平成6年度調査区の南端にあたる8・9号墳の周辺の表土及び墳丘流失土の除去から調査を始め、順次北側に向かって調査を進めた。8号墳は天井石が現状で確認できたが、築造当時の状況を保っていないこと及び調査上の安全を図るために

に天井石を重機により除去した後、6月上旬より石室内の調査を始めた。石室内を1m程度掘り下げた段階で砾床を構成するような砾の広がりを検出したため、これを古墳の床面と想定していたが、精査を進めていくうちに山茶碗・皿が伴うことが判明した。その山茶碗とともに青磁・白磁片を確認したことから、これらの遺物は盜掘によるものではなく古墳築造後に何らかの目的で石室内を再利用したものと判断した。遺物及び砾の広がりを図化した後、その砾の広がりを除去すると細かな砾で構成された砾床が姿を現し、その砾と砾の間際に挟まれた須恵器片を検出した。山茶碗・皿と須恵器片の出土レベルはわずか5cm程度の高低差しかないが、両者が混在する様相が顯著に認められなかつたため、8号墳は古墳築造段階とそれ以後の2時期わたって活用されたものと判断した。また、8号墳石室床面の南北方向の断割断面から羨道部については一部、掘り方の排土を利用して床面の平坦面を築成したことも判明した。8号墳における古墳築造以後の古墳利用のあり方は8号墳だけに限られたものではなく、8号墳以後に調査に入った10号墳・12号墳でも似たような状況を確認できた。とくに10号墳では山茶碗類が21点も出土し、中世期における古墳の活発な再利用の様相を調査することができた。また、6号墳の西側で予期せぬ位置から小型の古墳を確認した。この古墳を昨年度の調査で欠番としていた15号墳として呼称することに変更した。10~12号墳の周囲からは中~近世墓ないしはその火葬施設と思われる遺構を確認した。最初にSZA10を検出したが、上部の砾が作業上の手違いからすべて除去されていたことであつてあまり重要視していなかった。しかし、その後に確認したSZA11・SZA06では土師皿及び六道鏡（寛永通宝）が出土し、近世墓であることが明らかとなった。土坑の内部に砾が充填されるものについては前述の遺物の成果により、近世墓である可能性が高くなった。その他、11号墳の北側でSZC02を確認した。SZC02は当初、地山が被熱を受けて赤色化しているのが認められ、その内側に砾が散在していたため、火葬墓ではないかと認識していたが、基底面で南北方向の一段掘り下げられた通風孔を確認したことにより墓ではなく火葬施設であることが判明した。これら中~近世の遺構の検出は平成5年度の調査においてはまったく想定しておらず、本遺跡の調査において新たな展開を示すとともに、本遺跡が単なる古墳群だけではとどまらずいくつかの時代にまたがる遺跡であることを示す結果となった。これらの遺構の図化はそれぞれ1/10ないしは1/20で手測りによる図化を行ったが、全体図はヘリコプターによる空中写真測量を2月28日に行い、遺構の図化を完了した。

平成7年度の調査は各々の古墳が立地する尾根の間にある谷部の調査を実施した。調査期間は平成7年4月13日~平成8年3月27日である。谷部は平成6年度調査区のある中央の尾根を挟んで東西の両側にあるため、この2地区を並行して調査を進めることにした。谷部には地山の風化土であるII層が厚く堆積していることが予想されたため、重機によって表土及びII層を除去する計画を立てたが、事前に地山へ到達するまでの深さあるいは遺物の有無などの情報を得るために、それぞれの谷部の中央にテストピットを重機によって掘削・確認した。いずれの谷部でもII層が厚く堆積し、地山に達するまでは現状の表土面からは2~3m程度の深さが存することが判明した。遺物は東側の谷部では数点の土器片が出土したが、西側では皆無であった。このテストピットの結果からは遺物・遺構の有無についての判断は困難であったが、遺物を含むIII層を確認した東側の谷部から重機を導入して調査を始めることにした。重機による掘削は堆積層が厚いため、作業は4月24日~5月29日までの長期間に及んだ。その作業の中で特筆すべきことは調査区の南西端で窓体及び灰原を確認したことがあげられる



第2図 調査区域全図及びグリッド点設定図

(船山北1号窯跡)。この東側谷部での古窯跡の発見は、テストピット中からまったく遺物が出土しなかった西側の谷部調査でも、その地形からみて東側谷部と同様、古窯跡が存在する可能性が高いことを示唆するものとなり、調査の必要性が生じた。平成6年度の調査の段階で、平成6年8月に古窯跡存在の可能性を探るために磁気探査を西側谷部で行ったところ古窯跡らしき反応を5ヶ所で検出したが、当時の状況では谷部斜面の傾斜が緩やかであったことならびに古窯跡の存在を示す遺物がほとんど認められなかっただため、古窯跡の存在については懷疑的であった。しかし、前述したように東側谷部での古窯跡発見によって西側谷部の古窯跡の存在は磁気探査のデータもあわせてかなり確率の高いものとなり、東側谷部での表土・Ⅱ層の除去終了後、西側谷部での重機による表土・Ⅱ層の掘削に入った。西側谷部でのⅡ層の堆積は東側谷部以上に厚いため、谷部の中央に重機進入用の通路を確保して作業を進めた。期待した古窯跡は磁気探査の結果の5ヶ所とはならなかったが、谷部の北側で2基が並列する古窯跡を確認した(船山北2・3号古窯跡)。この結果、計3基の古窯跡を確認したことなり、古窯跡については新発見の遺跡であるため、発見順に船山北1・2・3号窯跡と呼称することにした(以下1・2・3号窯と省略)。

1号窯の窯体・灰原は重機による表土及びⅡ層の除去によっておよそその全体像を把握していたが、詳細な窯体平面プランを確認していなかったため、窯体の被熱部位を手かがりに精査を進めた。調査は重機で取り残したⅡ層の除去に苦労したが、6月頃には窯体の平面形を明らかにすることができた。この後、調査区とは別に1号窯の主軸に合わせて1号窯専用の5m×5mのグリッド(I 1～V 5)を設定し、さらに調査を進めた。窯体の左右両側には黒褐色土が堆積する箇所が認められ、何基かの窯体が並列するとも考え、一部サブトレレンチを設定して確認したところ、被熱部位は認められず大量の遺物が投棄された土坑であることが判明した(SZA01(1)～03(1))。とくに窯体の南側に隣接する土坑には大量の焼台が投棄されており、その除去に労力を費やすとともに、この土坑に続いて斜面下方に1号窯に付随する遺構が広がることが明らかになった。これらの附帯施設は窯体南側において顕著に重複し精査は困難であった。全貌が判明したのは8月頃で予定以上の時間を費やした。その結果、廃棄用の土坑が2基、作業用の平坦面1基、溝1基が重なり合うことが分かり思わぬ成果となつた。窯体下方に広がる灰原は堆積が厚く最大で1.6m程度が残存し、その掘り下げは8月～10月までの2ヶ月を要した。灰原中の遺物は灰釉陶器であることが判明し、1号窯が灰釉陶器を焼成した窯であることが明らかとなった。灰原中の灰釉陶器はコンテナ200箱を越える大量のものであったが、それよりも焼台の多さが目についた。灰原を掘り下げる過程で灰原の南端部分が極端に下がり、なかなか地山に到達しない日々が続いた。1号窯専用グリッドのIV列の東端で灰層の立ち上がりを見つけ、これを手かがりに精査を行った。その結果、灰層が自然に落ち込むのではなく、地山を掘り込んだ堅穴状の平坦面(SX02(1))に灰層が流入したものと判明した。これらすべての附帯施設の調査が終了したのは11月頃で、12月13日に模型ヘリコプターによる空中写真測量を実施した。窯体の平面形については手測り測量によって図化し、断面は空撮後に窯体の断削を行った後、やはり手測りで図化を行い、1号窯の調査をすべて終えた。

西側谷部の調査は重機により表土・Ⅱ層掘削作業終了後、7月11日より作業員による作業に入った。まず窯体の平面形を確かなものとするため、窯体の被熱部位の確認作業に入った。重機による掘削中に煙道及び焚口を確認したため、窯体そのものの確認にはあまり重機は使用しなかつたが、窯体の確

認は容易なものと判断していた。実際に確認作業を始めると窯体上のⅡ層の堆積が予想外に厚く、また夏の炎天下での作業でもあったため、かなりの時間を費やした。ようやく、燃焼室の被熱部位を見つけたが煙道・焚口に統かず、ただ被熱部位の面積が広がるばかりで窯体の全形がなかなか把握できなかった。その要因は担当者の誤解から生じたもので、窯体の天井部はすでに損壊しており、被熱部位は側壁を示すものと思いこんだことにある。結局、被熱部位の大半は側壁ではなく天井裏であることが明らかとなり、予想外に残存状況が良好な窯体の全形が判明し、これを船山北2号窯と呼称することにした。この2号窯のすぐ南側の3号窯も2号窯と同様、重機による掘削作業中から煙道部は確認していたが、その全形の把握が困難であった。サブトレーナによって焚口を7月下旬頃に確認したが、窯体の全形の確認は2号窯よりかなり遅れていた。このため、2号窯を基準に2・3号窯専用の5m×5mのグリッドを設定し、灰層の調査の準備を進めた。3号窯の全形が明らかとなったのは8月下旬頃で、2号窯と同じく窯体の天井部が残ることが判明した。灰層の調査は8月上旬より始めたが、先のグリッドに沿ってサブトレーナを設定し基盤まで掘り下げるにした。その目的は2・3号窯の灰層が重複するため、その先後関係を明らかにすることにあった。その結果、3号窯の掘り抜き排土の下に2号窯の灰層がもうぐり込むことが判明し、3号窯より2号窯が先行することが確認できた。灰層の調査はサブトレーナで観察した所見から、3号窯分の灰層の調査を先行し、さらに3号窯の掘り抜き排土を除去した後、2号窯の灰層及び掘り抜き排土の調査を行うことにした。3号窯の南側では3号窯に付属する作業用あるいは廐棄用とも思われる遺構を検出した。この遺構内からは「奉施入 建久五年十月 □□□十八日」と記された陶器片が出土し、3号窯の年代を押さえることが可能となった。出土した時点では刻銘の1/4程度が欠損していたが、残りの破片が窯内資料に存することができる遺物洗浄中に発見され、残りの文字(□□□)は「祐向寺」であることが判明した。この結果、刻銘を有する資料は3号窯の操業年代及びその納入先まで知る得る貴重な資料であることが確認された。3号窯の調査は12月13日に1号窯とあわせて、模型ヘリコプターによる空中写真測量行って図化を終え、その後グリッドのセクションを取り外して、12月中旬には調査を終了した。年明けの平成8年1月から2号窯の灰層の掘り下げに取りかかった。2号窯の灰層は薄く、1ヶ月程度で調査を終了した。2・3号窯の調査のうち残るのは天井部の除去と窯内断割のみとなり、これについては3月18日にヘリコプターによる空撮終了後に行った。

1・2・3号窯以外の主な遺構は当初から予定されていた3・4・5・7・13号墳である。3・4・5・7号墳は東側谷部の調査区に含まれていたが、調査の結果、古墳と確認されたのは3号墳と7号墳のみで、4・5号墳は単なる自然地形を誤認していたことが判明した。西側谷部に位置する13号墳も石材が露出していたが、石室及びそれに伴う掘り方もまったく確認できなかつたので、古墳とは認められないと判断した。このため、平成5年度の調査で確認している14号墳の北側で確認した古墳らしき掘り方を新たに13号墳とすることにした。4・5号墳はしばらく欠番として処理していたが、調査終了間際の2月頃に東側谷部の北奥で損壊の著しい古墳を確認したのでこれを4号墳とすることにし、5号墳は最後まで欠番として処理することにした。3号墳の調査は9月初旬頃より調査を始めた。3号墳の石室内からは多くの山茶碗が出土し、前年度調査の古墳と同様の傾向を示し、玄室からは山茶碗に共伴する鉄製品・砥石が出土して新たな資料を得ることになった。調査当初に4・5号墳と予想していた箇所を古墳として認識していた理由は墳丘状の高まりと一部に石材が露出していたこ

とにあったが、意外にもこれらの石材が散布する周辺では3基の近世墓を検出した（SZA01～03）。これらの石材は石室の石材を近世墓に転用しようとして移動したものを古墳として誤認していたことが確認された。古墳以外の遺構は昨年度調査の様相をそのまま引き継ぎ、前述の3基の近世墓以外にも多数の近世墓がいずれの谷部においても検出され、本遺跡が近世前半に墓域として機能していたことが明らかとなった。また、東側谷部の北奥の箇所では、下呂石の分割礫あるいは剥片類などの石器製作場を思わすような遺物が集中して出土し、その点数は1200点にも及んだ。さらに西側谷部の南端では古墳時代前半の堅穴住居2棟も確認された。本年度の調査の成果によって、本遺跡の内容は単なる古墳群を越え、豊富なものとなった。このため、遺跡の名称をこのまま船山北古墳群を使用するのが不都合となり、県教育委員会文化課と協議を行い、以後船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡と呼称することにした。こうした様々な時代の遺構の調査もほぼ3月頃には調査を終えたため、3月18日にヘリコプターによる空中写真測量を行い、全体図の図化を完了した。空撮後、残務整理を行い、3月27日には調査事務所の撤収も完了して調査を終了した。

平成8年度は本来、整理調査の年度であったが、昨年度の調査で発見した3基の古窯跡によって古墳群を中心とした発掘調査区域の見直しをする必要に迫られた。その理由は前年度まで実施した3カ年に及ぶ調査区域内に所在する2つの谷部からすべて古窯跡が発見されることにあり、この結果からみて開発事業予定地内にあるもう一つの谷部にも古窯跡が存在する可能性あり、これを確認する必要があったことによる。実際に残りの谷部も調査を実施した谷部と同じ方向に伸び、地形的に似ていることから古窯跡の存在の可能性は高いと考えられたため、岐阜県土地開発公社と協議を行い、平成8年4月に古窯跡確認のための試掘確認調査を実施した。その結果、2基の須恵器窯を斜面上に発見した（発見順に船山北4・5号窯とした）。造成事業はすでに始まっており、緊急に県教育委員会文化課・岐阜県土地開発公社と協議を行い、これら2基の古窯跡の発掘調査を実施することになり、その期間を5月～7月の3ヶ月間と定めた。実際の調査は5月7日から作業員を投入して調査を始めたが、調査の迅速化を図るために、4月中にすでに重機を利用して2基の窯体及びその灰原の確認作業はほぼ終了していた。5月7日からすぐに作業員の手掘りで5号窯内の掘り下げ及びグリッド設定を行った。グリッドは5号窯の主軸を基準とし、5m×5mで設定した。灰層の調査は4・5号窯の先後関係を確認するためにグリッドに沿ってサブレンチを掘り下げたが、互いの灰層が重複するところが判然とせず、灰層からは両窯の先後関係を明確にすることはできなかった。灰層からは大量に須恵器が出土し、本年度の調査はほとんどの労力をこの須恵器の取り上げに費やしたと言っても過言ではなく、調査終了時までに出土した須恵器はコンテナ500箱に達した。5号窯は床面から多くの須恵器が出土し、その総数は500点ちかくにのぼった。それらの須恵器は何らかの理由で操業廃棄時に窯内に取り残されたものと判断され、良好な一括資料を得ることになった。4号窯は上方からの湧水が顯著で焚口付近は常に冠水し、調査が困難であった。とくに6月の梅雨時期は4号窯だけではなく調査区の大半が冠水し、調査の進行を妨げた。4・5号窯の窯体・灰原・各附帯施設の掘削がようやく完了したのは7月上旬頃で、残りの期間も少ないため、窯体の断面の作業を空撮に先行させることにした。窯体の断面図及び平面図の作成には3次元測量機を用いて図化を行った。その後、7月26日に模型ヘリコプターによる空中写真測量を行った。調査は7月26日以後、片づけなどの残務整理を行い、7月30日に調査事務所を撤収して発掘調査を終了した。

第2章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

遺跡の所在する各務原市は濃尾平野のはば北端にあたり、市域はその濃尾平野の北縁を形成する美濃山地から派生した各務原山地（標高300m程度）と南を流れる木曽川に挟まれた地域である。市域を地形的にみると北部は各務原山地を中心とする山地、中央には南北約3.5km・東西約9.5kmの一般に各務原台地と呼ばれる洪積台地が広がり、南部は山地から流れる中小の河川の浸食作用によって沖積低地を形成している。この沖積低地はとくに、市西部から岐阜市かけての標高の低い地域に顕著である。

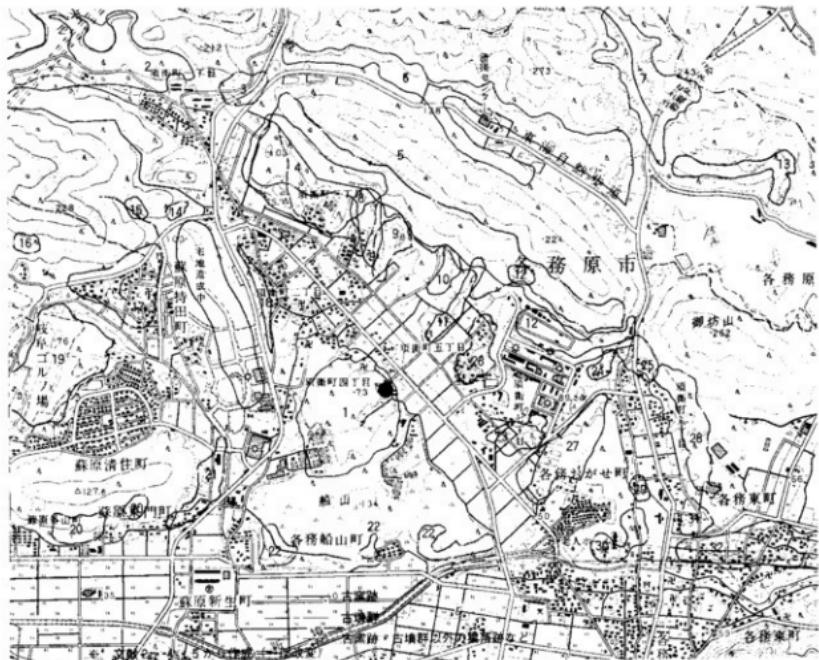
船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡は各務原市内の須衛4丁目に位置し、前述の3つの区分に従えば、北部の山地の地域に属する。この山地には東西に伸びる各務原山地とそれから南側に向かって派生する低丘陵が認められる。これらの低丘陵は北山、船山、御坊山などが島状に孤立しながら点在することから、この地形が隆起した後に沈降をしたことを示している。本遺跡はこの低丘陵（標高60~70m）の南限にあたる船山の北にある小丘陵上に位置する。遺跡が立地する小丘陵の基盤は砂岩で形成され、北側の斜面はかなりの急斜面及び断崖となっているが、南側の斜面は緩やかで何本かの風雨による浸食によって形成された谷状の地形が認められる。

こうした市域の北部に存する山地や丘陵上には、古墳時代後期から鎌倉時代前期までの約700年間にわたって須恵器・灰釉陶器・山茶碗を焼成した古窯跡が集中し、それらはを総称して美濃須衛古窯跡群（以下、美濃須衛窯と省略。）と呼称されおり、全国的にも著名な古窯跡群として知られている。この美濃須衛窯は現在までに確認されているものだけで130ヶ所にも及ぶが、発見不可能なものやす



第3図 調査遺跡位置図

でに滅失したものを含めるとその数は500基以上とも考えられる。この数は決して大げさなものではなく、実際に昭和49年に発掘調査された稻田山古窯跡群では調査予定であった5基の古窯跡が、調査の結果、確認した古窯跡は16基に増えており、このような成果からみれば現在、地表で確認している古窯跡の数はほんの一部であることは容易に想像できる。美濃須衛窯は古窯跡が立地する山地及び丘陵の地形から「鞠沼地区」・「各務地区」・「須衛地区」・「須衛天狗谷地区」・「蘇原地区」・「岩滝地区」・「那加地区」・「芥見地区」・「大洞地区」・「桐谷地区」に区分することが可能である。とくに本遺跡が所在する「須衛地区」は美濃須衛窯の中で最も古窯跡が集中する地域である。細かくみれば前述した稻田山古窯跡群を始めとする古窯跡が御坊山の北西側に位置する稻田山の南西斜面の裾沿いに密集する。さらにその背後の山麓には太田古窯跡群・天狗谷古窯跡群・地獄洞古窯跡群が存在する。太田古窯跡群・地獄洞古窯跡群は発掘調査の結果、8世紀前半代の古窯跡が確認されている。また、天狗谷古窯跡群では昭和59年から昭和60年にかけての発掘調査で8世紀中葉から9世紀前葉の古窯跡を確認している。先の稻田山古窯跡群では8世紀中葉から9世紀後葉の須恵器窯、さらには11世紀代の灰釉陶器窯、13世紀前葉の山茶碗窯が検出され、背後の山麓から低丘陵へ古窯跡が次第に移行しているようにも見て取れる。この点については今後の資料の増加によってさらに検討する必要があるが、今回調査を実施した本遺跡で確認した古窯跡は9世紀代の須恵器窯2基、10世紀末頃の灰釉陶器窯1基、12世紀後半代から13世紀初頭の山茶碗窯2基であり、比較的美濃須衛窯の変遷の上では



新しい部分に相当し、前述の見解に合致するとも考えられる。この5基の古窯跡は詳細は後述するが、いずれも地表から3m下に埋もれ、地表からの確認是不可能であった。こうした結果からみれば、須衛地区には現在でも地中深くに眠る古窯跡が数多く存在すると考えられ、本遺跡の西側に位置する市立古窯跡群・市立南古窯跡群などは道路建設あるいは宅地造成によって失われた古窯跡もかなりの数であったと想像でき、「須衛地区」は当時、その地名が示す通り須恵器生産的一大拠点であったと考えられる。

さて、本遺跡の発掘調査の契機となった古墳群は本遺跡を中心にしてみると、北に北山古墳群、南に船山古墳群、西に会本古墳群がみられる。いずれも6世紀末頃から7世紀代の後期古墳とみられ、10~20基程度でグループを形成していると考えられる。こうした古墳群の形成の背景には周囲に集中する窯の操業に関わる工人集団が密接に関係しているとみられる。「須衛地区」は地形的にみて、それほど高い生産基盤をもっていたとは考えにくく、また周囲に古墳群形成に関わった集団を想定するような集落跡も現状では確認されていないことからみても現状では妥当な見解と思われる。昭和59年から昭和60年に発掘調査された天狗谷古窯跡群あるいは本遺跡において窯に隣接する後期古墳が確認されていることからも、時期の齟齬はあるが窯の工人集団と古墳群形成がかなり深い繋がりをもっていたことがうかがわれる。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	内 容	番号	遺跡名	内 容
1	船山古墳群 船山北古墳跡 船山北遺跡	本書報告遺跡。	17	北山遺跡	西部には蘇原6号窓（中層敷廻、消失）、北部には近世屋敷遺構を含む複合遺跡。平成3年の各務原市教育委員会の発掘調査では山茶碗窓を1基確認している。
2	市立古窓跡群	須衛63・64号窓、灰原より平安時代の須恵器を確認（※2）。	18	市立南 古窓跡群	須衛60・62・65・66号窓（※2）。現状では白鳳～平安後期と思われる窓跡を4基確認している。
3	御林古墳群	円墳による群集墳。かつては13基（※1）を確認されていたが、現状では1基のみ。	19	飛鳥田 古窓跡群	現在までに2基の窓跡が確認されているが、すでに破壊されている。白鳳～平安時代。
4	稻田山古窓跡群	須衛37～58号窓（※2）。尾根の周囲に灰原が露出し、十数基から二十基程度の窓跡が集中する可能性がある。奈良～平安時代。	20	外山古墳群	円墳による群集墳でかつては6基を確認していたが（※1）、現在は2基の古墳が確認される。
5	稻田山古墳群	13基の後期古墳が確認されている。おそらく、20基程度の群集墳になると思われる。	21	東門遺跡	鶴文時代遺跡として知られていたが、斜面には滅失した須恵器窓が存在していたことが確認されている。
6	太田古窓跡群	須衛10～22号窓（※2）。平成4年に各務原市埋蔵文化財調査センターによる北清川七ヶ所（尾根）の発掘調査が実施され、3基の窓跡を確認。そのうちの1号古窓跡灰原からは「美濃國」刻印入り須恵器が出土している。その他にも道路沿いに灰原が確認されている。奈良時代。	22	船山古墳群	群集墳。かつて16基の後期古墳が確認されていたが（※1）、その多くが滅失している。
7	地獄洞 古窓跡群	須衛9号窓（※2）。昭和46年に各務原市教育委員会により灰原一部の発掘調査を実施している。現在まで白鳳～奈良時代までの古窓跡を3段位で確認。	23	須衛宮東 古窓跡群	須衛70号窓（※2）。水田脇の倒壊工事際に灰原が露出し、瓦が採集されている。また、付近からは式台の須恵器も採集されている。古墳～平安時代。
8	稻田山西 第1古窓跡群	須衛35・36号窓（※2）。奈良～平安時代一部、灰原が露出。	24	会本八幡神社 古窓跡群	須衛68・69号古窓跡（※2）。神社建造の際に見出され、現在までに2基の窓跡が確認されている。奈良～平安時代。
9	丁田遺跡	奈良～平安時代。集落跡ないしは灰原。	25	会本古墳群	後期古墳の群集墳。かつては7基の古墳が確認されていたが（※1）、現在は1基の環状土塁跡を残すのみである。
10	稻田山西 第2古窓跡群	須衛33・34号窓（※2）。白鳳時代～中世。	26	陶器所城遺跡	土岐氏の一族が土着したといわれる伝承が残っている。奈良～室町時代。
11	稻田山西 第3古窓跡群	須衛29～32号窓（※2）。開墾により一部焼土が露出。	27	稻田山南遺跡	斜面から須恵器が採集され、未確認の窓跡が存する可能性が高い。
12	稻田山 古窓跡群	須衛13～28号窓（※2）。21～25号窓は昭和49年に木材流通協同組合に伴い各務原市埋蔵文化財調査センターによる発掘調査が実施。須衛窓跡13基、灰原窓跡3基を確認している。その他の場所にも地土や須恵器が散布し、美濃須原古窓跡群中で最も窓跡が集中していると考えられる。奈良時代～中世。	28	御坊山古墳群	後期古墳の群集墳。かつては16基の古墳を確認していたが（※1）、現在では2基しか確認できない。多くは滅失したと考えられる。
13	天狗谷 古窓跡群	須衛1～8号窓（※2）。昭和59～60年の各務原市教育委員会による発掘調査によると、灰原の須恵器窓と2基の灰原須恵器窓（後期古窓跡）が確認されている。山茶碗窓としらゆれの須衛1号窓も本日窓跡に含められる（※3）。	29	村国北遺跡	現在では判然としないが、かつては2基の古墳が確認されている（※1）。山麓という条件から窓跡が存在する可能性も高い。
14	北山 第1古墳群	3基の後期古墳が確認されている。そのうちの2基は平成6年各務原市埋蔵文化財調査センターにより発掘調査されている。	30	村国古墳群	後期の群集墳。かつて16基の古墳が確認され（※1）、現在でも14基の古墳が確認できる。
15	北山古窓跡群	須衛67号窓（※2）。中世。	31	会本南遺跡	奈良時代～中世。須恵器・山茶碗が散布。
16	北山 第2古墳群	円墳による群集墳で現状では2基が確認されている。	32	莊名遺跡	古墳時代～中世。須恵器・山茶碗が散布。
			33	須衛持田遺跡	仮称。昭和60年から平成2年に各務原市教育委員会により発掘調査を実施。2基の古窓跡を確認。

※1 1931 小川栄一『相模群古墳調査』 岐阜県師範学校郷土研究資料

※2 1984 各務原市教育委員会『美濃須原古窓跡群資料調査報告書』

※3 1981 吉田美敏『美濃須原における窓の様相（I）』[『岐阜県考古』第8号 岐阜考古学会]

※4 1994 各務原市埋蔵文化財調査センター『北山遺跡B・C地区発掘調査報告書』

※5 1998 岐阜県各務原市教育委員会『岐阜県各務原市遺跡群分布調査報告書』に基づき作成（一部改変）。

第3章 遺構概要と基本的層序

第1節 遺構概要

本遺跡の調査は調査面積が17,600m²に及ぶ広大であり、また丘陵上に立地するため地形の起伏が著しい。調査区域は丘陵の南東斜面に位置し、このなかには南北に伸びる尾根と谷が連続する地形が認められる。この地形を考慮して第2図のように調査区域を尾根とその尾根からの流入土が厚く堆積した埋没谷に分けることにした。以下、東から順に東尾根・東埋没谷・中央尾根・中央埋没谷・西尾根・西埋没谷と呼称することにする。これら尾根と埋没谷にはほぼ規則的に遺構が認められ、尾根上には計14基の古墳、埋没谷の西斜面には計5基の古窯跡が存在する。古墳・古窯跡以外の遺構は古墳時代前期の住居跡2棟、近世墓24基、溝2条などが主な遺構としてあげられる。住居跡は中央埋没谷の南端で確認した。近世墓は中央尾根を中心として散在し、調査区域内の比較的高い部分で認められた。とくに規則的な配置は看取されないが、東尾根・西尾根ではほとんど認められないため、その中心は中央尾根にあったものと考えられる。その他には時期不明の多数のビット群81基を東埋没谷で確認した。一部に軸をそろえるビットも認められるが、建物跡を想起させるビットの配置は確認することができなかった。また、北端では下呂石の石核あるいは剥片が集中する範囲を検出したが、明確な遺構を伴わなかったため、下呂石集中範囲と呼称することにした。なお、後述する基本的層序はこの下呂石集中範囲でサンプリングし、基準にしている。

第2節 基本的層序

本遺跡の層序は地山を除いて大きく以下に説明するⅠ層～Ⅲ層までの3つの層序が認められ、調査区域全域においてほぼ共通する。

Ⅰ層 黒褐色土 (7.5YR3/1) 表土。厚さは数cm～10cm程度。Ⅱ層が欠如する地域では地山が砂岩の岩盤で形成されているため、あまり発達していない。

Ⅱ層 赤褐色土 (7.5YR7/6) 地山の風化土が堆積したもの。堆積の厚さは数cm～数mまでと一様ではない。埋没谷の下方では著しく厚く堆積し、なかにはレンズ状の堆積及びラミナが形成されている。尾根上ではほとんど認められない。また、基本的には砂質土だが一部には粘性をもつ土質も認められる。ほとんど遺物は認められない。

Ⅲ層 褐色土 (7.5YR4/3) やや砂質で、遺物を包含する土層。厚さは数cm～10cm程度で尾根上ではあまり認められず、埋没谷で顕著に認められる。遺物の多くは古墳に関係するとみられる須恵器片で占められるが、古窯跡の付近ではそれぞれの窯ないしは灰原に属する遺物も混じる。東埋没谷で確認した下呂石集中範囲は本土層中で確認したが、その多くの遺物はⅢ層と地山との境界付近からのものである。また、旧石器時代～縄文時代の石器類も本土層中から出土するが、下呂石

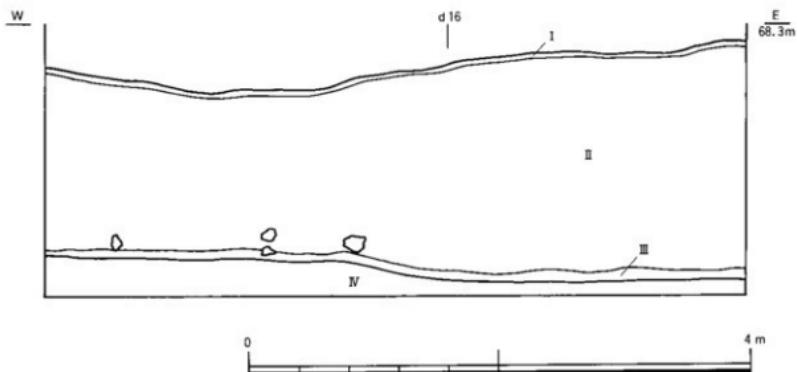
集中範囲と同様、地山との境界ちかくで出土したものが多い。

IV層 赤褐色土（5 YR6/6）

いわゆる地山。赤味の強い砂岩の岩盤を基準とするが、尾根の頂上部から谷へ向かって下がるにつれて砂岩が風化した小礫を含み粘性が強い土、砂岩の小礫を含まない粘性の強い土へと漸移的に変化する。II層が認められない尾根上を除いて、大半の遺構はIV層から掘り込まれており、これらの遺構の埋没はII層及びIII層の形成によるものと理解できる。

以上、基本的層序は地山を含めてI層～IV層に分類でき、それぞれ各遺構においてこれらの土層が堆積している場合は、この名称をこのまま使用する。各遺構の埋土のうち、基本的層序に合致しない別の性格を有するものについては別の名称を用いることにした。その際、基本的層序と各遺構特有の土層を区別するため、各遺構において固有の土層は算用数字を用いている。

4つの土層のうち、注意すべき土層はII層である。その理由は2つ上げられる。一つはほとんど無遺物層にちかい点、もう一つは埋没谷では数mに達する厚い堆積が認められる点である。この二つの観点はII層の形成に関してII層が堆積している箇所からみて、古窯跡埋没後から現在に至るまで人為的行為が関わっておらず、その堆積が長期間に及ぶものではなくかなり短期間のうちにII層が形成されたことを示していると考えられる。そのII層が短期間のうちに形成される条件として最も考えられるのは当時の植生が発達していなかったのではないかということである。この条件と古窯跡の存在は無関係ではなく、おそらく窯操業のために薪獲得などのために周囲の森林を伐採したことが結果的に、短期のII層形成を促したことが想像できる。



第5図 基本層序

第4章 遺構と遺物

第1節 旧石器・縄文・弥生時代の遺構と遺物

古墳時代以前の明確な遺構は確認されなかったが、旧石器時代に属するナイフ形石器をはじめ、東埋没谷を中心とする下呂石の石器群や若干の弥生土器が確認された。

第1項 石器類

下呂石の石核・剥片類を中心に1,691点、約14,403gの石器類が確認された。器種ごとに分類して以下に説明する。

1. ナイフ形石器（6）

1点出土した。脂肪光沢のある緻密なチャートを石材としている。縦長剥片を素材とし、長軸方向に縦位置に用いている。主要剥離面をほぼそのまま残しているが、基部への調整のため打点は失われている。刃潰しのための調整が片側縁にのみ施されている。刃部とされた鋭利な側縁部には、使用痕と思われる微細な剥離痕が連続している。先端部をわずかに折損する。時期は後期旧石器時代のものと思われるが、出土地点周辺の同一土層（C33グリッド、Ⅲ層）からは、チャートの石鏃1点（12）、ノッチド・スクレイバー1点（80）、楔形石器1点（90）、R F 1点（109）、U F 2点（113, 114）、剥片類4点、サヌカイトの剥片類4点、黒曜石の剥片類1点、下呂石の剥片類1点の計16点の石器類が確認されている。これらの中に縄文時代以降にみられる石鏃が含まれる点からみて、ナイフ形石器を出土した層は、当該期における単純層ではなく、長期間にわたって形成されたものと思われ、6は流れ込みによるものと考えられる。

2. 石鏃（7～68）

未製品と考えられるものを含め、82点出土した。このうち62点図示した。

石材別出土点数は、下呂石37点、チャート33点、サヌカイト7点、安山岩3点、頁岩1点、石英1点で、下呂石とチャートがそれぞれ全体の約40%を占める。

矢柄との装着方法が反映する基部の形態と、刺突能力と関連する鏃身部を含む尖頭部の形態の2点に着目して分類を行った。

〈基部の形態による分類〉

凹基式：基部に僅かに抉りが入るもの。

有脚式：基部の抉りが深く、脚の作り出しが明瞭なもの。

有茎式：基部に茎部を有するもの。

柳葉式：洞部が收れんしてそのまま基部となる、細長い柳葉形を呈するもの。

〈鏃身部を含む尖頭部の形態による分類〉

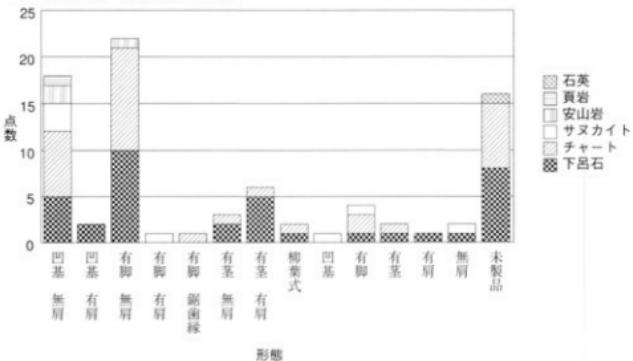
無肩：側縁部が直線的に、あるいは若干内湾・外反しながら基部に至るもの。

有肩：側縁部の肩が張った形状をもつもの。肩は鎌身上部に作り出す。

鋸歯縁：側縁部が鋸歯状になるもの。

各形態別の個数と石材別の内訳を第2表に示した。有脚無肩鎌と凹基無肩鎌が主体を占め、石材は下呂石とチャートを中心に様々な石材が用いられている。他方、有肩鎌では下呂石が主体になっている点が注目される。

第2表 石鎌の形態別・石材別出土点数



また第3表で示したように、全体の65.9%にあたる54点に欠損が認められ、完形として捉えることができるものはわずかに12点のみである。脚部並びに先端部を欠損するものが目立つ。

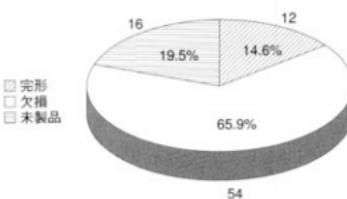
7~21は凹基無肩鎌である。全体として調整が粗く、素材とした剥片の厚みを残すものが多い。12は寸詰まりな印象を受けるが、先端部を再作出したのではないかと思われる。上半部の側縁部には潰れがみられる。ナイフ形石器（6）と同一グリッドから出土している。19は他の石鎌と比べて大型である。21は両面に素材とした剥片の剥離面を広く残している。

22・23は凹基有肩鎌で、縄文時代晩期に盛行する五角形を呈するものである。ともに下呂石を石材としている。22は腹面側に広く素材の剥離面を残している。

24は風化が著しく、剥離面の観察が困難であった。特に側縁部の摩滅が激しく基部のみの形態から凹基式鎌とした。

25~44は有脚無肩鎌である。25は背面側に素材とした剥片の厚みを残している。左側縁部は素材とした剥片の剥離面をそのまま利用しており、背面側からの二次調整はなされていない。先端部は両面からの調整によって突出している。27・28は薄手に仕上げられており、両面に丁寧な二次調整が施さ

第3表 石鎌欠損率



れている。37は細身で基部の抉り込みが深く、縄文時代早期にみられる鍬形鎌に近い形態を呈している。41・42は風化が著しく、剥離の観察が困難であった。44は両脚部を折損している。

45は折損によって片脚部のみであるが、側縁部は表裏から交互に押圧剥離を加えた鋸歯縁状になっている。

46は有脚有肩鎌としたが、先端部と側縁部の風化が著しく、折損により偶然にしてこのような形態になった可能性がある。片脚部を折損しているが、抉り込みは深い。

48は腹面側からの力によって上半部を折損しており、素材とした剥片の厚みがかなり残っている。側縁部の調整も粗いため、製作段階で折損した可能性がある。

49～51は有茎無肩鎌である。49は腹面側にわずかに素材の剥離面を残す。茎部は腹面側から先に調整し背面側からの調整によって仕上げて作出されている。50は片側縁部を折損している。鎌身部中ほどに素材の剥離面を残す。先端部の腹面側は潰れ状になっている。

52～57是有茎有肩鎌であり、縄文時代晩期にみられる飛行機鎌といわれるものである。53は腹面側に大きく素材の剥離面を残しておらず、縁辺部に細かな調整を加えて整形されている。茎部を折損する。56は茎部の作り出しが短いが、これは本来の茎部が折損したため調整し直したためと思われる。57はややす詰まりな印象を受けるが、先端部を再調整している。

59・60は柳葉式鎌であり、ともに茎部を折損する。素材とした剥片の厚みを生かして、丁寧な調整によって整形されている。59はまず背面側の調整を行い、のち腹面側から調整を加えて仕上げている。

61は両脚部が折損しているため、尖頭部の形態から有肩鎌とした。62はいわゆる三角鎌ではなく、両脚部を折損している。ただし凹基か有脚か判断できないため、尖頭部の形態から無肩鎌とした。63は欠損品であるが、粗い二次調整がなされている石鎌の先端部として分類した。

素材とした剥片の大きさや調整方法などから石鎌の製作途中と判断できるものや、製作を途中で断念したと思われるものを未製品とした。16点を確認した。64は鎌身部の調整は両面から丁寧になされているが、背面側からの基部への調整が放棄されている。65は先端部に調整が見られ、基部にわずかに自然面が残る。66は正面左側縁部と基部の縁辺部の双方に潰れ状の剥離痕が認められる。67は縦長剥片を素材としている。背面側から側縁部の調整が粗く施されており、打点は失われている。腹面側に素材の剥離面を大きく残す。基部が折損したため製作を途中で断念した可能性がある。68は基部に素材とした剥片の自然面を残している。背面側に素材とした剥片の厚みをとるための調整が加えられている。

3. 石鎌（69～75）

7点出土した。石材は、下呂石3点、チャート4点である。機能部となる錐部の作出は、すべて1カ所である。69は不定形の剥片の一部に調整を加えて錐部を作出している。腹面側に素材の剥離面を残し、打面となった自然面と打点も残る。打点のすぐ横で折損している。機能部は使用によってかなり摩耗している。70・71は棒状を呈しており、大きさから柄に着装して使用したものと思われるが、ともに基部を折損している。71の機能部は使用によってかなり摩耗している。72は不定形の剥片を利用している。背面側には自然面と節理面がある。腹面側には素材の剥離面を広く残し、錐部の調整はおもに腹面側からなされている。73の機能部は使用によってかなり摩耗している。74は自然面が大き

く残っており、錐部の調整も明確ではない。75は節理面を利用し縁辺部に細かな調整を加えることによって錐部を作出している。柄に着装したと思われる基部を折損している。チャートを石材とする73～75は近接して出土している。

4. スクレイバー類 (76～88)

素材となる剥片の縁辺に連続的な二次調整を施すことにより刃部を作出した石器をスクレイバー類として一括した。17点出土した。石匙2点、削器2点、ノッチドスクレイバー2点、ヘラ形石器9点、折損により分類不能のもの2点である。石材は、下呂石1点、チャート15点、ホルンフェルス1点である。このうち13点図示した。

76・77はつまみ部をもつ石匙であり、縄文時代早期以降広くみられるものである。76は大きめの横長剥片を素材とし、その打面を上方に置きつまみ部としている。いわゆる横型のものである。腹面側中央に素材の剥離面を広く残す。また背面側には自然面が多く残されている。刃部の調整は、まず腹面側に深い階段状の剥離を施し、その後背面側から押圧剥離によって仕上げている。つまみ部は腹面側からの調整によって仕上げられている。77は器形が綫長で、つまみ部を上方に置いたとき平行した側縁が刃部となるいわゆる綫型のものである。腹面側はほぼ素材となった剥片の主要剥離面であり、刃部の調整は背面側からのみ施されている。剥離の末端がつまみ部とされており、わずかに自然面を残す。

78・79は不定形な剥片の縁辺に、緩い角度の連続調整を施して刃部を作出した削器である。78は軟質なホルンフェルスを石材としておりスクレイバーとしての機能に疑問もあるが、大きめの剥片を素材として背面側と腹面側からそれぞれ1カ所ずつ計2カ所の刃部が調整されている。刃部には摩滅痕が認められる。刃部角は60°である。79は背面側からの調整によって刃部が作出されている。刃部角は55°である。

80・81は不定形な剥片の縁辺に、片面調整により、急角度のノッチ（抉り）状の刃部が作出されている。機能部はともに1カ所である。80は背面側から調整されている。腹面側に主要剥離面の打点を残す。

82～86は素材となる剥片の両（片）側縁に折れ面、又は切断面を有し、鋭利な縁辺部をそのまま刃部とした石器である。84・86は自然面を利用している。刃部とされた縁辺部には、連続する微細な剥離痕が認められる。

5. 模形石器 (89～91)

3点出土した。石材は、すべてチャートである。剥片の相対する二縁辺に潰れ状の剥離痕が発達する石器を模形石器としたが、後述する石核に見られる「両極打法」の検討内容から、下呂石のものはすべて石核に分類した。

6. 打製石斧 (92・93)

2点出土した。石材は、結晶片岩1点、ホルンフェルス1点である。92は両面に素材となった礫の自然面を残す。縁辺部から粗めの調整が加えられている。93は基部を折損している。

7. 磨石・敲石・凹石類 (94~99)

8点出土した。このうち6点図示した。石材は、砂岩5点、安山岩3点である。主に円盤を素材としている。磨り・凹み・敲き・叩きといった様々な機能が想定される石器であり、複数の種類の痕跡（機能・用途）を持つものが多い。94は河原石を利用しており、磨面が5カ所認められた。95はその重さを生かした用途が考えられるが、長軸方向の両端部に敲打痕が密集している。96はすり鉢状の浅い凹みとともに、敲打痕や磨面も認められる。98は粗い石材を用いており、磨面とともに同一方向への線条痕が認められる。

8. 砥石 (100~104)

5点出土した。石材は、泥岩1点、安山岩1点、流紋岩2点、砂岩1点である。100は緻密な泥岩を石材に運び用いた薄手のものであり、3号墳石室内において鉄製品（412）と重なるように置かれていた。101はほぼ全面に使用面が広がり、かなり使い込まれている。102、103は同質の流紋岩を石材としている。102は置き砥石と考えられる。円柱状を呈するが、大きく欠損している。103は12号墳石室内より出土しており、古墳の再利用面を考える上での資料になるものと思われる。

9. RF (調整剥離を施された剥片) (105~110)

不定形の剥片を素材として、何らかの定形石器を作出しようとして縁辺にある程度連続して調整剥離が施された石器を、RFとした。18点出土した。石材は下呂石10点、チャート8点である。このうち6点図示した。107は両面に細かな調整が施されている。108は腹面側からの調整によって抉りが作出されている。110はスクレイパーとして刃部を調整しようとしたものと思われる。背面側に大きく自然面を残す。

10. UF (微細な剥離痕を有する剥片) (111~116)

剥片の縁辺に微細な剥離痕がある程度連続するもの、又はある範囲に多く認められる剥片をUFとした。19点出土した。石材はチャート17点、砂岩1点、泥岩1点である。このうち6点図示した。

なお、下呂石の剥片については、後述するように別に検討したため、微細な剥離痕が認められるものであっても、UFには含めなかった。111は継長剥片を素材とし、背面側に自然面を多く残す。112は節理面において折損した2点の接合個体である。116は自然面を打面とする大きめの剥片の縁辺部2カ所に連続した微細な剥離痕が認められる。

11. 石製品 (117~121)

5点出土した。石材は、バイロフィライト（葉蠶石）1点、泥岩4点である。117は小型の垂飾りである。118~121の小玉はSK05からまとめて出土している。全体として作りは粗く、折損も目立つ。

12. 石核 (122~149)

127点出土した。このうち28点図示した。石材は下呂石113点、チャート12点、黒曜石1点、泥岩1

点である。122は薄手の剥片を素材として、両極打法により剥離作業を行っている。打面は平坦な節理面を利用している。123は黒曜石で、剥離面に球顆がみられる。打面は平らな剥離面を利用しており、両極打法による度重なる加撃のため階段状の潰れが認められる。124は分割縛を素材としている。自然面からの加撃によって調整された剥離面を打面に剥離作業を行い、薄手の剥片を得ている。

下呂石の石核については尾崎遺跡調査報告書〔1993 佐野〕での形態分類をもとに検討した。剥片類と併せて後述する。

13. 剥片類（150～191）

剥片・分割縛・碎片あわせて、1,395点出土した。石材は下呂石1,086点、チャート223点、サヌカイト19点、安山岩4点、石英2点、黒曜石2点、ホルンフェルス2点、砂岩6点、泥岩49点、粘板岩2点である。このうち下呂石の剥片・分割縛を42点図示した。詳細については後述する。

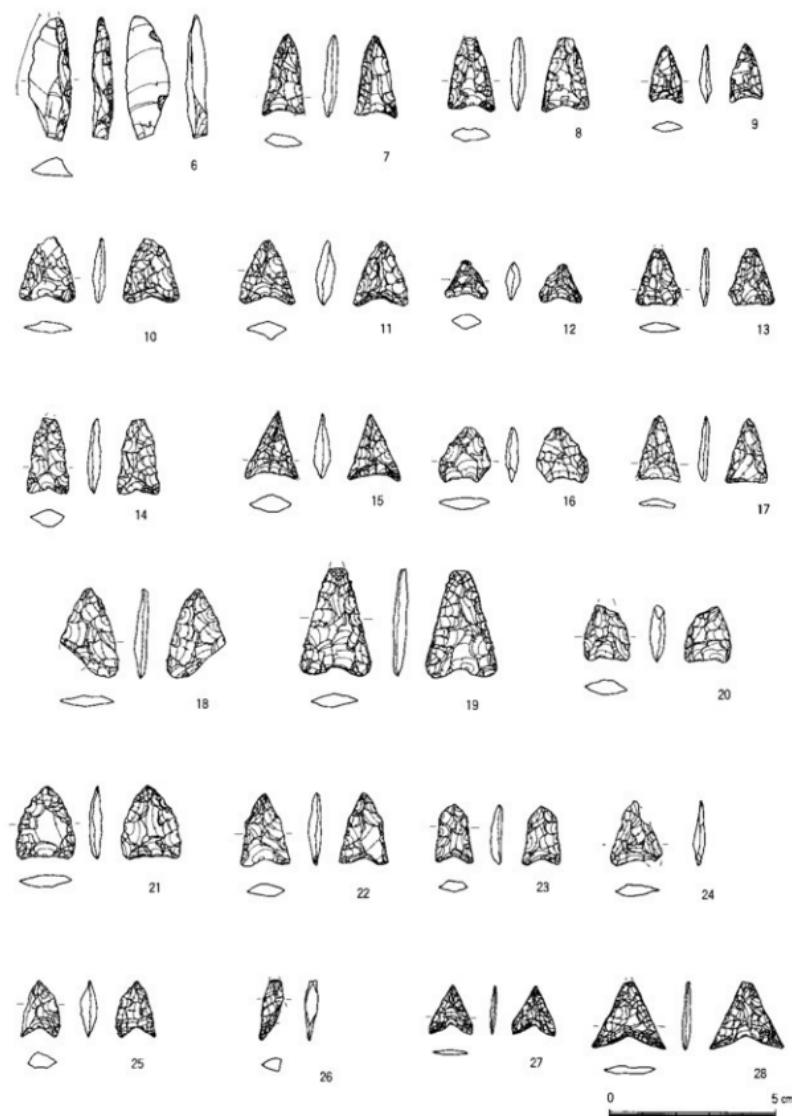
第2項 弥生土器

東埋没谷から10点程度の弥生前期～中期の条痕文系土器が出土した（第6・22図）。すべて小片で遺構に伴うわけではないが、後述する下呂石の石器群と関わりが深いと考えられるため、5点を図示して紹介する。

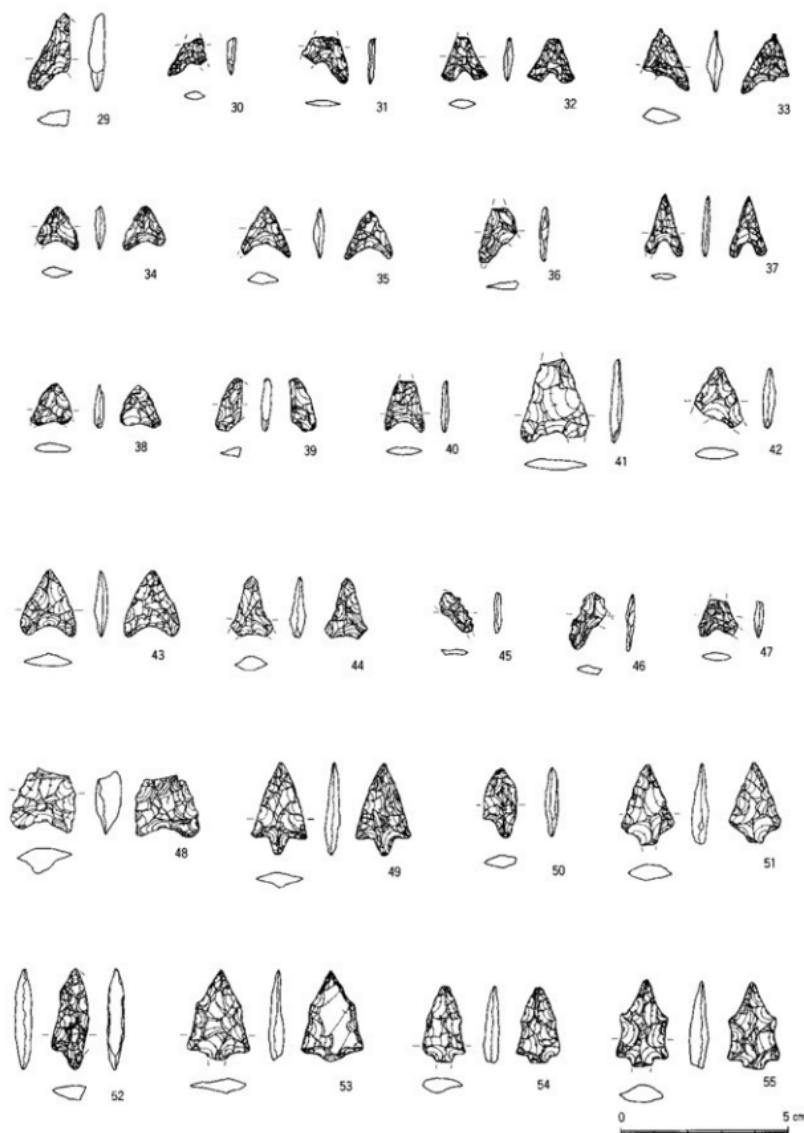
1は壺の口縁部片。端部には押し引きが加えられ、口縁部内面には連弧状の文様が認められる。口縁部外面には突帯が貼付され、その上を指頭で押圧する。色調は橙色。2・3は壺ないしは甕の胴部片。いずれも器壁が薄く、条痕がやや浅めで貝田町式にも類似する。2の色調は橙色、3の色調はにぶい黄橙色を呈す。4は単斜状の条痕が認められる。色調はにぶい黄橙色を呈す。壺の胴部片であろうか。5は底部片。おそらく壺の底部と考えられる。1とは出土地点が離れており、別個体と思われる。体部外面には単斜状の条痕がわずかに残る。色調は橙色を呈す。



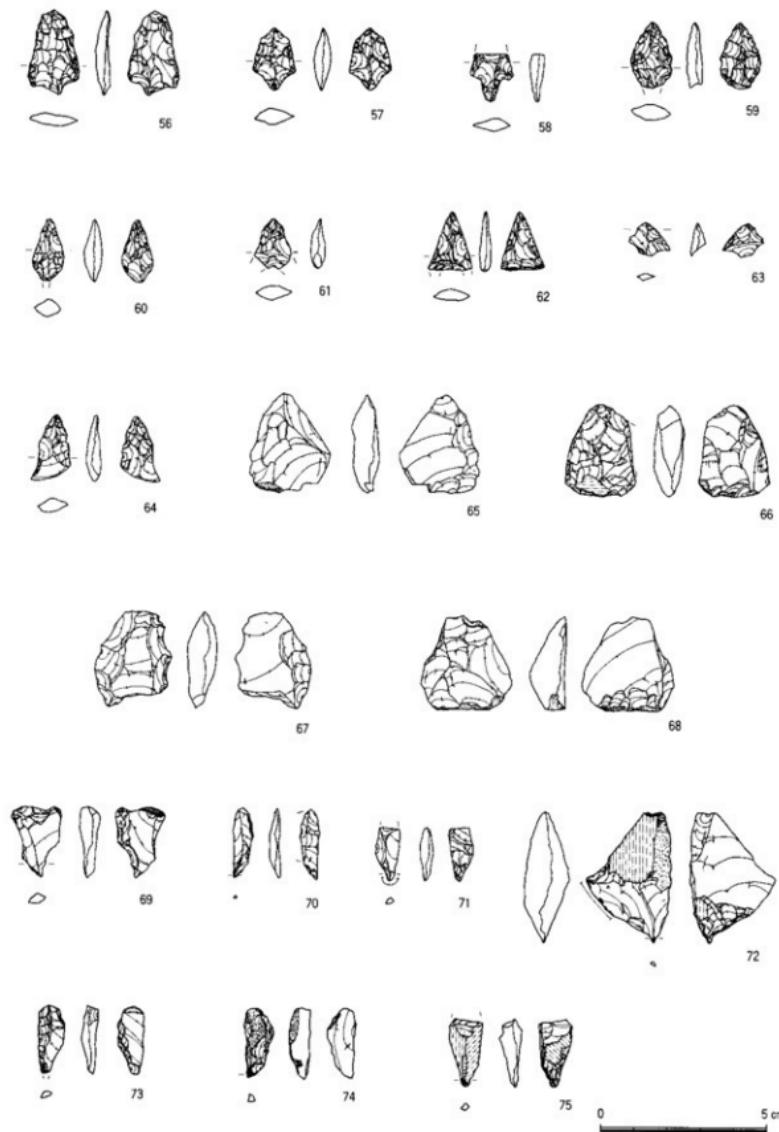
第6図 東埋没谷出土弥生土器



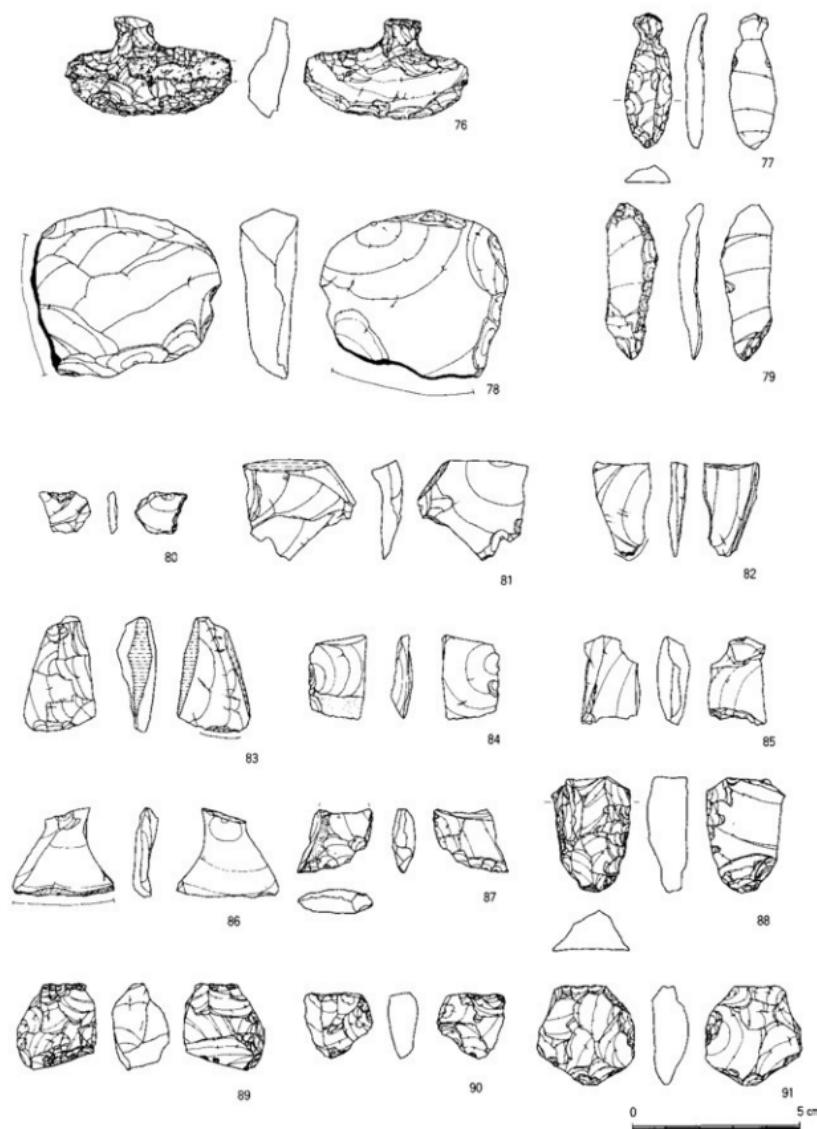
第7図 ナイフ形石器・石鎚(1)



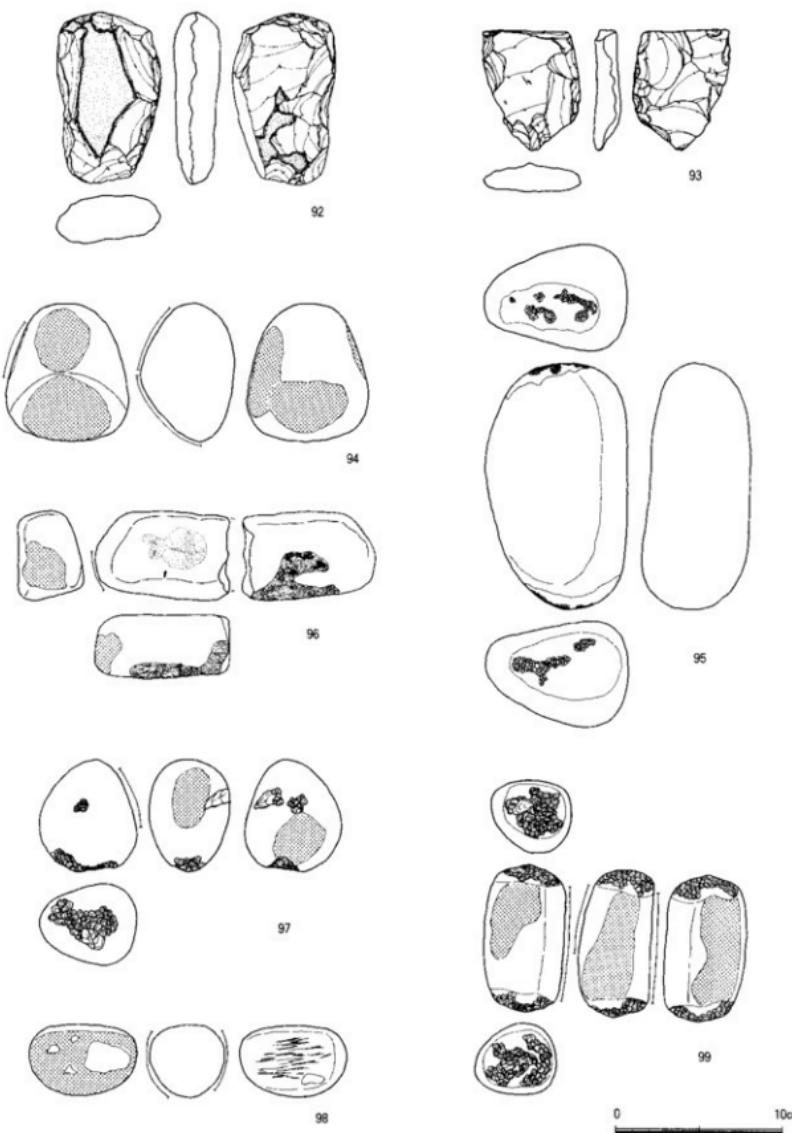
第8図 石鏃(2)



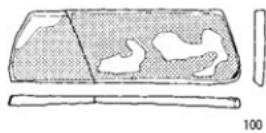
第9図 石鏃(3)・石錐



第10図 スクレイバー類・模形石器



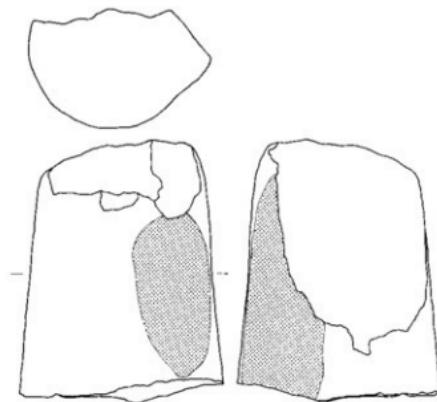
第11図 打製石斧・磨石・敲石・凹石類



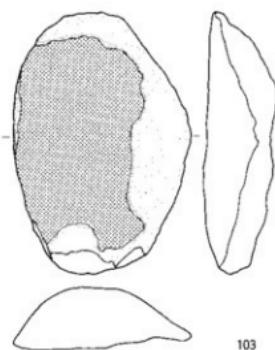
100



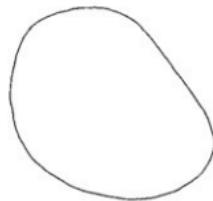
101



102



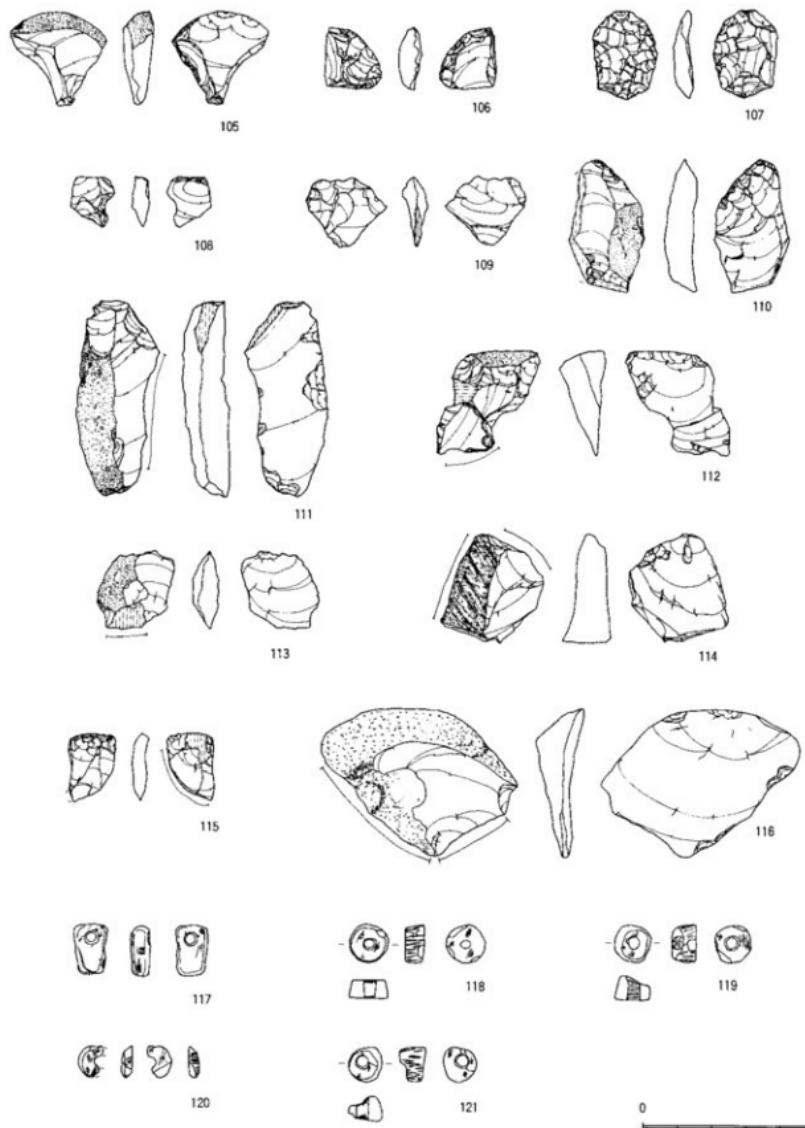
103



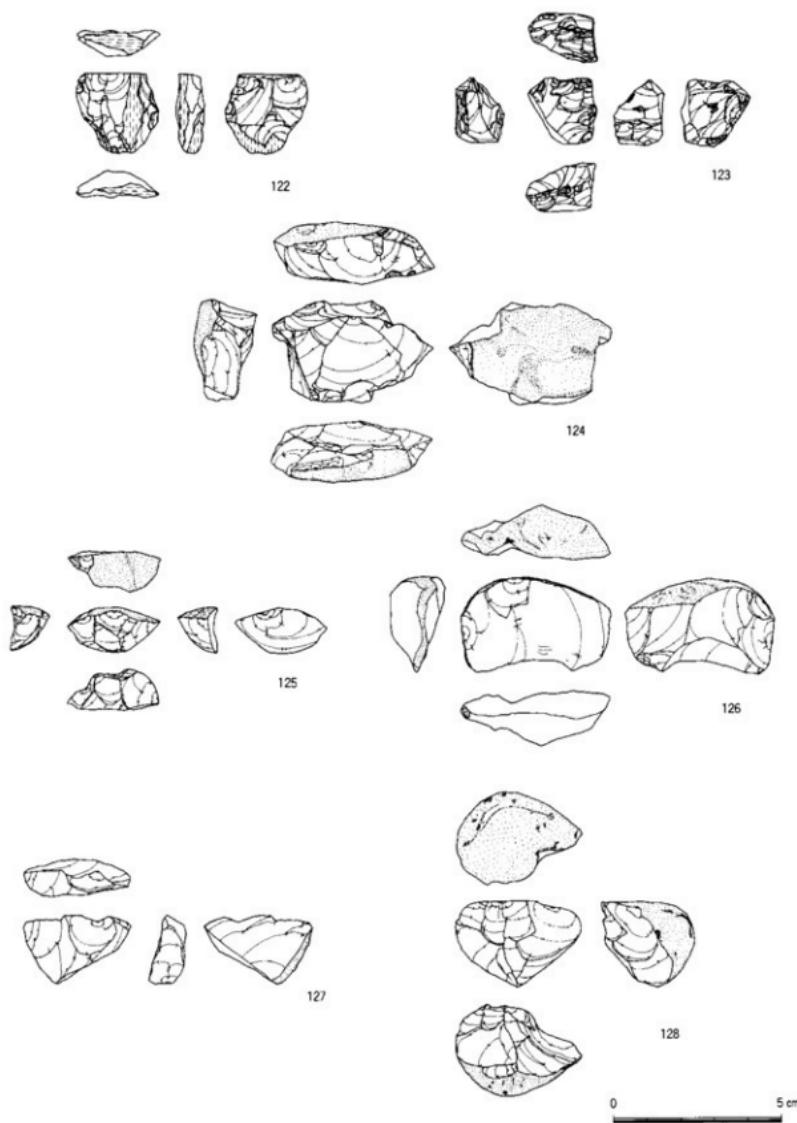
104

0 10cm

第12図 砥石



第13図 RF・UF・石製品類



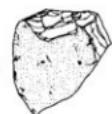
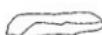
第14図 石核(1)



129



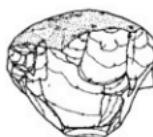
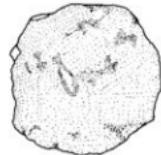
130



131



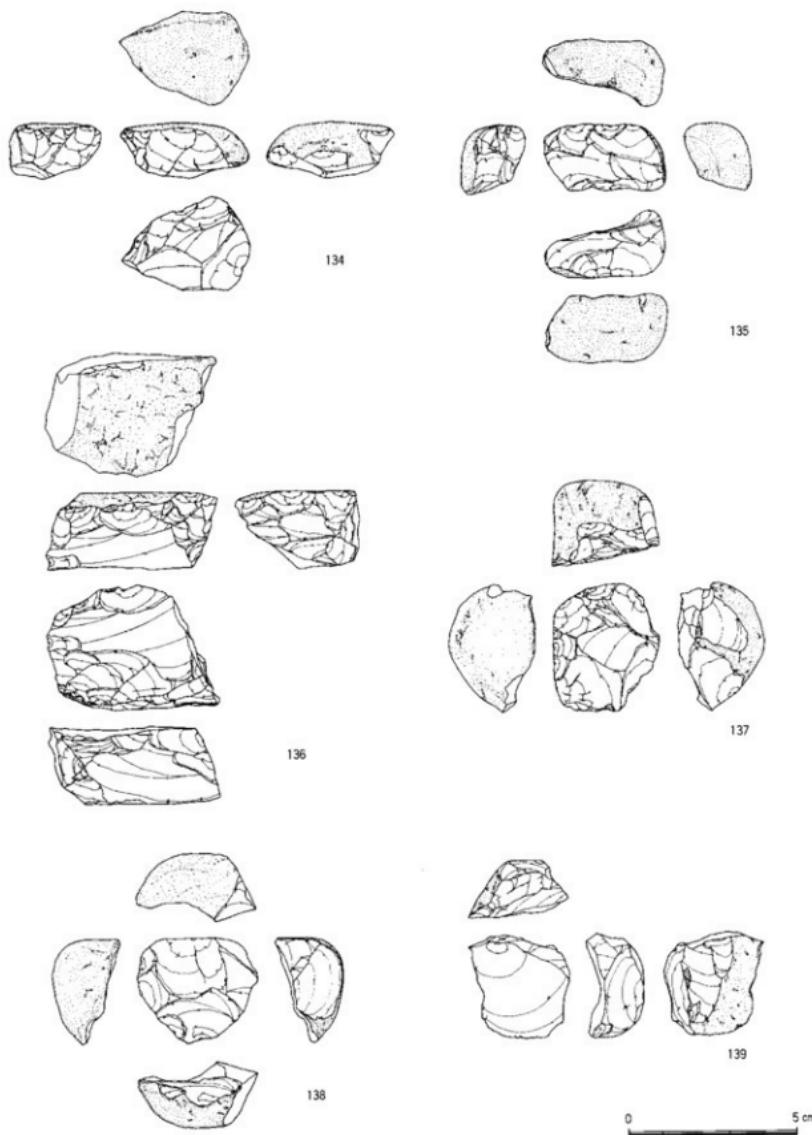
132



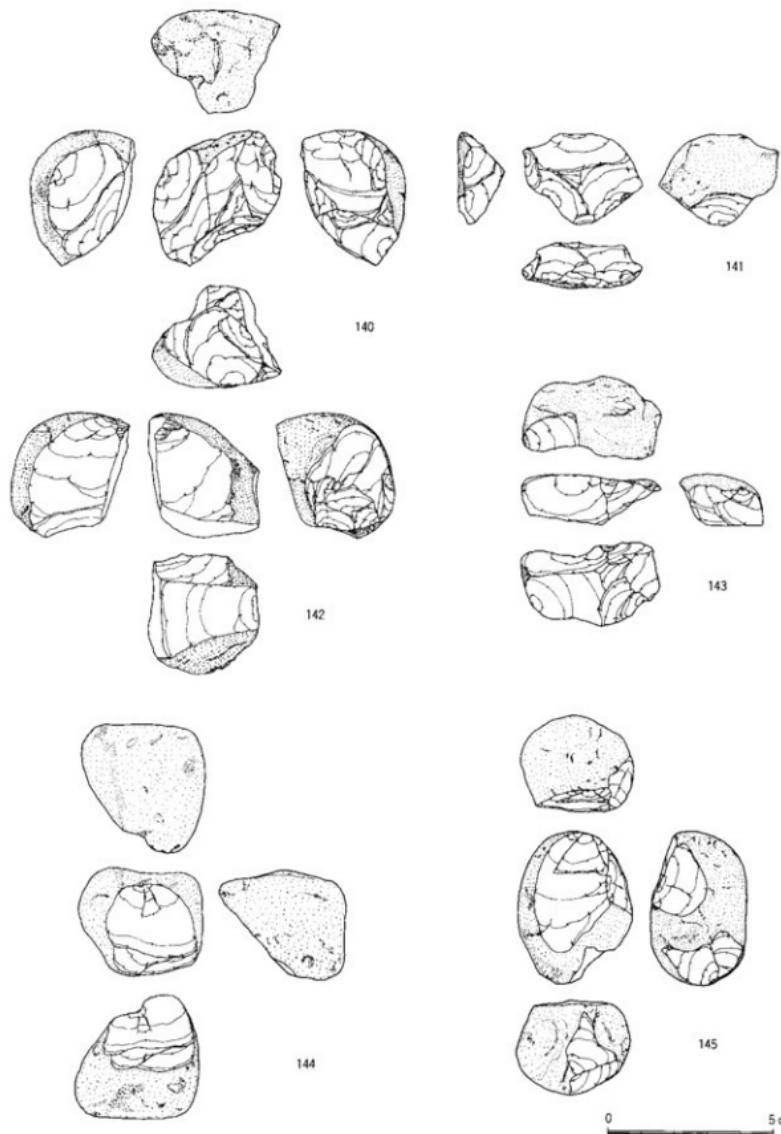
133



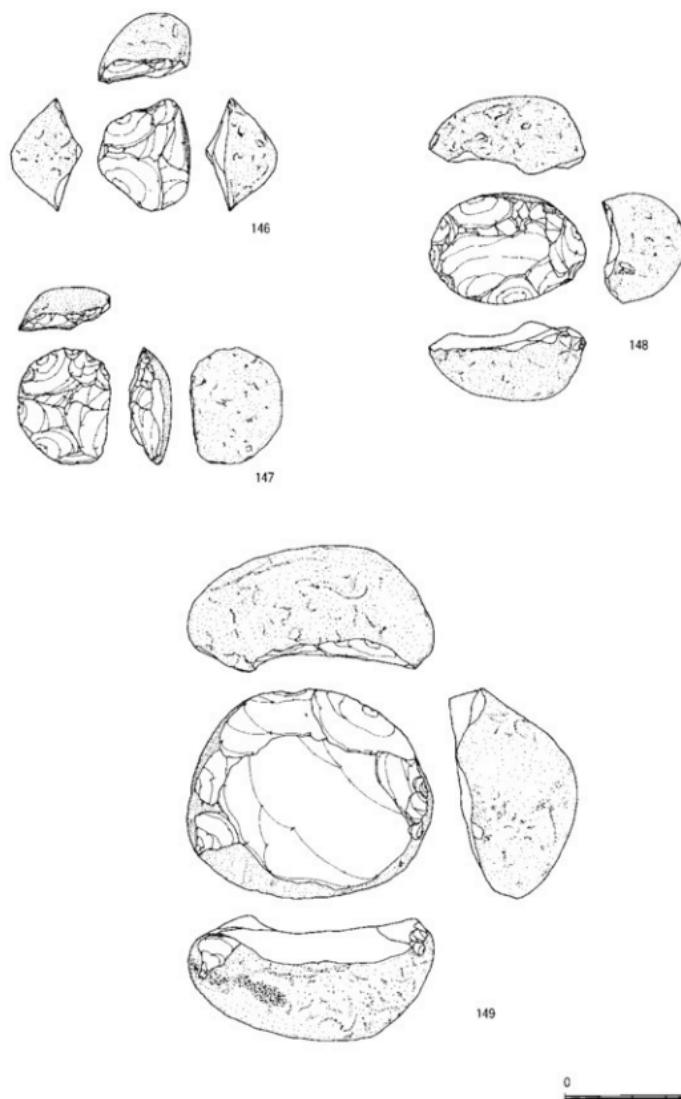
第15図 石核(2)



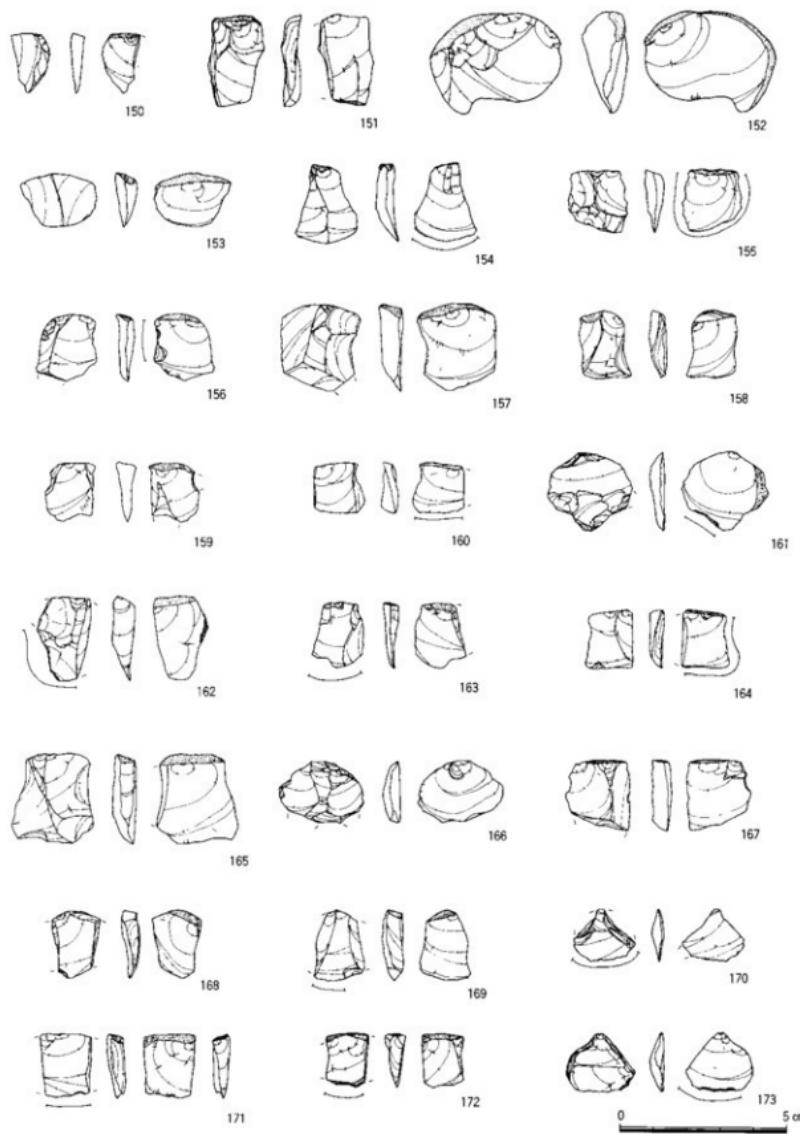
第16図 石核(3)



第17図 石核(4)



第18図 石核(5)



第19図 剥片(1)



第20図 剥片(2)

第4表 ナイフ形石器計測表

No	出土区	層位	石材	法量				形態	刃部角 (")	備考	辨団番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)				
1	C33	Ⅲ	チャート	37	13	6	2.3	片縁加工	30		6

第5表 石鎚計測表(1)

No	出土区	層位	石材	法量				形態	先端角 (")	扶溝 基長 (mm)	折損部位	辨団番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)					
1	2号墳石室	埋土	下呂石	25	13	5	0.9	凹基 無肩	50	2	脚部	7
2	N18	I	下呂石	(22)	(14)	4	1.1	凹基 無肩	—	2	先端部・脚部	8
3	A34	—	サヌカイト	18	10	4	0.4	凹基 無肩	40	1	脚部	9
4	1号窓	27	サヌカイト	(19)	17	4	0.8	凹基 無肩	—	2	先端部	10
5	C35	Ⅲ	サヌカイト	(18)	(14)	(3)	0.6	(凹基) 無肩	—	(2)	側縁部・脚部	
6	B33	Ⅲ	チャート	19	17	6	1.2	凹基 無肩	55	2		11
7	C33	Ⅲ	チャート	(12)	(13)	4	0.4	凹基 無肩	60	1	脚部	12
8	c 12	Ⅲ	チャート	(17)	(14)	3	0.6	凹基 無肩	—	—	先端部・脚部	13
9	c 12	Ⅲ	チャート	(23)	13	4	1	凹基 無肩	—	(2)	先端部	14
10	E33	Ⅲ	チャート	20	16	5	0.9	凹基 無肩	45	2		15
11	C35	Ⅲ	チャート	(19)	(16)	(6)	1.1	凹基 無肩	85	(2)	脚部	
12	2・3号窓Ⅱ 2	Ⅲ	チャート	(16)	(15)	(4)	0.8	凹基 無肩	—	(1)	先端部・脚部	16
13	d 10	Ⅲ	安山岩	(20)	(13)	3	0.5	凹基 無肩	35	(1)	脚部	17
14	D34	Ⅲ	安山岩	(14)	(13)	4	0.6	凹基 無肩	—	(1)	基部	
15	c 13	Ⅲ	下呂石	27	(18)	4	1.3	(凹基) 無肩	55	(3)	脚部	18
16	e 7	Ⅱ	下呂石	(33)	22	5	2.4	凹基 無肩	—	2	先端部	19
17	f 7	Ⅲ	下呂石	(17)	14	5	1	凹基 無肩	—	(1)	先端部・基部	20
18	C34	Ⅲ	頁岩	22	18	4	0.7	凹基 無肩	100	1		21
19	C33	Ⅱ	下呂石	22	15	4	0.9	凹基 有肩	60	2		22
20	e 8	Ⅱ	下呂石	17	11	4	0.6	凹基 有肩	95	2		23
21	c 7	Ⅲ	サヌカイト	(19)	(15)	(4)	0.6	(凹基)	—	(2)	側縁部・脚部	24
22	A34	Ⅲ	チャート	17	12	5	0.8	有脚 無肩	75	3		25
23	e 11	Ⅲ	チャート	(19)	(7)	(4)	0.4	有脚 無肩	—	(4)	先端部・脚部	26
24	c 9	Ⅲ	チャート	15	13	2	0.3	有脚 無肩	55	3		27
25	d 11	Ⅲ	チャート	(21)	22	2	0.7	有脚 無肩	—	4	先端部	28
26	a 12	Ⅱ	チャート	(23)	(12)	5	0.9	有脚 無肩	—	(5)	側縁部・脚部	29
27	e 11	Ⅲ	チャート	(12)	(12)	3	0.2	有脚(無肩)	—	4	先端部・脚部	30
28	h 10	Ⅲ	チャート	(14)	(14)	2	0.3	有脚(無肩)	—	6	先端部・脚部	31
29	d 8	Ⅲ	チャート	(13)	(14)	3	0.3	有脚 無肩	—	(3)	先端部・脚部	32
30	D34	Ⅲ	チャート	(18)	(14)	5	0.5	有脚 無肩	50	4	先端部・脚部	33
31	F30	Ⅲ	チャート	(13)	(13)	3	0.3	有脚 無肩	—	3	先端部・脚部	34
32	D34	Ⅲ	チャート	(15)	(15)	3	0.3	有脚 無肩	60	(4)	脚部	35
33	3号窓 SX01	埋土	安山岩	(16)	(12)	3	0.4	有脚 無肩	—	5	先端部・脚部	36
34	c 17	L	下呂石	19	11	2	0.2	有脚 無肩	35	5		37
35	d 11	Ⅲ	下呂石	(13)	(12)	3	0.3	(有脚) 無肩	75	(2)	脚部	38
36	c 13	Ⅲ	下呂石	(17)	14	4	0.7	有脚 無肩	—	4	先端部	
37	g 9	Ⅲ	下呂石	(16)	(8)	3	0.2	有脚 無肩	—	(3)	側縁部・脚部	39
38	c 11	Ⅲ	下呂石	(15)	12	2	0.3	有脚 無肩	—	3	先端部	40
39	b 14	Ⅲ	下呂石	(25)	(20)	4	1.3	有脚 無肩	—	(3)	先端部・脚部	41
40	b 14	Ⅲ	下呂石	(18)	(14)	4	0.6	有脚 無肩	55	(3)	脚部	42

第6表 石器計測表(2)

No	出土区	層位	石材	法量				形態	先端角(°)	抜深基長(mm)	折損部位	捕獲番号	
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	質量(g)						
41	e 15	III	下呂石	20	17	4	0.7	有脚無肩	60	3		43	
42	E 33	III	下呂石	(18)	(13)	5	0.4	(有脚)無肩	85	(1)	脚部	44	
43	e 15	III	下呂石	(19)	(20)	4	1	(有脚)無肩	—	(3)	先端部・舞部		
44	d 12	III	チャート	(12)	(10)	(2)	0.2	有脚	鋸歯縁	—	(4)	先端部・脚部	45
45	e 11	III	サヌカイト	17	(11)	3	0.3	有脚	有肩	95	7	脚部	46
46	d 11	III	サヌカイト	(16)	(14)	4	0.6	有脚	—	(4)	先端部・舞部		
47	c 10	III	チャート	(11)	(12)	3	0.3	(有脚)	—	(2)	先端部・脚部	47	
48	E 34	III	チャート	(19)	(19)	(8)	2.6	有脚	—	3	先端部	48	
49	d 10	III	下呂石	(21)	(9)	(5)	0.7	有脚	—	(4)	脚部・舞部		
50	c 13	III	チャート	28	17	5	1.3	有茎	無肩	40	5		49
51	f 14	II	下呂石	21	(10)	4	0.8	有茎	無肩	—	5	脚部	50
52	M 25	II	下呂石	(24)	16	5	1.3	有茎	無肩	45	(3)	茎部	51
53	f 14	I	チャート	30	(11)	5	1.5	有茎	有肩	—	6	脚部	52
54	g 12	III	下呂石	(27)	19	5	1.5	有茎	有肩	60	(2)	茎部	53
55	c 12	III	下呂石	(23)	(13)	5	0.9	有茎	有肩	—	(2)	茎部・茎端部・先端部	54
56	b 7	III	下呂石	(27)	15	6	1.7	有茎	有肩	50	(3)	茎部	55
57	g 14	II	下呂石	26	15	4	1.3	有茎	有肩	100	3		56
58	f 15	II	下呂石	19	13	5	0.8	有茎	有肩	95	5		57
59	g 14	I	チャート	(13)	(15)	5	0.7	有茎	—	—	6	先端部	
60	f 14	III	下呂石	(14)	13	5	0.5	有茎	—	7	先端部	58	
61	F 30	III	チャート	(20)	12	5	1.1	柳葉式	—	—	茎部	59	
62	E 33	III	下呂石	(19)	9	6	0.7	柳葉式	—	—	茎部	60	
63	E 33	III	下呂石	(15)	(11)	5	0.5	有肩	—	55	(1)	脚部	61
64	g 11	III	サヌカイト	(21)	(15)	3	0.8	無肩	—	(2)	先端部・脚部		
65	f 10	III	下呂石	(18)	(13)	4	0.5	無肩	—	—	脚部	62	
66	P 58	III	チャート	(10)	(12)	(4)	0.3	先端部のみ	—	—	—	63	
67	c 9	II	下呂石	20	12	5	0.7	未製品	—	—	—	64	
68	I 3	II	チャート	20	13	4	1	未製品	—	—	—		
69	2・3号窓V 1	23	チャート	20	21	9	3.5	未製品	—	—	—		
70	D 34	III	チャート	30	24	11	5.6	未製品	—	—	—	65	
71	D 34	III	チャート	27	21	9	5.7	未製品	—	—	—	66	
72	g 14	II	下呂石	27	18	6	2.2	未製品	—	—	—		
73	d 12	III	下呂石	24	23	9	5.2	未製品	—	—	—	67	
74	h 14	III	下呂石	28	28	10	6.4	未製品	—	—	—	68	
75	2・3号窓II 3	13L	石英	27	14	9	3.6	未製品	—	—	—		
76	b 8	III	チャート	23	20	5	1.8	未製品	—	—	—		
77	f 5	I	チャート	20	15	4	1.1	未製品	—	—	—		
78	h 12	III	チャート	20	20	7	2.5	未製品	—	—	—		
79	g 9	III	下呂石	30	19	8	4	未製品	—	—	—		
80	g 12	III	下呂石	23	12	5	1.2	未製品	—	—	—		
81	g 12	II	下呂石	27	17	8	2.9	未製品	—	—	—		
82	d 11	III	下呂石	14	11	5	0.6	未製品	—	—	—		

第7表 石錐計測表

No	出土区	層位	石材	法量				形態	先端角(°)	橢円 軸の 数	断面	備考	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)						
1	d 13	Ⅲ	下呂石	21	15	6	1.1	不定形	75	1	菱形		69
2	e 13	Ⅲ	下呂石	21	6	4	0.3	棒状	45	1	三角		70
3	f 14	Ⅲ	下呂石	16	7	4	0.2	棒状	80	1	三角		71
4	g 9	Ⅲ	チャート	39	26	14	9	不定形	65	1	三角		72
5	D34	Ⅲ	チャート	21	8	5	0.8	涙滴形	—	1	三角		73
6	D34	Ⅲ	チャート	22	9	7	1.2	涙滴形	75	1	三角		74
7	D34	Ⅲ	チャート	21	10	7	1	涙滴形	—	1	菱形		75

第8表 スクレイパー類計測表

No	出土区	層位	石材	法量				形態	備考	挿図番号	
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)				
1	c 12	Ⅲ	チャート	30	50	12	11.7	石匙	横型		76
2	b 12	Ⅲ	下呂石	41	14	6	2.9	石匙	縱型		77
3	g 9	Ⅲ	ホルンフェルス	51	57	17	55.9	削器			78
4	e 15	Ⅲ	チャート	47	15	7	4.9	削器			79
5	C33	Ⅲ	チャート	12	15	3	0.6	ノッチ			80
6	D34	Ⅲ	チャート	30	34	9	8.2	ノッチ			81
7	f 5	Ⅱ	チャート	32	22	10	5.1	ヘラ形			
8	d 11	Ⅲ	チャート	23	10	4	0.8	ヘラ形			
9	f 2	Ⅲ	チャート	33	24	10	6.9	ヘラ形			
10	E38	Ⅲ	チャート	28	17	4	2.1	ヘラ形			82
11	D34	Ⅲ	チャート	34	22	12	7.3	ヘラ形			83
12	D34	Ⅲ	チャート	26	17	6	3.7	ヘラ形			84
13	E34	Ⅲ	チャート	29	21	6	3.8	ヘラ形			
14	D34	Ⅲ	チャート	27	18	9	4.1	ヘラ形			85
15	E34	Ⅲ	チャート	32	30	7	3.9	ヘラ形			86
16	g 7	Ⅱ	チャート	19	22	7	3.2	欠損			87
17	耕土	耕土	チャート	34	23	12	10.2	欠損			88

第9表 楔形石器計測表

No	出土区	層位	石材	法量				備考	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)		
1	f 15	Ⅱ	チャート	26	24	16	11.5		89
2	C33	Ⅲ	チャート	20	21	9	3.5		90
3	2・3号窓V1	23	チャート	30	29	11	9.2		91

第10表 打製石斧計測表

No	出土区	層位	石材	法量				形態	備考	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)			
1	j 13	Ⅲ	結晶片岩	104	62	28	254	短冊型		92
2	d 9	Ⅲ	ホルンフェルス	74	58	17	74.9	(折損)		93

第11表 磨石・敲石・凹石類計測表

No	出土区	層位	石材	法量				機能部	備考	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)			
1	1号墳2号ブレ	—	砂岩	83	74	57	453.6	磨面5		94
2	c 10	Ⅲ	砂岩	148	85	64	1206	敷面2		95
3	f 12	Ⅲ	砂岩	54	81	40	268.1	凹面1・磨面1・敷面1	欠損	96
4	2号墳石室内	埋土	砂岩	68	59	49	222.1	敷面5		97
5	D33	Ⅲ	安山岩	44	65	45	174.5	磨面2	線条痕あり	98
6	D19	Ⅲ	安山岩	121	76	50	631	磨面3		
7	D34	Ⅲ	砂岩	89	49	46	286.5	敷面2・磨面3		99
8	—	排土	安山岩	88	77	60	621	磨面2		

第12表 砥石計測表

No	出土区	層位	石材	法量				機能部の数	備考	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)			
1	3号墳石室	再利用	泥岩	46	138	7	58.1	2		100
2	C 9	I	安山岩	29	86	23	99.3	3		101
3	D 8	L	流紋岩	158	122	115	2669	2		102
4	H21	Ⅲ	流紋岩	156	106	54	58.1	1	欠損	103
5	e 14	Ⅲ	砂岩	95	44	28	190.6	1		104

第13表 RF 計測表

No	出土区	層位	石材	法量				備考	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)		
1	f 13	Ⅲ	下呂石	24	17	7	1.8		
2	f 13	Ⅲ	下呂石	30	17	5	2.7		
3	d 9	Ⅲ	下呂石	28	28	8	5.1		105
4	g 13	Ⅲ	下呂石	28	24	11	5		
5	e 11	Ⅲ	チャート	19	17	7	1.7		106
6	e 13	Ⅲ	下呂石	25	20	6	2.7		
7	b 9	Ⅲ	チャート	27	12	6	1.9		
8	f 15	Ⅲ	下呂石	32	25	12	8.6		
9	f 15	Ⅲ	下呂石	31	25	8	4.3		
10	f 15	Ⅲ	下呂石	27	18	5	2.2		107
11	f 14	Ⅲ	下呂石	15	13	5	0.7		108
12	j 6	L	チャート	33	19	7	4.5		
13	g 15	Ⅲ	下呂石	21	11	4	0.7		
14	C33	Ⅲ	チャート	21	24	8	2.1		109
15	E34	Ⅲ	チャート	40	22	9	7.9		110
16	C30	Ⅲ	チャート	17	14	6	1.5		
17	D33	Ⅲ	チャート	13	11	3	0.4		
18	—	排土	チャート	28	26	8	6.3		

第14表 UF計測表

No	出土区	層位	石材	法量				備考	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)		
1	h 10	II	チャート	27	13	5	2		
2	h 4	III	チャート	59	24	14	14.5		111
3	f 12	III	チャート	30	25	8	5.8		
4	c 11	III	チャート	17	31	8	4.1		
5	b 11	III	チャート	43	20	15	13.3		
6	f 6	III	チャート	26	24	8	3.4		
7	g 9	III	チャート	35	18	7	3		
8	f 15	III	チャート	31	30	14	8.1	接合個体	112
9	C33	III	チャート	23	22	8	3.9		113
10	C33	III	チャート	32	30	14	10		114
11	C33	III	チャート	20	14	5	1.1		115
12	2・3号窓V1	23	チャート	27	13	5	2		
13	2・3号窓III	23	砂岩	45	58	14	22.7		116
14	D34	III	泥岩	57	32	13	22.3		
15	D34	III	チャート	27	25	11	7.4		
16	G31	III	チャート	32	22	10	6.7		
17	D33	III	チャート	28	29	10	6.2		
18	2・3号窓II	27	チャート	28	15	6	2		
19	D29	II	チャート	54	24	11	11.2		

第15表 石製品計測表

No	出土区	層位	石材	法量				備考	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)		
1	D34	III	パロワイライト	16	10	6	1.2		117
2	SK06	I	泥岩	12	11	6	1		118
3	SK05	I	泥岩	11	11	7	0.8		119
4	SK05	L	泥岩	10	7	3	0.2	欠損	120
5	SK05	L	泥岩	11	10	8	0.6		121

第16表 石核計測表(1)

No	出土区	層位	石材	法量				素材	形態	打面数	作業面数	自然面の有無	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)						
1	D34	III	チャート	24	25	8	4.9	剥片	両極	2	2	×	122
2	g 4	II	チャート	23	30	18	12.2	分割礫	両極	2	2	×	
3	E33	速	黒曜石	20	21	15	5.4	分割礫	両極	2	2	×	123
4	1号窓e 7	灰原	チャート	31	48	19	25.4	分割礫		1	1	○	124
5	d 8	II	チャート	44	45	32	54.9	亜角礫	両極	3	3	○	
6	f 11	III	チャート	23	35	23	23.7	分割礫		2	2	○	
7	e 11	III	チャート	29	28	31	25.4	分割礫		1	1	×	
8	g 10	III	チャート	26	25	12	7	剥片		1	1	○	
9	f 15	III	チャート	28	30	15	11.2	剥片		2	2	×	
10	f 9	III	チャート	16	14	9	1.6	分割礫		2	2	○	
11	F30	III	チャート	36	30	51	45	分割礫		2	2	○	
12	E30	III	チャート	34	57	36	88.3	亜角礫		1	3	○	

第17表 石核計測表(2)

No	出土区	層位	石材	法量				素材	形態	打面数	作業面数	自然面の有無	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)						
13	E 33	Ⅲ	チャート	31	27	15	13.4	剥片		2	2	○	
14	c 12	Ⅲ	泥岩	23	26	23	11.4	(分割礫)	残核	1	1	×	
15	f 14	Ⅲ	下呂石	14	18	12	3.6	剥片	I類	1	1	○	125
16	f 14	Ⅲ	下呂石	22	45	17	13.5	分割礫	I類	1	2	○	
17	d 11	Ⅲ	下呂石	29	44	17	16.5	剥片	I類	2	2	○	126
18	f 14	I	下呂石	21	32	11	5.1	剥片	I類	1	1	○	127
19	f 14	I	下呂石	15	26	15	4.8	分割礫	I類	1	3	○	
20	e 6	Ⅲ	下呂石	25	34	16	10	剥片	I類	1	1	○	
21	e 15	Ⅱ	下呂石	18	38	13	7.6	剥片	I類	1	1	○	
22	f 15	Ⅲ	下呂石	25	18	12	5.2	剥片	I類	2	1	○	
23	f 15	Ⅲ	下呂石	32	23	12	6.8	剥片	I類	1	2	○	
24	f 15	Ⅲ	下呂石	16	34	7	3.5	剥片	I類	2	2	○	
25	c 11	Ⅲ	下呂石	22	32	9	7.2	剥片	I類	1	1	○	
26	c 11	Ⅱ	下呂石	36	32	12	15	分割礫	II類	1	2	○	
27	c 10	Ⅲ	下呂石	26	37	28	22.2	分割礫	II類	1	1	○	128
28	f 13	Ⅲ	下呂石	32	35	17	22.1	分割礫	II類	1	1	○	
29	d 14	Ⅲ	下呂石	27	20	9	5.2	剥片	II類	1	2	○	
30	e 12	Ⅲ	下呂石	45	50	29	59.8	分割礫	II類	2	2	×	
31	f 14	Ⅲ	下呂石	46	34	20	31.8	分割礫	II類	2	2	○	129
32	c 10	Ⅲ	下呂石	49	27	12	13.7	分割礫	II類	3	2	○	
33	g 15	Ⅲ	下呂石	36	31	21	23.7	分割礫	II類	1	2	○	
34	g 15	Ⅱ	下呂石	24	15	11	3.7	剥片	II類	1	2	×	
35	g 15	Ⅲ	下呂石	37	28	12	10.5	分割礫	II類	2	2	×	
36	f 16	Ⅲ	下呂石	43	26	14	17.9	分割礫	II類	1	1	○	
37	g 15	Ⅲ	下呂石	37	34	19	23.2	分割礫	II類	2	2	○	
38	g 15	Ⅲ	下呂石	36	23	14	9.6	分割礫	II類	2	1	○	
39	g 15	Ⅲ	下呂石	24	27	30	17	分割礫	II類	4	4	○	130
40	f 15	Ⅲ	下呂石	36	21	16	10.4	分割礫	II類	1	1	○	
41	f 15	Ⅲ	下呂石	27	21	8	3.9	剥片	II類	2	2	×	
42	e 15	Ⅲ	下呂石	32	30	8	7	剥片	II類	1	2	○	131
43	e 14	Ⅱ	下呂石	31	16	8	3.7	剥片	II類	1	2	○	
44	c 14	Ⅲ	下呂石	18	32	29	14.6	分割礫	III類	1	3	○	
45	c 14	Ⅲ	下呂石	20	41	30	20.8	分割礫	III類	1	3	○	132
46	g 13	Ⅲ	下呂石	27	27	13	10.9	分割礫	III類	1	2	○	
47	f 12	Ⅲ	下呂石	26	32	26	17.4	分割礫	III類	1	3	○	
48	e 12	Ⅲ	下呂石	39	45	46	79.4	円礫	III類	1	4	○	133
49	f 14	Ⅲ	下呂石	21	33	20	11.2	分割礫	III類	1	3	○	
50	g 14	I	下呂石	16	35	25	13.4	分割礫	III類	1	3	○	
51	f 14	I	下呂石	17	38	28	16.6	分割礫	III類	1	3	○	134
52	c 9	Ⅲ	下呂石	22	31	26	14.7	分割礫	III類	1	3	○	
53	f 16	Ⅲ	下呂石	13	33	15	5.2	分割礫	III類	2	2	○	
54	f 15	Ⅲ	下呂石	21	36	20	12.8	分割礫	III類	3	3	○	135
55	g 15	Ⅲ	下呂石	19	33	24	12	分割礫	III類	1	4	○	
56	f 15	Ⅲ	下呂石	19	34	21	9.4	分割礫	III類	1	2	○	
57	g 14	Ⅲ	下呂石	17	36	344	15.6	分割礫	III類	1	3	○	
58	f 15	Ⅲ	下呂石	14	24	18	5.2	分割礫	III類	1	3	○	

第18表 石核計測表(3)

No	出土区	層位	石材	法量				素材	形態	打面数	作業面数	自然面の有無	押抜番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)						
59	e 14	Ⅲ	下呂石	22	33	20	9.5	分割離	Ⅲ類	1	2	○	
60	d 16	Ⅲ	下呂石	18	31	28	12.9	分割離	Ⅲ類	1	1	○	
61	e 15	Ⅲ	下呂石	32	47	20	28.2	分割離	Ⅲ類	1	2	○	
62	e 11	Ⅲ	下呂石	17	45	16	9.8	分割離	Ⅲ類	1	2	○	
63	E 32	Ⅲ	下呂石	29	27	14	8.4	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
64	c 11	Ⅲ	下呂石	26	26	18	11.7	分割離	Ⅳ類	1	3	○	
65	e 13	Ⅲ	下呂石	23	51	37	52.7	分割離	Ⅳ類	4	6	○	136
66	b 10	Ⅲ	下呂石	25	41	34	31.4	分割離	Ⅳ類	1	2	○	
67	c 11	Ⅲ	下呂石	38	31	26	34.3	分割離	Ⅳ類	4	4	○	137
68	h 9	Ⅲ	下呂石	30	40	27	45.1	分割離	Ⅳ類	3	2	○	
69	d 10	Ⅲ	下呂石	34	23	17	14.7	分割離	Ⅳ類	3	3	○	
70	e 14	Ⅲ	下呂石	31	38	20	23.4	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
71	g 13	Ⅲ	下呂石	31	42	24	31.5	分割離	Ⅳ類	3	2	○	
72	g 13	Ⅲ	下呂石	20	33	35	23	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
73	g 13	Ⅲ	下呂石	38	24	16	10.7	分割離	Ⅳ類	—	4	○	
74	g 13	Ⅲ	下呂石	27	39	19	22.5	分割離	Ⅳ類	3	3	○	
75	g 13	Ⅲ	下呂石	28	23	16	12.8	分割離	Ⅳ類	1	1	○	
76	f 13	Ⅲ	下呂石	29	24	15	11	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
77	d 11	Ⅲ	下呂石	24	51	16	22.1	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
78	e 12	Ⅲ	下呂石	31	34	17	16.5	分割離	Ⅳ類	3	2	○	
79	e 13	Ⅲ	下呂石	49	35	43	90.2	分割離	Ⅳ類	4	3	○	
80	e 13	Ⅲ	下呂石	32	36	20	18.9	分割離	Ⅳ類	4	2	○	138
81	e 13	Ⅲ	下呂石	20	48	22	26.3	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
82	e 13	Ⅲ	下呂石	31	30	17	13.6	分割離	Ⅳ類	4	3	○	139
83	e 13	Ⅲ	下呂石	17	20	25	7	分割離	Ⅳ類	3	4	○	
84	f 14	Ⅲ	下呂石	30	40	30	35	分割離	Ⅳ類	3	3	○	
85	f 14	Ⅲ	下呂石	35	25	17	17.2	分割離	Ⅳ類	2	1	○	
86	f 14	Ⅲ	下呂石	46	22	20	20.6	分割離	Ⅳ類	3	2	○	
87	f 14	I	下呂石	23	40	22	19.3	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
88	f 14	I	下呂石	17	23	30	10.8	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
89	d 9	Ⅲ	下呂石	44	33	33	42.4	分割離	Ⅳ類	2	3	○	
90	d 10	Ⅲ	下呂石	28	43	14	13.5	分割離	Ⅳ類	3	3	○	
91	f 14	II	下呂石	45	31	19	30.7	分割離	Ⅳ類	3	2	○	
92	g 14	II	下呂石	41	39	32	41	分割離	Ⅳ類	4	3	○	140
93	f 15	Ⅲ	下呂石	28	36	14	10.5	分割離	Ⅳ類	2	2	○	141
94	g 15	Ⅲ	下呂石	25	27	13	11.1	分割離	Ⅳ類	3	3	○	
95	g 15	Ⅲ	下呂石	23	41	17	15	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
96	f 15	Ⅲ	下呂石	34	31	15	19	分割離	Ⅳ類	3	3	○	
97	f 15	Ⅲ	下呂石	25	36	27	21.7	分割離	Ⅳ類	2	4	○	
98	f 15	Ⅲ	下呂石	32	28	13	11.7	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
99	f 15	Ⅲ	下呂石	33	48	25	41.7	分割離	Ⅳ類	4	3	○	
100	d 13	Ⅲ	下呂石	38	33	36	47.8	分割離	Ⅳ類	4	4	○	142
101	f 15	Ⅲ	下呂石	25	18	12	4.1	分割離	Ⅳ類	2	2	×	
102	e 14	Ⅲ	下呂石	32	36	26	25.6	分割離	Ⅳ類	2	2	○	
103	f 16	Ⅲ	下呂石	16	42	25	15.1	分割離	Ⅳ類	4	4	○	143
104	f 15	Ⅲ	下呂石	42	24	29	30.5	分割離	Ⅳ類	3	2	○	

第19表 石核計測表(4)

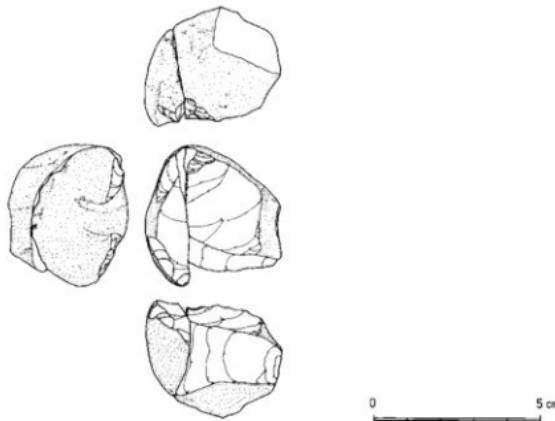
No	出土区	層位	石材	法量				素材	形態	打面数	作業面自然面 数の有無	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)					
105	b 15	III	下呂石	36	39	13	19.1	分割礫	IV類	4	2	○
106	d 10	III	下呂石	29	30	15	11.8	分割礫	IV類	2	2	○
107	d 12	III	下呂石	33	37	38	50.1	円礫	V類	1	1	○ 144
108	a 10	III	下呂石	41	29	41	56.4	円礫	V類	1	1	○
109	d 11	III	下呂石	46	35	29	52.8	円礫	V類	3	3	○ 145
110	i 6	III	下呂石	37	32	34	37	円礫	V類	1	1	○
111	a 8	III	下呂石	42	38	28	47.4	円礫	V類	3	2	○
112	A 8	L	下呂石	44	39	24	51.4	円礫	V類	1	1	○
113	h 14	表探	下呂石	26	40	18	20.7	分割礫	VI類	3	1	○
114	f 11	III	下呂石	32	28	18	14.9	分割礫	VI類	3	1	○
115	f 14	III	下呂石	34	27	21	15.9	分割礫	VI類	2	1	○ 146
116	e 13	III	下呂石	23	36	21	18	分割礫	VI類	1	1	○
117	g 9	III	下呂石	26	41	18	18.2	分割礫	VI類	2	1	○
118	e 11	III	下呂石	24	37	28	28.7	分割礫	VI類	2	1	○
119	d 14	III	下呂石	35	32	13	11.3	分割礫	VI類	3	1	○ 147
120	g 8	II	下呂石	29	43	26	33.9	分割礫	VI類	2	1	○
121	e 13	III	下呂石	41	30	24	25.7	分割礫	VI類	3	1	○
122	f 14	III	下呂石	33	24	14	11.1	分割礫	VI類	1	1	○
123	c 8	III	下呂石	33	47	24	38.6	分割礫	VI類	3	1	○ 148
124	f 14	II	下呂石	37	30	29	25.6	分割礫	VI類	3	2	○
125	f 15	III	下呂石	39	25	16	14.7	分割礫	VI類	3	1	○
126	f 15	III	下呂石	29	21	15	9.3	分割礫	VI類	3	2	○
127	e 14	III	下呂石	63	73	38	168.7	分割礫	VI類	1	1	○ 149

第20表 剥片計測表(1)

No	出土区	層位	石材	法量				打面 の 有無	自然 面の 有無	備考	挿図番号	
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)					
1	f 14	III	下呂石	18	11	4	0.7	自然面	×	○	打点割れ	150
2	f 15	III	下呂石	28	17	6	2.4	自然面	×	○		151
3	e 15	III	下呂石	30	39	14	10	自然面	○	○		152
4	c 11	II	下呂石	16	23	6	1.9	自然面	○	○		153
5	f 14	III	下呂石	24	19	7	1.7	自然面	○	○		154
6	e 13	III	下呂石	19	18	6	1.4	調整面	○	×		155
7	g 12	III	下呂石	20	18	7	1.5	自然面	○	○		156
8	f 7	III	下呂石	26	24	7	4	自然面	○	○		157
9	f 15	III	下呂石	20	16	5	1.6	調整面	○	○		158
10	f 15	III	下呂石	18	15	5	1.2	自然面	○	○		159
11	d 11	III	下呂石	15	16	4	0.7	調整面	○	×	打点割れ	160
12	f 13	III	下呂石	24	26	4	1.7	線状	○	○		161
13	f 13	III	下呂石	26	16	8	2.2	自然面	○	○	打点割れ	162
14	f 14	III	下呂石	20	16	5	1	自然面	○	○	打点割れ	163
15	f 15	III	下呂石	18	14	5	1.1	自然面	○	○	打点割れ	164
16	e 15	III	下呂石	27	24	8	5.2	自然面	○	○		165
17	f 14	I	下呂石	18	25	6	2.1	線状	○	×		166
18	g 4	I	下呂石	21	19	6	2.4	自然面	○	○		167

第21表 剥片計測表(2)

No	出土区	層位	石材	法量				打面	打点の有無	自然面の有無	備考	挿図番号
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)					
19	d 12	III	下呂石	20	15	5	1.4	自然面	○	○	打点割れ	168
20	e 14	III	下呂石	21	15	7	1.8	自然面	×	○		169
21	e 13	III	下呂石	16	18	3	0.5	—	×	×	微細な剥離痕あり	170
22	f 14	III	下呂石	20	15	6	1.5	自然面	○	○	打点割れ	171
23	f 14	II	下呂石	17	13	6	1.3	自然面	○	○	打点割れ	172
24	f 14	II	下呂石	18	20	5	1.1	線状	○	○	微細な剥離痕あり	173
25	f 14	II	下呂石	21	18	5	1.1	自然面	○	○	打点割れ	174
26	f 15	III	下呂石	22	18	5	1.4	—	×	×		175
27	f 12	III	下呂石	15	15	5	1	自然面	○	○		176
28	c 11	II	下呂石	26	26	11	4.6	自然面	○	○	打点割れ	177
29	f 14	II	下呂石	29	16	8	3.6	自然面	○	○	打点割れ	178
30	f 13	III	下呂石	19	12	5	0.9	自然面	○	○	打点割れ	179
31	j 9	III	下呂石	22	16	7	1.5	自然面	○	○	打点割れ	180
32	f 13	III	下呂石	20	24	6	1.6	自然面	○	○		181
33	g 14	III	下呂石	23	14	4	1.2	自然面	○	○	打点割れ	182
34	h 14	III	下呂石	23	28	8	2.3	調整面	×	○		183
35	f 15	III	下呂石	31	17	7	3	調整面	×	○		184
36	f 14	III	下呂石	26	18	6	2.7	自然面	○	○		185
37	f 15	II	下呂石	22	19	6	2	自然面	○	○		186
38	h 15	III	下呂石	35	23	9	7.1	自然面	○	○		187
39	g 14	II	下呂石	38	18	11	6	—	○	○		188
40	f 12	III	下呂石	38	18	7	6.1	自然面	○	○		189
41	d 14	III	下呂石	34	22	9	8.2	自然面	○	○		190
42	d 16	III	下呂石	42	29	13	13.8	自然面	○	○	種図番号142と重合	191



第21図 石核（142）と剥片（191）との接合資料



第22図 東埋没谷 石器・弥生土器出土位置図

第2節 古墳時代前期の遺構と遺物

遺物の出土状況には疑問が残るが、古墳時代前期に相当する遺構としてSB01・02及びSX4基を確認した（第23図）。SB01・02は中央埋没谷が開口する東側にあり、調査区南端に位置する。SX01～03は東埋没谷の北端にあり、壁溝らしき細長い溝がコの字状にめぐる状況を検出したが、壁・柱穴などをまったく確認できず、遺物が集中していたためにSXとしたものである。

遺構

SB01（第25図）

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.6m・短軸2.7mを測る。主軸方向はN-54°-Wを向く。炉跡は検出されなかつたが、その平面形から住居跡と判断した。埋土は上層にはII層がみられ、下層には黒褐色土が堆積していた。壁高は北壁側で10～20cm程度残存するが、南壁側ではほとんど認められず、壁面はコの字形にめぐる状況を呈す。ピットを床面のほぼ四隅で確認したが、その深度は10cm程度と浅く、柱穴にするにはやや浅く疑問が残る。床面には貼床などの施設はなく、硬化面も認められなかつた。埋土中から遺物はまったく出土しなかつたが、周囲の出土遺物の状況と隣接するSB02から古墳時代前期の住居とした。

SB02（第26図）

SB01の西側に隣接し、平面形は隅丸長方形を呈す。規模は長軸4.2m・短軸3.62mを測る。主軸方向はN-52°-W。壁高は最大で40cm程度で、北側から北西隅にかけてが最もよく残存し、基盤である砂岩の岩盤を掘り下げている。ピットはP1～P6を検出した。その位置が北壁と東壁沿いに偏り、柱穴らしき配置を認め得るものではなかつた。ピットの深度も様々で、P4が約50cmと深い以外いずれも10cm～20cm程度と浅い。P3は断面が斜めで根穴の可能性がある。北壁沿いには壁溝が2条認められる。北壁が立ち上がるすぐ際にある溝は、北壁に沿って伸び、東西両壁面まではめぐらない。深さは5cm弱と非常に浅い。もう1条の壁溝は北壁が立ち上がる部位よりわずか10cm程度南側に離れて位置する。北東隅から北西隅をまわって、一部西壁側までめぐる。深さは10cm弱程度である。この壁溝がめぐる北東隅付近は周囲の床面より5cm程度の高まりが認められる。床面に貼床・炉跡は認められなかつた。

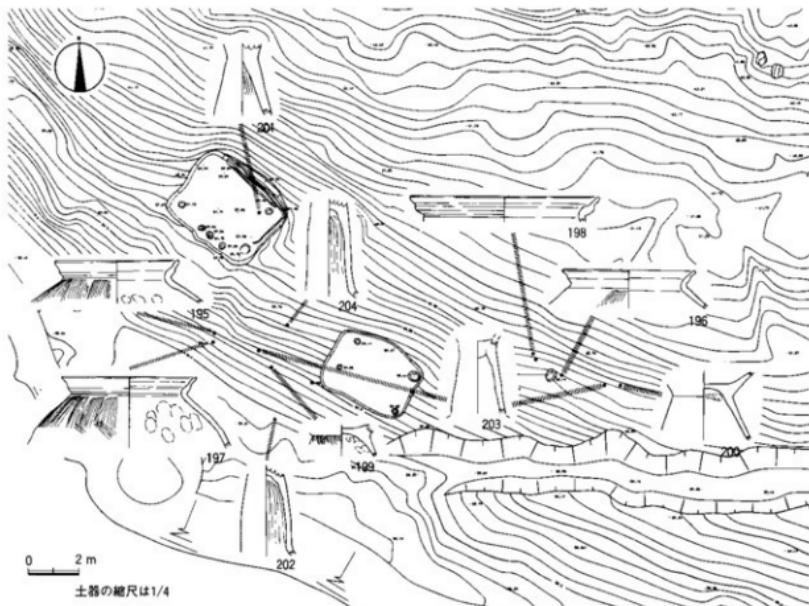
遺物はP1・P2及び埋土からわずかに土師器の細片が出土した。P1から出土した土器片はS字甕D類の口縁部片と考えられる。図示した201Hは埋土から出土したもので高坏の脚部である。以上の遺物は松河戸式に相当するもので、SB02も松河戸式に属する可能性が高い。

SX01・02・03（第27図）

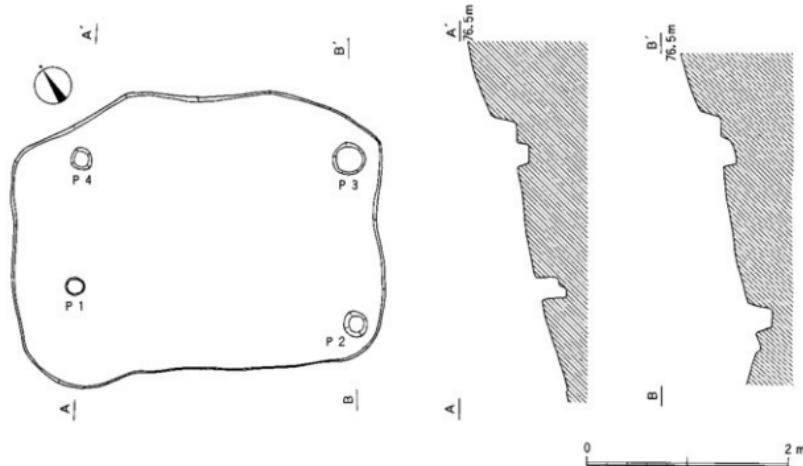
一辺が3m程度、深さ10cm弱の溝がコ字形にめぐる状況を東埋没谷北端で検出し、住居跡ではないかと考えたが、柱穴・炉跡をまったく確認できなかつたため、SXとした。本遺構に確実に伴う遺物の抽出は不可能だが、東埋没谷において古墳時代前期の遺物は本遺構の周囲でしか認められなかつた。このことから本遺構は古墳時代前期に属する可能性が最も高いとみられるため、本章で述べることと



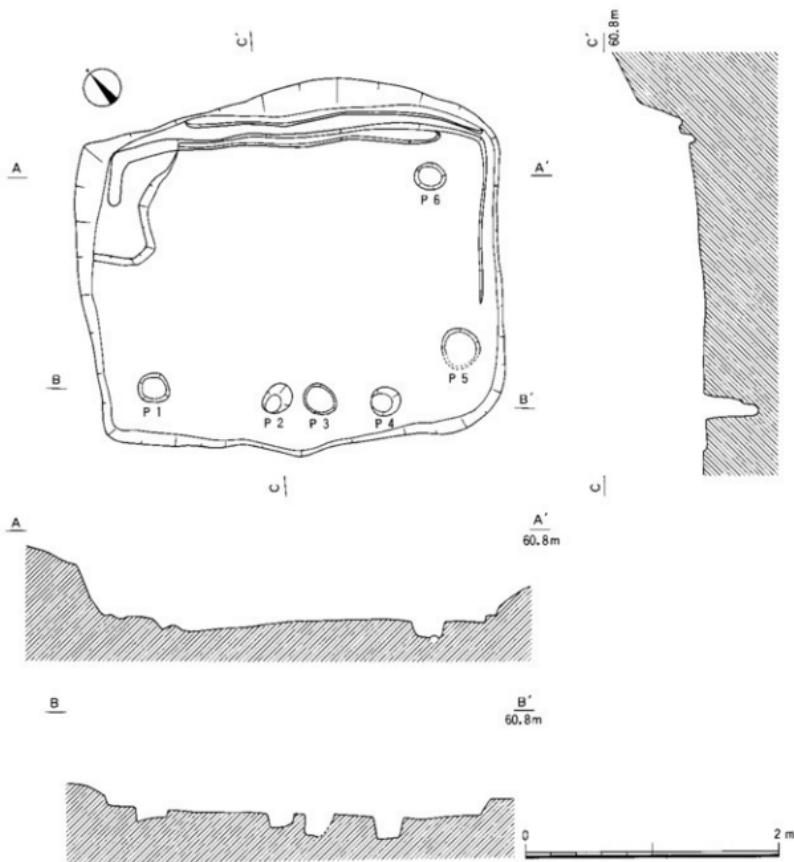
第23図 古墳時代前期の遺構



第24図 SB01・SB02周辺出土遺物位置図



第25図 SB01平面図・断面図



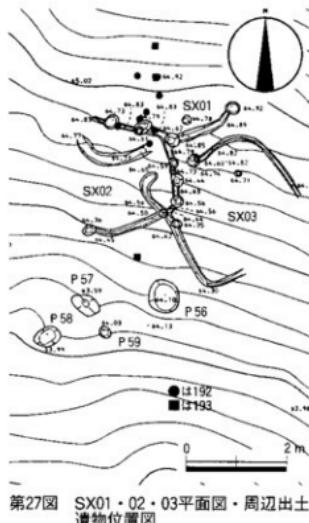
第26図 SB02平面図・断面図

する。

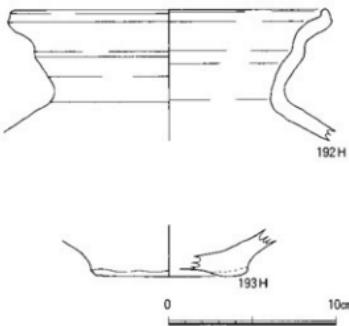
SX01は3m程度南北方向に溝が伸びるが、SX02に切られる。SX02はコの字形の溝で西側で溝が途切れる。SX03もコの字状に溝が認められる。北側をSX02に切られ、南側では溝は自然地形に連なる。遺物はSX01の北側部分に集中して認められ、破片で107点の出土をみた。おそらく同一個体と思われる。接合の結果、2点を図示した（第28図）。

SX12（第29図）

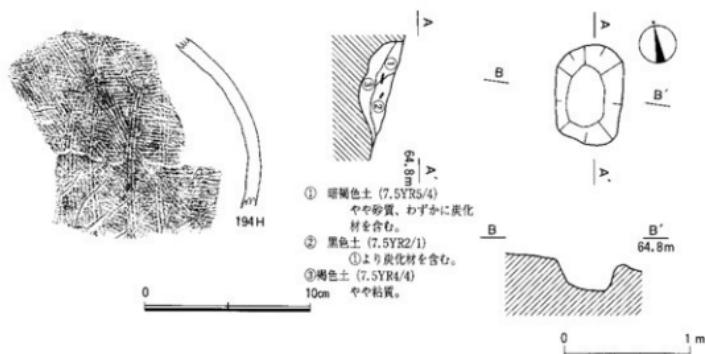
中央埋没谷の中央やや西よりで確認した。埋土から出土した壺体部片から古墳時代前期の遺構と判



第27図 SX01・02・03平面図・周辺出土遺物位置図



第28図 SX01・02・03周辺出土遺物



第29図 SX12出土遺物・平面図・断面図

断した。平面形は楕円形で、長軸0.68m・短軸0.57mを測る。主軸はN-78°-Eを向ける。深さは0.14m程度で、壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。埋土の上層は炭化材混じりの黒褐色土、下層は炭化材があまり混じらない褐色土の2種類が認められた。遺物は上層より出土している。

遺物（第28～30図）

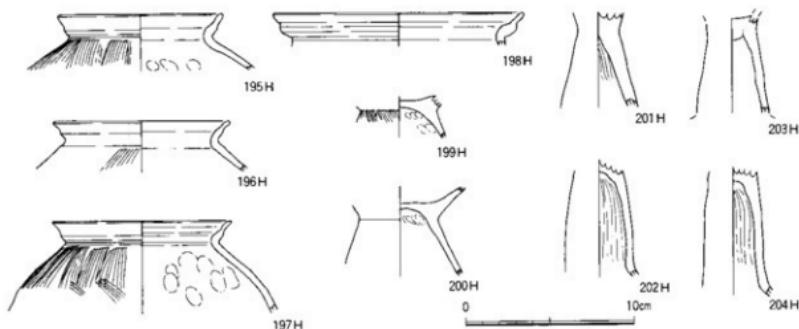
SB01・SB02・SX01～03の周囲からは古墳時代前期の土師器が出土した。前記の遺構に伴う遺物は

ほとんど認められないが、前記の遺構と関連性が高く、かつ本遺跡中で当該期の遺物は少なく貴重な資料と考えられるため、ここで紹介する。

SB02の埋土から出土した201Hは屈折脚の高坏脚部。わずかに坏部との接合部が残存する。摩耗が激しく、調整は観察不可能。色調はにぶい黄橙色を呈す。195H～198HはS字壺の口縁部片。いずれも一段目と二段目の屈曲があまく、頸部には沈線状の頸部調整が認められる。赤塚分類のS字壺D類に相当する。195Hは口縁部が直立気味で端部を丸くおさめる。口径10.6cm。色調はにぶい橙色を呈す。197Hは口縁部から体部まで残存する。体部の横方向のハケ目は認められず、相反する斜方向の羽状ハケ目が認められる。端部はやや尖り気味である。口径は10.6cmで、色調は灰黄褐色を呈する。198Hは器壁がやや厚く、端部を尖り気味におさめる。口径は15cm。色調はにぶい黄橙色。196Hは口径10.4cmを測る資料で先の3つの資料と比較するとかなり口縁部の屈曲が退化している。体部外面にはわずかに斜方向のハケ目が観察される。199H・200HはS字壺の脚台部。200Hは体部との接合部にわずかにハケ目の痕跡を残す以外は摩耗が激しく、調整を観察することができない。色調は黄色を呈す。199Hは脚部外面に単斜方向の粗いハケ目が認められる。色調は橙色。202H・203Hはいずれも屈折脚の高坏の脚部で、器面は摩耗が著しく調整の観察は不可能である。202Hはやや長さが短く膨らみ気味である。色調は橙色を呈す。203Hは色調が明黄褐色を呈し、焼成がやや悪い資料である。以上のSB01・02の周囲から出土した遺物の大半はS字壺D類と屈折脚の高坏の組み合わせであり、松戸戸I式に比定することが可能である。

SX01周囲から出土した192H・193Hは有段口縁の壺で同一個体と考えられる。口縁部の192Hは口縁部がくの字に外反しながら立ち上がり、一端屈曲してから端部にいたる。端部は上方につまみ上げられている。調整はナデ調整と思われるが、細かい観察は不可能である。口径は18.7cmを測り、色調は橙色を呈す。193Hは底径8.7cmの底部片で底部外面に粘土を貼付しているのが認められる。色調は橙色。

SX12から出土した194Hは壺の体部片。体部外面には不定方向のハケ目が残り、一部煤痕が認められる。内面はケズリ調整。色調はにぶい黄橙色を呈す。



第30図 SB01・02周辺出土遺物

第3節 古 墳 群

確認された古墳はすべて後期古墳で合計14基である。大半が尾根の頂上部に立地し、東尾根に1～3号墳の計3基、中央尾根に6～12・15号墳の計8基、西尾根に13・14号墳の計2基が位置する。残る1基の4号墳は東埋没谷の北奥にあり、分布調査での予想とは異なる位置で確認した。5号墳は調査の結果、古墳ではなく欠番とした。なお、15号墳は分布調査での地点には古墳ではなく、新たに確認した中央尾根上の古墳を15号墳とした。

出土遺物は須恵器・鉄器類で、その残存状況は原位置を保っておらず破片となって出土する状態が大半であった。その要因はほとんどの古墳で中世の遺物（山茶碗）が出土しており、中世期に古墳構築時の状況を変容させているものと推測している。なお、こうした中世の遺物は須恵器などと出土レベルが近接するが、比較的一括りが高いこと及びわずかに出土レベルに差異が存することを重視し、盗掘ではなく何らかの理由で当該期の遺物を古墳内に残した可能性が強いと判断される。このため、中世の遺物出土状況については再利用面として以下に記述する。

出土遺物のうち大半を占める須恵器坏身・坏蓋について次のように仮に分類して述べることにする。

坏A

受部が突出して、そこから口縁部が内傾して立ち上がるも。底部はなだらかな弧をえがき、外底面はヘラ切り未調整のものが多い。蓋Aとセットとなる。

坏B

口縁部が底部から屈折してわずかに外方に立ち上がり、その全形が箱形にちかいもの。底部の形状は様々で、弧状を呈するものや平底にちかいものも存する。蓋Bとセットとなる。

坏C

有高台の坏身。平底の底部から口縁部は強く屈折して直立気味に立ち上がるも。蓋Cとセットとなる。なお、坏部の形状が同じで、無高台のものも便宜的に本類に含めた。

蓋A

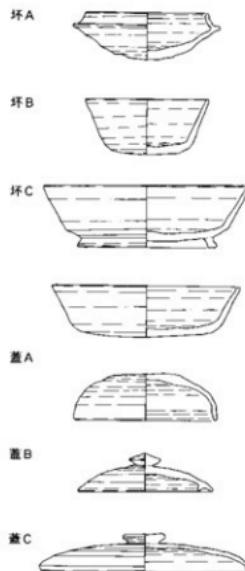
坏Aとセットとなる資料で口縁部と天井部との境の稜は痕跡的なものとなり、なだらかな弧状の天井部から弱く屈折して口縁部にいたる形態を示す。天井部のヘラ削り調整は認められない。

蓋B

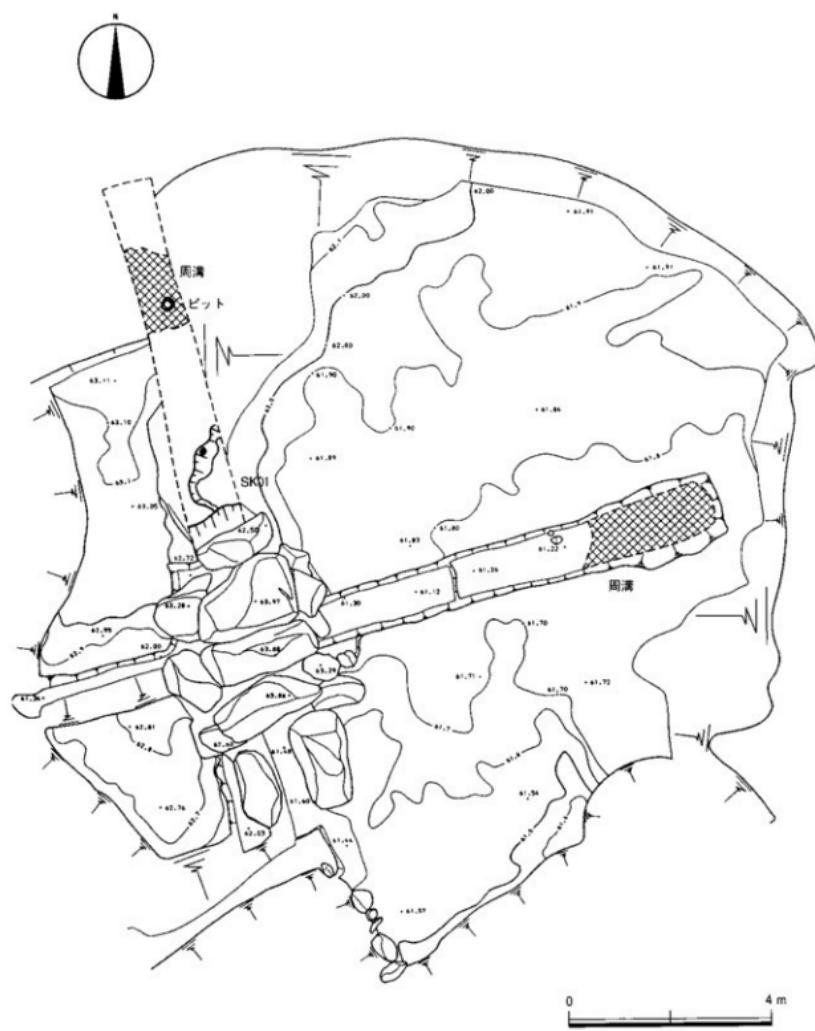
宝珠形紐をもち、口縁内面に返りが認められる蓋。坏Bとセットとなる。

蓋C

扁平な擬宝珠形紐をもち、口縁内面には返りがなく端部を



第31図 古墳出土須恵器分類図



第32図 1号墳平面図

下方に折り曲げる。天井部にはヘラ削り調整が認められ、坏Cとセットとなる。

1号墳（第32図）

東尾根上にあり本古墳群中では最東南端に位置する。すでに石室は開口し、墳丘の大半は東側では畠地、西側では宅地造成によって削平されていた。その結果、石室はむき出しの状態下にあり、原形は大きく改変されていた。本来は他の古墳と同様、南斜面に立地していたと考えられる。石室はS-西-Eに向かって開口する。構築時期は出土須恵器から7世紀後半と考えられる。

外部構造

墳丘（第33図）

墳丘の北側・東西にトレンチを設定し、その断面を観察した。墳丘の大半が失われているため詳細な状況は不明だが、地山を削平したと考えられる赤褐色土とその赤褐色土に炭化物が混じる土を交互に積み重ねて墳丘を築成していることが観察された。最大の墳丘残存高は墳丘西側で約50cm程度である。墳裾は北側と東側で確認することができた。北側では半径5.08m、東側では半径6.72mを測り、墳丘は不整な楕円形を呈すると推測される。東西トレンチでは一部、炭化物を含む旧表土が認められた。西側では深さ40cm程度の掘り方を検出した。掘り方は北トレンチでも確認でき、おそらくコの字状に旧地形を掘り下げて、石室の最下段の石材を設営したと考えられる。

周溝（第32図）

周溝は調査の制約上、トレンチ内ののみの確認のため詳細は不明であるが、北トレンチで良好に観察することができた。幅は2.24mで、深さは10cm程度と浅い。東トレンチでも周溝の一部を検出したが、東端の立ち上がりを確認することはできなかった。東トレンチの周溝は深さ60cm程度とかなり深い。平面形はおそらく他の古墳と同様、石室の背面を三日月状にめぐると思われる。

その他（第32図）

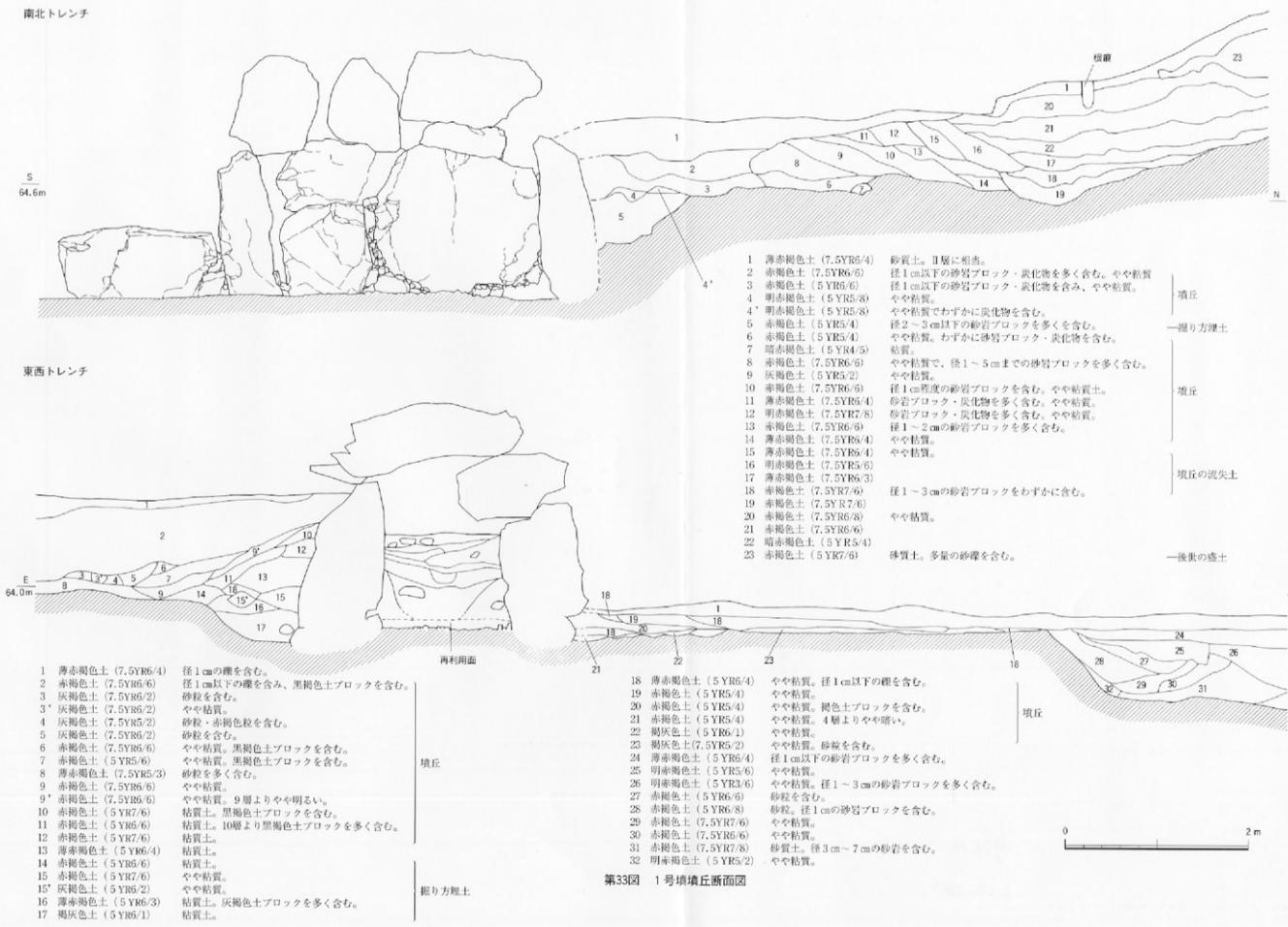
北トレンチの周溝内において、周溝を掘り込んだ直径20cm強・深さ5cmの浅いピットを検出しが、出土遺物がなく所属時期は特定できなかった。また、北トレンチの奥壁側では土坑を検出した（SK01）。この土坑は南半分を石室の掘り方によって削平されていることから、1号墳築造以前の遺構であることが判明した。深さは30cm程度である。しかし、トレンチのみの調査のため、その詳細を確認することはできなかった。床面ちかくからは不明鉄製品が出土した。

出土した413は刃部が認められるため刀状の製品と考えられるが、全形が分からず判然としない。銹化による腐食が著しく、取り上げ時にかなりの破損を伴った。このため、図示した資料も現地での状況そのままとは言い難く、推定の復元である。切先は認められるが、やや丸みをおび刃部が揃わない。関部は片関状を呈するが、折損のため明瞭ではなく刃部が弧状を呈することもあって関部の形状については判断できない。図上における全長は24.2cmで、刃部長は12.3cm、茎部長は11.9cmを測る。身部の厚さは刃部が0.2cm前後で、茎部が0.3cm前後とやや厚くなる。

内部構造（第34図）

石室

現状で全長5.39mを測る横穴式石室で、左右に玄門立柱石をもついわゆる擬似両袖式である。羨道部が大きく改変され、南側に隣接する道路によって一部石材が持ち去られた可能性が強い。



また、右羨道部の石材も極端に内側に偏り、何らかの理由により二次的に移動したものと推定される。

玄室は残存状況が良好で、天井石が3枚架構されていた。天井石の大きさは奥壁側から、縦横の大きさが $1.52\text{m} \times 2.01\text{m}$ ・ $0.83\text{m} \times 2.32\text{m}$ ・ $0.88\text{m} \times 2.3\text{m}$ である。奥壁との接点はなく充填された石材はすでに持ち去されていた。奥壁は幅 1.4m ・高さ 1.7m の大きな石材でいわゆる鏡石を呈している。主軸長は 3.09m で左右の玄門立柱石が内側に 15cm 程度突出し、羨道部との区画は明らかである。玄室は最大幅は 1.56m である。側壁に目地は認められず、奥壁側の石材は大型でほとんど1枚の石材のみで側壁を構成し、立柱石側の石材は2段積みとなる。断面形は使用石材が大型である関係か持ち送りではなく、ほぼ縦長の長方形を示す。天井までの高さは奥壁側から徐々に下がり約 1.8m ～ 1.5m の幅がある。床面は拳大の石材が散在する状況を示し、石材が認められない箇所もあり、良好な残存状況ではない。

玄門立柱石は左右ともほぼ同様の形状を示し、大きな縦長の1枚の石材が配置される。その高さは約 1.5m でほぼ天井石に届く格好を呈す。玄門の幅は 50cm 強である。

羨道部は前述したように遺存状況が良くない。現状では左右側壁にそれぞれ横長の1枚の石材が配置されているが、その長さや壁高については疑問が残る。右側壁は約 70cm も玄室平面形の右側壁延長上より内側に入り込み、本来の形状を失っている。築造時は左側壁とほぼ同様に玄室側壁延長上に配置されていたと推測される。その場合、羨道幅は 1.3m 強と考えられる。

遺物出土状況（第35図上段）

良好な遺物は平瓶1点（205S）・壺B2点（206S・207S）のみで、その他は須恵器の小片がわずかに出土した。平瓶を除いては玄室奥壁側から多く出土し、その状況に偏りがみられるが、原位置は保っていない。その理由は後述する上部の遺構による擾乱によるものと思われる。平瓶は玄室内の右袖部ちかくで出土したが、大きな4枚の石材にコの字形に囲まれた中に据えられていた。この点から平瓶は埋葬に伴う遺物ではなく、埋葬後の祭祀等の行為に伴う遺物の可能性が高い。

再利用面（第35図下段）

石室の床面より約 $5\sim 10\text{cm}$ 程度上位のレベルで細かな炭化材の広がりを確認した。その広がりは玄室前半部と開口部に集中する。また、同じ面で $10\text{cm}\sim 30\text{cm}$ 大の礫も検出したが床面全面に及ぶものではなく、おそらく側壁の石材が転落したものだと考えられる。遺物は須恵器が出土し、前述の壺身2点・平瓶1点（205S～207S）もこの段階で検出した。これらの須恵器は床面から混入したもので所属時期を示すものとは考えにくく、この面の所属時期を明らかにする遺物は皆無である。しかし、何らかの意図があって古墳を再利用した可能性が高いことから、あえて言及することにした。なお、玄室の埋土からは山茶碗の破片が1点出土している。

遺物（第164図）

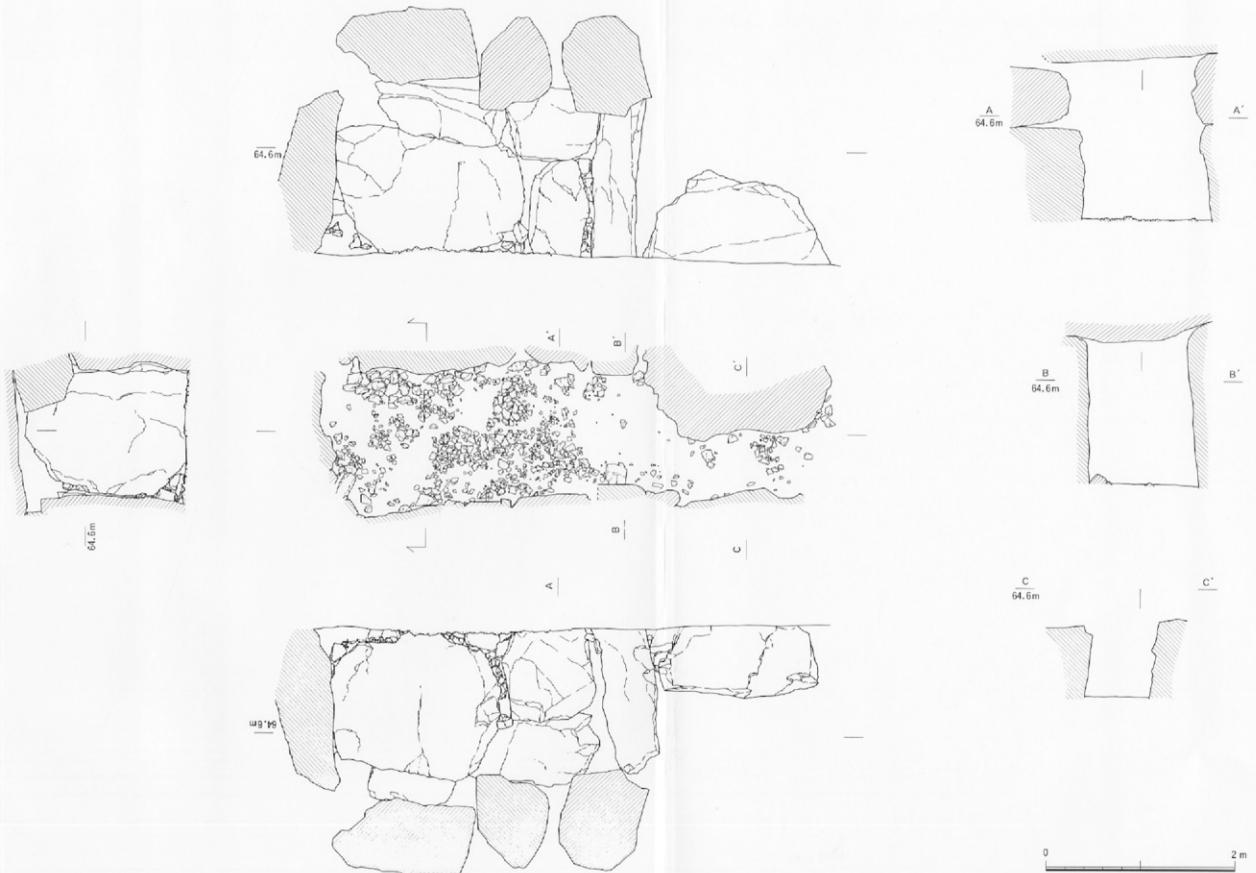
206S・207Sは壺Bの資料。底部は丸く、口縁部と底部との境の屈折がやや弱く、外底面はヘラ切り後に軽くヘラ削り調整が施される。207Sは口縁部に歪みが認められる。端部はやや尖り気味である。205Sは完形で大型の平瓶。口頭部はハの状に伸び直線的である。端部はやや内済気味で丸くおさめる。口縁部には1本の浅い沈線がめぐる。底部は平底ではなく弱い弧状を呈す。



写真2 15号墳石室内作業風景



写真3



第34図 1号墳石室展開図



第35図 1号墳石室内出土須恵器位置図・再利用面

2号墳（第36図）

本古墳群中の東尾根上に立地し、1号墳の北側に位置する。規模は推定で直径14m強の円墳である。石室はすでに開口し墳丘もかなり流失していたが、本古墳群のうちでは残存状況が良好な部類に入る。石室の開口部はS-7°-Eを向く。構築時期は出土須恵器により、7世紀中頃と考えられる。

外部構造

墳丘（第37図）

墳丘は直径14m強で不整な円形を呈す。東半分は厚さ80cm程度の墳丘が残るが、西半分はほとんどが流失していた。墳丘は東西トレンチと北トレンチの断面によって観察した。その結果、小高くなっていた旧地形をうまく利用して、墳丘を構築していることが判明した。石室に伴う掘り方は断面観察のみだが、いずれの断面でも確認できた。北トレンチでは深さ60cm程度だが、東西トレンチでは深さ10~20cm程度と浅くなる。掘り方は平面形がコの字状にを呈するように掘り下げられ、その土を掘り方内へ埋め戻して石室の最下段の石材を安定させたと考えられる。地山直上には炭化物が多く混じる薄い土層が認められ、掘り方の埋土直上の土層にも同様の傾向が看取される。おそらく、掘り方埋土形成後に炭化物混じりの土質が使用され、その後地山から削り出した赤褐色土で墳丘の大半を形成している。この赤褐色土は細かな砂岩礫の含有の有無によって2つの土層に大別が可能で、各々を厚さ20cm程度ずつ交互に積み重ねて墳丘を構成している。玄室の側壁壁体は1段目が扁平で大型な石材を用いており、その扁平な面を石室内に向ける不安定

な置き方をするのに対し、2段目から天井石にいたるまでは小口面を石室内に向け断面横長に構築する特徴を有する。おそらく墳丘の構築もこうした石室構造上の特徴あるいは工程に左右されているはずだが、墳丘の残存が石室壁体全体を覆うものではないため明確にすることはできない。しかし、砂岩疊混じりの10層が1段目の石材ほぼ上面に達していることから、この10層の状況が石室構築上のある段階での工程に関係する可能性が高い。

周溝（第36・37・167図）

周溝は石室背面から東側に三日月状に伸び、全周しない。深さは北トレンチ内では40cmを測るが、東側に向かうにつれ次第に浅くなる。幅も北トレンチ内では1.4mを測るが、東トレンチでは狭くなる。

埋土からの出土遺物には須恵器・灰釉陶器・山茶碗・土師皿が認められ、総計157点が出土した。その大半が須恵器で、灰釉陶器は1点、山茶碗は6点が出土した。灰釉陶器は近接する1号窯の遺物が混入したと考えられる。土師皿のなかには完形品が3点が含まれる。この3点は重ねられて出土したものでプランは確認できなかったが、後世に埋納・廃棄された可能性が高い。須恵器は壺の破片が50点程度と多数を占め、その残りは蓋A・坏A・蓋B・坏Bの破片である。1点のみ蓋Cの口縁端部の破片が認められる。

遺物は土師皿3点（253H～255H）を図示した。底部中央付近は外側からの指圧により上げ底状となっており、器の安定がよい。体部は丸みをおびて立ち上がり、口縁部は丸く仕上げられているが、若干歪んでいる。器面の状態は良好だが、底部外面と体部外面の指頭圧痕以外の他の調整は確認できない。色調はいずれも明褐色～浅黄橙色を呈するが、253Hのみ内面の約1/4が黄灰色を呈する。

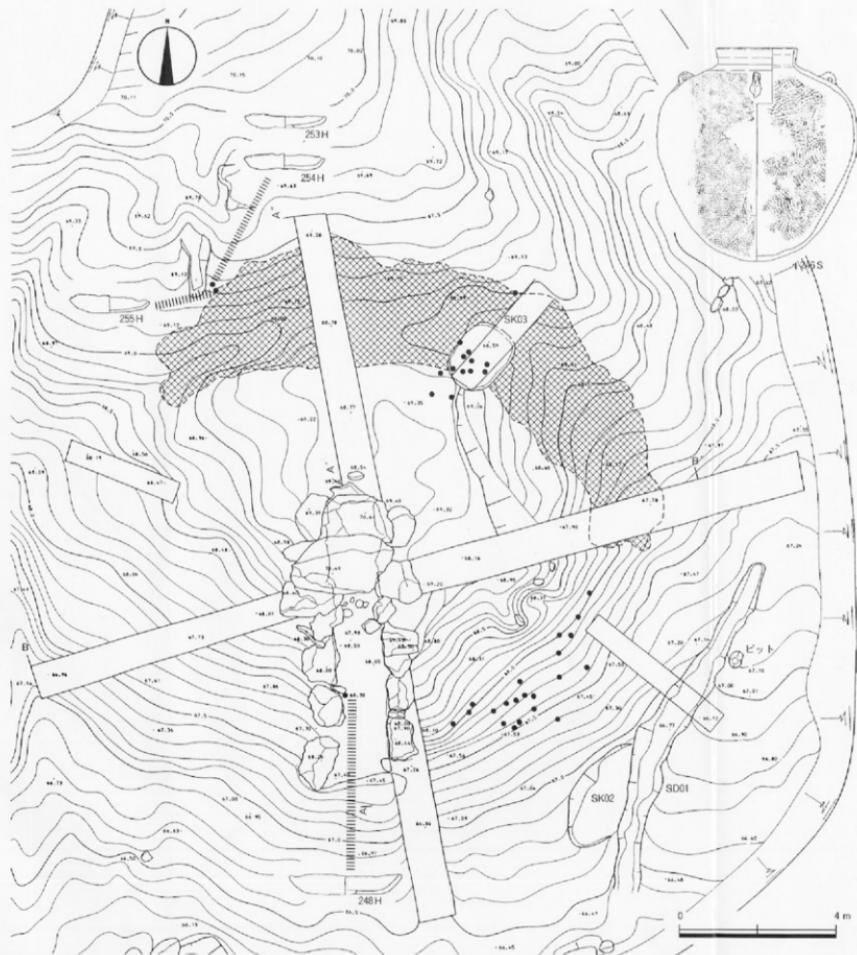
内部構造

石室（第38図）

天井石が2枚架設されたいわゆる擬似両袖式の横穴式石室で、全長6.91mを測る。玄室は玄門立柱石によって区画され、玄室長は2.79mである。玄室の最大幅は中央付近で1.23mである。側壁は両側とも3段に積まれ、横目地がそろう。最下段の石材は上2段に比べて大きな石材を用いており、最も扁平な面を石室内に向け、その石材断面形状からみて縱向きに配置する。上2段は小口面を石室内に使用した小口積み状を呈する。側壁3段目の石材の一部が抜けており、その結果、天井石が内部に陥没気味になっている。天井部までの高さは約1.6mで、その横断面形は長方形を呈す。床面は玄室にのみ約20cmの比較的大きな角礫が敷かれる。奥壁際では攪乱により一部の範囲で、礫が認められなかった。平面形はやや中央付近が膨らみ、一見胴張り状を呈するが、大型石材を用いているためにその石材自体の形状が反映したためと思われ、意図したものではない。奥壁は幅1.21m・高さ1.64mの大型石材を用い、いわゆる鏡石を呈している。

玄門立柱石はほぼ同様の縱長の石材（約縦1.4m・幅0.4m）を左右に配している。石室内側には約10cm程度入り、明確な玄門を形成している。幅は1.09mである。現状では立柱石上に天井石は認められないが、1号墳の状況を考慮すれば、築造当時は架かっていた可能性が高い。

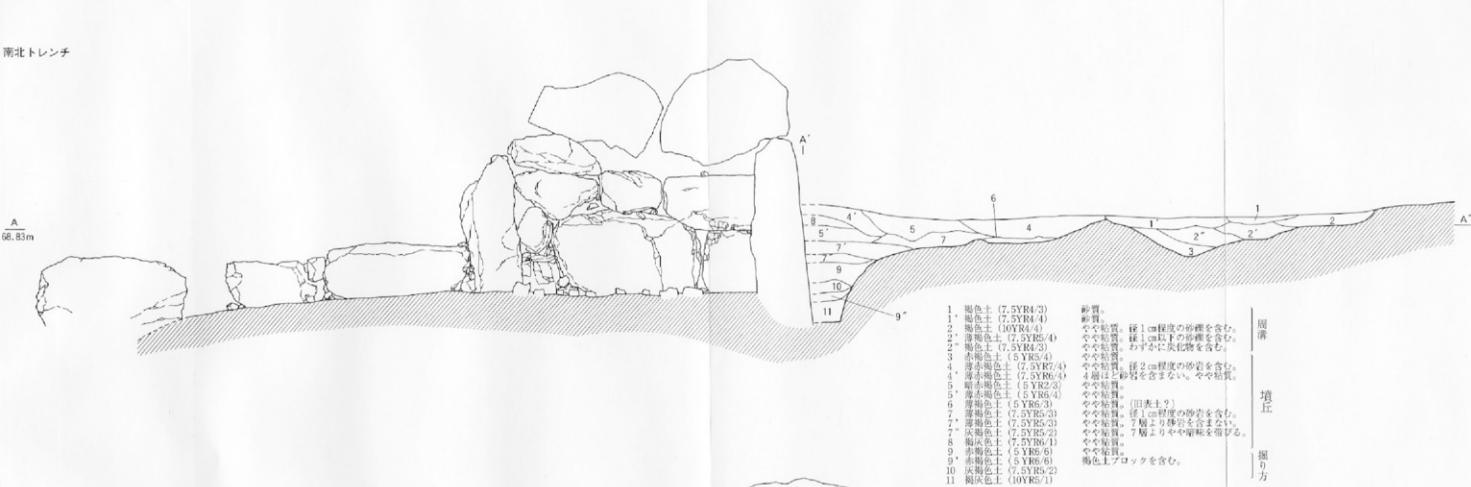
羨道部は横長の石材が3枚配置され、主軸長4.12mを有す。幅は最大で1.22mで、玄室幅とは同じである。両側壁とも中央の石材が小振りでその両側には大きめの石材が配され、共通した



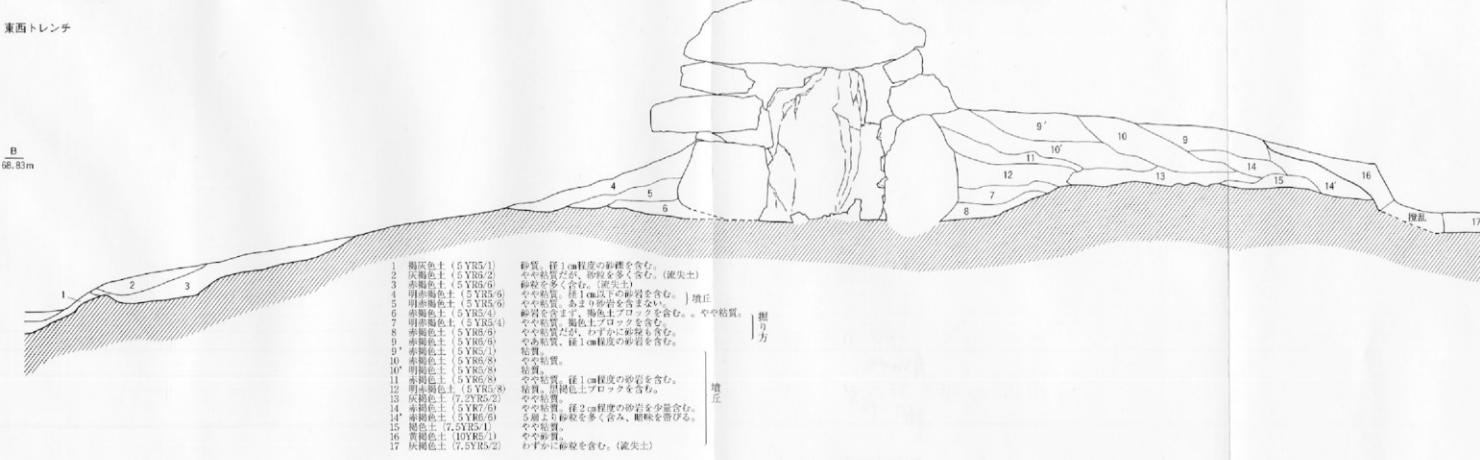
第36図 2号墳平面図・土師皿・棗出土位置図

253H～255H・248Hの縮尺は1/4
246Sの縮尺は1/8

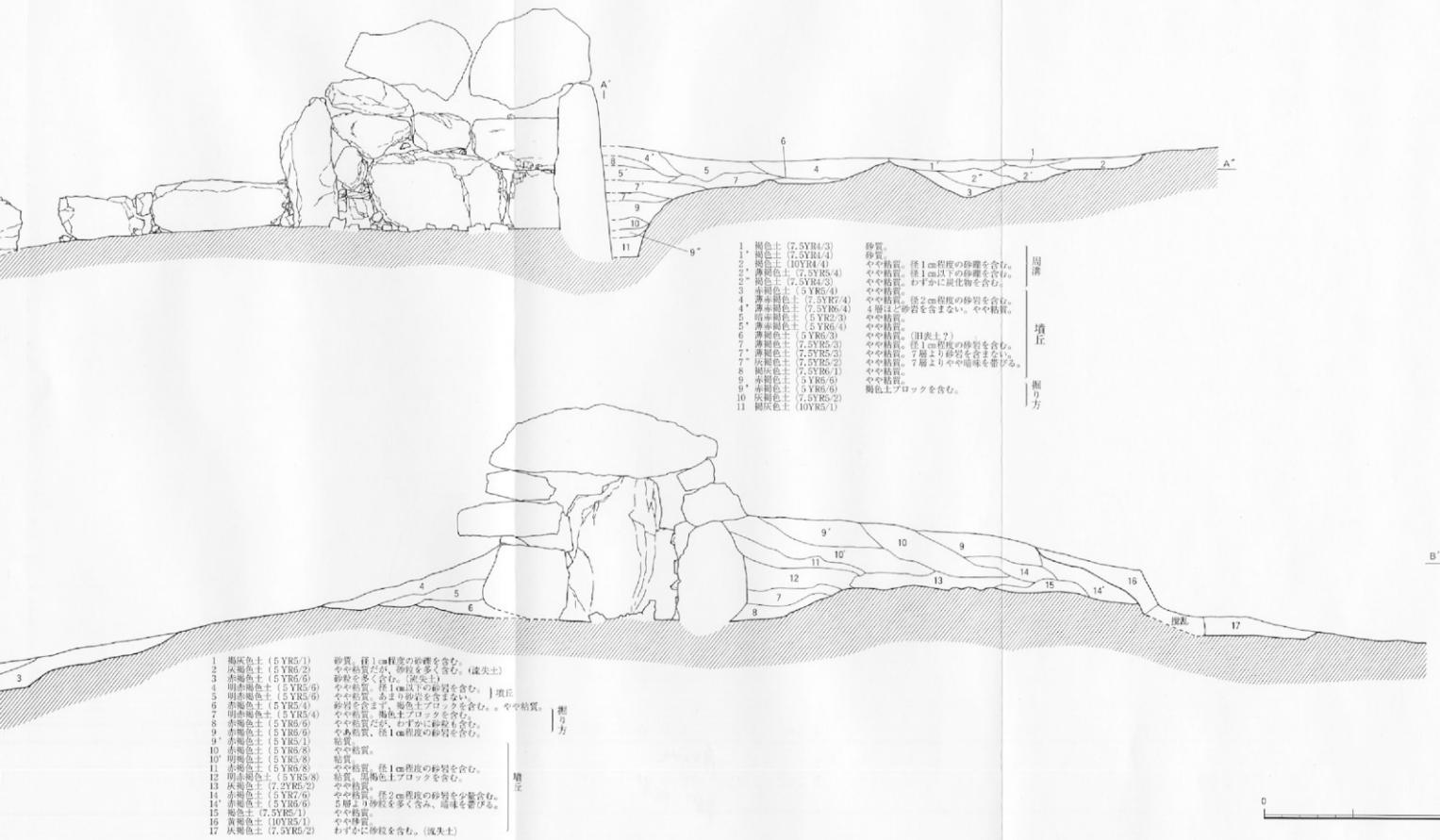
南北トレーンチ



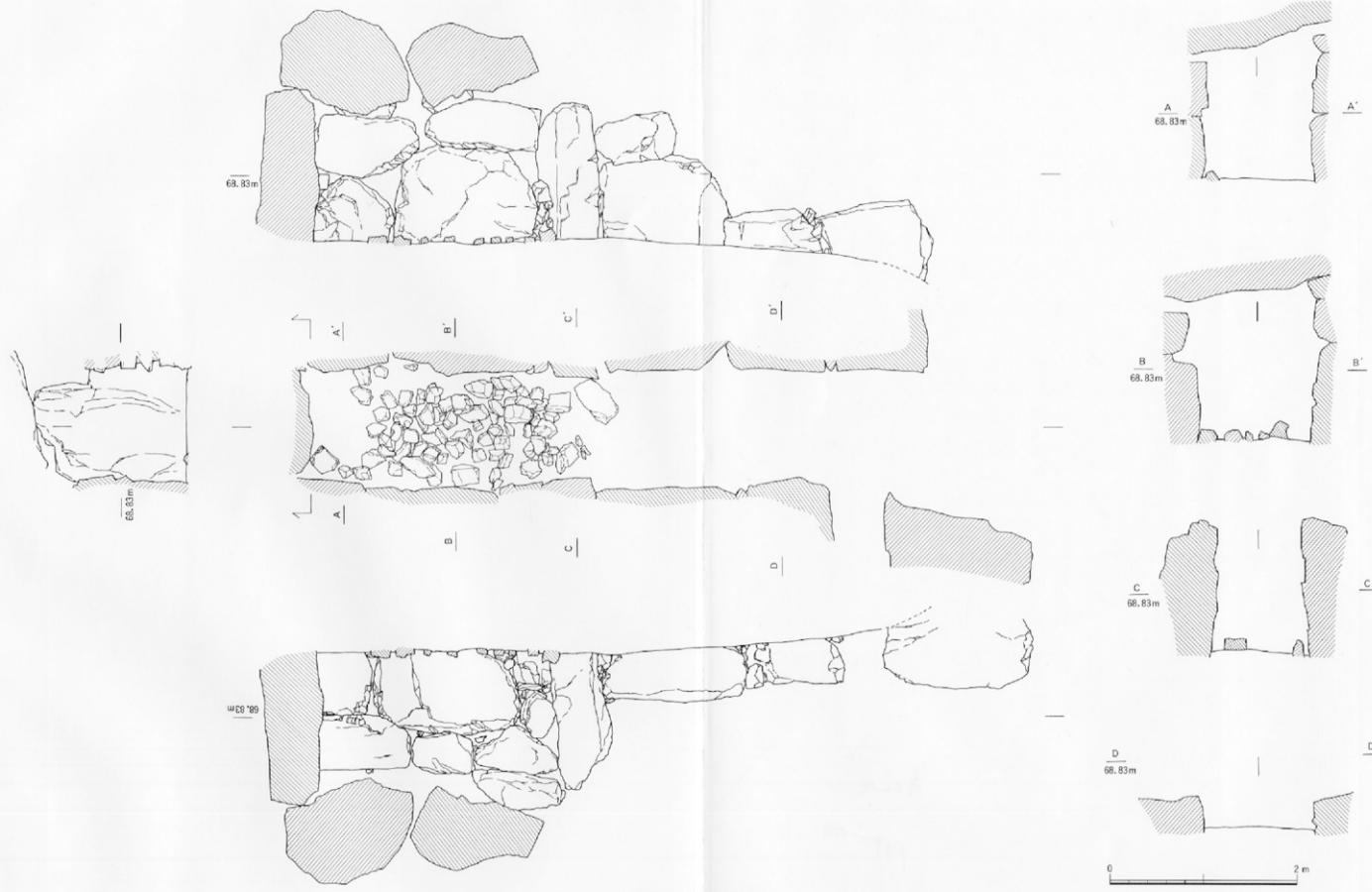
東西トレーンチ



第37図 2号墳墳丘断面図



第37図 2号墳断面図



第38図 2号墳石室展開図

構造をもつ。右側壁においては立柱石側の側壁が2段となっていることから、当初は左側壁についても同じ構造であったことが指摘できる。また、右側壁開口部の石材は斜面下方に移動し本来の位置ではなく、復元すると石室の全長は6.82m、羨道長は4.03mに変更される。なお、床面施設・排水溝・閉塞施設などは確認できなかった。

遺物出土状況

本古墳群中で最も多くの須恵器が出土した。須恵器38点・土師器1点に及び、大半が完形品である。出土場所はI群～IV群にグループ化される（第39図）。I群は玄室内の須恵器・土師器計11点で、原位置で出土したと考えられる。大半は玄室中央左寄りに据えられ、217Hの土師器及び218Sの高壺以外はすべて蓋A・壺Aである。玄門中央からは壺A1点、玄室中央右寄りからは高壺218Sが出土した。211S・212S及び209S・210Sがそれぞれ重なって出土した。土師器217Hは奥壁右隅で1点検出した。II群は羨道部の左立柱石付近から出土した壺A3点・蓋A2点を指す。うち3点にはヘラ記号が認められる。II群の資料は原位置の状態で出土し、その位置が玄室外でかつその資料中にヘラ記号をもつ資料が存する点については単なる偶然の結果とは理解し難く、何かの意図があったものと考えられる。III群は羨道部中央やや玄室寄りから出土した須恵器6点で、壺C・蓋Cが3組セットの状況で検出した。その時期は他の須恵器より大幅に下がり8世紀前半に比定される。いずれも、右側壁から崩落した石材によって破碎された状況で検出された。IV群はI～III群に含まれない羨道前半部出土の須恵器を一括した。レベル的には床面より10cm強浮いた状況を呈している。出土した須恵器は蓋A・壺Aの他に蓋B・壺B・高壺・鉢・平瓶・甕など計17点で4群中、器種・量とも最も最も多い。247Sの大破片の壺上には234Sの蓋Aが伏せられていた。出土須恵器の時期はI・II群はほぼ同一型式で7世紀中頃と推測される。III群は8世紀前半、IV群は個々の資料に幅があるが、7世紀中頃～7世紀後半と想定される。I・II群の須恵器は最も古い時期を示すことから本墳築造時に副葬された可能性が高いと考えられる。III群は時期が下ることから築造後の何らかの行為に関わる遺物であると思われる。IV群の須恵器の壺A・蓋AはI群の壺A・蓋Aとほぼ同一型式であることから、二次的移動を受けたと推測される。

なお、玄門付近で床面より20cm程度上のレベルから山茶碗3点・山皿1点が出土した。整理調査の結果、山茶碗の片口鉢・大窯期の擂鉢・土師皿・灰釉陶器片など様々な時代の遺物が埋土中に混入していることを確認した。他の古墳と比較検討すれば再利用面と考えられるが、現地調査時では盜掘と間違った判断を下し、あまり記録を残さなかった。このため、確かな検討ができず深く反省している。出土した山茶碗は窯洞1号窯期～大畑大洞4号窯期のものが認められる。

遺物（第39・164～167図）

I群

208S～211Sは蓋Aの資料。208S・209Sはやや天井部が平坦で口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内湾しながら外へ伸び、端部を尖り気味におさめる。天井部の器壁が210S・211Sに比して厚めである。天井部外面はヘラ切り痕を残し、中央部が突出する。その中央部から外側の天井部はナデ調整によってヘラ切り痕が痕跡的になっている。210S・211Sは天井部の中心から緩やかな弧状を呈し、器壁が208S・209Sより薄い。中央の突起は顕著ではなく、ナデ調整によって

突起及びその周囲に残る渦巻き状の痕跡は潰れ気味である。口縁部は天井部との境の弱い稜からほぼ垂直に下る。坏Aの資料は5点が認められるが、蓋Aとは数が合わない。212S～214S・216Sは底部がやや平坦で中央の突起が目立つ資料である。このために底部で弱い稜をもって立ち上がり、突出した受部にいたる形状を示す。受部の形状は断面三角形を呈する。底部中央の突起の周囲には渦巻き状のヘラ切り痕が残るが、ナデ調整によって痕跡的になっている。口縁部は受部から短く内傾して立ち上がり、214S・216Sは端部で少し直立する。215Sは底部中央の突起が目立たない資料で、受部が鋭く水平に突出し、口縁部は極端に短く内傾する。底部が大きく歪んでいる。218Sは小型の高坏。坏部は蓋Aを逆位にした形状を示し、坏部底部外面にはヘラ削り調整が認められる。217Hは土師器のミニチュア土器。コップ状の器形をもち、底部が非常に薄い。外底面には植物纖維の圧痕が残る。

II群

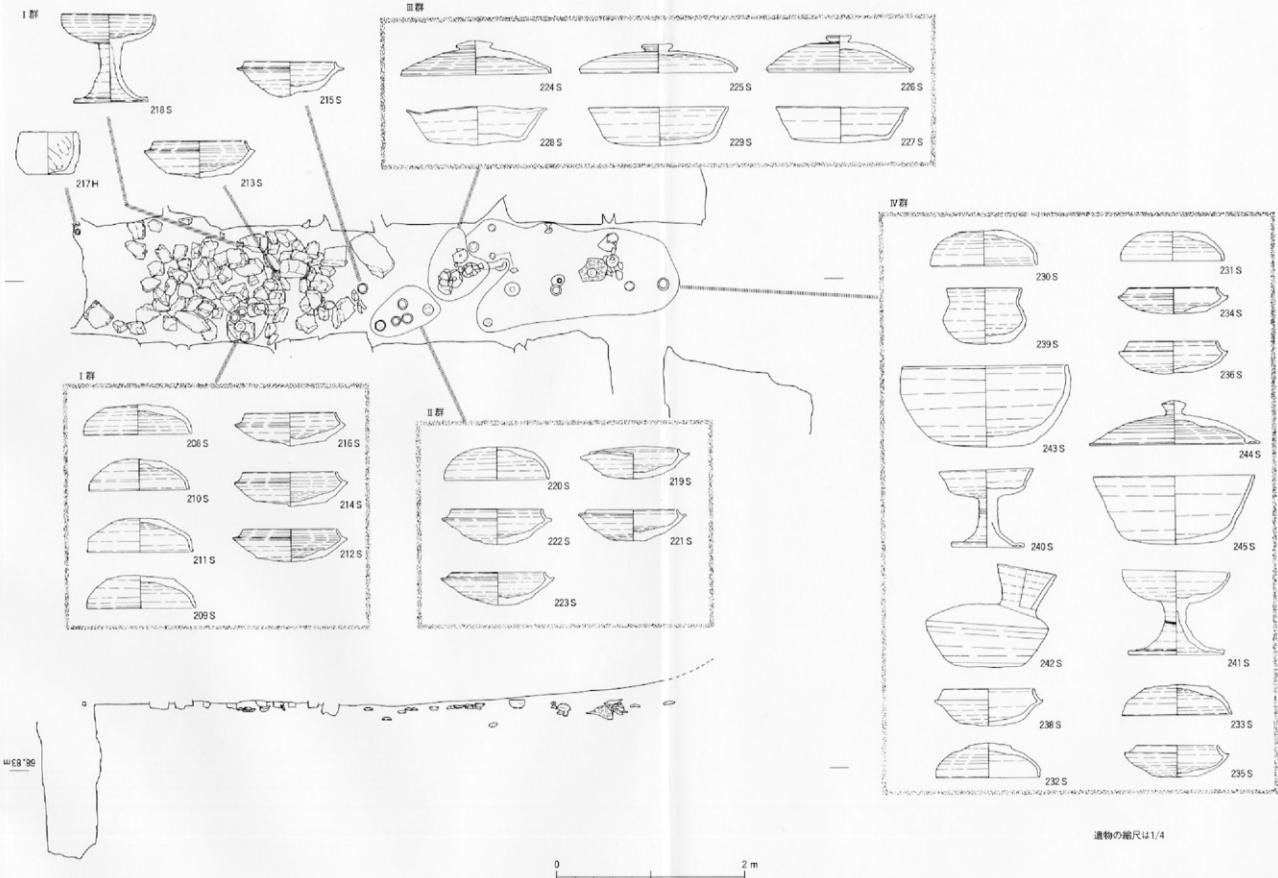
蓋Aは220Sの1点のみ。天井部はなだらかな弧状を呈して、尖り気味の口縁端部にいたる。天井部内面が大きくぼむ。219S・221S～223Sは坏Aで底部が丸みをおび、中央の突起は顕著ではないがヘラ切り後の調整は未調整である。219Sは底部から外反気味に水平に突出する受部にいたり、口縁部が痕跡的に内傾する。222Sはやや口縁部が長く、端部が直立し丸くおさめる。受部は断面三角形を呈する。221Sも端部が直立するが、尖り気味におさめている。221S・223Sの受部は外上方に伸びる。221S～223Sの内面にはヘラ記号が認められ、221S・223Sは縦横それぞれ2本の直線を組み合わせたもので、222Sは縦3本・横2本の短線の組み合わせが認められる。

III群

蓋C・坏Cのセット資料。224Sは鉢の径が大きく扁平で、鉢の形状が擬宝珠形を呈す。天井部はなだらかな弧をもって口縁部にいたり、口縁部は短く凹面状をなして下方に折り曲げられる。天井部のヘラ削り調整は鉢から1・2周程度施される。225Sは天井部が平らかで器高が低く、鉢も潰れ気味で上面はわずかに凹面を形成する。天井部のヘラ削り調整は鉢から口縁部ちかくまでの広範囲にわたって認められ、口縁部は短く内傾する。226Sは器高が高く天井部のロクロ目の目立つ資料である。鉢は中央は潰れているが、鉢高そのものは224S・225Sに比べると高い。天井部のヘラ削り調整は鉢から1・2周程度施される。口縁部は天井部との境で強く屈折して内傾し、端部には平坦面が認められる。227S・229Sは丁寧にヘラ削り調整を施された平坦な底部から口縁部が弱く外反しながら立ち上がり、端部をやや尖り気味に仕上げている。228Sは227S・229Sと器形の形状は類似するが底部外面にはヘラ削り調整が認められず、ヘラ切り痕を未調整のまま残している。口縁部は歪みが大きく、端部は軽く外反している。

IV群

蓋Aが4個体、坏Aが5個体認められる。それぞれI・II群から出土した蓋A・坏Aに酷似する。蓋Aの230S～233Sはいずれも天井部がやや平坦で中央部が突出気味である。230S・231S・233Sはヘラ切り後のナデ調整が認められるが、232Sはヘラ切り後の調整がまったく施されずヘラ切りが施された部位である天井部中央が極端に突出する。天井部内面は中央付近のみ顕著にくぼむ。口縁部は下方に伸びるが、233Sはやや外反する。234S～238Sは坏Aの資料である。底



第39図 2号墳石室内遺物出土状況図

遺物の縮尺は1/4

部外面のヘラ切り後の調整が施されないために、やや底部は平坦な形状で、その後は平坦な底部から外反気味に受部にいたる。口縁部は軽く外反しながら内傾する。受部の形状は断面三角形である。234Sは受部が水平に突出し、器高が低く底部内面の中央が強くくぼむ。235Sは細かな口クロ目が目立つ資料である。239Sは小型の短頸壺。丸底気味の底部から体部は内湾して立ち上がり、口縁部は頸部で弱く屈折して外上方へ強く立ち上がる。底部外面にはわずかに中央の突起が残存するが、それ以外はヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加えて仕上げている。241Sの高坏は218Sの高坏と酷似する資料。脚部中央に細かな何本かの筋が認められるが、沈線かどうかは判然としない。脚部は裾部で強く外反して開き、端部は下方に折り曲げられやや内傾した面を有す。240Sの高坏は218S・241Sとは形状が異なり、坏部底部が平坦でヘラ削り調整が認められる。口縁部は坏部底部で弱く屈折して外上方に立ち上がる。脚部中央には1本の沈線がめぐるが、完結せず部位によっては2本となる。脚部は裾部で強く屈折して外方へ開き、端部はわずかに下方に折り曲げられる。242Sは平瓶。底部は平坦でヘラ削り調整が認められる。肩部は強く屈折して稜を有し、口縁部は直線的にハの字に開く。体部外面中央にはボタン状の貼付文が認められる。243Sはいわゆる鉄鉢形の資料。底部はやや平坦で内湾する体部もち、端部は尖り気味である。半焼け資料のため調整の観察は不可能である。244S・245Sは大型の蓋B・坏Bの良好な資料。244Sは鉢高が高く、宝珠形紐を有す。天井部はなだらかな弧状を呈し、紐から口縁部付近までヘラ削り調整が加えられる。内面にはやや丸みおびた返りが認められる。245Sは底部がわずかに丸みをおび、口縁部へは稜をもたずになだらかに移行する。口縁部は外上方へ直線的に開き、端部は丸くおさめられる。外底面はヘラ削り調整が認められ、内底面の中央は大きくなびき、指ナデの痕跡が認められる。247Sは口頸部から体部上半にかけてを欠損する壺。底部は丸底で、体部外面には格子目のタタキ目が認められる。内面は同心円状の当具痕が残るが、底部では指ナデが加えられ当具痕は痕跡的である。

中世以降の遺物

248Hはほぼ完形の土師皿。丸底で底部内外面周縁にかすかな指頭圧痕が認められるが、他の調整痕は確認できない。底部内面の平坦面の面積が狭い。胎土中には1mm程度の赤褐色粒が含まれる。250Y～252Yは粗雑な高台に粗穢痕のつく北部系の山茶碗。250Yは高台径が小さく、外底面には板目が認められる。内底面には静止指ナデ痕が残る。体部は直線的に伸びるが、端部は内湾気味となる。薄手で精緻な資料で、大畠大洞4号窯期に比定される。251Yは外底面に板目、内底面中央に静止指ナデ痕が認められる。内底面周縁には輪状のくぼみが存する。端部は面取り気味で、白土原1号窯期の資料と考えられる。252Yは高台径が大きく厚手の資料。内底面の静止指ナデ痕は認められず、端部の成形は面取り気味である。窯洞1号窯期に比定される。249Yは山茶碗の小皿。北部系の製品で内底面中央には静止指ナデ痕が認められる。端部は面取り気味である。白土原1号窯期のものと思われる。

その他

2号墳の周囲で確認された遺構について以下に記述する。遺構の所属時期についてはいずれも良好な資料を確認できなかつたため、不明である。

SD01（第40図）

2号墳の東側を南北に走る細長い溝を確認した。幅は0.5m弱、深さは0.2m程度と浅く断面形は皿状を呈す。床面からは一部でチャートの石材が敷設されている状況を検出したが、溝全面に及ぶものではなかった。溝の南端は畠地による削平により確認できなかった。遺物は破片で10点が出土した。内訳は須恵器3点、土師器2点、灰釉陶器5点である。灰釉陶器は瓶・壺類の破片で1号窯に帰属する遺物と思われる。

SK02（第40図）

SD01の西側で不整な楕円形を呈する土坑を検出した。長軸は2.8m程度だが、幅はその東側をSD01に削平されているため不明である。基底面にはチャートの石材が散在していた。深さは浅く10cm程度である。覆土からは摩滅した弥生土器とも土師器とも判断できない細片が19点出土したが、図化可能な資料は認められなかった。

SK03（第36図）

2号墳周溝の北東側で長軸約1.8m・短軸約1.2mをはかる楕円形の土坑を確認した。本土坑は周溝トレンチ掘り下げ中その断面観察によって確認したもので、南側の壁面は推定である。深さは浅く0.1~0.2m程度で、埋土から須恵器壺片が出土した。出土した246Sは7世紀後半に相当し、古墳構築時に近接するが、新旧関係からみて古墳構築後に周溝内を新たに掘削したと思われる。出土した壺片は後述する3号墳の事例からみて、人為的に土坑内で破碎されたものと考えられ、2号墳構築後の祭祀行為に関わるものと思われる。接合関係をみるとSD01周囲のものと接合しているが、これは土坑内の資料が流失した可能性が高いものと推測される。主軸方向はN-39°-Eである。

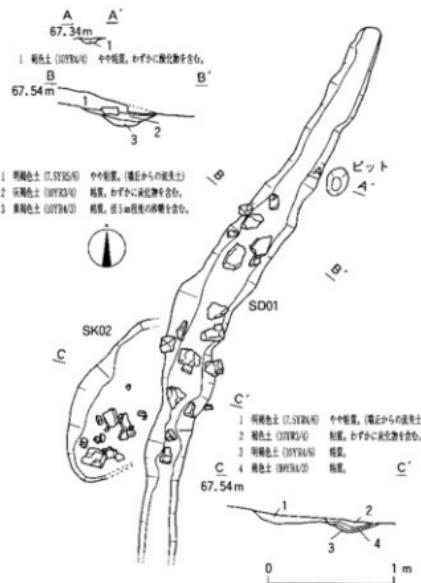
出土した須恵器の壺246Sは縦耳が体部上半の4方向に施される資料。口縁部が短く直立し、端部はやや肥厚気味に丸く仕上げられる。底部は丸底で体部外面は細かな格子目のタタキ目を有し、内面には粗い円弧状の当具痕が認められる。

ピット（第40図）

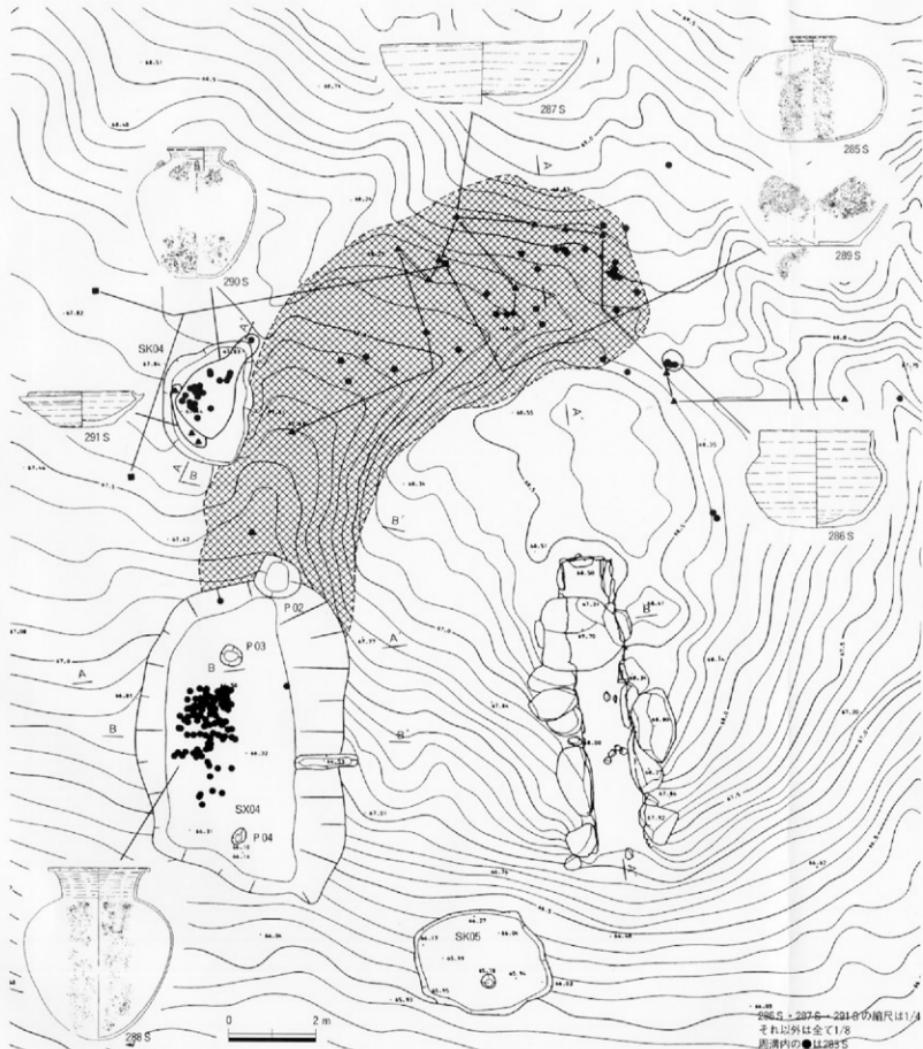
SD01の東側で長軸0.24m・短軸0.15mを測るピットを確認した。平面形は楕円形を呈し、深さは5cm程度とかなり浅い。遺物は出土しなかったため、所属時期は不明である。

3号墳（第41図）

2号墳同様、本古墳群中で最も残存状況が良好な古墳。墳丘は直径11m強の円墳で背後には周溝がめぐる。石室はすでに開口し、上



第40図 2号墳周辺遺構平面・断面図



第41図 3号墳平面図及び周溝・SK04・SX04出土遺物位置図

半分は地表に露出していた。天井石は1枚認められたが、構築時は2枚で構成されていたと考えられる。石室内からは須恵器・鉄器の他に山茶碗が出土し、再利用されていたことが判明した。構築時期は出土須恵器より7世紀後半と推定される。石室の開口部はS-9°-Eを向く。

外部構造

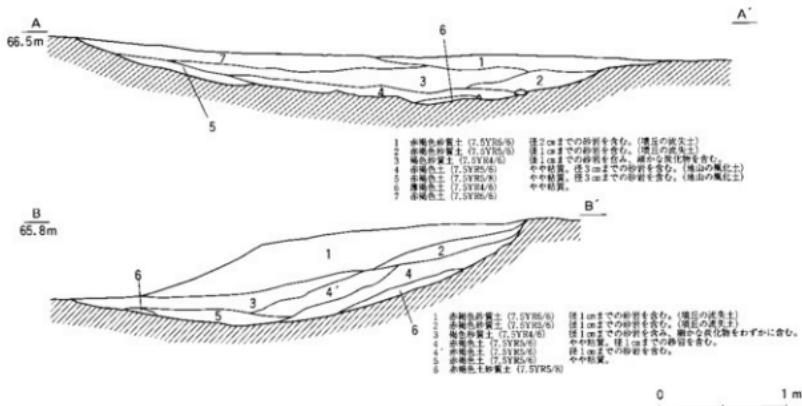
墳丘（第43図）

規模は直径11m強を測る円墳だが、半径が西側の方が広く、東側の方が狭くなる不整な梢円形を示す。西側と北側のトレンチで断面を確認した。残存する墳丘の厚さは30cm程度と意外に薄い。土層は赤褐色土と炭化物が混じる褐色土が認められる。北トレンチでは周溝側で一部、地山が低くなる部分が認められる。墳丘築成の最初の段階で土の流失を防ぐための措置と考えられる。

周溝（第41・42・168～170図）

石室の背後から西側へめぐる三日月状の平面形を呈す。西側の突端はSX04に切られ不明である。東側は流水による小さな自然流路に連なり、それが東側に続き一見周溝状にみえる。仮にそれが意図的に周溝として利用したとすれば、巧みに自然地形を利用した結果と推測される。深さは北側で約0.5m、西側では約0.8mと深くなる。埋土からは須恵器141点・灰釉陶器1点・土師器1点・鉄滓4点の計147点の破片が出土した。出土した灰釉陶器片は1号窯の製品とみられ、周溝は1号窯操業時点では埋没していなかったと推測される。圓化したのは須恵器4点で高壺・短頸壺・横瓶・壺である。287Sは高壺の壊部と思われる。わずかに丸みおびた壊部底部から体部が内湾して立ち上がり、端部も若干内湾して丸くおさめられる。壊部底部外面には不整方向のヘラ削りが認められる。壊部外底面中央にはくぼみがあり、脚部との接合部と考えられる。286Sは周溝以外に2号墳の墳丘表面から出土した破片と接合した資料。底部は平坦で外面にはヘラ切りが認められる。体部は球状で、口縁部は内湾気味に直立する。285Sは横瓶。体部は梢円形を

3号墳周溝



第42図 3号墳周溝断面図

呈し、その体部中央に口頭部を取り付ける。口縁部は突帯状に端部下端が肥厚し、その下端には顕著な稜をもつ。端部は尖り気味で内傾する面取りが認められる。体部外面は格子目タタキの後に縦方向のカキ目が加えられ、内面には円弧状の当具痕が認められる。289Sは甕の底部片。外面には格子タタキ目、内面には同心円状の当具痕が認められる。当具痕の中心には十字の痕跡が残る。外底面周縁には不整方向のヘラ削り調整が認められ、外底面には板目状の圧痕が観察される。

内部構造

石室（第44図）

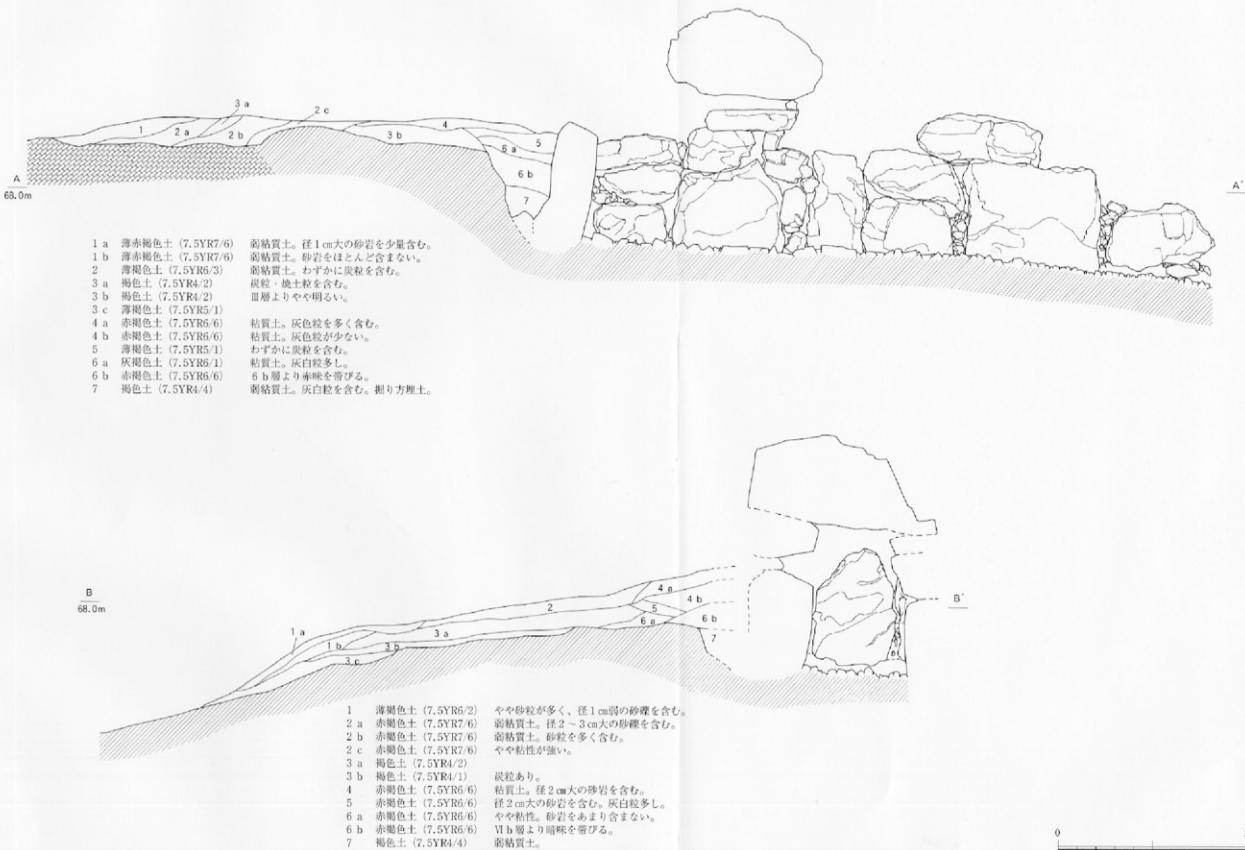
全長5.85mのいわゆる擬似両袖式の横穴式石室。天井石が1枚残り、遺存状況は良好である。玄室と羨道部は玄門立柱石で区画され、それぞれ全長は2.6mと3.25mを測る。玄室の側壁は2段ないし3段に及んで構成され、おそらく3段目で天井に達すると考えられる。玄室幅はA断面1.06m・B断面1.21mとやや玄門に向かって広がる傾向にある。両側壁とも良好に残り、おおよそ似た構成を呈す。奥壁側の壁体は小口面50~60cm大の石材を横積みし、中央の壁体は幅1mに及ぶ最も広い面を石室内に向けて大型石材をその断面形を縦向きにして置く。このために生じた玄門立柱石との間の空間には小型の石材を乱雑に充填する。中央の壁体まではある程度、横目地が意図されていたと考えられるが、乱雑に充填された小型石材にはそのような意図はまったく観察されない。中央の壁体上には最下段の大型石材の上にさらに2段の石材が積まれて天井石が架設されている。奥壁は高さ1.2m・幅0.86mの大型石材で構成され、右隅の空間には極端に幅の狭い縦長の石材を充填している。玄門立柱石は右側が高さ0.97m、左側が高さ0.88mの背の高い石材を使用している。左側の石材が低いためか、その上にもう1つ石材が載せられている。両側の立柱石は内側へ5~10cm程度せり出す。床面には樋石が認められる。羨道部の側壁も壁体の構成は立柱石から順に玄室と酷似している。とくに中央の石材は大型で幅1.5mにも達する。立柱石側の壁体は3段に積まれ、その上には天井石が載せられた可能性もある。断面形は奥壁側では持ち送り気味に側壁が内傾するが、その他では奥壁側ほどは内傾しない。床面は拳大~20cm大の角礫が石室全面に敷き詰められた礫床であり、その残存状況は良好であった。羨道部から玄室に向かって礫が大型化する傾向にある。

掘り方（第43図）

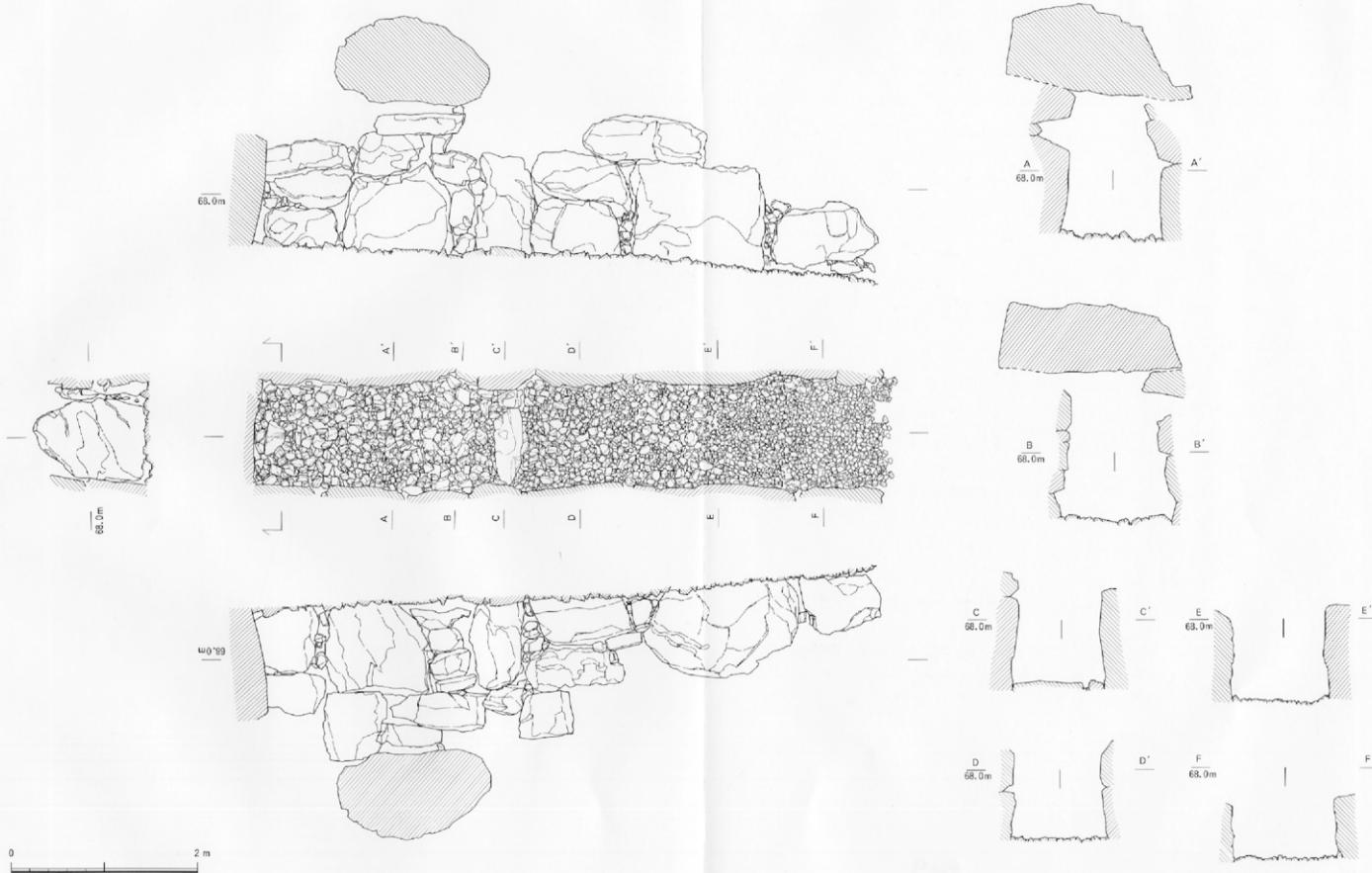
トレチ断面のみの確認のため平面形は分からぬが、おそらく他の古墳と同じく、コの字形を呈すると思われる。奥壁背後では地山を斜めに掘り下げ、根石を据えている。検出した根石までは1m掘り下げたが、その後は掘削が不可能となった。地山から1.2m程度は基底面まで掘り下げていると推測される。西側では深さ30cm程度と浅く、他の古墳と同様の傾向を示している。

遺物出土状況（第45・46図）

大半が礫床の隙間から破片の状態で出土し、須恵器片の総数は186点である。接合の結果、その内訳は壺A 5点・蓋A 1点・壺B 7点・高壺1点・平瓶3点（口縁部片が2点）の計17点である。残りは甕の破片が大半である。出土位置は羨道部に偏り、その多くが壺Bで占められ、床面から5cm~10cm程度高いレベルで出土した。これらの破片は二次的に移動したものと思われるが、接合関係をみると玄室内から羨道部へ移動したもののが少なく、羨道部内から大きく移動した痕跡



第43図 3号墳埴丘断面図



第44図 3号填石室展開図

は認められない。おそらく、羨道部に設置された須恵器がその後の何らか要因で羨道部内で二次的移動を受けた可能性が高いと考えられる。右側では原位置を保つ資料を5点確認した。いずれも羨道部で出土し、右玄門立柱石側に集中する。5点の資料はすべて坏A・蓋Aで占められる。269S～271Sは右立柱石片隅で、268S・272Sは立柱石よりやや離れた位置で検出した。玄室内からは右側で坏Bの276S、左立柱石付近の破片と玄室中央の破片が接合した平瓶284Sが認められる。坏Bのセットとなる蓋Bがまったく認められないことに疑問が残る。時期は7世紀後半頃である。

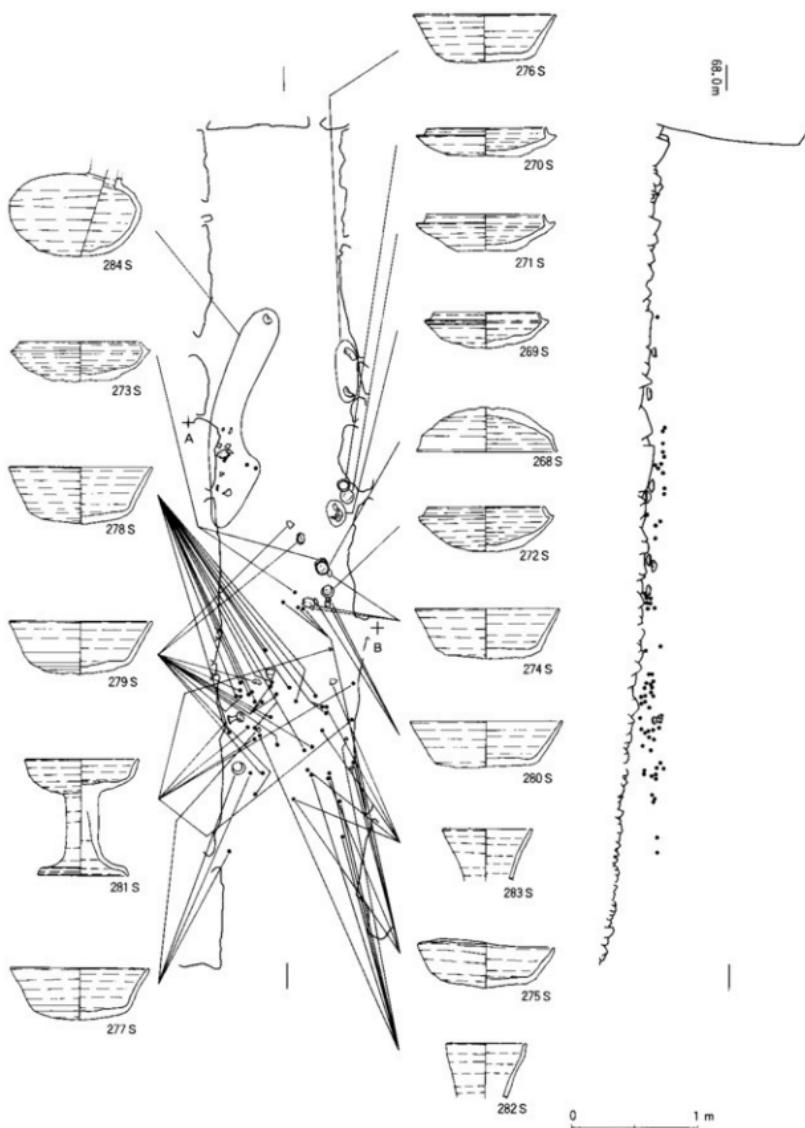
再利用面（第47・48図）

山茶碗11個体分と鉄滓が68点出土した。分布は羨道前半部と玄室中央に集中し、左玄門立柱際で266Y・263Yが出土した。山茶碗の破片総数は35点と少なく、鉄滓の大半は小片であった。遺物の出土レベルは床面より玄室で10cm弱、羨道で20～30cm高く、出土位置に高低差が認められる。山茶碗の内訳は北部系碗3点・小皿2点、南部系碗4点、美濃須衛系小皿1点・六器碗1点で、その時期は5型式前後と8型式前後の2型式が認められる。5型式に相当するものが258Y・259Yの南部系の碗、8～9型式には256Y・257Yの南部系の無高台碗、261Y・262Yの北部系の碗は8～9型式に併行する明和1号窯期～大畑大洞4号窯期に相当し、各々が玄室と羨道に離れて分布している。以上のように石室内の山茶碗には須恵器とは高低差・時期差が認められる。その要因については不明だが、石室内が中世期に再利用された可能性は高いと思われる。また、玄室内では刀状の不明鉄製品と砥石が隣接して出土おり、これらの資料も出土状況から再利用面に伴うものと判断している。鉄滓は羨道部床面の縫の隙間から多く出土した。なお、開口部付近では細かな炭化材の広がりを検出したが、具体的な意図については判断できない。

遺物（第167～169・177図）

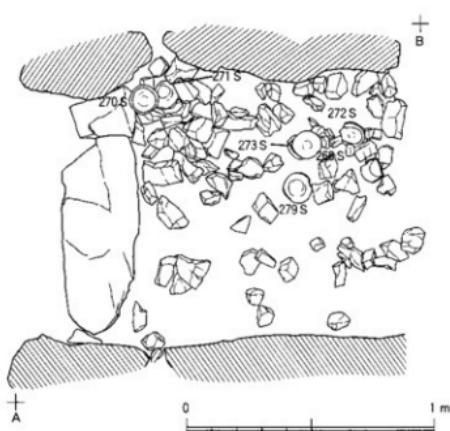
須恵器

蓋Aは268Sの1点のみ。天井部は丸く、外面はヘラ切りが認められる。口縁部は天井部との境で弱い稜をもって外反し、端部は鋭い。269S～273Sの坏Aは形状が様々で、270Sはとくに器高が低く、底部はやや平坦である。口縁部は断面三角形を呈する突出した受部から短く直立し端部を尖り気味におさめる。269Sは半焼けの資料。底部のヘラ切りの部位が突出する。273Sもヘラ切りの部位が突出し、渦巻き状の痕跡が残る。受部の稜はそれほど顕著ではなく、口縁部が短く内傾する。271Sは底部が平坦でやや突出気味である。このため底部から受部へ外反して移行する。口縁部は直立気味で端部は尖り気味におさめる。受部は外上方に突出する。底部外面はヘラ切りの痕跡は認められず、板目状の痕跡が認められる。272Sは体部の深い資料。底部はなだらかな弧状を呈し、断面三角形となる受部から口縁部が短く内傾して立ち上がる。外底面にはヘラ切りが残る。坏Bは274S～280Sの7点。274S・277S・280Sは底部が平坦で外面にはヘラ切りが未調整のままで残存し、口縁部は底部で弱く屈折して外上方へ直線的に伸びる。275Sの外底面もヘラ切り後未調整の資料だが、外底面中央が突出する。口縁部が歪み、法量が他の同類の資料より小さい。276Sは底部が平坦だが、外底面中央の突起は潰れその周囲にナデ調整を加えている。278S・279Sは底部が丸みをおびる資料でやや体部が深い。外底面中央はやや突出するが、ヘラ切り後は丁寧なナデ調整が認められる。281Sの高坏は坏部が小さめで長く伸びる



遺物の縮尺は1/4

第45図 3号墳石室内出土須恵器位置図



第46図 3号墳石室内須恵器出土状況図

端部をやや肥厚させるが、257Yは丸くおさめる。外底面には回転糸切り痕が残存する。258Y・259Yも南部系の有高台の碗で、高台には粉殻痕が認められる。体部はわずかに内湾し口縁部は外反する。258Y・259Yとも内底面が使用によって摩耗し、259Yの内面にはベンガラが付着している。260Y～262Yは北部系の碗でいずれも底径の狭い底部から体部が若干内湾し、端部を肥厚させる。高台には粉殻痕が残り、外底面は板目・回転糸切り痕、内底面には静止指ナデ痕が認められる。260Yの内底面周縁には輪状のくぼみが認められる。264Y・265Yは北部系の小皿。264Yは端部が尖り氣味で内底面には静止指ナデ痕が認められる。外底面には回転糸切り痕・板目が残る。265Yは端部を面取り氣味に仕上げるもので、底部の板目及び静止指ナデ痕は認められない。266Yは美濃須衛窯と思われる製品で形状は小皿によく似るが、底部に回転ヘラ削り調整が施され、器種は不明である。口縁部は底部で稜をもって立ち上がり、端部は尖り氣味である。時期の特定は難しいが、5型式及び8形式前後のどちらかであろうか。263Yは小型の碗。無高台だが、底部が円柱状に突出するため、高台があるかのような印象を受ける。形状からみて六器碗にちかいものと考えられる。外底面には回転糸切り痕が残り、口縁部はやや外反する。時期は13世紀代と考えられる。

土師皿

267Hの1点が出土した。摩滅が激しく、調整の観察が不可能にちかいが、底部内外面にはわずかに指頭圧痕が認められる。底部は丸みおび、口縁部は短く内湾する。口縁部はやや歪み、それほど丁寧な成形はおこなわれていないと思われる。

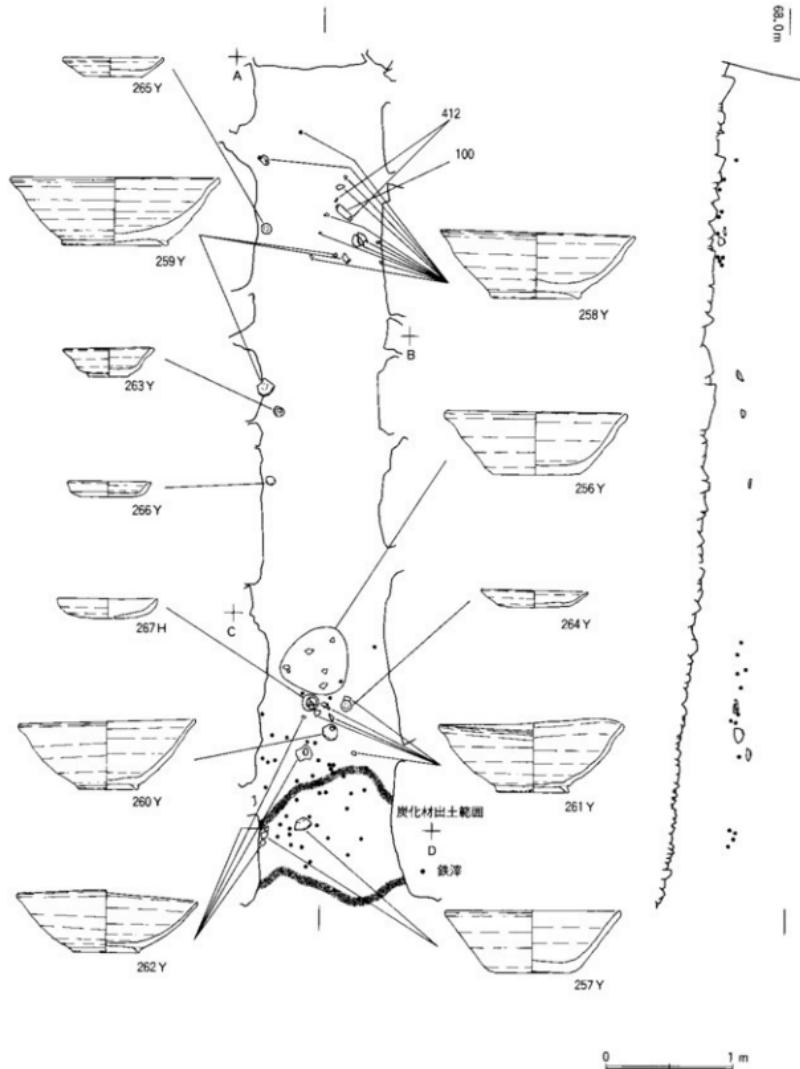
不明鉄製品 (412)

ほぼ完形の製品で刃部が認められる刀状の製品だが、切先が認められない。一応、関部が認められ、両関の形態をとる。全長は16.6cmを測り、刃部長・茎部長はそれぞれ10.5cm・5.1cmであ

柱状の脚部をもつ。裾部は強く外反し、端部は下方へ折り曲げられ、尖り氣味におさめられる。平瓶は3点が出土したが、282S・283Sは口縁部のみで体部を欠損する。口縁部は薄手で直線的に開く。284Sは口縁部を欠損する小型の平瓶。肩部の張りが弱く、底部はなだらかな弧状を呈す。外底面はヘラ切り後にナデ調整が認められる。

山茶碗

256Y・257Yは南部系の無高台の碗。いずれも体部が直線的に立ち上がり、256Yは



遺物の縮尺は1/4

第47図 3号墳石室内再利用面出土遺物位置図



第48図 3号墳石室内再利用面遺物出土状況図

る。刃部の幅は2.4cm前後、関部幅は2.3cmを測り、基部は関部との境で1.7cmでその後茎尻に向かって次第に細くなる。身部の厚さは全体を通して0.5cm前後だが、茎尻がやや細身となる。

その他

SK04（第41・49・170図）

3号墳周溝の南西側に隣接し、周溝を一部新たに掘り下げている。平面形は長軸2.9m・短軸1m程度の不整な橢円形を呈し、主軸はN-15°-Eに向いている。深さは0.2m程度で断面は皿状を呈す。遺物は埋土から須恵器片276点と鉄滓7点が出土した。破片の大半は圓化した290Sの同一個体であり、その他に壺A1点（291S）が出土している。290Sの破片の破断面は新しく、人

為的に破碎されたものと推測される。時期は7世紀後半で、3号墳構築後の祭祀的行為に関する資料である可能性が高い。

図示した290Sは縦耳が4方向に付される壺。口縁部は短く外反し、端部は顯著に面取りが施される。接合の結果、体部上半は復元できたが、中央部分は復元できなかった。底部はやや平坦で体部は内湾しながら立ち上がる。器壁中の気泡が目立ち、製品としては不良品である。体部外面のタタキは細かな平行タタキ目で、内面には彫りの深い円弧状の当具痕が認められる。291Sは壺Aの資料。底部はやや平坦で、外上方に突出した受部から口縁部が短く内傾する。外底面はヘラ切りの後、ナデ調整が認められる。

SX04（第41・49・169図）

3号墳周溝の南端を隣接し、周溝南端を削平して構築されている。規模は長軸7.1m・短軸4.6mとなり大きく、平面形は橢円形である。その平面形状からは住居跡にもみえるが、柱穴・炉跡は検出されなかった。壁高は墳丘側で0.6m、墳丘の反対側で0.2mを測る。墳丘側の壁高の高さは墳丘から連続するため、実際に掘り下げられた深さは西側の深さで0.2m程度であったと考えられる。埋土からは須恵器壺の破片が床面中央や西側で集中してみられ、接合の結果、ほぼ完形の資料288Sとなった。破片点数は計326点にのぼり、埋土中には炭化物も含まれていた。これらの須恵器片のはほとんどは2a層から集中して出土した。SK04と同様、本資料も祭祀に関わって遺構内で破碎された可能性が高いと考えられる。また、鉄滓も18点が出土した。なお、床面でピットを検出したが、掘り下げ時の確認を怠ったため、本遺構に伴うものは不明である。本遺構の南北側に広がるピット群との関わりを考えた方が無難かもしれない。

288Sは口頭部が頭部から外反しながら外上方に立ち上がり、端部下端を拡張する。拡張された端部下端は鋭い稜をもつが、端部は顯著な面をもたず丸みをおびる。体部は倒卵形を呈し、最大径は体部高2/3程度に位置し、底部は丸底である。体部外面には平行タタキ目が認められ、体部内面には円弧状の当具痕が残る。時期は7世紀後半と思われる。

4号墳（第50図）

東埋没谷の調査区北奥に位置し、墳丘・石室とも壊滅的に崩壊していた。その立地条件と残存状況からは本墳の存在は予想外の結果であり、掘り方と床面の残存及び周溝の存在によって古墳と認定した。おそらく、埋没谷を覆う土砂によって破壊を受けたものと思われ、その後、石室の石材の一部は東側に位置する近世墓に持ち去られ再利用されていたと考えられる。出土遺物はすべて破片でわずか数点であり、古墳に関係する遺物は皆無である。石室の開口部はS-39°-Eに向くと推定される。

外部構造

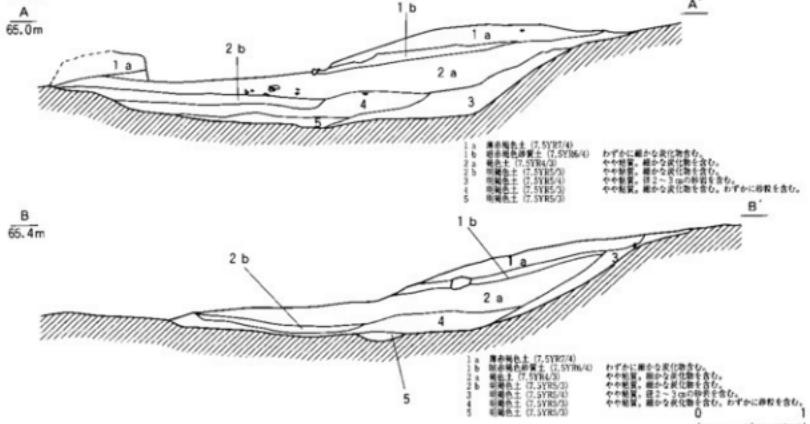
周溝（第50・52・171図）

石室の西側から約2.2m離れて位置し、南北方向に7m程度伸びる。幅は上端で2~3m程度である。断面は浅い皿状を呈し、深さは30cm程度と浅い。平面形が円形とならず疑問もあるが、埋土から多くの須恵器片が出土したことから周溝と判断した。周溝の出土遺物は192点に及び、その多くは須恵器の壺の破片である。壺以外は壺Bと鉢が出土した。接合の結果、295Sの壺がほぼ完形に復元できた。おそらく、周溝において破碎されたものと思われる。

SK04

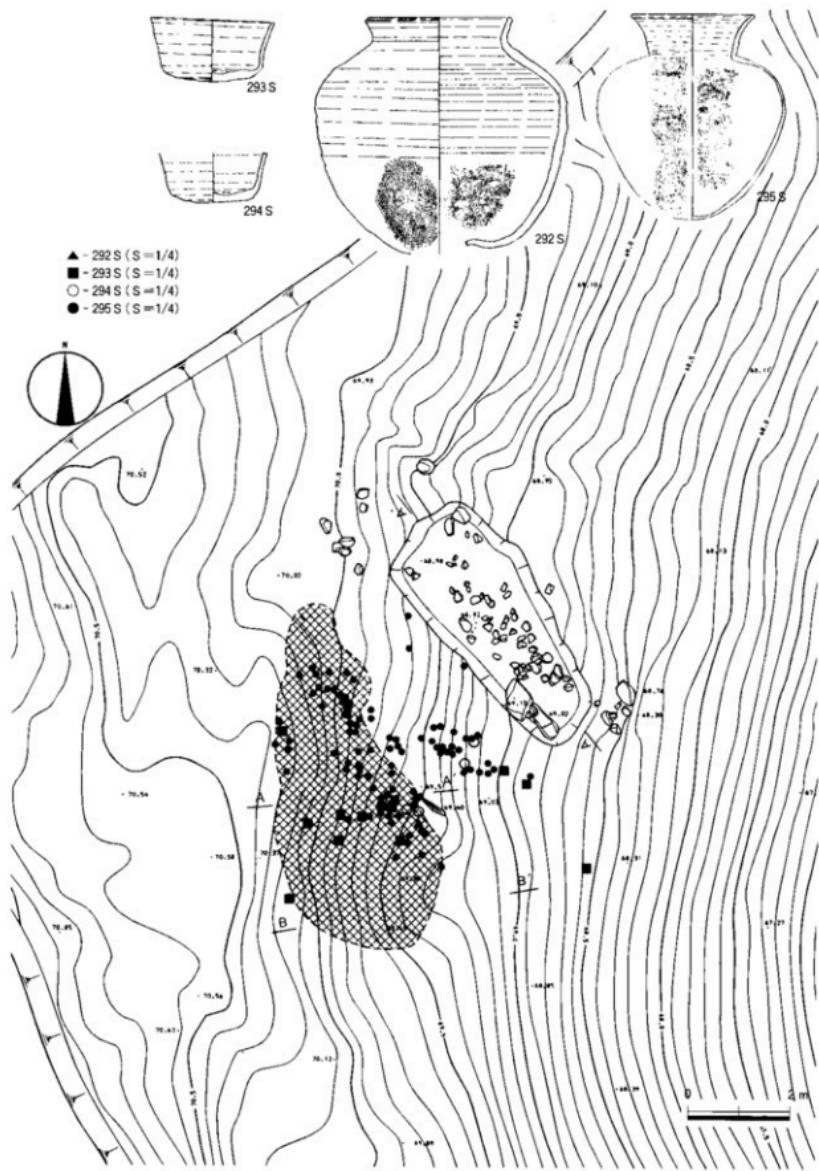


SX04



第49図 SK04・SX04断面図

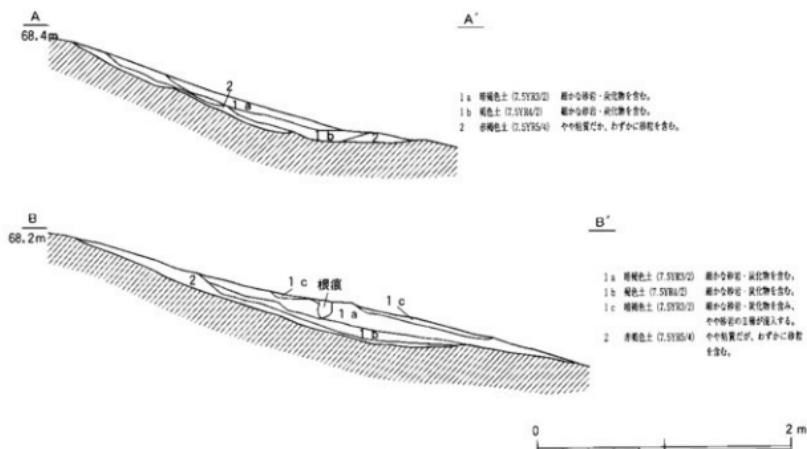
293S・294Sは坏B。294Sは口縁部の一部を欠損する。いずれも底部は弧状を呈するが、外底面の調整については293Sはヘラ切り後未調整、294Sはヘラ切り後ナデ調整である。293Sの口縁部は外反気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。292Sは小型の鉢で体部下半のみにタタキ目が残存する。底部は丸底で残存する外面のタタキ目は格子目である。内面には目の細かい円弧状の当具痕が認められる。体部上半は体部高3/4程度にある最大径から強く内湾して頭部にいたり、口縁部はくの字に短く外反する。体部上半外面は沈線状の凹面が4本程度認められるが、それぞれが完結せず調整も粗雑なため、沈線かどうか判断がつかない。口縁端部には外傾する面取りが認められる。295Sはほぼ完形に復元できた良好な資料。口径28.9cm・器高49.0cmを測る。口縁部は頭部から外反して立ち上がり、ロクロ目が顕著である。端部はやや下端が拡張されて強い稜をもち、外傾した平坦面を有す。体部は倒卵形を呈し、最大径は体部高2/3に位置する。体部外面は細かな平行タタキ目が認められ、タタキ目後に横方向のカキ目調整が加えられる。体部上半のカキ目は方向が横方向にはば揃うが、底部では長さが短く不定方向となる。内面には円弧状の当具痕が残存する。



第50図 4号墳平面図及び出土遺物位置図



第51図 4号墳石室及び掘り方平面図・断面図



第52図 4号墳周溝断面図

内部構造

石室及び掘り方（第51図）

長さ5.8m・幅2.3m程度のコの字形を呈する掘り方を検出した。内側からは2枚の側壁と砾床を確認したので、古墳と判明した。石室は壊滅状態のなかで残存する部分は左側壁の2枚のみで、全容はまったく不明である。床面からは一部根石痕を確認したが、痕跡をすべて検出できなかつた。床面は中央付近に拳大～20cm程度の角礫が集中し、砾床の残存と判断した。

掘り方は北側の短辺では深さ60cmと深いが、次第に浅くなり地山と連なる。裏込め石は床面の外側からそれに類する石材を検出したが、崩壊した石材との判別が困難で断定し難い。

遺物出土状況

埋土からは数点の須恵器片が出土したが、石室周囲及び周溝埋土からの流れ込みの遺物であり、本墳構築時期を知る手かがりとはならないものと考えられる。

6号墳（第53図）

中央尾根上の最北に位置し、本古墳群で最高所に立地する。すでに天井石はなく奥壁及び側壁の一部が露出するなど、かなりの部分が破損していた。埴丘はすべて流失し、周溝も認められなかつたため、正確な埴丘規模は不明である。調査の結果、石室は側壁最下段がすべて残り、その規模は全長5.36mを測ることが判明した。石室の開口部はS-50°-Eである。

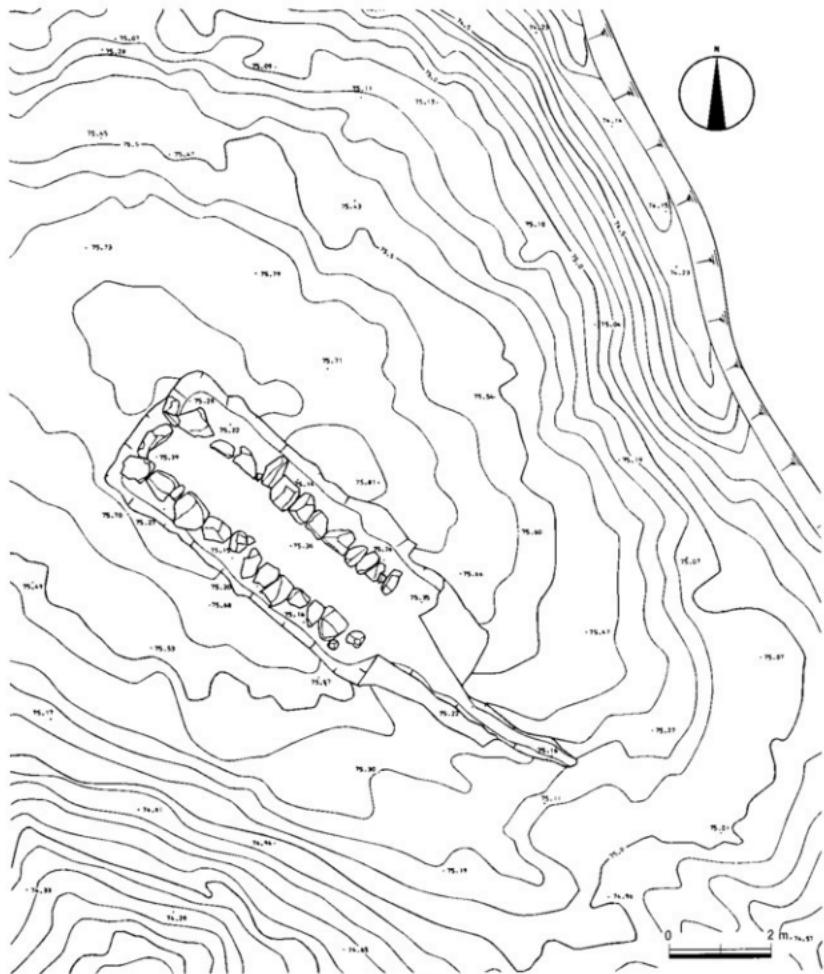
内部構造

石室（第55図）

石室内側に10～15cm程度突出する玄門立柱石によって玄室と羨道が区画されるいわゆる擬似両袖式の横穴式石室。側壁は最下段の石材しか認められずその全体構造を把握することができないが、玄室と羨道の側壁にみる石材には大小差がみられ、やや玄室の方が大きめの石材を使用する傾向が看取される。横目地はある程度意図していると考えられるが、石材の選択の関係か高低差が存する。幅は玄室中央で1.07m、玄門で0.89m、羨道部中央で1.06mであり、玄室・羨道の幅はほとんど変わらない。玄室長は2.52m・羨道長は2.84mを測る。奥壁は右側壁との間に生じた空間を小石で充填する以外は大半を1枚の縦0.9m・幅0.8mの大型石材によって構成されていたと考えられる。立柱石は左右で高さが大きく異なり、右側約0.8m・左側約0.5mである。床面は砾床がなく他の古墳とは相違する状況を検出した。粘性の強い土質で、鉄分が沈着した面を床面として判断した。しかし、後述する石組遺構を考慮すれば、構築以後に改変された可能性も否定できない。

掘り方（第56図）

長方形の平面形を有し、石室の周囲を囲む。その形は石室の外側を取り囲み、本古墳群で確認した掘り方のうち最も整然とした印象を受ける。その規模は長軸6.59m・幅約2.2m程度である。深さは奥壁背後で最も深く60cm程度に及ぶが、開口部ちかくでも深さ40cm程度を有し、基底面が自然地形と連なることはない。奥壁背後の壁面は基底面から最初垂直に立ち上がり中程で角度を変え斜めに立ち上がる。掘り下げる工程を奥壁背後のみ2段階に分けている可能性が高い。奥壁背後から羨道外側までは壁面はほぼ垂直に掘り込まれるが、開口部側の立ち上がりは緩やか



第53図 6号墳平面図

な斜面を呈す。南側短辺中央からは溝が伸びる。溝は掘り方の南側短辺から南東方向にはば石室の主軸延長上に4.32m伸びるが、その突端は砂防工事によって削平され不明である。幅は上場約0.7m・下場0.3mで、深さは10~20cm程度である。おそらく掘り方の壁面が開口部において地山と連ならなかつたために、その排水用の溝として機能したものと推測される。裏込め石は玄室の側壁外側で検出した。大きな石材は用いられず、一部には砂岩も使用していた。立柱石外側は周囲より一段深く削平され、裏込め石を充填していた。玄室中央において掘り方基底面をさらに5

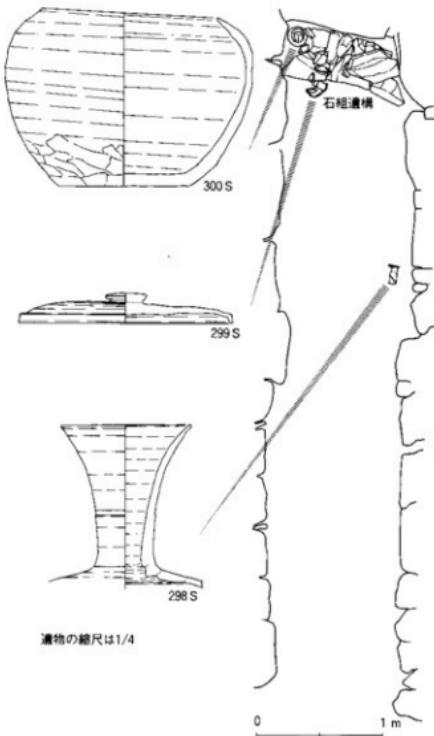
cm程度掘り込んだ直径10cm程度のピットを検出した。ピットの埋土には石室の埋土が混入しており、石室構築以後に掘り込まれた後世のピットと思われる。時期は遺物が皆無のため、判断できない。

遺物出土状況（第54図）

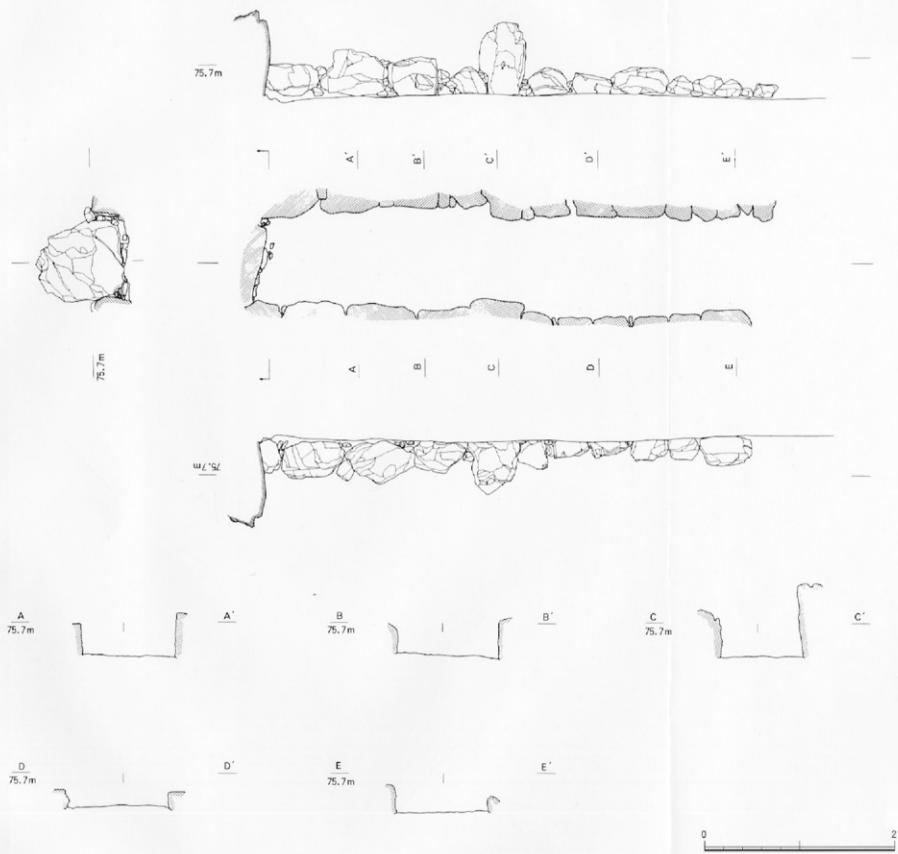
出土遺物は少なく、須恵器の長頸瓶口頭部1点・蓋A1点・蓋C1点・壺1点が石室内から出土した。蓋C・壺の2点は後述する石組遺構に伴うもので本墳の構築時期を示す遺物ではない。前者2点が本墳の構築時期を示す遺物と考えられるが、その出土状況は蓋Aは埋土上層からであり、長頸瓶はやや床面より高い位置で確認したものであって原位置を保持する資料ではない。また、その残存状況からみて両資料とも良好な資料とは言い難い。長頸瓶は8世紀後半、蓋Aは7世紀後半に比定され、両者には時期差が存するが本墳の構築時期は蓋Aの存在から7世紀後半代と考えておきたい。図示した壺A297Sは開口部ちかくで出土した。石室外からの出土であるが、蓋Aと型式差が認められないことから本墳に関係する遺物と考えられる。

石組遺構（第54・172図）

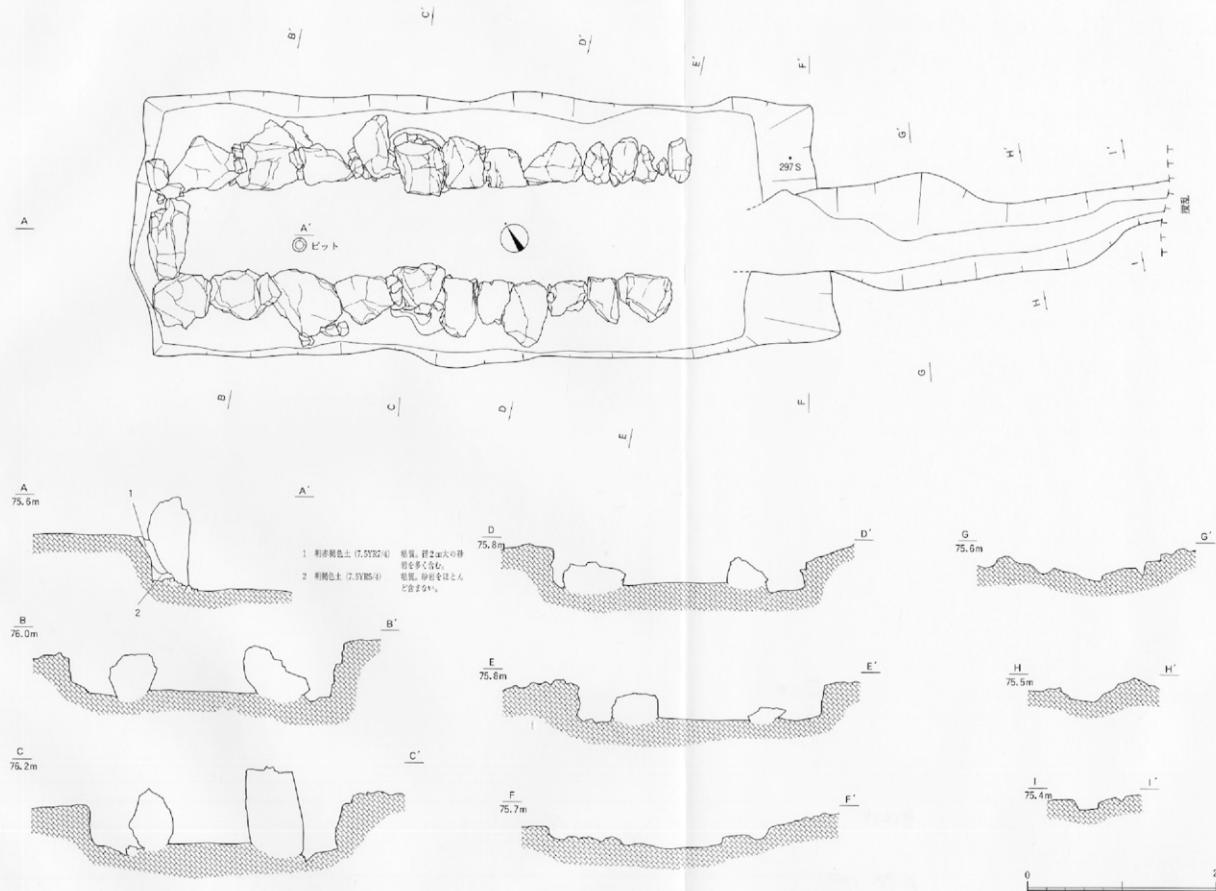
奥壁に沿って約30cm程度の偏平な石材が据えられているのを検出した。奥壁から20cm程度離れて石材を奥壁に平行して3個配し、奥壁と石材との間に生じた空間の左側に遺物を置き、右側にはさらに石材を充填する構造を有す。遺物は左片隅に無頭壺300Sが置かれ、やや離れた位置で破碎された蓋299Sが出土した。蓋は本来壺に伏せられていたものと思われ、その後石室の崩落によってその位置が移動したと考えられる。壺300Sの右側には1個の石材を介して台石が2点出土した。右側の台石は立柱状に置かれていた。出土須恵器が8世紀後半に比定されるところから、石組遺構は本墳構築以後の石室内を二次的利用したものと考えられる。その目的は何らかの祭祀に伴うものとみられる。壺の内容物には土以外に骨片らしきものも含まれ、須恵器は藏骨器として利用されていた可能性もある。



第54図 6号墳石室内遺物出土状況図



第55図 6号填石室展開図



第56図 6号墳石室掘り方平面図・断面図

299Sの蓋Cは平坦な天井部が特徴的な資料で、径が大きい偏平な擬宝珠形鉢を有す。天井部外面には鉢から2~3周程度回転ヘラ削り調整が加えられる。口縁部は天井部との境で強く屈折して垂下し、端部は尖り気味である。300Sは口縁部のない無頸の壺。体部は強く内湾し、端部は丸くおさめられる。底部周縁にはヘラ削り調整が施され、外底面には不整方向のナデ調整が認められる

遺物（第172図）

296Sは口縁部の1/2を欠損する蓋A。天井部は円弧状を呈し、中央には突起が認められヘラ切りによる痕跡を強く残す。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。298Sは長頸瓶。口頸部は頭部から長く外反しながら開き、端部は丸くおさめる。口頸部中央には1本の沈線がめぐる。口頸部と体部との接合は3段接合が認められる。297Sは壺Aの資料。底部は丸く、ヘラ切りの痕跡を残す。受部は水平に突出し、口縁部は強く内湾して端部はわずかに直立する。

7号墳（第57図）

中央尾根の東斜面で確認した。現状では一部側壁が露出し、天井石も認められなかった。墳丘はすでに流失し、周溝も確認できなかったため、墳丘規模は不明である。石室は最下段の側壁が残るが、左右側壁の一部の石材は斜面下方に崩落していた。現存で全長4.83mを測る。石室の開口部の向きはS-36°-Eである。

外部構造

墳丘（第58図）

墳丘は大半が流失し、その原形をとどめていない。とくに東側は急斜面のため、まったく墳丘は確認できなかった。石室背後及び西側でわずかに残る墳丘を確認した。南北トレンチ上では奥壁背後に2.4m程度、墳丘が広がることを確認したが、その厚さは20cm程度と薄く、残存状況が悪い。東西トレンチ上での墳丘は西側壁から外へ1.4m程度広がると観察したが、掘り方の上端を覆う土層ではない。このため、平面上の観察では掘り方埋土との区別が判然としないが、南北トレンチで墳丘と認定した土層と近似する内容をもつことから墳丘と判断した。

周溝（第58図）

石室の背後から北側へ2.5m程度の周辺では地山が断面皿状に落ち込む部分が認められたが、人為的なものではなく、流水によって形成された自然地形と考えられる。

内部構造

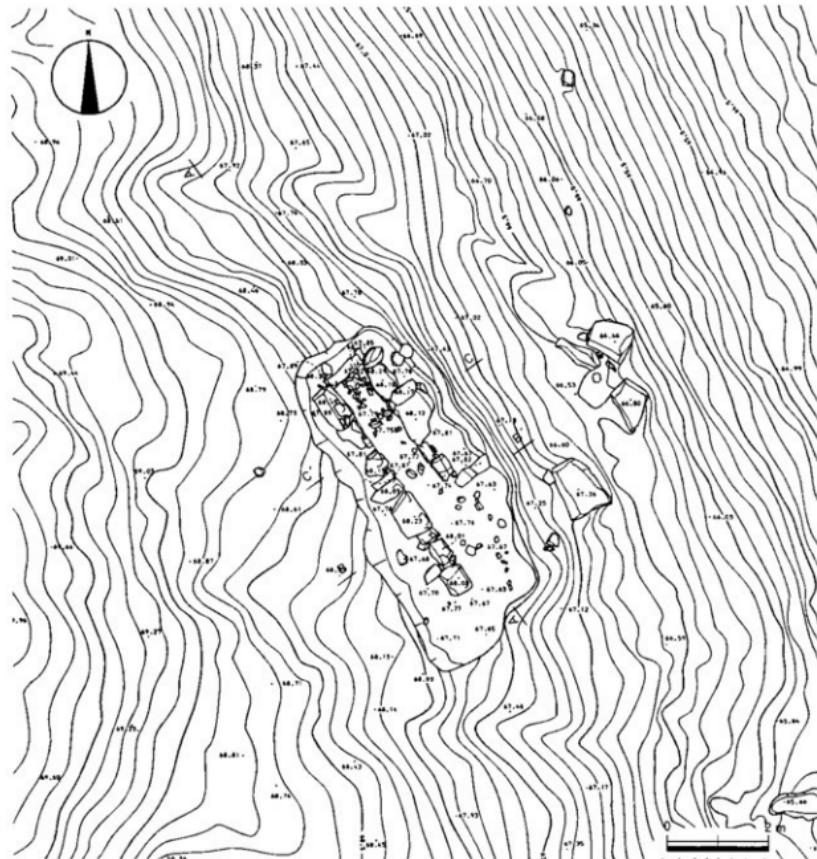
石室（第59図）

玄門立柱石をもたない無袖式の横穴式石室。石室の崩壊が著しく、右奥道の石材はすでになく根石痕も確認することができなかった。左開口部で検出した根石痕から全長は推定で5.42m程度と考えられる。幅は玄室中央で0.77mを測り、やや狭い。側壁は左右でその構造が異なる。左側壁は最下段に幅40~50cmの大の中型の石材を用い、2段目から上は1m弱の大型石材を用いている。横目地は比較的整っている。右側壁は奥壁から2mまでは1mを超える大型石材を最下段に据え、それから先は小型の石材を使用している。この結果、横目地はまったく揃わない。奥壁は現存で高さ0.42m・幅0.78mを測るが、上半分は破損しており、原形は倍ちかくの高さを有するものと

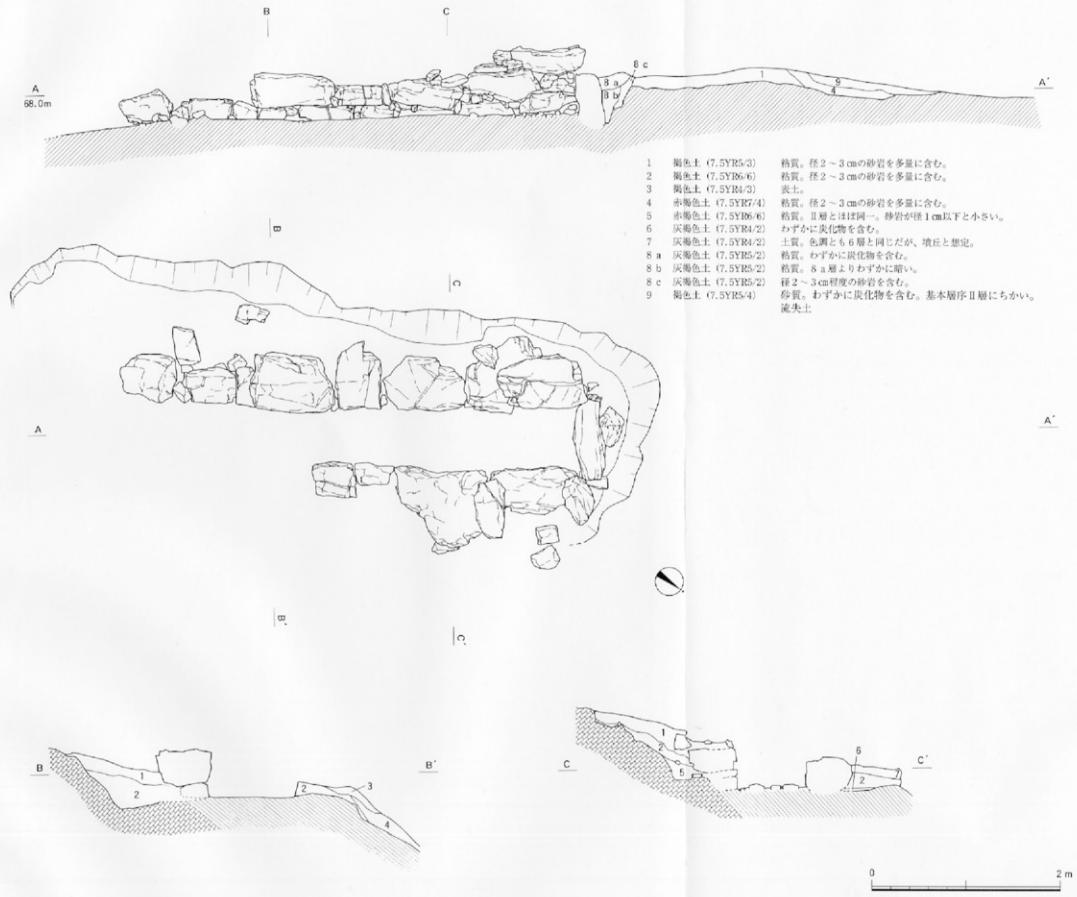
推測される。床面は奥壁側で拳大の礫が密集して検出された以外は、礫の検出はまばらで残存状況が良好ではない。おそらく後世の搅乱を受けたものと判断される。

掘り方（第58図）

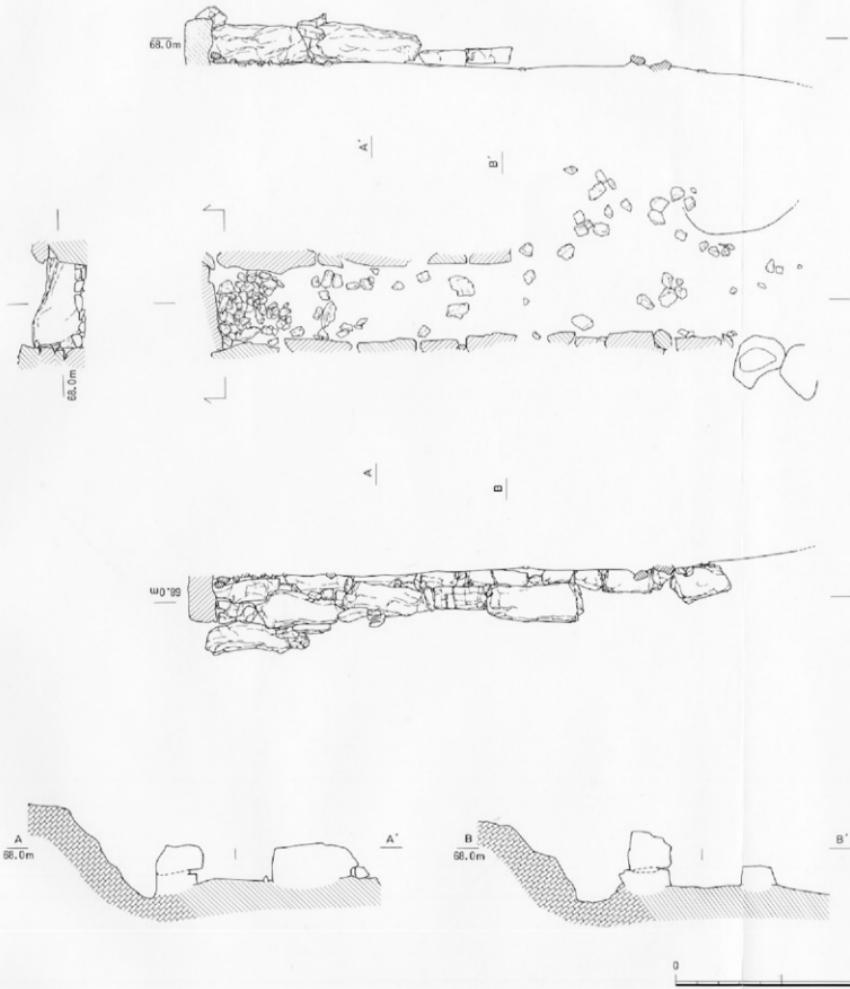
平面形は石室の西半分を逆L字形に囲む状況を呈す。東側の壁面は斜面に立地する制約上、必要がなかったかあるいは流失したものと思われる。長辺6.7m・短辺2.3mの規模を有し、長辺の南端には一部コーナーが観察される。全体に形が整っておらず、短辺北側では石室の石材の合わせて形を外へ膨らませている。壁面の立ち上がりは斜めで、玄室付近で深さは50cm程度である。壁面は開口部ちかくで浅くなり、やがては地山と連なる。裏込め石は顕著でなく、奥壁背後に40cm大の大きな石材が認められた。



第57図 7号墳平面図



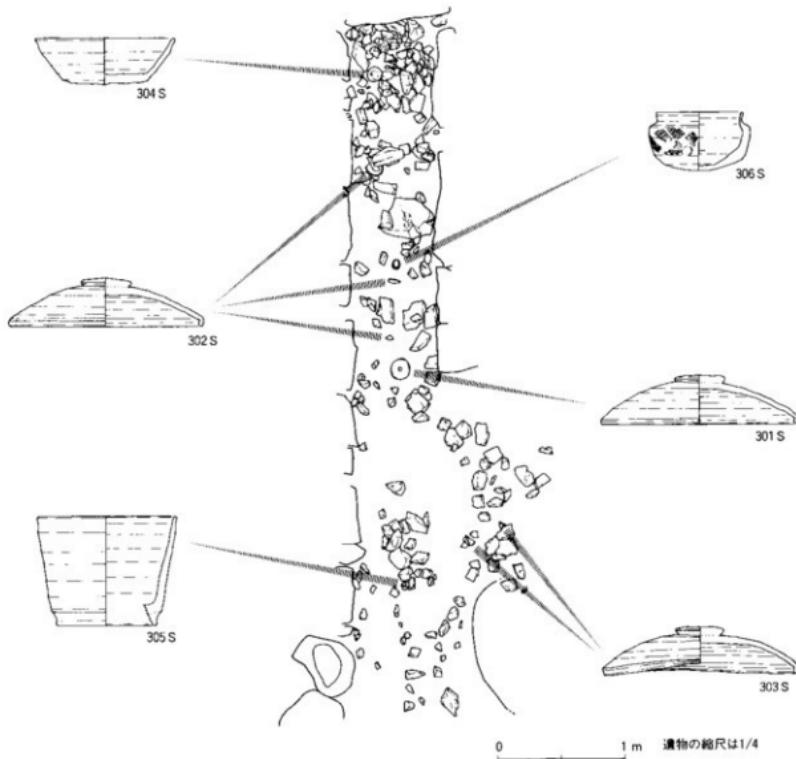
第58図 7号墳石室振り方平面図・断面図及び埴丘断面図



第59図 7号填石室展開図

遺物出土状況（第60図）

出土遺物は少なく石室内から須恵器の壺B 1点・有高台壺1点・蓋C 3点・短頸壺1点・土師皿1点の計7点の土器類が出土した。出土須恵器には時期差が認められ、304 S～306 Sは7世紀末頃、それ以外は8世紀前半に比定される。そのため、304 S～306 Sが本墳の構築時期を示し、残りの須恵器は構築後の何らかの行為に関わるものと思われる。須恵器の出土状況は比較的安定するが、蓋C 301 S・302 Sは8世紀前半代の状況を示すものと考えられる。303 Sは301 S・302 Sと同時期に配置されたが、その破片の分布からみてその後に二次的に移動している可能性が高い。304 Sは8世紀前半に二次的移動を受けた可能性もあるが、床面の砾床に密着し動いた状況は観察されず、埋葬時（7世紀末頃）の状況を保持していると考えられる。床面の砾床の残存が奥壁側の一部のみにとどまり、それとは逆に砾床が欠如する範囲と301 S～303 Sの蓋Cが出土し



第60図 7号墳石室内遺物出土状況図

た範囲が重複する点からすれば、8世紀前半代の301S～303Sの設置に伴い305S・306Sが当初の位置から動かされた可能性がある。土師皿307Hが埋土の上層から出土したが、中世遺構の遺物は307Hのみで再利用の確証は得られなかった。

遺物（第172図）

須恵器

304Sは壺Bに相当する資料だが、口縁部が直線的に外上方に立ち上がり、他の同類に比べてやや異質である。端部直下には強いナデ調整が認められ、外底面にはヘラ切りが未調整のまま残存する。306Sの短頸壺は肩部が強く張り、口縁部が短く外傾する。体部は肩部から内傾し底部との境で稜をもって丸みをもちながら底部にいたる形状を示す。体部・底部外面には格子目のタタキ目が認められる。301S～303Sは天井部が傘状に張りをもち、径が大きく偏平な擬宝珠形鉢を有す。口縁部は天井部との境で弱い稜をもって内傾して折り曲げられる。天井部外面は鉢から1・2周程度回転ヘラ削り調整が施される。305Sは壺Bに高台をもつ形状を示す。底径が小さく、口縁部が長く伸びるため体部が深い。口縁部は底部との境で強く屈折してほぼ直立する。

土師皿

307Hは土師皿。底部はやや平坦で口縁部はわずかに内湾し、端部は尖り気味である。外底面には指頭圧痕が認められるが、その他の調整は摩耗が激しく観察不可能である。口縁部には歪みが認められる。

8号墳（第61図）

中央尾根の南端に位置する。石室はすでに開口していたが、天井石は1枚残存していた。墳丘の大半は流失していたが、調査前の状況は古墳らしい高まりを保っていた。墳丘は直径約10mの円墳で、その中心がやや東に偏る不整な円形を呈す。天井石は原位置を保つておらず調査上の危険を排する観点から、調査着手とともに除去した。石室の開口部はS-32°-Eを向く。構築時期は出土須恵器により7世紀中頃と推定される。

外部構造

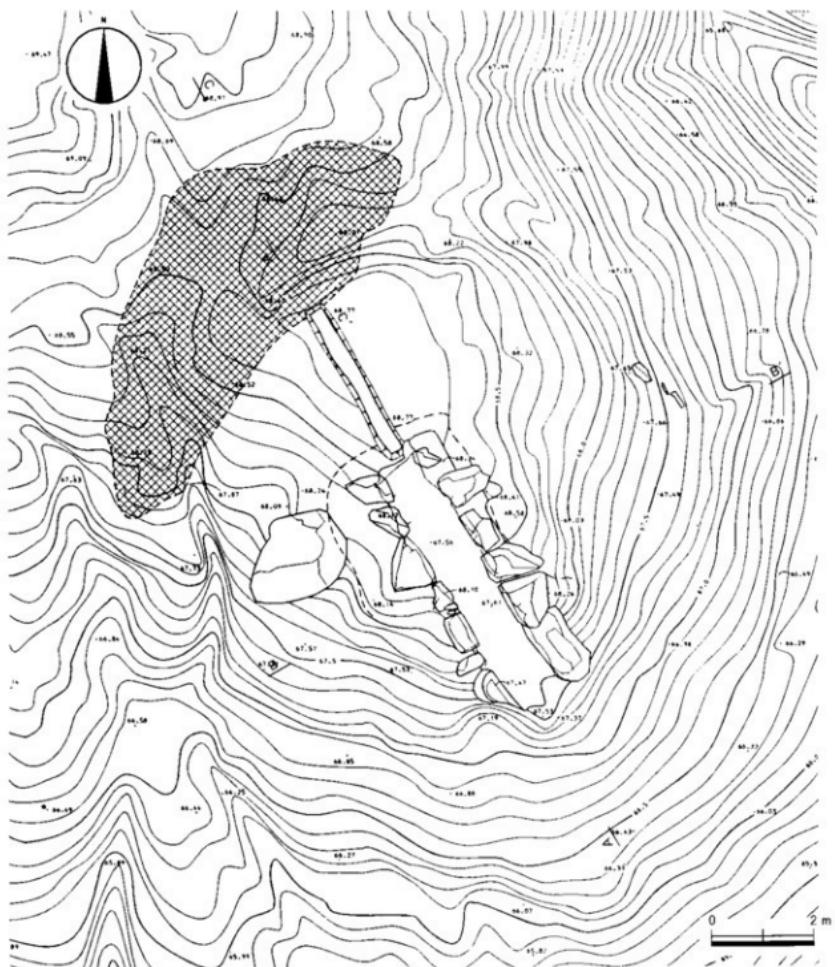
墳丘（第62図）

直径約10m程度の円墳。東西両端の墳裾は一部、砂防林工事により削平され詳細な規模は確認できなかった。墳丘の大半はすでに流失していたが、東西・北トレントでその断面を確認した結果、最大で厚さ約1m程度が残存し、その高さはほぼ石室の最下段の石材付近にまで達する。墳丘の土質はやや粘性のある赤褐色土を中心用いられ、その混入物（砂岩・炭化物）によって細分される。東西トレントの両側ともほぼ同様の傾向をもつ土質の土が順次積み重ねられ、下から炭化物混じりの赤褐色土→砂岩混じりの粘性の強い赤褐色土→砂岩混じりのやや砂質の赤褐色土の順であることが認められる。おそらく、周囲の地山を削平して墳丘を形成したと推測されるが、各々の土層が石室の目地と対応する傾向はなく認められなかった。掘り方は東西トレントでは浅く、10～20cm程度だが、北トレントでは0.58mも掘削されているのを確認した。その深さは奥壁の半分程度の高さに達している。その結果、墳丘上面は外見上、奥壁のほぼ上面に達しているにもかかわらず、実際に墳丘の残存高は最大で50cm程度しか認められなかった。地山を深く

削平することで墳丘築成の手間を省力化しているものと推測される。

周溝（第61・62図）

墳丘の北側を三日月状にめぐる地山を掘り下げた周溝を確認した。やや東端の方が長く伸び、石室の主軸延長上が最も深く50cm程度掘り下げられている。幅は約3.5m程である。埋土から遺物はほとんど出土しなかった。



第61図 8号墳平面図

内部構造

石室（第63図）

全長5.57mの無袖式の横穴式石室。開口部から約2.3mの部分の両側壁には縦長に配置された石材が認められる。玄門立柱石を意図しているものとも考えられるが、他の古墳と比較してその高さが天井まで達しない小振りな石材であり、基底面が石室内側にせり出す部分が看取できないことから無袖式とした。玄室と羨道の境は、この立柱石状の石材までとすると玄室長は2.69mを測る。玄室の側壁は大型の石材を用い、その隙間を小型の石材で充填する。右側壁は横長の石材を縦に配置するが、左側壁では羨道部寄りの側壁が3段に横積みされ、左右の状況が異なる。奥壁は一枚の石材で構成され、いわゆる鏡石を呈する。最大幅は1.15mを測る。

羨道部は全長2.88m・最大幅1.04mで、幅は玄室とほとんど変わらない。側壁は大きな石材を縦に配置して構成する。その様相は右側壁において著しい。左側壁は右側壁に比べて石材が小型のため、より多くの石材を使用している。羨門の石材は認められなかったが、その根石痕は確認することができた。

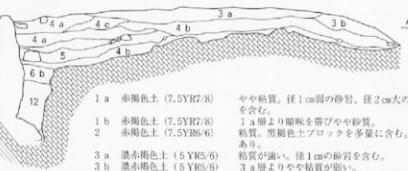
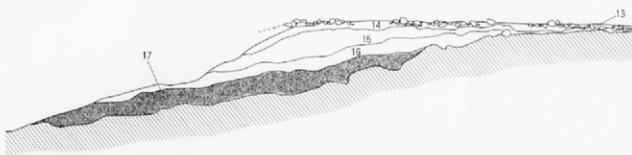
床面は石室全面に小石が敷かれる礫床であり、後述する再利用面との境界が不明だが、二、三重に厚く充填されていたものと思われる。玄室・羨道とも断面形はやや持ち送り気味だが、意図したものかは不明である。なお、排水溝・閉塞石などはとくに認められなかった。

掘り方（第64図）

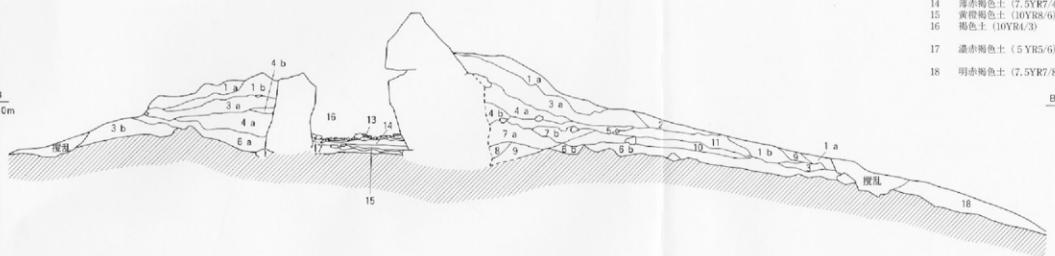
平面形は玄室を囲むようにして地山をコの字形に掘削する。奥壁背面で最大の深さ80cm弱を測るが、コーナー付近で40cm強と次第に浅くなる。玄門の両脇付近では自然地形と重なり、羨道に伴う掘り方は確認できなかった。石室内断面削面を観察すると玄門付近から地山が南へ傾斜することが判明した。羨道部の床面は掘り方に伴う排土によって水平面を形成したと考えられ、うまく掘り方の平面形と合致する。おそらく、羨道部の水平面を玄室内から生じた掘り方排土によって確保した後、墳丘と同質の粘性の強い赤褐色土を使用して床面を構築したと考えられる。掘り方の基底面には側壁を支えるための根石がみられ、とくに立柱石状の石材の基底面は一段深く掘り込まれ、大きめの石材が据えられていた。

遺物出土状況（第65図）

須恵器・鉄器・土師器・耳環が出土した。須恵器・鉄器は床面の小礫の間隙に挟まれ細片となって出土した。その総数は295点を数える。土師器はわずかに数点で、本墳に伴うか断定できない。須恵器の破片は玄室よりも羨道部に偏って出土した。一部の須恵器は石室外から出土した破片と接合するものも認められ、遺物の出土状況は二次的移動を受けたものと解釈される。おそらく、再利用面の形成に伴って攪乱された可能性があり、その観点からすれば床面の礫床も築造当時の様子を示すものではないと考えられる。唯一、317Sの壙Aだけが奥壁右隅から出土し原位置を保っている資料である。細片となった須恵器は接合の結果、ほぼ完形品となる資料が多く認められる。内訳は壙A 1点・壙B 4点・蓋B 3点・高壙2点・平瓶1点・鉢2点である。蓋は破片で多数出土したが、良好な資料は得られなかった。口縁部の観察では数個体分が判別可能だが、それに見合う破片数は石室内からは確認できなかった。蓋も石室内設置されていた可能性もあるが、現状では判断し得ない。ただし、石室外から出土した破片と接合する資料も存することから、

A
68.5m

A'

B
66.0m

B'

C
69.0m

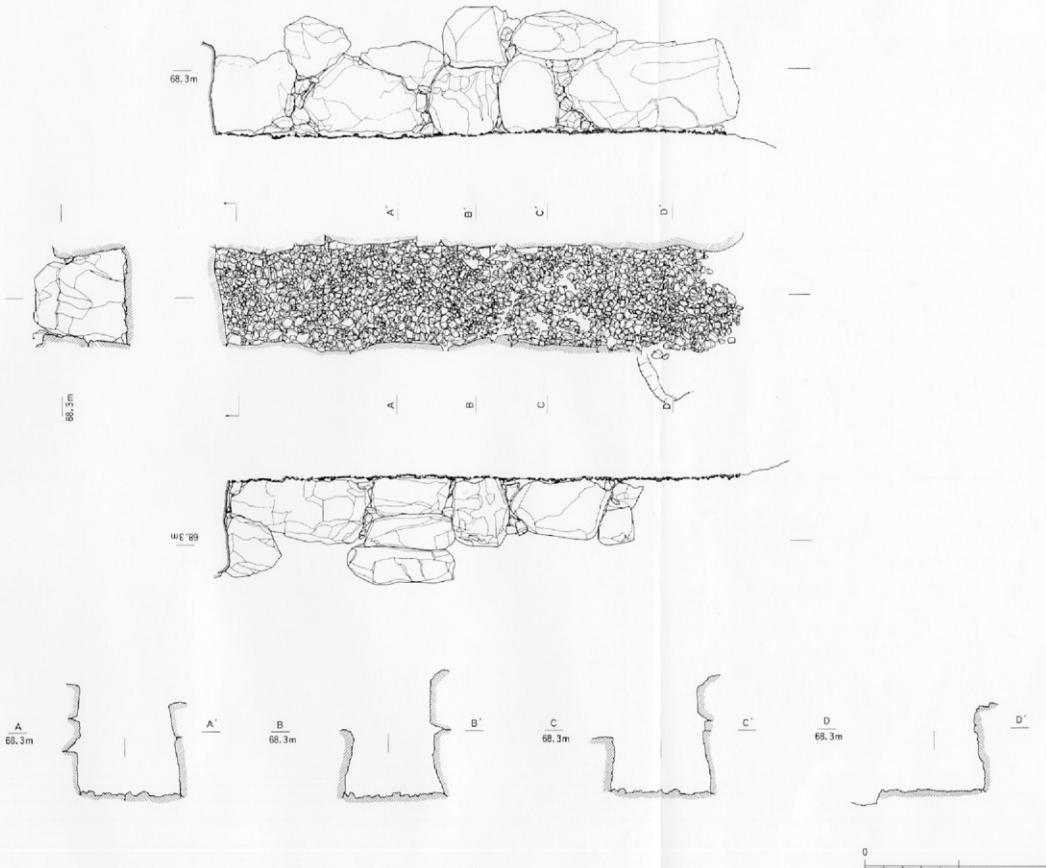
C'

周溝

- 1 a 明黄褐色土 (IODYR6/6)
1 b 明黄褐色土 (IODYR6/6)
2 明黄褐色土 (IODYR6/6)
3 a 黄褐色土 (IODYR6/6)
3 b 黄褐色土 (IODYR6/6)
- やや粘質。径1cmの砂岩を含む。埴丘からの流水失土。
1 a 層上りやや明るく砂質。埴丘からの流水失土。
径1cm程度のチャートの難を含む。
やや粘質。
やや粘質。



第62図 8号埴埴丘・周溝断面図



第63図 8号墳石室展開図



第64図 8号墳石室掘り方平面図

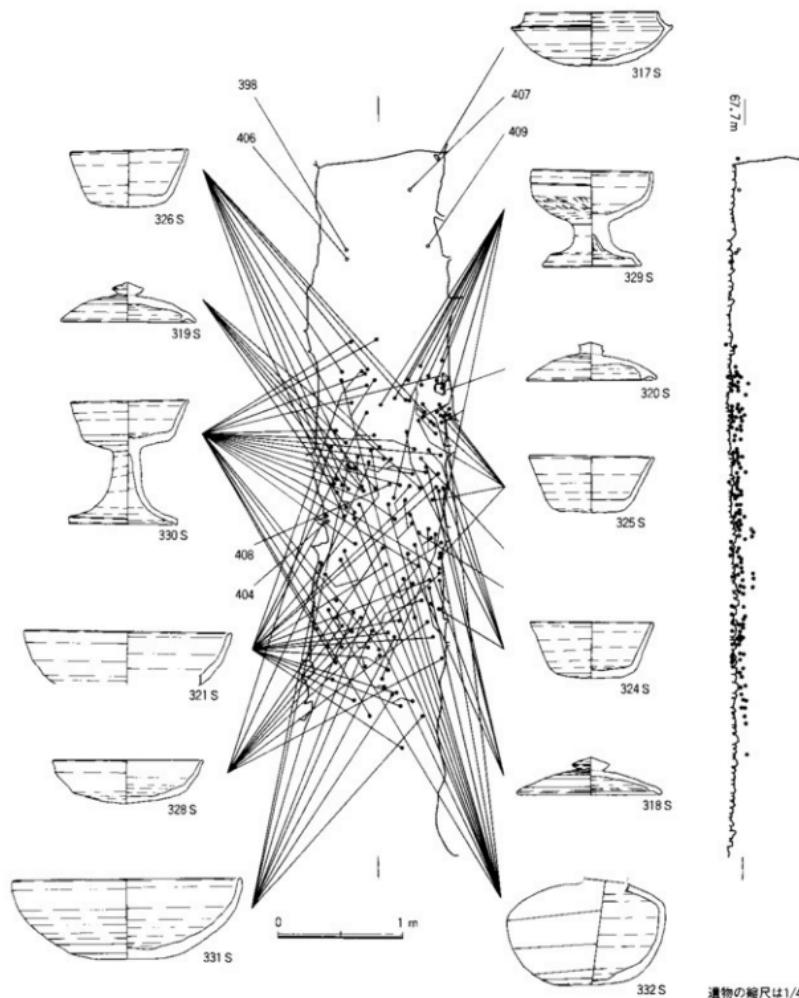
のはる。金環は玄室奥壁側で出土したが原位置は保っていない。鉄釘のうち3点(403・404・406)の出土位置は木棺配置の復元可能な玄室隅付近の位置から出土したが、残りの1点(405)は排水洗浄の折に発見したため、出土位置は不明である。ただし、出土した鉄釘の頭部形状がそれぞれに異なりすべてが同時代とは限らないため、木棺位置の推定は根拠に欠ける。その他の鉄製品は鉄鎌か鉄釘が破損したものと思われる。出土須恵器の大半は7世紀後半代と考えられるが、317Sだけはややそれより古く7世紀中頃のものにちかい。本墳の構築時期は後者の時期をとって、7世紀中頃と考えたい。

再利用面（第66図）

石室床面の確認中に山茶碗が出土したため、精査した結果、ほぼ同レベルにおいて山茶碗3点

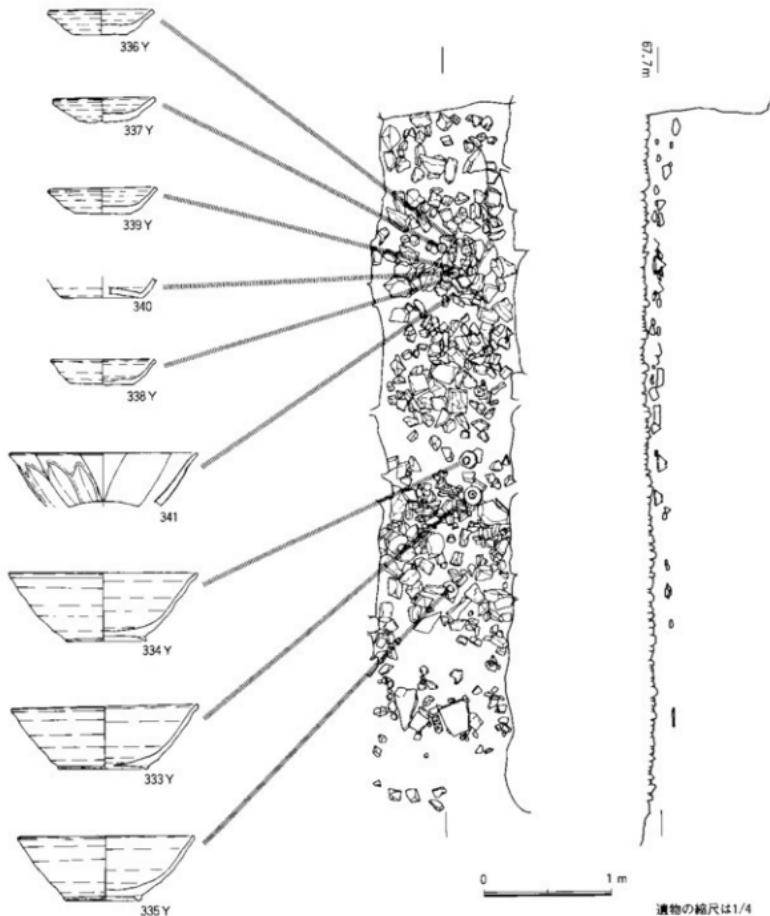
石室内に当初据えられていた壺が後世に持ち出された可能性もある。また、石室開口部の外から出土した須恵器のなかで壺B2点・蓋B2点・高壺1点はほぼ完形の資料で石室内出土の須恵器と同一型式であることから、本来はかなり多くの須恵器石室内に置かれていた可能性がある。鉄器も細片でほとんど原形をとどめず、その種類・数とも不明である。耳環が2点、鉄釘4点の他は細片でその原形は判別できず破片の総計は40点に

・小皿4点・青磁片1点・白磁片1点を検出した。碗は羨道部、小皿・白磁・青磁は玄室とに分かれて出土し、碗は伏せられ、小皿は集められた状態で検出した。これらの遺物の周囲には床面の小砾とは異なる20~30cm大の石材の散布を確認したが、明確な施設とは認められなかった。再



第65図 8号墳石室内出土遺物位置図

利用面と判断したレベルは床面よりわずか5cm程度高いにすぎず、一部の須恵器はこのレベルから出土したものも認められ、床面との識別は困難であった。床面の確定は中世の遺物を確認した後石材を徐々に取り除き、小礫が安定した面を床面として認定した結果である。羨門付近では炭化材の広がりが認められ、その中からは被熱した漆の塗膜（図版58）が出土した。出土した山茶碗・小皿は白土原1号窯期に比定される。



第66図 8号墳石室内再利用面遺物出土状況図

遺物（第173・177図）

須恵器

317Sは他の同類と比して口径・器高とも大きい壺Aの資料。胎土に砂粒を多く含むことも異なる点として指摘できる。底部はなだらか円弧をえがいて水平に突出する受部にいたり、内外面とも丁寧に調整されクロ口が目立たない。外底面中央にはヘラ切りが未調整のまま残り、その周囲を1周程度ヘラ削り調整を加えている。口縁部は受部から内傾して立ち上がり、端部はわずかに直立する。318S～320Sはやや偏平な宝珠形鉢を有する蓋B。それぞれ返りの形状が異なり、とくに318Sは痕跡的な形状を示す。319Sの返りは内傾するが、320Sの返りは下方に伸びる。天井部外面に施される回転ヘラ削りは318Sでは鉢から3/4程度の範囲に施されるが、319S・320Sでは鉢から1・2周程度しか施されない。323S～326Sは壺Bで、324S～326Sは底部が丸みをおびるが、323Sは平坦である。口縁部は324S～326Sは底部から外反気味に伸びるが、323Sは直立気味である。いずれも外底面はヘラ切り後に軽いナデ調整をおこなう。高壺は329S・330Sの2点が認められる。329Sは短脚の資料で壺部底部が円弧状を呈し、口縁部はやや内湾しながら直立する。脚部は短く裾部で強く外反し、端部は据部で屈折してから外反して開く。裾部端部は丸くおさめられる。壺部には1本の細い沈線が認められる。330Sは壺部に壺Bの形状をもつ高壺。壺部底部外面には回転ヘラ削り調整が認められる。脚部はわずかに開き気味で、裾部で外反する。端部は強く屈曲して下方へ折り曲げられ、垂直な平坦面を外面にもち、尖り気味に仕上げられる。327S・332Sは平瓶で327Sは体部、332Sは口縁部を欠損する。327Sには1本の沈線が認められる。332Sは肩部の張りが弱く、体部下半の外面には回転ヘラ削り調整が認められる。底部はやや平坦でわずかにヘラ切りの痕跡及び板目状の圧痕が確認できるが、摩耗が激しい。327S・332Sは胎土が酷似し同一個体の可能性もあるが、332Sの頸部の大きさからみると327Sの口径がかなり大きいため別個体と判断した。鉢は3点認められる。321S・331Sは底部が丸底を呈し、体部が半球状の形状を示す。外底面の中央はやや平坦でわずかにヘラ切りの痕跡を残し、その周囲を1・2周程度の回転ヘラ削り調整が加えられる。いずれも半焼けの資料。322Sは口縁部が内湾気味に直立する資料。胎土に砂粒を多く含む点は317Sに類似する。体部は内湾し肩部の張りは弱い。328Sは壺Aに底部の形状は酷似するが、口縁部の形状が異なる資料。蓋Aにも似るが、底部外面が摩耗しているため、壺として図示した。

耳環

2点が出土した。いずれも細身で遺存状況が悪く、芯がほとんど露出している。398は胴芯金張りで、外径1.35cm・内径0.95cm・厚さ0.39cmを測る。399も胴芯金張りで外径1.45cm・内径1cm・厚さ0.3cmを測る。

不明鉄製品

407～410は鉄錆の鎌身あるいは茎部にも似るが、麻食が著しくその形状が明瞭ではなく判別が困難な不明鉄製品。407は現存長4.2cmを測り、先端が尖り鉄錆の茎部の可能性もある。身部断面幅は0.5cm×0.5cmで、先端部は0.3cm×0.4cmとやや細くなる。408は身部幅が1cmと幅広の製品。厚さは0.8cmを測るが、いくつかの製品が錆で付着したものか逆に1つの製品が剥落して欠損したものか不明である。409も408と同様、個体数の把握が難しい製品。現存長は4cm、身部断面幅

は0.9cm×0.9cmを測り、先端部が尖る。410Sは上下端とも欠損する。身部断面幅は0.5cm×0.6cmを測る。

鉄釘

403～406は鉄釘。いずれも頭部が遺存するが、先端部は欠損する。頭部の形状は405以外はL字状に折り曲げるが、405は幅1cmの方形を呈し、打圧痕が認められる。釘の身部には木質部は残存せず、棺材の利用は確認できなかった。なお、405は石室内排土選別作業中に確認したものである。403は頭部幅1.3cm×1.4cm・身部断面幅0.5cm×0.5cm・現存長1.5cmを測る。404は頭部幅0.9cm×1.1cm・身部幅0.4cm×0.3cm・現存長1.5cmを測る。405は頭部幅0.7cm×0.7cm・身部断面幅0.3cm×0.3cmで、現存長が4.9cmと長く残存する。406は頭部幅0.7cm×0.8cmを測り、身部断面幅が頭部にちかい部分では0.8cm×0.3cmと長方形を呈するが、先端部では0.4cm×0.4cmと方形を呈す。現存長は6.2cmを測る。

山茶碗

333Y～335Yは北部系の碗。いずれも高台には初穀痕がつき、内面の静止指ナデ痕は認められない。333Y・334Yは体部がやや外反し、端部を面取り気味におさめる半焼けの資料。335Yの体部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げられる。335Yのみ外底面に板目が認められる。336Y～339Yは小皿で、337Yは以外は口縁部が中程で弱く屈折して立ち上がる。端部はいずれも面取り気味におさめる。外底面中央には板目、内底面には静止指ナデ痕が認められる。

白磁

340は白磁の底部片。おそらく小さな壺の底部と考えられ、1/3程度が残存する。時期は13世紀代と考えられる。

青磁

341は口縁部がわずか1/12程度しか残存しないが、龍泉窯系の青磁碗で口径は推定で14.6cmを測る。外面には片彫連弁文が認められる。時期は13世紀代と推測される。

漆（図版58）

美道部で被熱を受けた漆製品の塗膜を検出した。塗膜のみが残存するため、本来の製品を復元することは不可能だが、何かの漆塗りの木製容器であったのであろうか。塗膜の裏側には細かい布目の圧痕が残存する。塗膜の分析を岐阜県工芸試験場に依頼した。その結果、漆であることが判明した。

9号墳（第67図）

中央尾根上の南端、8号墳の西側に立地する。調査当初からすでに開口し、天井石も認められなかつた。墳丘もすべて流失し、その規模を明らかにすることはできなかつた。石室の現存長が2.59mと小型であるが、美道部がすでに損失していると思われる。石室の開口部はS-12°-Eである。構築時期は出土した須恵器から7世紀中頃と考えられる。なお、周溝は確認されなかつた。

外部構造

墳丘（第69図）

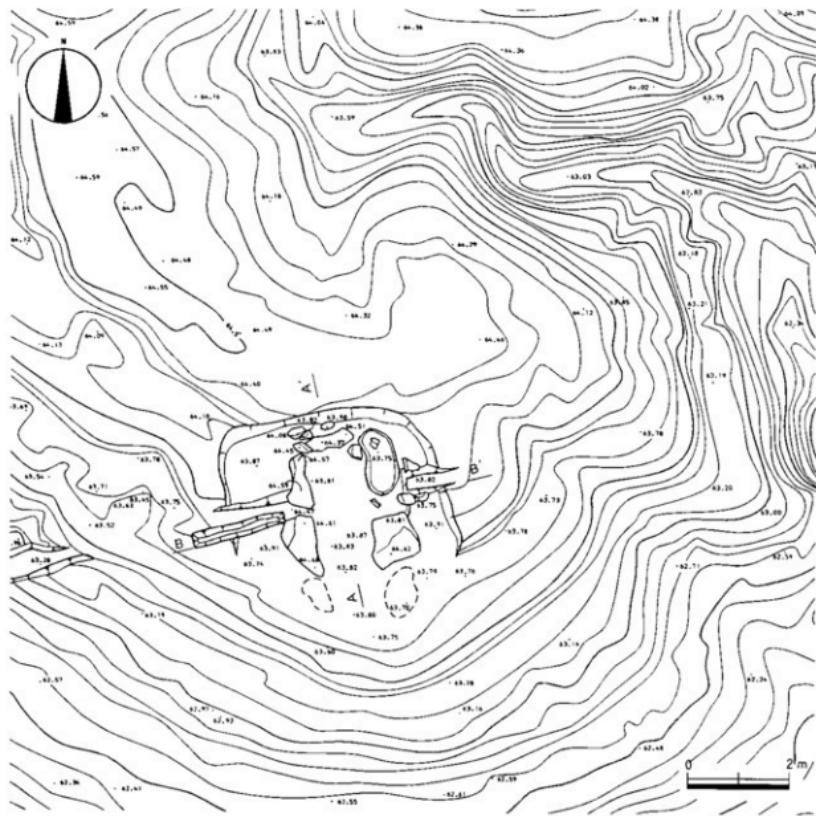
表土を除去後、その直下に地山が検出されたため、墳丘はすべて流失し、その規模は不明である。

もともと墳丘は、後述する石室の掘り方が深く、それとともに現地形が小高い丘陵上に占地したためにそれほどの厚さを必要としなかったと考えられ、その結果、墳丘が早くから流失したと推測される。

内部構造

石室（第68図）

現存で全長2.59mの無袖式の横穴式石室。側壁は1段のみで両側壁で3枚の石材しか認められなかった。おそらくは砂防工事に伴う石室石材の破碎及び抜き取りなどによって、石室の原形が大きく変えられているものと判断される。両側壁の開口部及び右側壁の奥壁側で計3つの根石痕を確認した。この結果、当初は3枚の大型石材を縱に据え置いて石室を構築していたと推定され、その全長は3.4m程度を測る。確認される床面の幅は1.1m前後で、最大幅は開口部ちかくにあり

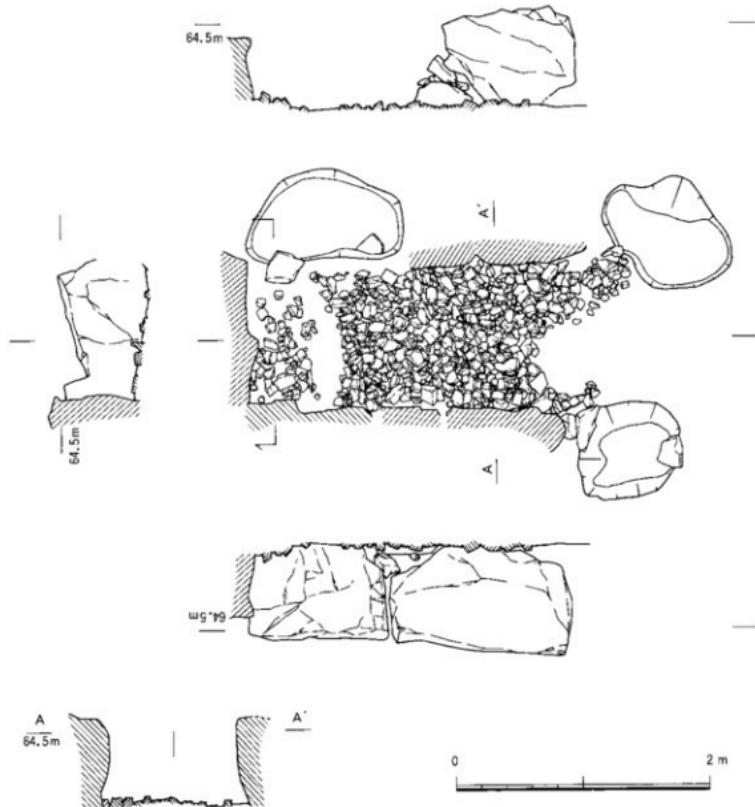


第67図 9号墳平面図

1.14mを測る。奥壁は他の古墳と同様、一枚石で構成されていたと考えられるが、上半分を破碎されている。床面は10cm程度の角礫を敷設した礫床で、開口部付近と奥壁側で一部砂防林工事及び後世の擾乱によって石材が抜き取られている。本墳の石室は他と比較して現存では小型で異質だが、石材の使用方法などは同一の特徴をもつ。残念ながら後世の破壊によりその全容を明らかにすることことができなかつたが、おそらく掘り方の状況から8号墳にちかい石室形態を有していたと考えられる。なお、排水溝・閉塞石の施設は確認されなかつた。

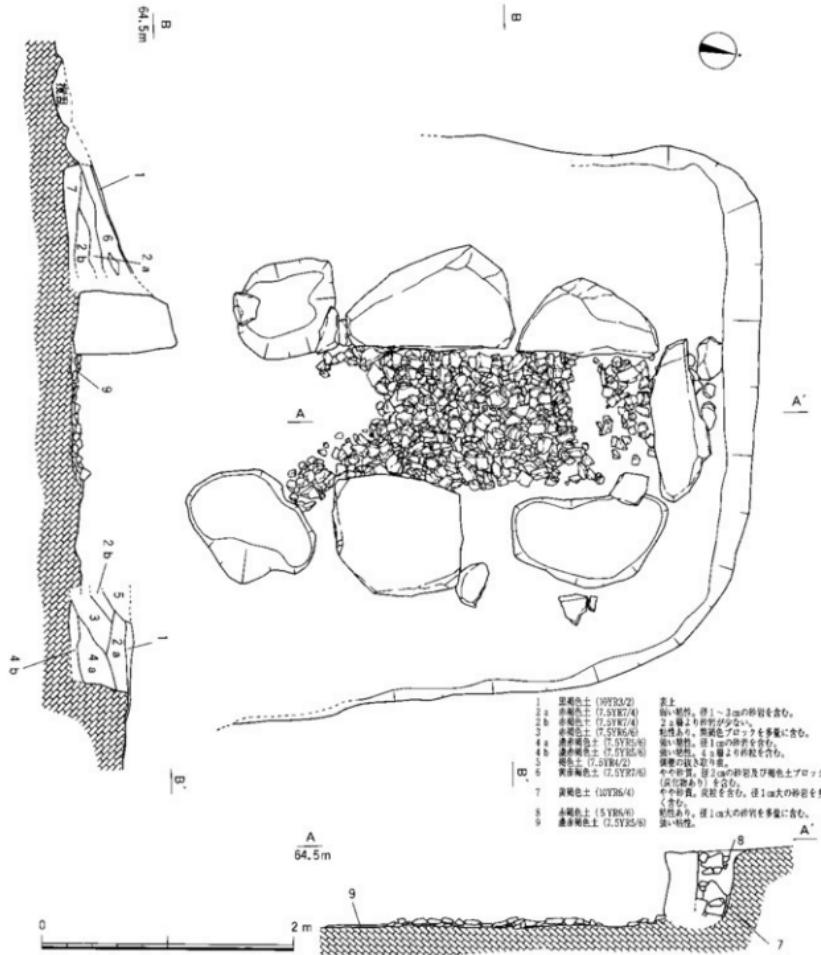
掘り方（第69図）

石室をコの字形に深く削平している状況を確認した。その平面形は石室の形に沿うものの、側壁に対してはやや幅を広めにとっている。奥壁裏側の深さが最大で0.5m程度あり、ほぼ垂直に



第68図 9号墳石室展開図

ちかい角度で掘り込まれ、開口部に向かうにつれて浅くなり自然地形と連なる。奥壁の背後には顯著な裏込め石が認められる。奥壁据え付けに対しては入念な注意が払われたことがうかがわれる。掘り方の平面形は主軸長約4.2m・幅4.5mを測るが、他の古墳と比較するとやや小振りである。石室の残存に対応した平面規模との見方が妥当かもしれないが、石室の構造上の特徴は他の

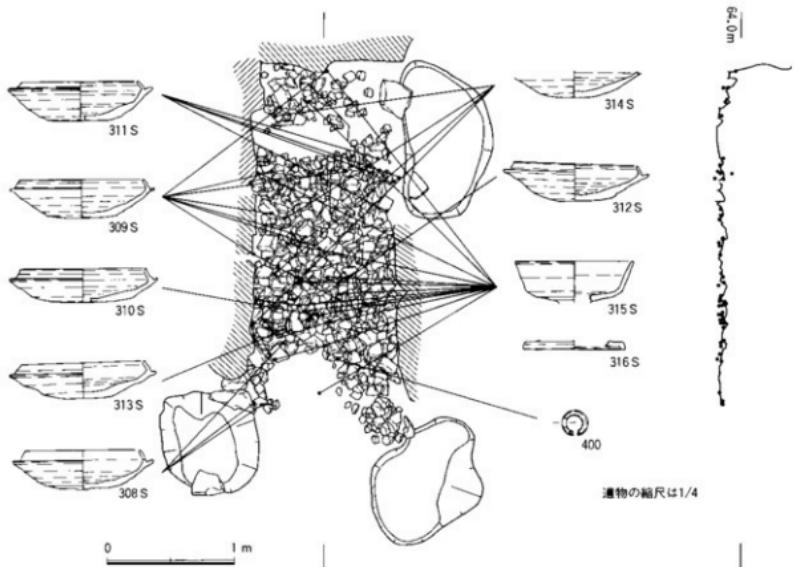


第69図 9号墳石室掘り方平面図・断面図

古墳と近似し、本来の石室の大きさが他の古墳と同様、全長6m規模となることの推測も可能である。その場合、8号墳と同様に掘り方排土を利用して石室前半部（羨道？）を構築した可能性も考えられる。しかし、その痕跡は墳丘がすべて流失した現状では確認するすべがなく、あくまで推測にとどめておく。

遺物出土状況（第70図）

8号墳と同じく、遺物はほとんど細片となって出土した。その分布は石室全体に及び石室内埋土の上層からでも遺物が多数出土しその総数は126点である。本墳が後世に大きく改変された結果よるものと思われ、なかには山茶碗の小皿も認められるが攪乱の埋土から出土したものであり、再利用面は確認できなかった。遺物には須恵器・土師器・金環・鉄器が認められ、他の古墳に比して土師器の量が多いが、すべて細片で図示可能な資料は皆無にちかい。一部の破片に口縁部があり、これらから類推すると土師甕が据えられていたのであろうか。須恵器は接合の結果、いくつかの個体に復元することができた。その結果は壺A 7点・高壺1点である。その接合状況は悪く、破片も細かい。また、古墳の周囲から出土した須恵器のなかには石室内から出土した須恵器と明らかに同一型式であり、本来石室内に伴うと思われるものも存するが、その実態は不明である。石室内外から出土した壺身・壺蓋の底部及び天井部からするとその点数は10点程度が石室に配置されていたものと推測される。甕も大半が破片となって出土し、原形は復元できなかった。



第70図 9号墳石室内出土遺物位置図

耳環は開口部ちかくで床面の敷石の隙間から1点出土した。他の遺物同様、本来の位置は保っていないと考えられる。

遺物（第172・177図）

須恵器

308S～314Sは体部の浅い壺Aの資料。口縁部は突出した受部から短く内傾して短く立ち上がり、底部は円弧状を呈す。310S～312Sの受部は外上方に突出するが、308Sは水平方向に突出する。312S・313Sは外底面中央が突出気味で平坦である。外底面はいずれもヘラ切りが認められ、ヘラ切り後に不整方向のナデ調整が加えられる。314Sは口縁部を大きく欠損するが、壺Aの底部と思われる。315S・316Sは高壺の同一個体と考えられる。壺部の315Sは壺Bにちかい形状で底部外面には軽い回転ヘラ削り調整が認められる。316Sは裾部の破片で脚部は大きく欠損する。強く外反する裾部から端部がわずかに外反して折り曲げられる。

耳環（400）

胴芯金張りで、金張りもほとんど残り残存状況が良好である。外径2.1cm・内径1.15cm・厚さ0.75cmを測り、断面形は楕円形である。

不明鉄製品（411）

残念ながら石室内排土選別中に確認した資料。左右両側の先端を破損しているため全形は不明であるが、その断面形からみて小刀あるいは刀子であろうか。現存長は5.6cm、身部断面幅は2cm×0.7cmを測る。

10号墳（第71図）

中央尾根のほぼ中央に位置する。調査当初は2枚の天井石が認められたが、調査上の安全を図るために石室内の調査に伴い除去した。墳丘は確認した周溝の規模から推測して直径15m前後と推測されるが、その遺存状況は流失及び砂防林工事の結果、それほど良くない。石室は全長6.76mに及び本古墳群中で最大である。石室の開口部の向きはS-36°-Eである。

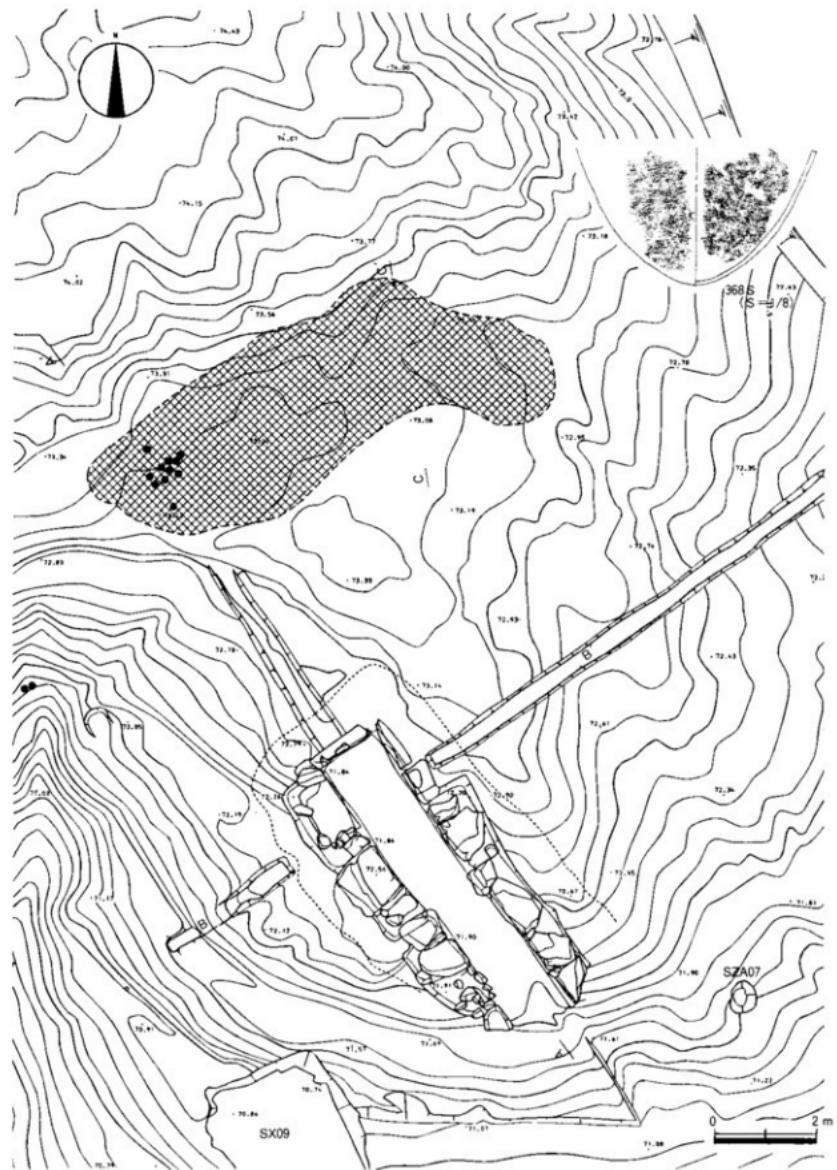
外部構造

墳丘（第72図）

原地形からは調査当初、墳丘らしい高まりを容易に認識することができたため、その残存状況は良好なものと期待していたが、東西及び北方向のトレンチで確認すると意外に墳丘の厚さは残存していないかった。その厚さは東トレンチで最大で50cm程度だが、その部分は地山が下方に傾斜することと対応するもので、本墳の墳丘は当初からあまり厚さを必要としていなかったと考えられる。その理由は後述する掘り方と関係し、掘り方を深く削平することによって実際の墳丘の高さを減じたと思われる。もともと本墳が構築された地形は地山が小高くなっていることから、実際の人为的な盛土とは別に外見上は古墳らしい高まりをみせていたと考えられる。墳丘の土層には砂質の土質のものと粘性の土質のものとが用いられている。

周溝（第72図）

石室背後の主軸延長上から東へ三日月状に伸びる。主軸延長の西側は自然地形によって外見は周溝状にみえる。深さは20cm程度と浅く断面は皿形を呈し、明確な立ち上がりは観察できない。



第71図 10号墳平面図及び周溝出土遺物位置図

幅は主軸ライン上で2.73mを測るが、東側では狭くなる。周溝北西側の埋土からは須恵器の壺片(368S)が出土した。おそらく周溝内で破碎されたものと考えられる。

出土した壺の破片は接合の結果、壺の底部から体部下半の部位が復元できた(368S)。底部は丸底だがやや尖り気味で、体部外面には格子目のタタキ目を有し、内面には円弧状の当具痕が認められる。

内部構造

石室(第73図)

両側に玄門立柱石を有すいわゆる擬似両袖式の横穴式石室。全長は6.76mで本古墳群中で最大規模をほこる。側壁は大型石材を横長に配置するが、1段目しか遺存しておらず残存状況はそれほど良好ではない。玄室は立柱石によって区画され、その全長は3.71mを測る。奥壁は幅1.4m・高さ1.2m程度の偏平な大型石材を用いている。側壁は2枚の石材で構成される。奥壁側の右側壁の石材はさらに大型で縦に据え置かれ、高さは奥壁と差がない。幅はA断面で1.26m、B断面1.33mである。

立柱石は左右の位置がそろわず、高さは右側が1.01m、左側が0.86mと右側より低い。とくに左立柱石は基底面には別の石材が充填され、立柱石の石材としてやや手抜きの感がある。立柱石間の幅は1.14mで玄室幅と比べるとかなり狭くなるが、内側への突出は2~3cm程度であり、あまり目立たない。

羨道は全長3.05m・幅1.16mである。側壁は最下段の石材しか認められないが、3枚で構成されていたと思われる。左側壁は立柱石の石材を除いてすでになく、中央の石材の根石を検出したが開口部については石材の有無を示す痕跡を確認できなかった。

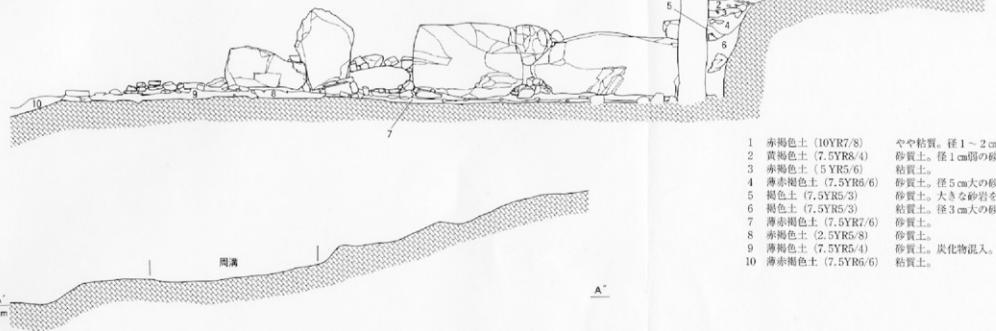
床面は拳大~20cm大の角礫が敷かれる礫床である。玄室奥側で大きめの石材が目立つが、全体に乱雑で、それがとくに意図されたものかは不明である。また、かなりの部分において礫が認められず、安定した床面とは考えにくい。その要因は後述する再利用面によって攪乱されたものと判断される。床面除去後、羨道の主軸上で長さ1.7m・幅10~15cmにわたって10cm程度他より落ち込む溝状の遺構を検出したが、これが排水溝に相当すると考えられる。なお、閉塞石などの施設は確認できなかった。

掘り方(第74図)

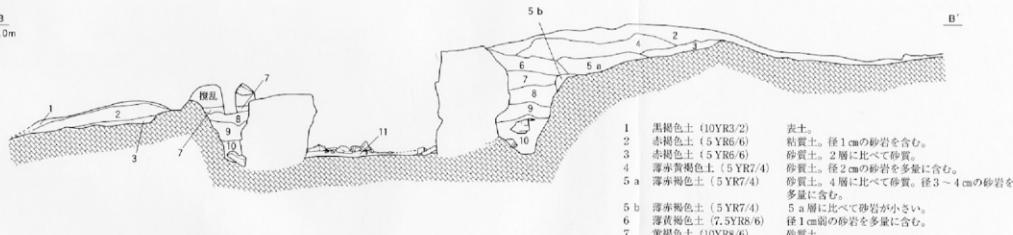
ほぼ玄室及び玄門立柱石を取り除むようにして、長軸5.2m・短軸4.2mの規模で地山を深く掘り込んでいる。その深さは奥壁裏側で98cmにも達し、玄室の両脇でも60~70cmの深さが認められる。玄門立柱石の両外側では30cm強の深さが存するが、その後急激に深さを減じ、自然地形と連なる。平面形はコの字形を示すが、玄室の左外側では石材の形状に合わせてクランク状にその形状を変えている部位が認められる。

掘り方の基底面には30cm内外の石材を用いた根石が検出され、大型石材を使用した玄室の側壁に顕著である。奥壁は背後に大きな石材、石室内側に小型石材を配している。玄門立柱石の周囲にも根石が目立ち、とくに左側ではさらに10cm程度深く円形に掘り込んだ中に根石を据え置いている。奥壁・玄門立柱石は縦長の石材を用いる制約上、とくに入念な準備を図っていると考えられる。

A
73.0m

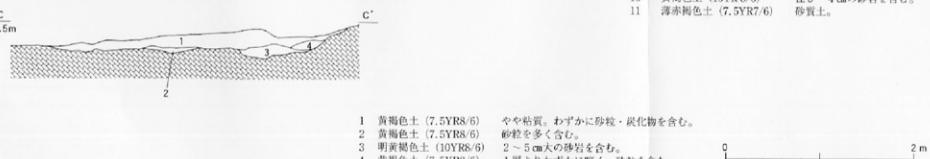


B
73.0m

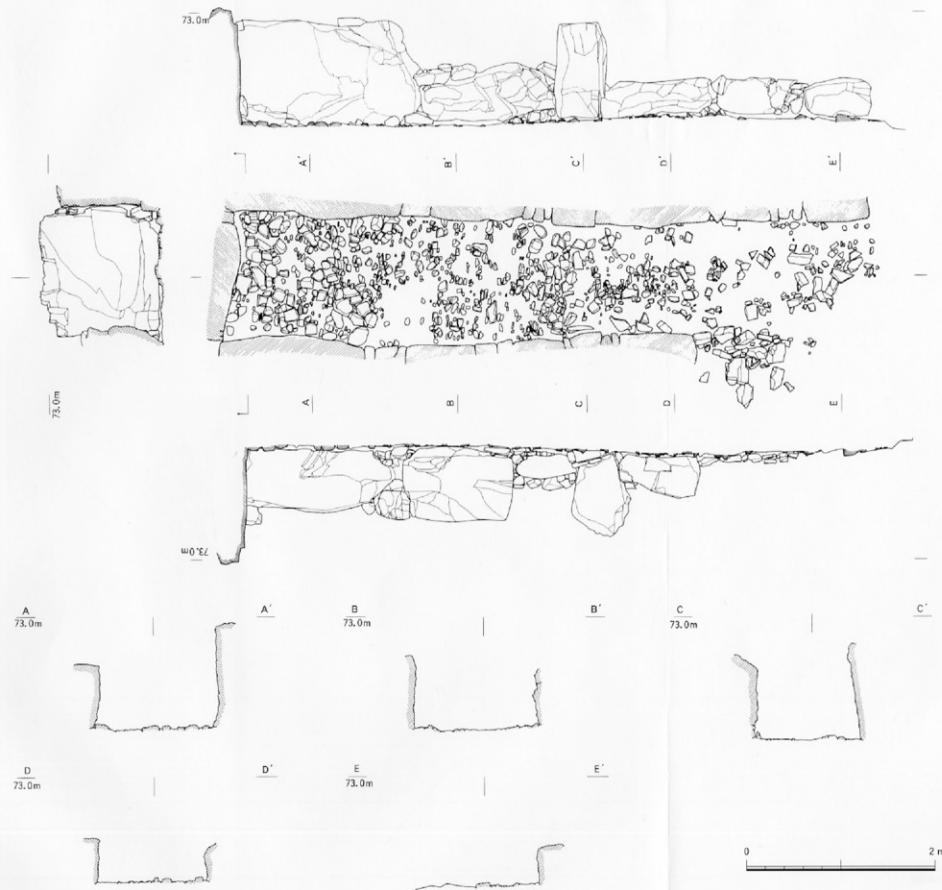


窓溝

C
73.5m



第72図 10号墳埴丘・周溝断面図

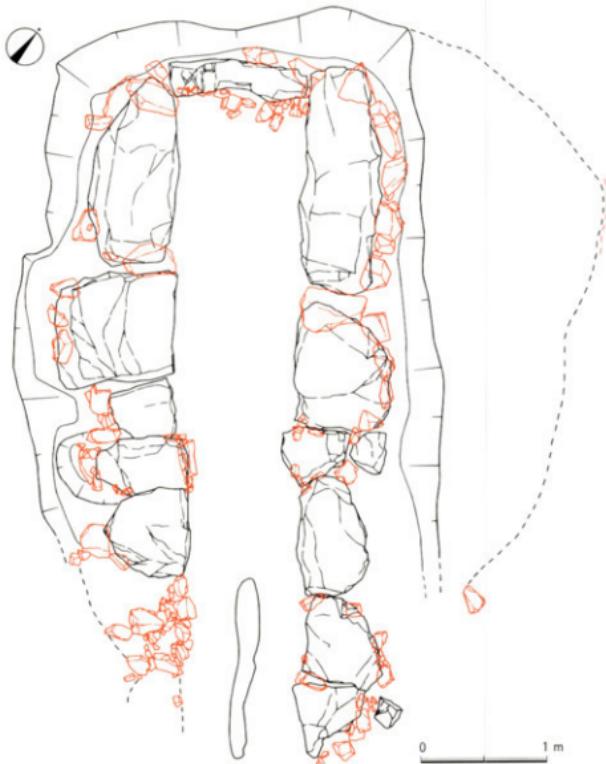


第73図 10号填石室展開図

遺物出土状況

(第75図)

出土遺物は細片で388点が出土したが、そのほとんどは後述する再利用面に伴う中世の遺物である。本墳構築時期を示す良好な遺物は少なく、復元可能な資料は須恵器の環B 2点・平瓶1点(口頭部)・鉢1点にすぎない。他に須恵器壺・土師器甕も出土したが、細片で原形を復元できなかつた。須恵器・土師器片の出土は石室

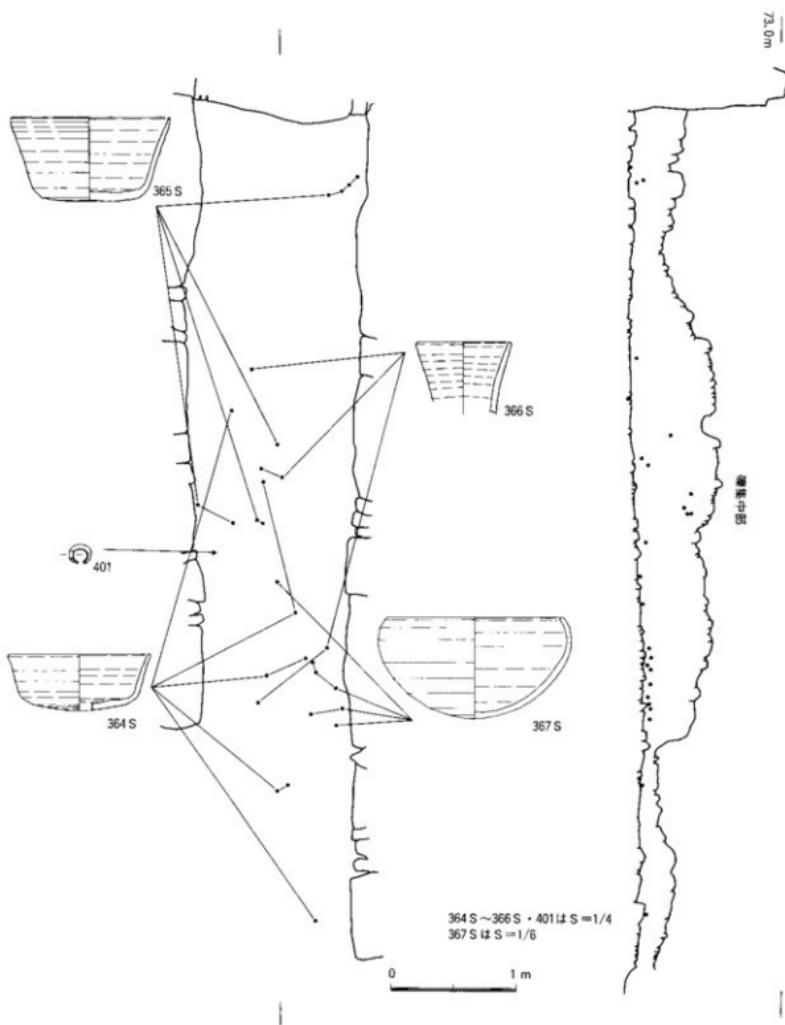


第74図 10号墳石室掘り方平面図

全体に及ぶが、いずれも出土レベルが一定せず、なかには床面より高く中世の遺物とほぼ同レベルで出土した破片も存する。これらの破片は二次的に移動したものと推測され、その分布は玄門付近及び玄室中央に偏り、後述する再利用面の遺物出土状況と重なる。左玄門立柱石際で耳環が1点(401)出土したが、その出土状況は原位置を維持していない。

再利用面(第76~78図)

天井石除去後、石室内を掘り下げる過程で拳大の礫が玄門付近に集中する状況を検出した(以後、礫集中部とする)。この礫集中部は羨道部後半~玄室前半部に及び周開の面より40cm程度高く、断面が台形を呈する。礫集中部周開の羨道前半と玄室奥側には20~40cmの大きめの板状の石材が散布し、玄門付近の礫集中部との関連を想定したが確証を得るには至らなかつた。このため、一部羨道前半から礫を除去しつつ掘り下げ始めたが、山茶碗の破片が出土し床面とは別の再利用面が広がっているもの



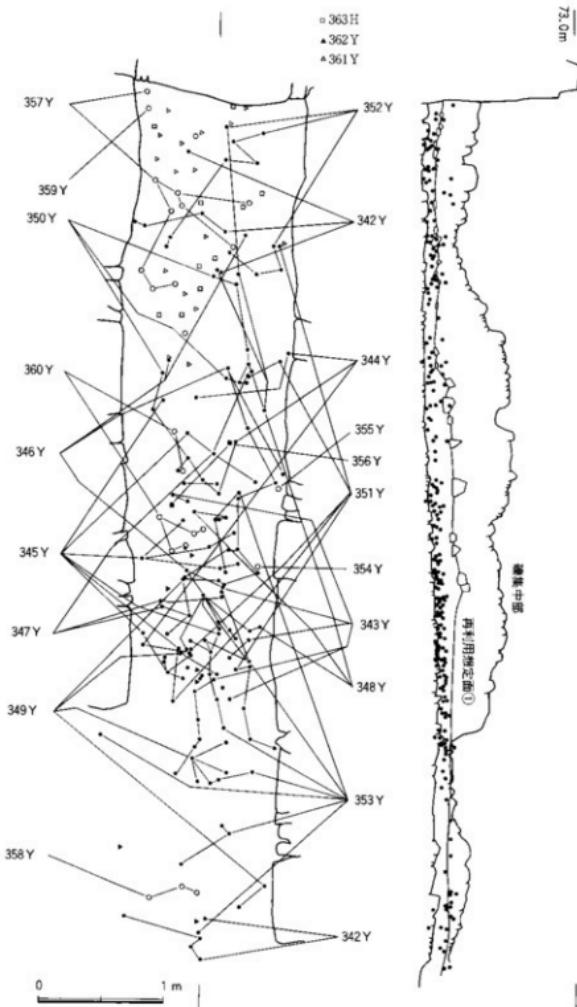
第75図 10号埴石室内出土遺物位置図



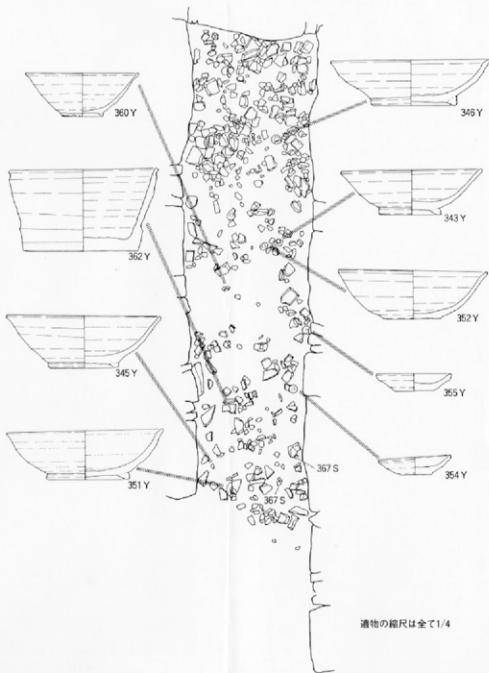
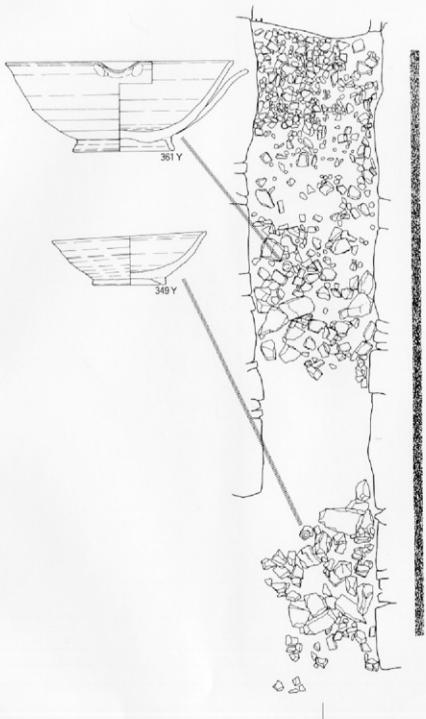
第76図 10号墳石室内礫集中部検出状況図

と考え、礫集中部周囲のレベルに合わせて精査をおこなった。出土遺物は接合の結果、山茶碗19点・土師皿1点・鍋1点の個体数に及び、攪乱あるいは盜掘によるものではないと想定される。一部は礫集中部からも出土したが、礫集中部がどういう性格を有するものは不明である。破片の出土は玄門付近と奥壁側にやや偏り、床面より5~10cm程度高いレベルで出土するものが多く、遺物取り上げ後、部分的に炭化材が散

布する状況が認められた。この床面より5~10cm高いレベルで遺物が多く出土したため、これを調査当初では再利用面と想定したが（再利用想定面①）、その後構築時床面を確定した段階においても山茶碗の比較的大きめの破片が散在し（再利用想定面②）する状況を検出した。このため、上部の礫が集中する高まりから下部の構築時床面までのどの段階を再利用面と確定するかについては確証を得られなかった。出土した山茶碗には美濃須衛窯産と北部系のものが認められ、美濃須衛窯産は碗11点・小皿1点・片口鉢1点・匣鉢1点を数える。北部系のものは碗4点・小皿1点が出土した。時期は寒洞1号窯式期～明和1号窯式期と幅がある



第77図 10号埴石室内再利用面出土遺物位置図



第78図 10号填石室内再利用面遺物出土状況図

が、大半の資料が寒洞1号窯式期前後と考えられる。358Yは白土原1号窯式期、354Y・360Yは明和1号窯式期に比定され、寒洞1号窯式期に後続する時期の資料は北部系のものに限られる。

遺物（第174・175・177図）

須恵器

364S・365Sは坏Bの資料で、365Sはとくに口径が大きく体部が深い資料である。いずれも外底面にはヘラ切りが未調整のまま残存する。364Sは口縁部がわずかに外反し、底部は緩やかな弧状を呈す。365Sは口縁部が内湾気味で、底部は平坦である。366Sは平瓶の口頭部。口頭部は直線的に開き、端部で若干内湾する。367Sは体部が半球形を呈するいわゆる鉄鉢形の鉢。口縁部は内湾し、端部はわずかに内傾した面をもつ。底部の内外面は使用によるものかは不明だが、摩耗した痕跡が認められる。

耳環（401）

胴芯金張りの耳環。遺存状況が悪く、金張りは内側しか認められない。外径1.755cm・内径1.1cm・厚さ0.55cmを測り、断面形は梢円形を呈す。

山茶碗

348Yは出土した山茶碗中で最も古相を呈する資料。高台は比較的高く、断面形が三角形を呈す。体部はやや張り認められ、中程から口縁部が外反する。外底面は回転糸切り痕をそのまま残し、高台には初穀痕が認められる。また、施釉が口縁部にのみ認められる。以上の観察のうち高台形状・施釉に着目すると348Yの資料は後述する船山北2号窯の資料より先行する要素が認められるため、12世紀の前半代の年代が想定される。胎土は美濃須衛窯に類似するが、初穀痕がつく点に疑問があり、判断できない。342Y～347Y・350Y・351Y・353Yは法量の大小差は存するものの形状・胎土・焼成などが酷似し、美濃須衛窯産のはば同一時期と思われる資料である。347Y・353Yは底部を欠損するが、すべて有高台の碗で底径・口径とともに山茶碗としてはかなり大きな部類に入る。高台は幅が厚く、外側が丸みを帯び、内側は外傾する。体部は内湾し、端部でやや外反する。外底面には回転糸切り痕が未調整のまま残る。これらの資料は後述する船山北2号窯の碗IBに類似する高台形状が認められるが、法量が2号窯の碗IB類を凌駕していることから、2号窯の先行する時期の資料と想定したい。343Y・344Y・346Y・347Yは半焼けの資料。352Yも美濃須衛窯の資料で、無高台の碗。外底面には未調整の回転糸切り痕が認められる。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。時期は前述した有高台の碗と同じ時期を想定したいが、疑問も残る。361Yは胎土・焼成からみて美濃須衛窯産の片口鉢。体部から口縁部にかけては碗形に類似し、端部は外反気味に丸くおさめる。高台は短くハの字に伸びる。外面の底部から体部中程までは回転ヘラ削り調整が認められる。注口部は二本の指で器面を内側から外側へ引き伸ばして作出了るものと思われ、注口部の両側には顯著な指頭圧痕が残る。時期は類例が少なく判断が難しいが、とりあえず前述の美濃須衛窯の碗と同時期としておきたい。362Yは匣鉢で美濃須衛窯産と思われる。外底面周縁にはヘラ削り調整が認められる。時期比定は361Y同様困難だが、美濃須衛窯である点を重視すれば前述の碗と同時期の可能性が高い。357Y～360Yは北部系の碗で、美濃須衛窯とは異なり時期幅が認められる。いずれも高台には初穀痕が認められ、外底面には回転糸切り痕を残す。357Yは器壁が厚めで、幅広の高台をもつ。体部は

わずかに内湾し、端部は直立気味となり尖り気味に仕上げられる。時期は浅間窯下1号窯期～窯洞1号窯期に比定される。359Yは直線的な体部をもつ資料。時期は窯洞1号窯期前後と考えられる。358Yは357Y・359Yと比べると底径の縮小化がみられる資料。時期は白土原1号窯期と考えられる。360Yは法量がかなり小型化した碗で大畠大洞4号窯期のものと思われる。内底面中央に静止指ナデ痕が認められる。体部は内湾しながら立ち上がり、端部はやや肥厚気味である。354Yは北部系の小皿。外底面には回転糸切り痕を残すが、板目は認められない。内底面の静止指ナデ痕も認められない。時期は窯洞1号窯式期の前後であろうか。355Yの小皿は半焼けの資料で美濃須衛産及び北部系の判別が不可能な資料。形状は354Yに類似するため、時期はほぼ同様と考えられる。

伊勢型鍋（363H）

体部と頸部の境は明瞭で、頸部はほぼ直立し口縁部は外反する。端部は内側に折り返され、若干内湾する。頸部外面にナデ調整、体部外面にハケ調整の痕跡がわずかに確認でき、体部から頸部外面にかけて煤が付着している。

土師皿（356H）

丸みをおびた底部から口縁部がつまみ上げられ直立気味となり、口縁部には歪みが認められる資料。底部内面にわずかに指頭圧痕が残る以外は摩滅が著しく、調整の観察は不可能である。

11号墳（第79図）

中央尾根のほぼ中央、10号墳の北西に位置し、やや西斜面側に偏って立地する。墳丘はすべて流失しその規模は不明であり、石室自体も砂防林工事による破壊が著しい。調査前はかろうじて天井石が1枚残存していたが、石室内の調査のため除去した。石室は確認した根石痕から推定して全長5.63m程度と思われる。石室の開口部はS-5°-Wを向く。

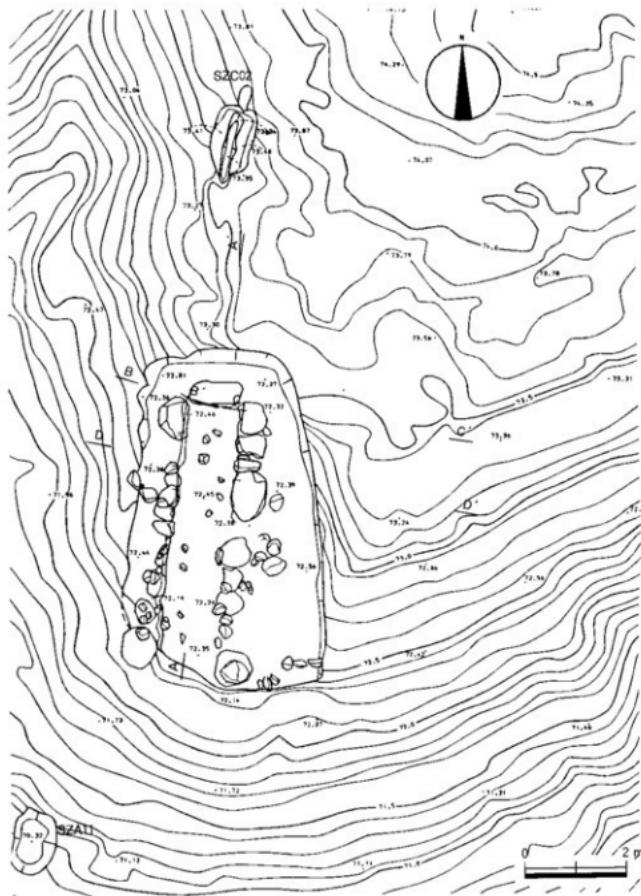
外部構造

墳丘（第80図）

墳丘は流失が激しくその全容はほとんど不明である。とくに西半分は斜面のため流失し、墳丘はまったく残存しない。北東部ではC・D断面で確認すると厚さ50cm程度の墳丘が認められる。C断面の3・5層、D断面の1層が墳丘に相当し、残る土層は掘り方に伴う埋土と考えられる。その理由は各土層に含まれる砂岩の大きさと砂質の有無により区別され、おそらく掘り方を埋め立てる際には掘り方掘削から生じた堆土を埋め戻した結果が明確に土層に反映したものと思われる。C断面の3・5層、D断面の1層は外見上では墳丘と認識しにくいが、それは東側の深い掘り方のためにそれ程厚い土層を必要しなかったことに起因する。それとは逆に地傾斜の制約を受けて低い掘り方の西側では相当厚い土層を必要としたはずで、類推すれば東側は平坦で西側が急傾斜の墳形が推測可能である。残存する墳丘は東へ4m程度伸びることから、墳丘規模は直径10m程度の円墳であったと推測される。

周溝

墳丘の北西から北東にかけて地山が溝状にわずかにくぼむ部分が認められるが周溝と認定するには乏しい状況であった。とくに北西側は流水によって地山が削平された自然地形であり、それ



第79図 11号墳平面図

の有無は不明である。残存する玄室は主軸長約2.7m、幅はA断面で1.11m、C断面で1.14mとわずかに広がる傾向にある。側壁の残りも悪く、1段目ないしは2段目しか残存しない。石材はやや小さく小口面が幅70cm前後・縦30~40cm程度の横長の石材を横積みする。両側壁ともC断面ちかくまでは横目地がそろうが、それより開口部側では目地がそろわざ石材の選択に異なる傾向が認められる。奥壁は高さ1.34m・幅0.94mの大型石材を用いており、鏡石状を呈する。羨道部は根石痕検出によって平面形を確認したのみで、構造的特徴は不明である。床面はバラス状の礫を敷設した礫床だが、一部には大きめの石材も目立ち一様な状況を呈していない。同様に奥壁側あるいは羨道前半では礫がまばらで遺存状況が均一ではなく、砂防工事及び再利用時に攪乱され

が溝状あるいは墳裾にみえるもので人为的なものではない。北東部にわずかにくぼむ部分には人为的に削平した工具痕が認められる部分もあるが、深さも浅く埋土もないため、溝として認定するには根拠にやや欠ける。

内部構造

石室(第81図)
砂防林工事による破壊を受けその遺存状況は悪い。石室の残存は玄室のみで羨道の石材はすべて持ち去られていた。このため、袖部

た可能性がある。

掘り方（第82図）

平面形は開口部が広がるコの字形を呈し、ほぼ石室を取り囲む。その規模は長軸が6.1m、幅は奥壁側で3.2m程度、開口部で4.2m程度である。左側はほぼ側壁に沿うが、右側は開口部に向かうにつれて次第に側壁からの間隔を広げている。開口部右側には横並びの3枚の石材が配置される状況を検出したが、石室開口部につながる様子もなく、その意団については不明である。深さは奥壁背後では地山を1m強も掘り込む。東西両側の立ち上がりは自然地形の傾斜の影響を受け、東側は深く、西側は浅い。掘り方基底面で奥壁の向きにほぼ平行する方向の延長上に直径約20cm・深さ10cmの計2個のビットを確認した。このビットは掘り込む方向に特色があり、壁面に対して斜め下方向に掘り込んでいる。おそらく石室の構築に際して何らかの目的をもって使用されたと考えられるが、その具体的な内容については不明である。

側壁及び奥壁を支える裏込めの石材はその壁材の周囲に沿って掘り方の基底面から多数検出された。とくに奥壁周囲での裏込め石の使用が顕著である。裏側と表側では使用石材の大小差が認められる。石材は奥壁周囲のさらに一段深く掘り込まれた部位に据えられ、奥壁構築には充分な準備がされていたことがうかがわれる。

遺物出土状況（第83図）

石室内から須恵器片68点・土師器片14点が出土した。いずれも細片で疊床の間から出土し、埋葬時の状況をとどめていない。復元すると須恵器は壺B9点・平瓶1点を数える。時期は7世紀後半と考えられる。土師器は復元が不可能であったが、その器形は小型壺ではないかと思われる。分布は玄室に集中し、そのなかでも奥壁側と石室中央付近に偏る。

再利用面（第83図）

石室内の埋土を掘り下げる過程で山茶碗の小皿が2点出土した。1点はほぼ玄室中央から出土した。再利用面の有無については小皿が出土したレベルでは確認できず、確証は得られなかった。

遺物（第175図）

須恵器

369S～377Yは壺Bの資料だが、底部の形状が様々で、丸みをおびるもの(369S・370S・373S・375S・377S)と平坦なもの(371S・372S・374S)とが認められる。体部はわずかに内湾して端部でやや外反する。370Sは体部の内湾が強く、371Sは直線的な資料である。いずれの資料にも外底面にはヘラ切り痕が認められるが、369S・376S・377Sはヘラ切り後にナデ調整が加えられる。378Sは極端に偏平な体部を有する平瓶で、肩部は明瞭な稜をもたないが強く屈曲する。底部は平坦で、底部から体部下半まで回転ヘラ削り調整が認められる。口頸部は直立気味に位置し、頸部から直線的にハの字に開き端部は丸くおさめる。

山茶碗（379Y・380Y）

2点とも小皿。美濃須衛産のように思われるが、半焼け資料のため判別が難しく断定できない。両方とも外底面には未調整の回転糸切り痕が残存し、底部はわずかに突出する。仮に美濃須衛産とした場合、形状的には船山北3号窯の小皿Ⅱ・Ⅲ類にちかく、それにちかい年代が考えられる。

A
73.0m



- 1 褐色土 (5 YR8(3)) 種質土。表土。
- 2 赤褐色土 (5 YR7(4)) やや粘質。径2cm以下の砂岩を少量含む。
- 3 a 赤褐色土 (5 YR7(3)) やや粘質。径4~5cmの砂岩を多量含む。
- 3 b 赤褐色土 (5 YR7(3)) 3a層より砂岩が少い。
- 4 薄赤褐色土 (7.5 YR8(3)) 粘質土。径2~3cmの砂岩を多量に含む。
- 5 褐色土 (7.5 YR5(3)) やや粘質。径10cm以上の砂岩あり。
- 6 褐色土 (7.5 YR5(3)) やや粘質。炭化を含み、砂岩は含まれない。
- 7 褐色土 (7.5 YR5(4)) 径4~5cmの砂岩を含み、砂岩は含まれない。
- 8 黄褐色土 (10YR8(2)) 種質。
- 9 赤褐色土 (7.5 YR6(6)) やや粘質。径1cm以下の砂岩を少量含む。
- 10 薄赤褐色土 (7.5 YR6(3)) やや粘質。径1cm以下の砂岩を多量に含む。

B
73.2m



- 1 褐色土 (5 YR7(4)) やや粘質。径2cm以下の砂岩を少量含む。
- 2 薄赤褐色土 (7.5 YR6(3)) やや砂質。径10cm以上の砂岩あり。
- 3 薄赤褐色土 (7.5 YR7(4)) やや砂質。径1cm以下の砂岩を含む。

C
73.7m



- 1 褐色土 (7.5 YR8(3)) 種質灰土。
- 2 薄赤褐色土 (7.5 YR8(3)) やや砂質。
- 3 褐色土 (5 YR7(4)) やや粘質。径2cm以下の砂岩を少量含む。
- 4 褐色土 (5 YR7(3)) やや粘質。径4~5cmの砂岩を多量に含む。底土の可能性あり。
- 5 褐色土 (5 YR7(3)) やや粘質。径4~5cmの砂岩を多量に含む。
- 6 薄赤褐色土 (7.5 YR6(2)) 砂岩。深さの可能性がある。
- 7 褐色土 (5 YR6(6)) 粘質土。径2~3cmの砂岩を含み、やや砂質。
- 8 薄赤褐色土 (5 YR6(6)) 径2~3cmの砂岩を含み、やや砂質。
- 9 明赤褐色土 (5 YR6(6)) 径1~2cmの砂岩を多量に含む。粘質土。
- 10 薄赤褐色土 (7.5 YR6(3)) やや粘質。径10cm以上の砂岩あり。

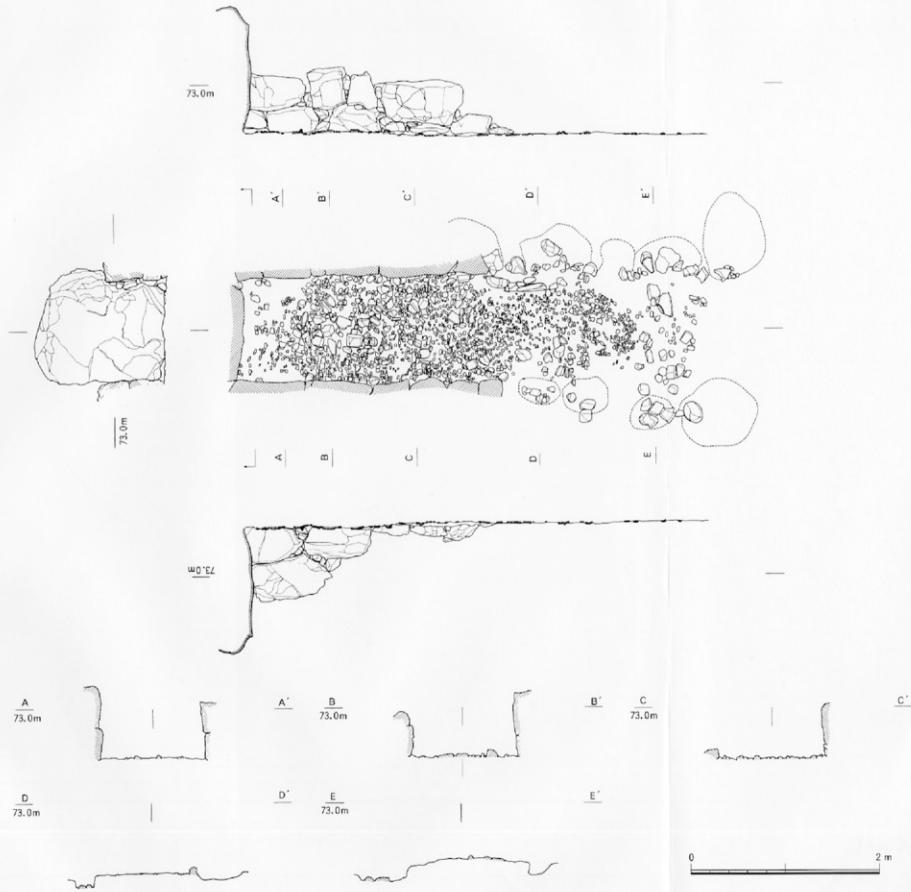
D
73.7m



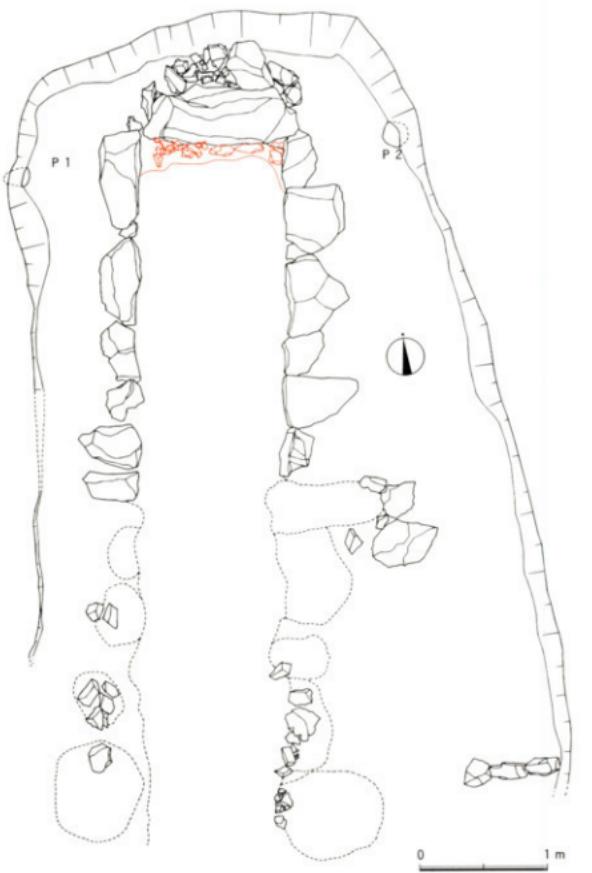
- 1 赤褐色土 (5 YR7(4)) やや粘質。径2cm以下の砂岩を少量含む。
- 2 赤褐色土 (5 YR7(3)) やや粘質。径4~5cmの砂岩を多量に含む。
- 3 赤褐色土 (5 YR6(6)) 粘質土。径2~3cmの砂岩を多量に含む。
- 4 明赤褐色土 (5 YR7(6)) 径2~3cmの砂岩を含み、3層に近づけるがやや砂質。
- 5 明赤褐色土 (5 YR6(6)) 径1~2cmの砂岩を多量に含む。粘質土。
- 6 薄赤褐色土 (7.5 YR6(3)) やや粘質。径10cm以上の砂岩あり。



第80図 11号墳丘断面図



第81図 11号填石室展開図



第82図 11号墳石室掘り方平面図

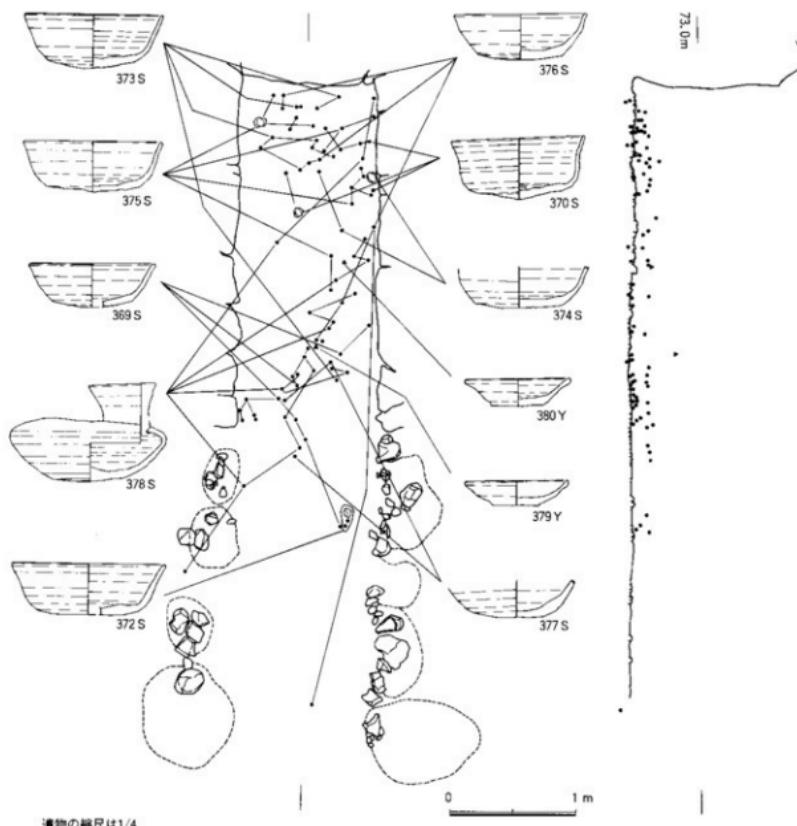
12号墳（第84図）

中央尾根上やや南側に位置する。現状では天井石が2枚認められたが、原位置は保持しておらず、調査中に除去した。墳丘はほとんど流失し、周溝も認められなかった。そのため、墳丘規模については不明である。石室内からは山茶碗が出土し、二次的利用を確認することができた。石室の開口部はS-7°-Eを向く。

外部構造

墳丘（第85図）

墳丘は流失及び砂防林工事で失なわれ、残存する墳丘は東西トレンチ上では石室外側へ東側で



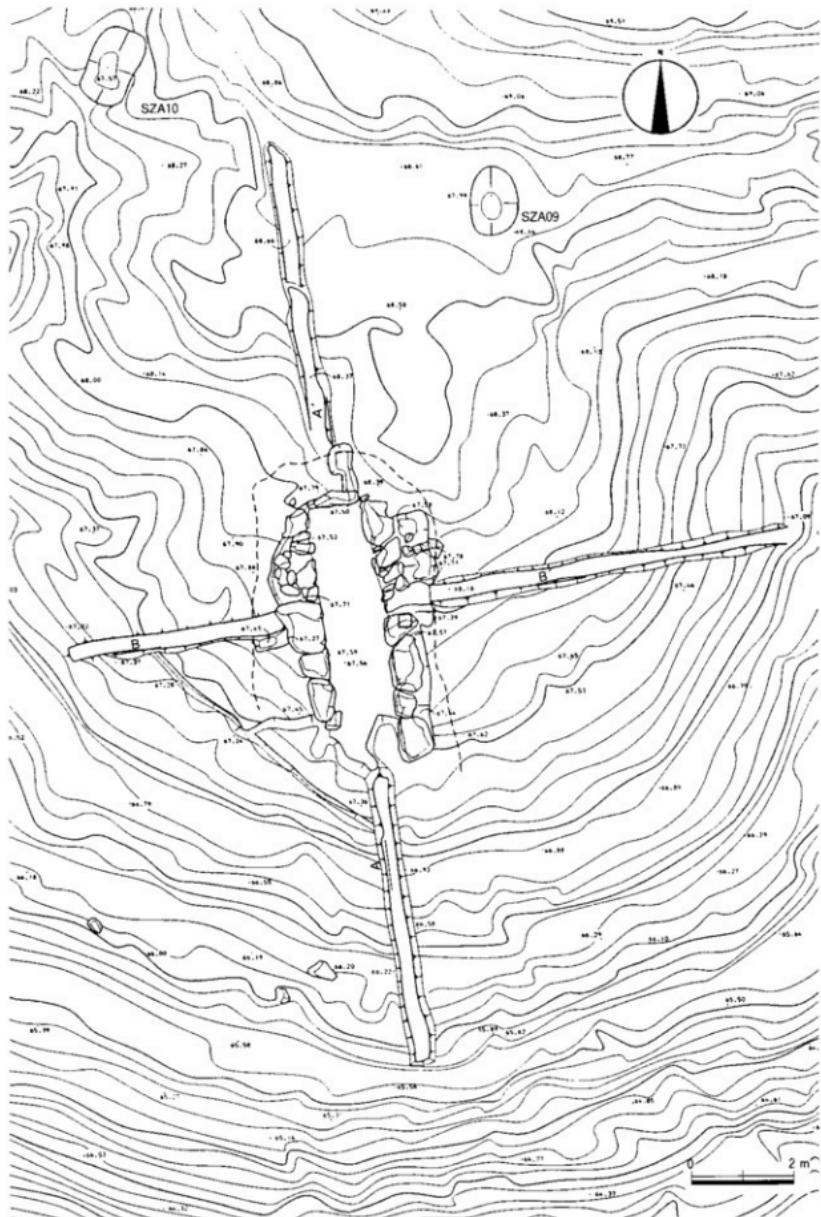
第83図 11号墳石室内出土遺物位置図

は1.2m、西側では1.1m程度にすぎない。北側は掘り方を確認したのみで墳丘はまったく残っていなかった。

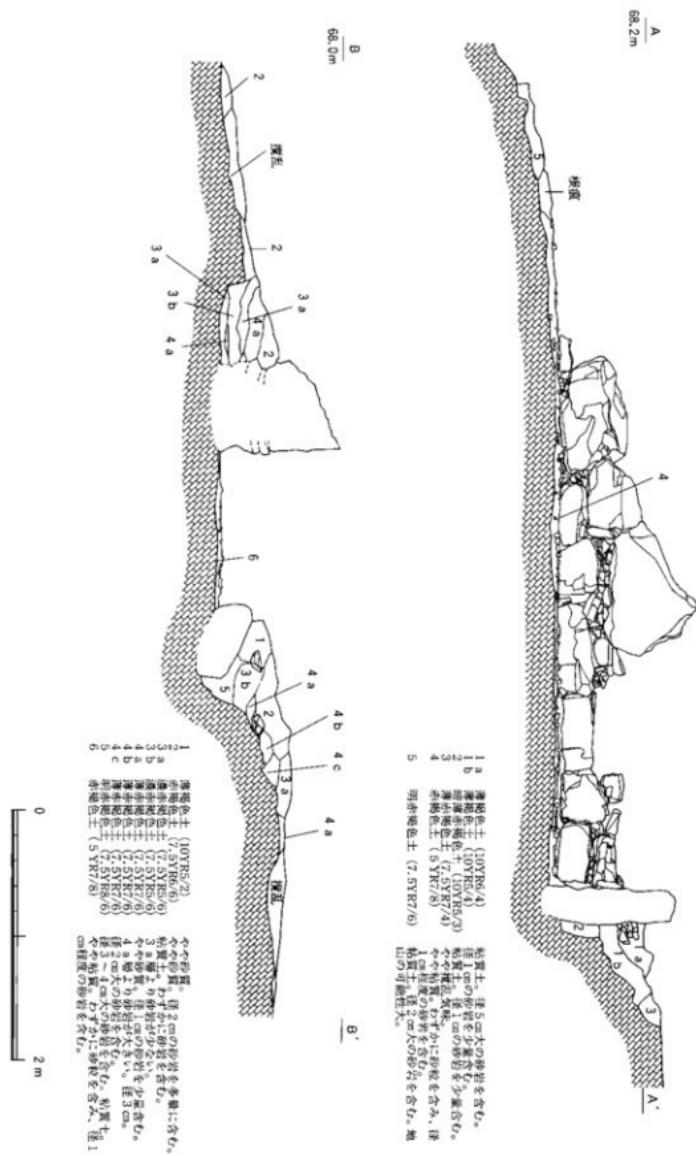
内部構造

石室（第86図）

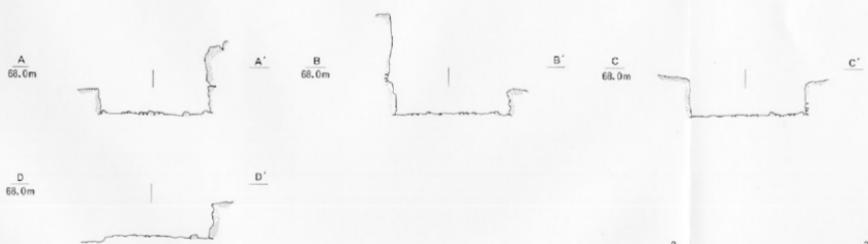
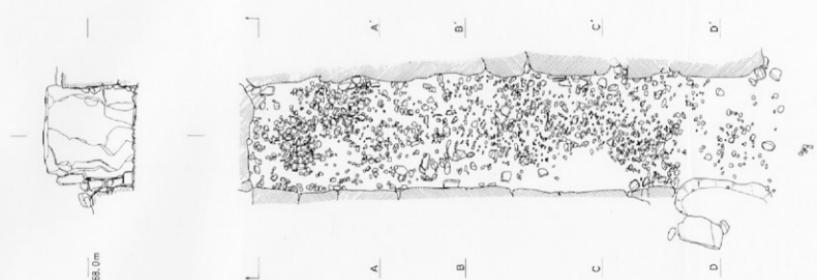
墳丘同様、破損が著しく1段目ないしは2段目の壁体しか残存しない。調査前の状況では天井石が2枚残存していたため、残存状況が良いものと期待していたがそれに反して残存状況は良好ではなかった。全長は5.33mで袖石はみられず、その形態は無袖式である。幅は奥壁側で1.04mで、B断面とC断面の間が1.12m、C断面とD断面の間が1.14mと次第に広くなる傾向にある。側壁は比較的偏平な石材を横積みする。B断面より南側20cm程度の付近から、横目地がそろわな



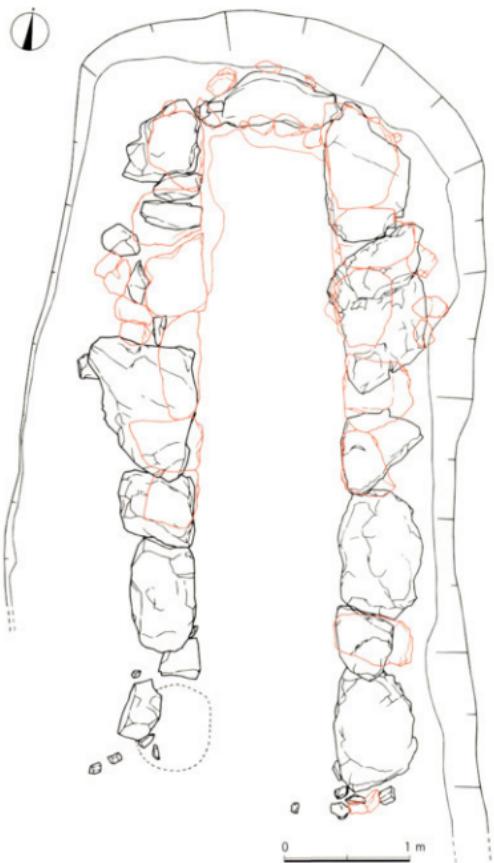
第84図 12号墳平面図



第85図 12号填壕断面図



第86図 12号填石室展開図



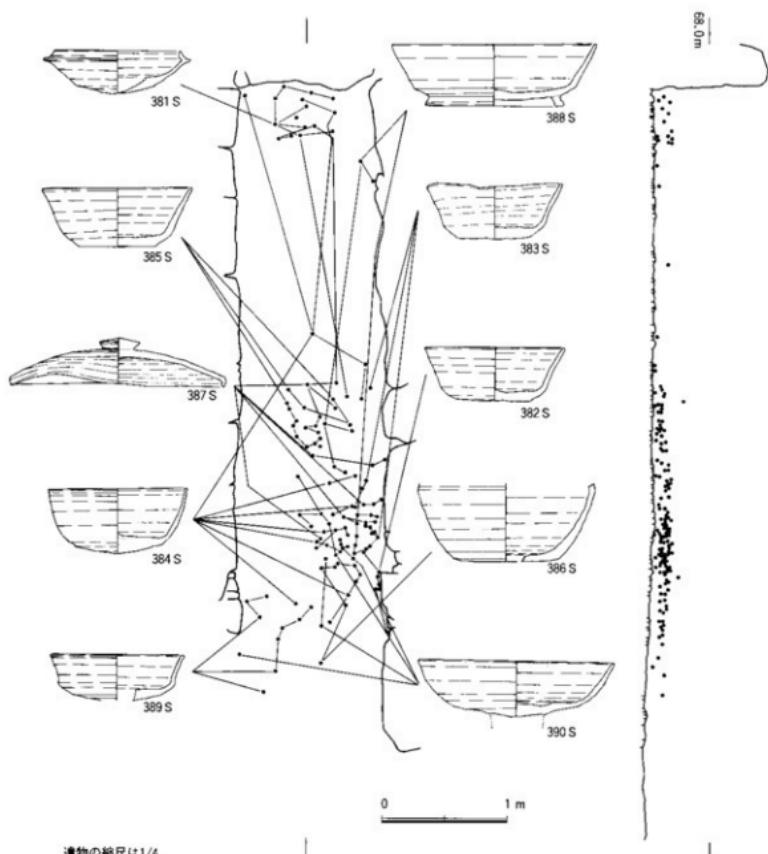
第87図 12号墳石室掘り方平面図

壁に平行するが、西側は次第に側壁との間隔を広げていく傾向にある。奥壁背後はやや丸みをもつ。規模は長軸約6.4m×短軸約3.4m程度である。深さは奥壁背後で最も深く、80cm程度掘り込んでいる。その断面は最初に斜めに削平した後に奥壁に沿って垂直に掘り下げている。こうした二段の断面は奥壁背後のみで、側壁外側においては壁面はほぼ垂直である。その深さは玄室外側では40cm程度を測るが、羨道部方向へ次第に浅くなり自然地形と連なる。側壁及び奥壁の裏込め石は玄室を構成する基底石の周囲においてみられる。とくに奥壁背後では2段ないし3段に及ぶ。玄室内側では側壁・奥壁に沿うようにしてわずかに床面構成面より低くなる傾向が認められ、排水溝の役割を果たした可能性もある。

となることから、ここから先の部分が羨道部と考えられる。玄室側壁の横目地は比較的そろう。2段目の壁体はわずかに玄室右側と羨道・玄室境界付近の左側に残存するのみである。その石材は1段目とは違い、大きさはまばらで積み方も乱雑である。奥壁は高さ0.92m・幅1.04mの大型石材で構成され、左側に生じた側壁との隙間に小型の石材を充填している。床面はパラス状の小礫を敷いた砾床を確認したが、攪乱されているせいかその検出状況は散漫である。なお、左開口部の側壁は根石痕によってほぼ右開口部と揃うことを確認した。

掘り方 (第87図)

石室をコの字形に取り囲んでいる状況を検出した。東側はほぼ側



第88図 12号墳石室内出土遺物位置図



第89図 12号墳石室内集中部検出状況図

遺物出土状況（第88図）

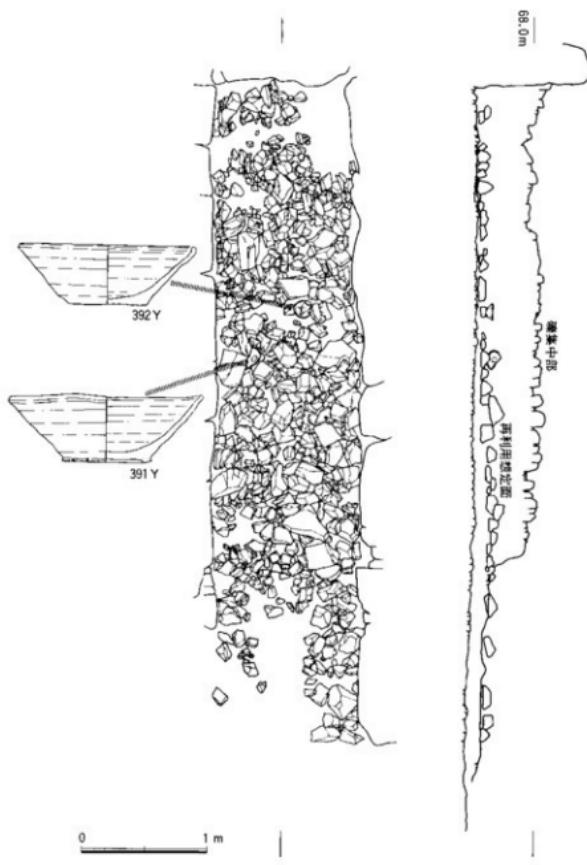
石室内からは後述する山茶碗2点を除いて須恵器の破片403点が出土した。多くが細片となつて床面を構成する砾の隙間から出土した。復元された個体は須恵器のみで壊A1点・壊B4点・壊C1点・蓋C1点・高壊2点・平瓶1点（破片）を数える。上記以外に破片しか認められないが、土師器及び須恵器の甕が認められる。土師器はおそらく小型甕と思われる。また、耳環1点を石室内排土分別作業の際に確認した。出土須恵器には7世紀後半代と8世紀前半代のものがあり時期差が認められる。追葬の有無は追葬時に伴う片付けの様子も確認できず、不明である。破片の出土分布は奥壁側と左羨道に著しく偏り、破片の出土レベルは床面より5cm程度浮き気味である。381S・

387S・388S

の接合関係は
両者にまたが
り、その出土
状況は原位置
をとどめてな
い。

再利用面（第
89・90図）

10号墳と酷似した様相が認められた。
石室内には拳大～30cm大までの大小様々
な角砾が充填され、とくに
石室中央に偏在していた。
その上面は床
面より50cm程
度高く、ほぼ
残存する側壁
の高さに匹敵する。これら
の石材を丹念
に除去したと
ころ、石室中



第90図 12号墳石室内再利用面出土状況図

央やや奥壁よりではほぼ完形の山茶碗2個体が据え置かれているのが検出された。周りを角礫でびっしりと覆われており、当時の状況を良好に示していると考えられる。それぞれ北部系(391Y)と美濃須衛・南部系?(392Y)と考えられ、寒洞1号窯期～白土原1号窯期に相当すると思われる。

遺物（第176・177図）

須恵器

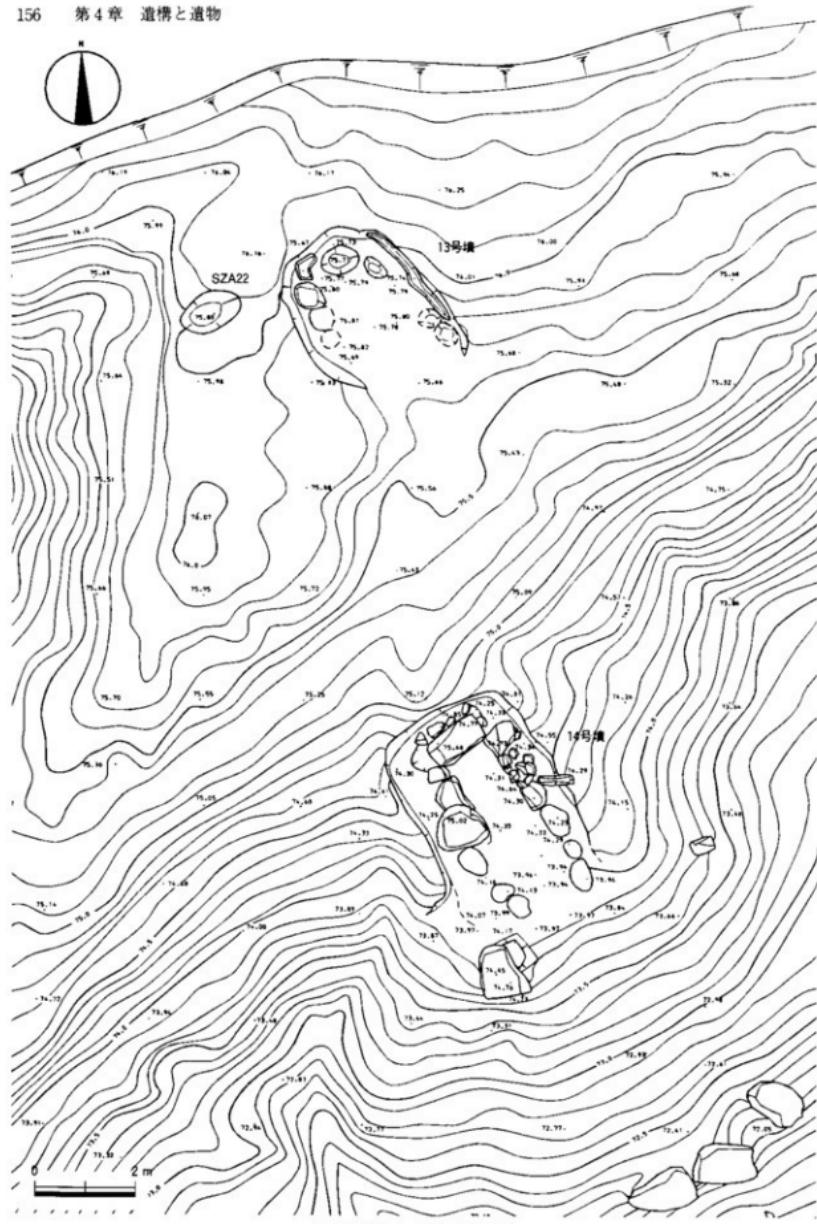
381Sは壺A。底部がやや突出気味で、このために底部と体部との境で稜をもって外反しながら受部にいたる。口縁部は水平に突出する受部から短く内傾する。外底面にはヘラ切り痕が残るが、中央部を残してその周囲にはナデ調整が加えられる。382S～385Sは壺Bの資料。いずれも底部外面にはヘラ切り痕が認められる。382S・383S・385Sは平坦な底部から体部との境で強く内湾して体部が立ち上がり、口縁部が外反する。端部は丸くおさめられる。384Sは底部が丸みをおび、円柱状に下方に突出する。底部から口縁部への移行はなだらかである。外底面はヘラ切りの後、ナデ調整が認められる。389Sは小型の高壺で壺部の形状は壺Bにちかい。壺部底部から口縁部との境まで回転ヘラ削り調整が施され、その境界で強い稜をもつ。脚部は欠損する。390Sも脚部を欠損する大型の高壺壺部。壺部底部から口縁部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。底部外面には回転ヘラ削り調整が認められる。386Sは残存する破片の上端に屈曲部が認められることから、平瓶の底部片もしくは鉢の底部片と思われる。外底面にはヘラ切り痕がそのまま残り、底部外面周縁には回転ヘラ削り調整が加えられる。387Sは蓋Cの資料。すでに述べてきた蓋Cと比較すると鈕の径が小さい。天井部はなだらかな弧状を呈し、口縁部は下方に折り曲げ、端部を尖り気味におさめる。天井部外面には紐から1・2周程度回転ヘラ削り調整が認められる。388Sは壺Cの資料。高台はハの字に伸び、断面形は台形状を呈す。端部はやや水平な凹面状となり、底部外面は全面に回転ヘラ削り調整が施される。体部は底部との境で強く屈折して直線的に外傾して立ち上がる。387S・388Sはともに半焼けの資料で胎土も酷似することから、セットとなる資料と考えられる。

耳環（402）

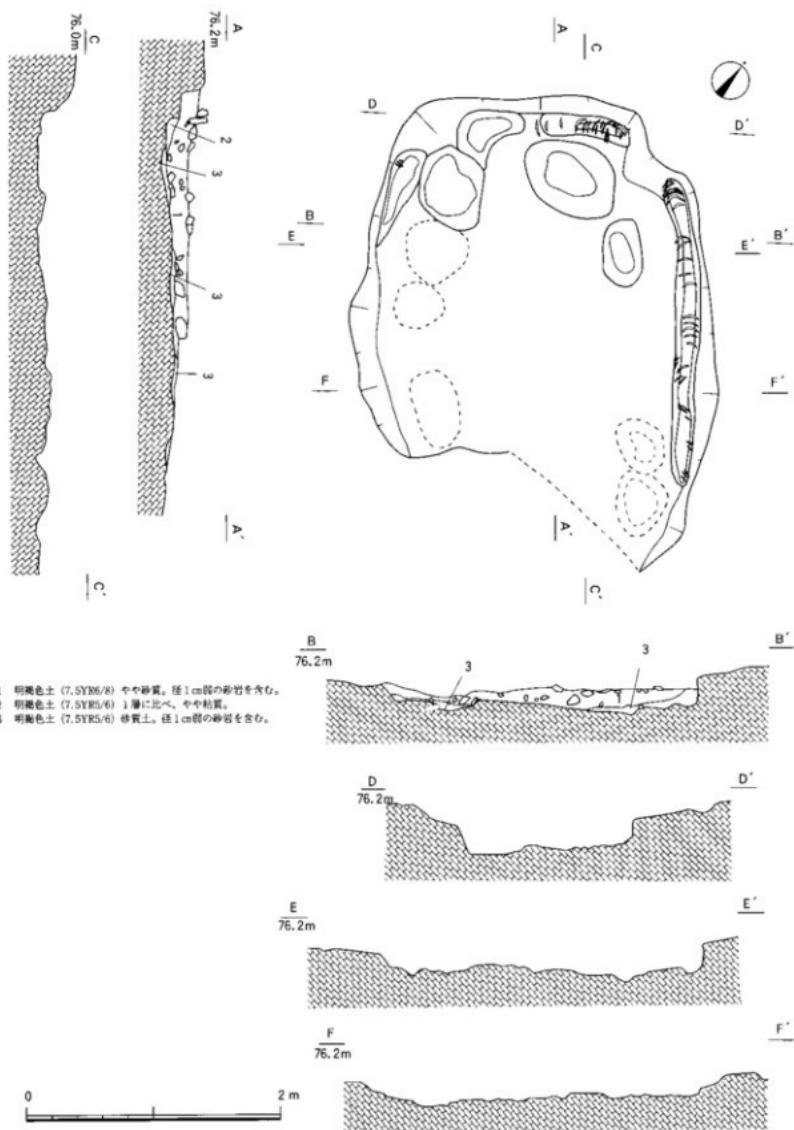
外径1.7cm・内径1.0cm・厚さ0.55cmの胴芯金張りの耳環。遺存状況が悪く金張りが内側しか残らない。

山茶碗

391Yは北部系の碗。潰れ気味の高台に糲穀痕がつき、体部が直線的に立ち上がる。端部は面取り気味に外傾し、尖り気味におさめられる。外底面の板目・内底面の静止指ナデ痕は認められず、外底面には回転糀切り痕が残存する。時期は寒洞1号窯期～白土原1号窯期と考えられる。392Yは無高台の碗で、体部及び口縁部の形状は391Yに類似する。外底面には回転糀切り痕をそのまま残す。胎土は砂礫を多く含み、南部系ともみられるが美濃須衛産にもちかく判断がつかない。時期は無高台である点に疑問が残るが、設置状況からみて391Yとちかい時期を考えておくべきだろうか。



第91図 13・14号墳平面図



第92図 13号墳石室掘り方平面図・断面図

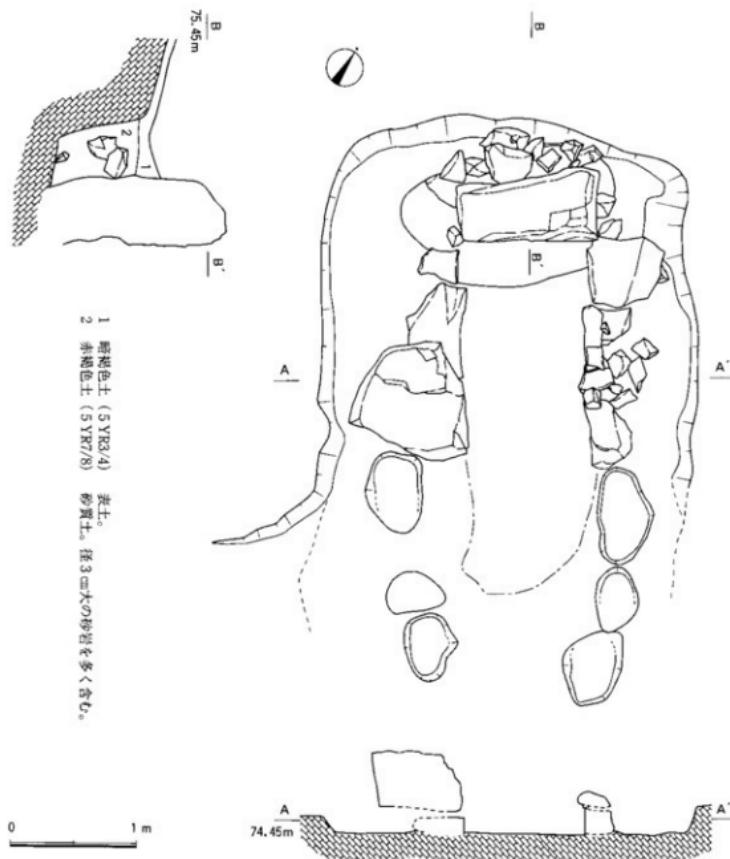
13号墳（第91図）

西尾根上の最高所に立地し、14号墳の北側に位置する。墳丘・石室はまったく遺存せず、掘り方のみを確認した。その検出はまったくの偶然で、平面形及び壁面の様子で古墳の掘り方と判断した。遺物は皆無で時期は特定できない。掘り方から判断した石室の開口部方向はS-36°-Eと考えられる。

内部構造

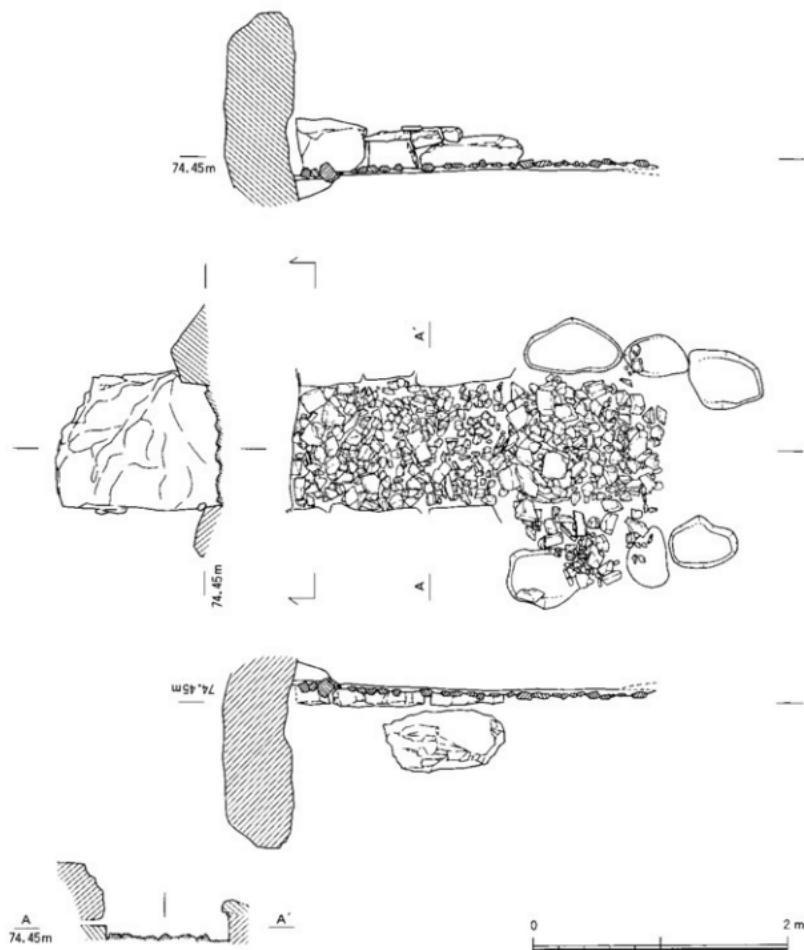
掘り方（第92図）

規模は長軸3.2m・短軸2.8m程度で、コの字形を呈す。北壁・東壁では細長い溝が浅く掘削され、基底面には工具痕が顕著に残る。北側・西側では基底面に浅いくぼみを検出したが、根石痕



第93図 14号墳石室掘り方平面図・断面図

に相当するのかは判然としない。最大壁高は北側0.3m強を測り、南側では壁高が低くなり自然地形に連なる。石室はおそらく掘り方の排土を利用して羨道部を構築していたと考えられ、検出した掘り方は石室の玄室に対応するものと思われる。



第94図 14号墳石室展開図

14号墳（第91図）

西側の尾根上に立地する。調査当初は1枚の天井石が認められたが、砂防林工事などによる破壊のため思いの外、残存状況は悪い結果となった。墳丘はすべて流失し、石室は最下段の一部の石材が遺存するのみであった。斜面下方には側壁・天井石と思われる石材が散乱していた。周溝は確認できず、墳丘・石室の正確な規模は不明である。また、石室内から遺物はまったく出土しなかった。石室の開口部方向はS-36°-Eである。

内部構造**石室（第94図）**

石室の残りは悪く、開口部の側壁も残っていなかった。残存する側壁長は1.76m、幅は中央付近で1.02mを測る。確認した根石痕から推測すると全長は2.7m強となるが、開口部は砂防林工事により床面が削平され根石痕の確認が不可能であったとともに、羨道が掘り方排土によって形成された可能性もあって、実際はもう少し大きい可能性がある。側壁は両側とも40~60cm程度の偏平な石材を横積みする。側壁には2段目に大きな石材が認められるが、本来の位置を保っていない。奥壁は高さ1.25m・幅1.1m弱の大型石材をたて、いわゆる鏡石を呈する。床面は拳大程度の角礫を用いた礫床であった。礫の広がりは側壁の残存する部分より前方に広がり、ほぼ掘り方の突端と一致するが、安定していたのは側壁の残存する部位まであり、それより先は側壁延長上より外側に散布し、その残存状況は信用性に欠ける。

掘り方（第93図）

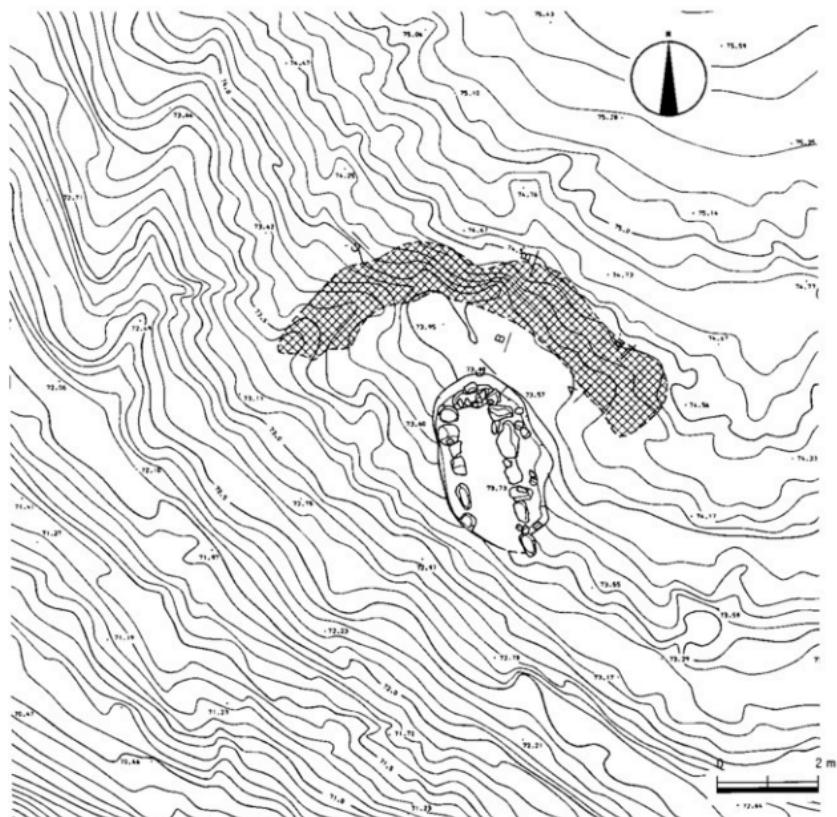
石室をコの字形に取り囲んで地山を垂直に掘り下げている。その平面規模は長軸2.7m強・短軸3mを測る。壁面は奥壁背後で70cm程度の深さを有するが、石室両側では20~30cm程度と次第に浅くなり自然地形と連なる。裏込め石は奥壁周囲で顕著である。奥壁背後は周囲より一段低く隅丸積円形状に削平され、拳大~40cm大の様々な石材が充填される。なお、南端は砂防林工事により削平されていた。

15号墳（第95図）

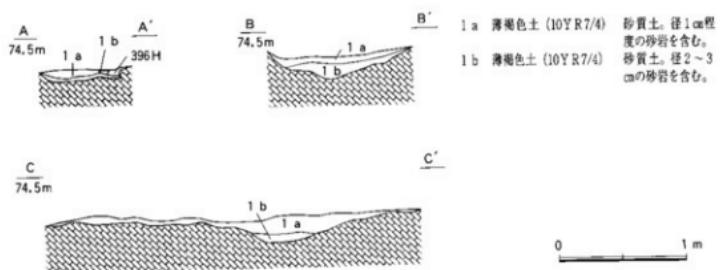
6号墳西側で西側に傾く斜面で確認したが、他の古墳が尾根主軸上に立地するのとは異なったあり方を示している。調査開始時に表土上に小さな石材が数個並ぶことは確認していたが、その立地条件と墳丘の存在が皆無であったことから本墳の確認は予想外であった。表土除去後に石室の平面形を検出して古墳と確信した。調査の結果、墳丘はすべて流失していたことが判明したが、一部に残存する周溝から墳丘の規模は直径約5m程度の規模の円墳であったことが推測される。また、石室は遺存が悪く、その規模は現状で全長2.76m・最大幅0.8mと考えられる。石室の開口部はS-14°-Eに向ける。

外部構造**墳丘**

墳丘は斜面に形成された結果、すべて流失しその正確な規模は不明であるが、周溝から直径5m程度の円墳であったと推定される。石室が小型のため、それほど厚い墳丘はなかったものと推測され、斜面の制約上、東側は平坦で西側が急斜面で厚い墳丘を呈していたと考えられる。



第95図 15号墳平面図



第96図 15号墳周溝断面図

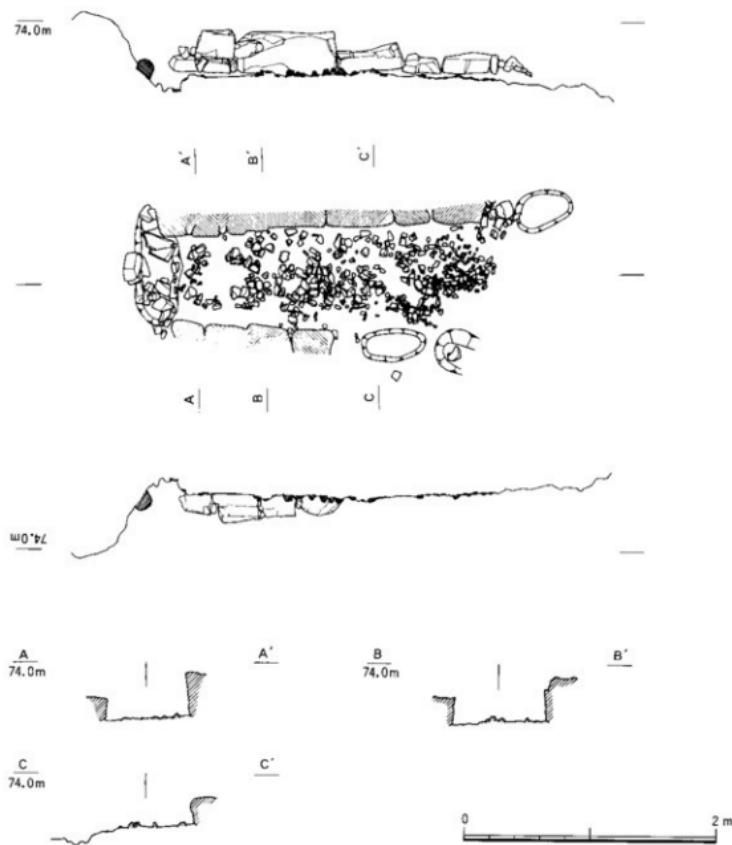
周溝（第96・176図）

幅約1m・深さ10~20cm程度の溝が石室の北側から東側にかけて三日月状にめぐる。西側は斜面の制約のためか、溝は確認されなかった。埋土からわずかに須恵器と土師器の破片が出土したが、図示可能な資料は土師器の396Hのみである。

396Hは小型の土師器の甕と思われる。短く外傾する口縁部をもち、端部は丸くおさめられる。口縁部外面にはわずかにハケ目が観察される。時期は細片のため判断しえない。

内部構造

石室（第97図）

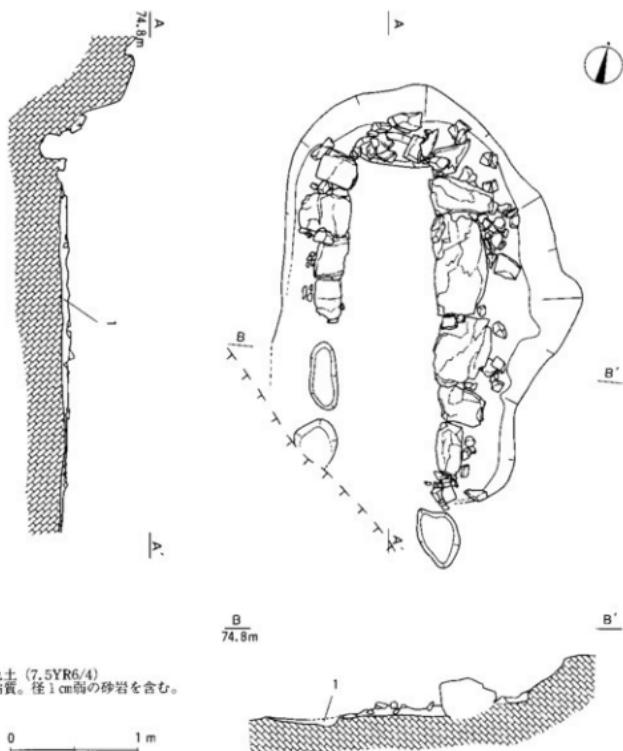


第97図 15号墳石室展開図

石室は天井石・奥壁が欠如し側壁も基底石しか残存せず、その遺存状況はきわめて悪い。側壁も大半がすでに抜き取られ、その痕跡を検討した結果、石室の全長は推測3.15m程度と考えられる。幅はA断面で0.67mを測り、最大幅は右側壁が残存する部位まで0.8mを測り、奥壁側から開口部に向かってやや広がる傾向を有す。側壁及び根石痕からみて無袖式と思われる。開口部ちかくの石材はすぐではなく、根石痕で側壁の有無を確認した。左開口部の根石痕は南半分を砂防林工事によって削平されている。残存する側壁は1段目のみで30~40cm大の比較的小型の石材を横積みしている。奥壁は跡形もなく、奥壁を据えるための掘り方で確認した。石室の大きさからみて使用した石材はそれほど大きくなきものと考えられる。床面は拳大の角礫で構成される礫床を検出した。その残存状況は悪く、石室中央付近で比較的良好に残存するのみである。

掘り方（第98図）

石室の周囲を長軸3.5m・短軸2.2m程度の規模で地山を削平しているのを確認した。その平面



第98図 15号墳石室掘り方平面図・断面図

形はコの字にちかいが、奥壁背後の両脇はコーナーがなく隅丸を呈し、東側の壁面は側壁と平行する直線的な形状にはならず、やや粗雑なつくりである。深さは奥壁背後でも40cm程度でそれはほど深くなく、その地山との高低差は開口部に向かうにつれ浅くなる。裏込め石は10~20cm程度の石材が認められ、残存する側壁の周囲、なかでも奥壁の周囲において顯著に認められた。

遺物出土状況（第99図）

石室の床面から須恵器の蓋A 1点・壺A 1点・蓋B 1点が出土した。いずれも完形品で出土状況も原位置と考えられる良好な資料である。蓋B（394 S）は逆位で石室中央やや奥壁より、蓋A（395 S）・壺A（393 S）は右側壁脇の開口部ちかくでそれぞれ逆位と正位で出土した。逆位で置かれた蓋Aの395 Sの内側にはベンガラが付着しているのが認められた。394 Sの周囲には床石がないが、蓋が床面の構築土に隙間無く据えられた状況で出土したことから床石の欠如は何らかの意図があった可能性が高い。

遺物（第176図）

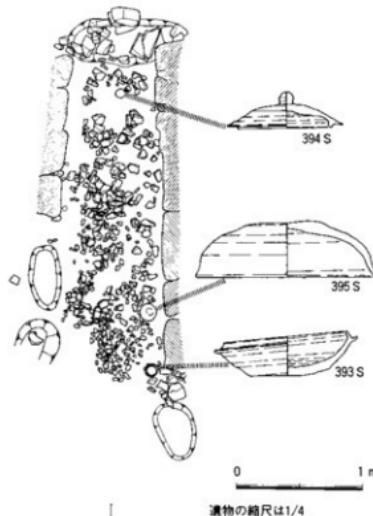
393 Sは壺Aで、底部がやや平坦な資料。底部外面にはヘラ切り痕が未調整のまま残り、底部と体部との境で弱い稜もって体部は内済する。口縁部は外上方に突出した受部から短く内傾する。395 Sは大型の蓋Aで半焼けの資料である。天井部の中央はヘラ切りが未調整のためやや円柱状に突出し、その後天井部はなだらかな弧状を呈する。口縁部は外反気味で端部は丸くおさめる。394 Sは小型の蓋B。鉢は宝珠形を呈し、返りが口縁部より下方に突出する。鉢から1周程度、回転ヘラ削り調整が施される。

その他の遺物（第176図）

3号墳の墳丘上から鼓形器台の裾部と思われる資料（397 S）を検出したので、ここで述べる。また、12号墳の墳丘表面（Ⅱ層）から刀子状の鉄製品（411）が出土したので、この遺物についてもここで述べる。

397 Sは脚部と裾部との境に突帯がめぐり、その上には長方形、下方には三角形と思われる透孔が何カ所かに配置されたと推測される。三角形の透孔が配された空間には櫛描の刺突文2条と波状文2条が認められる。その波状文の下は3本の沈線が横走し、さらにその下にはわずかに櫛描波状

遺物の縮尺は1/4



第99図 15号墳石室内遺物出土状況図

文が残る。本資料は本遺跡中で確認した須恵器の中では最も古く、中村編年のI—4型式に相当すると思われる。

411は両端を欠損する刀子状の製品。現存長は5.58cmで、幅は2.01cmを測る。断面幅は0.92cm。図示した図の右側が片闊状となり幅は1.58cmを測る。

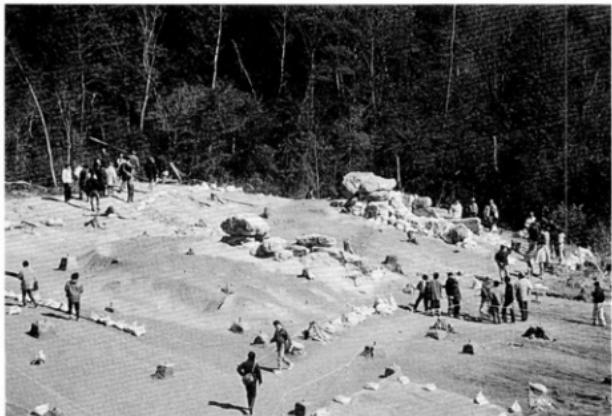


写真4 現地説明会（平成8年）

第4節 古代～中世の遺構と遺物（古窯跡）

4・5号窯（第100図）

南に向かって開く西埋没谷の西斜面において、並列する2基の須恵器窯を確認した。2基とも等高線に直交するように築造されている。2基の須恵器窯を確認順に呼称することとし、北側に位置する方を4号窯、南側に位置する方を5号窯として呼称する。主軸方向は4号窯がN-92°-W、5号窯がN-55°-Wを向く。グリッドは5号窯の主軸線を基軸にして設定したため、4号窯の主軸線とグリッドラインが沿わない結果となった。グリッドの呼称は北東杭で代表している。

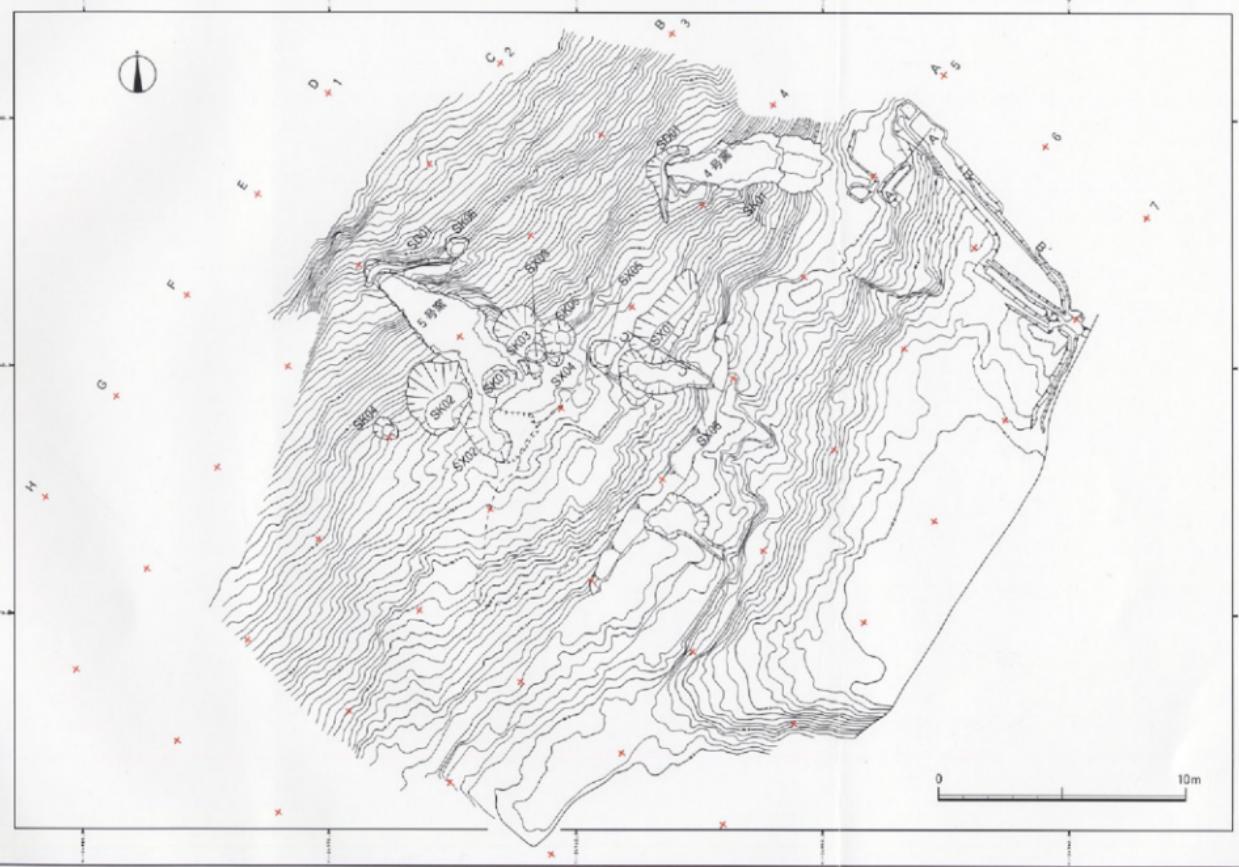
4・5号窯は並列するものの、5号窯の方が4号窯より斜面上方にあり、上下に離れて並列する格好を呈している。調査当初は5号窯が4号窯が斜面上位にあるため、4号窯の灰層の上を5号窯の灰層が覆っているものと単純に想定していたが、土層観察用の畦ではその新旧関係を確認することができなかった。B 6・C 6 グリッドにおいては灰層に到達するまで地表から約4mも掘り下げねばならず、その掘削深度の深さゆえにB 6・C 6 グリッドは湧水によって冠水することしばしばあり、結果として4・5号窯の灰原が重複するC 5・D 5 グリッド周辺の土層観察用畦が降雨及び湧水によりほとんどが崩壊してしまった。このため、両窯の新旧関係の確認及び灰層の分離はほとんど不可能となり、とくにC 4～C 7 グリッドから出土した遺物は4・5号窯のいずれに帰属するか厳密には分離できない状況にある。しかし、互いの窯の位置関係からみて大半は4号窯に所属するものと予想される。実際の4・5号窯の新旧関係は出土遺物の型式内容から調査当初の所見とは逆で、その詳細は後述するが5号窯が4号窯に先行すると考えられる。

なお、以下に前述した新旧関係に従って5号窯・4号窯の順に記述するが、遺物については共通する器種が認められるため、4・5号窯を合わせて述べる。また、灰層についても同様に記述する。

5号窯（第101・102図）

E 7杭より1m程度斜面下方に窯体上端が位置し、そこから窯体が下方に伸びる。焚口は窯体の幅が最も狭い部位を想定したが、被熱部位は焚口前方の前庭部にも認められ、窯体上端から前庭部の被熱部位までの全長は床面に残る被熱部位で測ると6.29m、側壁に残る被熱部位で測ると5.88mである。なお、貼壁が残存する部位で測ると4.76mとなる。想定した焚口までの窯体全長は4.69mで、ほぼ側壁の貼壁残存部までの全長と一致する。さらに下方に位置する前庭部の突端まで含めるとその全長は主軸長で7.3mを測る。窯体は地下式で築造され、砂岩の岩盤をトンネル状に掘り抜いている。検出当初は窯体上半において一部天井部が残存していたが、落下する危険性が予想されたため、断面図作成後すぐに取り払った。このため、掲載している平面図には天井部が反映されていない。

また、窯内の床面からは多数の須恵器が出土し、これらの須恵器は天井部の落盤などの何らかの要因によって取り出しが不可能となつて窯内に取り残された可能性が高い。窯内からの須恵器は点数にして1060点で、そのうち床面からの出土したものは778点にも及ぶ。なかでも床面資料のうち完形にちかい資料が181点ちかくもあり、良好な資料を得ることができた。



第100図 4・5号窯全体図

焚口

窯体下方で床面幅が最も幅が狭くなる部位を焚口と想定し、その幅は0.97mである。窯体上場の最小幅は1.76mで、その位置は床面幅の最小部位よりも上方0.4m程度のところにあり、床面幅の最小部位と一致しないが、前述の側壁の貼壁残存状況からみて床面幅の最小部位を焚口とする。床面上には特別な施設は確認できなかった。床面の状況は粘土が貼付されているわけではなく青灰色に変色した砂地でやや硬化していた。この床面より下位にはわずか数cm程度の黒色の灰層が認められ、焼成部の中程まで伸びることが観察された。この灰層の上を床面を形成していたと考えられる砂が覆っていたことからみて、本窯は部分的な改修が行われたものと考えられる。断面は蒲鉾形にちかいが、床面は平坦ではなく円弧状を呈する。側壁にはスサ入りの貼壁が貼付され、かなり硬化していた。

燃焼部

想定した焚口より主軸線に沿って0.66m上方の床面傾斜角の変換点までとする。床面幅は1.03m、窯体確認面の上場の幅は2.31mを測り、上場の幅は窯体の最大値である。断面形は不整な円形にちかく、左右対称の形状とはならない。床面も焚口と比べると急な円弧状を呈する。側壁は0.9m程度残存し、スサ入りの貼壁が認められる。床面には青灰色の粗砂が認められ、この砂で床面を形成していたものと考えられる。床面の傾斜角は4°程度である。

焼成部

床面の傾斜角が変化する燃焼部の境から上方の4.03mの部位にある床面の傾斜角の変換点までを燃焼部とする。床面の傾斜角は焚口との境界付近の後半部では31°程度だが、前半部ではやや角度を変え38°程度となる。燃焼部との境から0.5m程度上方に床面の最大幅は位置し、その幅は2.37mを測る。平面形は最大幅が焼成部のかなり下方にあるため、かなり下膨れな胴張り状を呈し、上端付近では床面幅は約0.7mでかなり幅が狭小となる。断面形は蒲鉾形をちかい形表示すものの、床面はわずかに円弧状をなし、側壁への移行もC断面においては急な変換点をもたず自然に移行している。床面は他の部位と同様、青灰色に変色してやや硬化した粗砂で形成されているが、その残存は焼成部後半のみで、中央付近の基盤の砂岩岩盤が剥落した部位までである。それより上位の前半部では砂地は残らず、岩盤が露出しかなり凹凸が顕著である。焚口から伸びる薄い灰層は焼成部にも伸び、床面を形成する粗砂と同様、中央付近で途切れる。この状況は前述したように、窯体の改修の痕跡を示すとともに、その改修が全体に及ぶものではなく、部分的な改修にとどまっていることを示しているものと考えられる。さらに、床面を形成する粗砂とその下位にある灰層の残存状況がほぼ一致することから、粗砂が残存する焼成部後半部は改修後にこの粗砂で床面を形成し、粗砂が残らない焼成部前半部については岩盤そのものが床面として利用されていた可能性もある。側壁にはスサ入りの貼壁が焼成部の全体にわたって残り、その残存状況は良好で線条痕が観察できた。燃焼室との境界付近の側壁には壁面がガラス状に硬化した部位が認められ、強い被熱を受けていた状況が確認できる。断面では貼壁の重複が認められ、床面と同じく改修の痕跡を確認することができたが、こうした側壁の改修は焼成部前半部では確認できないため、窯体の改修は焼成部後半部の

みを対象とするものであったと推測される。

焼成部の床面上からは多量の須恵器が出土し、とくに後半部の両側壁付近での遺物の集中が顕著であった。検出した須恵器は窯詰め状態を保つものではなく、それぞれの個体資料が折り重なるようにしておらず、散乱した状態であった。おそらく、最終操業に伴う遺物であることは確かであるが、原位置を保持するものではない。とくに、主軸線付近の須恵器の分布が希薄であるため、かなりの遺物が下方に流失し、後述する前庭部及びSK01（灰出し土坑）に堆積しているものと考えられる。また、遺物の重なりを取り除いて、最も床面に密着した状態の遺物を残した状況が第102図である。大半の須恵器が逆位で検出されており、焼台に転用された可能性が考えられる。とくに460S・463S・464Sは器面の外面全面に自然釉が付着し、焼台として転用した可能性が高い資料としてあげられる。しかし、他の須恵器には自然釉はそれほど顕著に付着しておらず、疑問が残るところである。出土須恵器のうちに注目されるのは碗類の多さで、灰層出土のものとは占める比率の傾向が異なる（第40・41表）。

煙道部

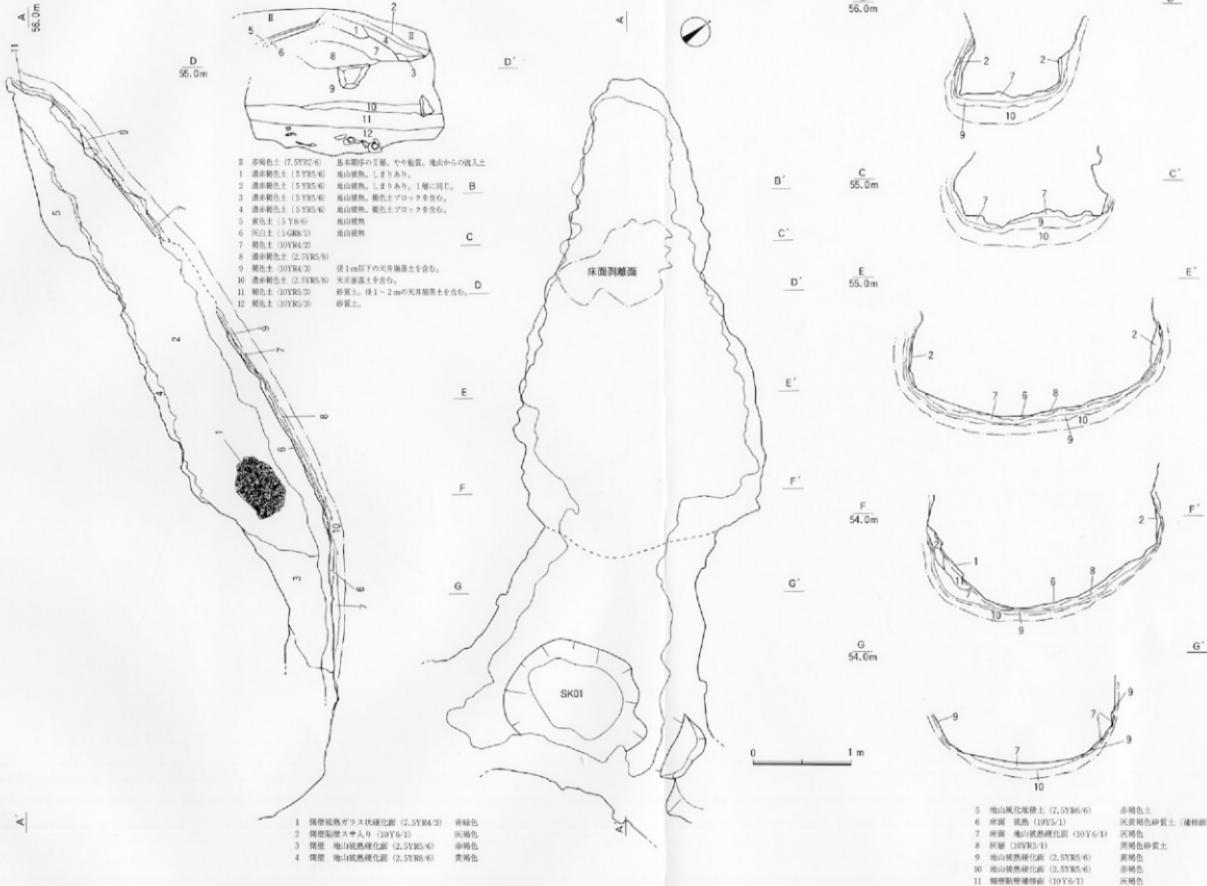
焼成部との境から急な傾斜をもって立ち上がり、地山と連なるまでを煙道部として想定した。幅は0.5m程度で、開口部は調査当初に残存していた焼成部前半の天井部との境で測ると主軸長でその長さは0.95m程度であるが、天井部が操業時の状況を保持しているとは考えられないため、正確な数値は不明である。傾斜角は68°と急傾斜で、開口部は地下式であるため、地山に直接開口していたと推測される。

SD01（5—排水溝）

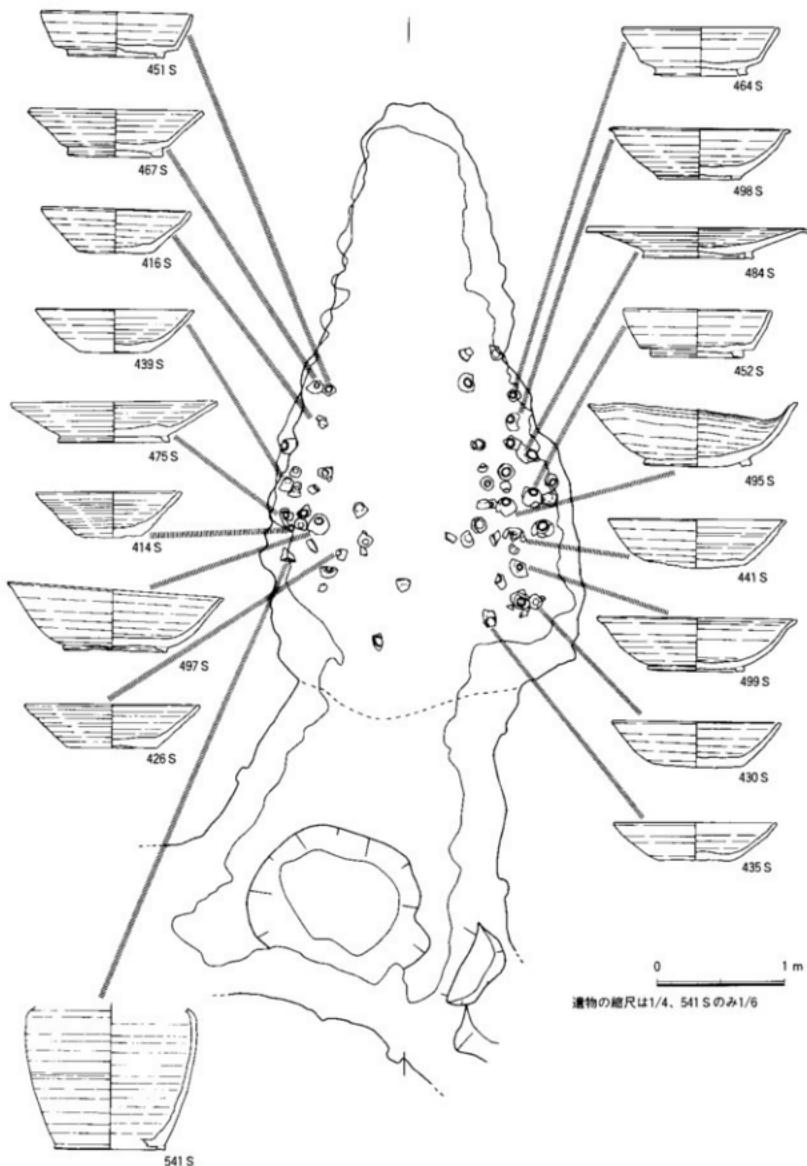
窯体上方の突端から北東方向に細長く伸びる溝で、断面形はU字形をなす。最も深い部位は窯体の主軸の延長ライン上にあり、その深さは0.4m程度である。その後、北東の突端に向かって次第に浅くなり、北東端で地山に連なる。窯体主軸の延長ライン付近は被熱を受けて壁面が赤褐色化しており、排水溝まで窯体からの炎が吹き出していたと思われる。埋土は岩盤からの風化して流入した赤褐色土が堆積していた。遺物は須恵器片12点が出土している。

前庭部・SK01（5—灰出し土坑）

焚口から壁面が斜面下方にハの字状開き、主軸長で2.61m下方において壁面が立ち上がるまでが前庭部の範囲と想定される。前庭部の平面形は南端が後述するSX02と隣接するため不明だが、およそ隅丸三角形にちかい形状を示し、このなかを0.65m程度地山の砂岩岩盤を掘削している。このため、窯体内の排水を前庭部に集めるものの、これを前庭部より下方へ排水することを想定していない特徴的な構造を有している。実際、調査中も前庭部内は晴天時でも床面から数cm～10cm程度まで冠水しており、操業時においても焚口内は日常的に冠水する確率が高い状況にあったものと推測される。また、前庭部の深さは焚口からの壁面高のそのもので、壁面の被熱部位が焚口から前庭部へ伸びることもあって外見上は窯体のようにもみえる。北側突端の壁面には、幅0.7m程度の削平された平坦な部位が2ヶ所認められ、工人の作業時の出入り口として利用された部位として想定



第101図 5号窓室体側面図・平面図



第102図 5号窯窯体内遺物出土状況図

される。

前庭部中央やや東よりで周囲の床面より最大で0.7m程度深くなる土坑を確認した（SK01）。平面形は長軸1.32m・短軸1.06mの梢円形を呈するもので、内部には黒色灰層が堆積していたため、灰出し土坑の機能をもつものと考えられる。

SK02（5）（第100図）

前庭部の南側に隣接する土坑で、急斜面を掘削して築成されている。平面形は長軸約3m・短軸2.6mの不整な梢円形を呈し、深さは0.3~0.5m程度である。埋土は上面には地山からの流入土である褐色の砂質土が覆っていたが、それより下位では褐色~黒色の灰層と酷似する埋土が認められた。出土した須恵器片の総数は293点にのぼり、その大半は流入土から出土している。褐色~黒色の土層中には壁片を含まないことから、本土坑は焼成後の不良品廃棄用の機能を有していた可能性が高いと思われる。なお、本土坑からは901Sの泥塔が出土している。

SK03（5）（第100図）

前庭部の北側に隣接し、SK02と同様の構造をもつ。平面形は不整な梢円形とみられるが、東端はSK05・SX03に削平されているため、全容は不明である。規模は長軸（残存長）1.75m・短軸1.75mを測る。地山の砂岩岩盤が深さ0.4m程度掘り込まれ、埋土の状況もSK02と酷似していた。遺物は須恵器片738点が出土し、その多くは地山からの流入土である砂質土から出土している。

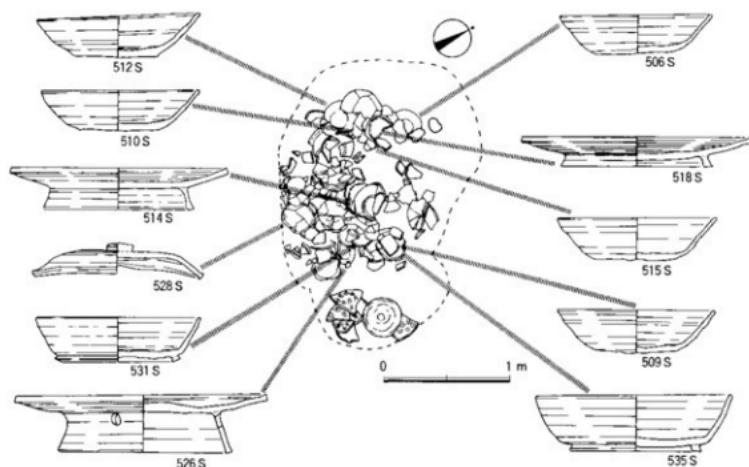
SK04（5）（第100・103図）

SK02から約1m南へ離れた位置で、長軸1.14m・短軸0.8mの比較的小規模な土坑を確認した。平面形は梢円形を呈し、深さは20cm程度である。土坑内は多くの須恵器が密集し、総破片点数は404点にのぼる。これらの検出した須恵器片は本来の形状を保つものが大半を占め、築成当時の状況を保持している可能性が高いと判断される。須恵器片は各々が隙間無く折り重なって土坑内全体を埋め尽くしており、前述のSK02・03の遺物出土状況との違いが認められ、その状況からは廃棄されたものではなく、確証を得られたわけではないが、埋納した印象を強く受けるものである。

出土した須恵器は後述する分類の坏I・坏II・蓋I・盤I類でそのほとんどが占められる。個体数にすると坏I類30点・坏II類15点・盤I類16点・蓋I類13点・鉢I類4点・甕I類1点程度と考えられる。とくに坏I類（502S~516S）は口縁端部内面がわずかに湾曲する特徴がみられ、その特徴が本土坑出土のどの資料でも共通して観察される。こうした状況は本土坑出土の資料が各々に時間差をもつものではないことを示していると考えられる。おそらく、本土坑出土資料は一回の行為により、廃棄ないしは埋納された資料の可能性が高いと思われる。

SK05（5）（第100図）

SK03の北東端に隣接する土坑。平面形は不整な梢円形を呈し、その規模は長軸1.51m・短軸1.39mを測る。深さは約50cm程度で、埋土は黒色の灰層に酷似する土層が認められた。出土した須恵器片は180点で、大半がこの黒色土中からの出土である。



第103図 SK04(5)遺物出土状況図

SK06 (5) (第100図)

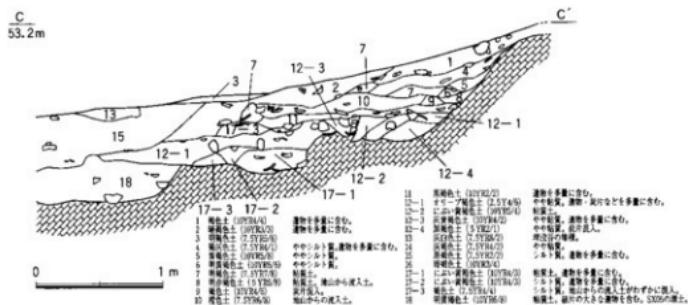
前述した排水溝の北東端際に位置する土坑。その規模は長軸0.99m・短軸0.74mで、深さは最大で約30cm程度と浅い。平面形は不整な椭円形を呈し、土坑内は砂岩岩盤からの流入土で埋められていた。なお、遺物は出土しなかった。

SX01 (5) (第100・104図)

C 4・D 4 グリッドにまたがって検出された平坦面を SX01とした。平坦面の床面面積は約7.4m²である。壁面は傾斜地を削平しているため、斜面下方の東端は明らかでないが、西側の壁面は良好であった。その西側の壁面は地山の岩盤を0.8～0.9m程度、45°程度の角度の掘り込んで作出している。東側の壁面は傾斜地の制約上、当初から存在しなかった可能性もあるが、調査中の間断のない湧水によってその確認はできなかった。確認した平面形の規模は長軸約4.1m・短軸約1.8mを測り、南北方向に長軸をとっている。埋土は灰層7・8—1層に類似する土層が認められ、多量の須恵器片が出土した。その数は12722点にものぼる。灰層と比較すると碗類の比率が高く（第40・41表）、窯体内出土須恵器と似た傾向を有する。675SはSK01・SK03出土の破片と本遺構出土の破片が接合した資料で、窯体と本遺構の関係を想定する上で興味深い資料である。破片の動きからみて、本遺構が窯体での焼成後の何らかの作業に関わる場所であったことを示すものと考えられる。

SX02 (5) (第100図)

前庭部の南端から東に溝状に伸びる遺構で、幅が1.15mとやや広いため SX02とした。その位置からみて前庭部の排水用の溝の可能性もあるが、床面が確認面から10～15cm程度の深さにあって前



第104図 SX01(5)断面図

庭部の床面より40cm強ほど高く、前庭部の排水用として充分な機能を果たし得るのか疑問が残る。仮に排水用としても前庭部の大半が冠水した時にのみ、排水用として機能したとしか考えられない。埋土には灰層に近似する黒色土が堆積していたが、遺物は皆無であった。

SX03（5）(第100図)

SK03の南東端を削平して形成されている土坑状の遺構で、小規模なためSX03とした。規模は長軸0.85cm・短軸0.82cmの平面形が楕円形を呈するもので、埋土は灰層に酷似する黒色土がほぼ単層の状態で認められた。深さは35cm程度と比較的浅く、埋土中からは177点の須恵器片が出土した。

SX04（5）(第100図)

SK05の南側及びSX03の東側に隣接する小規模な掘り込みをSX04とした。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸が0.76mを測る。短軸は隣接するSK05・SX03に削平されているため正確には分からぬが、現存長では0.54mを測る。深さは20cm弱で、遺物はほとんど出土しなかった。

SX05（5）(第100図)

SK05から1m程度斜面下方に離れたところにある土坑状の遺構で、東端は後述するSX06の削平を受けている。深さは30cm程度と浅く、規模は長軸約1.1mほどでその平面形は円形にちかい。埋土は砂岩岩盤からの流入土が堆積し、遺物は皆無であった。

SX06（5）(第100図)

SX05の東端に隣接して北東方向に長く伸び、平面形状が不整な形状を呈する。深さは80cm程度と深い。規模は長軸1.48m・短軸0.53mを測るが、長軸の正確な数値は東端が調査時の土層観察用畦の崩壊によって地山が陥没してしまったため、現存長の数値である。埋土はSX01と近似した状況が認められ、灰層7にちかい土層が堆積し、この層から多くの須恵器片が出土した。総点数は2624点にのぼり、SX01出土の須恵器片と接合関係を有する資料が多く認められた。

4号窯（第105図）

5号窯の北側に約9m離れた位置で検出した。窯体上端でみると5号窯とは標高差が約2m存する。5号窯と同じく地下式の窑窓で、基盤の砂岩岩盤をトンネル状に掘り抜いて築窓している。5号窯ではその周辺で多くの付随する遺構を確認することができたが、4号窯では湧水による土砂の流入が著しく、遺構の確認が困難であった。とくに窯体の北側は土砂の崩壊が日常的であったため、遺構の確認は不可能な状況下にあった。窯体は天井部がすでに落下していたが、その他の残存状況は良好であった。しかし、時間的制約から断面の断割が実施できなかったため、改修の有無の確認など断面観察の詳細は不明なままで、その点が残念である。

焚口は平面形からは5号窯ほど明瞭ではなく、前庭部の下方の突端から上方1.8m程度の部位に床面のわずかな変換点があり、これを焚口に相当するものと判断した。焚口から窯体上方の突端までの主軸長は全長4.66mを測り、前庭部まで含めると全長6.5mである。断面観察ができなかったため、詳細は不明だが、側壁で観察する限り被熱部位は前庭部まで大きくは及ばないと思われる。

遺物は焚口付近に操業放棄時に取り残された須恵器が出土した。焼成部から流失したものと考えられる。

焚口

床面幅は0.48mを測り、上場での幅は2.01mである。断面は円形にちかく、床面は砂岩の岩盤が露出し、青灰色に変色していた。側壁には部分的にガラス状の硬化面が認められた。

燃焼部

焚口から床面の傾斜角が変化する部位までとし、その変換点は焚口より上方0.53mの部位に位置する。床面の傾斜角は12°で比較的緩やかである。床面は砂岩の岩盤が露出し、粘土を貼った様子は観察されなかった。側壁には貼壁が貼付されているが、大半は剥落して、被熱を受けて赤色化した岩盤が露出している。

焼成部

燃焼部との境界から床面が傾斜角33°の一定の角度で上方に伸び、上端でやや角度が緩やかになる部位が認められる。このため、この部位までを煙道部との境界と判断したが、5号窯と比べると煙道部の顕著な立ち上がりがなく、判断しにくい状況である。その全長は主軸長で3.89mを測る。床面は砂岩岩盤が露出し、粘土を貼った痕跡は認められなかったが、5号窯のような粗砂も認められなかった。本窯は湧水が著しく、窯体内は常に北側の側壁からしみ出でてくる湧水が途絶えることがなかった。このような状況からみて、5号窯の床面を形成していた粗砂が床面を形成していた場合、粗砂は湧水によって失われたとの推測も可能である。しかし、露出した岩盤は青灰色に変色しており、凹凸の顕著な点に疑問が残るが、この岩盤をそのまま床面として利用している可能性も残されており、どちらとも判断できない。側壁は最大で1.1m程度が残存し、スサ入りの貼壁は上半部の床面との境界付近で顕著に認められ、中程では貼壁の剥落が著しい状況であった。ガラス状に硬化した部位は主に後半部において認められた。平面形は最大幅が主軸上で燃焼部との境界から1.2

m程度のところにあり、床面幅1.52m、確認面での上場幅2mを測り、胴張り状となる。床面の最小幅は煙道部との境で0.41mである。

焼成部中程からは390点の須恵器が出土したが、その大半は天井及び側壁の崩落に伴う流失土砂に伴って出土したもので334点の須恵器が出土した。これらの遺物は床面に伴う遺物ではないが、天井ないしは側壁の崩落に伴う土砂によって伴出した遺物であるため、本窯の操業放棄時に窓内に残された遺物である可能性が高いと考えられる。

煙道部

焼成部との境界から地山に連なるまでを煙道部とし、主軸長はわずか0.24mである。実際、顕著な立ち上がりもなく、焼成部とみた方が妥当なのかもしれない。幅は被熱部位が途切れる上端で0.37mを測る。

SD01 (4—排水溝)(第100図)

窓体上方の突端に隣接して左右に伸びる溝で、北側は窓体に沿うようにして伸びるが、南側は南東方向に直線的に伸びる。断面形はU字形を呈し、窓体主軸の延長ライン上の深さは約41cm程度で、この部位の深さが最も深い。ここより左右に伸びるに従って深さは次第に浅くなり、北端・南端でそれぞれ自然地形に連なる。窓体主軸延長ライン上を中心とする部位には強い被熱を受けて壁面が硬化し、赤色化していた。埋土は砂岩岩盤からの流入した風化砂質土であり、19点の須恵器片が出土した。そのうち582S～584Sの3点を図示した。

前庭部 (第100図)

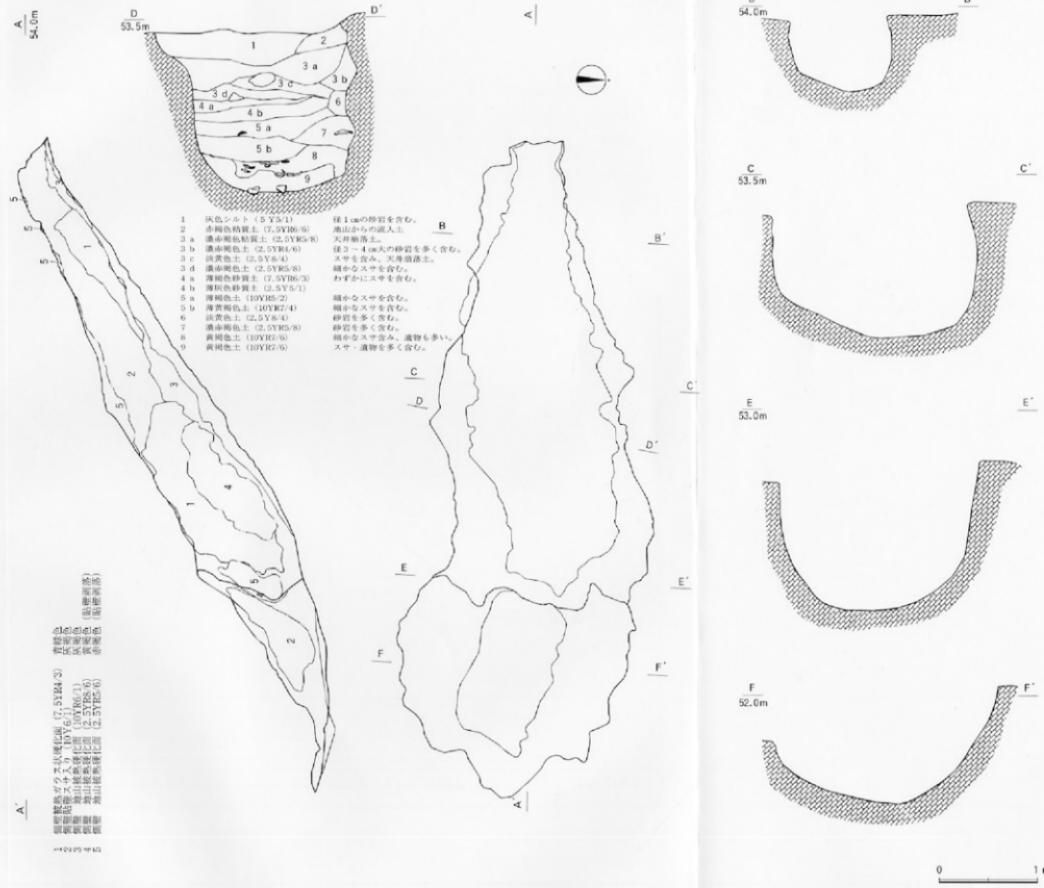
焚口下方に広がり、周囲より約20cm程度地山を削平して掘り下げている部位を前庭部とした。主軸長は1.84mで、幅は2.35mを測る。埋土は黒色を呈する灰層1—1に酷似する土層が堆積していたが、窓体内からの激しい湧水と土砂の流入のため、詳細は不明である。出土した須恵器片は445点にのぼるが、大半は窓体内から土砂とともに流入したものと推測される。なお、5号窓のような灰出し土坑は確認できなかった。

SK01 (5)(第100図)

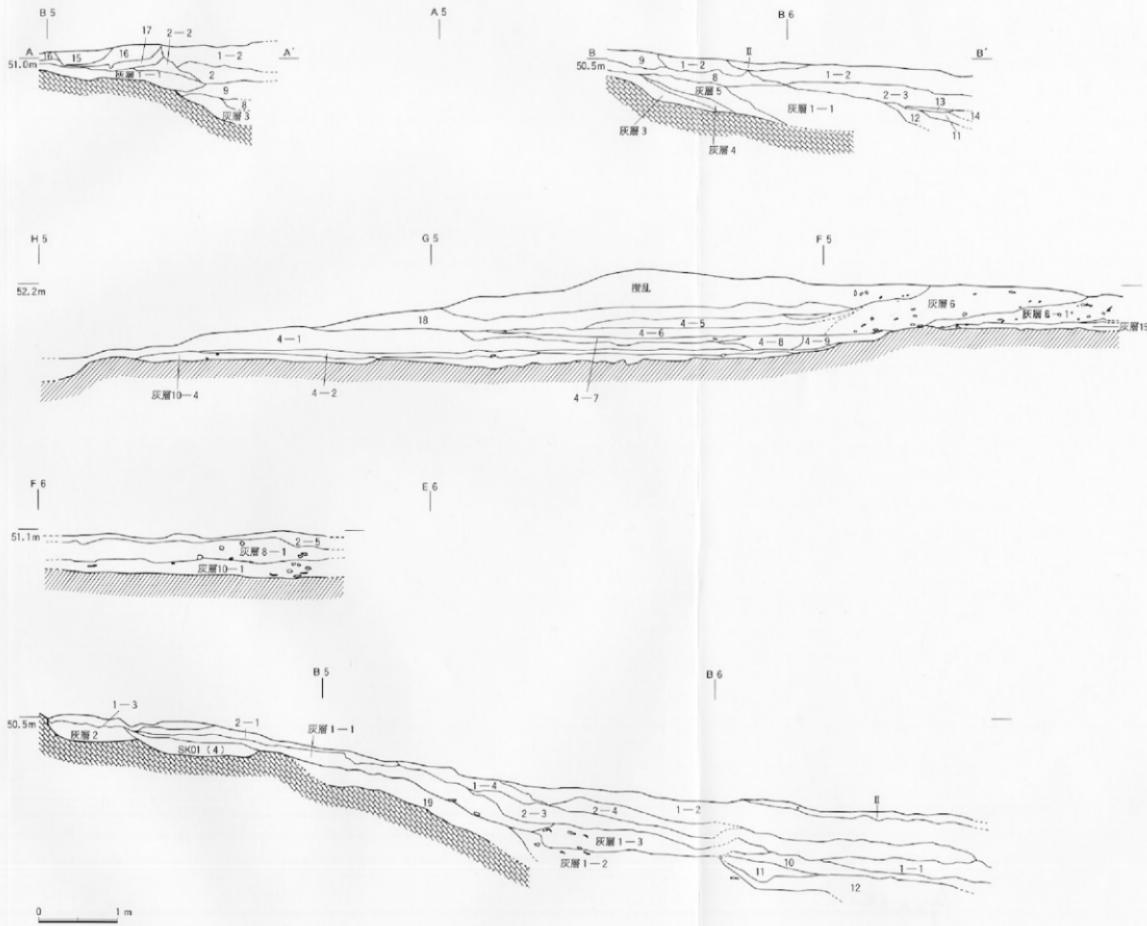
窓体下半の南側に隣接して南側より窓体へ向かって、周囲より円形状に落ち込む地形を確認した。これをSK01としたが、東端の立ち上がりは判然としない。このため、図上では破線で示している。幅は1.1mを測る。

灰原 (第106・107図)

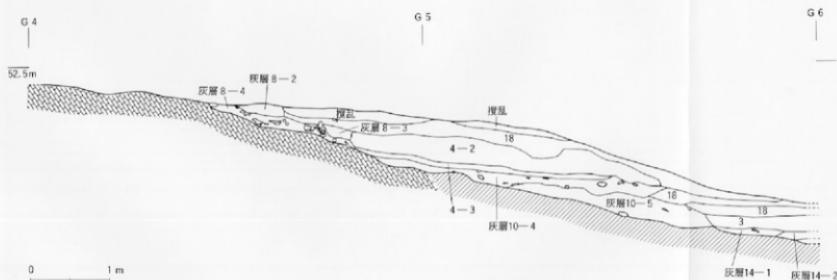
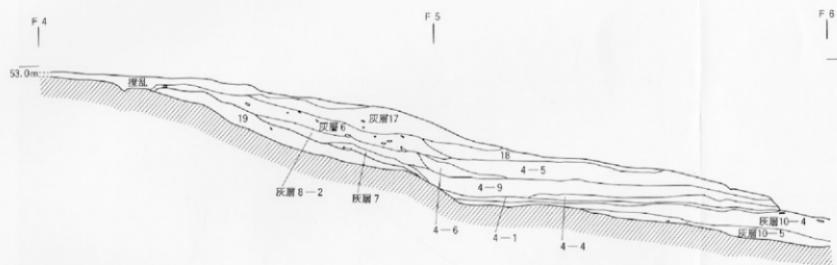
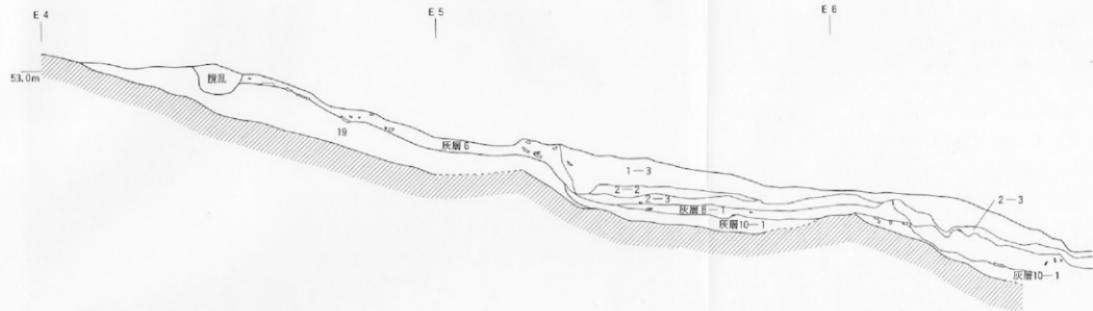
4・5号窓の灰原は西埋没谷の地形的な制約から、前庭部から南東方向に広がる。4号窓の灰原は灰層1～灰層4、5号窓の灰層は灰層5～灰層17に対応する。4号窓の灰原はA5～A7・B5～B7グリッドにおいて主に分布し、5号窓の灰原はE5～E7・F5～F7グリッドに主に分布する。両窓の灰層が重複するのはC4～C7グリッドの範囲と考えられるが、前述したように観察



第105図 4号窯窯体側面・平面図



第106图 4•5号煤原断面图(1)



第107圖 4・5號窯灰原斷面圖2

用畦の崩壊が5～7ライン上で著しかったため、記録を残すことができなかった。このため、両窯の灰層の重複を確認できなかった。また、灰層7・灰層9・灰層12は崩壊した土層観察用畦で崩壊前に確認した灰層のため、図には掲載されていない。灰層以外の1層～13層・15層～17層は西埋没谷の斜面上方から供給された基盤を形成する砂岩岩盤が風化した砂質土が堆積したもので、基本層序Ⅱ層の性格と同じ性格の土層である。これらの砂質土は還元化され、両窯の灰層を覆っている。さらには、両窯の灰層を浸食しながら堆積していると考えられることから、4号窯操業が廃棄された後、埋没谷の堆積が急速に進行したものと思われる。7～14層の土層は泥炭質の土層で、4号窯の灰層の一部の上面において確認された。こうした泥炭質の土層は4号窯灰層の下位にもみられることから、4号窯操業時には4号窯灰層の広がる範囲のうちで、斜面下方の方はかなりの湿地が発達していたものと考えられる。

両窯の灰原から出土した遺物はコンテナ箱にして約600箱と大量の遺物で、湧水により掘削が不可能となった4号窯灰層分を加えるとさらに大量の遺物が出土したと予想される。出土遺物のほぼ全部が須恵器であり、そのうちの数十点程度が須恵器以外の遺物である。須恵器以外の遺物は山茶碗・近世陶器などで埋没谷の堆積に伴って混入したものと考えられる。灰層は最大で0.3m～0.4mの厚さしかなく、かなりの部分が操業廃棄後の埋没谷の堆積によって浸食された結果が反映されたものと思われる。この灰層中から600箱に及ぶ大量的遺物が出土したわけで、かなり濃密に遺物が灰層中に含まれていた。調査中は土を掘り起こすよりも遺物を掘り起こす時間の方がはるかに長く、埋没谷の堆積による浸食がなければ、その遺物の数はさらに増大していたと思われる。

それぞれの各器種ごとの層位ならびに出土区別の点数を第39表・第40表に示した。点数はすべて接合前の破片点数で数えた。各器種のうち破片でみると器形が共通し、細分が不可能ものがある。とくに、盤Ⅰ・盤Ⅱ類は高台形状がほぼ共通するため、高台のみの残存の場合は盤Ⅰ類に便宜的に含めた。広口瓶・長頸瓶類は実測個体での数字であるが、瓶類全体ではすべての破片点数を数えた。また、双耳杯は破片の場合、把手のみのカウントのため、多少の誤差があると思われる。壺Ⅰ・Ⅱ類の数字はそれぞれ口縁部のみの数しか示していない。蓋類に関しては詳細は後述するが、鉢の有無によって蓋Ⅰ類と蓋Ⅱ類を分類したため、判別不可能な口縁部片は蓋Ⅰ類に含め、さらに蓋Ⅰ類と蓋Ⅲ類は口縁部の形状で区別したため、鉢のみの残存の場合は蓋Ⅰ類と処理した。以上のように、各器種ごとの数字は正確なものとはいえないが、大まかな傾向は反映されているものと考えられる。各器種ごとの細かな比率の変化は考察に譲るが、層位別・出土区別のどちらにおいても4号窯資料と5号窯資料とでは各器種ごとの占める比率の傾向が異なることが分かる。5号窯資料では壺Ⅰ・壺Ⅱ・蓋Ⅰ類を主体としながらも、鉢・盤・瓶・壺・壺類が一定量加わり、さらに瓶・平瓶・火舎などの少数器種が存在し、かなり多器種な構成をみせている。これに対して4号窯資料では壺Ⅰ類が圧倒的多数を占め、碗類の比率が増加している。また、5号窯資料でみられた豊富な器種構成は認められず、壺Ⅰ類・碗類が主体を占め、皿・鉢・瓶・壺類が少量ながら認められるといった少数器種の構成となっている。この両窯にみる器種構成の差異は、5号窯から4号窯へ時期が移行することにより器種の構成が大きく転換していくことを示しているとみられる。

出土区別にみると、4号窯の灰原はA 6・B 6グリッドにその中心があり、5号窯の灰原はF 5・F 6グリッドにその中心があることが分かる。問題となるのは両窯の灰層が重複するC 5～C 7

第22表 4・5号窓灰原土層観察表(1)

備考	番号	土層名	色調	観察事項	性格
灰層 1-1	黒褐色土	10YR3/1	灰層。1 cm以下の砂岩を含む。	4号窓灰層	
灰層 1-2	黒色土	10YR2/1	灰層。ややシルト質。	4号窓灰層	
灰層 1-3	黒色土	10YR2/1	灰層。灰層1-2層より鉄分が沈着し、赤味を帯びる。	4号窓灰層	
灰層 2	黒色土	10YR2/1	灰層。赤褐色の窓壁片を含み、ややシルト質。	4号窓灰層	
灰層 3	黒色土	10YR1.7/1	灰層。ややシルト質。	4号窓灰層	
灰層 4	黒色土	10YR2/1	灰層。	4号窓灰層	
灰層 5	黒色土	10YR2/1	灰層。シルト質。	4号窓灰層	
灰層 6	黒色土	10YR1.7/1	灰層。あまり砂岩及び窓壁片を含まない。	5号窓灰層	
灰層 7	暗褐色土	10YR3/1	灰層。赤褐色の窓壁片を多く含む。	5号窓灰層	団になし
灰層 8-1	黒色土	10YR1.7/1	灰層。径1 cm以下の赤褐色の窓壁片を多く含み、遺物も多量。	5号窓灰層	
灰層 8-2	黒色土	7.5YR2/1	灰層。径1~2 cmの赤褐色の窓壁片を含む。	5号窓灰層	
灰層 8-3	黒色土	7.5YR2/1	灰層。やや擾乱気味。	5号窓灰層	
灰層 8-4	暗褐色土	7.5YR3/1	灰層。やや粘質。比較的大きな遺物破片及び赤褐色の窓壁片を含む。	5号窓灰層	
灰層 9	黒色土	10YR2/1	灰層。やや砂質。	5号窓灰層	団になし
灰層 10-1	黒色土	10YR2/1	灰層。遺物を多量に含む。	5号窓灰層	
灰層 10-2	黒色土	10YR2/1	灰層。鉄分沈着して色調やや明るめ。	5号窓灰層	
灰層 10-3	黒色土	10YR2/1	灰層。2-3層が混入。	5号窓灰層	
灰層 10-4	黒色土	7.5YR1.7/1		5号窓灰層	
灰層 10-5	黒色土	7.5YR1.7/1	灰層。赤褐色の窓壁片をわずかに含む。灰層10-4に比べ遺物は少ない。	5号窓灰層	
灰層 11	黒色土	10YR2/1	灰層。	5号窓灰層	
灰層 12	暗褐色土	7.5YR3/1	灰層。	5号窓灰層	団になし
灰層 13	暗褐色土(赤)	10YR3/3	灰層。4~5 cm大の赤褐色の窓壁片を多く含む。	5号窓灰層	
灰層 14-1	褐色灰色シルト	10YR4/1	灰層。鉄分多し。径1 cm程度の黄色の窓壁片を含み、遺物を多く含む。	5号窓灰層	
灰層 14-2	褐色灰色シルト	10YR4/1	灰層。灰層14-1に比べて黄色の窓壁片を多く含む。遺物は少ない。	5号窓灰層	
灰層 15	黒色土	7.5YR2/1	灰層。やや粘質。	5号窓灰層	
灰層 16	暗褐色土	7.5YR3/1	灰層。赤褐色の窓壁片を含む。	5号窓灰層	
灰層 17	黒色土	10YR1.7/1	灰層。II層が混入し、不安定。	5号窓灰層	
1-1層	灰色シルト	5Y5/1	炭片混入。径2 cmくらいの砂岩を含む。上面に植生の痕跡あり。	埋没谷の堆積	
1-2層	淡黄色砂質土	5Y8/4		埋没谷の堆積	
1-3層	淡黄色シルト	5Y8/4		埋没谷の堆積	
1-4層	淡黄色砂質土	5Y7/3		埋没谷の堆積	
2-1層	灰白色シルト	7.5Y7/2		埋没谷の堆積	
2-2層	灰白色シルト	7.5Y7/2	やや砂粒を含む。	埋没谷の堆積	
2-3層	灰白色シルト	10Y7/1		埋没谷の堆積	
2-4層	灰白色シルト	7.5Y6/1		埋没谷の堆積	
2-5層	灰白色シルト	7.5YR6/1	やや砂質。	埋没谷の堆積	
3層	灰白色シルト	7.5Y6/1	鉄分沈着。	埋没谷の堆積	
4-1層	灰白色土	7.5Y7/1	砂質土。	埋没谷の堆積	
4-2層	灰白色土	7.5Y7/1	砂質土。鉄分沈着。	埋没谷の堆積	
4-3層	灰色土	5Y5/1	やや粘質。鉄分沈着。灰層10-1によって還元されたものと考えられる。	埋没谷の堆積	
4-4層	灰色シルト	10Y5/1	わずかに炭化物を含む。	埋没谷の堆積	
4-5層	灰白色土	7.5Y7/1	砂質土。	埋没谷の堆積	
4-6層	灰白色土	7.5Y7/1	4-5層より暗い。	埋没谷の堆積	

第23表 4・5号窯灰原土層観察表(2)

備考	番号	土層名	色調	観察事項	性格
4-7層	黄褐色土	7.5Y7/6	砂質土。色調は鉄分沈着によるものでは4-6層と同一。	埋没谷の堆積	
4-8層	暗灰色シルト	7.5Y5/1		埋没谷の堆積	
4-9層	浅黄色土	5Y7/4	砂質土。	埋没谷の堆積	
5層	暗灰色シルト	7.5Y5/1		埋没谷の堆積	
6層	灰白色シルト	5Y7/1		埋没谷の堆積	
7層	黄灰色土	2.5Y5/3		泥炭質	
8層	灰色シルト	7.5Y4/1		泥炭質	
9層	灰色シルト	7.5Y5/1		泥炭質	
10層	黒色シルト	7.5YR1.7/1		泥炭質	
11層	黒褐色シルト	7.5YR3/1		泥炭質	
12層	黒色シルト	2.5Y2/1		泥炭質	
13層	黄灰色シルト	2.5Y4/1		泥炭質	
14層	黒色シルト	2.5Y3/1	植物遺体多し。	泥炭質	
15層	灰白色シルト	7.5Y8/1	径1cm以下の砂岩を含む。	埋没谷の堆積	
16層	灰色シルト	7.5Y6/1	径1cm以下の砂岩を含む。	埋没谷の堆積	
17層	灰色シルト	7.5Y6/1	径1cm以下の砂岩を含む。	埋没谷の堆積	
18層	オリーブ褐色 砂質土	2.5Y4/3	田面及びその耕作土。		
19層	黄褐色土	2.5Y8/6	1~3cm大の黄褐色ブロックを多く含み、炭化物もわずかに認められる。	掘抜土	
搅乱	暗オリーブ褐色 砂質土	2.5Y3/3	搅乱。		

グリッド出土の資料の帰属だが、各器種ごとの比率をみると限り4号窯灰原資料に近似するため、大半が4号窯灰原の資料に含まれる可能性が高く、両窯灰層の重複はかなり小さな範囲にとどまっていたものと考えられる。

遺物（第178~219図）

4・5号窯の窓内及び遺構ならびに灰層から大量の須恵器が出土した。その総数104246点にのぼる。前述の出土区分・層位別の破片点数は104246点のうち、出土区ならびに層位が明確な資料のみを抽出したデータである。両窯から出土した須恵器はそれぞれ共通した器種が認められるため、ここで合わせて詳述することにする。

环I類 (414S~441S・460S・502S~516S・542S~544S・546S・547S・563S~565S・567S・568S・585S・586S・600S~611S・688S~712S・715S・889S・895S・914S~921S・944S・952S・957S~961S)

いわゆる無高台の壺身で、平底の底部から弱い稜をもって口縁部が外上方に立ち上がる。口縁部は直線的に伸びるが、内湾気味のと外反気味のものがあって一様ではない。端部は丸くおさめるものと尖り気味におめさめるものが認められる。一部の資料には693S・696S・702S・887S~890S・957Sなどのように全体の形状が箱形で、後述する环II類にちかい形状を示すものが見受けられる。こうした資料は外底面に回転ヘラケズリが施される例が多く、このために底部と

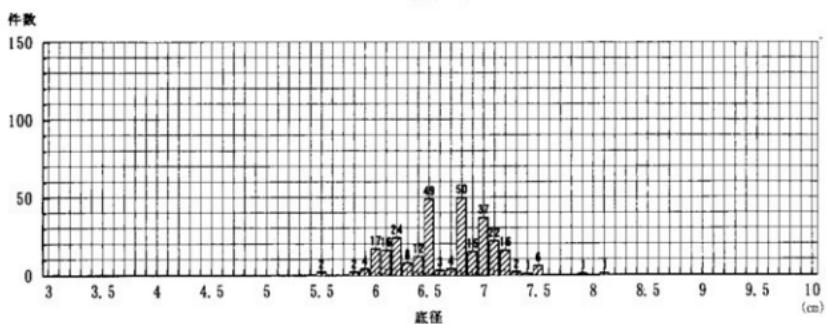
体部との境の稜が強調されてみえる。成形は回転ナデによるが、5号窯窯内出土の414S・431S・437Sのように器面の凹凸が著しい資料がわずかに存在する。5号窯関係資料では法量は大半の資料が口径10.9cm～14.2cm・器高2.5cm～4.0cmの範囲内におさまるが（第28表）、器高のばらつきが目立ち、顕著な法量分化は認められない。中心となる法量は口径12.3cm前後・器高3.2cm前後である。4号窯関係資料は口径12.7cm～15.0cm・器高2.6cm～4.1cmの範囲に法量のばらつきが認められる（第27表）。法量のばらつきは5号窯資料と比較すると小さいが、それは計測点数の違いによるもので、4号窯資料も5号窯資料と同程度のばらつきがあるものと考えられる。中心となる法量は口径14.1cm・器高3.1cmで、5号窯資料より4号窯資料の方が口径が大きくなる傾向が認められるが、底径にはほとんど差がない（第24表）。最も小型のものは688Sで口径8.0cm・底径5.2cm・器高1.8cmだが、1点のみの出土で規格外のものである。他の小型品の資料として689S～691Sがあげられる。この3点の資料は口径9.5cm前後・器高2.8cm前後と近似した値を示しており、数は少ないものの他にも同類の資料が認められるため、小型品の法量分化の一つとして成立する可能性がある。外底面は大半の資料が渦巻き状のヘラ切りの痕跡をそのまま残しているが（第25表）、ヘラ切り後にその痕跡をナデ調整によって整形するもの、ヘラ切り後ナデ調整を施すものの底部中央の突起にまでは調整がいたらないものなど様々な調整が認められる。なかにはヘラ切り後に手持ちヘラケズリ（600S・602S・610S・611S・697S・699S～702S・704S～706S）、あるいは回転ヘラケズリ（692S・693S・695S・696S・698S・702S・703S・921S）を施す資料も認められる。702S・705Sは体部にまで手持ちヘラケズリが及んでいる。回転糸切り痕を残す資料（606S・608S・709S・710S）は全体で37点にとどまり、さらに静止糸切り痕を残す資料（707S・710S・711S）はわずか4点しか確認できなかった。これら糸切り痕が残存する資料は4号窯資料中には認められなかった。606Sは外底面中央には回転糸切り痕を残すが、周囲には回転ヘラケズリで調整されているため、外底面全体に回転ヘラケズリを施す資料のうちには回転糸切りを施したもののが潜在している可能性がある。内底面には静止ナデが認められる資料も存在する。ヘラ記号はすべて外底面に陰刻され、「/」（439S・547S・605S・607S・609S）・「ニ」（567S・568S）・「ミ」（440S・611S）・「×」（441S・715S）が認められる。特殊なものに「○」に「一」が組合わさっている712Sのヘラ記号の例があげられる。また、糸切り痕を残す資料はヘラ記号のある資料が目立つ。895Sは外底面に「V」字状のヘラ記号があり、内底面には一部欠損があるものの「秦」の一字が陰刻されている。「秦」についての考察は後に詳述する。

坏II類 (451S～459S・461S～464S・531S～535S・545S・546S・552S・569S・572S・587S・590S・595S・612S・617S・754S～771S・953S・954S・963S)

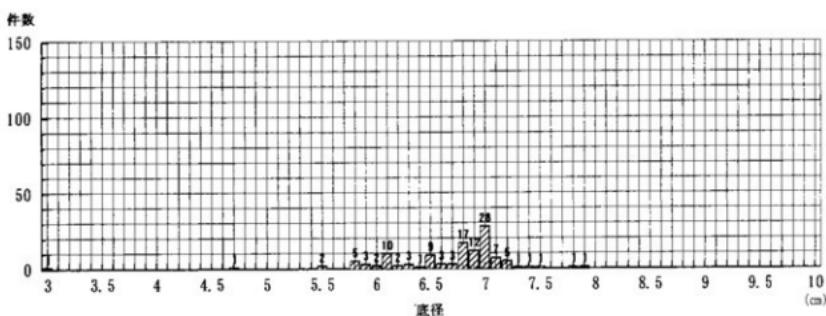
体部の形状が箱形を呈するもので、いわゆる有台坏身。平底の底部から口縁部が若干内湾もしくは外反して直立気味に立ち上がるものが大半を占める。なかには外上方に伸びているものもみられる。口縁端部はやや内湾して丸くおさめるものが多い。高台形状はハの字に伸びて断面形が台形ないし方形を呈して、端部外側がやや外へ膨らむものが多い。接地面は平行ないしは内側で接地するものが大半で、高台端部は凹面をなす。それらとは別に高台の整形が粗雑なためか、高

第24表 坪I類底径分布表

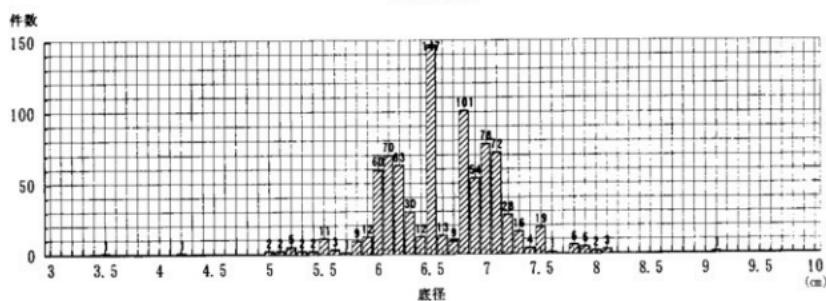
4号窯灰原



5号窯窯内



5号窯灰原



台形状が他よりも幅広で低く潰れたもの（458S・756S）、幅が狭く外側の端部が水平に伸びるもの（616S）などの多様な形状も一方では認められる。高台が貼付される位置は底部と体部との境よりも内側に偏り、なかには極端に底部中心に偏って貼付される資料も認められる（459S・616S・762S）。これらの資料のうちには高台の中心と底部の中心がずれて取り付けられる例も認められる。この場合、左右で底部と体部の境からの距離が異なることになり、その整形はかなり粗雑のものといえる。法量は両窯の資料とも大小の2分化が明確に示され（第29・30表）、5号窯窯内資料でもその傾向が認められる。5号窯原資料では口径11.5cm～13.4cm程度・器高3.1cm～4.0cm程度、口径14.1cm～16.0cm程度・器高4.0cm～4.9cm程度の大小2種の法量が認められる。前者の法量は口径12.1cm前後・器高3.5cm前後にその分布の中心があつてかなり密集した様相をみせているが、後者の法量では口径が最大で17.8cm、器高が最大で5.9cmの資料が存在し、口径・器高とともに偏差が著しい。4号窯資料では点数が5号窯資料よりも少ないため判然としないが、法量の大小差が見受けられる。小さい法量の資料は口径11.9cm・器高3.5cmに分布の中心があり、大きい法量の資料は口径13.9cm～15.9cm・器高3.9cm～5.4cmの範囲に認められる。5号窯資料と比べると4号窯資料の方が口径がやや縮小する傾向が認められるが、計測点数の過多によって生じた現象の可能性もあり得る。外底面の調整は回転ヘラケズリを施すものの占有率が高い（第25表）。わずか数点において、底部中央に回転糸切り痕を残してその周囲に回転ヘラケズリ痕が認められる資料がある（755S・769S）。回転糸切りを用いた資料は潜在的には底部全面に回転ヘラケズリを施す資料中にも存在すると考えられるが、その量はそれ程多くないと思われる。底部内面には静止ナデが認められる資料も存する。ヘラ記号は「／」（768S）・「＝」（767S）・「×」（767S）などの形状が陰刻される。また、552Sのような複雑な形状をもつ資料も希に認められる。

双耳坏I類（713S・714S）

坏I類の体部両側に板状の把手がつくもの。確認したのは713S・714Sの2点のみである。713Sは直線的に体部が立ち上がり、外底面には回転ヘラケズリが認められる。714Sは全体の形状は坏I類に近似するが、口縁部が面取りされ、坏I類とは異なる特徴が認められる。

双耳坏II類（465S・772S・773S・951S・955S・962S）

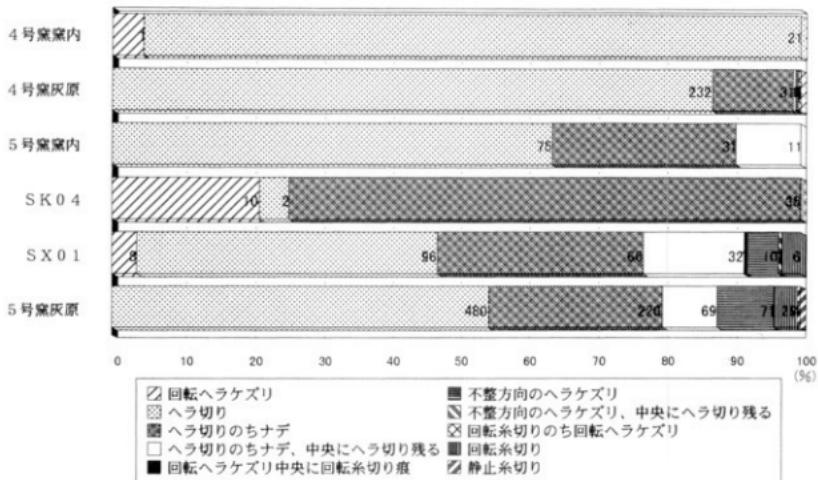
坏II類の体部両側に板状の把手を有するもの。出土量は少ないが、全体の器種構成の上である一定量を占めるものと思われる。4・5号窯どちらの資料中にも散見し、456Sは大型品であるのに対して、772Sは小型品であることから、坏II類における法量の大小差も反映していると考えられる。

碗類（489S～501S・550S・561S・562S・654S～658S・926S・927S・929S～937S・948S・949S・964S～967S）

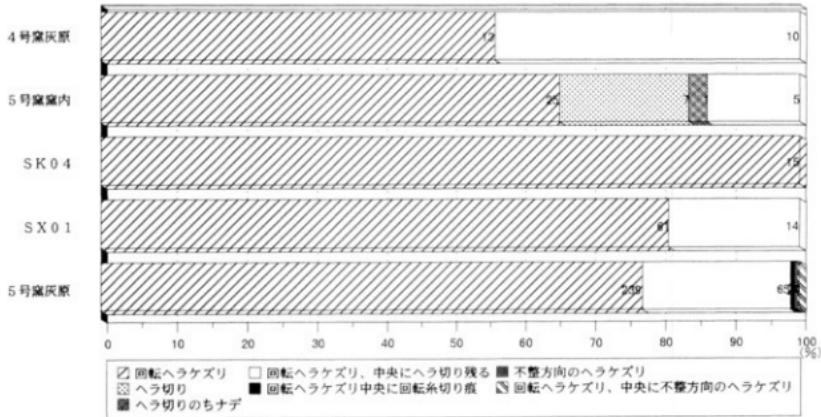
5号窯資料中では5号窯原資料には少なく、5号窯窯内出土資料に多く認められる。5号窯窯内から出土した碗類（489S～501S）は後の灰釉陶器の体部形状に酷似し、体部が内湾して口縁部が若干外反する点に特徴がある。外底面の調整は回転ヘラケズリ・ヘラ切り後ナデ・ヘラ切りの3種がほぼ同程度認められる（第26表）。回転ヘラケズリは外底面だけではなく体部上半にまで及ぶ資料があり（494S・496S・500S・501S）、これらは器壁が薄くつくりが精緻な印象を受けるが、501Sは回転ヘラケズリが及ばない体部上半では器面の凹凸が顕著で粗雑なつくりである。

第25表 壞 I・II類底部調整觀察表

坏 I 類底部調整



坏Ⅱ類底部調整



高台形状は壺II類とはほぼ同様だが、全体にその高さが低く、潰れた感がある。とくに489S・497Sの高台は低く潰れている。SK01(5)から出土した562Sは半焼けの資料だが、精緻なつくりの良好な資料である。561Sは口縁端部は外反しないためか、体部の形状が壺I類に近似する資料である。法量は第31表からは口径13.7cm前後・器高3.8cm前後と口径16.4cm前後・器高4.5cm前後の大小差があるように認められるが、計測点数が少ないと判然としない。

4号窯窯内出土の碗類(929S～936S)はその形状が一様ではなく個々の資料によって様々で、5号窯窯内出土資料と比べて体部の内湾の度合いが弱く、口縁端部の外反があり強くない点がその特徴としてあげられる。927S・934Sの体部形状は壺I類に近似し、壺I類に高台を貼付しているだけのようにもみえる。さらに4号窯窯内出土資料は高台のつくりが粗雑で、端部内面の凹面が顕著である。また、5号窯窯内資料よりも高台が低く潰れて、外見上は無高台のようにも感じられる。なかには932Sのように高台の貼付の際の粘土が内側にはみ出したままのものや、935Sのように高台が正円とならない資料も存する。こうした特徴は4号窯灰原中の964S・965S・967Sでも見い出すことができる。966Sは体部下半に弱い稜をもって口縁部にいたり、口縁部が強く外反する資料であるが、この形状を示す資料は、膨大な須恵器のうち1点のみであった。法量は口径・器高ともばらつきが著しく、法量分化は現状では不明である(第30表)。口径は11.9cm～17.3cm、器高は2.5cm～5.2cmまでの幅がある。外底面は圧倒的にヘラ切り痕を未調整のまま残す例が多く、5号窯資料と比べ粗雑である(第26表)。ヘラ記号は外底面に陰刻され、「/」(498S～500S)・「×」(562S)などの事例が認められる。

なお、前述した碗類の他に体部形状が不明だが、550Sのように高台幅がかなり細くなるものが少量認められる。これらの資料は第39～41表には碗(細)と分類して点数を表記した。

皿類(478S・481S・488S・559S・560S・784S・785S・922S～925S・928S・947S・968S～970S)

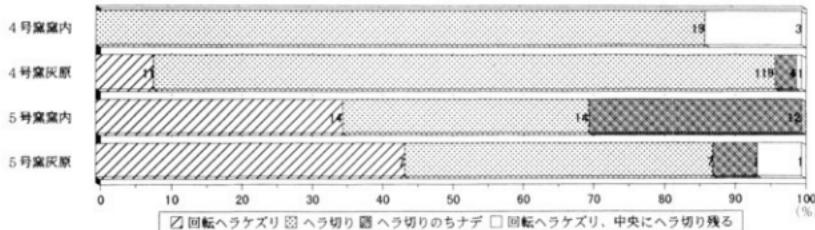
5号窯資料中は出土点数がわずかで、5号窯窯内資料の478S・481S・488S・SK01(5)出土資料の559S・560Sの5点を図示した。体部は外方に大きく開くが、478S・481S・559Sは外反気味で、560Sは内湾して口縁部にいたる。端部はいずれも丸くおさめる。高台はやや幅広でわずかに外に開くか直下する。488Sは5号窯窯内資料で皿類・蓋II類・壺I類が軸着する資料で、重ね焼きの一つ事例となる可能性が高い。5号窯灰原中の784S・785Sは口縁部が水平に伸びて高台が細長く直下する資料。図示可能な資料は図示した2点のみで、特殊な資料とみられる。形状も他の皿とは異なり、別の分類にすべきかもしれない。

4号窯資料の皿類は量的には5号窯より多いが、形態的特徴は共通する。高台は幅広で断面形が台形ないしは方形に作出され、碗類に比べて精緻である。922S・968Sの高台は幅が狭いのが特徴的な資料で、これらの資料は碗類と同様に第39～41表では皿(細)としてある。970Sの高台は断面形が三角形状を呈している。法量(第32表)は口径14.1cm前後・器高2.6cm前後に分布の中心があると思われるが、口径・器高ともに幅がある。外底面の調整は回転ヘラケズリが多く認められるが、ヘラ切り未調整のものも相当量あり、4号窯灰原資料ではヘラ切り未調整の資料が顕著である(第26表)。

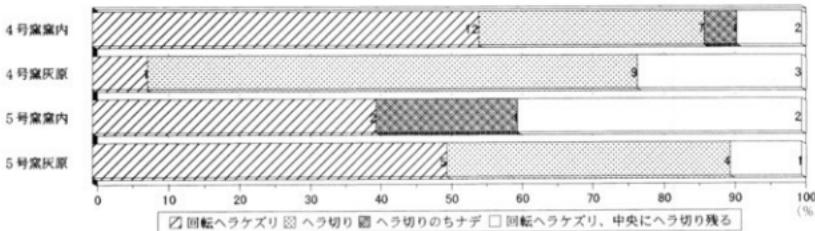
蓋I類(442S・527S～530S・548S・549S・551S・575S～579S・588S・589S・591S・

第26表 碗・皿・盤I・鉢I類底部調整観察表

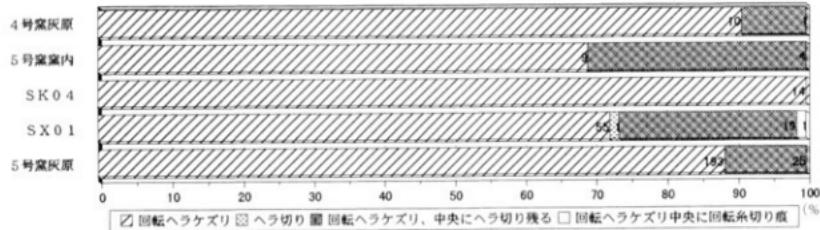
碗類底部調整



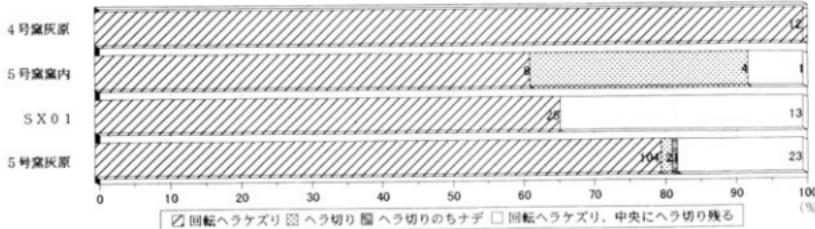
皿類底部調整



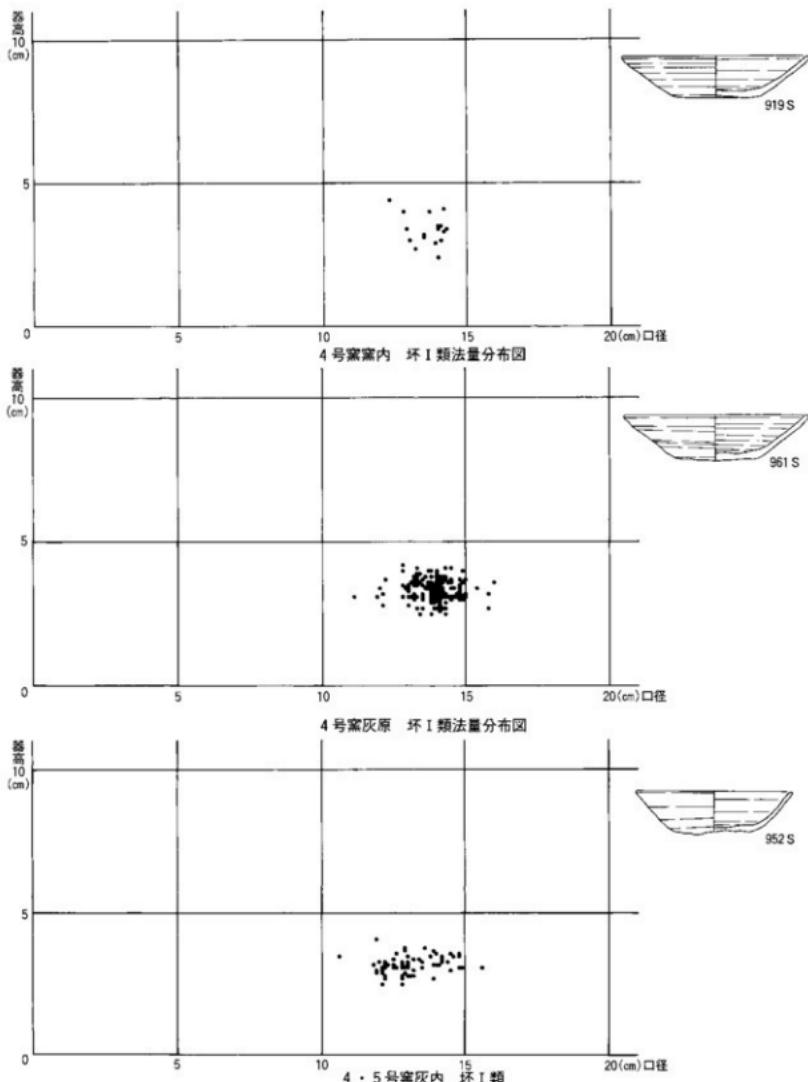
盤I類底部調整



鉢I類底部調整

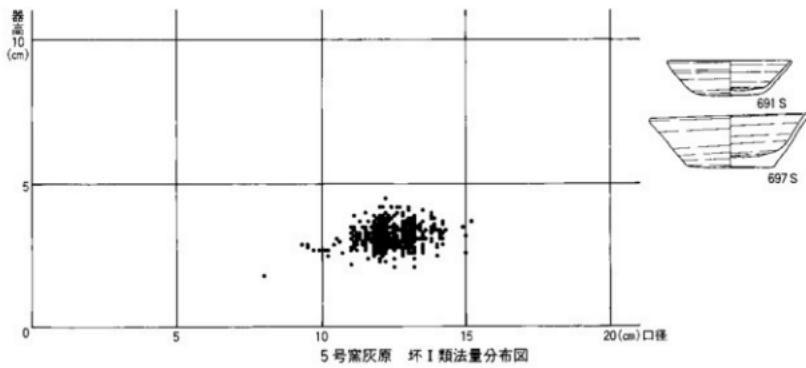
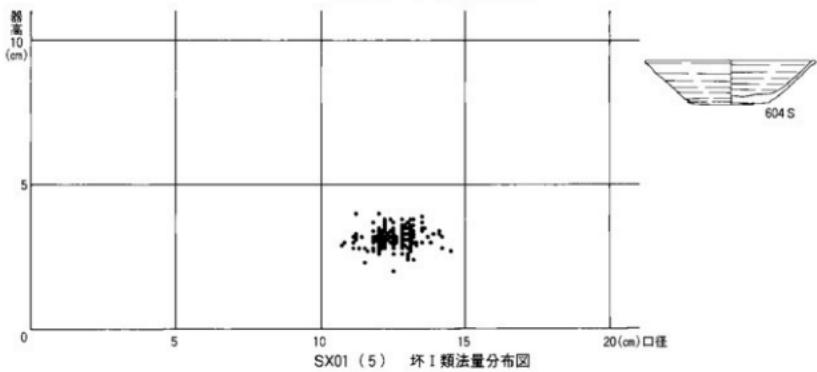
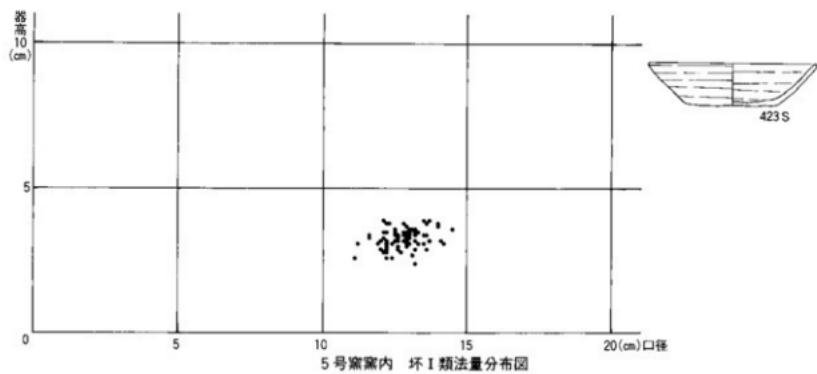


第27表 壱 I 類法量分布表(1)

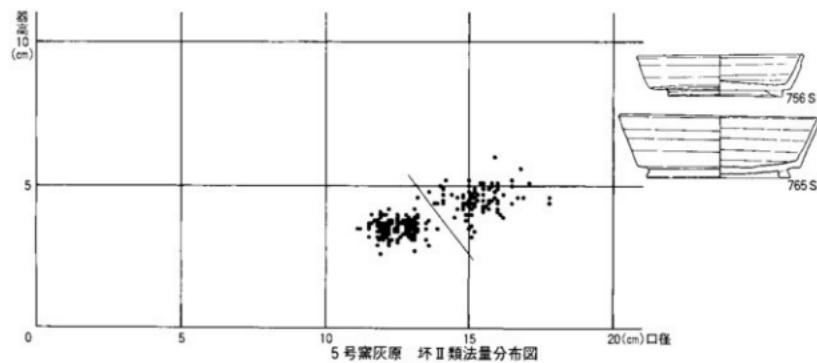
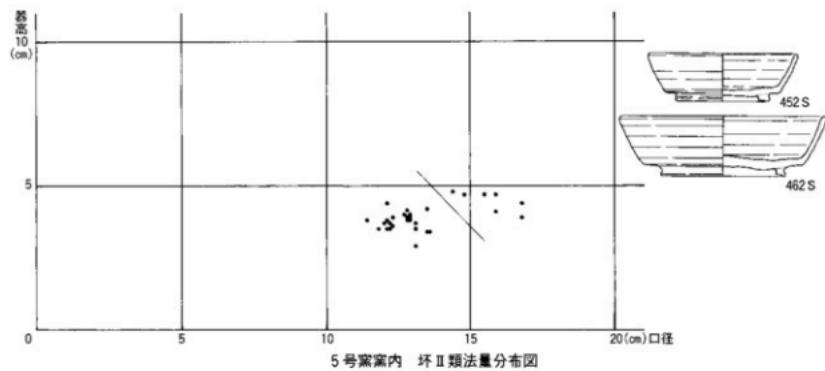
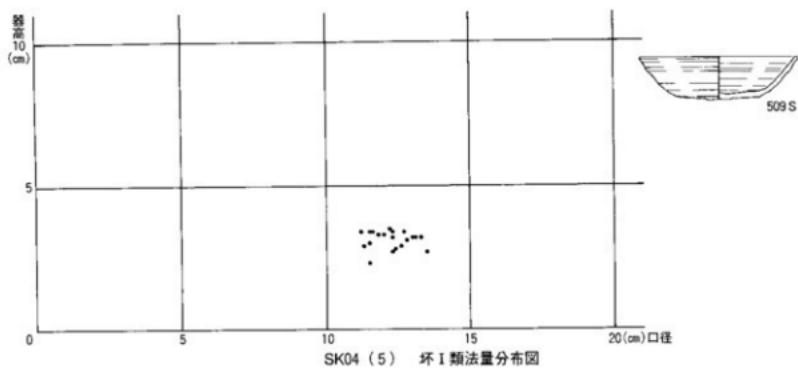


4・5号窓灰原としてあるのは同窓の灰原が
重複する可能性が高いグリッドから出土した資料

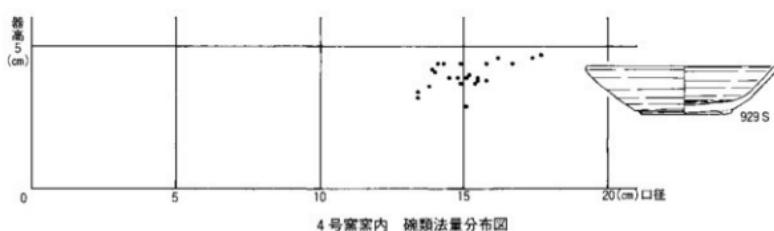
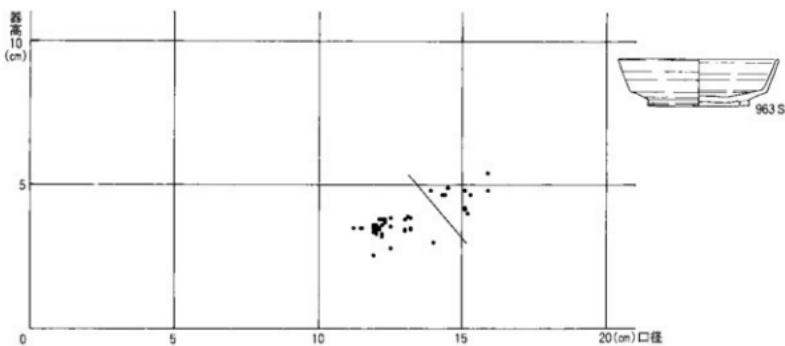
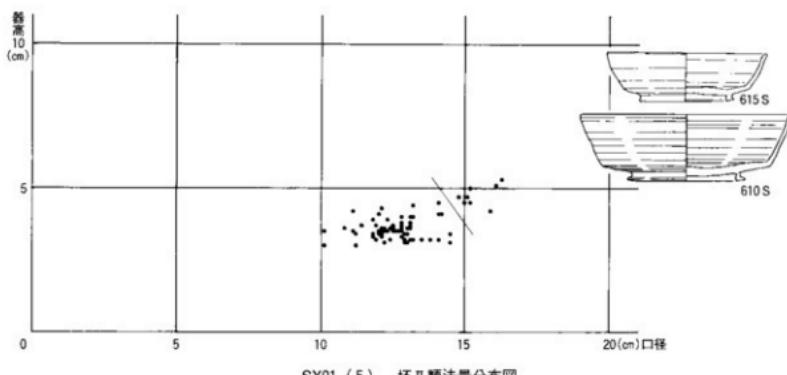
第28表 壱 I 類法量分布表(2)



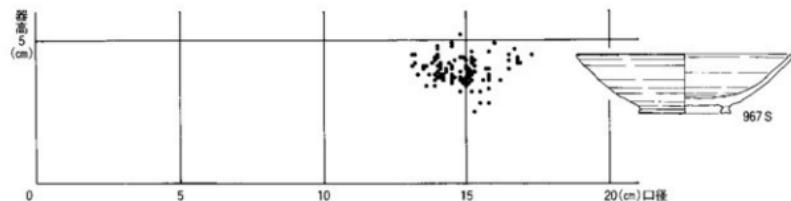
第29表 壕 I・II類法量分布表



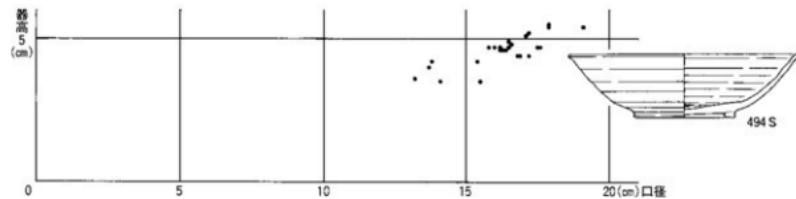
第30表 坯II・碗類法量分布表



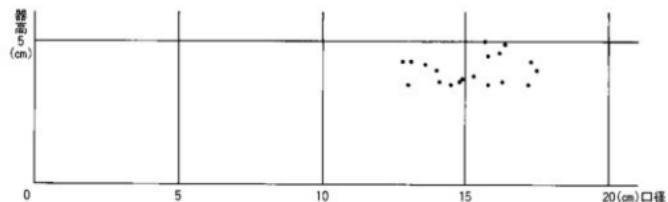
第31表 碗類法量分布表



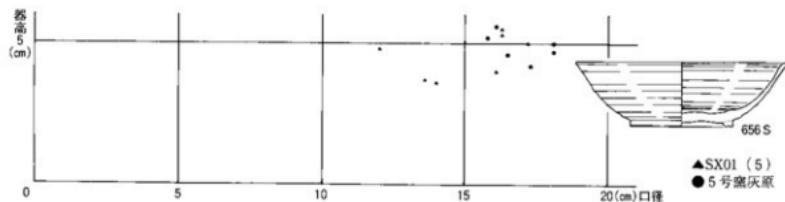
4号窯灰原 碗類法量分布図



5号窯灰原 碗類法量分布図

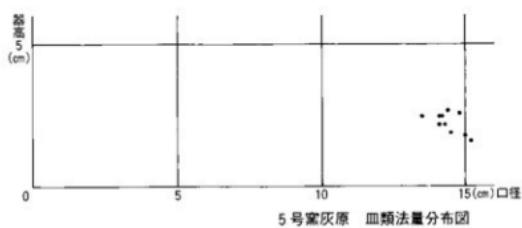
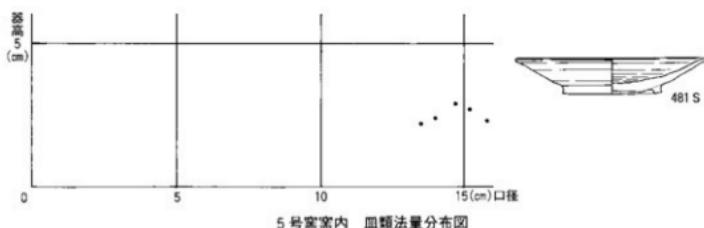
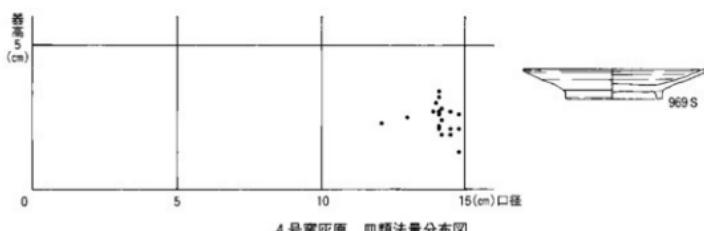
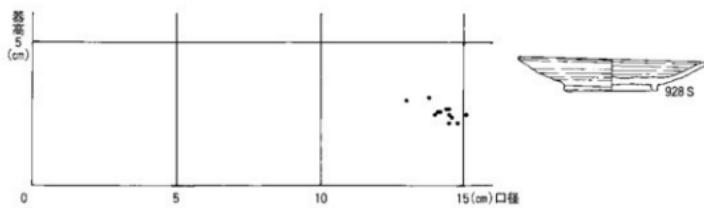


4・5号窯灰原 碗類法量分布図



5号窯灰原・SX01 (5) 碗類法量分布図

第32表 血類法量分布表



618S～632S・635S・716S～741S・746S～753S・1010S・1011S)

擬宝珠形の鉢を有す蓋を包括したが、口径が小さく宝珠形鉢をもつ蓋IA類と蓋IA類と比して口径が大きく偏平な擬宝珠形鉢をもつ蓋IB類に分類される。

蓋IA類は比率的にも蓋IB類よりはるかに少なく、588S・717S・718S・721S・731Sの4点を図示するにとどまった。鉢は717S・718Sのように偏平なものも含まれるが、上面が凸部をなして擬宝珠形となるものが大半を占める。天井部は偏平で器高が低く、鉢から天井部の1/3程度の範囲に回転ヘラケズリが認められる。器壁が薄く、全体的につくりがシャープな印象を受ける。金属器の写しのような印象を受ける。口縁端部は面取りが施され、端部外面が凹面を形成する。このため、端部の折り返しは認められないが、721Sは例外的に口縁端部がわずかに直下する。

蓋IB類は鉢及び天井部の形状において、細かな形状の違いが認められ、細分されるべき様相を示しているが、筆者の力量不足ならびに個々の資料の相違が著しいため、細分をおこなわず一括して取り扱い、窯内及びその周辺の遺構・灰原出土の資料を個々に述べることにする。

5号窯窓内・SK04(5)出土資料の442S・527S～530Sは互いに近似する資料である。鉢は上面がほぼ平面もしくはわずかに凸面をなし、天井部は若干の丸みをもつ程度で偏平である。口縁部は端部が下内方に下り、回転ヘラケズリは鉢から1・2周程度施される。527Sは極端に器高が低く、IA類にもちかい形状を示しているが、口縁端部の形状がIA類とは異なる。SK01(5)出土資料には大小の差が認められる。口径が小さい548S・549Sの形状は5号窯窓内・SK04(5)出土資料と酷似するが、549Sの鉢高の1/2程度にある鉢の最大径の位置と天井部の接点における鉢径の差があまりなく、ボタン状の形状を示すことに特徴がある。口径の大きな551Sは天井・口縁部の形態は前述の資料と同様だが、鉢がかなり潰れて偏平となる資料である。SK03(5)出土のIB類も大小2種が認められる。鉢の形状に相違があり、ボタン状のもの(578S)、偏平なもの(576S・579S)、やや厚みのあるもの(575S・577S)がある。578Sの口縁端部の折り返しはきわめてわずかなもので退化的様相が看取される。SX01(5)出土資料では鉢高が高く、その形状が宝珠形にちかくなるものが認められる(618S・619S)。619Sは口縁部を欠損するため全形は不明だが、かなりの大型品になると思われる。628S・632Sは鉢及び天井部の形状は蓋IA類に酷似する資料だが、口縁端部の折り返しが存するため本類に含めた。鉢は顯著に偏平となる資料が目立ち(620S～622S・626S)、ボタン状となるもの(625S・630S)も存する。624S～626Sは天井部が平坦で器高が高い。620Sも天井部は平坦だが、極端に偏平となり、回転ヘラケズリと回転ナアとの境に稜をもつ資料である。

5号窯灰原から出土した資料(716S・719S・720S・722S～741S・746S～753S)は鉢の形状の及び口径の大小の点など形態的には前述の資料と大半がほぼ同一の様相をもつが、なかには前述の資料にはなかった鉢の形状などがみられる。鉢が極端に偏平となりその上面がほぼ平面を呈するものに723S・726S・732S・753Sがあげられる。728Sは鉢径が他の資料と比して大きく、8世紀前半代の資料にもみえる。728Sのような資料は全資料中728Sの1点のみの出土である。738S～740Sは鉢の上面が鋭く凸状となる資料で、量的にはそれほど多くないと思われる。741Sはボタン状の鉢を有するが、鉢高が高い例外的な資料である。741S・746S・747Sは口縁

端部の折り返しがわずかで、面取りが施されたようにもみえる。729Sは天井部が平坦でヘラ切りを未調整のまま残す資料である。748Sは口径が27.7cm測る最も大きな資料で、これも例外的な資料と思われ、第33表からは除外してある。おそらく、口径からみて鉢I類の大型品とセットとなる可能性がある。

4号窯資料としての蓋I類はわずかな資料しか認められないが、形態的には5号窯の資料と大差がない。図示した1010S・1011Sの2点が4号窯資料として可能性が高いものとして判断されるが、出土区が4・5号窯の灰層が重複するグリッドからのものであるため、断定できない。

法量は大小の2つに分離している（第33表）。法量の小さいものは口径13cm～14.5cm・器高1.9cm～3.9cm、法量の大きなものは口径15.5cm～18.4cm・器高2.8cm～4.4cmの範囲に大半が分布する。前者の資料は口径13.8cm前後・器高3.0cm前後に分布が集中するが、器高の差が目立つ。後者の資料は口径・器高ともにばらつきが認められる。とくに器高における差は法量の大小とは関係なく認められることから、それぞれの法量において器高の高低により、さらに細分される可能性も考えられる。

ヘラ記号は「/」(589S・629S・749S・753S)・「▽」(750S)・「×」(752S)が天井部内面に陰刻される。

蓋II類 (443S～448S・450S・554S・582S・633S・634S・636S～638S・938S・946S・1005S～1009S)

天井部が平坦で、鉢をもたない蓋。口縁端部は面取りされて凹面を形成する資料が大半を占めるが、なかには口縁端部を直下させて蓋I類にちかい資料も存する（447S・554S・633S・636S）。天井部の調整は回転ヘラケズリが多く、ヘラ切り未調整のもの（633S・634S・938S）が少量認められる。636Sは器高の高い資料で、坏I類の形状に近似する。法量には大小が認められるが、大きな法量の資料は、その数が少なく分布にばらつきが認められる。法量が小さいものについては口径12.1cm～14.2cm・器高1.8～2.9cmの範囲に大半がおさまるが、口径の差が目立つ（第34表）。

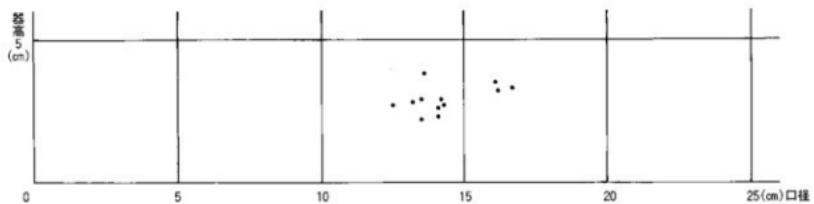
蓋III類 (449S・592S・639S・742S～745S)

偏平な擬宝珠形の鉢をもち、口縁部が天井部との境で弱い稜をもって外下方ないしは直下に下るもの。口縁端部は丸くおさめるものが多い。口縁部の形状以外の形態的特徴はほぼ蓋I B類と同様である。法量は口径13.6cm前後・器高3.0cm前後で揃う傾向があり、蓋I B類の法量の小さなものとちかいが、点数が少ないため明確にはできない。745Sは口径18.6cm・器高2.7cmを測り、前述の法量を大きく上回る。鉢の形状は上面がやや凸状となり、口縁部が折り曲げられる部位の長さも短く形態的に他の資料と比べて異質である。

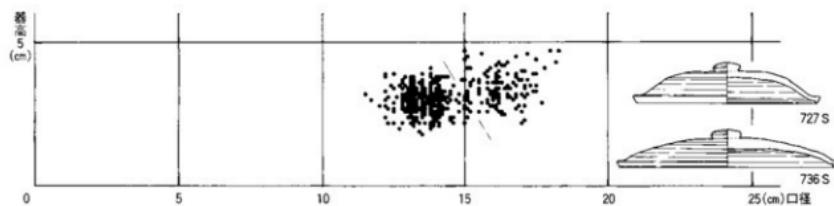
鉢I類 (466S～477S・536S～538S・583S・584S・660S～665S・774S～783S・993S)

底部・高台の形状は坏II類とほぼ同様だが、体部が底部との境で屈折して外上方に直線的ないしは外反気味に立ち上がるもの。口縁部は面取りされて平坦となるかわずかな凹面を形成する。なかには強い面取りのため、端部の上下端がそれぞれ上下へ拡張気味となるものも認められる（470S・781S・783S）。底部と体部の境は通常は高台付根より外側だが、高台付根付近にあるもの（584S・662S・775S）があり、5号窯内資料で目立つ（466S・467S・469S・472S・

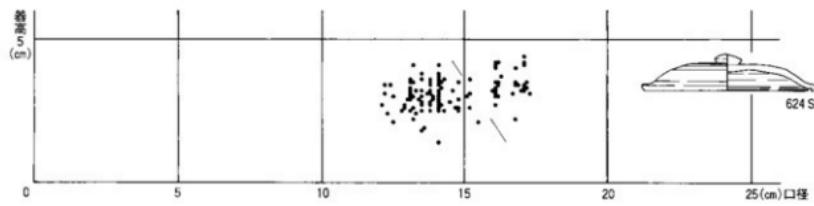
第33表 蓋 I B 類法量分布表



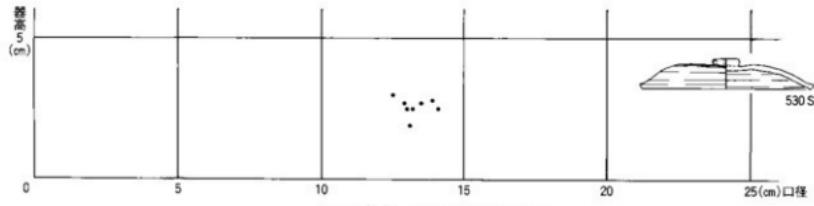
4号窯灰原 蓋 I B 類法量分布図



5号窯灰原 蓋 I B 類法量分布図

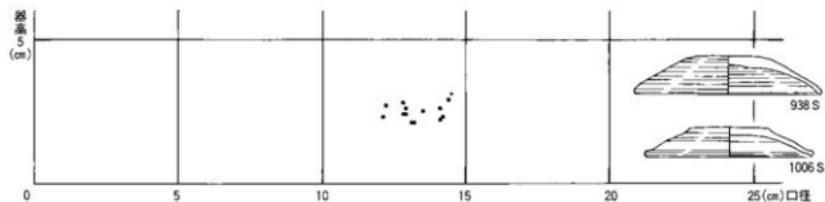
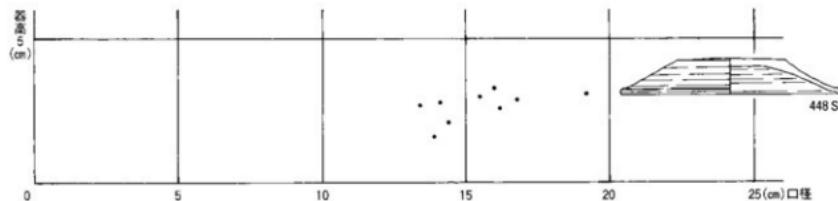


SX01 (5) 蓋 I B 類法量分布図

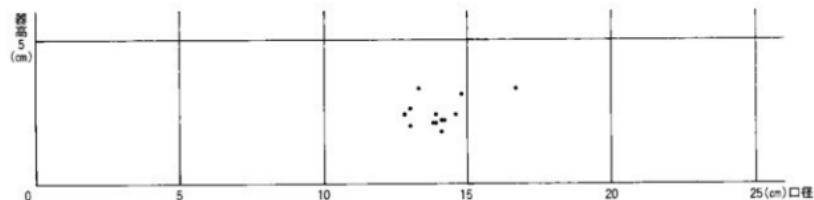


SK04 (5) 蓋 I B 類法量分布図

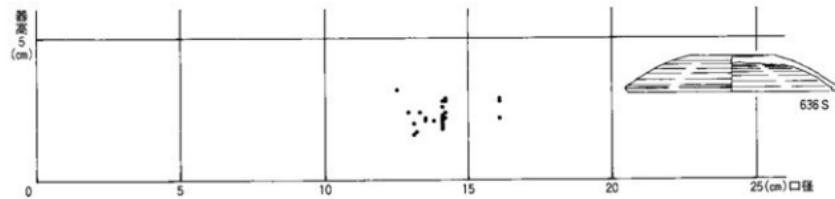
第34表 蓋II類法量分布表

4号窯内・4・5号窯灰原 蓋II類法量分布図 ▲4号窯窓
●4・5号窯灰原

5号窯窓 蓋II類法量分布図



5号窯灰原 蓋II類法量分布図



SX01 (5) 蓋II類法量分布図

475S)。法量は5号窯灰原資料でみると口径13.8cm~15.8cm前後・器高3.0cm~3.8cm前後、口径19.0cm~19.1cm前後・器高3.5cm~4.5cm前後、口径22.9cm以上・器高5.6cm以上の3つの範囲に集中する傾向があり(第35~36表)、法量が大・中・小の3つに分離される可能性が高い。993Sは口径24.9cm・底径11.7cm・器高5.5cmを測る大型品で、4号窯灰原出土のはば完形の良好な資料である。外底面は圧倒的に回転ヘラケズリ調整が多く(第26表)、坏類などと比べて丁寧な処理が行われている。ヘラ記号は「+」(475S)・「+」(476S)・「-」(665S)・「V」(783S)が外底面に陰刻される。

鉢II類 (599S・666S~669S・786S~788S・975S・978S・979S)

口頸部が頭部での字に屈折して短く外上方に立ち上がり、体部は器高の2/3程度に位置する体部最大径からわずかに内湾しながら底部にいたる。口縁端部の整形は鉢I類と共通して面取りが行われ、一部に鋭く端部の上下端が上下に拡張気味となる資料も存する。体部最大径は口径を越えることはなく、ほぼ同じかわずかに下回る程度である。整形は回転ナデによっており、外底面は回転ヘラケズリをおこなうものが大半である。669Sはヘラ切りを未調整のまま残す少数の資料である。底部ならびに高台の形状は坏II類とほぼ同様で、668Sとの高台は低く潰れて端部の凹面が顕著である。法量は点数が少ないため判然としないが、口径14.0~15.0cm前後が多い。788S・978S・979Sは口径が19.5cm前後でやや大型品も認められることから、大小の法量が存在する可能性が高い。ヘラ記号は外底面に陰刻され、「ヨ」(669S)・「二」(599S)などがある。なお、978Sと975Sは同一個体と思われる資料である。

盤I類 (479S・480S・482S~487S・517S~520S・555S~557S・580S・581S・593S・594S・643S・644S・646S~650S・789S~802S・971S)

口縁部は外上方に大きく開いて伸び、端部が面取りされる。高台は細身でハの字に伸び、坏II類の高台と比べるとその高さが高いことが特徴としてあげられるが、なかには坏II類とほぼ近似する資料もある。このため、個体差が著しく、細分される可能性を含んでいる。こうした資料はのうちには(483S・484S・650S・794S)などによりかなり低い高台形状をもつものが含まれ、皿類にちかい印象を受けるものが認められる。口縁端部の形状にも個体差が著しく、端部の上下端が拡張気味となるもの、やや丸くなるものなど様々で、483S・484S・487S・794S・971Sは上方への拡張が顕著である。また、801S・802Sのように体部中程で弱く屈折して口縁部が外反する資料が認められ、本来はこのような資料は細分すべきかもしれないが、数が少ないと本報告では本類に包括した。法量は大きく大小に2分されるものと思われ(第36~37表)、小さなものは口径13.8cm~15.5cm・器高1.9cm~2.8cm、大きなものは口径16.9cm~19.2cm・器高2.5cm~3.7cm程度の範囲が分布の中心と想定される。外底面は回転ヘラケズリ調整が圧倒的に多い(第26表)。ヘラ記号は「ノ」(487S)・「二」(649S・650S)が外底面で認められる。

盤II類 (558S・570S・571S・573S・574S・596S・645S・803S~811S)

底部・高台の形状は盤I類と同じだが、口縁部の形状がI類と異なり、体部中程で口縁部が強く屈折して上方に立ち上がるものの、あるいは上方に立ち上がった後、罐部がわずかに外側へ引き出されるものを分類した。口縁端部は前者の資料が比較的丸みをもつが、後者の資料は端部が面取りによって外側へ引き出されるため、顕著な凹面を形成することが多いようである。量的には

後者の資料が大半を占める。高台は盤I類と同様、細身の高台がハの字に開いて端部に強い凹面をもつことを特徴とし、I類でみられた壺II類に近似する低い高台の資料はわずかである（808S）。法量は大小差がみられる（第38表）が、大きな法量をもつものは口径・器高とも一樣ではない。小さい法量をもつものは口径13.0cm～15.2cm・器高2.5cm～3.0cmの範囲に集中するようである。外底面は回転ヘラケズリ調整を施すものが圧倒的で、ヘラ記号は「／」（811S）などが認められる。

盤III類（521S～526S・652S・812S～820S）

器形の形状は盤I類とほぼ同一で、高台に透孔をもつもの。透孔を有するためか、盤I類に比して高台が長く伸びることが特徴的である。透孔は三方向のものが大半で、その形状は長方形（521S・522S・525S・812S・813S・815S・816S）・方形（814S・818S）・円形（523S・524S・526S）・三連の円形（652S・817S）・十字形（819S・820S）が認められる。透孔の間にヘラ描きの模様を有するものがあり（812S・814S・816S・818S～820S）、その多くが縱方向の沈線を何本か並列させる。814SはX状に沈線を引いている。法量は他の盤類と比べて点数が少ないため判然としないが、口径19.2cm～20.5cm・器高4.4cm～5.7cmの範囲に集中する傾向が認められ（第38表）、盤I類でみられた大小の法量差の中間的な位置を占めている。

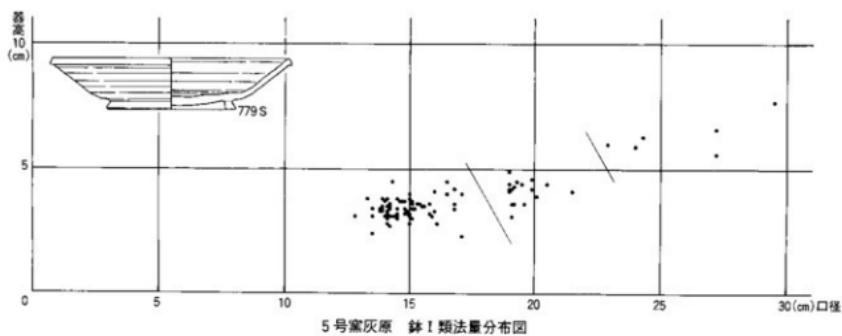
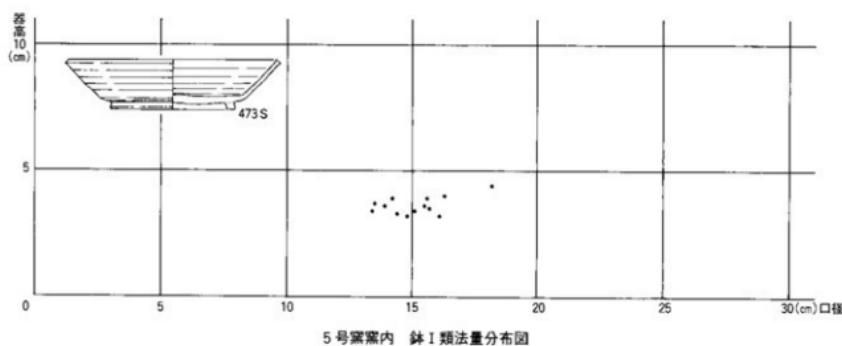
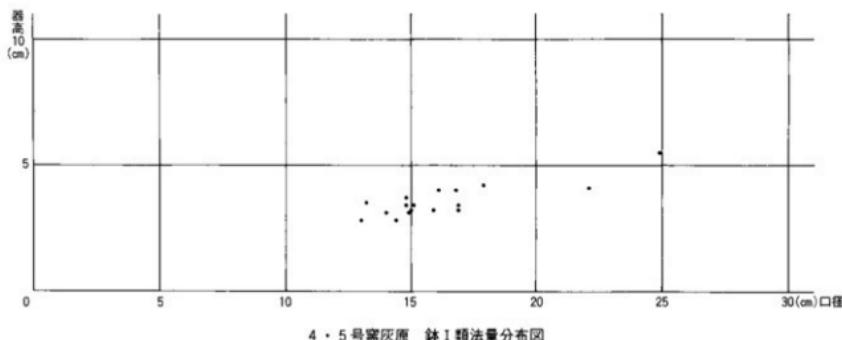
高坏（598S・670S・671S・821S～823S）

坏部の形状は盤I類の体部形状と同一で、これに脚部を有するもの。出土量が少なく、完形となる良好な資料はそれ程多くないため、断片的資料しか得られていない。脚部は基部が狭く、裾部で強く外反してラッパ状に開くもので、端部は下方に折り曲げられる。端部外面は平面ないしは凹面をもつものが多いが、丸みをもつものも認められる（822S）。透孔は長方形で二方向（598S）と三方向（670S・671S・821S・823S）の両者の資料が存する。なかには透孔ではなく、2本1組のヘラ描き沈線を三方向に配して透孔状にする資料も認められる（822S）。821Sは脚部のみが残存する資料だが、他の資料と異なり、脚部外面に縱方向の手持ちヘラケズリ調整が認められ、端部の折り返しがなく面取りされる資料である。

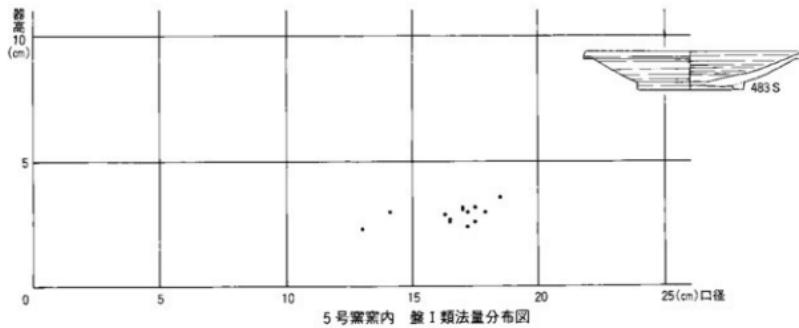
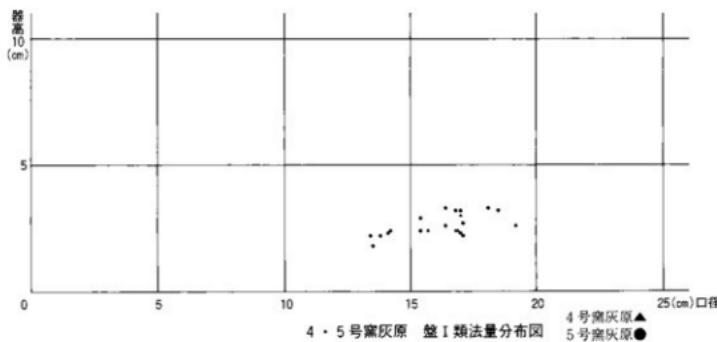
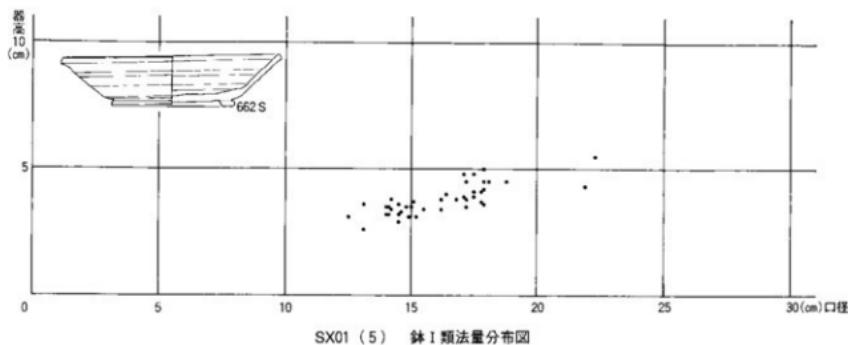
広口瓶（672S～674S・844S～846S・942S・943S・950S・986S～988S・990S・994S～997S）

口頸部が頸部から弱く外反して立ち上がり、口縁端部を外側へ肥厚させることを特徴とする。端部の形状には端部外側へ肥厚させその断面形が三角形状を呈し、外端面が内上方の凹面を形成して端部が尖り気味になるもの（672S・950S・986S・988S・990S・994S・997S）と口縁部が弱く屈折して外側へ伸びるためその形状が鍵状となり、端部が水平な平面ないしは凹面を形成するものの（673S・844S～846S・987S・996S）との2つが認められる。体部は完存する資料がないため詳細は不明だが、頸部から強く内湾して体部下半にかけては回転ヘラケズリが用いられているが、調整が粗く部分的に整形時の凹凸が残る資料も存する。おそらく、底部は高台をもつものと推測されるが、950Sは無高台の平底の可能性がある。また、950Sは自然釉か人工釉かは判別できないが、全面に釉がかかる資料である。674Sにはおそらく円環状の把手が体部の片側のみにつくものと思われる。

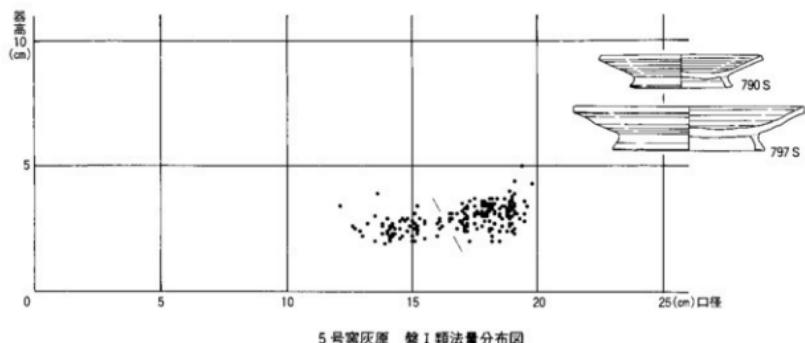
第35表 鉢 I 類法量分布表



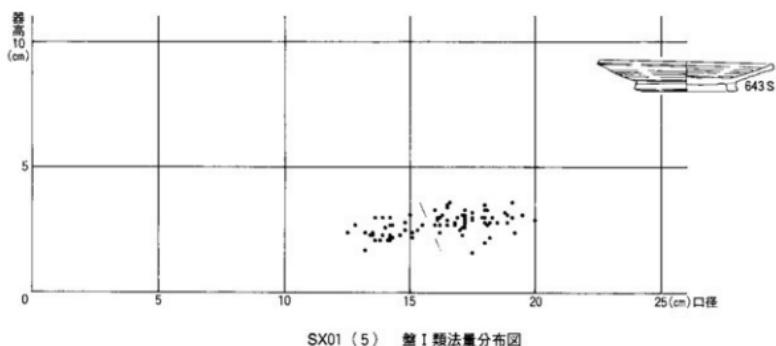
第36表 鉢 I・盤 I 類法量分布表



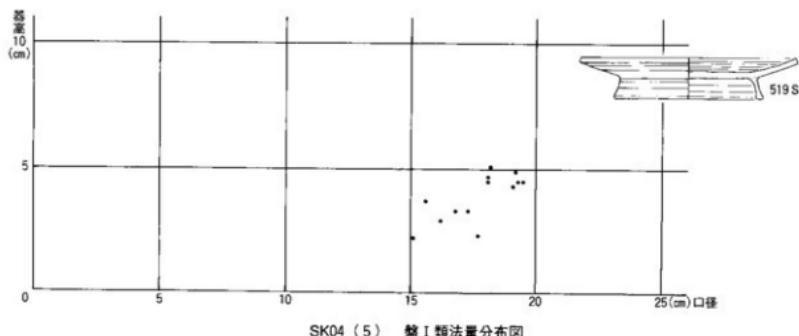
第37表 盤I類法量分布表



5号窯灰壇 盤I類法量分布図

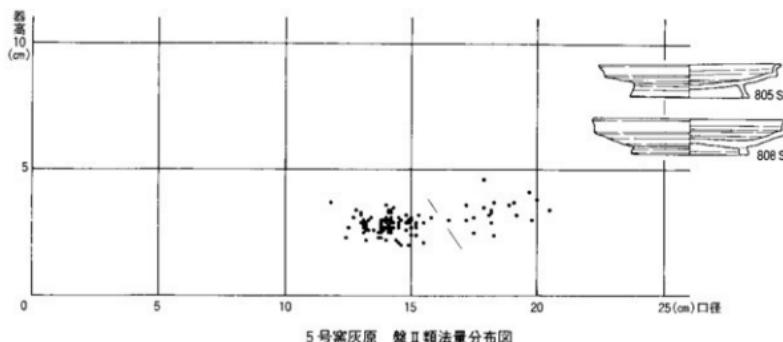


SX01(5) 盤I類法量分布図

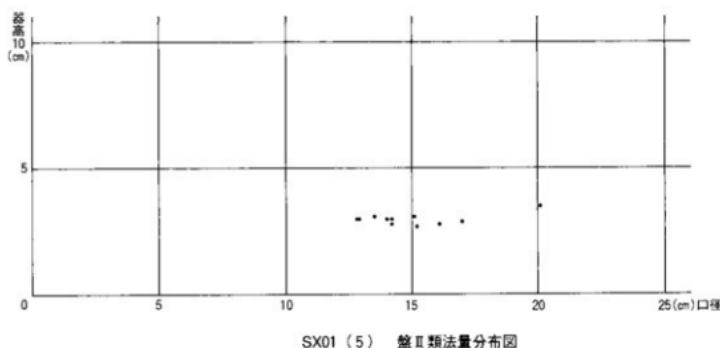


SK04(5) 盤I類法量分布図

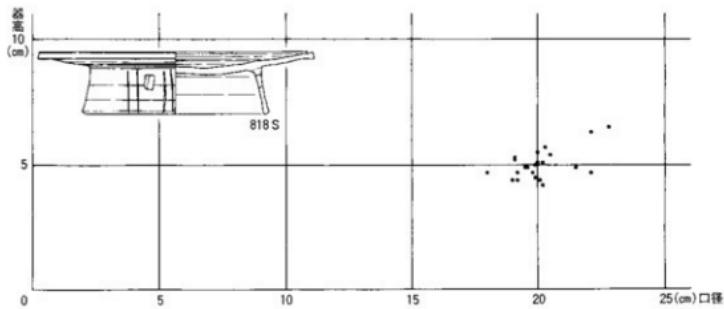
第38表 盤II・III類法量分布表



5号窯灰原 盤II類法量分布図



SX01 (5) 盤II類法量分布図



5号窯灰原 盤III類法量分布図

長頸瓶 I類 (834S・839S～842S・980S・981S・985S)

瓶類のうち広口瓶よりも頸部径が狭いものを長頸瓶類として、さらに口縁部の形状でI類とII類に分類した。I類はほぼ完形となる841S・842Sが基準で、細い頸部から口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁部が強く外反し、端部が屈折して外端面が垂直の平面ないしは凹面を呈するものを分類した。体部は頸部から内湾して底部にいたり、最大径は体部中程にある。口縁部の接合は2段接合によっている。外底面の調整は回転ヘラケズリが多いが、わずかに回転糸切り痕を残す資料が認められる(839S)。高台は短くハの字形に付される。

長頸瓶 II類 (597S・835S～837S・843S・983S・984S)

長頸瓶 I類と口縁部の形状はほぼ同様だが、口縁部が強く外反して端部が丸くおさめられるものを分類した。大半の資料が体部が欠損しているため全形は不明なものが多いが、完形に復元できた843Sを基準とするなら、体部は頸部から外方へ強く張り出し、器高1/2程度にある最大径の肩部で強い稜をもって直線的に内下方に下り、平らな底部にいたるものと考えられる。肩部から下位の体部及び底面には丁寧な回転ヘラケズリが施されている。

壺類 (539S～541S・659S・858S～862S・941S)

いわゆる三耳壺・四耳壺と呼ばれる肩部に把手が付くものを一括した。口縁部・把手の形状で個々の資料の差があり、その形状差が著しい。口縁部は頸部で屈折して短く直立する。口縁端部は丸くおさめるもの(539S・659S・859S～862S)と上面が水平となり平坦面を形成するもの(858S)とがある。体部は頸部から弱く外下方に内湾しながら最大径の肩部に下り、肩部で屈折して下内方に伸び底部にいたる。肩部から頸部の長さが個々の資料によって異なり、その長さが短い資料は肩部が強く屈折する(860S・862S)。把手は肩部の2方向・3方向に貼付されるが、その間隔は等間隔ではなく、かなりばらばらである。貼付される位置は肩部より上位、肩部、肩部よりやや下位にあるものなど様々で、把手の形状も板耳(659S・858S～860S)と綻耳(539S・861S・862S)の違いが存する。体部下半・外底面には回転ヘラケズリが認められ、高台はあまり外側へ開かないようである。

短頸壺類 (847S～850S)

口縁部が短く直立して体部が球形を呈するもの。口縁端部は壺類と同じく丸くおさめるものと平坦面を呈するものがある。体部の最大径は体部高の1/2前後にあり、肩部は強く内湾する。回転ヘラケズリは体部下半と外底面で認められる。

播鉢類 (680S・828S～833S)

深い桶状の器形を呈し、厚くつくられた底部が体部より外方へ突出する。体部は底部から上外方に伸び、口縁部がわずかに内湾する。小さな注口が外側へ二本の指によって引き出されて作出され、口縁端部は顯著な平坦面をもつ。底部の側面及び外面には円形ないし方形の穴が穿けられるものが存するが、その組合せは一定ではない。680Sは側面・外面に、832Sは外面のみに円形の穴が穿孔される。方形の穴は829S・830Sでは側面・外面で、831Sは外面のみで認められる。また、828Sの穴は菱形にちかいものである。

瓶類 (687S・872S～875S)

播鉢類と同様、深い桶状の形状を呈し、厚くつくられた底部が体部より外方へ突出する。底部

は中心に円形の孔が穿孔され、その周りに梢円形の孔が4つ配される。孔はいずれも焼成前に穿孔され、唯一底部が完存する874Sでは中心の孔径は5.5cm程度である。体部は底部から上外方に伸び、口縁部でわずかに内湾する。口縁端部は水平な平坦面ないしは凹面を形成する。把手は板状に手づくねで整形され、体部中程よりやや下位の両側に貼付される。

鉄鉢類 (675S・787S)

出土量が少なく、完存する資料は皆無であった。図示した資料は675S・787Sの2点のみである。体部は上外方に湾曲しながら立ち上がり、口縁部は内上方へ強く内湾する。口縁端部は内傾した平坦面をもち、体部下半には回転ヘラケズリが認められる。底部はおそらくやや尖り気味の丸底を呈すると思われる。

平瓶類 (676S・851S～857S・989S・991S・992S)

体部の形状は長頸瓶II類に類似し、口頸部が中心から偏った位置に取り付けられる。法量の大小・高台の有無・口縁端部の形状に個々の資料で差異が存するが、本報告では一括して取り扱うこととする。体部は底部から直線的に上外方に伸び、肩部で強く屈折して内上方に向かう。肩部より下位の体部には丁寧な回転ヘラケズリ調整が施される。把手はヘラ整形による板状のものが貼付される。小型のものは676S・851Sがあり、他の資料と比して出土量は少ない。おそらく、すべての資料が無高台と思われる。大型のものには853S～857S・989S・992Sがあげられる。これらの資料のうちには多数を占める有高台のものとは別に無高台のもの(854S)が認められる。また、口縁部が外側へ引き出されるもの(853S・855S・856S・989・992S)とわずかに外反して端部が丸くおさめられるもの(857S)との差異が存する。852S・991Sは前述の大小の資料に相当しない中間的な大きさをもつ資料と考えられる。

火舎類 (677S・678S・863S～871S・998S・999S)

浅鉢状の器形に三本足の獸足をもつもので、個々の資料によって形態差が著しい。また、獸足のみの残存で体部の器形が判明する資料が少なく、全容は不明な部分が多い。火舎として確認した資料のうち、体部の形状は平底の底部から上外方に立ち上がり、口縁端部が広口瓶類と類似する断面形が鍵状を呈するものが大半を占めるが(870S・871S・998S・999S)、一部に体部がわずかに内湾して、そのまま口縁端部がやや内傾した平坦面を形成するもの(863S・864S)も認められる。体部下半は回転ヘラケズリで調整され、比較的丁寧なつくりのものが多い。獸足は高さ・形状の点でそのバリエーションは豊富である。870S・871Sはその高さが高く、ヘラ・指頭で整形され、接地面がL字状に折り曲げられる。接地面の側面には爪は作出されていない。866S・867Sは前述の資料よりも高さが低いもので、断面形が円形を呈し、接地面を折り曲げない資料である。866Sは接地面から焼成前の円形の穿孔が認められる。677S・865S・999Sは接地面に向かってやや幅が細くなる高さの低い資料で、断面形は梢円形を呈し、指頭で整形されている。678Sはヘラで精緻に整形された資料で接地面が外側へL字状に屈折する。870S・871Sより小型になる資料の獸足である可能性が高い。868Sは粗雑なつくりの獸足で、すべて指頭で整形されている。

佐波理蓋類 (640S～642S・824S～827S)

いわゆる金属器の佐波理蓋を模倣したもの。鉢は円環状となり、上外方に立ち上がる。紐端部

は凹面を形成するもの、外側へ肥厚するもの、内側へ肥厚するものなど様々で一様ではないが、外側の端部のエッジは鋭いものが大半を占める。天井部は偏平な形状を示し、回転ヘラケズリ調整が施される口径2/3程度で稜をもって強く外反して口縁端部にいたる。端部は面取りが認められ、垂直な平坦面ないしは凹面を形成する。大半は精巧な作出をみせるが、641Sのように鉢高が低いなどの粗雑な作出を示すものも一部に存する。法量的には826Sなどが標準的と想定しているが、なかには640S・824Sなどの大型品も認められる。

甕I類 (682S・685S・876S~881S・884S~886S・939S・940S・956S・1001S~1004S・1012S~1021S)

口頸部が頸部から長く上外方に伸びるものを甕I類、くの字に短く伸びるものをして甕II類として大別した。甕I類は口縁部が強く外反して、端部形状は広口瓶類と共通して、断面形が鍵状を呈する資料が大半を占める。断面形が鍵状を呈する資料は端部上端が拡張されて、上端が縁帶状にみえる資料も存するが、個々の資料によってばらつきが顕著でその形状は一定ではない。体部は頸部から内湾するが、底部まで完存する資料がなく全形は不明である。おそらく、最大径は体部中程より上位に位置すると思われる。底部は無高台の平底と考えられる。体部外面に認められるタタキ目は平行タタキではなく、すべて格子目のタタキ目が残る。残存するタタキ目の形状は様々で、精緻で細かな格子目タタキと木目状の圧痕が残る幅広の粗い格子目タタキの2つに大別される。内面には当具痕が認められるが、円弧状のものと同心円状のものとがある。同心円状の当具痕を残す資料のなかには同心円の中心が「×」となるものが認められる。なお、876S・877S同一個体の資料である。

甕II類 (683S・684S・686S・882S・883S・1000S)

口頸部が短くくの字に外反して、口縁端部が外傾した平坦面を有するものが多いが、端部の形状には個々の資料によって差異が存する。684Sは端部の断面形が甕I類の類似してわずかに鍵状となり、1000Sでは顕著に鍵状を呈している。883Sは口頸部が短く直立して端部がおさめられるもので、短頸壺類の形状に類似する。体部は頸部から緩やかに内湾して、最大径を体部高2/3程度にもつ。底部は無高台で平底の資料が圧倒的に多いが、一部に高台となる資料が存在する可能性がある。体部外面のタタキ目、内面の当具痕は甕I類と共に存するが、1000Sの体部内面には全資料中唯一、格子目の当具痕が残存する。684Sは指頭によって整形された円環状の把手を体部両側に貼付される資料で、こうした資料は数は少ないものの、甕II類の中では一定量の割合を占めると思われる。

その他

前述の各分類に属さない少數の資料もしくは例外的な資料を一括してここで詳述する。566S・887S・888Sは一見甕I類に酷似するが、底部が狭く体部が底部から外上方に伸びた後、屈折して口縁部が上方に立ち上がる形状を示し、甕II類の高台がとれた形のようにもみえる。底部から体部が屈折する部位までは回転ヘラケズリ調整が認められる。651Sは甕I類に小さな注口が付される資料。外底面には回転ヘラケズリが認められる。653Sはかなり特殊な形状を示す資料。口縁部を欠損するが、その他はほぼ完存する。底部は平底で体部下半は内湾しながら立ち上がり、体部高2/3にある最大径から体部上半は内側へ強く湾曲する。断面円形の把手が体部上半から円

環状に付されている。把手は指頭により整形され、体部下半及び外底面には手持ちヘラケズリの痕跡が残存している。679Sは内傾した口縁部に突帯を貼付するもの。一見、羽釜にもみえる。口縁端部は水平な平坦面を有し、突帯より下位の体部外面には格子目のタタキ目が認められる。内面はナデ消されているため、当具痕は観察できなかった。681Sは鉢Ⅰ類の高台がとれた器形を呈する。底部と体部との境には回転ヘラケズリ調整が認められるが、外底面には手持ちヘラケズリが残る。838Sは小型の瓶類で、小型の資料は図示した1点のみのため、ここで取り扱うこととした。器形は長頸瓶Ⅰ類に類似し、細い頸部から口頭部が立ち上がり、口縁部が強く外反する。端部は上内方につまみ上げられ、内傾した面を有する。553S・891S・892Sは全体の形状が鉢Ⅱ類に類似する小型の資料。図示可能な資料は図示した3点しか認められなかつた。底部はヘラ切りをそのまま残す平底で体部は内湾する。口縁部は頭部からくの字に短く立ち上がり、端部は891Sのみが上内方につまみ上げられ内傾した凹面を形成している。890Sは壺Ⅰ類に酷似するものの、口縁端部が強く外反する点で異なる資料。体部下半から外底面には回転ヘラケズリ調整が残存する。893S・894Sは蓋の資料。893Sは小型で天井部が平坦で、その平坦な天井部には回転ヘラケズリ調整が残る。口縁部は折り曲げられるというよりは強く内側へ湾曲して作出されている。894Sは紐がなく、天井部が緩やかな丸みをもつ資料。口縁部は天井部と口縁部との境で稜をもって外内方に下がる。浅身の器形であるため、蓋ではなく無台の盤かもしれない。896Sは水瓶で1点のみの出土である。口頭部は筒状をなし、中程に1本の沈線が引かれる。口縁部は短く外反して、端部は外傾した面を有する。897Sは多口瓶の口頭部のみが残存する資料で、多口瓶としては唯一の資料である。口頭部は弱く外反しながら立ち上がり、体部との接合部位には顯著に指頭の痕跡が残存している。898S・972Sは円面観。898Sは脚部のみが残存し、外面にはヘラ描きの文様が認められる。972Sは現面が残るが、脚部は欠損する。陸部は平坦で、周提よりわずかに低い程度ある。周提はV字状をなす海部から直立気味に立ち上がる。陸部にはやや摩耗した面が観察できるため、使用した可能性がある。一部の残存する脚部には「×」状のヘラ描きの文様が認められる。899Sは体部下半のみが残存する資料で瓶類と考えられるが、高台が細身で長くハの字に伸び他の瓶類とは異なる。おそらく、水瓶ないしは淨瓶の体部下半ではないかと考えられる。900S・908Sは火舎の蓋となる可能性が高い資料で、いずれも小型品である。900Sは紐のみが残存し、擬宝珠形の紐が2段となる形状を示している。908Sは天井部の一部のみが残存する資料で、残存する天井部には焼成前の小さな円孔が認められる。901S・902Sはいずれも半焼けの資料の泥塔である。901Sは先端と底部を欠損するが、902Sはほぼ全形が判明する資料で、底部を除いて5段構成となっている。912Sはおそらく桶状を呈すると思われる体部に筒状の注口を有する資料。口縁端部は水平な平坦面を形成し、注口はヘラで整形されている。909Sは淨瓶。他に別個体の破片が2点認められる。913Sは瓶類の体部と思われる資料だが、体部下半に縦方向の手持ちヘラケズリが認められる。972Sは灰釉陶器を模倣した段皿。器壁が薄く精巧なつくりで、1点のみの出土である。体部下半には回転ヘラケズリが認められる。残念ながら底部を欠損する。976Sは972Sと同様、灰釉陶器を忠実に模倣した碗で1点のみしか認められなかつた。底部しか残存せず、体部を欠損するのが残念な資料である。高台は長くハの字に伸び、端部は内傾した面をもち、その断面形は三日月形を呈する。外底面には回転ヘラケズリ調整

が認められるとともに、「田磨」の字がヘラで陰刻されているのを確認した。詳細は後述する。977Sは陶錘で、いわゆる管状土錘と同一の資料である。973Sは何らかの脚部と思われるが、前述した高壺の脚部の形状とは相違する。

なお、図示していないが重ね焼きの事例として壺I類のみ(正位)、碗類のみ(正位)、壺II類(正位)・蓋IB類(逆位)を確認している。

縄釉(903~907・910・911)

灰層から出土した縄釉を7点を図示したが、図示した7点で全てである。903・904と905~907はそれぞれ同一個体で何らかの高台と思われる。905~907は体部との接合部位に内下方に下がる形状が認められるため、底部が丸底的になると推測される。この観点に立つなら器形は何か壺的な器形になるものと思われる。903・904は905~907よりも器壁が薄く、復元した径も小さいことから、905~907よりも小さいものであろう。910・911は体部片で同一個体と思われるが、具体的にどここの部位になるかは不明である。また、911は釉が赤色化しており被熱を受けた可能性がある。いずれの破片にも釉の濃淡が観察されるため、いわゆる縄釉縄彩陶器であると考えられる。

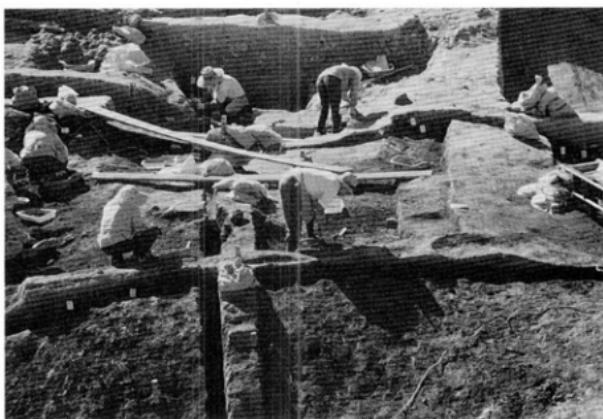


写真5 3号窯作業風景

第39表 4・5号窯器種別・土層別出土点数

第40表 4・5号窯器種別・地区別出土点数(1)

4号燃 油内	前窓部 (A)	SK00 (A)	SD01 (A)	A 5 (B)	A 6 (B)	B 5 (B)	B 6 (B)	B 6 + B 7	B 7	E 7 - C 7	4号燃耗 合計	C 5	C 6 (C 7)	C 6 - C 7	C 7	4 - 5号燃 油合計	5号燃耗 合計	前窓部 + SK01[5]	SK02 (S)	SK03 (S)	SK04 (S)	SK05 (S)	SD01 (S)	SK01 (S)	SK03 (S)	SK06 (S)	D 4	D 5	D 6	D 7	E 4	E 5	E 6	E 7	F 5 F 6	F 6	F 7	G 5	G 6	H 5	H 6	5号燃耗 合計			
44	149	217	27	3	84	1540	100	2496	239	416	625	5000	692	454	18	114	1278	385	270	51	136	137	31	15	2946	45	600	842	2596	570	3	26	2123	1265	864	3474	3	2263	237	180	292	3	14941		
貯蔵環 I												0			0																				5										
貯蔵環 II	20	6			2	32	3	48	15	42	42	184	278	74	2	9	363	182	78	42	80	59	19	5	3	1408	19	219	244	1204	220	6	1317	810	497	2180	1	1303	110	102	315	1	8430		
鉄	91	83	6	24	614	40	1025	124	191	525	2564	113	234	1	55	283	125	71	17	7	1	4	353	21	27	49	137	26	1	5	25	66	88	118	1	237	32	29	142	2	1019				
銅(酸)	2				6	25	3	7	16	56	7	3	10																							1									
銀	18	5	1		20	2	17	3	1	5	45	5	7				10	6	7				1		3	1	1	3	2	8	5	3	12	4	1	1	0								
銀(酸)											1			6																					0										
金	4	17	1	8	27	4	76	19	22	93	249	724	181	3	30	928	60	100	51	254	33	37	10	4	4250	32	751	942	2738	475	5	14	1968	2276	1092	2327	3	2094	133	127	985	4	13993		
金Ⅱ	4	1		1		9				9	39	11				50	17	8	5	1					152	6	5	1	15		2	5	12	1	19	2	2	14	73						
銀Ⅲ										9	2	2				4									5	6	2	2		1	1	14	1	9	2	1	33								
銅Ⅰ	5	29	1	11	5	27	4	31	18	5	43	133	184	24	8	266	86	64	24	52	39	22	3	1025	16	174	156	728	137	2	3	575	396	357	1069	5	906	92	73	285	1	2	4778		
銅Ⅱ					1	6	1	11	5	24	56	15				73		3	4	2			1	89	27	12	31	9	21	24	42	65	69	2	16	290									
銅Ⅲ	7	2	1	2	9	1	17	7	11	26	73	247	84	11	342	68	52	13	53	84	16	12	2	1277	12	206	270	771	196	2	3	886	540	508	1308	1051	110	100	319	3	5967				
銀Ⅳ					2	2	1	3	8	32	11	1	44		11	4	2	14	2	2	1	166	91	41	245	56	2	255	107	84	268	156	15	21	47	1297									
銀Ⅴ	6					2	3	1	12	11	5		17	1	1	4	2	2				36	23	4	53	14	1	31	28	10	38	49	9	8	236										
高環										9	5	1			6								18	2	1	13	3	17	15	8	29	36	5	127											
式口環	6	8			3	6	4	7	29	1	2		2		10	1	1	2	2				6				5		1			4	1	29											
長頭版 I					5	18	3	10	9	45	19	5	1	16	1												1	1	1	16	1		15	20											
長頭版 II					2	7	2	1	4	16	5	3		6									1	6	2		4	1	1	1			33												
総合計	10	19		5	80	1	158	19	37	96	306	147	127	16	290	4	11	4	6	1	7	3	49	2	71	82	116	57	475	404	217	996	3	798	122	207	569	1	3964						
直	2	16	4	2	1	34	3	45	19	17	46	160	68	37	2	9	116	34	26	25	46	1	26	1	496	17	153	76	422	77	11	272	262	261	810	282	23	70	291	5	3362				
短頭版										1	1	1			1		1	1	10				8				4		21	1	67	15	6	3	117										
短頭					1	2				3	5	1		4								15	8	1	8	2	13	6	20	25	1	1	1	82											
瓶	1			3	1	3	1	2	19	29	7	5	1	13	2		1	5				33	4	3	19	2	15	17	22	33	74	1	7	13	1	198									
鉛錆										0	1			1			6	1	3			4	1	2	2		1	2		6	2		15	2	428										
平歛	2				1	3	2	2	7	15	5	6		11					1	2			42	9	6	21	4	61	35	30	114	110	4	20	23										
大歛					4	2	2	2	1	11	1	4		5			1				1	5		2	7	5	2	1	4	9		33													
直角錆										1	1	3		4	1							11	3	3	16	3	8	2	9	9	10	1	2	3	66										
樂 I	3				2	1	26	7	35	32	123	28	42	3	43	1	1	4	2	23			36	7	2	2	1	5	8	23	30	23	3	27	124										
樂 II										0	7	5		12		1						61	18	4	11		2	2	1	6	6	2	34												
乗合計	31	50	6	1	69	332	49	410	131	124	555	1720	699	498	7	48	872	49	76	30	77	45	13	2	506	5	125	130	262	61	2	20	197	221	221	754	2	786	74	199	859	1	3799		
その他						1	8	1	1	11	7	3	1	11		1	2	3	1			8	4	4	10	1	3	5	2	4	16	3	68												
計										0				6																					7										
不明					2	1	10	2	3	18	6		6		6	4	4				20			4	2		6	1	2	7	6	1	29												
既存時代					1	2		1		4	1		1	3										1	2		1		33	4	21	62													
合計	335	445	48	19	299	273	296	4267	605	945	2114	11216	3059	1733	33	306	5422	1032	785	293	738	404	180	54	17	12701	176	2623	2570	9427	1923	15	91	8367	5497	4342	1370	19	3069	971	1154	4315	2	22	6329

第41表 4・5号窯器種別・地区別出土点数(2)

	4号窯窓内	4号窯窓外遺構	4号窯原合計	4・5号窯原合計	5号窯窓内	5号窯窓外遺構	5号窯原合計
环 I	149 44.47%	220 47.41%	5500 49.02%	1278 24.94%	385 37.30%	381 22.15%	14941 23.55%
双耳环 I	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	5 0.008%
环 II	20 5.97%	6 1.29%	184 1.64%	363 7.08%	182 17.53%	1932 10.75%	8400 13.241%
双耳环 II	0 0.00%	0 0.00%	1 0.005%	3 0.05%	5 0.48%	18 0.10%	40 0.063%
瓶	91 27.16%	83 17.88%	2544 22.67%	383 7.47%	125 12.11%	501 2.78%	1010 1.582%
瓶(縫)	0 0.00%	2 0.43%	58 0.517%	10 0.195%	0 0.000%	0 0.000%	1 0.002%
瓶	18 5.37%	5 1.07%	46 0.410%	10 0.195%	6 0.581%	12 0.067%	40 0.063%
瓶(縫)	0 0.00%	0 0.00%	1 0.009%	0 0.000%	0 0.000%	0 0.000%	0 0.000%
壺 I	4 1.19%	17 3.66%	249 2.21%	938 18.31%	60 5.814%	5511 30.675%	13963 22.057%
壺 II	4 1.19%	2 0.43%	9 0.080%	50 0.976%	17 1.647%	177 0.985%	73 0.115%
壺 III	0 0.00%	0 0.00%	0 0.000%	4 0.078%	1 0.097%	12 0.067%	33 0.052%
鉢 I	5 1.49%	40 8.62%	133 1.185%	266 5.192%	86 8.333%	1429 7.954%	4778 7.532%
鉢 II	0 0.00%	0 0.00%	24 0.214%	73 1.425%	0 0.000%	126 0.701%	291 0.459%
鉢 I	0 0.00%	8 1.72%	73 0.651%	342 6.676%	68 6.589%	1787 9.947%	5967 9.406%
鉢 II	0 0.00%	0 0.00%	8 0.071%	44 0.859%	11 1.066%	282 1.570%	1297 2.044%
鉢 III	0 0.00%	0 0.00%	12 0.107%	17 0.332%	1 0.097%	70 0.390%	236 0.372%
高环	0 0.00%	0 0.00%	0 0.000%	6 0.117%	0 0.000%	20 0.111%	127 0.200%
広口瓶	6 1.79%	8 1.72%	20 0.178%	3 0.059%	0 0.000%	22 0.122%	4 0.006%
長頸瓶 I	0 0.00%	0 0.00%	45 0.401%	16 0.312%	1 0.097%	0 0.000%	20 0.032%
長頸瓶 II	0 0.00%	0 0.00%	16 0.143%	6 0.117%	0 0.000%	1 0.006%	15 0.024%
瓶合計	10 2.98%	10 2.155%	396 3.529%	290 5.661%	4 0.388%	145 0.807%	3964 6.248%
甕	2 0.597%	18 3.879%	165 1.471%	116 2.264%	34 3.295%	763 4.247%	3362 5.299%
短腹甕	0 0.00%	0 0.00%	1 0.009%	1 0.030%	1 0.097%	19 0.106%	117 0.184%
壺鉢	0 0.00%	0 0.00%	3 0.027%	4 0.078%	0 0.000%	24 0.134%	82 0.129%
甕	1 0.299%	0 0.00%	29 0.258%	13 0.254%	2 0.194%	43 0.239%	198 0.312%
鉢鉢	0 0.00%	0 0.00%	0 0.000%	1 0.020%	0 0.000%	15 0.083%	15 0.024%
平版	0 0.00%	2 0.431%	15 0.134%	11 0.215%	0 0.000%	54 0.301%	428 0.675%
火舍	0 0.00%	0 0.00%	11 0.058%	5 0.098%	0 0.000%	7 0.039%	30 0.047%
住居埋甕	0 0.00%	0 0.00%	1 0.009%	4 0.078%	1 0.097%	14 0.078%	66 0.104%
甕 I	3 0.86%	0 0.00%	123 1.096%	43 0.839%	1 0.097%	73 0.406%	124 0.195%
甕 II	0 0.00%	0 0.00%	0 0.000%	12 0.234%	0 0.000%	80 0.445%	34 0.054%
甕合計	31 9.254%	51 10.991%	1720 15.330%	872 17.021%	40 3.876%	971 5.405%	3789 5.973%
その他	0 0.00%	0 0.00%	11 0.098%	11 0.215%	0 0.000%	19 0.106%	48 0.076%
経輪	0 0.00%	0 0.00%	0 0.000%	0 0.000%	0 0.000%	0 0.000%	7 0.011%
不明	0 0.00%	0 0.00%	18 0.160%	6 0.117%	0 0.000%	34 0.189%	29 0.046%
他の時代	0 0.00%	0 0.00%	8 0.071%	2 0.039%	3 0.291%	0 0.000%	73 0.115%
合計	335 100.00%	454 100.00%	11220 100.00%	5123 100.00%	1032 100.00%	17966 100.00%	63440 100.00%

総合計 99586

1号窯（第108・109図）

南方向に向かって開く東埋没谷の西斜面において1基の灰軸窯を確認した。確認順でこの灰軸窯を船山北1号窯と呼称する（以下、1号窯と省略）。1号窯は東埋没谷の入り口C11杭付近に位置し、ほぼ等高線に直行する方向で築窯されていた。煙道は表土直下で検出されたが、それより以下の燃焼室・焼成室は厚い堆積層に覆われその確認が困難であった。さらに下方に広がる灰原より上には表土下約2mにも及ぶ流入土（Ⅱ層）の堆積が認められた。その結果、窯体・灰原とともに遺存状況がよく、遺物の接合状況も良好であった。

なお、東埋没谷以外の埋没谷ではすべて2基の窯が並列することが確認されているが、東埋没谷では1号窯の南側が宅地造成によって削平されているため、残る窯の存在は不明であった。

1号窯はC12杭に隣接して焚口が位置し、窯体はそこから西向きに伸びる。窯体の大半は地山をトンネル状にくり抜いて築造し、窯体の大部分を地下に依存している。天井部の中央付近のみを地上に構築した半地下式の窑窯と考えられる。天井部はほとんどが落下しており、一部煙道付近のみ橋状に残存していた。窯体規模は全長6.71m・最大幅2.00mを測る。焼成室床面の最大傾斜角は48°で、主軸方向はN-110°-Wを向く。焼成室においては2～3回の改修が想定される。

前庭部やや下方は一部中世墓（SZA05）によって削平されている。

焚口

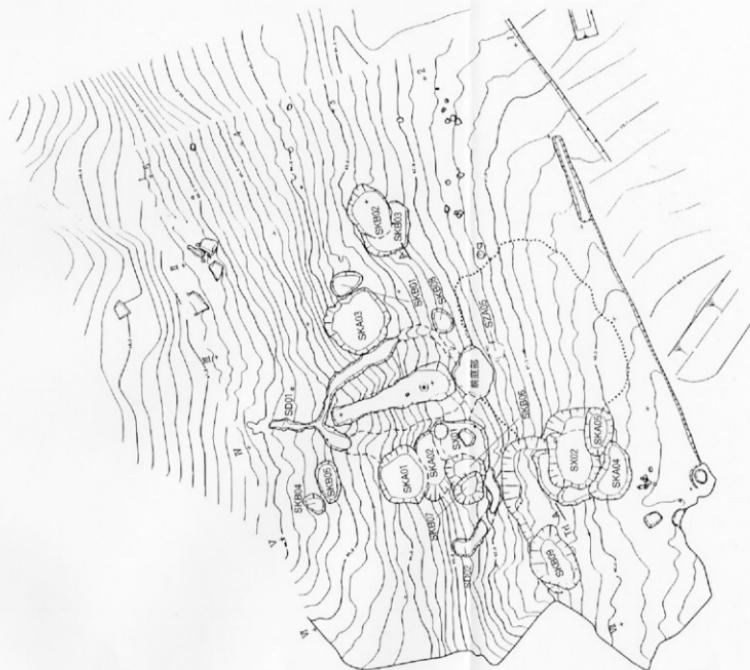
被熱部位が途切れる部位と想定されるが、その施設はまったく確認できなかった。床面幅は1.24mを測る。

燃焼室

焚口から床面の傾斜角が変化する分焰柱最奥までを燃焼室とする。床面傾斜角は分焰柱に向かって緩やかに下がり、分焰柱の最奥から上昇に転じる。床面幅は焚口からわずかに広がり、最大幅は2.02m、主軸長は1.57mを測る。床面には貼床などの施設はなく、その断面は地山が内側から灰色→黄褐色→赤褐色と変色する。操業当時の貼床の有無については確認できなかった。分焰柱付近には薄い灰層が認められたが、改修時にわずかに取り残されたものと考えられる。側壁は両側壁とも外傾するがその度合いは左側壁の方が強く、分焰柱付近ではほぼ垂直となる。

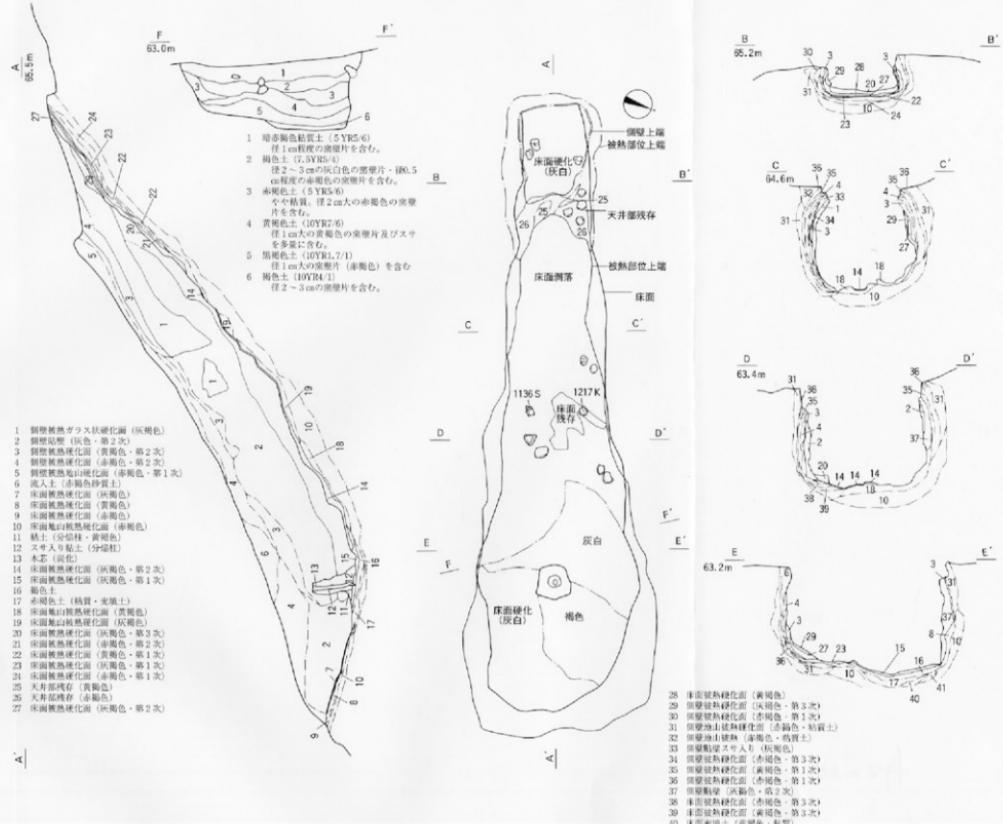
分焰柱

高さは0.43m程度残存し、その上半は天井の落下とともに欠損したと推測される。平面形は基底部で $0.36m \times 0.32m$ の楕円形を呈し、その上部の折損した部位では径0.12mのほぼ円形となり細身である。その中心には径3cm程度の炭化した木芯痕が認められ、この木芯の周囲を螺旋状にスサ入り粘土を巻き上げて分焰柱を構築している。表面は自然釉が付着しガラス状に硬化していた。なお、灰原からは残存の度合いは別にして12本の分焰柱が出土している。これより本窯がかなりの回数において部分的に改修されたことが明らかである。



0 10m

第106图 1号窑全体图



第109図 1号窓窓体側面・平面図

0 1 m

燃焼室

分焰柱最奥から床面傾斜角がやや緩やかになる部位までを想定し、主軸長3.77mになる。幅は分焰柱最奥から次第にその幅を狭める。最小幅は0.74mで煙道との境界に位置する。床面は前半部ではその角度が 20° 強と比較的緩やかだが、後半部では 40° を超える急傾斜となる。床面の貼床の大半はすでに剥落し、前半部に一部残存する程度であった。断面は内側から灰色→黄褐色→赤褐色と変色し、その被熱部位は20cmに及ぶ。後半部には4個体の径10cm程度の馬蹄形焼台がかろうじて遺存していた。横断面の観察の結果、側壁で何回かの補修の痕跡を確認することができた。とくにC・D断面においてはその様相を知ることができる。しかし、その回数は各断面で一致しないことから、窯体全体に及ぶ改修ではなく、部分的な改修を重ねた結果によるものと判断できる。側壁及び天井部はスサ入り粘土が貼り付けられていたと推測されるが、その残存は側壁の一部のみである。分焰柱付近の側壁の貼壁は自然釉が付着して硬化し、良好に遺存していた。その表面では指の押圧痕が認められた。天井部はなく、埋土下層から多量のスサ入り土層が確認されたため、何らかの要因によって天井が落下し操業を放棄したものと考えられる。

煙道部

焼成室の床面傾斜角が緩やかになる部位から主軸長1.37mを測る。その幅は焼成室と変わらず、上端とはやや急なコーナーをもって接する。床面の傾斜角は緩やかで次第にその角度を増して自然地形に連なる。床面には焼成室同様の焼台が3個体検出された。一部には十字状の藁の痕跡が認められる。煙道部での焼台の位置は疑問だが、床面の傾斜角の変化する部位と唯一天井部が残存する部位が重なることを重視して、煙道部に区画した。なお、ダンパーなどの施設は確認できなかった。

SD01（1・排水溝）(第112・113図)

煙道部の上方で排水溝を確認した。断面は浅いU字状を呈し、深さ10cm弱と浅い。上方は窯体の主軸に沿って伸び、煙道部ちかくになるとその両脇に分かれる。おそらく窯体の両脇に沿って排水する構造をもつと推測されるが、そのプランは焼成室付近では不明瞭で明確にすることができなかった。

前部（108図）

焚口の下方直下に平面形が椭円形を呈する落ち込みを確認した。灰層が堆積しており、その位置からみて前部と考えられる。その規模は長軸2.83m・2.07mを測る。深さは20～30cm程度であるが、傾斜地のためか一様ではない。壁面は西側で残存し、比較的緩やかである。東側の壁面は残存せず、当初から存在しなかったかもしくは流失したものと思われる。

附帯施設

窯の周囲で土坑あるいは作業場と想定される遺構を多数確認した。以下のように仮に3つに分類して詳述する。

- ①SX …平面方形を呈し平坦面を有す。
- ②SKA…土坑のうちに遺物が大量に投棄されている土坑。

③SKB…上記②以外の土坑でその性格が不明なもの。

SX01（1）(第110図)

1号窯の燃焼室南側に位置する。平坦面と2ヶ所から被熱部位が検出されたため、作業場の機能をもつものと推測される。平面形は東西方向で約2.7mの方形を呈すると考えられるが周囲をSKA02・SKB06で切られ、全形は不明である。壁面が残存する東側で壁高は0.1m程度である。床面及び壁面でわずかに被熱を受けた部位を北西隅及び北東隅ちかくで検出した（焼土1・焼土2）。いずれも基盤をわずかに周囲より2～3cmほど円形に掘り下げている。断面中には焼土の堆積はほとんど認められなかったため、長期間使用されたものとは考えにくい。周囲の遺構との切り合い関係をみるとSX01が最も古い遺構として想定され、焼台が大量に廃棄されたSKA02との関係を考えるとSKA02が機能していた段階ではすでにSX01は埋没していたと推測される。その場合、1号窯操業時にはSX01が埋没していたことになり、どのような意図があって窯に隣接して平坦面を造出したのか疑問が残る。SKA02はその上部にあるSKA01に掘削されている。このような状況から類推すると、これらの遺構は急斜面上に立地するため、堆積の速度が早く、その結果として埋没後隣接する場所に次々と必要な新しい遺構を掘削したとも考えられるが、調査の所見から確証は得られていない。床面積は確認範囲で8m²である。焼土1の被熱部位のちかくで1272Kが出土しているが、北側の壁から流入してきたものと思われる。

SX02（1）(第111図)

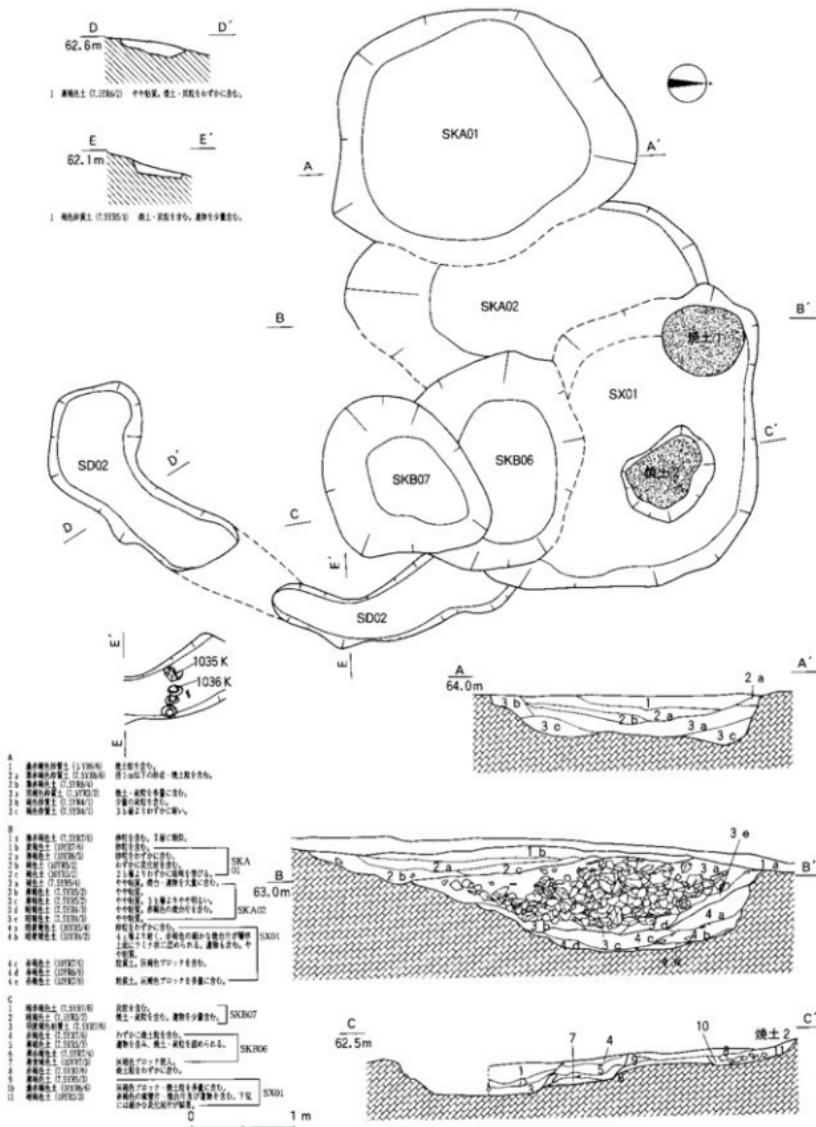
V1グリッドの北西には位置する。平面形は南北方向で約4.1mの南北にやや長い長方形にちかいプランを示す。東側にはSKA04・5があり、SKA05によって切られているがおそらく同時に併存し、SKA04・5はSX02に附属する施設であったと考えられる。2列の灰層セクション（第115図）で観察すると北側の壁高は1.25m、南側の壁高は0.63mを測る。南側・東側の壁面の立ち上がりは北側の壁面に比べてやや緩やかになっている。埋土は灰層が厚く堆積し、その厚さが1.2mに達するところもある。SX02の位置は斜面下方で灰層が流入しやすく作業場としての役割を充分に果たせるものか疑問が残る。柱穴は認めらず、長期にわたる居住は想定しにくい。床面積は確認範囲で7.8m²。

SKA01（1）(第110図)

SX01の斜面上方西側にあり、SKA02を切って掘り込まれている。平面形は不整円形で、長軸3.11m・短軸2.55m。深さは0.5m程度で断面は皿状を呈す。遺物はあまり出土していないが、SKA02に隣接することからSKA02埋没後にその役割を継続するものとして掘削されたものと解釈して本類に含めた。

SKA02（1）(第110図)

典型的に不良品が廃棄された土坑。SKA01の東側に隣接する。埋土からは大量の投棄された焼台が検出された。深さは最大で約0.7mを測り、断面形状はSKA01とちかく皿状となる。埋土は単純といえる程に焼台で埋め尽くされており、その隙間にわずかに土器片がみられる程度である。おそらく、焼台投棄ないしは一時保管の専用場所としての役割を果たしていたと想定される。平面形は周囲の遺構で切られているため不明だが、推定で長軸3.5m程度の不整円形と考えられる。



第110図 1号窯附帯施設平面図・断面図(1)

SKA03（1）(第113図)

焼成室の北側に位置し、平面形は直径約3.3mの不整円形を呈す。深さは約0.4mでと他の土坑と比較して浅めである。埋土中からは土器・焼台が傾斜地のため東側に偏って出土した。その量はSKA02と比較すると少ないが、Ⅱ2・Ⅲ2グリッドの西半分上面では焼台が多量に検出され、これらの焼台はSKA03から流失した可能性もある。

SKA04（1）(第111図)

SX02の東側に隣接する。平面形はSX02の南東隅に沿うような長軸約3mの不整楕円形を呈す。SX02との床面の比高差は0.15mで、ややSKA04の方が低い。SX02と一緒に遺構と考えられ、埋土から多数の遺物が出土した。とくに大型品の大破片が目立ち、とくに底面からは焼台とともに1310Kが廃棄されていた。深さは0.23mを測り、断面は皿状を呈す。

SKA05（1）(第111図)

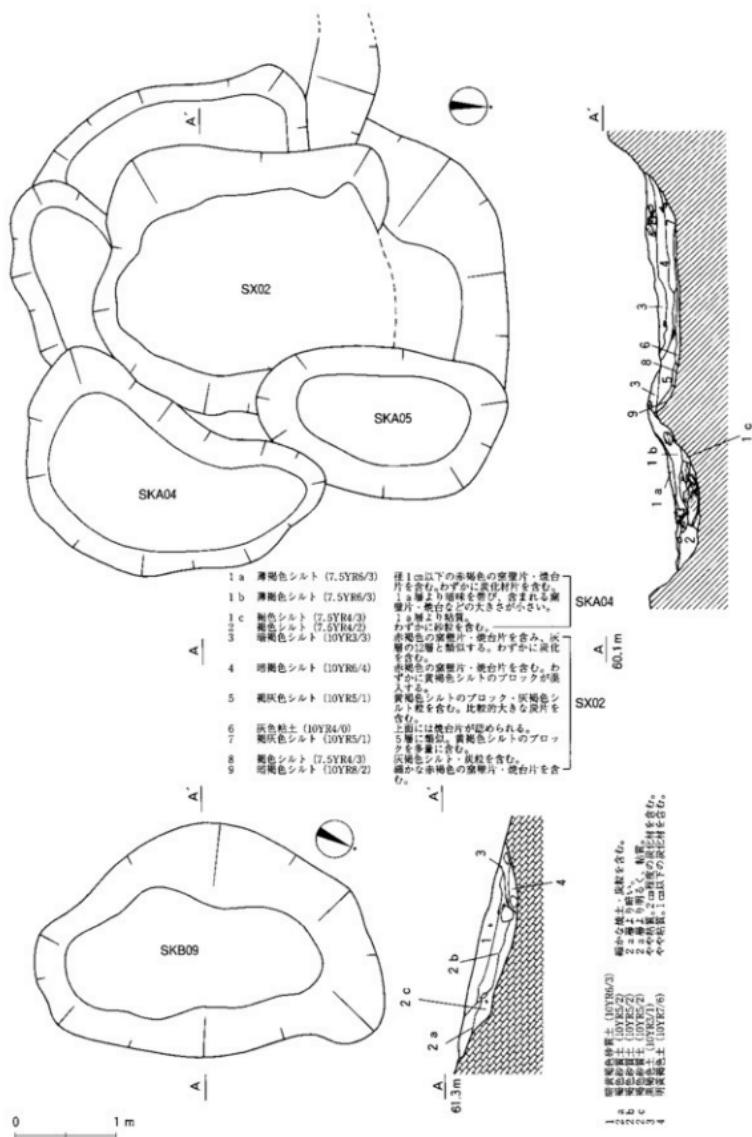
SX02の北東隅に位置し、SKA04の北側に隣接する。SKA04とは境界をもつが、SX02を一部掘り込んでいる。しかし、SKA04と同様、SX02と同時に機能したと思われる。平面形は長軸2.48m・短軸1.54mの楕円形で、深さは約0.2mを測る。埋土からは大型品を中心とした大破片が出土し、その状況はSKA04に類似する。

SD02（1）(第110図)

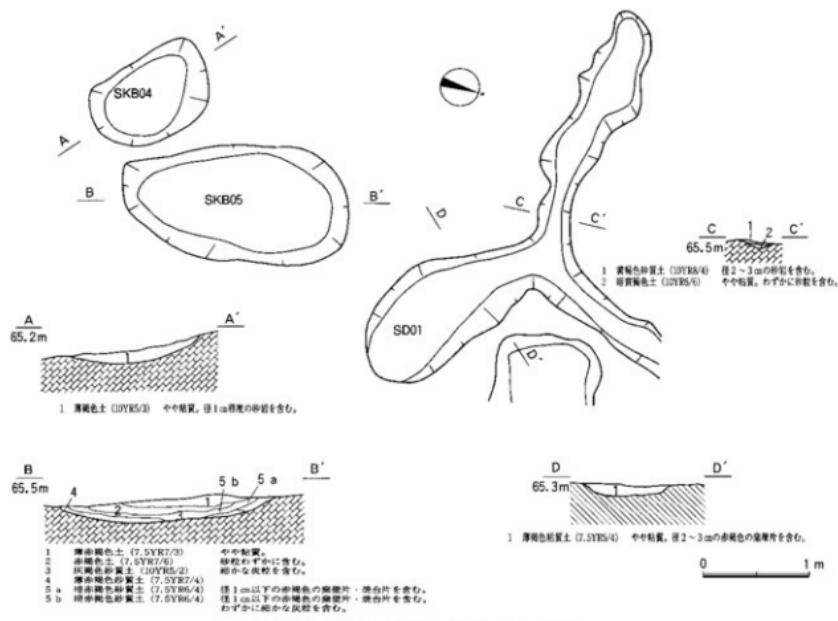
V2・V3グリッドから異なるSKB07に弧状に連なる溝を検出した。幅は約0.6m程度で深さは0.12mと浅い。溝からは碗類の1035K・1036Kなど4個体が一括して廃棄されていた他、瓶類1258Kの大破片が出土した。なお、1258KはSKB09出土の破片と接合関係を有す。溝の北端はSKB06・SKB07で切られ溝の全容は不明で、SKB06・SKB07と連結してどのような意味があつたのかは不明である。

SKB01（1）～SKB09（1）(第108・110～113図)

窯の周囲に様々な土坑が位置する。窯の西側斜面上方でSKB04・SKB05を検出した。SKB04は長軸1.21m・短軸0.82m・深さ0.14mを測る。SKB05の平面形は長軸2.13m・短軸1.16mの楕円形を呈し、深さ0.2m程度と浅い。SKB04・SKB05とも遺物の出土はわずかである。SKB01はSKA01の北側に隣接する。長軸は1.53m、深さは約0.2mを測る。SKB08は窯北側にあり排水溝の東側に連なる。深さは0.1m程度と非常に浅く、平面形は長軸1.35mの楕円形を呈す。SKB02・SKB03は窯北側からやや離れた位置で検出した。新旧関係はSKB02がSKB03を切っている。窯周囲に位置する土坑中では窯から最も離れた位置にあるが、埋土下層から土器・焼台片が出土したため、窯に関係する土坑と理解した。ただし、遺物が少量のため、廃棄用の土坑とは別にした。深さは検出面からSKB03が0.53m、SKB02が0.65mである。埋土出土の遺物には一部、東埋没谷からの混入ともみられる須恵器も含まれるが、上層からの出土である。SKB02の下層では古墳の石室石材が転落混入している。SKB06・SKB07はSX01の南隣にある。切り合い関係は上記した通りだが、それぞれ深さも0.2m・0.35mと浅い。遺物は両方ともほとんど出土していない。SKB09はSKA02・3とは相対的に窯の南側からやや離れて位置する。長軸3.1m・短軸2.3mの不整楕円形の平面プランを示し、深さは約0.2m程度である。



第111図 1号窯附帯施設平面図・断面図(2)



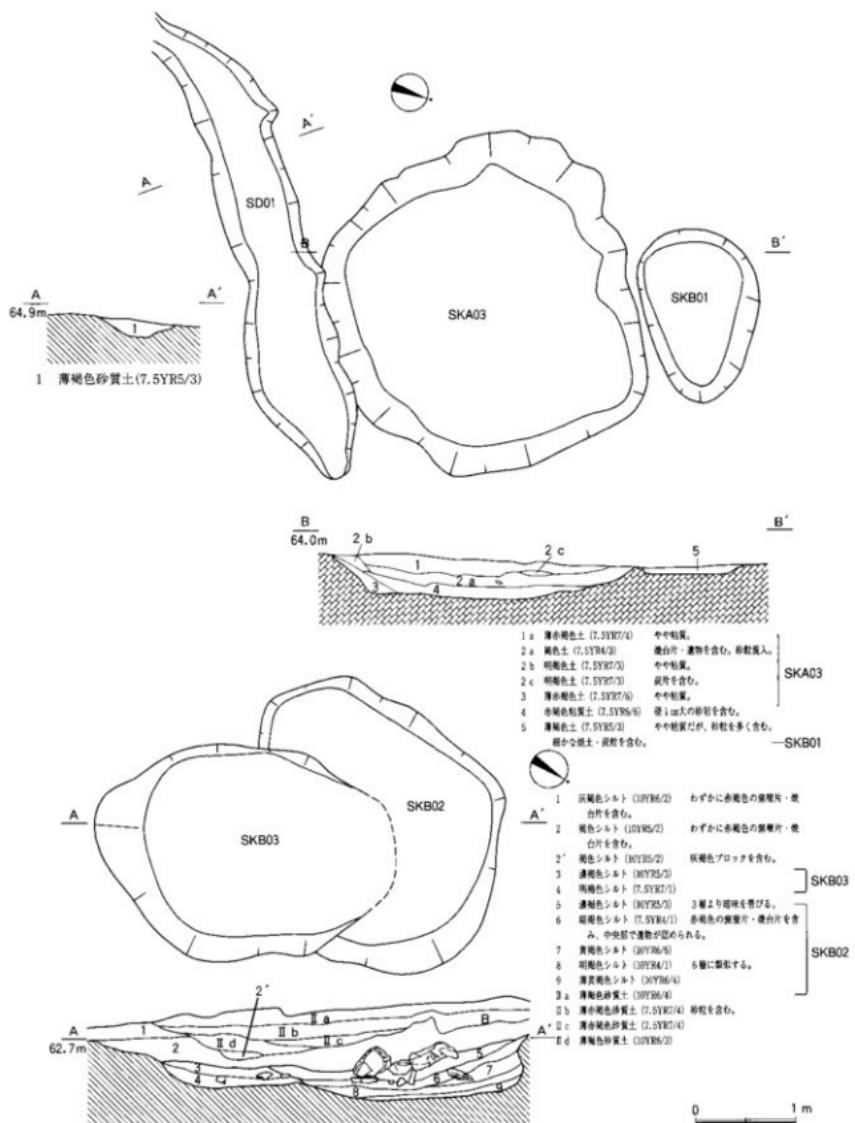
第112図 1号駅附帯施設平面図・断面図(3)

灰原（第114・115図）

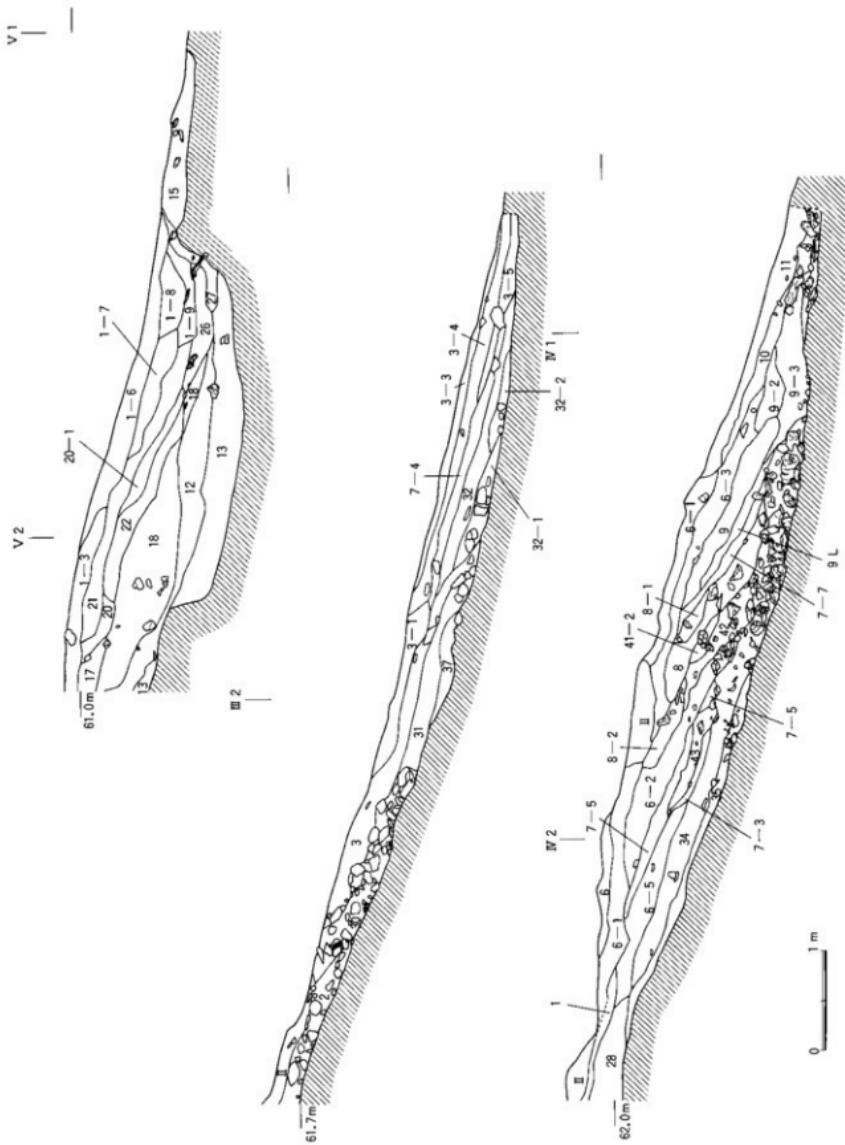
灰層はIV 2杭を中心にして半径5m弱の広がり（SX02への流入は別にして）が認められ、IV 2杭周辺が最も厚く堆積し、その厚さは1mに達する。グリッド別に出土量をみるとIV 1が圧倒的に多く、出土量全体の約50%を占める（第50・51表）。IV 1に次いでⅢ 1・Ⅲ 2から多く出土している。出土層別では7層・9L層から多くの遺物が出土しているが（第52・59表）、細い層序のために畦に残る遺物は分層通り取り上げたものの、グリッド平面掘り下げ中の遺物は分層通り遺物を取り上げられなかつたものが含まれる。とくに9L層の場合、その下層にある7—7層を混入して取り上げた可能性があり、7—1層の場合は7—2層・7—3層・7—5層・33層を同一に取り上げた可能性がある（これらの経緯は調査上のミスであり深く担当者として反省している）。灰層中には7—1層を中心にして明らかに焼台及び窯壁片を大量に含んで赤褐色を呈する土層が認められる。この土層は窯体の改修に伴う土層であると考えられ、前述した窯体断面観察における結果と一致する。しかし、改修に伴う土層は広範囲に広がるものではなく、遺物もかなり包含するため疑問な点も残る。また、その上下で灰層全体を前後に2時期に分層することは分布範囲が限られているため不可能であった。

遺物（第220～244図）

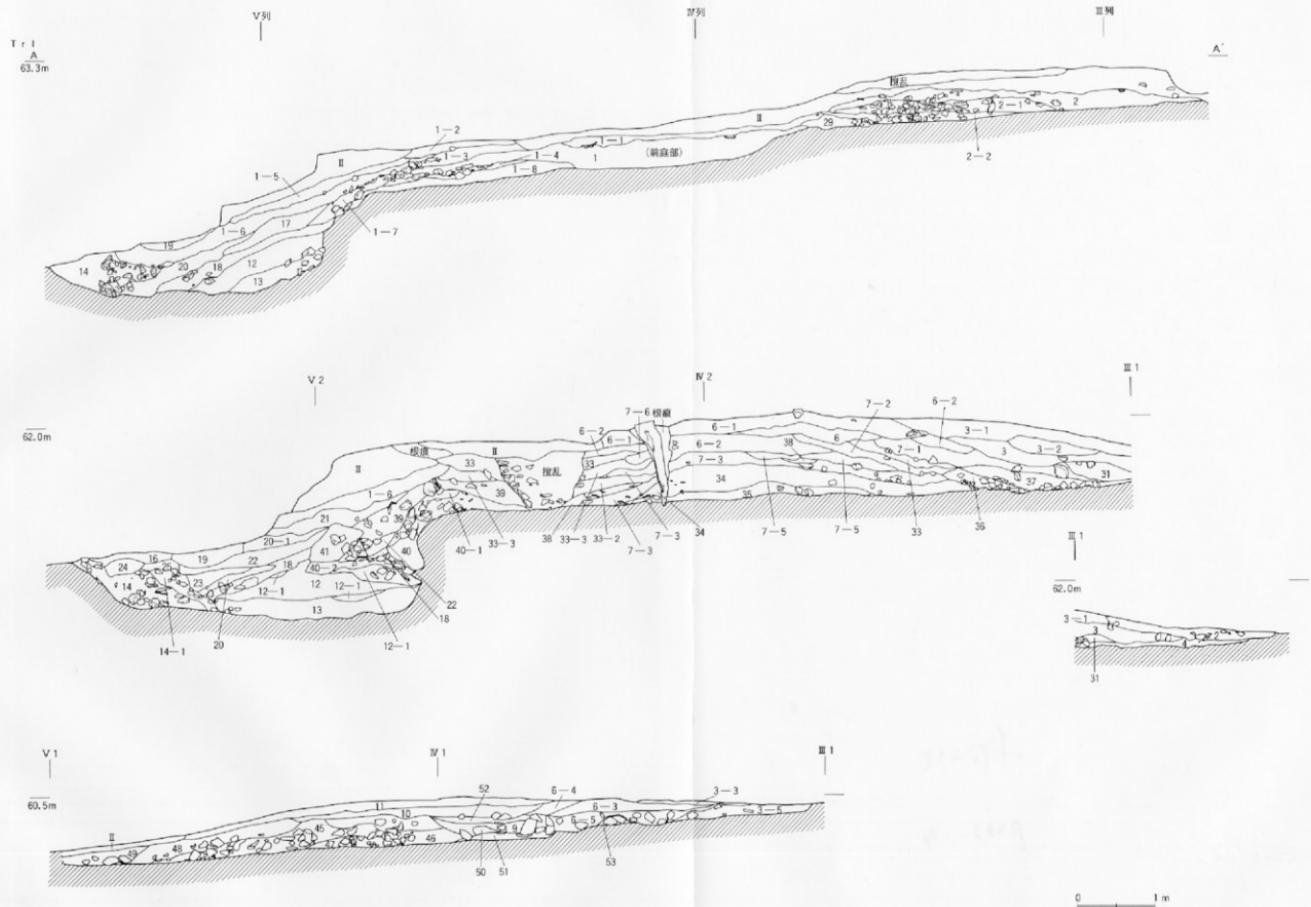
灰層及び附帯施設から多量の遺物が出土した。土器類は灰層1・3・7・9L層で多量に出土し



第113図 1号窯附帯施設平面図・断面図(4)



第114図 1号窯跡断面図(1)



第115図 1号窯灰原断面図(2)

第42表 1号窯灰原土層観察表(1)

番号	土層名	色調	観察事項
1	黒色土	10YR1.7/1	径1cm以上の焼台・窯壁片（赤褐色）を含む。
1-1	黒褐色土	10YR3/1	焼台・窯壁片（赤褐色）はほとんど含まない。
1-2	灰褐色土	10YR3/1	径1cm以下の焼台・窯壁片（赤褐色）をわずかに含む。
1-3	黒褐色土	10YR3/1	径1cm以下の焼台・窯壁片（赤褐色）を含む。
1-4	黒色土	10YR1.7/1	灰白砂粒を含む。
1-5	黒色土	10YR3/1	径1～2cmの焼台・窯壁片（赤褐色）及び細かな炭化材を含む。
1-6	黒色土	10YR2/1	径1cm以下の焼台・窯壁片（赤褐色）を含む。
1-7	黒色土	10YR2/1	焼台・窯壁片はほとんど含まず、1～6層より暗味を帯びる。
1-8	黒色土	10YR2/1	1～7層よりも明るい。
1-9	黒色土	10YR2/1	1～6層よりやや暗く、結まりがある。
2	褐色土	10YR5/3	焼台及び細かな炭化材を含む。
2-1	褐色土	10YR5/3	焼台を多く含む。
2-2	暗褐色土	10YR4/4	焼台を多く含み、2～1層より焼台・窯壁片（赤褐色）及び炭化材を含む。
3	黒色土	10YR2/1	径1cm以下の焼台片（赤褐色）を含む。比較的大きめの窯壁片が顕著。
3-1	灰褐色土	10YR4/1	径1cm以下の焼台・窯壁片を含み、わずかに細かな炭化材が認められる。
3-2	黒褐色土	10YR3/1	径0.5cm以下の焼台片・窯壁片（赤褐色）及び、細かな炭化材を含む。
3-3	黒褐色土	10YR3/2	径0.5cmの焼台・窯壁片（赤褐色）を含む。
3-4	黒褐色土	10YR3/2	径0.5cmの焼台・窯壁片（赤褐色）を含む。
3-5	黒色土	10YR2/1	径2～3cmの焼台・窯壁片（赤褐色）を含む。
4	褐色シルト	10YR4/3	焼台及び細かな有機物を含む。
5	黒褐色土	10YR3/2	径2～3cmの焼台・窯壁片（赤褐色）を多く含む。
5-1	黒褐色土	10YR3/2	6層よりやや明るく、炭化材が多い。
6-2	黒褐色土	10YR3/1	径1cm程度の焼台・窯壁片（スサ）を含む。
6-3	黒褐色土	10YR3/1	径1cm程度の焼台・窯壁片を含み、6～2層よりやや暗い。
6-4	黒褐色土	10YR3/1	6～3層より焼台・窯壁片が大きい。
6-5	黒色土	10YR2/1	焼台・窯壁片をほとんど含まない。
7-1	赤褐色土	7.5YR7/6	径1cm以下の焼台・窯壁片（赤褐色・黄褐色・スサ）を多量に含む。炭化材も多い。改修に伴う土層？。
7-2	赤褐色土	7.5YR7/8	径1cm以下の焼台・窯壁片（赤褐色・黄褐色）を多量に含む。炭化材も多い。改修に伴う土層？。
7-3	黄褐色土	10YR8/6	径1cm以下の焼台・窯壁片（赤褐色少・黄褐色）を含む。改修に伴う土層？。
7-4	暗赤褐色土	5YR6/6	径1cm以下の焼台・窯壁片（赤褐色）を多く含み、炭化材はわずかに含む。改修に伴う土層？。
7-5	薄赤褐色土	7.5YR7/4	径0.5cm以下の窯壁片（赤褐色）を含む。焼台片は少量。炭化材を多く含む。改修に伴う土層？。
7-6	薄黄褐色土	10YR7/6	径1cm以下の焼台・窯壁片（赤褐色・黄褐色）を少量含む。改修に伴う土層？。
7-7	赤褐色土	7.5YR6/8	径2～3cmの焼台・窯壁片（赤褐色・スサ）を含む。大きな炭化材が下位のレベルで顕著。改修に伴う土層？。
8	黒色土	10YR1.7/1	径1cm以下の焼台・窯壁片をわずかに含む。
8-1	黒色土	10YR2/1	8層に比べて、焼台片・窯壁片（スサ）を多く含む。
8-2	黒褐色土	10YR3/1	径1cmの焼台・窯壁片（赤褐色）を含む。
9	灰褐色土	10YR5/3	径0.5cm以下の焼台・窯壁片（赤褐色）及び細かな炭化材を多量に含む。
9-2	暗褐色土	10YR3/1	9層とはほぼ同じだが、炭化材がやや大きい。
9-3	暗褐色土	10YR3/1	9～2層よりやや暗い。
9L	黒色土	10YR2/1	径0.5cm以下の焼台・窯壁片（赤褐色）を含む。大きな炭化材が顕著で、7～7層との境では遺物が大量に認められる。
10	明赤褐色土	7.5YR7/8	径2～3cmの焼台・窯壁片（赤褐色）を大量に含む。
11	薄褐色土	7.5YR6/6	径2～3cmの焼台・窯壁片（赤褐色）を含む。
12	褐色土	7.5YR5/4	径0.5～1cmの焼台・窯壁片（赤褐色・黄褐色）を多く含む。
12-1	明灰褐色土	7.5YR5/4	12層よりやや明るく、下位には大きな炭化材を含む。
13	黒色土	7.5YR2/1	焼台・窯壁片（スサ）をほとんど占める。
14	灰褐色土	7.5YR6/2	焼台・窯壁片（スサ）を大量に含む。

第43表 1号墓灰原土層観察表(2)

番号	土層名	色調	観察事項
14-1	灰褐色土	7.5YR6/2	焼台・窯壁片(スサ)を含む。
15	暗褐色シルト	7.5YR6/6	
16	明褐色土	7.5YR3/2	径1~2cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。
17	褐色土	10YR4/3	径1cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。
18	黒色土	10YR1.7/1	径1cm程度の焼台・窯壁片(赤褐色)を少量含む。炭化材を多く含み。一部に20層の黄褐色土が混入する。
19	褐色土	10YR6/3	径1cm程度の焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。
20	薄黄褐色土	10YR7/4	径1~2cmの焼台・窯壁片(赤褐色)及び炭化材を含む。
20-1	赤褐色土	7.5YR6/6	径1~2cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を多く含む。
21	褐色土	10YR6/3	径2~3cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。
22	黒褐色土	10YR3/1	径0.5cm以下の焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。
23	黒褐色土	10YR3/2	22層にちかい。窯壁片(スサ)を多く含む。
24	暗褐色土	10YR3/3	径1~2cmの焼台・窯壁片を含み、16層にちかい。
25	褐色土	7.5YR5/3	径1cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。19層にちかい。
26	灰褐色土	10YR4/1	窯壁片(スサ)を大量に含み、遺物も多い。下位には炭化材が目立つ。
27	赤褐色土	7.5YR6/6	
28	黒色土	10YR1.7/1	径1cm程度の焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。
29	黒色土	10YR2/1	焼台・窯壁片(赤褐色)はあまり含まず、細かな炭化材及び灰白砂粒を含む。
30	黒色土	10YR2/1	焼台を多量に含む。窯壁片(スサ)・炭化材を含む。
31	黒色土	10YR1.7/1	径1cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。わずかに細かな炭化材を含む。
32	明褐色土	10YR3/2	明褐色土。径1cm程度の焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。
32-1	明褐色土	10YR3/1	径0.5cm程度の焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。
32-2	明褐色土	10YR3/2	32層よりやや暗い。
33	黒褐色土	10YR3/2	径0.5cm程度の焼台・窯壁片(赤褐色)及び細かな炭化材を含む。灰白砂粒をわずかに含む。
33-2	黒色土	10YR1.7/1	径2~3cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。
33-3	黒褐色土	10YR3/2	33層より焼台・窯壁片が大きく、灰白砂粒を多く含む。
34	黒色土	10YR1.7/1	径1cmの焼台・窯壁片(赤褐色)及び細かな炭化材を含む。
35	明赤褐色土	7.5YR5/6	下位に焼台を大量に含む。改修に伴う土層?。
36	黒色土	7.5YR2/1	焼台を大量に含み、隙間ににはスサが認められる。
37	黒色土	7.5YR2/1	径0.5~1cmのスサを大量に含む。
38	黒褐色土	7.5YR3/2	径1~2cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。わずかに灰白砂粒が混入。
39	灰褐色土	10YR4/1	径1~2cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を少量含む。
40	黒色土	10YR2/1	径0.5cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を含み、わずかに灰白砂粒も認められる。焼台を多量に含む。
40-1	黒色土	10YR2/1	40層より明るい。
40-2	灰白色土	10YR5/2	焼台・窯壁片はわずか。炭化材を多く含む。
41	暗黃褐色土	10YR4/2	径1cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。
41-1	黄褐色土	10YR7/6	窯壁片(スサ)を多く含む。焼台片も少量含む。
41-2	黒色土	10YR1.7/1	窯壁片(スサ)は下位で多く、上位では炭化材が目立つ。
42	黒色土	10YR1.7/1	窯壁片(スサ)を大量に含む。41~1層より炭化材が多く、焼台片・遺物も多い。
43	暗褐色土	7.5YR3/3	34層に類似。径0.5cmの焼台片・窯壁片(赤褐色)を含む。
44	黒色土	10YR1.7/1	焼台・窯壁片(スサ)を大量に含む。炭化材・遺物も多い。
45	褐色土	7.5YR5/3	径2cmの焼台・窯壁片(赤褐色)を含む。わずかに灰白砂粒を含む。
46	赤褐色土	7.5YR7/6	35層にちかい。焼台を多く含む。改修に伴う土層?。
47	暗褐色シルト	10YR4/1	径1cm以下の焼台・窯壁片(赤褐色)を少量含む。
48	暗褐色シルト	10YR4/2	焼台・窯壁片(赤褐色)をわずかに含む。
49	黄褐色土	10YR6/3	径0.5~1cmの焼台・窯壁片を多量に含む。
50	明黄褐色砂質土	10YR8/6	
51	暗褐色シルト	10YR4/3	赤褐色粒を含む。
52	暗褐色シルト	10YR4/1	焼台・窯壁片・遺物はあまり含まない。

た。そのほとんどは碗皿類で占められるが、瓶類・甕類も認められ、豊富な器種が確認された。土器類以外には焼台・分焰柱・分焰棒が出土した。とくに焼台はSKA02で多量に廃棄されていた。以下に詳述する。土器の個体数の算出は碗・皿類は底部の残存率でおこない、瓶・甕類などの大型品は口縁部の残存率に拠った。

碗類

碗類には碗・輪花碗・無高台碗類が認められ、出土量は全体の57.8%（第112表）を占める。碗類は法量分化が著しく、主に部の浅い碗類、部の深い碗類、小型の碗類に分類可能である。これを仮に碗Ⅰ類、碗Ⅱ類、小碗類と呼称することにする。

碗Ⅰ類

部が浅く、高台形状に三日月高台の様相を残すものを分類した。法量によってIA類・IB類に二分される。さらにIB類は高台形状によりIBa類とIBb類に分類したが法量に顕著な差異は認められない。

IA類（1022K～1033K・第44表）

高台外端面に平坦な内傾面を残し三日月高台の退化的様相が認められる。内側は内湾するものと直線的に外傾するものがある。部は浅く、腰部からわずかに丸みをもって立ち上がる。1029Kを典型的な資料と考えている。なかには口縁部が外反する資料（1022K・1028K・1032K）も存する。高台はその形状・高さなどの点において個体差が著しい。1025K・1028K・1031Kのように付根から高台がハの字に伸び、鋭く内傾する外端面をもつことを基準とするが、1030K・1032Kは外端面が丸く、1033Kはやや高台が低い。すべて轆轤水挽き成形によって成形され、部下半及び外底面には回転ヘラ削り痕（590点/612点）が残る。器面のロクロ目はあまり目立たないが、1022K・1024Kはロクロ目の凹凸が顕著である。1点のみ回転糸切り痕を残す資料を確認した。施釉はすべて浸け掛けで、部中程から部下半まで施釉される（592点/612点）。標準的資料の法量は口径15.0cm～16.3cm・底径7.0cm～8.5cm・器高4.7cm～5.6cmを測る。

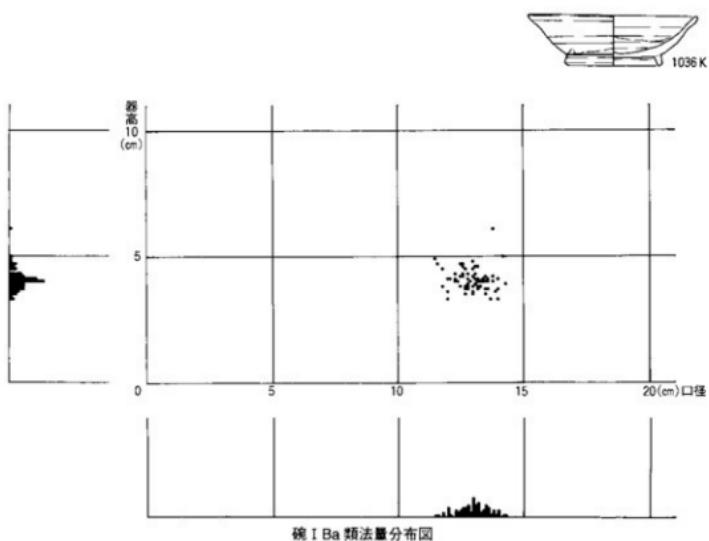
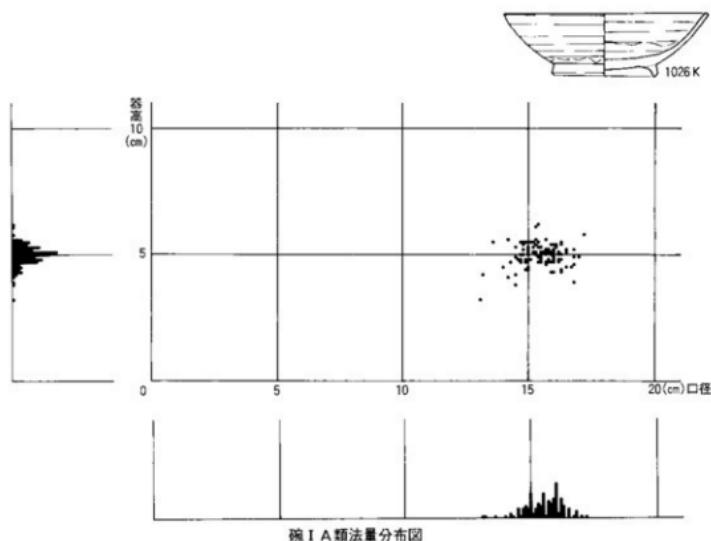
IBa類（1034K～1045K・第44表）

碗IA類を一回り小さくしたもので、平均的な法量は口径12.5cm～13.6cm・底径6.3cm～7cm・器高3.7cm～4.3cmを測る。部の形状は碗IA類と酷似し、口縁部がやや外反する資料も認められる。高台は三日月的な形状を基本とするが、端部が丸く高台高が低い資料も散見し、個体差が大きい。1035K・1041Kが標準的な資料と考えられる。成形は轆轤水挽き成形で、部下半及び外底面は回転ヘラ削りが施される。一部の資料には外底面の回転ヘラ削りが部下半まで及ばないものも認められるが、外底面の回転ヘラ削り痕はほとんどの資料で認められる（62点/78点）。糸切り痕を残す資料は3点確認した。施釉はすべて浸け掛けによるもので、無釉の1044Kを除く資料は全部に施釉が認められる。施釉される範囲は部中程までである。

IBb類（1095K～1103K・第45表）

碗IBa類と酷似するが、高台がやや低く外端面が丸みを帯びるものを分類した。1100Kが基準資料。法量は口径12.5cm～13.8cm・底径6.3cm～7.0cm・器高3.7cm～4.5cmを中心に分布し、碗IBa類と重なる。施釉は浸け掛けで、部中程から高台付根ちかくまで施釉される（109点

第44表 碗 I A・I Ba 類法量分布表



/110点)。成形は輶轆水挽き成形で、体部下半と外底面には回転ヘラ削りが施される(94点/110点)。1102Kの口縁部外面には細い沈線が1本認められる。

碗II類

口径に比して器高が高いわゆる深碗。腰部が弱く張り、体部が深い。口縁部は若干外反する。口縁部内面の沈線はまったく認められなかった。輶轆水挽き成形で成形され、一部の資料のみ体部下半・外底面に回転ヘラ削り痕が認められる。法量によって三分され、それぞれII A・II B・II C類に分類した。II A類は高台形状によってII Aa類とII Ab類に細分した。碗I類に比べてやや焼成が悪い印象を受け、少量ながら赤褐色を呈する資料も見受けられる。

碗II Aa類 (1050K～1061K・第45表)

碗II類の中で高台高が高く、高台が細長く伸びるものを分類した。標準資料は1060K・1061K。一部には高台が内済気味なもの(1054K)も存する。高台の端部は丸くおさめられ、外端面には面をもたない。法量は口径15.0cm前後・底径6.8cm～7.3cm・器高5.9cm～6.9cmが標準的である。施釉は浸け掛けでおこなわれるが(52点/64点)、1052K・1055Kのように無釉の資料も少量ながら認められる(12点/64点)。施釉は口縁部～体部上半にかけて施されることが多い。外底面は糸切り痕をそのまま残すが(49点/64点)、回転ヘラ削り痕を残す資料も存する(11点/64点)。1061Kは内底面に爪の痕が観察される(図版129)。

碗II Ab類 (1062K～1069K・第46表)

体部の形状は碗II Aa類と同一だが、高台が低く断面が三角形にちかい形状を示すものを分類した。資料数が少ないので判然としないが、中心となる法量は口径14.8cm前後・底径6.5cm～7.0cm前後・器高5.8cm～5.9cm前後と思われ、碗II Aa類と大差ない。外底面の調整は糸切り痕が残る資料が多く(17点/23点)、回転ヘラ削り痕を残す資料は少ない(5点/23点)。施釉の有無は無釉のものも認められるが(1062K・1063K・1065K・1066K・9点/23点)、浸け掛けで施釉されるものが多くを占める(14点/23点)。施釉される範囲は体部から体部上半までの比較的狭い範囲にとどまるものが多い。標準資料は1064K(図版129)。

碗II B類 (1046K～1049K・第46表)

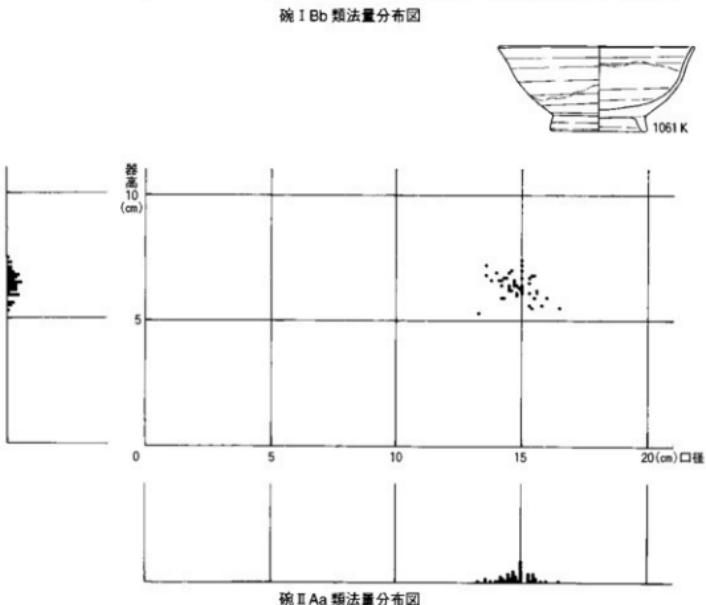
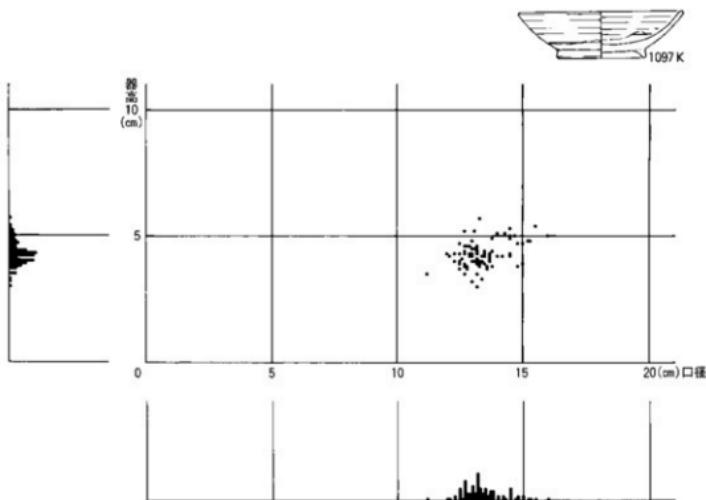
法量が口径14.2cm前後・底径6.7cm～7.0cm・器高6.0cm前後と碗II A類に比してやや小さめのものを分類した。出土量は碗II A類と比較すると少ない。施釉の有無については図示した資料はすべて無釉だが(28点/79点)、浸け掛けによる施釉が認められるものが大半を占める(41点/79点)。ただし、無釉の資料が占める割合は碗II A類と比べると増加する傾向にある。外底面には糸切り痕(55点/79点)・回転ヘラ削り痕(5点/79点)・ナデ(5点/79点)が認められるが、糸切り痕を残す資料が圧倒的である。標準資料は1046K。

碗II C類 (1093K・1094K)

11点しか確認できなかったが、その法量は口径9.8cm～11.2cm・底径4.9cm～5.9cm・器高4.0cm～5.3cmとかなり小型化している。成形は精緻で高台は器高に比してやや高めの印象を受ける。施釉は浸け掛けで8点が認められ、3点は無釉である。外底面は糸切り痕が8点、回転糸切り痕が2点確認できた。

小碗類

第45表 碗 I Bb・II Aa 類法量分布表



高台が底部よりやや外側に貼り付けられ、高台高が低いものを小碗として分類した。高台の断面形は外面が内湾し、内面が外傾することを特徴とする。概して高台幅が厚く、なかには高台の断面が三角形にちかくなる資料も認められる。体部の形状及び法量によって二分されるが、底部だけでは判断がつかない。成形は轆轤水挽き成形で大半の資料は外底面の糸切り痕を残す（174点/201点）。

小碗I類（1070K～1081K・第47表）

1075Kが基準資料。体部は高台付根から丸味をもって立ち上がり、その形状は碗I類にちかい。1070K・1071Kのように体部が浅いものや、口縁部が外反気味となるものも認められる。標準的な法量は口径10.5cm～11.3cm・底径5.2cm～6.0cm・器高3.3cm～3.7cmを測る。1080Kは小碗I類なかでは最も法量が大きく、後述する小碗II類にちかい資料だが、体部の形状がI類にちかいためI類に分類した。施釉されるもの（18点/40点）と無釉のもの（22点/40点）がほぼ半々の割合で認められ、施釉はすべて浸け掛けで施される。外底面は糸切り痕を残す資料が多く（29点/40点）、回転ヘラ削り痕が残る資料が少量認められる（9点/40点）。1077Kの外底面はナデが認められる。

小碗II類（1082K～1090K・第47表）

高台の形状は小碗I類と共通するが、法量が小碗I類より大きく、腰部に弱い張りがあり体部の形状が碗II類に近似するものを分類した。基準資料は1088K。施釉は浸け掛けによるもので（21点/30点）、無釉の資料も認められる（9点/30点）。外底面は糸切り痕を残すものが大半を占め（27点/30点）、ナデ（2点/30点）、回転ヘラ削り痕（1点/30点）を残すものも認められる。

輪花碗類

出土量はきわめて少なく、破片を含めても23点にしかすぎない。碗I類・碗II類に輪花が施されるものをそれぞれ輪花碗I類・輪花碗II類とし、輪花碗I・II類にあてはまらない小型の輪花碗を輪花碗III類とした。

輪花碗I類（1104K～1109K）

碗I類に4輪花が施される。輪花は口縁内側を指先で支えて外側を指先ないしは棒状の工具で押圧して作出される。成形は轆轤水挽き成形で、外底面は回転ヘラ削りで整形される。施釉は浸け掛けで体部下半まで施される。確認した資料数は少ないが、法量は碗I類と比較するとすべて大きな部類に入る。

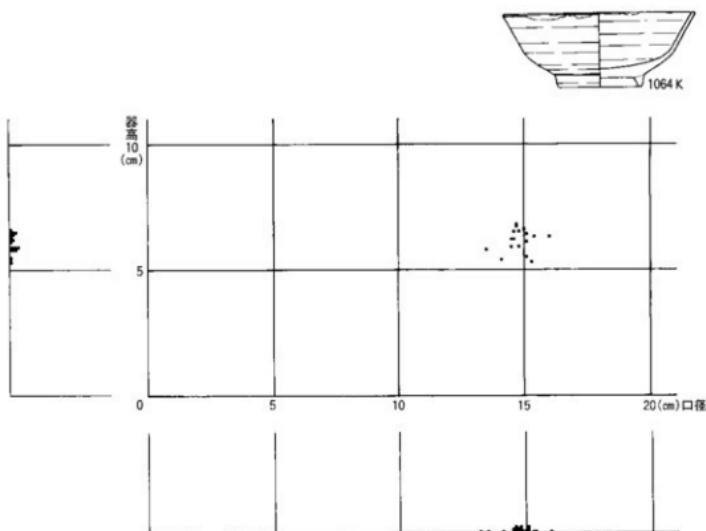
輪花碗II類（1110K～1114K）

碗II類に輪花が施されるもので、法量は碗II B類にちかい。1113Kは5輪花だが、残りはすべて4輪花である。輪花は輪花碗I類に比べると幅広で、口縁部外面を指先で押圧して作出する。1110K・1111Kは体部中程から撫で上げており、1110Kは輪花に沿って沈線が引かれる。施釉は浸け掛けである。

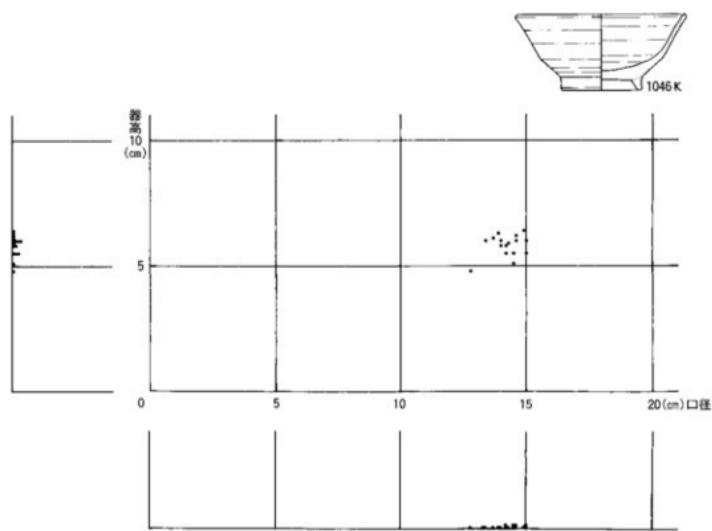
輪花碗III類（1091K・1092K）

図示した2点のみ。1092Kは碗II C類に4輪花がつくもの。輪花は輪花碗II類に類似し幅広である。1091Kは高台が極端に低く、体部が直線的に立ち上がり前記の碗類と比べると異質な資料である。無釉。

第46表 碗 II Ab・II B 類法量分布表

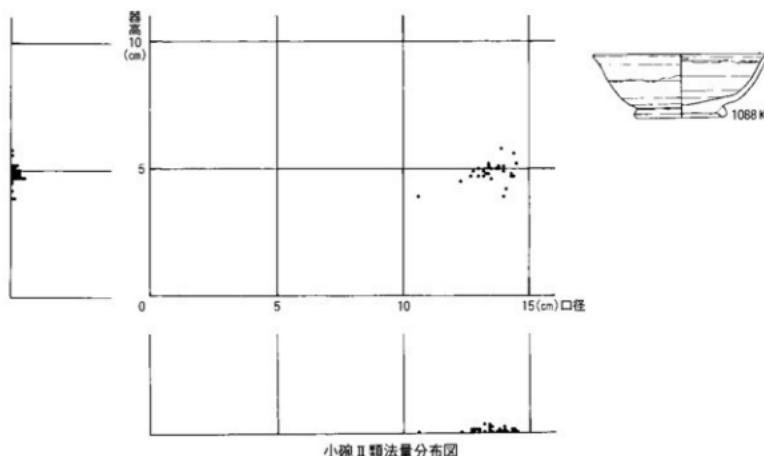
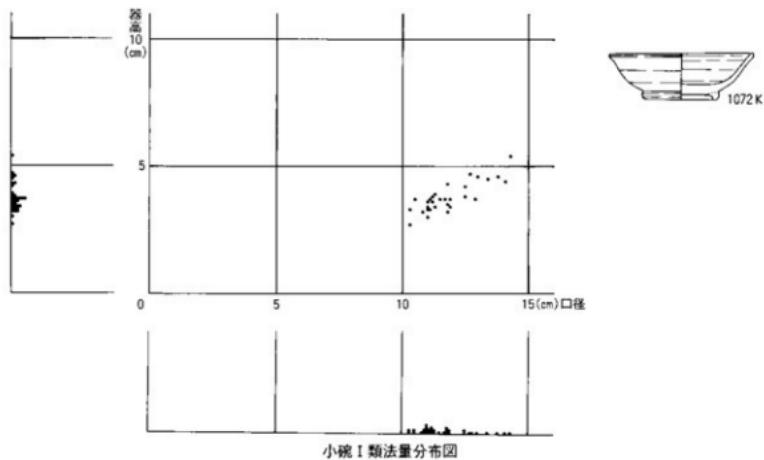


碗 II Ab 類法量分布図

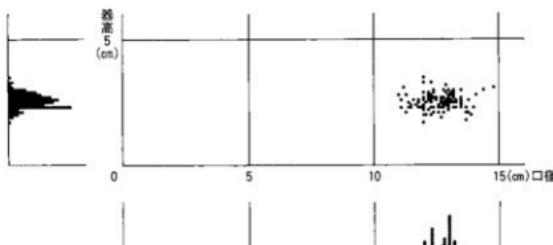


碗 II B 類法量分布図

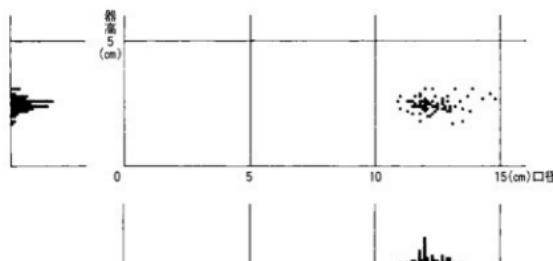
第47表 小碗 I・II類法量分布表



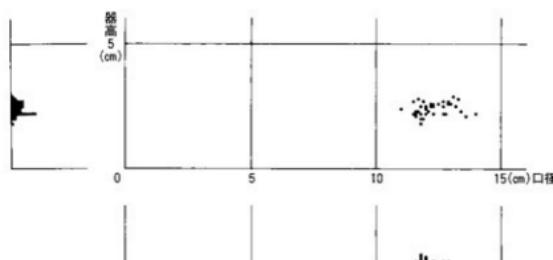
第48表 皿 I A・I B・I C類法量分布表



皿 I A類法量分布図



皿 I B類法量分布図



皿 I C類法量分布図

無高台碗 (1115K・1116K・1118K)

図示した3点のみで、碗IA類の高台がとれた無高台の碗。整形が精緻で、底部の器壁はとくに薄く仕上げられている。底部外縁には沈線がめぐる。施釉は体部下半まで浸け掛けされる。

稜碗 (1117K・1119K～1122K)

高台は細身で長く外側への字に伸び、端部は面取り気味に内傾し、三日月高台の様相を強く残す。体部は腰部で鋭い稜をもって直線的に立ち上がる。法量は他の碗類よりも比して大型であるが、1120Kはやや小型品。回転ヘラ削りが体部中程まで及ぶせいか、つくりが精緻でロクロ目が目立たない。外底面の入念な回転ヘラ削り整形により底部の器壁は非常に薄く仕上げられている。施釉は浸け掛けで、体部外面の稜の前後まで施釉される。1121Kには4輪花が施される。

その他の碗 (1123K～1131K)

前記の分類の特徴から逸脱する資料を一括した。成形が粗雑なものが目立つ。1123K・1126Kは高台が極端に低く、山茶碗の可能性がある。1124K・1125Kの高台は断面三角形を呈す。1125Kの高台は正円ではなく、整形が雑である。1127Kの高台はやや角高台的であるが、体部は小碗に類似する。1128Kは体部は碗IA類にちかいものの無釉の資料で、高台高が低い。発色が赤褐色で高台の形状が山茶碗にちかい。1129K～1131Kは体部のロクロ目が顯著で整形が粗雑な資料。1130Kの体部は碗IB類にも似るが高台形状が異なる。施釉は1127Kのみに認められ、他の資料はすべて無釉。1125K・1128K～1131Kは半焼け資料。

皿類

皿類には皿・輪花皿・段皿がある。皿は高台の形状によりIA～IC類に分類した。段皿は通常の皿より法量が小さくその分類は容易だが、内面に段が認められない資料もかなりの量を占めるため、仮にこれを皿IIA・皿IIC類と呼称することにした。成形はいずれも饅舖水挽き成形による。

皿I類

高台の形状により以下のIA～IC類に分類したが、個体差が著しく各分類の中間的資料も認められる。IA類が量的には最も多く、その亜流的な資料としてIB・IC類が存する可能性が高い。体部はいずれも浅くわずかな丸みをもって開く形状で共通する。なかには直線的に立ち上がるるものや、やや体部が深めで小碗にちかい資料も存するが、この場合は高台形状で皿として分類した。

皿IA類 (1140K～1154K・第48表)

つくりが後述するIB・IC類より比較的精緻で、高台が三日月高台の様相を残し、外端面に内傾する平坦面を残すものを分類した。高台内側が内湾する資料も存し、ほぼ碗IA類の高台形状に類似する。口縁部をわずかに外反させる資料も認められる。基準資料は1148K。法量は口径12.2cm～13.2cm・底径6.0cm～7.0cm・器高2.3cm～2.8cmが標準的である。施釉は浸け掛けでほとんどの個体で確認でき(273点/282点)、口縁部付近にのみ施釉される。外底面は回転ヘラ削りによって整形される(265点/282点)。

皿IB類 (1155K～1169K・第48表)

高台高がやや低く潰れ気味で、外端面の稜が甘く丸みを帯びるものを分類した。1167K・1168Kのように断面が三角形にちかくなるものも認められる。基準資料は1156K。口径は11.5cm～

13.0cmまでの幅があるが、分布の中心は12.0cm前後にある。底径も幅があり、5.8cm～6.5cmに分布するが量は6.0cm前後が最も多い。器高は2.3cm～2.6cmが中心となる。法量は皿ⅠA類と比すると相対的に小さめである。外底面には圧倒的に回転ヘラ削り痕を残す例が多く（78点/99点）、わずかにナデ整形される例が認められる（2点/99点）。施釉は確認した資料すべてに認められ、口縁部付近に浸け掛けされる資料が多い（99点/99点）。

皿ⅠC類（1170K～1175K・第48表）

高台が直立気味となるものを分類した。典型例は1171Kだが、それぞれの資料に個体差が顕著でⅠA・ⅠB類に類似する資料も目立つ。標準的な法量は口径11.8cm～12.0cm・底径5.8cm～6.0cm・器高2.2cm～2.7cmである。施釉は浸け掛けで（48点/49点）、外底面には回転ヘラ削り痕を残す（44点/49点）。

皿ⅡA類（1176K～1187K・第49表）

体部は浅く、内湾気味に短く開きながら立ち上がる。高台は円柱気味の厚い底部外縁にハの字に貼付されるため、実際の高台高は外見上の高台高に比べてかなり低い。1185K・1187Kなどは底部が突出しているため、高台は見かけ上にしかすぎない。高台の断面形は外面が逆くの字となり、三日月高台を極端に潰した形状を呈す。口縁端部はわずかに外反させる資料も認められる。標準的な法量は口径9.7cm～10.3cm・底径5.0cm～5.8cm・器高2.0cm～2.3cmで、基準資料は1186Kである。施釉はほとんどが無釉と考えられ、自然釉と判断がつかない資料も認められる。外底面は回転糸切り痕を未調整のまま残すものが多い（124点/190点）、一部回転ヘラ削り痕が認められるものも存する（23点/190点）。

皿ⅡB類（1188K～1201K・1203K・第49表）

口縁部・体部・高台の形状は皿ⅡA類と共通するが、内面に段が認められ段皿類として分類可能なもの。内面の段の作出はヘラ先などで施されたと思われるが、後述するⅢ類と比べると不明瞭でなかには段が一周しない痕跡的な資料も認められる。基準資料は1197K。法量は口径10.0cm～10.8cm・底径4.8cm～5.3cm・器高2.0cm～2.4cmが標準的である。施釉は無釉が大半と思われ、自然釉との区別が難しい資料も認められる。外底面は糸切り痕をそのまま残す例が多く（50点/92点）、ナデ（6点/92点）、回転ヘラ削り痕（13点/92点）を残す資料も認められる。1203Kは高台が角高台の他の資料と比べて異質である。1188Kは窯内資料である。

なお、底部だけでは皿ⅡA・ⅡB類の判別がつかないため、皿Ⅱ類としてのみ判明する底部資料の外底面に残される整形は皿ⅡA・ⅡB類と同様の傾向を示し、回転糸切り痕が顕著である。

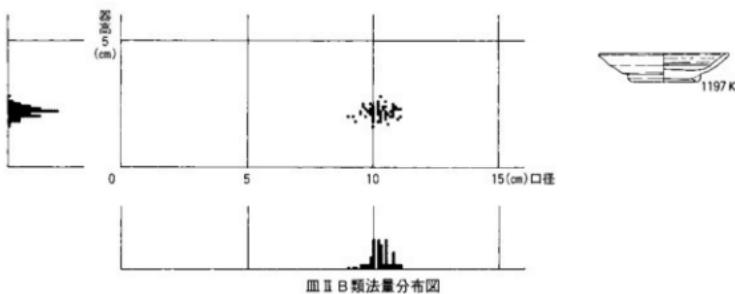
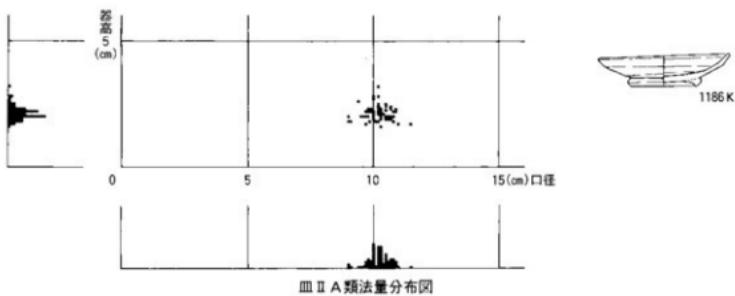
皿Ⅲ類（1202K・1204K・1205K）

皿Ⅰ類の形状をもち、内面に明瞭な段が認められるもの。図示した3点しか確認できなかった。1202Kは小型で高台は皿Ⅱ類にも類似するが、内面の段が明瞭なため本類に分類した。1205Kは大型で高台が細身で高く三日月高台の様相を強く残し、その形状は稜碗の高台形状にも類似する。施釉は1204K・1205Kで認められ、浸け掛けで施釉される。

輪花皿類

43点を確認したが、皿Ⅰ類に輪花が施されるもの（I類）と皿Ⅱ類に輪花が施されるもの（II

第49表 ⅢⅡA・ⅢⅡB類法量分布表



類)に分類できる。

輪花ⅢI類 (1206K・1211K～1216K)

4輪花が施され、その作出は碗Ⅰ類と同じである。施釉は浸け掛けで、体部下半まで施されるものが比較的目立つ。高台形状はⅢI A類にちかく三日月高台的な資料が多い。

輪花ⅢII類 (1207K～1210K)

ⅢII類と同様、内面に段があるものとないもののそれぞれが認められる。段のない1207K・1208Kは4輪花、段のある1209K・1210Kは5輪花が施される。輪花は幅広で輪花碗Ⅱ類の手法と共通する。すべて施釉はなく無釉で、外底面は1209Kを除いて回転糸切り後のナデ調整をおこなっている。

その他の皿類 (1217K～1219K)

前記の皿類に含まれない皿を一括した。1217K・1218Kはやや器壁が厚く、口縁部の立ち上がりの短い資料。高台は低く、断面三角形にちかい。底部・高台形状はⅢII類に似るが、体部形状が相違する。1217Kは窯内床面資料。1219Kは器壁が薄く口縁部が腰部で屈曲して外反する資料。いず

れも無釉。

須恵質碗・皿類 (1132S ~ 1139S)

胎土が他の灰釉陶器と異なり須恵器の胎土に酷似するもので、無高台の碗・皿類が認められる。外底面は未調整で回転糸切り痕をそのまま残す。器壁が薄いことも灰釉陶器と異なる特徴として指摘できる。半焼けの資料 (1133S・1135S・1136S) の胎土は灰釉陶器と酷似するが、本類に一括した。皿類は強く外方へ開き、端部をやや尖り気味におさめる。碗類は1139Sのように口縁部が直線的に開くものを基準としているが、1135S・1138Sのように内湾気味のものも存する。1136Sは窯内床面資料。すべて施釉はなく無釉。

土師器質碗・皿類 (1220H ~ 1225H)

胎土・焼成とも土師器に類似し、胎土中に赤褐色粒を含むものを分類した。灰釉陶器の半焼け資料中には赤褐色粒は胎土にまったく確認できないことから、灰釉陶器とは別系統と考えられる。器形には碗・皿類が認められ、皿類は無高台で回転糸切り痕を残し須恵質の皿類と形状が類似する。碗類は碗ⅠA類と形状が似るが、法量が大きい。とくに高台が細身で高く、三日月高台の様相を強く残している点で異なる。成形は轆轤水挽き成形で、底部には回転ヘラ削り痕が認められる。

瓶類

底部が有高台ものと平底のものとの2種類が認められる。大半が有高台の広口瓶で大小により、Ⅰ類とⅡ類に分類した。平底の瓶は様々な形状が認められるため、その他の瓶として一括して後述する。

広口瓶類 (瓶Ⅰ・Ⅱ類)

口縁部は頸部から外傾しながら立ち上がり、端部で強く外反する広口瓶。端部外面の縁帶の作出形状によりⅠA類とⅠB類、ⅡA類とⅡB類に細分したが個体差があり判然としない資料も含まれる。成形は紐作り輪積み成形によるもので、体部と口縁部は別々に成形をおこなった後に接合している。外面は回転ナデによって丁寧に整形されるが、内面に輪積み痕が未調整のまま残される資料も散見する。肩部以下の体部には回転ヘラ削り痕が認められる。施釉は刷毛掛けによるものが多い。

瓶ⅠA類 (1247K ~ 1250K)

口縁端部外側に顯著な縁帶を作出し、その縁帶が上方に立ち上がるものを分類した。ほぼ器形が復元できた4点を図示した。とくに1247K・1250Kは全形を知り得る良好な資料である。高台は断面台形の輪高台である。1247Kの高台には粗痕が観察される。体部はその最大径が体部上半にあってやや肩が張るもの (1247K・1248K) と最大径が体部中程にあり、あまり肩が張らないもの (1249K・1250K) との二種が認められる。施釉は頸部から体部下半にかけての外面と口縁部内側に施釉される。1249Kは釉が厚く掛けられ、肩部から体部下半へ釉が流れ落ちている。1247Kは自然釉が厚く、人工釉との区別がつかない資料である。口径は17cm~24cmと幅がある。

瓶ⅠB類 (1251K ~ 1255K)

ⅠA類と比べて縁帶が顯著でないもので標準的な資料は1253K・1254Kであるが、個体差が著しい。器面が赤褐色を呈するのが目立つ (1253K・1254K)。1253K・1254Kは端部が外傾

し、肩部がやや丸みを帯びる。高台はⅠA類と同じく断面台形の輪高台で、刷毛痕が認められる。施釉は無釉のものも存する（1252K～1255K）。1251Kは施釉が頭部から体部下半の外側及び口縁部内側に刷毛掛けされる。1251Kは端部が直立し、ⅠA類との中間的様相を示す。1252K・1255Kは後述する甕Ⅱ類と類似して、体部の部位によって器面の発色が帶状に異なる資料である。口径は17～22cmに中心があり、ⅠA類と重複する。

瓶Ⅰ類体部（1256K～1259K）

瓶Ⅰ類の口頭部を欠損する体部資料を4点図示した。いずれも施釉が外側の頭部から体部下半にかけて刷毛掛けで施され、1256K・1258Kは口頭部内面の施釉が体部内面まで一部散布している。

瓶ⅡA類（1260K～1265K・1271K）

瓶Ⅰ類の小型品で、資料によって様々だが口縁部の縁帯が下方へ拡張されることを特徴とする。基準資料は1265K。整形が精緻で器壁が薄く、施釉は刷毛掛けで何度も塗布され釉薬が厚く掛かる。施釉範囲は外側は口縁部～体部下半、内面は口縁部のみでⅠA類と比して外側での施釉範囲が広い。高台は断面台形状を呈し、端部はやや凹面をもつ。器壁の表面が他の資料と異なりざらついた感がある。1271KはⅡA類中で最も大型で体部上半に紐状の橋状把手がつく資料である。歪みが著しいが、ほぼ完形に器形復元ができた。刷毛掛けの施釉が通常の頭部外側から体部外面下半・口縁部内面以外に、体部内面上半及び下半にも認められる。標準的な法量は口径12cm～15cmである。

瓶ⅡB類（1266K～1270K）

瓶ⅠA類に類似して口縁部の縁帯を若干上方に拡張する瓶Ⅰ類の小型品。高台は短くハの字にのび、断面台形を呈す。ⅡA類と比較すると輪積み痕が目立ち、やや整形が雄である。1268K・1270Kは施釉され、1268Kは外側及び口縁部上半の内側で浸け掛けが観察される。1270Kは体部上半外側で人工釉が認められるが、器面全体に厚く自然釉が掛かり、人工釉の範囲を特定できなかった。1269Kは底部に窯壁片が釉着している。法量は口径11～12cmが標準的である。その他の瓶類（1272K～1282K）

無高台の瓶類を集めた。1273K・1274K・1279K・1281K・1282Kは短い口頭部をもち、口縁部が強く外反して端部を上方に拡張して縁帯を作出する。体部は半球形ないしは半楕円形状を呈す。成形は紐作り輪積み成形で体部下半には回転ヘラ削りが認められる。施釉はすべての資料で認められ、刷毛掛けで施釉される。その範囲は外側全体で厚く釉が掛かり、内面は口頭部のみで体部に釉が流れている。1282Kは外側については頭部～体部下半に施釉される。1278K・1280Kは瓶ⅡB類の高台がとれたもので器形の形状・成形は瓶ⅡB類と共通するが、1278Kはやや肩部が張り気味である。1280Kは無釉で、1278Kは自然釉が掛かる。1272K・1275K～1277Kは無高台の小瓶。1275Kは体部、1276Kは口縁部を欠損する。いずれも強く内湾する体部を有し、口頭部は短く外反し端部は丸くおさめる。施釉は1272Kと1276Kで認められ、1272Kは浸け掛け、1276Kは刷毛掛けである。成形は輪轆水挽き成形。底部が残る1272K・1276Kには回転糸切り痕が残る。

壺類 (1283K・1288K)

わずか3点を確認したにすぎず、そのうち図示したのは2点だけである。図示しなかった資料は1288Kと酷似する四耳壺である(図版92石下)。1288Kはほぼ完形の良好な資料で、縦耳が3つ貼付される三耳壺。口縁部は短く直立し端部は丸くおさめる。体部の形状・成形はほぼ瓶I類と共通する。施釉は刷毛掛けで外面は口縁部から体部下半にかけて施釉されるが、釉が厚く自然釉との判別がつかない部位も存する。1283Kは小型の壺。器形の形状から壺と判断した。体部下半を欠損し、無釉。成形は輪廻水挽きで成形。

片口鉢類 (1284K)

1点のみの出土。底部を欠くが、口縁部はほぼ完形の資料。口縁部は直線的に伸び、端部は面取り整形され玉縁状を呈する。注口は端部上端を指先で内側から外側へ押圧して作出している。体部は紐作り輪積み成形で、下半には回転ヘラ削り痕を残す。施釉は刷毛掛けで体部上半に施釉される。

甕類

体部にタタキ目を有し、口縁部が強く外反する。大きさは大小様々である。口縁部がくの字に外反し、端部に面をもつものをI類、端部に顯著な面をもたず体部が強く張るものをII類とした。

I類 (1291K～1310K)

口縁部が強くくの字状に外反し端部に強い平坦面を有する。なかには頸部から口縁部が直立気味に立ち上がる資料も認められる(1297K・1301K・1299K)。端部は下端に顯著な稜をもって上方へ立ち上がり、そのまま上端がつまみあげられ縁帯を作出する。1294K・1301K・1303Kは上端が著しく拡張され、受け口状を呈する。体部は体部高2/3程度に最大径である肩部が位置する。体部は上半では強く内湾するが下半では直線的に内傾して底部にいたる。1297K・1298Kの外底面には初殻痕が認められる。大きさは一定ではなく口径19.8cm・器高31.8cmの1297Kから口径62.7cm・器高78.3cmの1306Kまで様々である。

体部の整形は平行タタキによって整形されるが、外面の輪積み痕が残る例が多い。内面は当て具痕をその後のナデ調整によって観察できない資料が多いが、体部上半で一部円弧状の当て具痕を確認できる(1291K・1296K・1298K・1299K・1302K～1305K・1307K)。体部外面下半ではタタキ整形の後さらに植物纖維状束によって横及び斜方向の削痕調整を施している。口縁部の整形は紐作り後輪積み整形で、一部の資料では何回もナデ調整をおこなったために、器面の凹凸が著しい資料も存する。

施釉は刷毛掛けが認められるものと無釉のもの(1308K～1310K)が認められる。施釉される部位は外面は口縁部から肩部、内面は口縁部に施釉される資料が多いが、なかには1294K・1301Kのように体部内面上半のみに横方向に飛び散ったような施釉を施すものも存する。1306Kの内面は口縁部から底部まで釉が顯著に飛び散っている。

出土区は広範囲に及ぶが、SKA04・SKA05などから出土したものが目立つ。

甕II類 (1311K～1316K)

I類と同様、口縁部は強く外反するが、その立ち上がりは短く端部に顯著な平坦面をもたないものを分類した。体部は最大径が体部高1/2強に位置し、I類ほどは肩部が張らず体部上半が内湾する。1312K・1316Kは端部に平坦面をもつが体部の形状からII類とした。体部の整形は平行

タタキ目が認められるが、その単位はⅠ類に比して細かく、内面には同心円状の当て具痕が認められる(1311K・1314K・1315K)。Ⅰ類で認められた植物繊維状束による削痕調整は観察できず、底部外縁には横方向の削り調整が観察される。口縁部は粘土紐輪積み整形の後、強いナデ調整がおこなわれ、器面の凹凸が著しい。1316Kの外底面には下駄痕が認められる。

すべて施釉は認められず無釉であるが、1311K・1314Kでは体部の何カ所かで顕著に器面の発色が異なる。この現象は壺Ⅱ類と一部の瓶ⅠB類のみで認められ、内面・外面とも発色が変化する部位は輪積み痕が顕著な部位及び接合部位と一致することから粘土の成分に起因すると推測される。

出土区はⅠ類と同様の傾向を有す。1313Kは窯内埋土出土と灰原出土の破片、1315Kは窯内床面出土とSKB02・灰原出土の破片と接合した資料である。

鉢類 (1285K・1286K・1317K・1318K)

4点を図示した。

1317Kは大部分がSKA04から出土した口径63.3cm・底径32.9cm・器高46.1cmの大型品。体部の整形は壺類と酷似し、タタキ整形の後植物繊維状束による削痕調整が施される。底部外縁には削り調整が認められる。体部は底部から外上方へ直線的に立ち上がり、口縁部で強く外反する。端部は下端に拡張された鋭い稜をもち、内傾する縁帯をもつ。施釉は無釉である。

1285Kは半焼け気味の小型の鉢。無釉。口径23.6cm・底径13.7cm・器高16.8cm。口縁部は短くくの字に折れ、端部は肥厚気味に丸くおさめる。体部は底部からわずかに内湾しながら立ち上がる。体部外面は輪積み成形時の凹凸が顕著で、底部外縁には横方向の削り調整が認められる。

1318Kは体部に突帯がめぐる例外的な鉢。口径63.1cmで無釉の大型品。体部の形状は1317Kに近似し、整形も同様であるが、タタキ目はわずかに残る程度でナデ調整で最終的に仕上げられる。内面は輪積み痕がそのまま残る。口縁部は強く外反し、端部が内傾する。上端・下端とも顕著な稜をもつ。口縁部が短く外反するため、外見上体部の突帯と合わせて、突帯が二条あるかのように見える。

1286Kは体部が直線的に外上方に伸びる鉢。無釉。口径24.3cm・底径9.3cm・器高11.5cm。端部は鋭く内傾し平坦面をもつ。内面全体に降灰及び窯糞の付着が認められる。

土師壺 (1290H)

1個体のみが出土した。ほぼ完形の良好な資料である。口縁部がくの字に短く外反し、端部には面取りを施す。内面には横方向の刷毛目が認められる。体部は倒卵形を呈し、底部は丸底である。体部と底部は別々に成形され、接合後にそれぞれ縱方向と横方向の刷毛目で調整される。器面に残る刷毛目は断面がV字状で、おそらく工具の先が鋭利なものであったことが推測される。窯で焼成された製品とは考えられないことから、窯の工人が持ち込んだものと思われる。

硯 (1287K・1289K)

いわゆる風字硯。2個体が出土した。陸部と海部の境界が不明瞭で、1287Kは二面硯。いずれも板状の脚が貼付され、無釉。

その他 (1228H・1229K～1231K・1233K・1235K～1236K)

1229K・1230Kは三方向に穿孔が認められる高台。瓶類の高台であろうか。1231Kは三方向に半

円形の透孔がある高台。図示した以外にもう1個体分の資料を確認している、高台より上部の器形は不明。1235Kは鉢及び瓶の把手。1236Kは瓶類の把手と思われる。1233Kの底部には中央に穿孔が認められる。播鉢の一種であろうか。土師皿が1点出土している（1228H）。1228Hはほぼ完形で丸底の底部で底部外外面周縁にかすかな指頭圧痕を伴う。本資料は混入である可能性が高い。

窯道具（1226・1227・1232・1234・1237・1238）

窯道具の可能性の高い資料を分類した。ツク状の製品（1226・1227・1232）が3点認められる。1226・1227は腰部で屈曲して口縁部が直立する。外底面は回転糸切り痕を残す。1232はコップ状の体部をもち、外底面に糸切り痕が認められる。いずれも胎土は須恵質である。1234は不明の製品。1237・1238は平面稍円形となる粘土塊で11点を確認している。表面には植物繊維の痕跡が認められ、スサ入り粘土が硬化したものと思われる。窯内の焼台を固定する補強材として利用されたものであろうか。その他、陶丸が2点出土している。

灰原出土の須恵器・山茶碗（1239Y・1240Y・1241S～1246S）

灰原から出土した須恵器・山茶碗を図示した。須恵器は混入ないしは1号窯のさらに斜面上方にある7号墳からの流れ込みが想定できるが、山茶碗は単なる混入と解釈してよいものか疑問がある。SZA05は灰原中に掘り込まれた土坑で、ほぼ同時期の山茶碗（皿）が出土ししていることから、同様にして灰原中に掘り込まれた遺構を検出できなかったとの理解も可能である。須恵器は坏身（1241S）・蓋（1242S）・短頸壺（1245S）・平瓶（1244S）・壺（1246S）が出土した。時期には幅があり、1241S・1244Sが7世紀末、1242S・1243S・1245Sが8世紀前半、1246Sが8世紀末と考えられる。1242Sの蓋は7号墳石室内から出土した蓋と酷似する資料である。1239Y・1240Yの山茶碗の小皿は内底面に指撫で痕が認められ白土原1号窯式前後に比定される。

第50表 1号窯器種別・地区別出土点数・残存率(1)

	I 1	I 2	E 2	III 1	III 2	N 1	N -1	N 2	V 1	V 2	VI 1	VI 2	1号窯内	SKAOI	
鏡 I A	1	3	82		36	380		34	30	3	2		1	1	
鏡 I B	14	5	42		31	244		20	13						
鏡 I B a	1		14		8	45		6	2						
鏡 I B b	2		16		7	71		10							
鏡 II A	14	16	12		21	44		5	3	3				2	
鏡 II A a	1	1	12		7	35		5	1						
鏡 II A b	1		4		7	8		2		1					
鏡 II B	7	3	6		10	37		2	4	1					
鏡 II C	1		1		2	3		1						1	
小鏡	4	7	16		33	36		7	5	4					
小鏡 I			10		3	12		10	3						
小鏡 II			3		3	21								1	
輪花鏡 I			1		1	9		2	1						
輪花鏡 II			1			7									
輪花小鏡	1		1												
無高台鏡						3									
模鏡			1			2									
鏡 I A	5	57		15	139			40	8	1				1	
鏡 I B		18		16	50			9	1						
鏡 I B - C	1	14		4	50			20	1	1					
鏡 I C		12		3	29			3							
鏡 II	1	11		2	9			1							
鏡 II A	1		17		14	47		4	2					1	
鏡 II B	2	8	18		2	23		7	2	1					
鏡 III					2										
輪花鏡 I		2		6	16			5							
輪花鏡 II		2		2	4										
須恵質鏡面		4		1	3			2	2						
土師質鏡面	1	9		3	25			15							
瓶 I A		13		3	35			2	2	1				2	
瓶 I S	2	6	2	20	4	43		5	14	8				3	
瓶 II A	2		12	1	6	24	1	6		1					
瓶 II B	2	8	1	1	9	1								1	
瓶その他		1			4			1		1					
壺					2										
甕 I	2	4		1	28			10	2					1	
甕 II		1			2			8	3	1		2	2		
その他の	1	1	13	4	11			1	5	3				1	
合計	2	66	51	458	2	256	1512	2	224	118	34	3	1	7	14
	I 1	I 2	E 2	III 1	III 2	N 1	N -1	N 2	V 1	V 2	VI 1	VI 2	1号窯内	SKAOI	
鏡 I A	0.27	1.52	44.81		22.29	235.09		18.51	18.27	1.61	0.8		0.17	0.79	
鏡 I B	9.14	3.4	24.93		17.4	142.62		11.08	6.33						
鏡 I B a	0.43		5.94		6.84	27.78		3.74	1.19						
鏡 I B b	1.67		11.3		3.58	40.86		6.56							
鏡 II A	10.51	12.21	9.67		16.01	33.68		4.75	2.92	1.41				2	
鏡 II A a	1	1	11.54		6.42	27.88		4.33	1						
鏡 II B		1	4		5.92	7.01		1.58		0.58					
鏡 II C	4.96	2.79	4.51		8.48	23.29		1.93	2.97	0.23					
鏡 II C	0.83		1		2	3			0.92					1	
小鏡	2.54	4.67	12.9		26.85	26.83		5.93	3.76	2.92					
小鏡 I			8.46		3	12		6.85	2.89						
小鏡 II		3			2.5	16.91									
小鏡 III			0.83		0.33	6.31		0.96	0.5					1	
輪花鏡 I			0.42			5.42									
輪花小鏡	0.75		1												
無高台鏡					2.5										
模鏡		1			2										
鏡 III A	3.92		35.09		10.14	82.42		21.13	4.58	1			0.28		
鏡 III B			9.65		11.25	33.51		5.54	1						
鏡 III B - C	0.31		8.03		1.33	27.1		9.65	0.27	0.48					
鏡 I C			8.37		3	20.74		1.75							
鏡 II	0.67		7.56		1.4	5.4		1							
鏡 II A	1		14.82		12.42	41.62		3.13	1.5					1	
鏡 II B	2	7.2	14.93		1.67	16.26		6.67	2						
鏡 III					1.88										
輪花鏡 I			1.7		3.21	9.68		2.54							
輪花鏡 II			2		2	4									
須恵質鏡面			2.74		0.5	2.8		0.58	2				0.42		
土師質鏡面	0.27		4.59		1.92	11.91		5.32							
瓶 I A			1.63		0.28	6.5		0.34	0.8	0.08			0.24		
瓶 I B	0.53	0.8	0.3	2.55	0.5	8.86		1.31	4.86	1.36			0.58		
瓶 I C	0.46		2.11	0.13	0.98	6.4	0.12	0.87		0.11					
瓶 II B		1.26	2.35	0.08	1	1.26	0.11						0.75		
瓶その他		0.33			2.69			0.5		0.58					
壺					2										
甕 I		0.27	1.31		0.18	10.94		4.22	1.45				0.83		
甕 II			0.13		0.54			2.44	0.29	0.07	1	0.46			
その他の	1	1	8.39		2.66	7.88		0.1	4.25	2.13				1	
合計	0.53	42.53	36.62	273.59	0.21	176.06	917.67	0.23	128.67	68.67	14.23	0.87	1	3.87	7.65

第51表 1号窯器種別・地区別出土点数・残存率(2)

	SKA0	SKA1	SKA2	SKA3	SKB03	SKB05	SKB06	SKB07	SKB09	SX01	SX02	SX02	東港段	合計
碗ⅠA	1	03	04	1	05	10				4	10			609 20.2%
碗ⅠB	2				6					5	1	1		384 12.7%
碗ⅠBa					1							1	2	80 2.66%
碗ⅠBb														106 3.52%
碗ⅡA	10		2	5					11	1	3			152 5.04%
碗ⅢAa					1							1		64 2.12%
碗ⅢAb														23 0.76%
碗ⅢB	1		4						4					79 2.62%
碗ⅢC									1					10 0.33%
小柄	2		2	2	1				12					131 4.35%
小柄Ⅰ									1		1			40 1.33%
小柄Ⅱ	1		1											30 1.00%
輪花瓶Ⅰ								1						15 0.50%
輪花瓶Ⅱ														8 0.27%
輪花小瓶														2 0.07%
無蓋台瓶														3 0.10%
棒瓶			1								1			5 0.17%
瓶ⅠA					3					7	4	1		281 9.33%
瓶ⅠB														94 3.12%
瓶ⅠB・C					2					7		4		104 3.45%
直ⅠC														47 1.56%
直Ⅱ														24 0.80%
直ⅢA									1	3				90 2.99%
直ⅢB	1		1							6				72 2.39%
直ⅢC														2 0.07%
輪花直Ⅰ														29 0.96%
輪花直Ⅱ														8 0.27%
須磨質碗直Ⅰ	1				1				1	1				17 0.56%
土師質碗直Ⅰ						1			4					58 1.92%
瓶ⅠA	5	1	1	1					7		1			74 2.46%
瓶ⅠB	15	2							7		1			132 4.38%
瓶ⅡA					1				2		2		2	60 1.99%
瓶ⅡB	2													25 0.83%
瓶その他	4	1							2					14 0.46%
壺														7 0.07%
甕Ⅰ	7		3	3					2		1		1	65 2.16%
甕Ⅱ	3											1		28 0.76%
その他	5								6					51 1.69%
合計	60	4	17	34	2	1	1	1	98	11	28	2	4	3013 100.0%
	SKA0	SKA1	SKA2	SKA3	SKB03	SKB05	SKB06	SKB07	SKB09	SX01	SX02	SX02	東港段	合計
碗ⅠA	0.37	03	04	1	05	07			4.39	2.15	5.98			362 99 10.91%
碗ⅠB	0.86				4.59				2.58	1	0.34			224 27 12.3%
碗ⅠBa			0.53								0.92	2		49 37 2.71%
碗ⅠBb														63 97 3.51%
碗ⅡA	7.99		1.04	3.33					7.48	0.72	2.14			115 86 6.36%
碗ⅢAa					1						0.63			54 8 3.01%
碗ⅢAb														20 09 1.10%
碗ⅢB	0.33	2.46							3.38					55 33 3.04%
碗ⅢC									0.65					9.4 0.52%
小柄	1.11		1.96	2	1				9.5					101 97 5.59%
小柄Ⅰ					0.57				0.48		0.33			36.01 1.98%
小柄Ⅱ	1													24 98 1.37%
輪花瓶Ⅰ							1							9.95 0.55%
輪花瓶Ⅱ														5.84 0.32%
輪花小瓶														1.75 0.10%
無蓋台瓶														2.5 0.14%
棒瓶		1										1		5 0.27%
直ⅠA					3					2.48	3.71	1		168 75 9.26%
直ⅠB														60 95 3.34%
直ⅠB・C					1.67					3.47		1.31		53.62 2.94%
直ⅠC														33.86 1.86%
直Ⅱ														16.03 0.88%
直ⅡA							1		2.27					78.76 4.32%
直ⅡB	1		0.92						3.17					56.82 3.12%
直Ⅲ														1.88 0.10%
輪花直Ⅰ														17.13 0.94%
輪花直Ⅱ														8 0.44%
須磨質碗直Ⅰ	1			1					1	1				13.04 0.72%
土師質碗直Ⅰ														25.72 1.41%
瓶ⅠA	0.77	0.16	0.08	0.25					1.17		0.13			12.53 0.69%
瓶ⅠB	4.4	0.67							0.96		0.83			28.54 1.56%
瓶ⅡA					0.83				0.29		0.91	0.33		13.54 0.74%
瓶ⅡB	0.83								1.04					7.64 0.42%
瓶その他	2.33	0.21												7.68 0.42%
壺														2 0.11%
甕Ⅰ	3.88		1	2.76					0.37		0.54	0.14		27.89 1.53%
甕Ⅱ	0.66											0.75		6.34 0.35%
その他	4.83								4.94					38.18 2.09%
合計	31.36	1.04	10.56	25.4	1	0.29	1	1	51.04	8.58	16.06	2	1.22	1822.95 10.90%

第52表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(1)

	1	1-1	1-2	1-4	1-5	1-6	1-7	1-8	1-9	1-10	2											
陶 I A	45.6	1	1.03		0.42	0.42	0.33	0.33		0.38	0.38 3.05											
陶 I B	40.77		2.19		0.45	0.45			0.48	0.48	3.58											
陶 I Ba	7.79	0.56			0.13	0.13					1											
陶 I Bb	11.37		0.33		0.17	0.17																
陶 I A	14.7	1.68	1				1.48	1.48			6.51 0.6											
陶 I Aa	44.08						1	1	2.5	2.5	2											
陶 I Ab	5.65		2								0.9											
陶 I B	8.03										3.1 0.5											
陶 I C	0.83										1											
小瓶	17.36		3.64		0.53	0.53	1	1			10.17 1.49											
小瓶 I	5.5						2	2			1.93 1.93											
小瓶 II	3.81																					
輪花碗 I	0.98																					
輪花碗 II	1.67																					
輪花小瓶	0.75																					
瓦蓋台碗																						
焼瓶																						
陶 I A	34.27	0.75	2.16		1.15	1.15					1.71											
陶 I B	11.97	1			0.15	0.15					1											
陶 I B - C	7.79	0.25			1.27	1.27					0.28											
陶 I C	4.08										1											
陶 II	4.8	0.28																				
陶 II A	5.22	3				1.67	1.67				3.63 0.67											
陶 II B	12.1										5.86 1											
瓦蓋	1																					
輪花瓦 I	0.83	0.28																				
輪花瓦 II	2	1									1											
瓦蓋青銅皿	1	0.25																				
二重青銅皿	4.48	1.22																				
陶 I A	0.86	0.82				0.13	0.47				0.2											
陶 I B	4.11	0.46	0.09			1.1	0.16	1.5		0.37												
陶 I A	1.06	0.25			0.34	0.07																
陶 I B	0.23	0.11									1											
瓶その他の	1.86																					
蓋	1																					
甕 I	5.05	0.58					1.08	0.75			0.58											
甕 II	1.1						0.08															
甕の他	1.86																					
合計	265.2	5.57	20.27	0	0.09	0	0.45	0.45	4.16	3.82	3.97	2.67	9.1	8.06	1.5	0	0.48	0.48	1.33	0.38	48.92	6.19
	1	1-1	1-2	1-4	1-5	1-6	1-7	1-8	1-9	1-10	2											
陶 I A	73	1	3		1	1	1	1		1	1	6										
陶 I B	78		4		1	1			1	1		8										
陶 I Ba	13	1				1	1															
陶 I Bb	18		1			1	1															
陶 I A	15	2	1					2	2			8	1									
陶 I Aa	17						1	1	3	3												
陶 I Ab	7	2																				
陶 II B	15											4	1									
陶 I C	1											1										
小瓶	22	5			1	1		1	1			12	2									
小瓶 I	6							2	2			2	2									
小瓶 II	5																					
輪花碗 I	2																					
輪花碗 II	2																					
輪花小瓶	1																					
瓦蓋台碗																						
焼瓶																						
陶 I A	63	2	5			2	2					3										
陶 I B	17	1				1	1					1										
陶 I B - C	16	1				2	2					1										
陶 I C	5											1										
陶 II	8	1																				
陶 II A	8	3				2	2					4	1									
陶 II B	14											6	1									
陶 III																						
輪花瓦 I	2	1																				
輪花瓦 II	2	1											1									
瓦蓋青銅皿	1	1																				
二重青銅皿	10	2																				
陶 I A	6	4				1	1	1	1			2										
陶 I B	24	3	1			2	2	1	1	1		2	2									
陶 I A	5	2				1	1	1	1													
陶 I B	2	1											1									
瓶その他の	3																					
蓋	1																					
甕 I	14	1					2	2				1	1									
甕 II	3						1	1														
甕の他	5							1														
合計	484	8	41	0	1	0	1	1	10	10	7	7	14	15	1	1	1	1	4	4	65	8

第53表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(2)

	2-1	2-2	3	3-1	3-2	3-3	3-5	4	5	6	6-1
瓶ⅠA	1.51	1.51	0.73	0.73	13.13	0.31		0.66	0.66		
瓶ⅠB					12.71	0.36				1.43	1
瓶ⅠBa					1.51	0.91				0.61	
瓶ⅠBb					3.14					0.59	
瓶ⅡA		0.28	0.28	13.16		0.79	0.79		4.82	1.53	0.43
瓶ⅡAa				5.79	1					2.42	
瓶ⅡAb				3.62							
瓶ⅡB	1	1		8.83	1.88			0.96		1	
瓶ⅡC				1							
小瓶	0.39	0.39	2.52	2.52	6.03				0.51	7.68	
小瓶I	1	1		2.42						4	
小瓶II										2.5	
輪花瓶I											
輪花瓶II											
輪花小瓶				1							
無高台瓶											
棒瓶											
瓶ⅢA				10.06						5.63	0.27
瓶ⅢB				2.04						1.38	
瓶ⅢB-C				1.23						0.73	
瓶ⅢC				0.49							
瓶ⅢE				0.69							
瓶ⅣA				8.37						0.38	
瓶ⅣB	1	1		4.19	0.19			3.95		3	2
瓶Ⅴ										5.1	
輪花瓶I											
輪花瓶II				1							
須賀質瓶I				1						0.33	
土師質瓶I										2.46	1
瓶I A				1.03	0.13		0.15			0.08	
瓶I B	0.11			2.09			0.1			0.09	
瓶II A				0.68						0.34	
瓶II B				1.63						1	
瓶その他											
蓋										1	
蓋I				0.85		0.18	0.77			1	
蓋II				0.08			0.13				1
その他の				6.41				0.42	0.42		0.43
合計	4.9	4.9	3.64	3.53	14.16	4.65	0.92	0.79	0.18	0	0.94
										1.43	4.43
										1.27	1.27
	2-1	2-2	3	3-1	3-2	3-3	3-5	4	5	6	6-1
瓶ⅠA	3	3	2	2	24	1		2	2		
瓶ⅠB				19	1					8	1
瓶ⅠBa				3	1					2	
瓶ⅠBb				5						2	
瓶ⅡA	1	1	18		1	1			7	3	1
瓶ⅡAa			6	1						3	
瓶ⅡAb			4								
瓶ⅡB	1	1	11	2				1		1	
瓶ⅡC			1								
小瓶I	1	1	3	3	7			1		11	
小瓶II	1	1		3						4	
輪花瓶I					1					3	
輪花瓶II											
輪花小瓶											
無高台瓶											
棒瓶											
瓶ⅢA				12						7	1
瓶ⅢB				6						3	
瓶ⅢB-C				3							
瓶ⅢC				1							
瓶ⅢD				1						1	
瓶ⅣA				10					5	3	2
瓶ⅣB	1	1		5	1					6	
瓶Ⅴ											
輪花瓶I											
輪花瓶II											
須賀質瓶I				1						1	
土師質瓶I				1						5	1
瓶ⅤA				7	1	1	1	1	1	1	
瓶ⅤB	1	1	16					3	1	1	
瓶ⅥA				4						3	
瓶ⅥB			4	1						1	
瓶その他											
蓋				3		1	1	1		1	
蓋I				8				1	1		1
蓋II								1	1		
その他の											
合計	7	7	7	7	184	9	2	2	1	1	4
									5	2	14
									0	0	0
									0	74	51
									2	2	2

第54表 1号窓器種別・土層別残存率・出土点数(3)

	6-2	6-3	6-4	7	7-1	7-2	7-3	7-4	8	9	9-3
鏡 I A	1.73	1.73		103.12		0.87	0.87		0.83	0.59	
鏡 I B	0.79	0.79		44.58				0.5	0.5	1.29	
鏡 I Bb				17.37							
鏡 II A	1	1		4.48				1	1	1.83	
鏡 II Aa				2				1	2	1	
鏡 II Ab											
鏡 II B	1	1		3.7					1		
鏡 II C		1	1								
小鏡				4.56	1	1	1			3.07	
小鏡 I	2	2		5.42				1	1	1	
小鏡 II				3.1						1	
輪花鏡 I				2.53							
輪花鏡 II	1	1				0.22	0.22				
輪花小鏡											
高台鏡											
環鏡								1	1		
鏡 I A				35.51	1	0.64	0.64	0.76	0.76	2.42	
鏡 I B				26.73							
鏡 I B - C	0.43	0.43	15.92							0.59	
鏡 I C				16.72							
鏡 II				3.28	0.56	0.56			0.52		
鏡 II A	1	1		5.48					0.58	2.83	
鏡 II B	2	2		8.54	1	1	2	2	0.92	1	
鏡 III											
輪花鏡 I				9.15						1	
輪花鏡 II											
金銀質鏡組				2.24				1	1		
金銀質鏡組				6.6	0.26			1.65	1.65	0.71	
鏡 I A				0.73				0.17	0.13	0.55	0.09
鏡 I B				0.17			0.09		0.12	0.24	
鏡 II A				1.83						0.33	
鏡 II B			0.08	0.75				0.13	0.06		
鏡その他の			1								
鏡 I				0.12		1.12			0.13	0.18	
鏡 II											
鏡 III				2.23					1	0.5	
その他	0.33	0.33						0.6	0.68	5.91	6.36
合計	10.97	10.85	1	0.43	0.43	35.56	2.05	2.56	2.56	3.73	3.73
						0.09	0	0.6	0.68	5.91	6.36
							0.09	0.09	0.09	0.09	0
	6-2	6-3	6-4	7	7-1	7-2	7-3	7-4	8	9	9-3
鏡 I A	2	2		161		1	1		1	1	
鏡 I B	1	1		74				1	1	2	
鏡 I Bb				25							
鏡 II A	1	1		37					1		
鏡 II Aa				7				1	2		
鏡 II Ab				2				1	2	1	
鏡 II B	1	1		5					1		
鏡 II C		1	1								
小鏡				6	1	1	1			4	
小鏡 I	2	2		6				1	1	1	
小鏡 II				4						1	
輪花鏡 I				4							
輪花鏡 II	1	1				1	1				
輪花小鏡											
高台鏡											
環鏡								1	1	4	
鏡 I A				57	1	1	1	2	2	2	
鏡 I B				36							
鏡 I B - C			1	1	26					1	
鏡 I C				24							
鏡 III				4	1	1			1		
鏡 II A	1	1		6				1	1	3	
鏡 II B	2	2		10	1	1	2	2	1	1	
鏡 III											
輪花鏡 I				16						1	
輪花鏡 II											
金銀質鏡組				4				1	1	2	
金銀質鏡組				15	1			2	2	2	
鏡 I A				4				2	2	1	4
鏡 I B				1				1	1	2	
鏡 II A				12						1	
鏡 II B			1	2					1	1	
鏡その他の			1								
鏡 I	1	1		2					1	1	
鏡 II											
鏡 III	1	1		3					1	1	
合計	13	13	2	1	1	1	564	3	3	3	5
								5	5	1	10
								1	1	10	11
								0	37	2	1
									1	1	1

第55表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(4)

	9 L	10	11	12	12-1	13	14	14-1	15	16	18											
瓶Ⅰ A	78.63	0.24		4.79	0.46	1.92	0.92	1.85	1.34	17.09	5.13											
瓶Ⅰ B	49.96			4.95	0.43	0.43		0.26		5.71	2.58											
瓶Ⅰ B	5.96			0.92		0.19	0.19	1		0.4												
瓶Ⅰ Bb	11.08			0.33						0.33												
瓶Ⅱ A	18.06			0.33		1	0.24	1		2.92												
瓶Ⅱ Aa	14.85						0.2	0.2		1												
瓶Ⅱ Ab	2	0.94	0.94		0.58	0.58																
瓶Ⅱ B	7.2							1			0.93											
瓶Ⅱ C	1				1			0.92			0.93											
小瓶	7.05			0.92	0.92	0.66		2	1.43	1												
小瓶Ⅰ	3.04								1.89	1	1											
小瓶Ⅱ	1									1	1											
輪花瓶Ⅰ	0.75					1	1															
輪花瓶Ⅱ	2.53																					
輪花小瓶																						
無高台瓶																						
燒嘴	1																					
瓶Ⅰ A	29.97			4.54	1.23				5.09	0.17												
瓶Ⅰ B	5.78				0.77	0.77			1.45													
瓶Ⅰ B - C	9.44			1		1.42			0.72													
瓶Ⅰ C	3.03								1.83	0.83												
瓶Ⅱ	2.77	1.08																				
瓶Ⅱ A	3.27		1	1	0.27	0.27			1	1	1											
瓶Ⅱ B	14.71			1					1		1											
瓶Ⅲ	0.88																					
輪花盤Ⅰ	0.62																					
輪花皿Ⅱ																						
須恵質輪皿									1	1	1											
土師質輪皿	3.39																					
瓶Ⅰ A	1.51	0.14		0.21			0.58															
瓶Ⅰ B	2.72			0.98		0.58	1.72	0.28	0.42	0.09	0.56											
瓶Ⅱ A	2.99																					
瓶Ⅱ B	0.86																					
瓶その他	0.66																					
壺																						
壺Ⅰ	2.36						1.29	0.17	2.17		1											
壺Ⅱ	0.22						1.39			0.13												
その他	2.44			1	1	1	1.92	0.92	1	0.33	1											
合計	300.6	0	2.62	0.94	1.92	1.92	21.86	3.54	5.12	3.12	8.4	1.31	2.93	1.17	0.28	0.44	0.02	11.54	3.01	0	5.49	4.93
	9 L	10	11	12	12-1	13	14	14-1	15	16	18											
瓶Ⅰ A	142	1		7	1	3	2	4	3	27	9	1										
瓶Ⅰ B	87			6		1	1		1	11	5											
瓶Ⅰ Ba	11						1	1	1													
瓶Ⅰ Bb	23									1												
瓶Ⅱ A	23			1		1	1	1		3												
瓶Ⅱ Aa	18						1	1														
瓶Ⅱ Ab	2	1	1		1	1																
瓶Ⅱ B	13							1			1	1										
瓶Ⅱ C	1				1			1														
小瓶	11		1	1	1		2	2	1													
小瓶Ⅰ	4				1					2	1	1										
小瓶Ⅱ	13			1																		
輪花瓶Ⅰ	1																					
輪花瓶Ⅱ	3																					
輪花小瓶																						
無高台瓶																						
燒嘴	1																					
瓶Ⅰ A	54			4	2				8		1											
瓶Ⅰ B	9					1	1		2													
瓶Ⅰ B - C	21			1			2		2													
瓶Ⅰ C	5						1		2	1												
瓶Ⅱ	3	2																				
瓶Ⅱ A	5		1	1	1	1			1	1	1											
瓶Ⅱ B	16			1					1		1											
瓶Ⅲ	1																					
輪花瓶Ⅰ	1																					
輪花瓶Ⅱ																						
須恵質輪皿	7								1	1	1											
土師質輪皿	7																					
瓶Ⅰ A	8	1		2			2	1														
瓶Ⅰ B	14		1	2	6	2	2	6	1	1	3											
瓶Ⅰ C	16									1	4											
瓶Ⅱ A	6																					
瓶Ⅱ B	6																					
瓶その他	2																					
壺	7																					
壺Ⅰ	7							3	1	5	1											
壺Ⅱ	1							4		1												
その他	3			1	1		2	1		1	1											
合計	531	0	6	1	2	2	37	8	6	5	15	3	26	3	1	1	71	19	7	0	9	9

第56表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(5)

	19	20	20-1	21	22	24	25	26	28	29	30
織I A			0.32	0.32					0.22	0.22	
織I B											
織I Ba											
織I Bb					0.25	0.25					
織II A											
織II Aa										1	1
織II Ab										2	2
織II B					1	1	1	1	0.65	0.65	
織II C											
小瓶											
小瓶I					1	1					
小瓶II									1	1	
輪花瓶I								0.5	0.5		
輪花瓶II											
輪花小瓶											
輪高台瓶											
複瓶											
皿I A									0.42	0.42	
皿I B											
皿I B-C								0.27	0.27		
皿I C											
皿II											
皿II A	1				1	1					
皿II B				0.5	0.5						
皿III											
輪花皿I											
輪花皿II											
波浪質碗皿											
波I A								0.3			
波I B							0.17				
波II A											
波II B											
波その他の											
甕											
甕I											
甕II											
その他の		0.1									
合計	1	0	0.1	0	0.32	0.32	1.5	1.5	2.25	2.25	1

	19	20	20-1	21	22	24	25	26	28	29	30
織I A			1	1					1	1	
織I B											
織I Ba											
織I Bb					1	1					
織II A											
織II Aa										1	1
織II Ab										2	2
織II B											
織II C											
小瓶											
小瓶I				1	1						
小瓶II									1	1	
輪花瓶I								1	1		
輪花瓶II											
輪花小瓶											
輪高台瓶											
複瓶											
皿I A									1	1	
皿I B											
皿I B-C								1	1		
皿I C											
皿II											
皿II A	1				1	1					
皿II B					1	1					
皿III											
輪花皿I											
輪花皿II											
波浪質碗皿											
波I A								1	1		
波I B											
波II A											
波II B											
波その他の											
甕											
甕I											
甕II											
その他の		1	1	1	1	1	1	1	4	4	1
合計	1	0	1	1	1	1	2	2	3	3	4

第57表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(6)

	31	32	33	33-1	33-2	33-3	34	35	36	37	38
陶ⅠA			0.77	0.77	0.6	0.6	1	1	0.97	0.97	13.61
陶ⅠB			1.48	1.48		0.92	2	2	6.84	6.84	1.51
陶ⅠBa	0.48	0.48				0.83	0.83	3.34	3.34	0.55	0.55
陶ⅠBb	1	1						3.23	3.23	2.24	2.24
陶ⅡA											0.91
陶ⅡAa		1	1								
陶ⅡAb										1	1
陶ⅡB								0.59	0.59		
陶ⅡC										1	1
小鏡				3	3						
小鏡I											
小鏡II											
輪花鏡I								1.86	1.86		
輪花鏡II	0.42	0.42									
輪花鏡III								2.5	2.5		
鏡柄											
鏡ⅠA								7.8	7.8	1	1
鏡ⅠB								4.58	4.58	0.61	0.61
鏡ⅠB-C					0.34	0.34		1.54	1.54		
鏡ⅠC								4.29	4.29	1	1
鏡Ⅱ											0.42
鏡ⅡA			1	1							0.44
鏡ⅡB			0.38	0.38	1.5	1.5		1.81	1.81	1	1
輪花鏡I								2.92	2.92		
輪花鏡II								1	1		
須彌寶鏡III			0.8	0.8							
土師質鏡III			0.29	0.29				1.12	1.12	0.3	0.3
瓶ⅠA											0.42
瓶ⅠB		0.08									
瓶ⅡA								1.46	1		
瓶ⅡB									0.08		
瓶その他の											
甕											
甕Ⅰ											
甕Ⅱ											
その他の	1	1						2.75	2.75		
合計	2.9	2.9	1.08	1	4.72	4.72	5.44	5.44	3.17	3.17	2.97
								2.97	2.97	61.24	60.78
								8.3	8.22	3.45	3.45
								5.23	5.23	7.29	7.29
	31	32	33	33-1	33-2	33-3	34	35	36	37	38
陶ⅠA			2	2	1	1	1	2	2	20	20
陶ⅠB			2	2		1	1	2	13	13	2
陶ⅠBa	1	1				1	1	5	5	2	2
陶ⅠBb	1	1						7	7	3	3
陶ⅡA											1
陶ⅡAa		1	1								
陶ⅡAb											1
陶ⅡB											1
陶ⅡC											1
小鏡				3	3						
小鏡I											
小鏡II											
輪花鏡I								3	3		
輪花鏡II	1	1									
輪花鏡III											
鏡柄								3	3		
鏡ⅠA								16	16	1	1
鏡ⅠB								7	8	2	2
鏡ⅠB-C				2	2			3	3	1	1
鏡ⅠC			1	1				6	6	1	1
鏡Ⅱ											1
鏡ⅡA			1	1							1
鏡ⅡB			1	1	2	2		2	2		
鏡Ⅲ									1	1	
鏡花里I								3	3		
鏡花里E								1	1		
須彌寶鏡組			1	1							4
土師質鏡組			1	1				3	3	1	1
瓶ⅠA											
瓶ⅠB		1	1								
瓶ⅡA											
瓶ⅡB											
瓶その他の											
甕											
甕Ⅰ											
甕Ⅱ											
その他の	1	1						4	4		
合計	4	4	2	2	8	8	7	7	6	5	4
								4	100	101	15
								15	15	5	5
								7	7	14	14

第58表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(7)

	39	40	40-1	41-1	42	43	44	45	46	47	48
碗ⅠA	3.1	3.1	1.83	1.83	1	1		11.79	11.79		0.92 0.92
碗ⅠB	4.02	4.02	2.54	2.54	1	1		2.78	2.78		1.31 1.31
碗ⅠBa			0.36	0.36				0.46	0.46		
碗ⅡB								0.52	0.52		0.6 0.6
碗ⅡA								1.5	1.5		
碗ⅡAb											
碗ⅡB								0.38	0.38		1 1
碗ⅡC								1	1		1.86 1.86
小碗						0.88	0.88		1	1	
小碗I											
小碗II								1	1		
輪花碗I								1	1		
輪花碗II											
輪花小碗											
無高台碗											
後碗								1	1		
蓋ⅠA			2.13	2.13							
蓋ⅠB	1	1					1.21	1.21			
蓋ⅠB・C			0.96	0.96							
蓋ⅠC											
蓋II											
蓋IIA							0.83	0.83			
蓋IIB	1	1	1	1			2.4	2.4	2	2	2.42 2.42
蓋III											
輪花盤I	0.37	0.37			1	1					
輪花盤II											
須恵質碗目											
土師質碗目	0.12	0.12									
蓋ⅠA		0.08					0.11			1 1	
蓋ⅠB									0.19	0.19	0.57
蓋ⅡA							1	0.67			
蓋ⅡB											
蓋その他											
蓋											
蓋I							0.17	0.17			0.75 0.92
蓋II											0.16
その他の											
合計	9.69	9.61	9.82	9.82	1	1	1	0.88	0.88	3.4	3.07 24.37 24.26 1.38 1.38 0.54 0.54 0.19 0 0.59 10.03
	39	40	40-1	41-1	42	43	44	45	46	47	48
碗ⅠA	4	4	4	4	1	1		15	15		2 2
碗ⅠB	6	6	4	4	1	1		3	3		2 2
碗ⅠBa			1	1							
碗ⅠBb							2	2			
碗ⅡA							1	1			1 1
碗ⅡAa							2	2			
碗ⅡAb											
碗ⅡB								1	1		1 1
碗ⅡC											
小碗											
小碗I							1	1			
小碗II								1	1		
輪花碗I							1	1			
輪花碗E											
輪花小碗											
無高台碗											
後碗							1	1			
蓋ⅠA		4	4					3	3		
蓋ⅠB	1	1									
蓋ⅠB・C		2	2								
蓋ⅠC											
蓋II											
蓋IIA							1	1			
蓋IIB	1	1	1	1			4	5	2		3 3
蓋III											
輪花盤I	1	1									
輪花盤II			1	1							
須恵質碗目											
土師質碗目	1	1									
蓋ⅠA		1	1					1	1		1 1
蓋ⅠB											
蓋ⅡA							2	2			
蓋その他											
蓋											
蓋I								1	1		1 2
蓋II											1 1
その他の											
合計	15	15	17	17	1	1	1	6	7	34	34 2 2 1 1 1 1 18 19

第59表 1号窯器種別・土層別残存率・出土点数(8)

	49	51	耕土・埋亂	合計
瓶 I A			8.69	6.16 332 59.5
瓶 I B			3.15	2.35 200.8 36.5
瓶 I Ba			1	1 42.76 8.67
瓶 I Bb				63.97 8.26
瓶 II A				77.25 7.38
瓶 II Aa				52.34 9.2
瓶 II Ab				18.69 4.52
瓶 II B		1.69		44.96 9.93
瓶 II C				7.75 2
小瓶 I		1		80.96 17.59
小瓶 II				34.2 11.80
小瓶 III				22.41 1
輪花瓶 I				8.62 4.36
輪花瓶 II				5.84 1.64
輪花小瓶				1.75 0
無高台瓶				2.5 2.5
壺瓶				3 2
豆 I A			7.62	5.08 254.8 24.3
豆 I B			0.42	0.42 60.3 0.95
豆 I B・C	1	1	0.32	0.32 45.3 6.33
豆 I C				33.85 7.54
豆 II			0.67	15.33 0.56
豆 II A			0.55	0.55 50.73 12.67
豆 II B				74.49 21.2
豆 III				1.88 1
輪花豆 I		1	1	17.13 6.25
輪花豆 II				8 2
須恵質碗底				8.62 2.8
土師質碗底		0.25	0.25	23.01 5.41
瓶 I A				9.47 1
瓶 I B	0.08		0.68	19.91 0
瓶 II A				10.35 1.67
瓶 II B				5.06 0
瓶その他				3.52 0
壺				3 0
豆 I			0.34	18.27 4.36
豆 II			0.07	3.36 0
その他	1	1		26.41 9.11
合計	1.08	1	1	127.65 17.33 1591 303.6

	49	51	耕土・埋亂	合計
瓶 I A			13	8 560 95
瓶 I B			5	3 344 56
瓶 I Ba		1	1	71 16
瓶 I Bb				106 16
瓶 II A				99 11
瓶 II Aa				61 11
瓶 II Ab				21 5
瓶 II B		2		63 12
瓶 II C				8 2
小瓶 I		1		102 21
小瓶 II				38 12
輪花瓶 I				28 1
輪花瓶 II				12 5
輪花小瓶				8 3
無高台瓶				2 0
壺瓶				3 3
豆 I A			6	3 257 41
豆 I B			1	1 91 19
豆 I B・C	1	1	1	1 86 12
豆 II C				47 11
豆 II B				1 23 1
豆 II A		1	1	1 62 16
豆 II E				85 27
豆Ⅲ				2 1
輪花豆 I		1	1	29 9
輪花豆 II				8 2
須恵質碗底				12 3
土師質碗底		1	1	51 12
瓶 I A				53 14
瓶 I B	1	1	3	105 23
瓶 II A				50 7
瓶 II B				21 2
瓶その他				6 0
壺				2 0
豆 I			2	47 13
豆 II			1	13 3
その他	1	1		38 14
合計	2	2	1	20 287 501

上段：残存率(×/12)

下段：点数(破片数)

それぞれ、左列は各土層出土の地點数、右列は観察用堆出土の地點数

2号窯・3号窯（第116図）

南方向に開く中央埋没谷最奥の西斜面に並列する2基の山茶碗窯を確認した。北側の窯を船山北2号窯、南側の窯を船山北3号窯と呼称する（以下省略）。いずれの窯体も等高線に直交し、並列して築かれていた。現状では天井の崩落を示すような陥没した地形、または遺物の採集などの状況は確認されず、窯の存在を予測するのが困難な状況であった。その理由は窯体の下方に広がる灰原上面では表土下最大で約3.5mにも及ぶ厚い堆積（Ⅱ層）に覆われていたことによる。この厚い堆積は窯の操業放棄後の早い段階から始まったと考えられ、その結果、窯体・灰原とも保存状況は良好であった。2基の窯の前後関係は後述するが、灰原の堆積状況からみて2号窯の操業が先行し、両窯には大きな時間差はなく連続した操業と考えられる。

2号窯（第117・118図）

E34杭の南東に焚口が位置し、窯体はここから西へ向かって地山をトンネル状に掘り抜いている。分焰柱から燃焼室にかけては天井部の大半が残存しており、保存状況は良好であった。窯体規模は主軸長7.21m・最大幅（焼成室）1.91m・焼成部床面の最大傾斜角52°度を測る。主軸の方位はN-99°-Wである。

焚口

燃焼室の被熱部分から下方へ周囲よりやや落ち込む部分を検出したが、明確な施設などは確認できず判然としない。床面幅は1.83mを測る。

燃焼室

焚口からわずかに広がり、分焰柱で焼成室と区画される。主軸長は2.66m、床面最大幅は1.85mである。床面は焚口から分焰柱に向かって0.5mの範囲では最大で40°のかなりの傾斜が認められるが、そこから先の分焰柱まではわずかに下る程度である。焚口の埋土は大半が流入土で下層でわずかに灰層が残存していたが、非常に薄く、操業の放棄に際して片づけられたものと思われる。分焰柱の周囲から焼台とともに半焼けの製品が出土したが、これは焼成室から移動したものと考えられる。床面はとくに貼床などの施設は認められず、黄褐色を呈していた。色調は内側から黄褐色→赤褐色に変化し、右側壁の内側の一部に青灰色となる部分が認められた。いずれも地山が被熱し変色したものと思われる。壁面の立ち上がりは外傾し、分焰柱付近から内傾し始める。

分焰柱

分焰柱は地山を掘り残して作出され、平面形は梢円形を呈す。その規模は長軸0.99m・短軸0.58mである。中心は焚口から約2.2mのところに位置し、断面形は焚口側はほぼ垂直に立ち上がり、焼成室側は外傾して天井部へと続く。分焰孔は一部が落下していたものの左右とも良好に残存していた。天井部はアーチ形をなし、天井までの高さは左側が0.84m、右側が0.53mと左側が高くなっている。左側から製品を搬出したのであろうか。分焰柱の表壁面では厚さ5～8cm程度の灰褐色の貼壁が観察できたが、補修の痕跡は確認できなかった。

焼成室

分焰柱最奥から床面の角度が減ずる部位までを焼成室とする。主軸長は3.04mで、幅は前半部でやや外側へ張り最大幅は1.91mである。最大幅は分焰柱から続く平坦面が傾斜を変える部位で、ここから急な傾斜角となり最大で52°度を測る。床面は内側から灰褐色→黄褐色→赤褐色と変化するものの貼床は認められなかった。側壁にはスサ入り粘土の貼壁の貼付が認められたが、指撫で痕は観察することができなかった。埋土中には貼床などが剥落した痕跡を示すような特徴は認められなかったため、床面は掘り抜いた地山面をそのまま床面として利用したか貼床が粘土ではなく何か流失しやすい土質で構築されていた可能性が高い。床面の被熱範囲は最深で20cm程度に及ぶ。

天井部は良好な遺存状態で分焰柱からほぼ煙道部まで残存していた。高さは最大で1.09mあり、焼成部前半部に位置する。断面形は床面が前半部で平坦を呈していたのに対して後半部では次第に中央がくぼむような形状を呈するため、円形にちかくなる。

遺物は埋土に混入してわずかに出土したが、原位置を保った遺物・焼台は認められなかった。

煙道部

前述した床面の傾斜が緩やかになる部位から主軸長1.53mを測り、最大幅0.73mで細長い形状をとる。一端緩やかになった床面の傾斜は煙道端部に向かってやや傾斜を増し、自然地形に連なる。中央部には厚さ4cm程度の粘土が貼り付けられ、指撫で痕が認められた。天井部はなく、明確に煙り出しの施設も確認できなかったことから、当時から煙り出しの穴を大きく開けていたものと思われる。

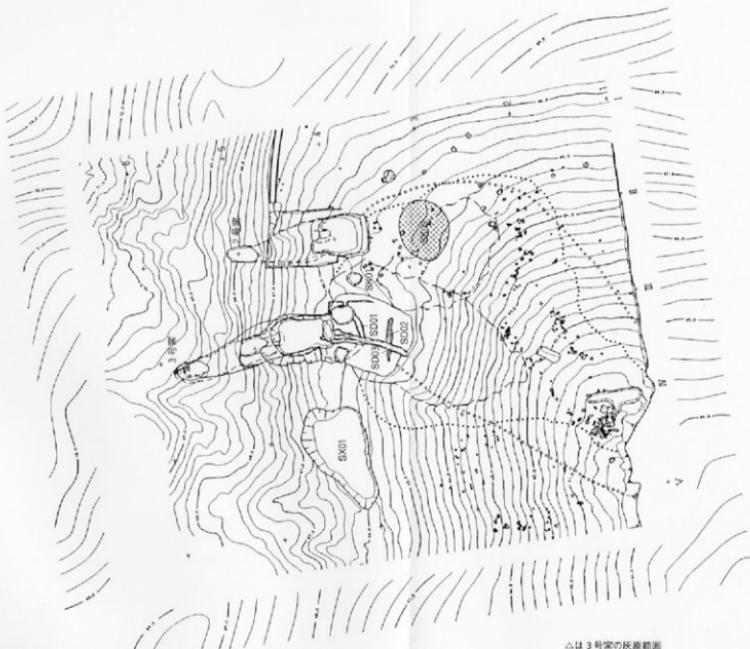
なお、ダンパーの有無については明らかにできなかった。

前庭部

焚口前方に広がる平坦面。焚口周囲の地山を削平し、そこから先の斜面を掘り抜き排土で埋め立てることによって形成している。焚口から主軸の延長上6.9mの範囲まで掘り抜き排土が認められる。しかし、焚口周辺は3号窯に伴う土坑(SK02(3))によって削平されているため、2号窯に伴う前庭部は焚口からみて南東部しか確認できなかった。その規模は推定で、長軸約6.1m・短軸約4.8mの楕円形を呈し、広さは12m²（掘り抜き排土33m³・推定40m³）を測る。掘り抜き排土の厚さは最大で30cmを確認した。

灰原（第124・125図）

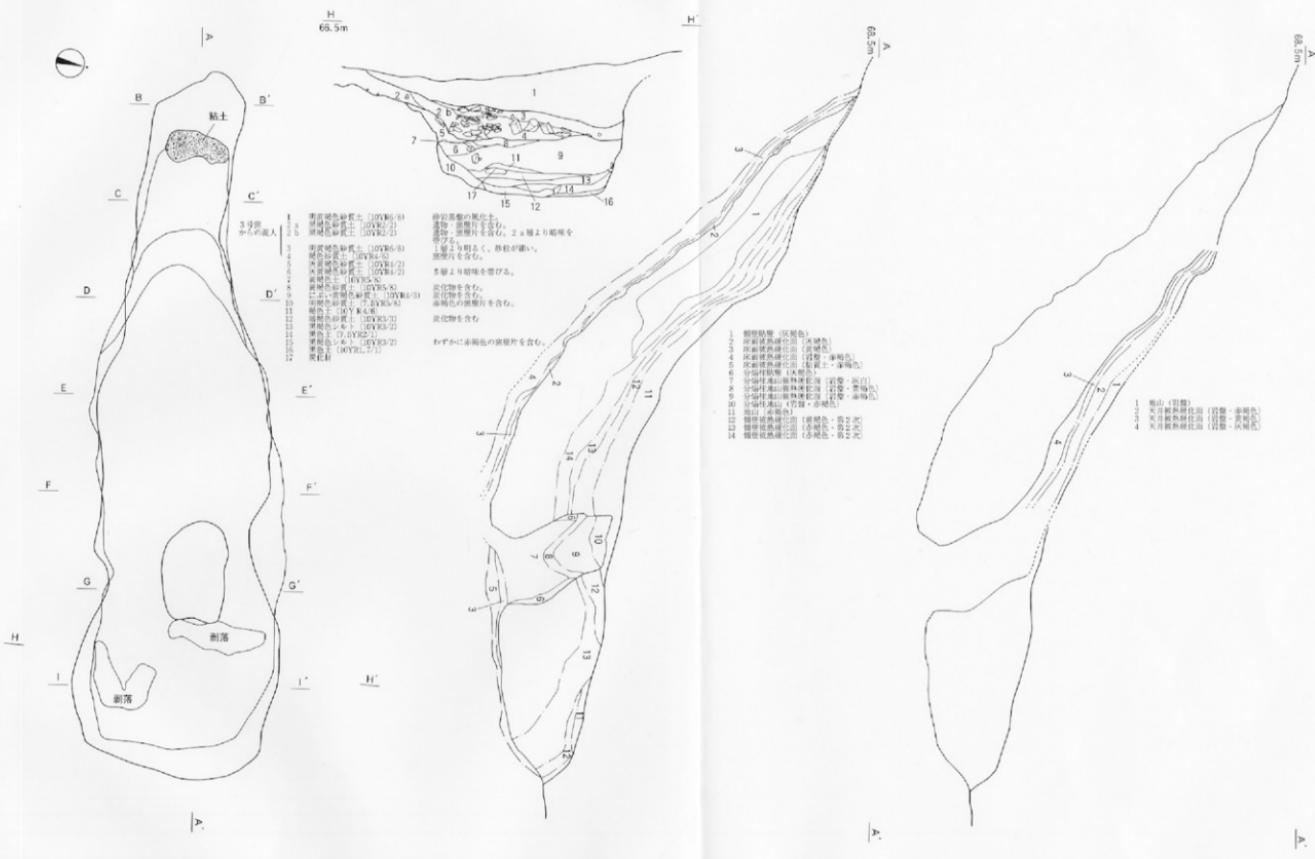
前述した前庭部から地形の制約を受けて南東方向に伸びる。灰層は最大で60cm程度で出土量もコンテナ50箱にも満たず、少ない。一部の灰層は後述する3号窯の灰層と重複するが、3号窯の掘り抜き排土の下にもぐり込む灰層が確認されたことから3号窯との先後関係は明らかである。2号窯の遺物のみを搬出する灰層は24～28層でいずれも3号窯掘り抜き排土下にある灰層である。詳述は3号窯で述べる。



△は3号窯の灰窓範囲
□は2号窯の灰窓範囲

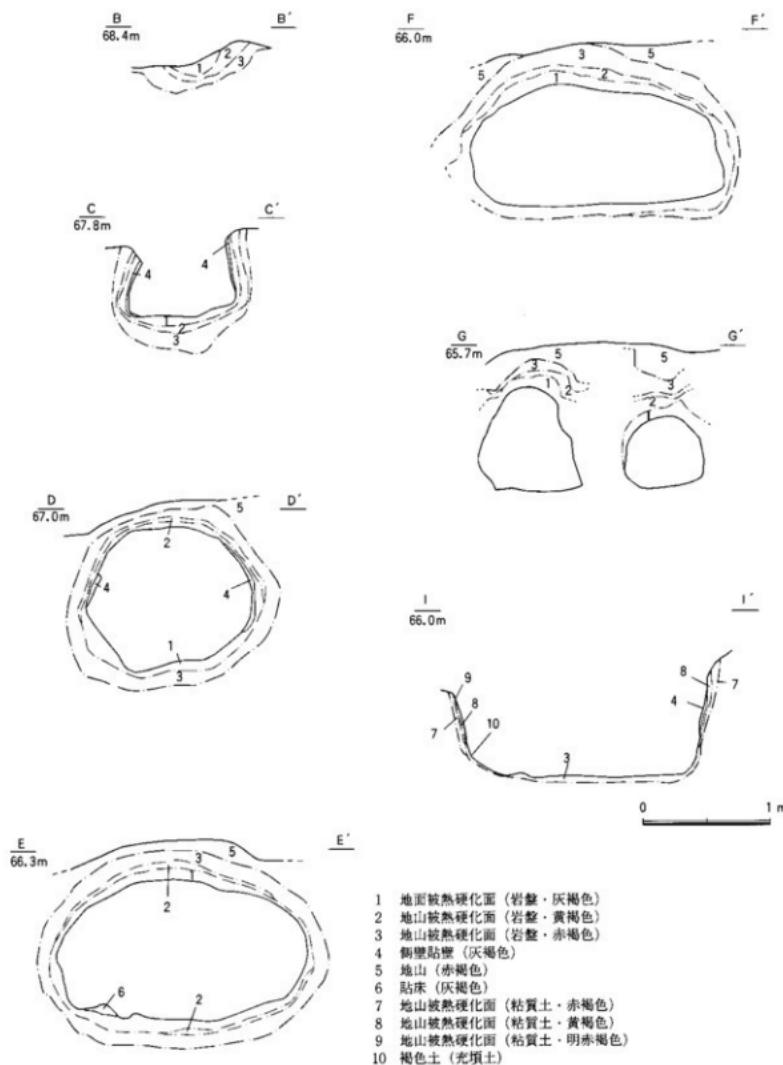
0 1 10m

第116図 2・3号窯全体図



第117図 2号室室体側面・平面図

0 1m



第118図 2号窯窯体断面図

遺物（第245～254図）

主に灰層18・24・25層から出土し、碗・小碗・小皿類が主要器種でその他に瓶類・足高高台碗などが認められる。窯内埋土から出土した遺物はほとんどが色調が白色を呈し、胎土は砂礫を含まず他の資料とは異なる。これらの資料はロクロ土師器と考えられるものだが、他の資料と器形の形状は類似するため一括して分類し、そのなかで詳述することにする。時期は12世紀後葉代と思われる。

碗類（第245～247図・第60表）

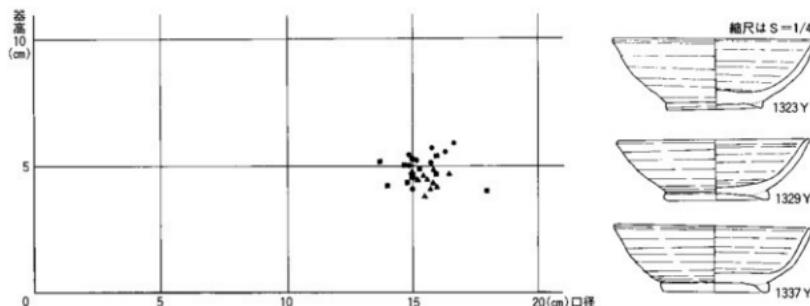
有高台の碗と無高台の碗が認められる。有高台をⅠ類、無高台をⅡ類に分類し、それぞれを体部・口縁部の形状によって細分した。Ⅱ類は碗というよりはいわゆる須恵器の無台杯の形状に類似する。土器類の個体数は口縁部の残存率によって算出したものである（第63～65表）。

Ⅰ類（1319Y～1340Y）

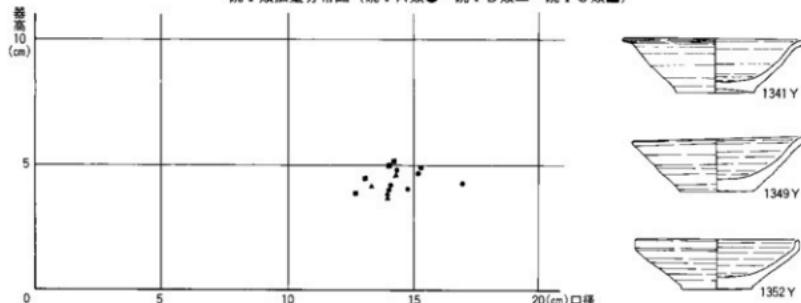
体部及び口縁部の形状によって次のA～C類に細分が可能である。

Ⅰ A類（1319Y～1326Y）は鋭い断面三角形を呈する高台形状と口縁端部のかかる外反を特徴とする。体部は高台付根からわずかに内湾する。体部内面はロクロ目がない丁寧な調整で、外底面の回転糸切り痕はナデ消している。法量は16.0cm前後・底径7.5cm前後・器高5.5cm前後である。

第60表 碗類法量分布表



碗Ⅰ類法量分布図（碗ⅠA類●・碗ⅠB類▲・碗ⅠC類■）



碗Ⅱ類法量分布図（碗ⅡA類●・碗ⅡB類▲・碗ⅡC類■）

1319Y・1320Yは窯内から出土した色調が白色を呈する製品である。本類の他の資料と比べると高台の成形が粗雑である。

I B類（1327Y～1332Y）は体部が弱く内湾し口縁端部がわずかに外反する。A類と体部形状が近似するが、比較すると浅手で高台及び底部の形状が異なる。高台はハの字状に外方に伸び、内面・外面とも外傾しその断面はやや鈍い三角形を呈する。内底面中央の突起が潰されている資料が多く認められる。外底面の回転糸切り痕は未調整のまま残されている。また、胎土がA類とはまったく異なり、やや砂粒が目立つ。色調は灰白色を呈す。口径16.0cm前後・底径8.0cm前後・器高4.5cm前後。1331Yは後述するII A類との重ね焼きの資料である。

I C類（1333Y～1340Y）は内湾して立ち上がる体部が中程で稜をもって外傾する資料を分類した。端部はわずかに外反するかやや肥厚気味におさめている。内底面はB類同様、中央突起が潰されている資料が大半である。高台の形状は外面が直立し内面が外傾する。端部は丸く、B類にちかい形状を有するが外面の方向に違いが認められる。口径15.0cm・底径8.0cm・器高5.0cm前後の法量を示す。

II類（1341Y～1353Y）

無高台の碗を分類した。口縁部の形状によりA～C類に細分した。

I A類（1341Y～1346Y）は口縁部が強く外反することを特徴とするが、細部の形状は個々の資料によって異なる。体部はわずかに内湾しながらハの字状に開く。端部はやや尖り気味で、内底面中央の突起を潰す資料も見受けられる。外底面の回転糸切り痕は未調整のままである。口径15.0cm・底径6.0cm強・器高5.0cm弱。

I B類（1347Y～1350Y）は体部が直線的に外方に伸び、口縁端部がやや外反気味のものを分類した。端部は尖り気味におさめ、体部外面ではロクロ目が顕著である。1350Yはやや体部が内湾する。

I C類（1351Y～1353Y）は体部がやや内湾し深手となり、口縁端部を直立させるものを分類したが、資料によって個体差が著しい。1351Y・1353Yは玉縁状で鋭い断面三角形を呈し、1352Yは直立する。端部内面には強い内傾面が認められる。

小皿類（第249図・1391Y～1394Y・第61表）

後述する小皿と大差ないが、体部が深いものを小碗として分類した。図示したのは4点でわずかである。とくに小皿I Aa類と酷似する。

体部はわずかに内湾し、端部は丸くおさめられる。高台は断面三角形を呈する。外底面の回転糸切り痕はナデ消すものも認められる。

小皿類（第248・249図・第62表）

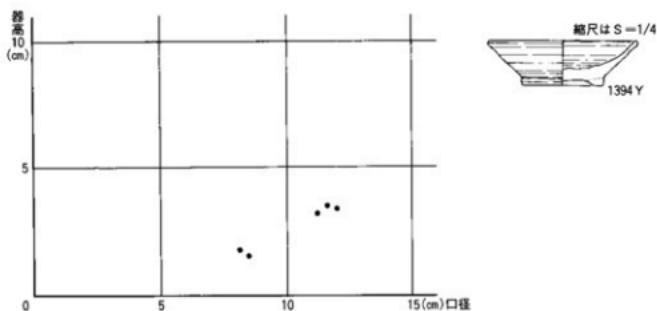
高台を有する資料をI類、無高台の資料をII類とした。II類はその系譜が不明でその形態は土師器にちかい。

I類（1360Y～1368Y・1386Y～1390Y・1395Y～1409Y）

体部の形状から強く内湾するものをA類、浅く直線的に開くものをB類、さらに体部が浅くなり底部が厚手のものをC類とした。

I A類（1386Y～1390Y・1395Y～1402Y）

第61表 小碗類法量分布表



体部が深手のものを a 類 (1386Y～1390Y)、浅手のものを b 類 (1395Y～1402Y) として細分した。a 類と b 類では大小の法量の違いが認められる。

a 類は口縁端部がわずかにつまみ上げられる。1391Yはやや外反する。高台の形状は低い断面三角形を呈するが外面は内湾する。1387Yの高台は外底面の径の外にはみ出している。外底面の回転糸切り痕は未調整のものとナデ消されているものが認められるが、後者の方が多い。法量は口径11.0cm強・底径6.0cm強・器高2.7～3.2cm。

b 類は体部の形状は a 類に酷似するが、小型化し内湾の度合いが強い。口径11.0cm弱・底径6.0cm強・器高2.3～3.1cmと器高が低くなる。高台は断面三角形状だが潰れており、外面が内湾しながら外傾し短くハの字状となる。外底面の回転糸切り痕はナデ消される資料が多い。1402Yはやや口径が大きく別類とすべきかもしれない。

I B 類 (1360Y～1368Y・1403Y～1406Y)

体部の形状により、やや内湾しながら直線的に伸びる a 類 (1403Y～1406Y) と体部中程で稜をもってわずかに屈折する b 類 (1360Y～1368Y) に細分できるが、a 類は個体数が少なく個体差が大きい。

a 類は体部がやや深手で、口縁端部はやや外反気味で尖り気味におさめる。高台の形状は I A 類に近似するが、外面はあまり外傾しない。外底面の回転糸切り痕は図示資料は未調整だが、資料数が少なく実態は不明である。

b 類は a 類より体部が浅く開く。口縁端部はわずかにつまみ上げられるものが多いが、1362Y・1365Yのように外反気味の資料も認められる。高台は I Ab 類にちかい形状を示し、内外面とも外傾し短くハの字に伸びる。外底面は未調整で回転糸切り痕をそのまま残す。口径12.0cm前後・底径6.0cm強・器高2.3～3.2cm。

I C 類 (1407Y～1409Y)

高台の貼付に特徴がある。底部を突出させて厚めに切り離して柱状高台状とし、その底部外周に高台を貼り付けている。その結果、実際の高台高はほとんどないにもかかわらず、外見上では貼付

高台の効果をあげる独特の形状を示す。資料が少なく、3点を図示したにすぎないが、法量分化する可能性がある。

II類 (1369Y～1385Y)

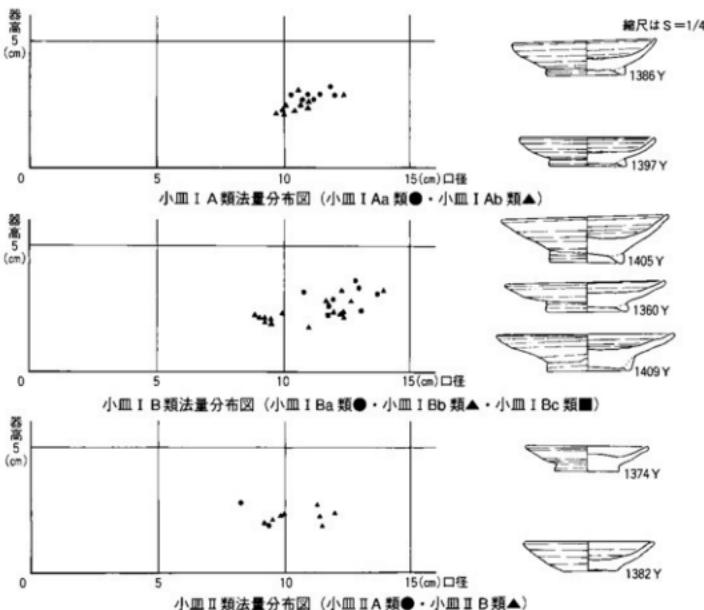
無高台の小皿のうち底部の形状と大きさから、A～C類に分類した。

II A類 (1369Y～1380Y) は底部が極端に突出して円柱状を呈することを特徴とする。その形状はクロロ土師器にみられる柱状高台と類似する。窓内から出土した1369Y・1370Yは色調が白色を呈する土質の製品である。体部はやや内湾するか直線的に短く伸びる。端部は丸くおさめる。1369Y・1370Yは窓内埋土から出土した半焼けの製品である。1370Yはやや底部の突出があまいが、欠損と考え本類とした。外底部の回転系切り痕はすべて未調整である。口径9.5cm・底径4.7～4.9cm・器高1.9～2.2cm。本類の形状は灰釉陶器からの系譜には求められず、土師器に連なる可能性がある。

II B類 (1381Y～1384Y) はII A類ほど底部が突出せず、その法量がやや大きいものを分類した。I B類の体部形状にも類似する。体部はわずかに内湾し端部は丸くおさめられるが、個体差が著しい。1381Y・1384Yのように一部底部が突出気味となる資料も認められる。1382Y・1383Yは半焼けの製品である。1384Yは窓内埋土から出土した。

II C類 (1385Y) は図示可能な資料は1点のみであった。薄手の体部が水平の伸び、端部のつま

第62表 小皿類法量分布表



みあげが顯著な資料である。口径11.5cm・底径6.0cm・器高1.4cm。特異な形状でとりあえず小皿に分類した。

片口鉢類 (1410Y～1417Y)

片口を有する鉢のうち高台の資料をI類、無高台の資料をII類とした。I類の資料は少なく、2点を図示したにとどまり、破片でも確認できなかった。

I類 (1416Y～1417Y)

1417Yは薄手で体部が深い碗形を呈し、高台は欠損する。高台形状は破損部位からみて、幅の狭い高台が長く外方に伸びると思われる。口縁端部は丸くおさめ、注口は二本の指で外側に大きく引き出される。体部下半には回転ヘラ削り調整が観察される。口径26.4cmで、内外面とも自然釉が厚くかかる。

1416Yは口径28.1cm・高台径13.1cm・器高10.5cmの資料で半焼けだが、ほぼ完形の良好な資料。口縁端部には顯著な面取りが認められる。体部下半は内湾し、上半はやや外反気味となる。高台は碗類と共に丸みをもち、内面は内湾し外面は外傾する。高台付根には三方向の穿孔が認められる。注口は1417Yに比べるとやや幅が狭いが、外側へ強く引き出されている。

II類 (1410Y～1415Y)

体部・法量などに個体差が顯著だが、無高台の片口鉢を一括した。やや厚手で体部は内湾する。端部は強く外反し、尖り気味におさめる。1413Y・1415Yの端部はむしろ外反せず、内湾気味である。1414Yが基準となる資料と考えられるが、1410Y・1411Yのようにやや小型なものも認められる。いずれの資料にも厚い自然釉がかかる。外底面には下駄痕が残り、外周には棒状工具による調整痕が観察できる。

瓶類 (1419Y～1427Y)

大型の広口瓶をI類、その他のものをII類とした。いずれの資料も内外面の自然釉が顯著である。いずれも無高台である。

I類 (1419Y～1424Y)

大きさは個々の資料によって様々だが、長い頸部を有する広口瓶。口縁部は外反し、端部はつまみあげられ外面には平坦面が認められる。体部は強く肩部が張り、大きくその径を変えずに底部にいたる。そのため、体部は寸胴な印象を受ける。1419Yはほぼ完形品の好資料である。いずれの資料も輪積みの凹凸が目立つ。とくに分割整形後の接合部位の凹凸が著しく(図版128)、体部と頸部の境は内面において顯著な継ぎ目の段差が観察でき、本類の特徴の一つと考えられる。底部外周には片口鉢II類同様、棒状工具による調整痕が2・3周程度認められる。1423Yには体部中央に1本の沈線が認められる。

II類 (1425Y～1427Y)

3点を図示した。1425Yは口頸部はI類に近似するが、体部の形状がまったく異なる。肩部はほとんど張らず体部が直線的で、肩部径とほぼ同径の大きな底部にいたる独特的の器形を呈する。口頸部も口縁部の外反がI類と比べるとやや弱い。口径13.3cm・底径12.8cm・器高17.3cm。1426Yはやや小型の瓶。口頸部は細く短く立ち上がり、端部には外傾する平坦面が認められる。体部は極端な下膨れ状を呈する。口径6.1cm・推定器高12.9cmである。1427Yは体部が全体に丸みを

もちやや小型であることからⅠ類とは別類としたが、口頭部と体部の境には内面において接合時の段差が認められることからⅠ類にちかい口頭部をもつ可能性が高い。外面には自然釉のため観察困難だが、何か模様状のものが観察できる。

壺類 (1428Y・1436Y)

2点のみ確認した。壺は本窯においては少数器種であったことが予想される。

1428Yは短頭壺。短く立ち上がる口縁部をもち、端部は鋭く尖らせる。体部は緩やかな弧状を呈し、最大径はやや上半に位置する。その位置は分割整形の接合時の痕跡が明瞭に残る。外底面には下駄痕が認められる。焼き上がり・色調とも須恵器に酷似し、本窯の製品のうち異質な製品である。口径10.2cm・底径14.3cm・最大径21.8cm・器高21.0cm。1436Yは四耳壺。焼け歪みが顕著な資料で図化にはかなりの復元をはかった。体部の形状は比較的1428Yに類似するがそれほど肩部が強く張らず、緩やかに弧状を呈す。口縁部はわずかに直立し、端部は尖り気味である。内外面の自然釉が厚くかかり、一見灰釉陶器にもみえる。耳は綫長に配置される。復元した法量値は口径13.3cm・底径18.7cm・器高30.8cmである。

足高高台碗 (1355Y～1359Y)

碗形の体部に細長くハの字に聞く脚部を有する資料を足高高台碗として一括した。1355Yのように中程で屈折して外反するものと直線的に外方へ伸びるもの認められる。出土数が少ないと断定できないが、前者の脚部はやや長めで、後者はやや短い特徴が存する(1357Y・1358Y)。1356Y～1359Yは色調が白色を呈する製品で窯内から出土している。1355Yは前者の資料と異なり、焼成が良く口縁部には人工釉が施釉される。本類の資料はロクロ土師器に酷似する資料だが、1355Yのような資料が存するため、一概にはそのすべてを土師器とするわけにはいかない。なかには重ね焼きの痕跡を残す製品もあることからある一定量の生産があったことが予想される。

甕類 (1429Y～1435Y)

体部外面を平行タタキ目によって整形される資料を分類した。タタキ目は平均3.3cm幅の6本単位である。内面には当具痕はなく、ナデ消されている。口縁部は1429Y・1430Yのように外反し端部がつまみ上げられるか外傾した平坦面をもつ資料が多く認められる。なかには1432Yや1434Yのように違った形状を示す資料も存するなど口縁部・端部の形状は一定ではなく、口径の差も著しい。1432Yは顕著な平坦面を有し、口縁部が短く立ち上がる。1433Yは1432Yと同一個体と思われる。1434Yは端部に平坦面がなく尖り気味である。

その他 (1354Y・1418Y)

1354Yの形状は碗ⅡC類に類似するが口縁が極端に直立するため、蓋と考えたものである。底面には回転糸切り痕をそのまま残し、端部はやや尖り気味におさめている。1418Yは水注の把手であろうか。粘土紐が2本1組となっている。

3号窯 (第119～121図)

2号窯の南に隣接して築造され、主軸の方位もほぼ同様で、N-110°-Eを向く。焚口は2号窯よりも高い位置にあり、本窯の掘り抜き排土が2号窯の灰原を埋め立てていることから、3号窯が2号窯より遅れて構築されたことが判明した。分焰柱から先の焼成室天井部の大半が残存し、焚口左側では

第63表 2号窯器種別・地区別残存率・出土点数

	I 2	I 3	II 1	II 2	II 3	III 1	III 2	III 3	IV	V 1	V 1	2号窯窓内	合計		
碗 I A				0.1	1.87	0.07	1.12					1	4.16	4.50%	
碗 I B	0.42		0.58	2.15	1	1.29	0.17				0.21		5.785	6.26%	
碗 I C	0.38		0.13	3.14	0.7	0.61	0.26	0.5					5.72	6.19%	
碗 II A	0.63		0.1	2.27	0.05	1.39	1.57		0.07				6.08	6.58%	
碗 II B	0.15	0.06		1.61	0.66	0.45	1.1					0.67	4.7	5.08%	
碗 II C	0.06			1.07	0.34	0.5	0.08			0.23			2.28	2.47%	
碗 A							0.04						0.04	0.04%	
小碗				0.83	0.75	0.34	0.25						2.17	2.35%	
小皿 I Aa				0.45			1.91	1.75					4.11	4.45%	
小皿 I Ab	2.28			2.02	0.29	0.42	0.29					0.1	5.4	5.84%	
小皿 I Ba				0.1	1.33	0.04		0.58	1.25				3.3	3.57%	
小皿 I Bb				0.1	2.81	0.13	0.57	0.64	0.17				4.42	4.78%	
小皿 I C							1.41	0.67				0.83	2.91	3.15%	
小皿 II A	0.18		0.79	0.93			3.38		0.37			1.01	6.66	7.21%	
小皿 II B	0.05	0.58	0.03	1.14	1.22		0.07	0.46			0.5	0.25	4.3	4.65%	
小皿 II C						0.04		0.5					0.54	0.58%	
足高台	1.16				0.46			0.33		0.6			1.42	3.97	4.29%
片口鉢 I				0.67				0.71					1.38	1.49%	
片口鉢 II	1.5				0.42	0.78		1.67	1				5.37	5.81%	
瓶 I	0.66	0.06		1.56	0.07	1.95	1	1.42		0.08	0.25		7.05	7.63%	
瓶 II					1			0.83	0.67				2.5	2.70%	
壺					0.67				1				1.67	1.81%	
甕	0.33			1.38	0.73	0.68	2.67	1.63					7.42	8.03%	
その他							0.5						0.5	0.54%	
合計	7.8	0.7	1.83	2.36	9.34	8.27	20.37	11.23	0.07	1.05	1.19		5.28	9.45	100.00%

	I 2	I 3	II 1	II 2	II 3	III 1	III 2	III 3	IV	V 1	V 1	2号窯窓内	合計		
碗 I A				1	3	1	2					2	9	2.47%	
碗 I B	1		1	8	2	9	1				2		24	6.58%	
碗 I C	2		1	9	3	5	2	1					23	6.30%	
碗 II A	3		1	9	1	14	10		1				39	10.68%	
碗 II B	1	1		6	4	5	4					1	22	6.03%	
碗 II C	1			10	3	4	1			3			22	6.03%	
碗 A							1						1	0.27%	
小碗				1	2	2	1						6	1.64%	
小皿 I Aa			2				3	3					8	2.19%	
小皿 I Ab	10			9	2	1	1				1	24	6.58%		
小皿 I Ba			1	2	1		1	2					7	1.92%	
小皿 I Bb			1	10	1	6	5	1					24	6.58%	
小皿 I C							2	1				1	4	1.10%	
小皿 II A	2		3	5			7		3			3	23	6.30%	
小皿 II B	1	2	1	5	3		1	2		1	1	17		4.66%	
小皿 II C					1		1						2	0.55%	
足高台	3			1			1			2			4	11	3.01%
片口鉢 I				1				1					2	0.55%	
片口鉢 II	2			2	2		3	1					10	2.74%	
瓶 I	3	1		6	1	10	3	2		2	1		29	7.95%	
瓶 II				1			1	1					3	0.82%	
壺					1			1					2	0.55%	
甕	1			6	11	4	12	18					52	14.25%	
その他							1						1	0.27%	
合計	30	4	9	94	41	61	64	34	1	7	7		13	365	100.00%

第64表 2号窯器種別・土層別残存率・出土点数(1)

	1	2	3	4	4L	5	5L	7L	8	10	12L	13	13L	14	15	16	17
碗 I A												0.1					
碗 I B									0.25			0.205		0.42		0.1	
碗 I C											0.46	0.44	0.16				
碗 II A	0.08					0.29					0.33	0.05	0.2				0.06
碗 II B												1.56		0.06			
碗 II C											0.06	0.18	0.18				
罐 A											0.04						
小碗												0.83					
小皿 I Aa												0.08	0.6		0.54	0.15	0.84
小皿 I Ab												0.83	0.54				
小皿 I Ba																	
小皿 I Bb	0.06											0.58					
小皿 I C																	
小皿 II A											0.89	0.04	0.1				
小皿 II B											0.32	1	0.46		0.05		
小皿 II C																	
足高高台																	
片口鉢 I												0.67					
片口鉢 II												0.38					
瓶 I												0.96			0.62		
瓶 II												1					
壺																	
甕	0.16	0.39	0.52	0.54	0.04	0.39	0.31	0.4		0.07	0.27		0.11		0.12		
その他																	
合計	0.3	0.39	0.52	0.54	0.04	0.68	0.31	0.4	0.25	0.07	3.22	0.98	8.725	0.16	1.7	0.15	1.67

	1	2	3	4	4L	5	5L	7L	8	10	12L	13	13L	14	15	16	17
碗 I A												1					
碗 I B									1			2		1		1	
碗 I C											1	2	1				
碗 II A	1					1					1	1	3				1
碗 II B												5		1			
碗 II C											1	1	2				
碗 A										1							
小碗												1					
小皿 I Aa												1	3		1	1	3
小皿 I Ab											1	3					
小皿 I Ba											1						
小皿 I Bb	1											3					
小皿 I C																	
小皿 II A										4		1		1			
小皿 II B										2		2		1		1	
小皿 II C																	
足高高台																	
片口鉢 I												1					
片口鉢 II												1					
瓶 I												4				2	
瓶 II												1					
壺																	
甕	2	4	7	3	1	4	3	7		1	2		1	2			
その他																	
合計	4	4	7	3	1	5	3	7	1	1	13	4	35	1	7	1	8

第65表 2号窯器種別・土層別残存率・出土点数(2)

	18	20	21	22	23	24	25	25L	26	27	29	30	合計		
確ⅠA					0.07	1.29	1.7					3.16	3.92%		
確ⅠB	0.98	0.58			0.85	0.75	0.17	0.38	0.83		0.27	5.785	7.18%		
確ⅠC	0.93	0.34			0.14	0.76	0.76	0.14	0.86		0.12	5.11	6.34%		
確ⅡA	1.62	0.4	0.05		0.87		0.8	0.16	0.11			5.02	6.23%		
確ⅡB	0.15	0.08			0.15	0.98			0.52		0.18	3.68	4.57%		
確ⅡC	0.23	0.08			0.1	0.26			0.36	0.29	0.17	0.06	0.11	2.1	2.61%
機A												0.04	0.05%		
小確		0.25			0.34	0.75						2.17	2.69%		
小確ⅠAa	0.25	0.83				1.75	0.5			0.58		3.91	4.85%		
小確ⅠAb	0.88				0.42		0.29		0.27		4.07		5.05%		
小確ⅠBa		0.1				1.83						3.3	4.09%		
小確ⅠBb	0.33	0.47			0.25		0.17	0.03	1.92		0.14	3.95	4.90%		
小確ⅠC						0.67			1.41			2.08	2.58%		
小確ⅡA	0.08	0.96				1.17	1.75					4.99	6.19%		
小確ⅡB	0.17				0.29	0.5	0.96	0.2				3.95	4.90%		
小確ⅡC						0.54						0.54	0.67%		
足高高台	1.04	0.33			0.6							1.97	2.44%		
片口鉢I							0.71					1.38	1.71%		
片口鉢II	1.5	0.42				1	1.25		0.4			4.95	6.14%		
瓶I	0.04	0.53			1.22	1.4	0.98	0.58	0.54		0.06	6.93	8.60%		
瓶II						0.67	0.83					2.5	3.10%		
壺						0.67	1					1.67	2.07%		
甕	1.25	0.22			0.1	0.58	0.55		0.5		0.33	6.85	8.50%		
その他							0.5					0.5	0.62%		
合計	9.45	5.59	0.05	0.39	5.77	12.73	15.2	1.65	5.47	2.93	0.12	1.15	80.61	100.00%	

	18	20	21	22	23	24	25	25L	26	27	29	30	合計	
碗ⅠA						1	2	3				7	2.28%	
碗ⅠB	4	1				5	1	1	2	1		3	7.49%	
碗ⅠC	4	2				1	2	3	2	2		1	6.84%	
碗ⅡA	5	4	1			8		5	2	1		34	11.07%	
碗ⅡB	1	1				2	3			3		2	5.86%	
碗ⅡC	2	1			1	4			2	1	3	1	1	6.51%
碗A													1	0.33%
小碗							2	2					6	1.95%
小皿ⅠAa	1	1					3	1			1		7	2.28%
小皿ⅠAb	3					1		1			1		15	4.89%
小皿ⅠBa		1						3					8	2.61%
小皿ⅠBb	2	3				2			1	1	4		1	5.86%
小皿ⅠC								1			2		3	0.98%
小皿ⅡA	1	4					2	2					15	4.89%
小皿ⅡB	1				2	1	2	2					14	4.56%
小皿ⅡC								2					2	0.65%
足高高台	3	1				2							6	1.95%
片口鉢Ⅰ								1					2	0.65%
片口鉢Ⅱ	2	1					1	2		1			8	2.61%
瓶Ⅰ	1	5				7	3	2	1	1		1	27	8.79%
瓶Ⅱ								1	1				3	0.98%
甕							1	1					2	0.65%
甌	2	1				1	1	2			1	1	46	14.98%
その他									1				1	0.33%
合計	32	27	1	3	37	24	35	10	14	8	2	9	307	100.00%

附帯施設が検出されるなど保存状況は概して良好であった。規模は焚口が近世墓（SZA21）によつて掘り込まれているため、正確には不明だが主軸長推定8.98m・最大幅2.06m・燃焼室床面の平均傾斜角度40°前後を測る。本窯も2号窯と同じく、地山を掘り抜いた地下式の窑窯で、燃焼室から焼成室にかけてはその主軸方向がやや南にふっている。そのため、等高線とは直交せず築窯されている。残存する天井部では分焰柱の前方が大きく落下しているのが確認でき、天井部の落下によって本窯の操業を放棄したものと思われる。

焚口

床面の幅は1.09m。被熱部位は確認した部位より斜面下方に約30cm程度は伸びると思われるが、SZA21によって削平されているため、詳細は不明である。なお、焚口と確証づけられる施設は確認できなかつた。

燃焼室

焚口から分焰柱までを燃焼室とする。平面形は分焰柱に向かって大きく広がり、分焰柱横で床面幅が最大となる。主軸が焼成室と比べてやや右側にずれているが、その原因は不明である。床面は1回の補修が認められ、これを第2次操業面とする。第2次操業面の下層には第1次操業面に伴うと推測される薄い灰層が堆積していたことからみて、補修が行われたものと判断した。この第2次操業面は窯体全部を改修するものではなく、焼成室の後半部で第1次操業面と連なる。断面を観察すると第2次操業面は比較的平坦であるのに対して第1次操業面は分焰柱に向かってやや傾斜している。第2次操業面の床面は粘土質の土を使用しているが、第1次操業面はとくに貼床の痕跡が認められなかつたため、地山そのものを床面として利用していた可能性が高い。横断面では床面は平坦で側壁は内傾する。左側壁には貼壁が一部残存する。また、第2次操業面の直上から、多くの遺物が集中して出土した（第121図）。これらの遺物は原位置を保つものではなく、操業を放棄した際に残されたものである可能性が高い。

分焰柱

ほぼ全部が残存し、その平面形は梢円形を呈す。大きさは基底面で長軸0.84m・短軸0.52mを測り、地山を掘り残して作られている。分焰柱の中心は焚口から約2.7mのところにあり、ここで前述したように床面平面プランの主軸が南に屈曲する。断面は焼成室に向かって外傾して天井部へと続く。分焰孔は被熱を強く受け硬化していたため、落下せず残存していた。左分焰孔は床面幅0.78m・高さ0.55m、右分焰孔は床面幅0.48m・高さ0.58m（第2次操業面）とわずかに左分焰柱の方が大きい。分焰柱の表壁面には補修の痕跡は確認できなかつたが、焼成室側の部位には貼壁が認められた。大半に自然釉が付着し、硬化していた。

焼成室

分焰柱から床面確認面の最奥までとする。平面形は広がらずに次第に上方に向かって幅を減じ、最大幅は分焰柱との境界付近にある。床面の傾斜は前半部は比較的緩やかだが、後半部から急傾斜

となり最大で42°を測る。床面には一部焼台が上部と下部に分かれて原位置を保つ形で検出された。それぞれの大きさが異なり、上部の焼台は12~20cm程度、下部の焼台は20~30cm程度であった。下部の焼台のサイズが大きく、焼成室前半部側で大型製品が焼成されたことを示唆しているものと思われる。下部の焼台は第1次操業面に伴うものだが、上部の焼台は第1次・第2次操業面が連なる位置にあることから、どちらに属するかは判断できない。貼床は分焰柱から先、2.6mの範囲まで認められた。しかし、それより上の上部の焼台が検出された部位には貼床は確認できず、地山の凹凸が目立つ。検出した焼台は地山直上に設置されその周囲を粘土で補強してあったことから、明確な床面施設はなく地山の凹凸をうまく利用した可能性が高い。最も被熱を受けた部位は分焰柱との境界で深さ30cm強に達する（第1次操業面）。

天井部は焼成室の中央部分のみ残り、最大高は残存する天井部のほぼ中央で2.47mにも及ぶ大きなものである。床面同様、内側から灰褐色→黄褐色→赤褐色と変色し、最も内側の部分には貼壁が遺存し、指撫で痕も観察することができた。横断面は床面が平坦で側壁の立ち上がりはほぼ垂直で正方形の形をいずれも保つ傾向にある。両側壁とも貼壁がよく残り、後半部は自然釉が付着しガラス状に硬化していた。

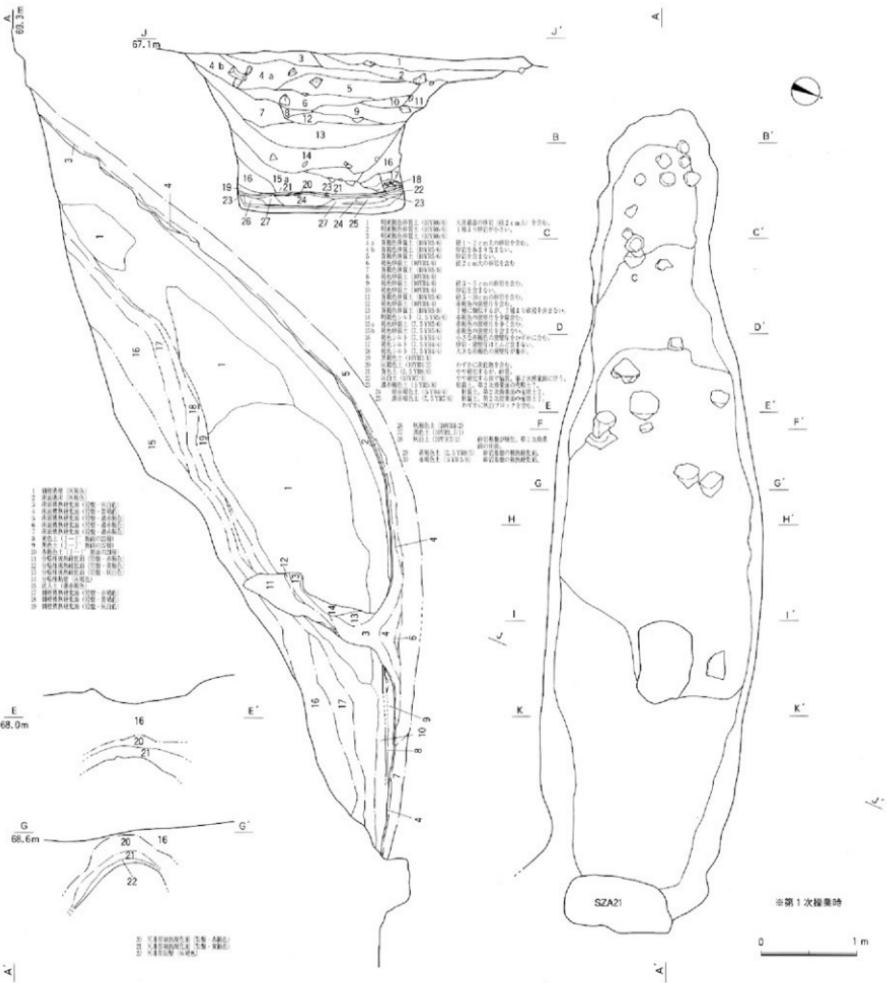
煙道部

当初、窯体の上方に開口している部分を煙道と予想していたが、焼台が検出されるとともに焼成室床面の傾斜も変化する点がなかったので、煙道部の部位を特定するには至らなかった。天井部がさらに地上へと続くと仮定するなら、煙道部は地下式ではなく地上で構築され、流失したものと推測される。

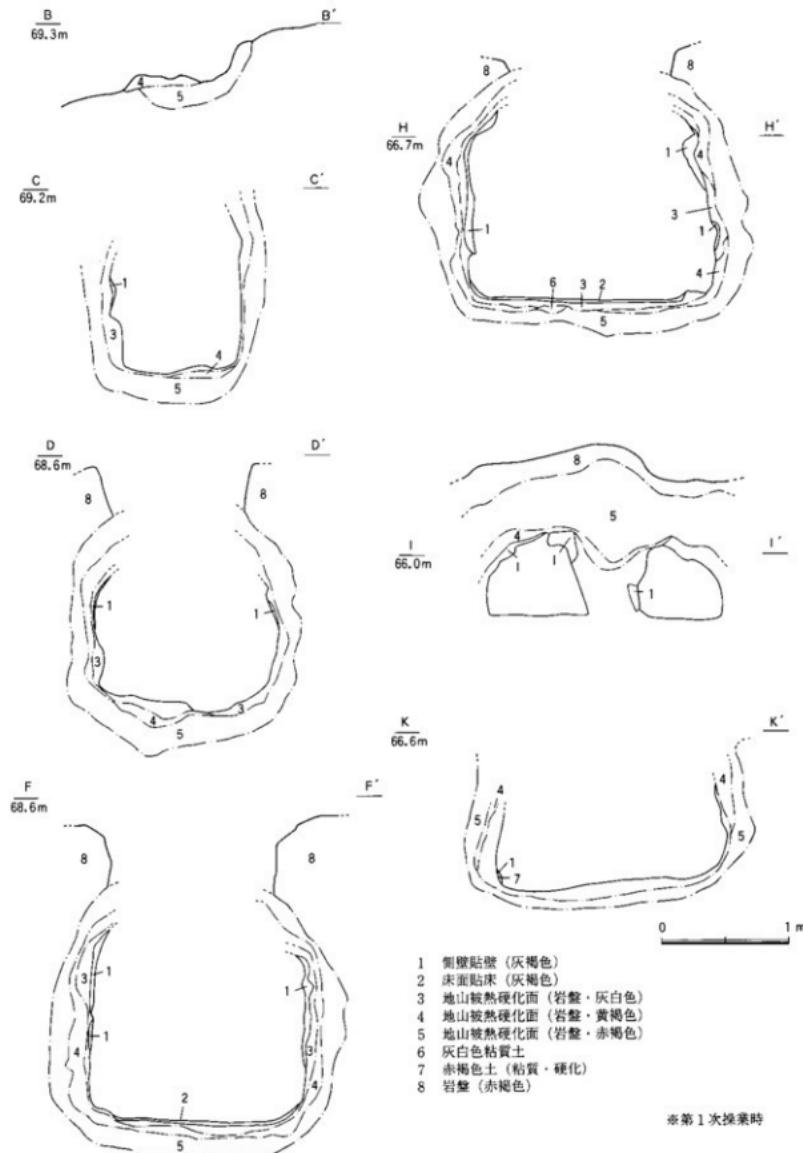
前部（第122図）

焚口の前方に大きく広がる平坦部。平面形は隅丸長方形を呈し、その向きは谷部の等高線に直交するようにして窯体の主軸よりやや北西方向にずれる。面積は14m²（36m²）で焚口付近の地山を削平し、その他を掘り抜き排土で埋め立てることによってつくられている。一部、北端では2号窯の前部と重複し、2号窯前部も削平している。平坦面の規模は長軸2.14m（SZA21によって一部切られているため推定）・短軸1.75mを測る。厚さは最大で55cm程度でかなり厚い。掘り抜き排土の堆積範囲は長軸4.8m・短軸2.8mに及ぶ。

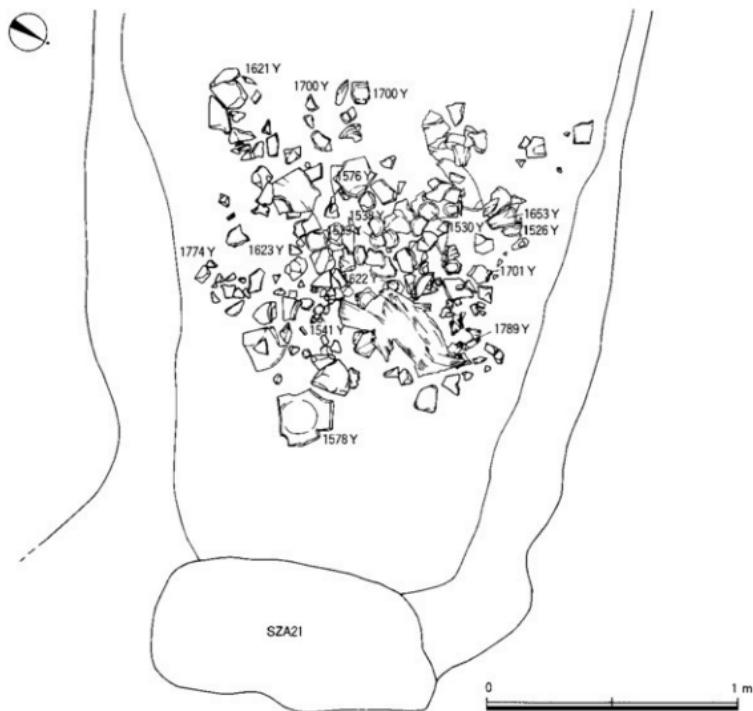
平坦面上の窯体左右両袖際ににおいてそれぞれ浅い窪みの土坑を確認した。焼土と窯体の壁片などが混在する埋土が認められる。両土坑がどのような意味をもつかは不明であるが、焼土の存在から平坦面上で何らかの行為が行われるものと推測される。平坦部の北西隅でも、浅く掘り込まれた不整椭円形の土坑SK01（3）を確認した。長軸0.71m・短軸0.51mを測る。東側の立ち上がりは斜面で流失し明瞭ではない。埋土は灰層に酷似する黒色土が堆積しているのが認められた。床面からは鉢（1757Y）が一括出土した。また、南北方向に伸びる溝2条、東西方向の窯体主軸ほぼ延長上に伸びる溝1条を検出した。南北方向の溝の西側をSD01（3）、東側をSD02（3）とし、残る主軸方向の溝をSD03（3）と呼称する。SD01（3）は前述した両土坑を繋ぐようにして平面形は半円形を呈し、SD03（3）に直交する。SD02（3）はSD01（3）と違い南北方向に直線的に伸び、SD



第119図 3号窓室側面・平面図



第120図 3号窯窓体断面図

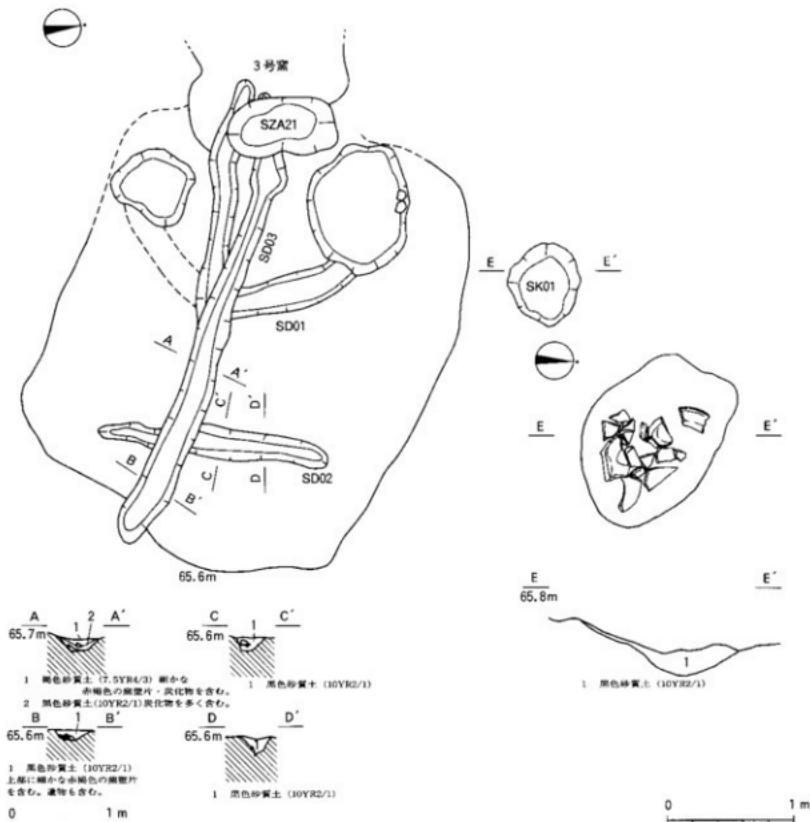


第121図 3号窯窯体内遺物出土状況

03(3)と交わる。SD03(3)はほぼ窯体主軸方向に伸び、平坦面を横断し斜面へと連なる。SD01(3)より西側では2条に分岐している。この点は窯体の改修に伴って溝を一部掘り直したものと考えられる。なお、SD03(3)と焚口の連結部についてはSZA21によって削平され不明であるが、おそらくSD03(3)は3号窯の排水溝とみて間違いない。SD01(3)・02(3)についてはその方向がまったくSD03(3)と異なるため、同じようにして排水溝の機能を有するか疑問も残る。しかし、SD03(3)と交わることを重視して、SD01(3)は窯体の両脇を流れる水を集水し、SD02(3)は平坦面の水を集めSD03(3)へ流す役割を考えておきたい。いずれの溝の埋土もSK01と同様、灰層と類似する黒色土が堆積していた。

附帯施設（第116・123図）

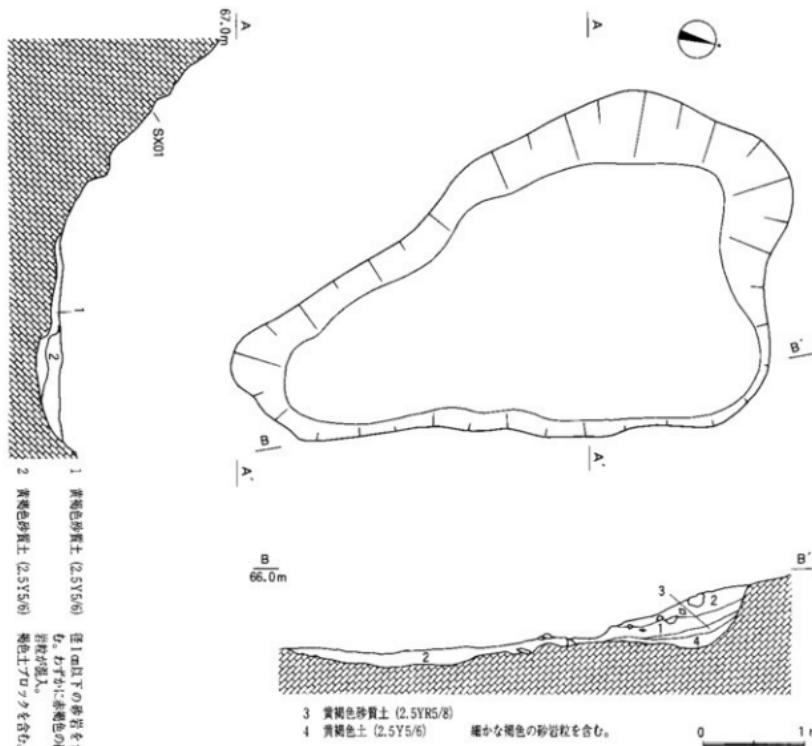
3号窯の左側で南北方向に伸びる長軸5.19m・短軸1.91m程度の平坦面を確認した(SX01(3))。床面積は8m²である。斜面を一部削平して平坦な面として活用したものと思われる。この平坦面の北側では大量の遺物が出土し、計測した残存率の合計は24.16個体に達し、3号窯出土遺物中の0.5%を占める。なかには特殊な製品も認められ、刻銘陶器・火舎蓋・陶硯・器台などが出土した。床面



第122図 3号窯前庭部平面図・断面図

には被熱部位・ピット・溝などの遺構はまったく伴わず、一定期間の定住的機能は考えられない。現状では出土した遺物が窯内遺物と接合したことから窯出し後の製品の仮置き場ないしは不良品を投棄した場所と想定できる。本遺構出土の製品は3号窯の最終操業に伴う遺物に伴うものと考えられる。埋土は灰層に類似する土層の堆積ではなく、地山の砂岩岩盤の風化土が堆積している。

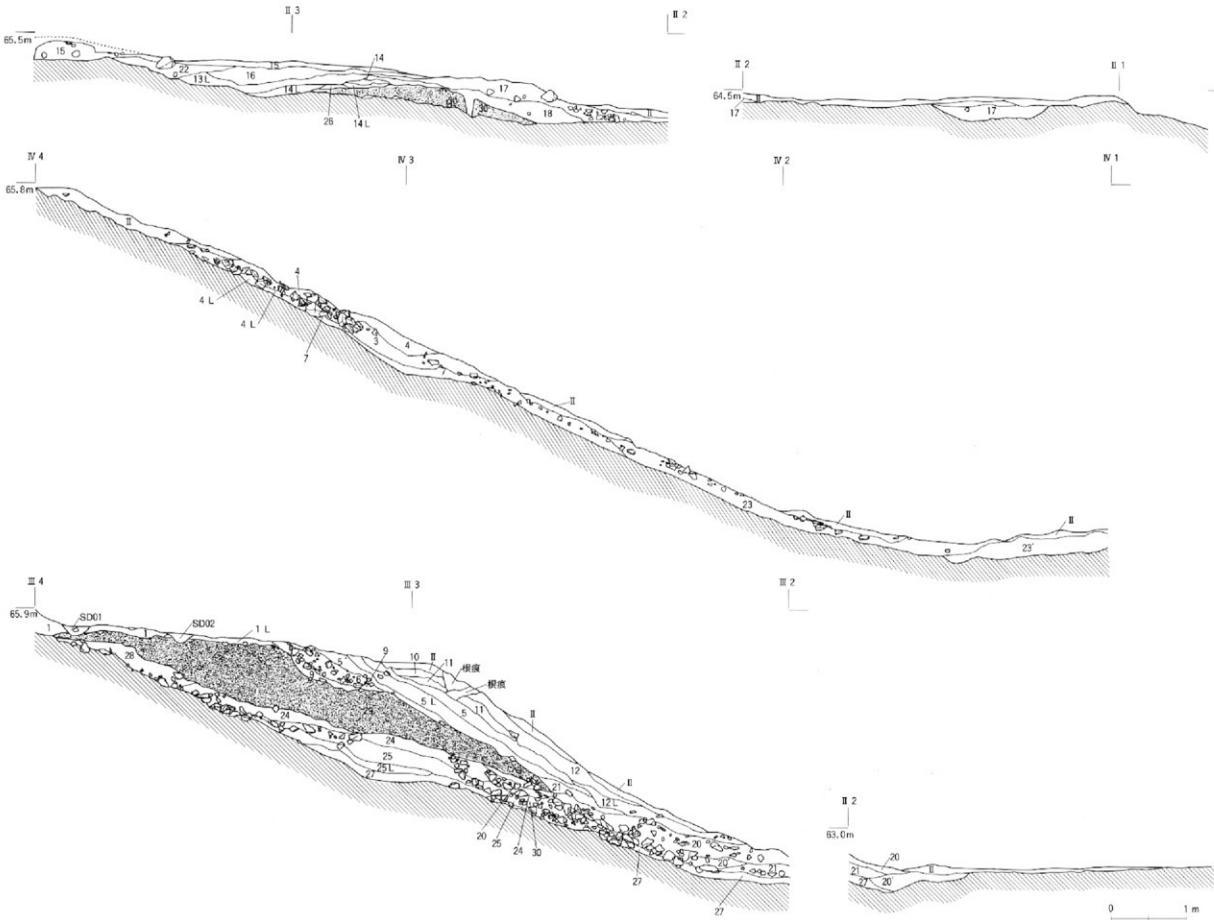
3号窯の右側には直径約3mの浅い土坑SK02(3)が位置する。SK02は調査当初、土坑との認識ではなく単純に2号窯灰原の一部であると理解していた。しかし、2号窯の前庭部を一部削平していること及び埋土出土遺物が調査後の整理過程で3号窯に属する遺物であることが判明したことから3号窯に伴う遺構であると認識を変更したものである。SK02(3)に相当する土層は13・13L・16層で、これらの土層の分布からおよその平面形を推定した(第116図・網掛け範囲)。



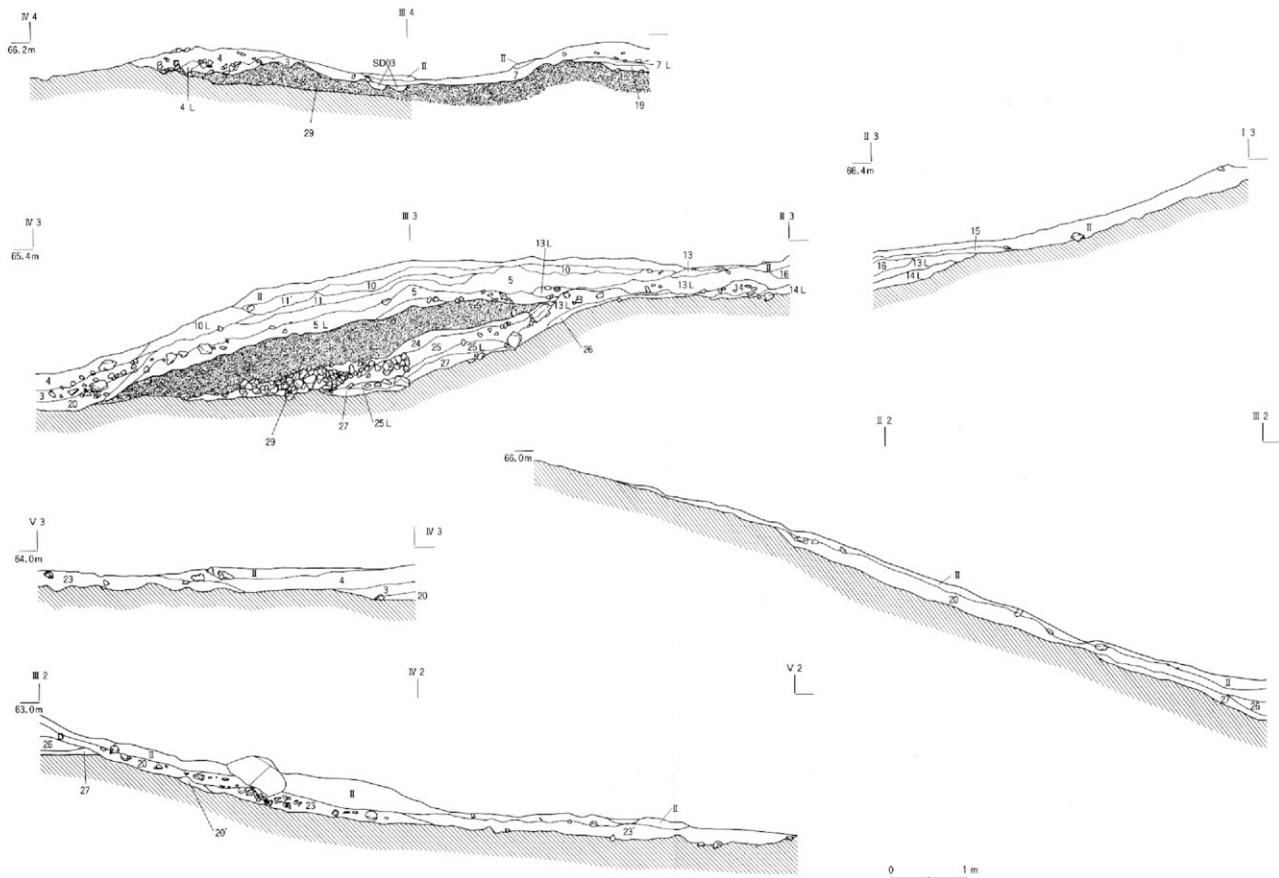
第123図 SX01(3)平面図・断面図

灰原（第124図・125図・第66表）

3号窯の灰原は3号窯前部から南東方向に大きく広がり、その中心はIII 2・III 3グリッドにある。遺物の出土量もIII 2・III 3グリッドが最も多い（第80～83表）。一部の灰層は斜面上方の北側にも広がり2号窯の灰層と重複する。3号窯の灰層は2号窯の燃焼室内の埋土上部において認められる（第117図・H-H'断面2～4層が相当）。3号窯採業時には2号窯が完全には埋没していないために、3号窯の灰層が2号窯の燃焼室内へ混入したものと考えられる。また、2号窯燃焼室内からの3号窯の遺物の出土量は比較的多く、遺物の遺存状況が良好な資料が目立つ。埋没していない2号窯燃焼室を廃棄用の土坑として利用した可能性もあるが、断定は難しい。灰原の厚さは最大で60cm強程度で、コンテナ箱100箱程度の遺物が出土した。3号窯の灰層は第124・125図にみられる通りで、掘り抜き排土下に位置する2号窯灰層以外の灰層はすべて3号窯灰層とみてよい状況にある。しかし、わずかに2号窯の遺物が混在する灰層もあり、単純に3号窯資料のみを出土する灰層は少ない。なかでも、遺物を多く出土した20・23層は斜面の最も下位に位置する灰層のため



第124図 2・3号室灰岩断面図(1)



第125図 2・3号窯底断面図(2)

か両窯の製品が混在する。また、大型品・焼台も20・23層に多く認められる。2号窯の灰原は中心部が遺物の出土量（第63表）からみて、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳグリッドに中心があるものと考えられる。厚さは最大で50cm程度である。考察で述べるが3号窯の遺物の特徴には2時期が認められ、古相が3～5層に、新相が12層が相当する。この様相は灰原における上層・下層にあたるものではなく、灰層が広がる場所が異なる。前者の灰層は窯体の南側に、そして後者の灰層は窯体下方、東側に広がる灰層である。一応、5層と12層の間には上下関係が認められる。操業当初は窯体南側に廃棄するものの、その後は窯体東側に廃棄する傾向が看取される。なお、2号窯・3号窯灰原の関係は先に述べた通りだが、両者の灰層の間には間層が認められないことから、両窯の操業にはそれほど大きな時間差はなかったものと推測される。

遺物（第255～291図）

3号窯の遺物は主に灰層3・12・12L層から多く出土しているが、大型品は灰層20・23層からの出土が目立つ（第84～91表）。器種には碗皿類の他に、壺・瓶・鉢・仏具など多様な器種が認められる。前述したように2・3号窯の灰層の重複部分が認められるが、3号窯掘り抜き排土の上下に位置する灰層から出土した遺物を基準に分類を行い、その後、両窯の遺物が混在する灰層出土遺物の分類を行った。このため、両窯の遺物はかなり明確に区別できたものと判断している。個体数については口縁部の残存率によって算出した。

碗類（第255～257図）

高台を有する碗類と無高台の碗類の2つが認められる。それぞれをI類・II類として細分した。

I類（1437Y～1454Y・第67表）

高台を有する碗類。体部は回転ナデによって丁寧に整形され、内面も平滑に仕上げられている。内底面中央の突起は未調整のままで、外底面には回転糸切り痕が残る。体部・口縁部の形状からA・Bの2種に細分できる。

I A類（1437Y～1448Y）は腰部から体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや外反するものを分類した。体部の形状においては浅いもの（1437Y～1442Y）と深いもの（1443Y～1448Y）の二形態が認められ、それぞれの底径は6.5cm前後と6.0cm弱の値を示し微妙に差異が存する。また、体部が深いものは腰部に弱い張りを有するものが目立つ。口縁端部は基本的には尖り気味におさめるが、わずかに面をもつもの（1437Y・1438Y）も認められ、同一個体でも部分によつては口縁端部の形状が異なるものも認められる。高台は低く外方に伸び、断面形は三角形状を呈する。高台高は3mm～4mm程度と低いが、底部を円柱状に突出気味にすることによって、外見上の高台の高さをつくり出していると思われる。一部、1441Y・1444Y・1448Yのように端部に平坦面をもつ資料も認められるが、これは焼成時の荷重によって潰れたものである。法量は口径15.2cm・器高5.0cm前後に分布の中心がある。

I B類（1449Y～1454Y）は口縁部の形状が口縁端部直下の顯著なナデの結果、強く外反するものを分類した。その他の形状・調整はほぼI A類と共通するが、体部の形状はI A類とわずかに異なりやや浅くなる傾向が認められ、高台がやや高めで鋭い断面三角形を呈する個体も認められる（1451Y）。法量は15.0cm・器高5.2cm前後。

第66表 2・3号窯灰原土層観察表

	土層名	色調	観察事項	性格	備考
1	黒褐色土	10YR3/1	砂質土。径0.5cmの砂礫・窯壁片・炭を含む。	3号窯灰層	
1L	灰黄褐色土	10YR4/2	砂質土。径0.2cmの砂礫を多く含む。炭少量混入。	3号窯灰層	
2	黒色土	10YR1.7/1	砂質土。径0.5cmの砂礫を含む。	3号窯灰層	
3	黒色土	10YR1.7/1	砂質土。大きな窯壁片を含む。遺物を多く含み、炭少量混入。	3号窯灰層	
4	黒褐色土	10YR2/2	砂質土。焼台・径0.3cmの砂礫を含む。炭混入。	3号窯灰層	
4L	暗褐色土	10YR3/3	砂質土。炭を多く含む。窯壁片少量。	3号窯灰層	
5	暗褐色土	10YR3/3	砂質土。窯壁片・炭・砂礫少量混入。	3号窯灰層	
5'	黑褐色土	10YR2/2	砂質土。窯壁片・炭少量混入。	3号窯灰層	
5L	黑褐色土	10YR2/3	窯壁片・炭多量に含む。	3号窯灰層	掘り抜き拂土直上の灰層
6	赤褐色土	2.5YR4/8	径3~10cmの砂岩を多く含む。焼土粒多し。無遺物層。	3号窯	
7	灰黄褐色土	10YR4/2	砂質土。細かな砂礫・窯壁片を含む。炭あり。	3号窯灰層	
7L	黑褐色土	10YR3/2	砂質土。細かな砂礫・窯壁片少量含む。	3号窯灰層	
8	黃褐色土	10YR4/3	砂質土。径1cmの窯壁片を含む。	3号窯灰層	
9	黒色土	10YR1.7/1	單一な色調。砂礫・炭をごく少量含む。しまりなし。	3号窯灰層	
10	黑褐色土	2.5YR3/2	窯壁片を多く含み、径2cm大の砂岩が点在。	3号窯灰層	
10L	黄褐色土	10YR4/3	砂質土。窯壁片・砂礫・炭をわずかに含む。	3号窯灰層	
11	黄褐色土	10YR5/6	砂質土。径0.3cmの砂礫をわずかに含む。炭少量。	3号窯灰層	
11'	黄褐色土	10YR5/6	砂質土。径2~5cmの砂岩を多く含む。	3号窯灰層	レンズ状の土層で遺物少
12	黑褐色土	10YR3/1	窯壁片・径1cm大の砂礫を多く含む。焼土粒混入。	3号窯灰層	
12L	黑褐色土	10YR2/1	窯壁片・径1cm大の砂礫を多く含む。焼土粒混入。	3号窯灰層	
13	黑褐色土	10YR3/1	砂質土。径2~3cmの砂岩を少量含む。焼土粒あり。	両窯灰層	
13L	黑色土	10YR1.7/1	径1~5cmの窯壁片を少量含む。炭少量。焼土粒を多く含む。	両窯灰層	20層にちかい。
13L'	黑色土	10YR1.7/1	ややシルト質。細かな砂礫を含む。	2号窯灰層	
14	暗褐色土	5YR3/2	径5~15cm大の窯壁片及び焼台を多量に含む。	2号窯灰層	
14L	黑褐色土	2.5Y3/1	砂質土。炭・焼土粒を含む。	2号窯灰層	
15	暗褐色土	10YR3/3	砂質土。砂礫は含まない。	両窯灰層	
16	黑褐色土	10YR3/2	砂礫含まず、窯壁片を含む。	両窯灰層	
17	暗灰黄色土	2.5Y5/3	砂質土。砂礫多し。炭・焼土を含む。	両窯灰層	
18	灰色土	5Y4/1	砂質土。炭・焼土粒を含む。	2号窯灰層	
19	黑色土	10YR2/2	砂質土。径0.3cmの窯壁片を含む。	3号窯灰層	
20	黑色土	10YR1.7/1	焼台・窯壁片を含む。遺物多し。	両窯灰層	
20'	明褐色土	10YR3/4	シルト質。砂礫をくわざかに含む。	両窯灰層	
21	黄褐色土	10YR4/3	砂質土。径3~5cmの砂岩・炭・窯壁片を含む。	両窯灰層	
22	褐色土	2.5Y4/3	砂質土。細かな炭・焼土粒を含む。	両窯灰層	15層類似。
23	褐色土	10YR4/6	ややシルト質。II層との境界に焼台・砂礫・遺物が混入。	両窯灰層	
23'	暗褐色土	10YR3/4	砂質土。遺物・焼台を含まない。	両窯灰層	
24	灰色土	5Y4/1	砂質土。砂礫少量。炭・焼土粒あり。遺物あり。	2号窯灰層	
25	褐色土	2.5Y4/3	砂質土。炭・焼土粒あり。焼台多し。	2号窯灰層	
25L	暗褐色土	2.5Y3/3	シルト質。炭・焼土粒を含む。	2号窯灰層	
25'	暗灰黄色土	2.5Y5/2	砂質土。径2~5cmの砂礫を含む。炭・焼土粒あり。	2号窯灰層	
26	褐色土	2.5Y4/6	砂質土。礫少量。	2号窯灰層	
27	黑褐色土	2.5Y3/2	ややシルト質。炭・焼土粒を含む。	2号窯灰層	
28	灰褐色土	7.5Y4/1	ややシルト質。径1cmの砂礫を含む。	2号窯灰層	
29	明黄褐色土	10YR6/6	砂質土。径10cm程度の礫を含むが、遺物は含まない。	3号窯掘り抜き拂土	
30	明黄褐色土	10YR6/6	砂質土。径10cm程度の礫を含み、やや粘性がある。	2号窯掘り抜き拂土	

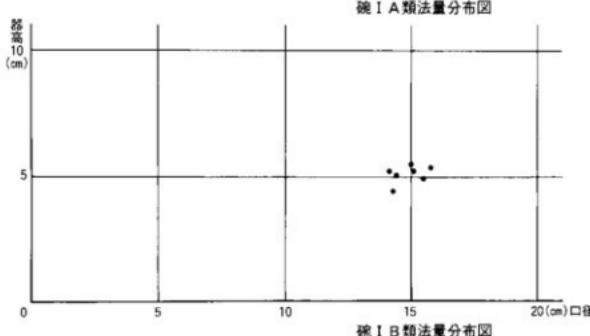
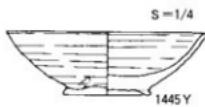
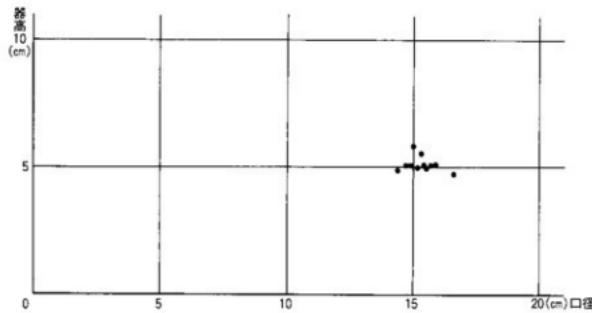
碗II類（1455Y～1495Y・第68表）

無高台の碗類。調整はI類と共通するが、体部外面でのロクロ目が目立つ。口縁部の形状によりA～Cの3分類が可能である。

II A類（1464Y～1484Y）は口縁部・体部の形状がIA類とほぼ共通し、その高台が無いものを分類した。しかし、個々にはかなり形状の違いが認められ、一様ではない。体部はわずかに内湾するものを原則とするが、口縁端部・体部の開きにはそれぞれに相違が認められる。口縁端部が外反気味で体部が開き、浅手もの（1480Y～1484Y）と口縁端部が内湾し体部がやや深手のもの（1478Y・1479Y）との2形態が看取される。底部の形状にもその厚さ及び体部への立ち上がりに違いがあり、やや薄手で底部から体部へそのまま立ち上がるものが比較的前者に多いようで、その大半が半焼けの製品で占められる。1476Yは底部が厚く突出気味である。法量は口径14.5cm・器高4.5cm前後に分布するが、ややばらつきが目立つ。

II B類（1485Y～1495Y）は口縁部が強く外反する碗を分類した。口縁部・体部の形状はIB類に酷似する。口縁端部を尖り気味におさめ、底部が厚手で突出気味となることを特徴とする。口縁端部の外反の具合は個々によって様々であり一定していない。1486Y・1490Yは直立気味に立ち上がる。1485Yは体部が直線的で本類中では例外的資料である。法量は口径14.5cm・器高4.8

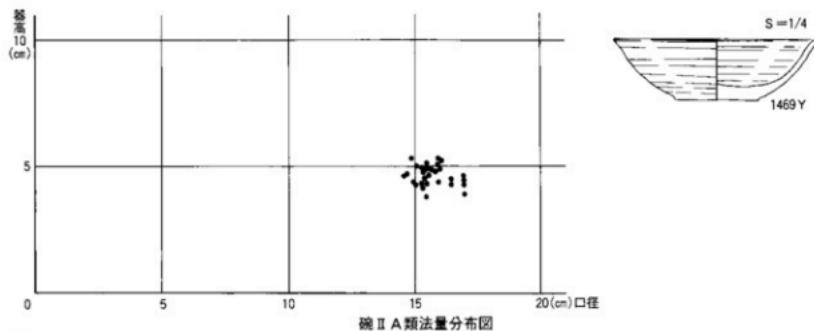
第67表 碗I類法量分布表



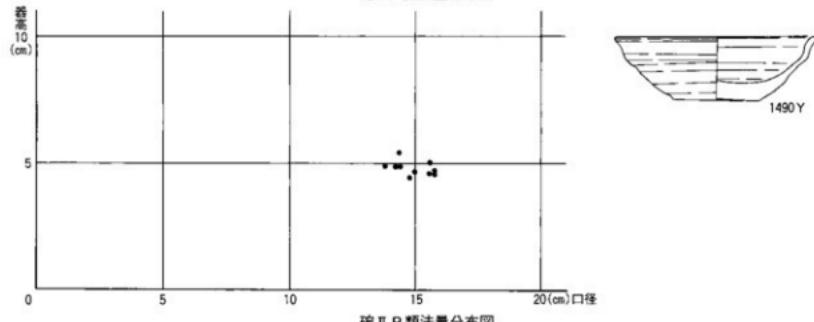
cm前後であるが、口径が15.0cmを越えるやや大きな法量を示す資料も存する。

I C類（1455Y～1463Y）は口縁端部が断面三角形となり玉縁状を呈するもの。その幅は4mm前後だが個体及びその部位によってその幅は様々であり、端部の形状は個体差が著しい。端部の形状には鋭く尖るもの（1458Y）・やや上方につまみ上げられるもの（1456Y・1461Y）・丸みを帯びるもの（1455Y・1462Y）が認められる。体部は強く内湾するが資料が顕著である。底部は

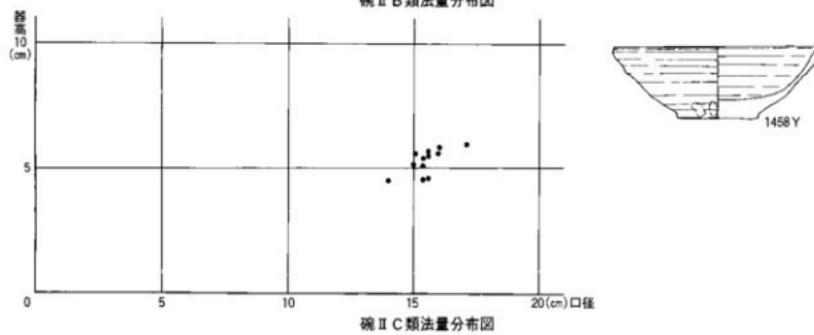
第68表 碗II類法量分布表



碗II A類法量分布図



碗II B類法量分布図



碗II C類法量分布図

厚く切り離され、底部が円柱状に突出する資料が多い。1457Y・1461Yは内面に窯くそが付着し焼成時に最上段で焼成されたようである。法量は口径15.3cm・器高5.5cmを中心があり、碗類で最も大きな法量値を示す。

小碗類（第262図・1616Y～1620Y・第69表）

出土数は少数だが、有高台のものをI類(1616Y～1618Y)、無高台のものをII類(1619Y・1620Y)とした。

I類は口径9.5cm前後・底径4.5cm前後・器高3.5cm前後の法量値を示す。体部の形状は碗I B類に類似し口縁部が強く外反する。高台は鋭い三角形を呈し、他の資料には認められない形状を有し、全体に調整が精緻で薄手で色調もやや灰色が強く他の資料と比べて異質である。

II類は小皿との判別が困難で、図示した2点しか確認していない。1620Yは口径8.5cm・底径3.3cm・器高3.3cmの資料で体部は碗I B類にちかく、やや口縁部が外反する。1619Yは口径7.4cm・底径3.8cm・器高2.5cm、体部でやや折れる形状を示している。いずれも底部が突出する。

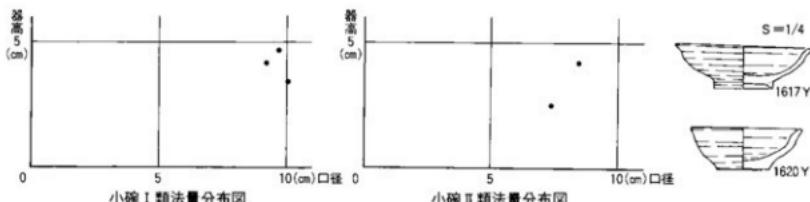
北部系碗類（第260図・1585Y～1590Y）

少数ながら北部系の碗が灰原及び3号窯内から出土した。いずれも本窯で焼成したものではなく、工人によって持ち込まれた資料と判断される。内底面が摩耗し、使用した痕跡のある資料は1588Y・1590Yである。6点を図示した。1589Y・1590Yは腰部に弱い張りを有し、口縁部が強く外反する。内底面には静止指ナデ痕は認められない。1585Y・1587Yは体部は緩く内湾して、口縁端部はやや尖り気味におさめる。内底面には静止指ナデ痕が認められる。1586Y・1588Yは直線的に外方に伸びる体部を有する資料では内底面には静止指ナデ痕が残存する。時期は幅があり、1589Y・1590Yは丸石3号～浅間窯下1号窯式期、1586Y・1588Yは寒洞1号～白土原1号窯式期、1587Y・1585Yは白土原1号窯式期に比定される。1590Yは3号窯内から出土し、第1次操業面に伴う資料である。

南部系碗類（第260図・1591Y～1593Y）

北部系碗と同様、工人による持ち込み品と思われる南部系碗を図示した。いずれも内底面は摩耗している。1591Y・1593Yは胎土が粗く、長石の吹き出しが観察される。高台端部には粉粙痕が認められ、体部は腰部でわずかに張り気味となり緩やかに内湾する。口縁端部はやや肥厚気味である。1592Yはやや1591Y・1593Yと胎土が異なり、濃い灰色を呈す。時期は第4型式にちかいと考えられる。

第69表 小碗類法量分布表



片口鉢類（第263図・1630Y）

後述する片口鉢II類に類似する資料で1点のみしか確認できなかった。回転糸切り痕を残す平底の底部から体部は強く内湾し口縁部はやや内傾する。口縁端部は尖り気味におさめ、注口部は軽く指でつまんで引き出している。口径10.7cm・底径5.3cm・器高5.8cm。

小皿類（第257・258図・第70表）

体部・底部の形状からI・II・III類に分類が可能である。調整は碗類と共に、体部は回転ナデで整形され、外底面には回転糸切り痕を残す。内底面中央の突起は未調整で押圧は認められない。

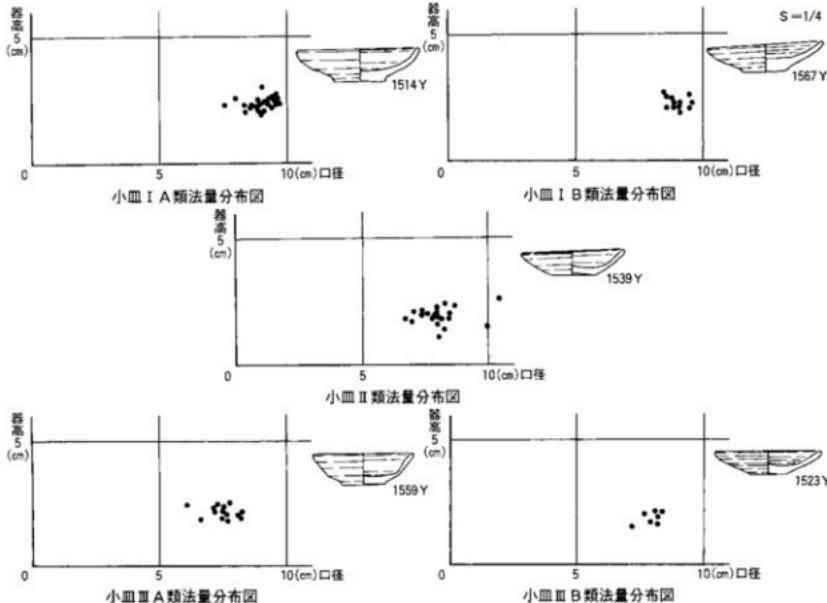
小皿I類（1496Y～1519Y・1563Y～1574Y）

糸切りの際に底部が厚めに切り離されてやや突出するものを分類した。体部の形状により以下の2分類が可能である。

I A類（1496Y～1519Y）は体部が内湾して立ち上がり、中程で弱く屈曲する資料が多い。口縁端部はやや肥厚気味に丸くおさめる。色調が赤褐色を呈するものが目立つ。口径8.5cm～9.5cm前後・底径4.0cm・器高2.0cm～2.5cm前後で法量値は小皿類のなかでは最大の法量値を示す。

I B類（1563Y～1574Y）は底部の形状はI A類に近似するが、体部が直線的に伸び浅い形状を示すも、器壁もI A類に比してやや薄手である。

第70表 小皿類法量分布表



小皿Ⅱ類（1527Y～1546Y）

薄手に作られた小皿類で底部はあまり突出しない。体部の形状はわずかに内湾する資料が多く認められるが、個体差が著しい。図示した資料の多くは窯内燃焼室において出土した資料である。最終操業に伴う製品である可能性が高い。口径7.5cm～8.0cm前後・底径3.5cm・器高2.0cm前後。

小皿Ⅲ類（1520Y～1526Y・1547Y～1562Y）

薄手の小皿で底部がやや突出するものを分類した。

I A類（1547Y～1562Y）は体部の形状はI A類にちかく、内湾気味で中程で弱く折れる資料が目立つ。口縁部はやや肥厚され端部は丸くおさめられる。口径7.5cm・底径2.6cm～3.4cm・器高2.0cm前後。小皿類のなかで最も生産量が多いと推定される。

I B類（1520Y～1526Y）は体部が浅く直線的に伸びるもの。個体差が著しいため、I A類と見分けのつかないものも存在する。

鉢皿類（第262図・1621Y～1624Y）

小さな注口を有する無軸の鉢皿。6個体分程度を確認した。鉢目は認められないが、鉢皿として分類した。体部の形状は同じでも有高台のものと無高台（1624Y）のものが存する。高台は偏平な台形を呈し、削り高台（1621Y）と付高台（1622Y）の2種類が認められる。体部は腰部で強く内湾し、口縁端部は顕著な面取りが認められる。1624Yはやや大型で、その他は口径11.0cm前後の小型品である。小型品の多くは3号窯埋土中及びSX01から出土した。

片口鉢類（第259～265図・第71表）

注口を有する鉢。高台の有無により以下のI・II類に分類した。

I類（1575Y～1584Y・1594Y～1599Y・1611Y～1615Y・1625Y～1629Y・1636Y～1640Y・1644Y～1649Y）

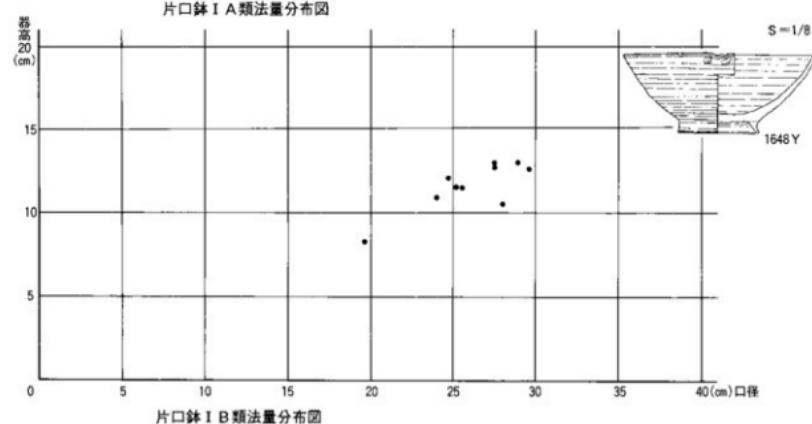
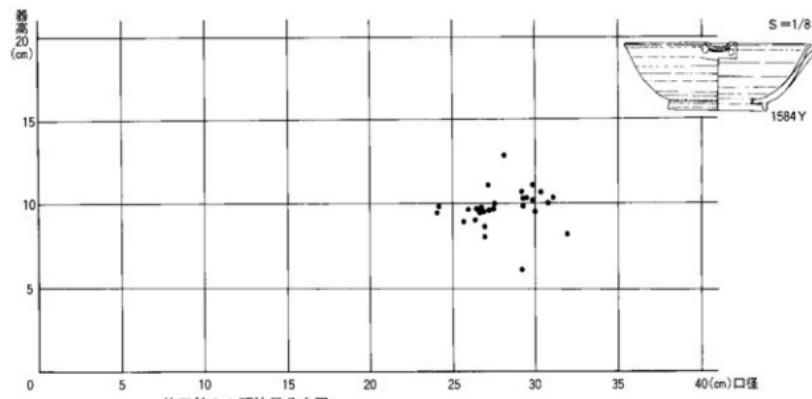
高台を有する大型の片口鉢。口縁部・体部・高台の形状からA・B・C類に分類でき、本竪の主要な製品である（第80～91表）。調整は粘土紐積み上げ後回転ナデを施し、内外面とも精緻に整形されている。体部下半では回転ヘラ削りが認められる。底部外面には下駆痕が顕著に残る（図版128）。

I A類（1575Y～1584Y・1594Y～1599Y・1611Y～1615Y・1625Y～1629Y）

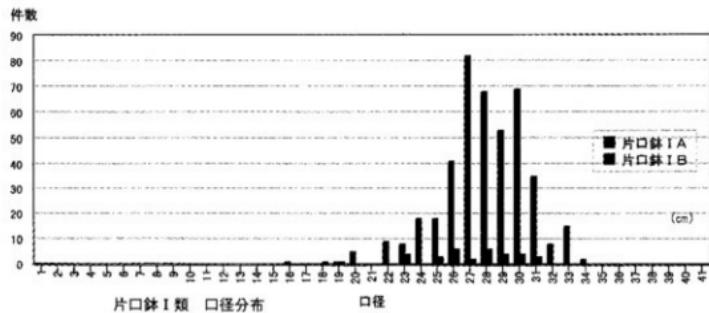
腰部から体部が浅く内湾しながら大きく開き、口縁端部がわずかに外反する。端部の形状は一定ではなく個体差が著しい。大半がわずかに外反させて丸くおさめる（1577Y・1580Y～1582Y）が、なかには端部外面をやや肥厚気味させるもの（1575Y・1576Y・1579Y・1584Y・1625Y）やわずかに面を有するもの（1597Y・1627Y）も認められる。注口部は2本の指で内側から外側に引き出して作出し、外面には指圧痕が顕著に残る。高台は一部重ね焼きにより潰れているが、外面は比較的短くやや直立するか外傾する。内面も同様の傾向を示し、端部は丸くおさめ面取りは認められない。

口径は27.0cm～30.0cm、高台径は13.0cm～14.0cmに集中する。高台径の分布状況は体部内面に残された重焼の痕跡と一致する。法量分布においては口径27.0cm前後・器高10.0cm弱・口径30.0cm前後・器高10.0cm強に分化する傾向が看取でき、その傾向は口径のみの分布図にもわずかに反映されていることから、法量が大小に分化する可能性が強い。

第71表 片口鉢 I類法量分布表



片口鉢 I A類法量分布図



出土区はⅢ2・Ⅲ3・Ⅱ1・Ⅱ2で大半を占める（第80～83表）。3号窯内埋土より出土したものの及びその破片が接合したものとして1577Y～1581Yを図示した。そのうち、1578Y・1579Y・1581Yは焼け歪み及び外面への自然釉・蒸くそ付着が顕著である。また、1582Y～1584YはSX01（3）から出土している。

I B類（1636Y～1639Y・1644Y～1649Y）

体部は腰部から強く内湾して深手となる形状を示す。口縁部は口縁端部直下の強いナデ調整の結果押圧されやや外反する。その形状の特徴はほぼ碗I B・II B類と共通する。体部の開き・口縁部の調整によって片口鉢I A類とは区別される。口縁端部はやや外傾気味に丸くおさめ、高台は長く伸び、強く内外面ともに外反する。端部は尖り気味である。注口部はI A類に比して小さく、1本の指で内面から外面へ押し出している。外面に残る指圧痕は痕跡的である。

調整はI A類と大差ないが、内面は精緻なもの外面では凹凸が目立つ。体部下半には回転ヘラケズリも認められるが、一部にナデのみの個体も認められ（1637Y）、器壁も厚く全体的につくりが粗く感じられる。また、赤褐色の色調を呈する個体が比較的多い。

1646Yは3号窯の第一次操業面に伴う破片と接合した良好な資料である。法量分布は集中する傾向があまり認められないが、1636Y・1644Yなどの小さな法量の資料も存し、ある程度法量が分化する可能性がある。

I C類（1640Y）

図示した1点のみの出土である。形状はI A類と類似するが、口縁端部及び高台端部に顕著な平坦面が認められるため別類とした。注口部の形状もI A類とほぼ同じで指圧痕が強く残る。口径29.6cm・底径14.6cm・器高11.5cmを測る。体部下半には丁寧な回転ヘラ削りが施され、内底面は平滑である。体部外面上半では凹凸が目立ち、焼成は不良である。

本資料はSX01（3）と3号窯内埋土中出土の破片が接合したものであるとともに半焼けであることから3号窯最終操業時の製品として推察できる。

II類（1641Y）

出土量が3個体分程度しか確認できなかった器種である。高台はあるものの前述のI類とは器形が全く異なる。図化資料は1点のみである。口径18.8cm・高台径11.3cm・器高10.4cmを測る。体部は強く内湾しさらに口縁部で屈曲して内傾する。端部は微妙な平坦面を有し、注口部は一本の指で内側から外側へわずかに引き出される。高台の断面は低く鋭い三角形を呈し、碗類に類似する。

器面には凹凸がなく、平滑に仕上げられている。なお外底面の下駄痕の痕跡は欠損していて不明であった。

III類（1642Y・1643Y）

注口部を有す片口鉢のなかで無高台のもの。口縁部が内傾し端部が直立する独特の器形をもつ。2点を図示したが全体でも2個体分の出土にしかすぎない少数器種である。1643Yは口径15.1cm・底径12.2cm・器高12.4cm、1642Yは口径17.8cm・底径12.1cm・器高9.8cmを測る。注口部は小さくI B類に近似する。外底面は下駄痕を残し、底部外縁には回転ヘラケズリが認められる。その他は輪積み後の回転ナデで整形される。

1642Yには内底面に別の個体片の釉着が認められる。

壺類（第263・266～270図）

口縁部が短くくの字に外反し、その形状がいわゆる三筋壺の形状に類似するものが大半を占める。大きさからⅠ～Ⅳ類の4つに分類した。

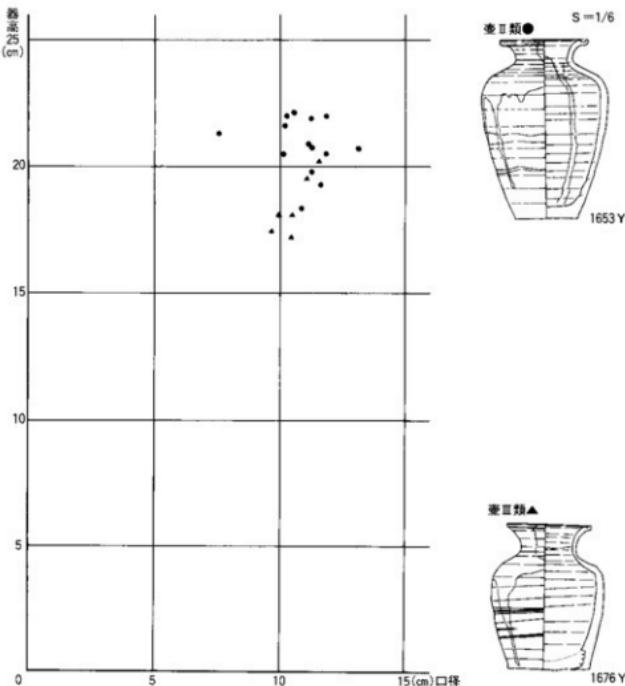
Ⅰ類（1650Y～1652Y）

口径30cmを越える大型の壺。図示したのは3点のみ。焼け歪みが顕著な製品が多く、図化できない資料が大半である。口頭部が強く外反し、端部はつまみ上げられて平坦面を有す。胴部は肩部が強く張り、口径を上回る。内面には輪積み痕が顕著に残る。体部上半・中央・下半でとくに、接合痕が顕著で、その付近では指頭圧痕が顕著である。整形・形状とも後述するⅡ類と類似する点が多く、Ⅱ類の大型品とも考えられるが、法量は一定ではない。

Ⅱ類（1653Y～1672Y・第72表）

短頭の広口壺で口縁部が短く強く外反することを特徴とする。端部は上方及び外方につまみ上げられる。端部内側には端部をつまみ上げる際に生じた凹面が認められる。1653Y・1656Yは端

第72表 壺Ⅱ・Ⅲ類法量分布表



部内側が顯著にくぼみ沈線状を呈する。1664Y・1667Y・1668Yは端部内側の凹面がそれほど強調されず端部の上方へのつまみ上げが目立つ。大半は口縁部がくの字状に強く外反し、体部最大径が体部中位よりやや上位に位置して肩部が張る器形を呈する。肩部から底部にかけては弱く内湾する。一部に頸部が直立気味のものが認められる。1658Y・1664Y～1666Yは口縁部の器壁が薄く、肩部の張りもやや弱い。1663Y・1667Yは最大径の位置が体部中央より下にあり、肩部の張りが弱くなる傾向が看取されるとともにつくりが粗雑で工人の熟練度が低いのではないかと思われる資料である。

調整は、口縁部・体部を分割整形後、接合する手法が観察される。底部外縁は回転ヘラ削り調整が認められる。

出土区は灰原の他に3号窯内埋土・SX01（3）埋土からの出土が顯著である（第80～83表）。1657Yは洗（1847Y）と釉着する資料で同時に焼成されていたことが判明する好資料である。

Ⅲ類（1673Y～1676Y・第72表）

Ⅱ類をやや小型化した壺で、器高が低く、薄手なことを特徴とする。Ⅱ類に比して口頸部の外反度が弱く長く伸びる傾向にある。口径・底径の値がⅡ類とそれほど変わらないため、やや寸胴な印象を受ける。外面には何本かの横線がみられるが、沈線かどうか判断としない。調整が丁寧で外面の凹凸があまり目立たない。出土量は少量で個体数は10点程度である。

Ⅳ類（1631Y・1632Y・1677Y・1678Y）

出土量が少なく、4点しか図示できなかった。1677Y・1678YはⅡ類に体部の形状が類似するが底径が大きく、器高が低い。1677Yは口縁部はくの字に外反するが端部内面の凹面は認められない。図示した資料も含めて半焼けの製品が目立つ。1631Y・1632Yは片口を有する小型壺の口縁部であるが、1632Yの形状が1677Y・1678Yに類似することから、本類に含めた。1631Yは鶴口壺とも考えられる。

瓶類（第271～275図）

瓶類を一括した。広口瓶をⅠ類、その他をⅡ～Ⅳ類に分類した。

Ⅰ類（1679Y～1688Y・第73表）

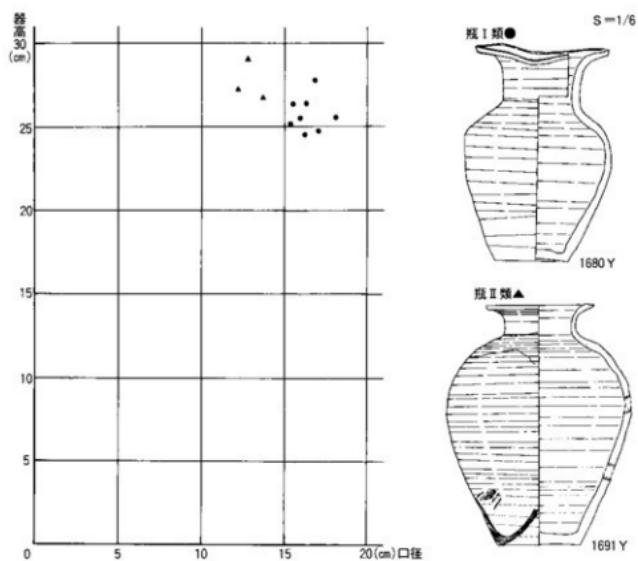
いわゆる広口瓶。頸部がやや外傾し、口縁部が大きく開く。口縁端部は大半が外傾し面取りが著しく、外方及び上方につまみあげられる。なかには1681Yのように端部内側が沈線状を呈すものもある。体部は肩部があまり強く張らない点では共通するが、最大径の位置が個体よって異なる。体部最大径が体部中位に位置し、口径を上回るもの（1682Y・1687Y・1688Y）と体部最大径が体部上半に位置し、口径とほぼ同じか下回るものとがある（1685Y・1686Y）。その結果、後者の器形の方が体部下半が直線的となり全体的にスマートな印象を受ける。

調整は回転ナデによって丁寧に整形され、底部外面については回転ヘラ削りが認められる。

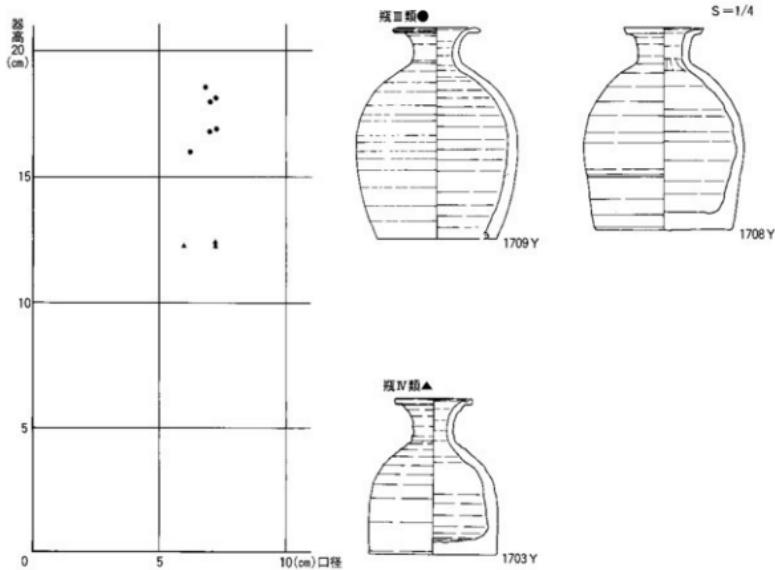
Ⅱ類（1689Y～1699Y・第73表）

頸部が短く外傾し、口縁部が強く外反する。Ⅰ類に比して小さい口径の口縁部を有す。端部の特徴はⅠ類と同一だが、体部の形状がまったく異なる。体部は口頸部に比してかなり大きく、肩部は強く張らない。最大径である体部最大径は体部中位よりやや上位にあり、体部下半は内湾気味で底部にいたる。全体的に器壁が薄く調整も丁寧な製品が顯著で、出土点数は少ない。他の類

第73表 瓶I・II類法量分布表



第74表 瓶III・IV類法量分布表



と色調が異なり灰褐色を呈するものが多い。1691Y・1692Yは1692Yの肩部に融着していた破片が1691Yと接合したことから窯内において隣接して焼成されていたことが判明した。

III類 (1708Y・1709Y・1711Y・1712Y・1714Y～1716Y・第74表)

基本的な形状・調整はI類に近似するが、器高17.0cm前後のやや小型の瓶類。体部の形状は中央がやや膨らむもの (1709Y・1712Y・1715Y) と体部径と底径とがさほど差がないもの (1708Y・1711Y・1714Y) の2種が認められる。底部外縁に施される回転ヘラ削りの及ぶ範囲によって前述の体部形状が影響を受けているものと思われる。頸部は短く直立し、口縁部は水平方向に伸びる。端部はつまみ上げによる平坦面を有するもの (1708Y・1711Y・1712Y・1714Y・1715Y) と丸くおさめるもの (1709Y・1716Y) が存する。

外底面には下駄痕が残り、輪積み整形後に回転を利用したナデ調整が施されている。口頸部の内面にはしづり痕が確認できる。自然釉が厚くかかる製品も認められ、ある程度意図していた可能性がある。

IV類 (1700Y～1707Y・1710Y・1713Y・第74表)

小型瓶。資料数は図示したものではほとんどである。外傾及び直立する口頸部と半球形の体部の形状を特徴とする。端部内面には凹面が認められ、端部は面取りされて直立する。1706Yは体部と口頸部の境に1本わずかな弦線が横走し、1700Y・1703Yには段差が認められる。この段差は頸部をわずかに削ることで作出している。いずれの資料にも下駄痕が観察され、小型製品であるが輪積みによる整形を基本にしている。底部外縁には2周程度の回転ヘラ削りが施され、独特の器形を保っている。

図示した資料のうち3号窯内埋土出土のもの (1700Y～1704Y・1707Y) が多く、3号窯の最終操業に関わる製品として注目される。

鉢類 (第276～284図)

平底の底部から体部が逆ハの字状に大きく伸び、バケツ形の器形を呈するものを鉢類とした。その大きさから以下のI～IV類に分類した。

I類 (第75表)

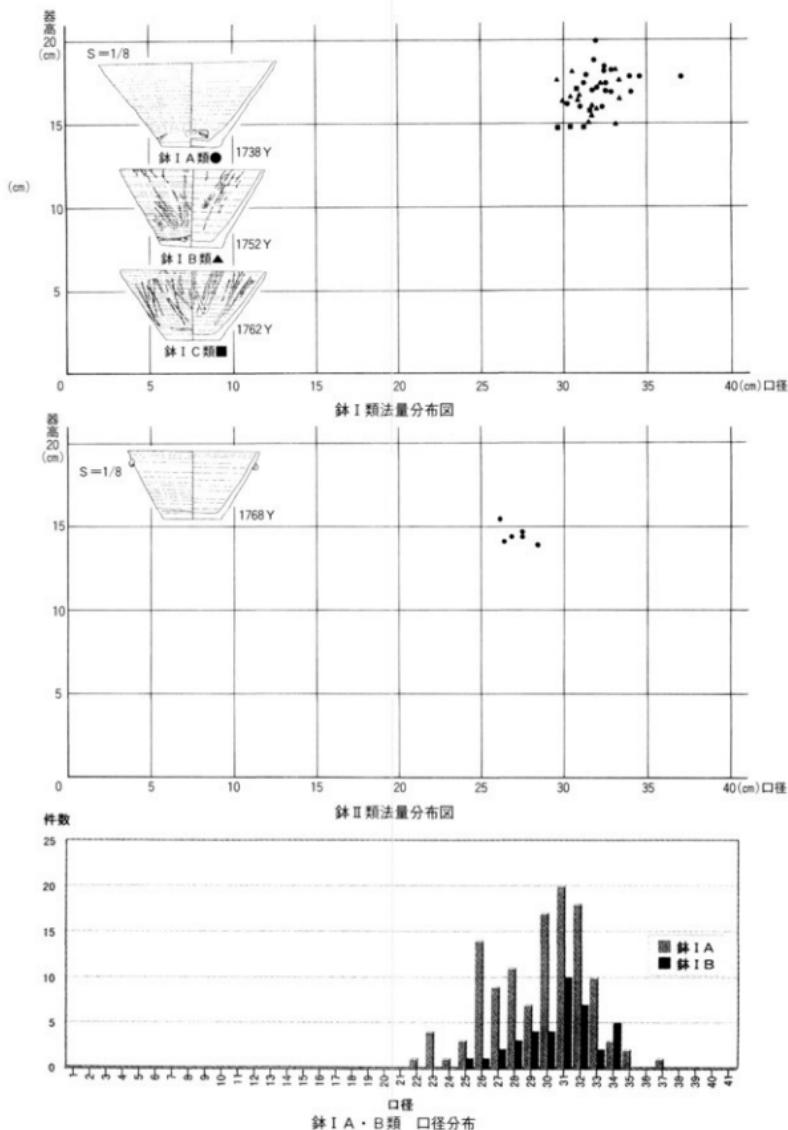
口径30.0cm・器高18.0cm程度の大型品をI類とした。口縁部・底部外縁の調整によってA～C類に分類した。

I A類 (1717Y～1738Y)

バケツ形の大型の鉢。体部が外傾しながら直線的に伸び、口縁端部を若干外反させて尖り気味におさめるのが特徴である。底部外縁には2周程度回転ヘラ削りが施され、その結果、後述するI B類より底径が小さくなっている。体部が直線的にみえるのもこの削り調整によるものである。なかには1725Yのように口縁端部はI B類に類似するが底部外縁には削り調整が認められるといった中間形態を有するものも存在する。底部外縁以外の調整はナデ調整で、輪積み痕の痕跡を消すように丁寧に施されている。底部外面には下駄痕がよく観察できる。また、作業台から離す際に残った繩の痕跡が器面に著しく残る (図版128)。

内外面には火ダスキが残るとともに内面には底部破片が付着しており、重焼きの痕跡が顕著

第75表 鉢 I・II類法量分布表



である。火ダスキーをよく観察するととくに内面において十字状に残存するものがあり、縦状の纖維をこのように使用したことが推測できる。1717Yは窯内遺物でおそらく第一次操業に伴う遺物と思われる。1719Y～1724YはSX01(3)から出土している。

I B類 (1741Y～1756Y・1759Y・1761Y・1763Y)

器形はIA類とはほぼ同じだが、口縁部の特徴及び底部外縁の削り調整の有無によってIA類とは区別される。口縁部は強いナデ調整によって端部外面が強い凹面を呈し、外反する。端部は丸くおさめられる。底部外縁に削り調整はほとんど認められず、ナデ調整による凹凸が顕著である。底部外縁の回転ヘラ削り調整が施されないため、底部からの体部の立ち上がりが内湾傾向を有し、体部そのものも微妙に内湾するものが多い。なかには削り調整が行われていても、口縁部の特徴はIB類に類似するといった中間的形態の資料もあるが(1743Y)、口縁部の特徴を優先し本類とした。法量もIA類と同様の傾向を示すが、底径・器高はややIA類を下回る。底径の相違については削り調整の有無の結果と考えられる(第76表)。

その他の調整あるいは火ダスキー・底部外面の下駄痕などの特徴はIA類と共通する。

IC類 (1757Y・1758Y・1760Y・1762Y・1764Y)

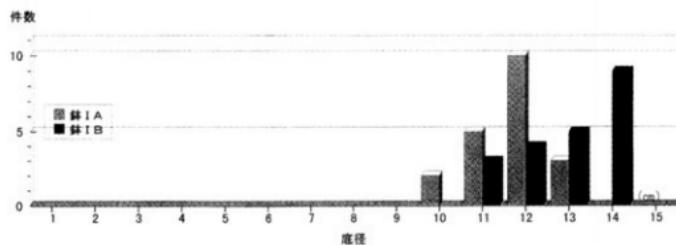
口縁部以外の体部・底部及び調整などの特徴はIA類と共通するが、端部に面取りがおこなわれ玉縁状となるものを分類した。折り返しは認められず、端部外面直下を削ぐことで形状を整えている。I類中で最も少数である。1757YはSK01(3)から一括して廃棄された状態で出土した。

II類 (1765Y～1770Y・第75表)

器形の形状はI類に酷似するが、その法量が口径27.0cm前後・底径12.0cm強・器高14.5cm程度とやや小型化して口縁部よりやや下の位置に2個1対の把手を有する。把手は粘土紐を横長にして器面に貼付し、2個の穿孔を上から並行させて貫通させている。このような把手を有する器形あるいは把手そのものについても類例を知らず用途については不明である。

把手を除く器形・調整はI類と共に通するが、IA類・IB類の区別の指標として用いた口縁端部の形状及び底部外縁削り調整の有無については個体も少ないせいか、明確な傾向を見いだすことはできなかった。ただし、口縁部についてはIA類に近似するものが多い。1768YについてはSX01(3)から出土している。

第76表 鉢IA・B類底径分布表



III類 (1771Y～1775Y・1781Y～1786Y・第77表)

おおまかな体部の形状はI・II類にちかいが、器高が低く皿状を呈するもの。口径は12.5cm～30.0cmと幅があるが、I・II類よりさらに小型化し20.0cm～24.0cmに集中する。底径は10.6cm～12.0cm程度でI・II類とはあまり差がない。口縁端部の穿孔の有無によってA・Bに2分類できる。

III A類 (1771Y～1775Y) は体部が直線的に外方に伸び、口縁端部でわずかに外反する。底径値はほとんどI類と変わらない。I類の高さを半分にした器形とも考えられる。焼成が不良な製品が多く、1774Yは窯内から出土した。

III B類 (1781Y～1786Y) はIII A類をさらに小型化した器形を呈し、口縁端部に対向する穿孔を1組有する。端部外面には約1cm程度の円形の粘土が貼付され、さらに中心部には穿孔が認められる。SX01(3)から出土した1782Yでは穿孔が貫通していない。1785Yは1片の破片が窯内出土のものと接合した。

IV類 (1739Y・1740Y)

器形・調整ともI類に酷似するもののその法量が極端に小型化したものを見た。出土点数が少なく、2点を図示した。1739Yは口径15.3cm・器高7.0cm、1740Yは口径16.1cm・器高6.2cmを測る。他の資料の口径も15.0cm前後の値を示し、ある程度定型化した製品と推測される。

深皿類 (第261・283～285図)

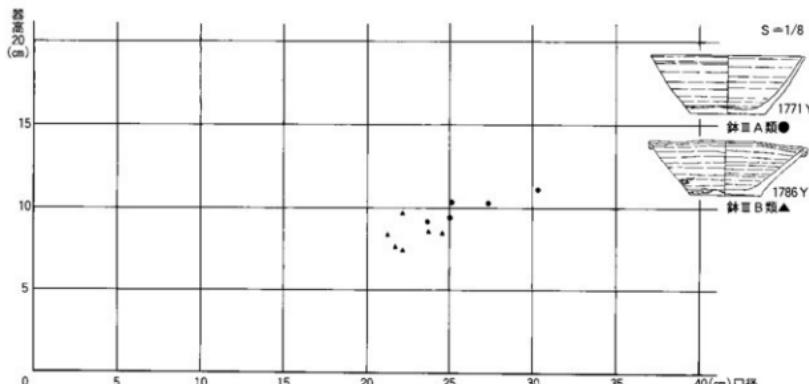
平底の底部から体部が強く外傾する器形を仮に深皿として分類した。大型品をI類、小型品で近似する器形を呈するものをII類とした。

I類 (1776Y～1780Y・1787Y～1792Y・1798Y～1805Y・第78表)

口縁部の形状によりA～Cに3分類した。調整は鉢I類などと共通し、体部は輪積み後に回転ナデで調整され、外底面には下駄痕が残る。底部外縁には回転ヘラ削りが認められる。

IA類 (1798Y～1805Y) は口縁端部が上方に屈曲して、尖り気味に調整される。端部の形状は断面形が三角形となるものが多く、端部下端が肥厚するもの(1805Y)も認められる。器

第77表 鉢III類法量分布表



高は6.0～7.0cm前後と比較的浅い。1798Yは窯内埋土、1804YはSX01(3)から出土した。とくに1800Y・1804Yはほぼ完形品で本類の良好な資料である。

I B類 (1787Y～1792Y) は口縁端部に強い凹面を有し、体部が比較的直線的に伸びわずかに内湾する。体部が浅い形状を示すもの (1787Y) と深い形状を示すもの (1788Y・1789Y) とが認められるが、前者の資料は1点しか図示できなかった。なかには焼成時の歪みが著しいものや外面全面に自然釉が存する資料があり、窯道具として転用された可能性の高い個体も観察される (1791Y)。1791Y・1792Yは窯内埋土から出土している。

I C類 (1776Y～1780Y) は体部が強い外反傾向を示し、口縁端部を丸くおさめるもの。I類中、最も資料数が少ない。1778Yの端部はやや内傾する平坦面を有する。端部の形状を除けば、I A類に酷似する。1776Yは半焼けの製品で他に比べて小型品で、1780Yは端部直下に沈線状にくぼむ部分が数本認められる。

II類 (1604Y～1610Y・第79表)

口縁端部の形状によりA・Bの2分類した。外底面は回転糸切り痕が残る。体部の形状は碗類に類似する。

I A類 (1604Y～1608Y) はI A類と同様、端部が鋭く短く上方に屈曲する資料を分類した。後述する蓋II A類と器形が酷似し、体部の深さによって単純に両者を分類したため、その境界は不明瞭である。1606Yは口縁端部がわずかに上方に伸びる程度で、断面が鋭い三角形を呈し調整が精緻な資料である。

B類 (1609Y・1610Y) はI C類の形状に類似し、端部が屈曲し水平に伸びるものである。資料が少なく、2点しか図示しえなかった。

蓋類 (第261・285図)

前述した深皿類と酷似し、体部が浅い点を除けばその他の特徴は深皿類とほんとんど同一で区別が難しい。体部の形状から蓋と判断したにすぎず、組み合わせる身については筆者の知見不足で判断がつかない。大型品をI類、小型品をII類とした。外面に自然釉が付着する資料や半焼けの資料が比較的多いことから窯道具である可能性もあるが、焼成は逆位であり根拠に欠ける。

I類 (1793Y～1797Y・第78表)

深皿I A類を逆位にした形状を呈す。天井部には下駄痕をそのまま残し、端部は断面三角形となる。1797Yの端部断面の形状があまく、内面に凹面をもつ。1795YがSX01(3)から出土している。

II類 (1600Y～1603Y・第79表)

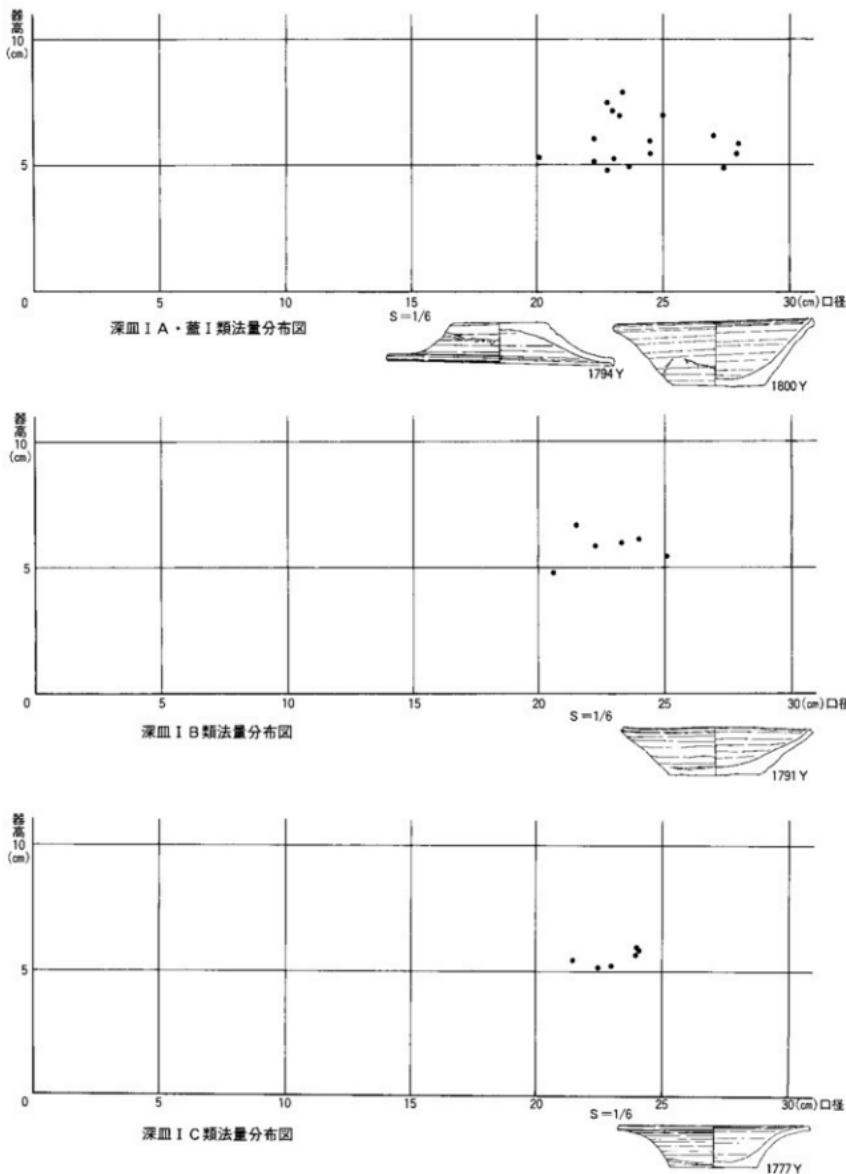
深皿II A類を逆位にした形のものをI A類 (1600Y・1601Y)、口縁部が屈曲して長く伸びるものをI B類 (1602Y・1603Y) とした。I A類は端部が短く伸び、口縁部は内側に屈曲させる。端部は尖り気味である。天井部の形態は碗の体部と同一である。天井部の糸切り痕は未調整である。

I B類は口縁部が屈曲してから長く伸び、端部はやや肥厚気味に丸みをもつ。天井部の糸切り痕が残る。確認した個体数は5点弱である。

洗類 (第290図・1846Y・1847Y)

2個体分が出土した。輪積み整形後、体部下半は回転ヘラ削り調整が施されている。口縁部は断面三角形を呈し、精緻な回転ナデで調整されている。1846Yは焼け歪みが顕著で口径29.2cm・底径21.8cm・器高7.0cmを測る。1847Yは壺II類の1657Yと破片が釉着する資料で口径29.0cm・底径25.0

第78表 深皿 I 類・蓋 I 類法量分布表



cm・器高7.8cmを測る。

甕類（第290図・1848Y）

1848Yは、ある程度全形を復元できた好資料である。体部外面には平行タタキ目を残し、口径は33.4cm、復元高は52.5cmを測る。体部は上下で分割して整形したかのように、接合痕の痕跡が体部中央に顕著に残る。口縁部は外反し、端部は面取りが認められる。底部外縁にはヘラ削りが認められる。その他（第263・286～289・291図）

前述の分類に属さない少數器種を一括した。仏具・陶硯・水注などがある。

仏具類（1806Y～1811Y・1814Y～1825Y）

仏具及びその性格が強い資料を分類した。多くの資料がSX01（3）から出土している。

小碗（1806Y～1811Y）

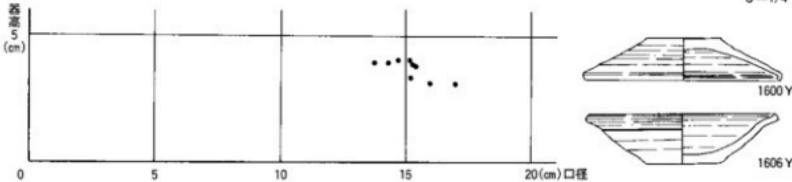
器壁が薄く、胎土が緻密で焼成が堅緻な資料。底部が突出気味になる点など碗II類と共通する特徴を有するが、口径が7.0cm前後と小型品で調整が精緻であることから六器碗ないしは子と考え、仏具として分類した。1807Yは判然としないが口縁端部が輪花風となっている。

器台（1817Y・1818Y）

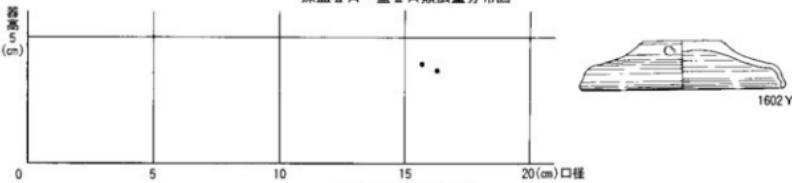
1817Y・1818Yの2点図示した。体部が欠損し、全形は不明で、脚部の形状から器台としたものである。脚部は柱状で断面がハの字形である。外底面には回転糸切り痕をそのまま残す。

第79表 深皿II類・蓋II類法量分布表

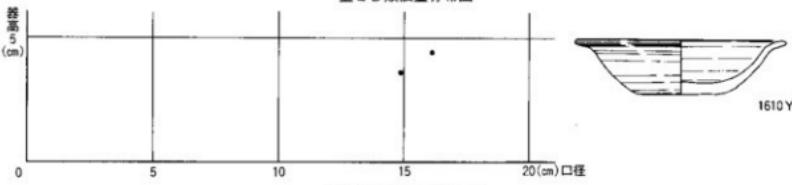
S=1/4



深皿II A・蓋II A類法量分布図



蓋II B類法量分布図



深皿II B類法量分布図

花瓶 (1815Y・1816Y)

2点出土した。1816Yは精緻なつくりの花瓶で脚部を欠損するだけの優品である。体部はヘラ削りによって整形され、体部と口頸部・脚部に削り出した紐が表出されている。1815Yは口頸部と脚部の一部を欠損する。1816Yと比べて器壁も厚く、紐も表現されておらず調整の粗さが目立つ資料である。

小壺 (1814Y)

1点のみの出土である。口径3.3cm・底径3.8cm・器高5.5cm。短く外反する口縁部と卵形の体部を有す。底部は平底で回転糸切り痕は未調整である。

子持器台 (1819Y・1820Y)

回転糸切り痕を残す脚部と皿状の坏部を有す。坏部には2点が配置されたことが確認できる。1819Yは1820Yとは接合しないが1820Yとセットになるのではないかと推測して図示した資料である。

火舍香炉 (1821Y～1825Y)

蓋4点、身1点を確認した。蓋は宝珠形紐を有し、形骸化した宝珠形の煙孔が3組認められる。煙孔の直下にはそれぞれL字状に沈線が施されるとともに口縁部・天井部と口縁部の境及び紐の周囲には2本1組の沈線が引かれ、紐にも1本の沈線が認められる。煙孔・沈線の表現については個々の資料において微妙に異なり、とくに沈線は正確に引かないものも認められる。

1825Yは唯一出土した身で口縁部にかえりを有す。脚部は獸脚で2点が出土した。

陶硯類 (1826Y～1830Y)

7個体分が出土し、そのうち5点を図示した。1830Y以外はすべて二面硯である。平面形は長方形を呈することからいわゆる長方形硯であると考えられる。側面形は逆台形となり、個々の資料によって異なるが、2～3本の細い沈線によって飾られる。平面は広く平坦な陸部と硯頭に向かって急傾斜する海部からなる。周囲には低い周堤が認められ、そのなかを側面と同様、1本ないしは2本の細沈線によって加飾する。復元した予想の大きさは1826Yを参考にすると長さ14.8cm・幅12.3cm・高さ2.3cm程度である。1827Y・1828Yはほぼ同じ大きさであると思われるが、1829Yはそれよりやや小振りである。1830Yは唯一の單面硯だが、その平面形は正方形にちかい。長さ12.4cm・幅10.1cm・高さ2.1cmである。整形は板状の粘土から指ナデでおおまかにおこない、その後ケズリ調整によって入念に調整している。

経筒類 (1831Y～1833Y)

経筒及びその蓋が若干出土している。経筒の身は口径15.5cm・底径14.5cm・器高28.3cmの円筒状の器形を呈し、外面は複線の三筋文で飾られる。1831Y・1832Yは経筒に伴う蓋ではないかと考え、図示した。碗類がやや浅く開いた形状を逆位にして使用したものと推測している。両資料とも口径が碗II A類より一回り大きく、表裏に自然釉が厚く付着し単体で焼成されているようである。

水注類 (1838Y～1843Y)

すべて欠損品で口縁部・把手・体部・注口部と破片で出土している。把手を確認したことから3号窯の水注は把手が付いたものと考えられる。把手 (1840Y・1841Y) は板状で表面に2本の平行する沈線で加飾される。口縁部は2点を確認した(1838Y・1839Y)。端部はわずかに外反する。1842

Yは体部の大半が復元された好資料で、寸胴な体部に外傾する高台が付く。高台の形状は片口鉢I B類に類似する。注口は接合はないが同一個体と判断した。体部との接点には菊座が認められる。1843Yは1842Yより小さな注口で、シャープに整形されている。いずれも袖は認められないため、無袖であったと考えられる。

四耳壺類 (1634Y・1635Y)

把手のみを確認したにすぎず、このため三耳壺か四耳壺かは判断がつかない。出土した把手は2点で両資料とも横長の板耳を呈し2本1組の細沈線が認められる。

足高高台碗類 (1812Y・1813Y・1836Y・1837Y)

足高高台をもつ資料を4点確認した。足高高台はロクロ土師器に一般的にみられる特徴だが、1815Yを除いて胎土・焼成は他の資料と何ら変化が認められない。1815Yは色調が赤褐色を呈し、胎土中に疊がなく土師器的な資料である。高台はハの字に外反して開き、端部はやや尖り気味である。1815Yは体部が深いが、1836Y・1837Yは体部が浅くその形状は皿I類に類似する。本類は焼成は別にして高台形状からみて、ロクロ土師器の影響を強く受けたものと考えられる。

土師皿類 (1834H・1835H)

2点とも完形の資料で3号窯焚口から出土資料である。3号窯で焼成された資料かは別にして、3号窯の資料と共に伴する資料とみてよい。底部は丸底で体部が短く緩やかに立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げられている。体部内外面には横ナデが施され、内底面にもナデの痕跡が認められる。なお、内面ナデの幅は1.2cm、外面ナデの幅は0.8cmを測る。

その他 (1633Y・1844Y・1845Y・1849Y)

1844Yは大型の片口を持つ鉢。底部は出土していない。整形は壺などと類似し体部の接合痕が顕著である。体部下半は回転ナデ、中央は削り（外面）、上半はナデによって仕上げている。内面中央には同心円状の当具痕が認められ（図版128）、タタキ整形をおこなっているようである。器形は体部下半が直線的にハの字形に開き、中央から強く内湾して内傾し、片口鉢III類にちかい形状を呈す。端部にはやや平坦な面が認められ、注口は二本の指で外に引き出されている。口径は52.2cm、器高は現高で35.8cm、おそらく推定では器高は40cm程度になると思われる。

1845Yは一条の突帯がめぐる大型の鉢。ほぼ完形に復元することができ、口径52.6cm・突帯径50.6cm・底径16.3cm・器高36.5cmに及ぶ。器形は平底の底部から体部が直線的にハの字に伸びる。口縁部はわずかに内湾し、端部は面取りが顕著である。内面には輪積み痕が残り、外面は比較的丁寧に調整されている。突帯より下半の体部では不整方向のケズリ、上半ではナデによって調整される。焼成が半焼けでSX01（3）から出土している。

1849Yは平底の底部から体部が短くハの字に伸びる大型の盤。口縁端部は外傾した平坦面を作出している。口径40.2cm・底径27.0cm・器高9.3cmの法量値を示すが、焼け歪みが顕著なため正確な数値は不明である。整形は片口鉢I類と共に、輪積み整形後は外面は体部下半を回転ヘラケズリ、上半を回転ナデで調整している。内底面にもヘラ削りが認められる。

内底面には縦3行にわたって「奉施入 建久五年十月 祐向寺十八日」と記された刻銘を確認することができた。内底面の破片3/4はSX01（3）から出土したものであり、残る左上の破片1/4は窯内埋土から出土した。その結果、本資料は3号窯で焼成されたとみて間違いなく、かつ最終操業

に関わる製品である可能性が高い。この文面は本来、「奉施入 建久五年十月十八日 祐向寺」とあるべきである。おそらく、一行目を記した後に三行目を記し、二行目の最後に書くべき「十八日」が余ったためそれが三行目に及んだものと思われる。詳細は考察で述べる。1633Yは半焼けの資料で、一見土師器にもみえる資料である。欠損部位が大きいため全形は不明だが、土鉢状の器形に類似し、体部が円形を呈す。

窯道具（第126図1850）

第一次操業時に伴う焼成室後半部にある馬蹄形の焼台。その大きさは、長軸21.0cm強・短軸17.0cm弱・高さ22cm強を測る。器面には指の押圧痕が顯著で板状の粘土を重ねて整形したと思われる。台上には薙の痕跡が認められ、本窯の製品が須恵器以来の焼成方法を採用していたことを示唆している。台上の自然釉のかかり具合から底径11.5cm程度の製品が載せられていたと推測され、類推するとおそらく鉢Ⅰ類と考えられる。



第126図 3号窯焼台実測図

第80表 3号窯器種別・地区別出土点数(1)

	I 1	I 2	I 3	II 1	II 2	II 3	II 4	III 1	III 2	III 3	III 4	IV	IV 1
碗 I A						1		1	2	6			1
碗 I B										7			
碗 II A					3	1			11	7	2		
碗 II B						1				1	6		1
碗 II C		4				1	5			8	35		
碗 A	1	12	4	12	55	46	26	13	101	40	6		8
碗 B						1	12	1	3	8	12		1
小碗 I・II			1							4	6		
北部系										4			
南部系											2		1
小皿 I A					1	4				4	13		1
小皿 I B						1				5	4		
小皿 II		1				5	11		1	37	10	2	1
小皿 III A						1				15			
小皿 III B						1	1			5			
小皿 I	3	1			32	14		7	102	24	1		5
小皿 II・III	1		2	4	8	2	5	13		2			1
小皿 III			1			1			1	9	1		
片口鉢 I A	8	2	8	72	50	15	57	124	17	3			12
片口鉢 I B	2				1	13		1	5	10			
片口鉢 I C													
片口鉢 II・III					1			1	3	1			
壺 I		1				3	5			2	1		1
壺 II					6	11		5	14	5			6
壺 III					3	3		3	4				
壺 IV			1			3	3		1				
瓶 I		1				8	21			26	38		4
瓶 II			1			1	8		1	5	7		
瓶 III					1	7	1	2	15	7			
瓶 IV					2	2		4	5	2			
鉢 I A					19	15		10	29	22			5
鉢 I B					1	6		3	9	16			
鉢 I C									3	1			
鉢 II								2	3	2			
鉢 III A								1	1	1			
鉢 III B								2	1				
鉢 IV						1		1	5				
鉢 III								3	9	1			
蓋 I・深皿 I A					10	7	1	11	24	6			
深皿 I B					3	1		4	7	1			
深皿 I C					4			2	10	1			2
蓋・深皿 II A			1		6	11	2	4	16	3	1		2
深皿 II B		1	2		3	3	1	5	25				
蓋・深皿 II C				3	1	1		3	15	1			
鑊	1				5	11		2	9	16			
卸皿							1	2	1				
洗						1			1				
仏具					1	1		1	7	1			1
陶鏡					1	1			3	1			
経筒										1	2		
水注						1				1	1		
足高高台										2			
その他						1			2	1			
合計	1	35	14	25	260	286	53	161	717	340	15	1	52

第81表 3号窯器種別・地区別出土点数(?)

	IV 2	IV 3	V 1	2号窯	3号窯	SD01	SK01	SZA21	SX01	合計
碗 I A		1								12 0.50%
碗 I B										7 0.29%
碗 II A		2		4	2	1			3	36 1.51%
碗 II B	2									11 0.46%
碗 II C	2	7							2	64 2.69%
碗 A	14	11		21	13			1	4	388 16.29%
碗 B	4	1		1	1					45 1.89%
小碗 I・II	3									14 0.59%
北部系	2		1		1					8 0.34%
南部系										3 0.13%
小皿 I A	2									25 1.05%
小皿 I B		2							1	13 0.55%
小皿 II	1				31				1	101 4.24%
小皿 III A										16 0.67%
小皿 III B										7 0.29%
小皿 I	5	1		2	14				1	212 8.90%
小皿 II・III	2									40 1.68%
小皿 III				2	30					45 1.89%
片口鉢 I A	26	3	3	9	15			2	7	433 18.18%
片口鉢 I B	1				1				2	36 1.51%
片口鉢 I C					1					1 0.04%
片口鉢 II・III	1									7 0.29%
蓋 I				1	3					17 0.71%
蓋 II	10	2			10				6	75 3.15%
蓋 III										13 0.55%
蓋 IV					1			1		10 0.42%
瓶 I	2	4		2	1					107 4.49%
瓶 II	1			3	1					28 1.18%
瓶 III		1								34 1.43%
瓶 IV	4				6				1	26 1.09%
鉢 I A	8	2	1	1	1				9	122 5.12%
鉢 I B	2	1			1					39 1.64%
鉢 I C							1			5 0.21%
鉢 II									2	9 0.38%
鉢 III A					1				1	5 0.21%
鉢 III B	1				1				1	6 0.25%
鉢 IV	1			1						9 0.38%
鉢 III				3	5					21 0.88%
蓋 I・深皿 I A	1			1	1	1			2	65 2.73%
深皿 I B	2			1	2				4	25 1.05%
深皿 I C										19 0.80%
蓋・深皿 II A	3			1	4					54 2.27%
深皿 II B	2			1					1	44 1.85%
蓋・深皿 II C				2					2	28 1.18%
蓋				1						45 1.89%
鉢皿		1			6				1	12 0.50%
洗										2 0.08%
仏具					2				3	17 0.71%
陶鏡				1						7 0.29%
経筒										3 0.13%
水注										3 0.13%
足高高台				1						3 0.13%
その他									1	5 0.21%
合計	102	39	5	59	155	2	1	4	55	2382 100.00%

第82表 3号窯器種別・地区別残存率(1)

	I 1	I 2	I 3	II 1	II 2	II 3	II 4	III 1	III 2	III 3	III 4	IV	IV 1
碗 I A						0.5		0.45	0.54	3.24			0.44
碗 I B										3.22			
碗 II A					0.57	0.25			3.29	1.8	0.17		
碗 II B					0.33				0.21	3.31			0.17
碗 II C	0.2				0.05	0.26			2.19	6.57			
碗 A	0.04	0.65	0.18	0.72	4.66	3.17	1.86	0.82	8.03	3.97	0.42		0.36
碗 B					0.03	0.78	0.03	0.24	0.8	0.98			0.05
小碗 I・II		0.75							1.05	1.91			
北部系									1.84				
南部系										0.59			0.08
小皿 I A				1	1.83				1.65	6	0.5		
小皿 I B					0.33				2.66	2.21			
小皿 II	0.09			1.43	0.87			0.09	5.45	1.18	0.24		0.08
小皿 III A					0.17				5.14				
小皿 III B					0.5	0.83			1.92				
小皿 I	0.32	0.12		4.54	2.64			0.69	11.94	3.57	0.21		0.4
小皿 II・III	0.06		0.09	0.42	0.72	0.19	0.38	1.31	0.17				0.08
小皿 III		0.29		0.03				0.17	1.9	0.25			
片口鉢 I A	0.85	0.18	0.4	5.69	5.43	1.12	3.65	7.76	0.88	0.26			1.13
片口鉢 I B	0.12			0.28	3.02			1	1.05	4.58			
片口鉢 I C													
片口鉢 II・III				1.82				0.08	1.92	0.25			
壺 I	0.03			0.22	1.78				0.81	0.07			0.33
壺 II				1.51	2.68			0.41	4.36	1.47			0.73
壺 III				1.02	2.85			1.63	0.93				
壺 IV	0.19				1.28	0.25			0.04				
瓶 I	0.07			0.73	4.11				4.64	8.63			1.12
瓶 II		0.11		0.11	2.11			0.5	1.79	1.26			
瓶 III				0.13	0.84	0.14	1.33	2.68	1.32				
瓶 IV				0.75	0.34			0.94	1.03	0.3			
鉢 I A				3.52	0.77			1.5	7.66	3.68			1.36
鉢 I B				0.03	1.8			0.14	7.19	10.57			
鉢 I C									2.42	0.75			
鉢 II								1.23	2.17	1.83			
鉢 III A								0.1	0.17	0.17			
鉢 III B								1.33	0.04				
鉢 IV				0.29				0.06	0.89				
鉢 V								0.18	0.62	0.08			
蓋 I・深皿 I A				1.79	1.68	0.12	2.07	4.47	0.49				
深皿 I B				0.2	0.1			1.28	0.91	0.33			
深皿 I C				0.65				0.36	1.39	0.1			0.24
蓋・深皿 II A	0.04			1.11	0.51	0.16	0.18	1.64	0.59	0.08			0.08
深皿 II B	0.17	0.12		1.17	0.26	0.04	0.33	2.1					
蓋・深皿 II C			0.25	0.03	0.06			0.11	1.57	0.06			
甕	0.33			0.46	0.73			0.25	1.58	1.21			
鉢皿					0.07	0.16	0.08						
洗					0.83				0.83				
仏具				0.33	0.67			0.33	3.2	0.92			
陶鏡				0.33	0.5				1.34	0.5			
経筒									0.83	1.09			
水注					1					0.67			
足高高台										1.92			
その他					0.25				1.17	0.33			
合計	0.04	2.89	1.98	1.46	36.86	44.82	3.98	21.99	121.12	81.1	1.38	0.5	6.65

第83表 3号窯器種別・地区別残存率(2)

	IV 2	IV 3	V 1	2号窯	3号窯	SD01	SK01	SZA21	SX01	合計	
碗 I A		0.33							5.5	1.27%	
碗 I B									3.22	0.74%	
碗 II A		1		1.34	0.67	0.08		2.72	11.89	2.75%	
碗 II B	0.77								4.79	1.11%	
碗 II C	0.94	0.52						0.42	11.15	2.58%	
碗 A	0.88	1.13		2.71	1.07		0.06	0.36	31.09	7.18%	
碗 B	0.49	0.07		0.04	0.08				3.59	0.83%	
小碗 I・II	0.25								3.96	0.91%	
北部系	1		2.92		0.54				6.3	1.46%	
南部系									0.67	0.15%	
小皿 I A	0.42								11.4	2.63%	
小皿 I B		1.5						0.63	7.33	1.69%	
小皿 II	0.58				13.54			0.11	23.66	5.46%	
小皿 III A									5.31	1.23%	
小皿 III B									3.25	0.75%	
小皿 I	0.63	0.16		0.23	1.6			0.14	27.19	6.28%	
小皿 II・III	0.13								3.55	0.82%	
小皿 III				0.46	6.49				9.59	2.22%	
片口鉢 I A	2.72	0.13	0.19	0.65	5.72		0.11	1.58	38.45	8.88%	
片口鉢 I B	0.5				0.09			0.32	10.96	2.53%	
片口鉢 I C					0.5				0.5	0.12%	
片口鉢 II・III	0.04								4.11	0.95%	
壺 I				0.02	0.68				3.94	0.91%	
壺 II	2.92	0.22			3.25			1.64	19.19	4.43%	
壺 III									6.43	1.49%	
壺 IV				0.09		0.13			1.98	0.40%	
瓶 I	0.35	0.83	0.81	0.2					21.49	4.96%	
瓶 II	0.42		1.22	0.25					7.77	1.79%	
瓶 III		0.14							6.58	1.52%	
瓶 IV	0.32			2.39				0.6	6.67	1.54%	
鉢 I A	1.29	0.56	0.92	0.05	0.1			5.99	27.4	6.33%	
鉢 I B	0.11	0.05			0.92				20.81	4.81%	
鉢 I C						1			4.17	0.96%	
鉢 II								2	7.23	1.67%	
鉢 III A				0.18				0.17	0.79	0.18%	
鉢 III B	0.25				0.25			0.17	2.04	0.47%	
鉢 IV	0.27		0.09						1.6	0.37%	
鉢 III			0.22	0.65					1.75	0.40%	
蓋 I・深皿 I A	0.25		0.63	0.08	0.15			1.55	13.28	3.07%	
深皿 I B	0.54			0.5	0.54			0.37	4.77	1.10%	
深皿 I C									2.74	0.63%	
蓋・深皿 II A	0.14		0.03	0.68					5.24	1.21%	
深皿 II B	0.25		0.08					0.79	5.31	1.23%	
蓋・深皿 II C			0.47					0.61	3.16	0.73%	
甕			0.1						4.66	1.08%	
鉢皿	0.08			2.7				0.83	3.92	0.91%	
洗									1.66	0.38%	
仏具				1.12				2.33	8.9	2.06%	
陶鏡			1						3.67	0.85%	
経筒									1.92	0.44%	
水注									1.67	0.39%	
足高高台									1.92	0.44%	
その他			0.25					0.83	2.83	0.65%	
合計	16.46	6.72	4.03	10.9	44.38	0.23	1	0.3	24.16	432.95	100.00%

第84表 3号窯器種別・土層別出土点数(1)

	1	1 L	2	2-2	3	4	4 L	5	5'	5 L	6
碗 I A			1		1	2		2		1	
碗 I B			4		1						
碗 II A	1		3		3	2	1				
碗 II B			2		4	1				1	
碗 II C	1		14		14	6	2			1	
碗 A	37		11	2	27	8	2	11		10	1
碗 B	5		3	1	3	3		2		2	
小碗 I・II			1		4			1		2	
北部系					2						
南部系			1								
小皿 I A			5		5		1	4		3	
小皿 I B	2		1		2			1		1	
小皿 II	5				6			3		1	
小皿 III A											
小皿 III B					1						
小皿 I	6		2	1	23	1	3	8		4	
小皿 II・III	9				1					3	
小皿 III					2						
片口鉢 I A	40		5	1	32			4		8	
片口鉢 I B					7	2	2	2		1	
片口鉢 I C											
片口鉢 II・III			1		1					2	
壺 I					1					1	
壺 II	4				1	4				3	
壺 III											
壺 IV	3										
瓶 I	4		16		17	2	2	6		8	
瓶 II	1				5			2		3	1
瓶 III	1		1		2	1		4		2	1
瓶 IV					1			1			
鉢 I A	5		3	1	12	2	1	6		9	
鉢 I B					6	1	7	4	1	1	
鉢 I C								1		1	
鉢 II							2			1	
鉢 III A	1										
鉢 III B											
鉢 IV					1						
鉢 V	1							1			
蓋 I・深皿 I A	7	1	1		1			1		2	
深皿 I B				1	2			1			
深皿 I C	2									2	
蓋・深皿 II A	11				4	1		1			
深皿 II B	6				5			1			
蓋・深皿 II C	2				3					1	
甕	2		4		7	2	1	4		3	
卸皿	2				1						
洗					1						
仏具	1							1			
陶硯			1								
経筒							1			1	
水注											
足高高台					1						
その他											
合計	159	1	80	8	213	34	25	72	1	77	4

第85表 3号窯器種別・土層別出土点数(2)

	7	7L	8	9	10	10L	11	12	12L	13	13L
碗 I A				2					1		
碗 I B			1								
碗 II A			1			1	1		4	3	
碗 II B										1	
碗 II C			4						2	2	1
碗 A	11	3			1	9	3	3	38	46	2
碗 B		4	1				1	1	6		
小碗 I・II									1		1
北部系									1	3	
南部系				1							
小皿 I A		1							1		
小皿 I B						1				3	
小皿 II	1	1	1		7	1	3	11	11		
小皿 III A					3		3	6	3		
小皿 III B								3	2		
小皿 I	1	2	1		11	4	10	33	36	2	2
小皿 II・III					3			2	5		
小皿 III					2			4	1		1
片口鉢 I A	2	4			4	4	1	23	50		7
片口鉢 I B	2	3	3			1			1	1	2
片口鉢 I C											
片口鉢 II・III								1			
壺 I								1	1		3
壺 II	1	3						5	4		3
壺 III									2		4
壺 IV		1							1		
瓶 I	4	5	2	2				2	7		3
瓶 II		2						1			
瓶 III					1			2	6	2	
瓶 IV						1		3	2		1
鉢 I A	4	2	1	1	1	1		2	7	1	5
鉢 I B									5		2
鉢 I C									1		
鉢 II									1		
鉢 III A								1			
鉢 III B								1			
鉢 IV								1	1		
鉢 III								2	2		
蓋 I・深皿 I A					2	1		2	13		1
深皿 I B	1							2	4		1
深皿 I C								3	3		1
蓋・深皿 II A	1	1						3	10	1	2
深皿 II B					2	1		3	7		
蓋・深皿 II C	1				1	1		2	3		
甕		7			1				1		1
鉢皿					1						
洗									1		
仏具					2				2	1	
陶硯									3		
経筒									1		
水注									1		1
足高臺台											
その他								1			
合計	29	45	9	7	51	20	21	167	264	11	44

第86表 3号窯器種別・土層別出土点数(3)

	14	15	17	18	19	20	21	22	23	23'	24
碗ⅠA									1		
碗ⅠB											
碗ⅡA											
碗ⅡB									1		
碗ⅡC		2							1		
碗A		4			9	3	1	1	2	1	
碗B					1	1					
小碗Ⅰ・Ⅱ			1								
北部系									1		
南部系											
小皿ⅠA					1				1		
小皿ⅠB											
小皿Ⅱ		1			2						
小皿ⅢA											
小皿ⅢB											
小皿Ⅳ											
小皿Ⅰ		2			1						
小皿Ⅱ・Ⅲ	1								1		
小皿Ⅳ					1						
片口鉢ⅠA	12		1	2	20	3			16		
片口鉢ⅠB	2				1	1					
片口鉢ⅠC											
片口鉢Ⅱ・Ⅲ											
壺I	1		1		1						
壺II	2				1	2			1		
壺III		1				2	1		2		
壺IV					1		1				
瓶I					2			1	4		
瓶II	2				4				1		
瓶III					3				2		
瓶IV					2						
鉢ⅠA	1				13				13		
鉢ⅠB					2	4			1		
鉢ⅠC									1		
鉢II						1					
鉢III A											
鉢III B						1			2		
鉢IV						1					
鉢V											
蓋I・深皿ⅠA	1				1	6	1		5		
深皿ⅠB						3					
深皿ⅠC						1			1		
蓋・深皿ⅡA						1	1		1		
深皿ⅡB	2					3	4		1		
蓋・深皿ⅡC						2					
甕	2		1			1				1	
鉢皿							1				
洗											
仏具						1					
陶鏡		1									
経筒											
水注											
足高台						2					
その他						1					
合計	1	35	1	4	30	78	13	2	60	1	1

第87表 3号窓器種別・土層別出土点数(4)

	25	25L	27	合計	
碗 I A				11	0.70%
碗 I B				6	0.38%
碗 II A				20	1.26%
碗 II B				10	0.63%
碗 II C				50	3.16%
碗A	1			250	15.80%
碗B				34	2.15%
小碗 I・II				11	0.70%
北部系				7	0.44%
南部系				2	0.13%
小皿 I A				22	1.39%
小皿 I B				11	0.70%
小皿 II				54	3.41%
小皿 III A				15	0.95%
小皿 III B				6	0.38%
小皿 I				153	9.67%
小皿 II・III				25	1.58%
小皿 III				11	0.70%
片口鉢 I A	3	1		243	15.36%
片口鉢 I B				31	1.96%
片口鉢 I C				0	0.00%
片口鉢 II・III				5	0.32%
壺 I				10	0.63%
壺 II		1		35	2.21%
壺 III		1		13	0.82%
壺 IV				7	0.44%
瓶 I	1			88	5.56%
瓶 II	1			23	1.45%
瓶 III				28	1.77%
瓶 IV				11	0.70%
鉢 I A	2	1	1	95	6.01%
鉢 I B		1		35	2.21%
鉢 I C				4	0.25%
鉢 II				5	0.32%
鉢 III A				2	0.13%
鉢 III B				4	0.25%
鉢 IV				4	0.25%
鉢 III				10	0.63%
蓋 I・深皿 I A			1	47	2.97%
深皿 I B				15	0.95%
深皿 I C				13	0.82%
蓋・深皿 II A				38	2.40%
深皿 II B				35	2.21%
蓋・深皿 II C				16	1.01%
甕				38	2.40%
鉢皿				5	0.32%
洗				2	0.13%
仏具				8	0.51%
陶硯				5	0.32%
経筒				3	0.19%
水注	1			3	0.19%
足高高台					0.00%
その他				3	0.19%
合計	9	5	2	1582	100.00%

第88表 3号窯器種別・土層別残存率(1)

	1	1 L	2	2-2	3	4	4 L	5	5'	5 L	6
碗 I A			0.3		0.33	1.3		1.04		0.04	
碗 I B			1.63		0.17						
碗 II A	0.5		0.55		0.75	1	0.75				
碗 II B			1.3		2.11	0.17				0.33	
碗 II C	0.19		2.08		3.8	0.98	0.08			0.75	
碗 A	2.53		0.9	0.12	2.27	0.76	0.37	0.84		0.73	0.05
碗 B	0.22		0.2	0.08	0.27	0.37		0.15		0.18	
小碗 I・II			0.92		0.91			0.08		0.8	
北部系					1						
南部系			0.42								
小皿 I A			2.74		2		0.42	1.5		2.15	
小皿 I B	0.83		0.83		1			0.38		0.5	
小皿 II	0.43				0.74			0.31		0.1	
小皿 III A											
小皿 III B					0.83						
小皿 I	1.01		0.18	0.13	2.75	0.67	0.47	1.02		0.59	
小皿 II・III	0.81				0.09					0.4	
小皿 III					0.42						
片口鉢 I A	2.8		0.21	0.06	4.84			0.2		0.53	
片口鉢 I B					3.77	0.67	0.64	0.59		0.14	
片口鉢 I C											
片口鉢 II・III			0.25		0.88					1.04	
壺 I					0.07					0.08	
壺 II	0.73				0.08	2.24				0.76	
壺 III											
壺 IV	0.25										
瓶 I	0.37		1.59		4.76	0.23	1.24	0.77		1.72	
瓶 II	0.3				1.01			0.21		0.78	0.48
瓶 III	0.09		0.15		0.69	0.14		0.58		0.31	0.03
瓶 IV					0.07			0.15			
鉢 I A	0.34		0.2	0.02	4.51	0.82	0.04	1.99		1.52	
鉢 I B					2.71	1	6.67	1.19	0.1	0.95	
鉢 I C								0.75		0.5	
鉢 II							1.83			0.75	
鉢 III A	0.17										
鉢 III B											
鉢 IV					0.29						
鉢 V	0.06							0.08			
蓋 I・深皿 I A	0.95	0.05	0.14		0.09			0.17		0.38	
深皿 I B				0.04	0.11			0.08			
深皿 I C	0.13									0.41	
蓋・深皿 II A	0.62				0.18	0.5		0.05			
深皿 II B	0.44				0.47			0.1			
蓋・深皿 II C	0.11				0.34					0.3	
壺	0.16		0.39		0.52	0.29	0.04	0.39		0.31	
鉢	0.15				0.08						
洗					0.83						
仏具	0.92							1			
陶瓶			0.5								
経筒							0.63			0.46	
水注											
足高高台											
その他					0.33						
合計	15.11	0.05	15.48	0.53	48.23	8.9	13.18	13.62	0.1	17.05	1.02

第89表 3号窯器種別・土層別残存率(2)

	7	7L	8	9	10	10L	11	12	12L	13	13L
碗ⅠA				1.1					0.5		
碗ⅠB			0.67								
碗ⅡA			0.25		0.25	0.17		0.85	0.57		
碗ⅡB									0.21		
碗ⅡC			0.21					0.55	0.14	0.05	
碗A	0.51	0.28		0.68	1.03	0.26	0.46	2.92	3.67	0.12	0.36
碗B		0.26	0.15				0.06	0.21	0.3		
小碗Ⅰ・Ⅱ								0.17			0.75
北部系								0.17	1.67		
南部系				0.17							
小皿ⅠA			0.25						0.42		
小皿ⅠB						0.83			1.33		
小皿Ⅱ	0.1	0.14	0.08		0.7	0.35	0.51	2.58	1.76		
小皿ⅢA					1.62		1.01	2.05	0.46		
小皿ⅢB								1.25	0.67		
小皿Ⅳ	0.11	0.16	0.38		1.2	0.5	1.18	5.17	3.93	0.71	0.43
小皿Ⅴ・Ⅵ					0.23			0.2	0.59		
小皿Ⅶ					0.79			0.56	0.13		0.25
片口鉢ⅠA	0.09	0.41			0.38	0.19	0.08	1.88	3.16		0.52
片口鉢ⅠB	0.08	0.9	1.12			0.25			0.08	0.14	0.19
片口鉢ⅠC											
片口鉢Ⅱ・Ⅲ							1.82				
壺I								0.5	0.08		1.54
壺II	0.06	0.31						1.26	0.37		0.96
壺III									0.83		3.35
壺IV		0.11							0.17		
瓶I	0.25	0.65	0.33	1.2			0.25	0.78			0.9
瓶II		0.88					0.75				
瓶III					0.11			0.33	1.33	0.41	
瓶IV						0.16		0.83	0.2		0.5
鉢ⅠA	0.24	0.1	0.03	0.14	0.03	0.03		0.16	2.19	0.07	0.89
鉢ⅠB									3.74		0.66
鉢ⅠC									0.92		
鉢Ⅱ									0.92		
鉢ⅢA							0.17				
鉢ⅢB							0.04				
鉢IV							0.1	0.28			
鉢V							0.13	0.14			
蓋I・深皿ⅠA					0.15	0.04		0.75	3.13		0.09
深皿ⅠB	0.1							0.14	0.6		0.06
深皿ⅠC								0.43	0.42		0.33
蓋・深皿ⅡA	0.08	0.05						0.53	1.43	0.03	0.14
深皿ⅡB					1.08	0.05		0.43	0.52		
蓋・深皿ⅡC	0.06				0.11	0.08		0.24	0.18		
甕		0.4			0.07			0.1			0.11
卸皿					0.08						
洗									0.83		
仏具					0.29				0.58	0.67	
陶硯									1.34		
経筒									0.83		
水注										1	
足高台											
その他								1			
合計	1.68	6.03	2.09	3.29	8.12	2.91	3.3	28.42	41.5	2.2	13.03

第90表 3号窓器種別・土層別残存率(3)

	14	15	17	18	19	20	21	22	23	23'	24
碗 I A									0.45		
碗 I B											
碗 II A											
碗 II B									0.17		
碗 II C	0.1								0.06		
碗 A	0.16				1.01	0.17	0.05	0.05	0.16	0.05	
碗 B					0.07	0.08					
小碗 I・II			0.08								
北部系									2.92		
南部系											
小豆 I A					0.92				0.5		
小豆 I B											
小豆 II	0.09			0.12							
小豆 III A											
小豆 III B											
小豆 I	0.23			0.11							
小豆 II・III	0.06								0.06		
小豆 III					0.17						
片口鉢 I A	0.77		0.05	0.12	1.27	0.13			1.58		
片口鉢 I B	0.12				1	0.5					
片口鉢 I C											
片口鉢 II・III											
壺 I	0.21		0.06		0.31						
壺 II	1.46				1	1.27			0.25		
壺 III		0.19				0.3	0.13		1.55		
壺 IV					1	0.04					
瓶 I				0.75				0.92	1.32		
瓶 II	0.61			0.43					0.5		
瓶 III				0.23					1.33		
瓶 IV					0.75						
鉢 I A	0.05				4.24				4.41		
鉢 I B					0.09	2.54			0.05		
鉢 I C									1		
鉢 II					0.5						
鉢 III A											
鉢 III B					0.33				1.25		
鉢 IV					0.06						
鉢 V					0.22				0.09		
蓋 I・深皿 I A	0.1			0.88	0.63	0.07			1.48		
深皿 I B					1.01						
深皿 I C					0.07				0.33		
蓋・深皿 II A					0.06	0.03			0.04		
深皿 II B	0.26				0.15	0.4			0.03		
蓋・深皿 II C					0.09						
甕	0.12		0.33		0.22				0.54		
卸皿					0.08						
洗											
仏具					0.83						
陶鏡	0.5										
経筒											
水注											
足高高台					1.92						
その他					0.17						
合計	0.06	4.78	0.19	0.52	6.73	18.44	1.35	0.97	19.53	0.05	0.54

第91表 3号窯器種別・土層別残存率(4)

	25	25L	27	合計	
碗 I A				5.06	1.68%
碗 I B				2.47	0.82%
碗 II A				5.64	1.87%
碗 II B				4.29	1.42%
碗 II C				8.99	2.98%
碗 A	0.13			20.64	6.84%
碗 B				2.6	0.86%
小碗 I・II				3.71	1.23%
北部系				5.76	1.91%
南部系				0.59	0.20%
小皿 I A				10.9	3.61%
小皿 I B				5.7	1.89%
小皿 II				8.01	2.66%
小皿 III A				5.14	1.70%
小皿 III B				2.75	0.91%
小皿 I				20.93	6.94%
小皿 II・III				2.44	0.81%
小皿 III				2.32	0.77%
片口鉢 I A	0.11	0.07		19.45	6.45%
片口鉢 I B				10.19	3.38%
片口鉢 I C				0	0.00%
片口鉢 II・III				3.99	1.32%
壺 I				2.85	0.94%
壺 II		0.07		10.82	3.59%
壺 III		0.06		6.43	2.13%
壺 IV				1.57	0.52%
瓶 I	0.83			18.86	6.25%
瓶 II	0.25			6.2	2.06%
瓶 III				5.73	1.90%
瓶 IV				2.66	0.88%
鉢 I A	0.07	0.1	0.05	22.24	7.37%
鉢 I B		0.05		19.75	6.55%
鉢 I C				3.17	1.05%
鉢 II				4	1.33%
鉢 III A				0.34	0.11%
鉢 III B				1.62	0.54%
鉢 IV				0.73	0.24%
鉢 III				0.72	0.24%
蓋 I・深皿 I A		0.13		9.23	3.06%
深皿 I B				2.14	0.71%
深皿 I C				2.12	0.70%
蓋・深皿 II A				3.74	1.24%
深皿 II B				3.93	1.30%
蓋・深皿 II C				1.51	0.50%
甕				3.99	1.32%
鉢皿				0.39	0.13%
洗				1.66	0.55%
仏具				4.29	1.42%
陶鏡				2.34	0.78%
経筒				1.92	0.64%
水注	0.67			1.67	0.55%
足高高台				1.92	0.64%
その他				1.5	0.50%
合計	2.06	0.37	0.18	301.61	100.00%



写真6 1号窯全景

第5節 中・近世墓の遺構と遺物

調査区内（第127図）から数十基に及ぶ墓壙ないしは火葬施設と思われる土坑を確認した。土坑内から遺物が出土することは希で、所属時期が明らかとなる事例は少ない。一部の遺物出土例によって所属時期が把握できた事例と類似する事例をほぼ同時期と仮定して下記のように分類をおこなった。

SZA… 平面形が長軸1m強・短軸0.7m強の隅丸長方形ないしは楕円形を呈し、断面が箱形となるもの。埋土上面には約20cm程度の角礫が敷設される。一部に角礫の敷設状況は類似するものの規模が小さく、断面が浅く皿状を呈するものも存する。石材はチャートが多数を占めるが、基盤を削平した際に生じたと思われる砂岩を使用したものも認められる。チャートの石材にはかなり大型のものがみられ、おそらく周囲にある古墳の石室から持ち去り使用した可能性が高い。遺物は床面から土師皿・六道鏡（寛永通宝）などが出土する例があり、寛永通宝の年代から構築時期は近世初頭に位置づけられるが、SZA05のみは13世紀代と考えられる。壁面などに被熱した痕跡は認められず、13世紀代の土坑墓と推測される。

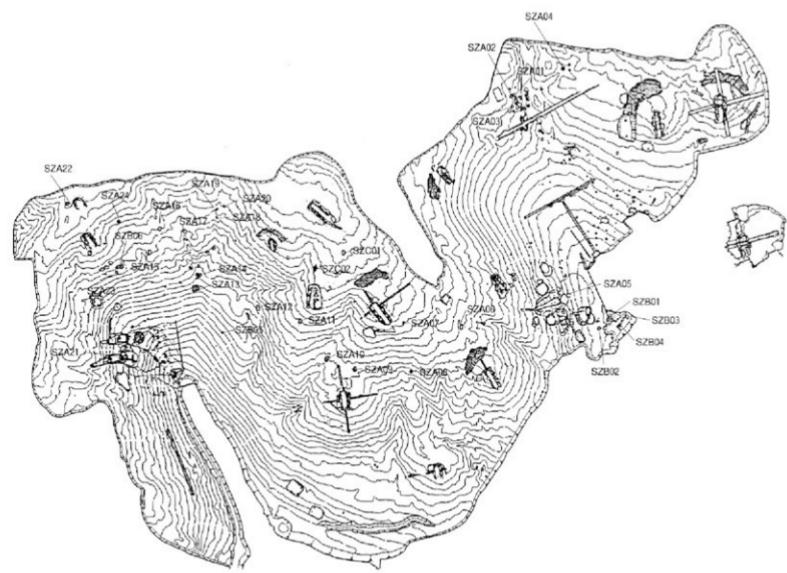
SZB… 平面形は多くは楕円形を呈すが、その規模・形状は様々。遺物はまったく伴わず、炭化材が搬出し、壁面が被熱を受けた土坑。なかには骨片を確認したものも含まれることから火葬施設の可能性もあるが、骨片が確認できなかった土坑もあるため、断定できない。確認した土坑の多くが中世～近世に所属する事例が多いことから、本類の事例も中世～近世の遺構となる可能性があるとみて仮に一括分類した。

SZC… 壁面が被熱し埋土内に石材ならびに炭化材・骨片が確認されたもの。2基のみしか確認できなかった。おそらく、火葬施設ないしは火葬墓と思われる。自然科学分析によってある程度、所属年代が判明した。

SZA01（第128図）

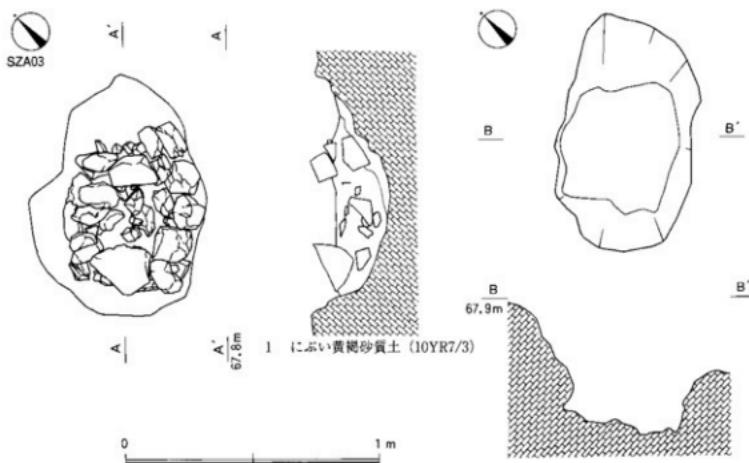
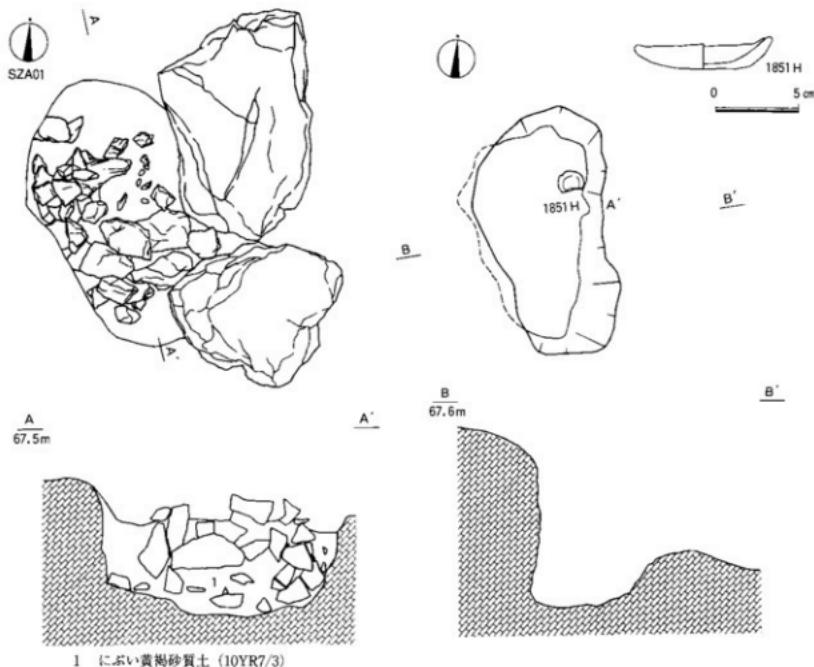
東埋没谷の北端で検出した。平面形は長軸0.98m・短軸0.45mの隅丸長方形を呈し、深さは0.71m程度である。主軸はN-18°-Wを向く。墓壙内には5cm～20cm程度のチャート製の角礫が認められ、その角礫は墓壙を掘削した際に生じた土砂とともに埋められたものと考えられる。墓壙の東側には本来、古墳の石室に使用されたと考えられる石材が位置している。偶発的現象とは思われないため、意図的に石室の石材を利用・配置したと考えられる。断面は箱形をなし、東側の壁面は一部、上場より下場がオーバーハングする部位も認められる。床面上からは土師皿が1枚（1851H）出土した。

出土した1851Hは完形の資料で、丸底の底部から口縁部へと緩やかに立ち上がる。やや口縁部の歪みが大きい。器壁が他の土師皿より厚い印象を受ける。色調は灰白色～淡黄色を呈し、口径7.95cm・器高1.5cmを測る。



S = 1 : 1000
0 50m

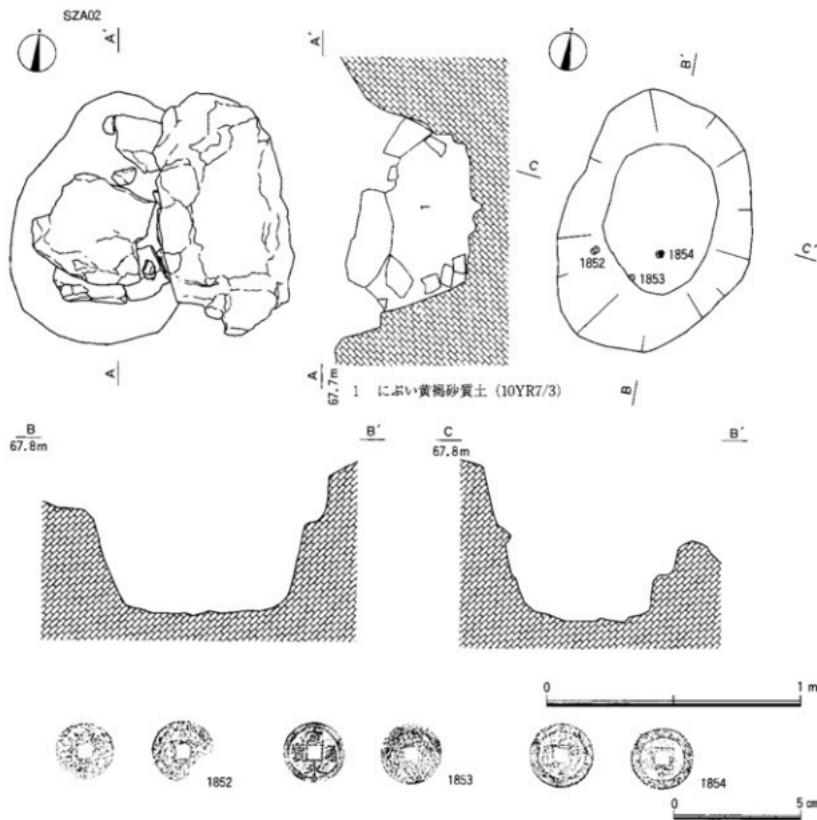
第127図 中・近世墓位置図



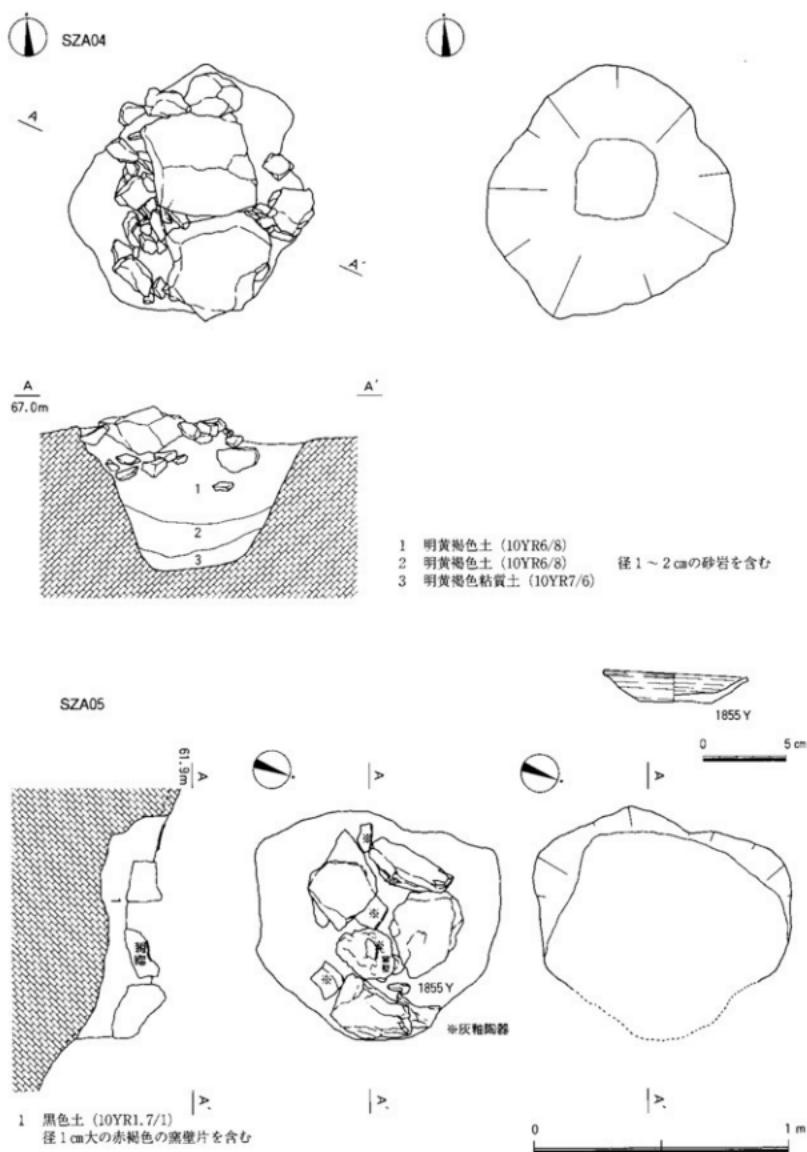
第128図 SZA01・SZA03平面図・断面図

SZA02 (第129図)

SZA01の北西側の位置で検出した。チャート製の角礫は中央にある40cm大の石材を除いてやや小型でその数も少ないが、その要因は上部の検出中に誤って石材を除去したことによるもので本来はもっと多くの石材が充填されていたものと考えられる。規模は長軸1.02m・短軸0.74mを測り、平面形は梢円形を呈す。主軸の方向はN-8°-W。壁面の立ち上がりは垂直ではなくやや斜めとなり、断面は逆台形状にちかい。墓壙東側には古墳の石室の石材が認められ、SZA01と同様の意図をもつものと思われる。埋土は單一的であることから、墓壙を掘り上げた土を石材とともに埋め戻したものと考えられる。床面からは寛永通宝が3ヶ所から計8枚が出土した。1852は2枚、1854は5枚が鋳で付着している。おそらくは8枚とも一つにまとめられ六道錢として埋納されたと考えられるが、埋納の際に分散してしまったと判断できる。



第129図 SZA02平面図・断面図



第130図 SZA04・SZA05平面図・断面図

出土した銭貨はすべて古寛永で1853は径2.47cm・孔径0.52cm・厚さ0.13cm・2.6g。1852の表側1枚は外径2.35cm・内径1.82cm・孔径0.55cm・厚さ0.11cm、2枚の合計の重さは5.4g。1854の表側1枚は外径2.57cm・内径1.8cm・孔径0.52cm・厚さ0.15cm、5枚の合計の重さは16.6gである。

SZA03（第128図）

東堀没谷の北端にあり、SZA01の南西に隣接して位置する。主軸はN-44°-Eを向く。埋土中には10cm程度～20cm程度の大小の石材が充填される。平面上では大きめの石材が長方形状に配置され、その中を小さな石材で埋めているように観察される。墓壙の平面形は長軸0.93m・短軸0.54mの橢円形を呈し、深さは0.51mを測る。断面形は東西方向は壁面が垂直に立ち上がり箱形にちかいが、南北方向は壁面の立ち上がりが緩やかで逆台形状を呈す。

SZA04（第130図）

東堀没谷の北端からやや東側の位置で確認した。墓壙の中央に40cm～50cm大のチャート製の大きな石材を配し、その周囲を10cm～20cmの砂岩の石材を充填している。石材は埋土の最上部しか認められず、他の同類とは異なる様相がみられる。墓壙は径0.9m程度の不整な円形を呈し、深さは0.57mを測る。断面は壁面が斜めに立ち上がり、桶形にちかい。主軸の方向はN-42°-E。

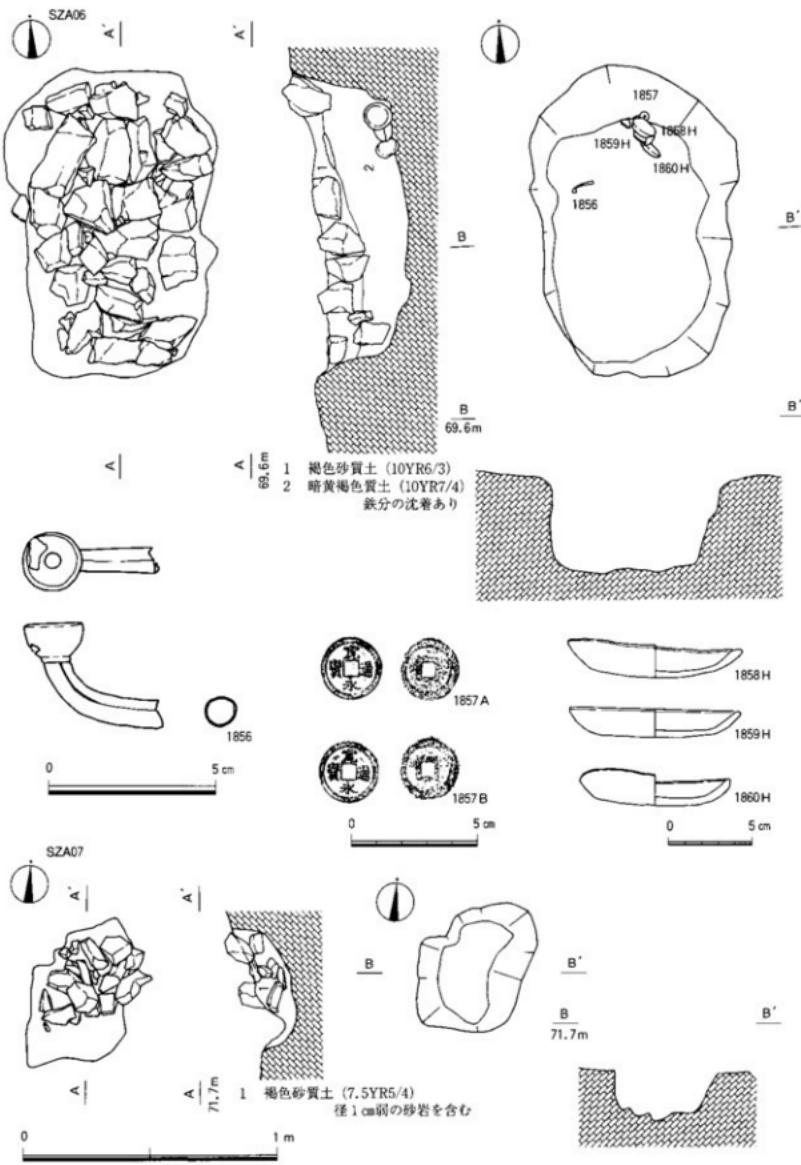
SZA05（第130図）

1号窯灰原掘削中に確認したもので、1号窯焚口下方の灰原グリッドⅡ2に位置する。埋土中からは白土原1号窯式に相当する小皿が出土し、これを本遺構の所属時期とすると本遺構は1号窯灰層中を掘削して構築されたものと考えられる。調査中は本遺構の存在は予想しておらず灰層掘り下げが基盤にちかいレベルに達した段階でようやく確認した。東壁は基盤層に達せず灰層中を掘り下げているため、灰層掘り下げ中に削平し、現状では正確な壁面を観察できない結果となってしまった。また、上部の構造についても同様、灰原掘り下げ中削平してしまったと思われる。確認面における墓壙の規模は径1m程度で、おそらく不整な円形ないしは橢円形を呈すと考えられる。墓壙の中央には30cm程度のチャート製の石材が認められ、その下部から完形の山茶碗の小皿が1点（1855Y）出土した。遺物は小皿以外に灰釉陶器の破片4点出土したが、これらは1号窯の遺物で混入品と考えられる。残存する深さは0.25m程度で断面皿状を呈す。

1855Yは口径8.4cm・底径4.35cm・器高1.7cmを測る小皿。口縁は底部から直線的に開き、端部は面取り気味である。外底面には回転糸切り痕を残し、内底面中央には静止指ナデ痕が認められる。

SZA06（第131図）

8号墳周溝北側で確認した。主軸方向はN-2°-Eを向く。長軸1.21m・短軸0.77mの隅丸長方形の平面形を呈し、深さは0.42mを測る。墓壙内には30cm程度のチャートの石材が充填され、南北端にある石材は短辺に沿うようにして配し、この中を長方形状に埋めているようにみえる。底面からは床面中央や北寄りと西寄りの2ヶ所から遺物が出土し、原位置を保っていると想定される。出土遺物は北寄りの箇所では寛永通宝6枚・土師皿3枚、東寄りの箇所ではキセルの煙管を確認し



第131図 SZA06・SZA07平面図・断面図

た。寛永通宝は6枚が鋸で付着し、孔には植物纖維がわずかに残存していたことから紐に通されていた可能性が高い。また、寛永通宝の底面には3cm大の板片が残存しており、何らかの木製容器が使用された可能性も考えられる。

出土した土師皿3個体はいずれも完形で良好な資料である。底部は丸底で座りの悪い個体（1857H）とほぼ平底で座りの良い個体（1859H・1860H）がある。いずれも腰部は丸みを帯び、口縁部は丸く仕上げられている。底部外周縁の指頭圧痕は3個体に共通してみられ、体部外縁の指圧痕がかすかにみられる個体もあるが明確には確認できない。また、いずれも底部内面はナデ調整であり、口縁部に歪みがみられる。色調は浅黄色～にぶい橙色を呈し、胎土中に1mm程度の赤褐色粒をわずかに含む。法量は1858Hが口径10.1cm・器高1.95cm、1859Hが口径9.95cm・器高1.65cm、1860Hが口径8.75cm・器高1.8cmである。煙管（1856）は雁首と一部の木質部が残存する。法量は長さ4.1cm・火直径1.5cm・接合部径0.8cm・重量4.3gを測る。残存状況は鋸による腐食が進行し、火皿の一部は欠損する。被葬者の生前の愛用品であろうか。銭貨はすべて古寛永であり、6枚が鋸で付着していた（1857）。取り上げ後に1枚がはがれ、その1枚（1857A）の外径2.49cm・内径1.92cm・孔径0.54cm・厚さ0.13cm・重さ2.9g。残り5枚（1857B）の表1枚の外径2.45cm・内径1.95cm・孔径0.55cm・厚さ0.16cmで、5枚の合計の重さ15.1gである。本遺構は出土した古寛永より17世紀前半に属するものと判断される。

SZA07（第131図）

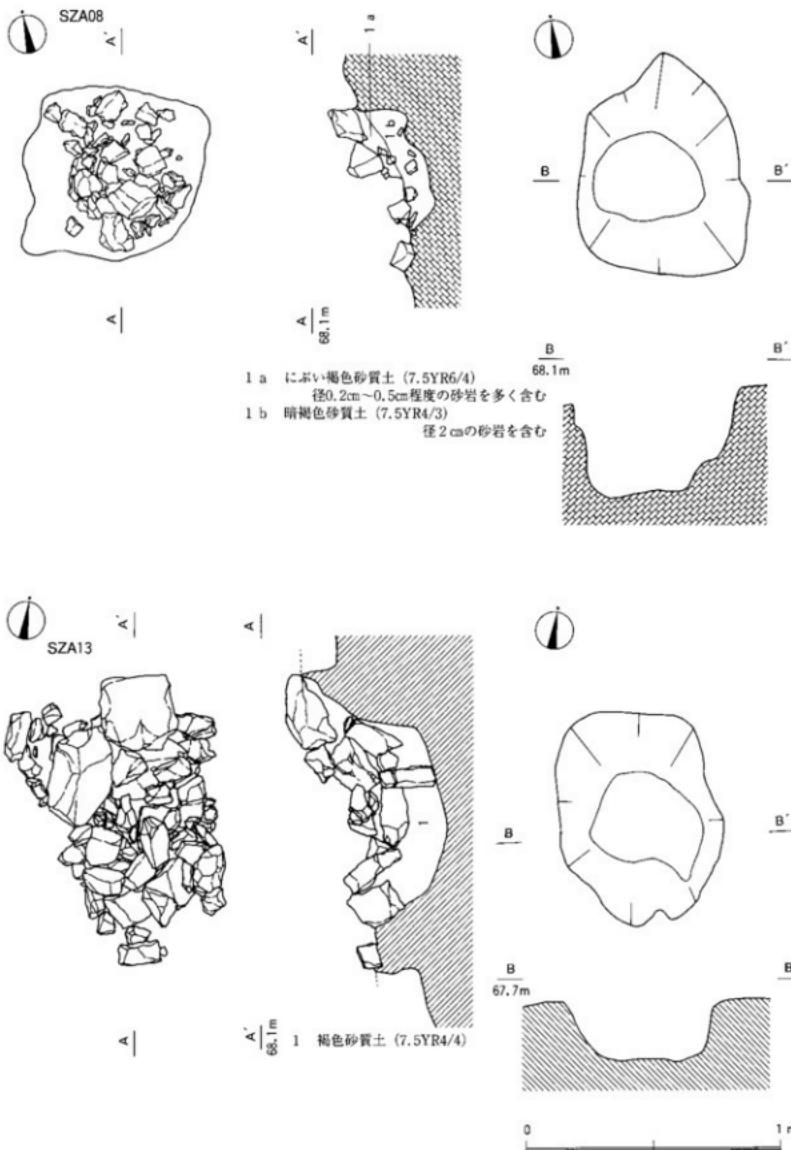
中央尾根上にあって10号墳の南東側に位置し、主軸はN-2°-Wを向く。その規模は他と比較して小さく、長軸0.59m・短軸0.35mを測る。平面形は橢円形を呈し、深さは0.15mと浅く断面は箱形にちかい。墓壙内には10cm内外のチャートの石材が充填される。

SZA08（第132図）

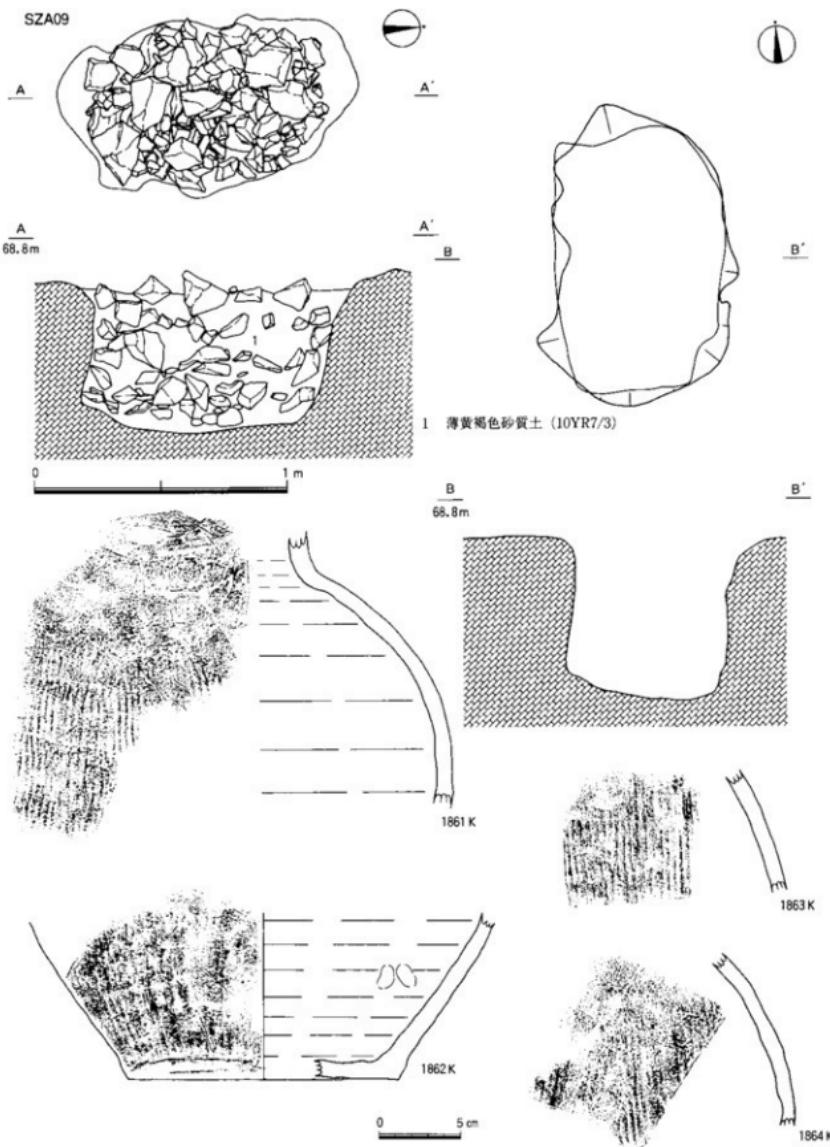
中央尾根上の10号墳石室開口部から10m程度南側へ斜面を下ったところで確認した。SZA07と類似して規模が小さく、平面形は長軸0.88m・短軸0.66mの不整な円形状を呈す。埋土中にみられる石材は小さく10cm以下のものが多い。また、その石材はチャート以外に砂岩のものが多数を占める。断面は箱形を呈すが、南北方向は逆台形にちかくなる。深さは0.45m程度である。主軸方向はN-11°-Eを向く。

SZA09（第133図）

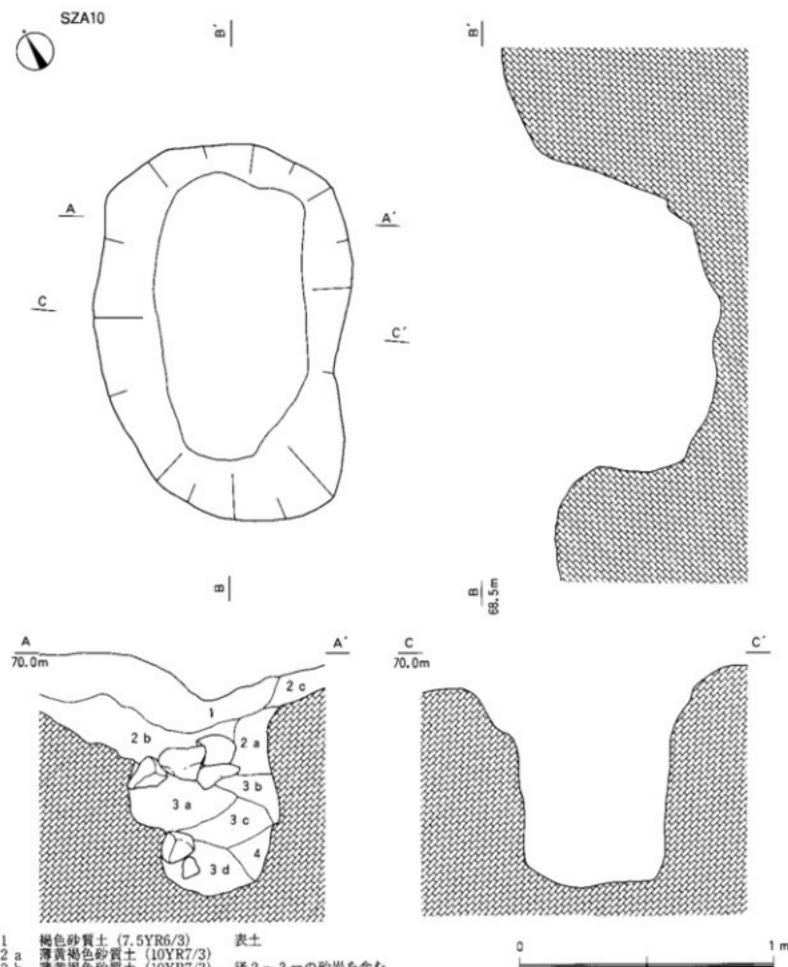
中央尾根上でSZA08の西側で検出した。20cm程度及び10cm弱のチャートの大小の石材が墓壙内部の底面までびっしりと充填されている。平面形は長軸1.15m・短軸0.66mの隅丸長方形を呈し、深さは0.68mを測る。断面は箱形を呈し、西壁・南壁は一部上場が下場よりオーバーハングする。充填された石材の隙間から灰釉陶器片が8点出土した。これらの灰釉陶器片は1号窯に属する甕の胴部片であると思われ、12号墳の周囲から出土した破片と接合関係を有することを確認した。本遺構は他の事例と酷似することから、所属時期は17世紀代である可能性が高く、出土した灰釉陶器片は本遺構の構築時期を示すものではなく墓壙へ石材を埋める過程で混入したものと考えられる。主



第132図 SZA08・SZA13平面図・断面図



第133図 SZA09平面図・断面図



第134図 SZA10平面図・断面図

軸方向はN-3°-Eを向く。

灰釉陶器片は接合の結果、4点を図示した。1863K・1864Kは体部の破片で、1861Kは頸部から体部にかけての破片である。1862Kは底部の破片で、底径は16.2cmを測る。いずれも外面に平行タタキ目を有し、内面の当具痕は認められない。

SZA10（第134図）

12号墳の北側に位置する。検出時に誤って石材をほとんど除去してしまったため、石材充填の状況はほとんど不明である。墓壇の形状が他の例と類似するため本類に含めた。墓壇の平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-30°-E。長軸1.5m・短軸0.98mを測る。深さは0.78m、断面は箱形でやや北壁の立ち上がりが緩やかである。

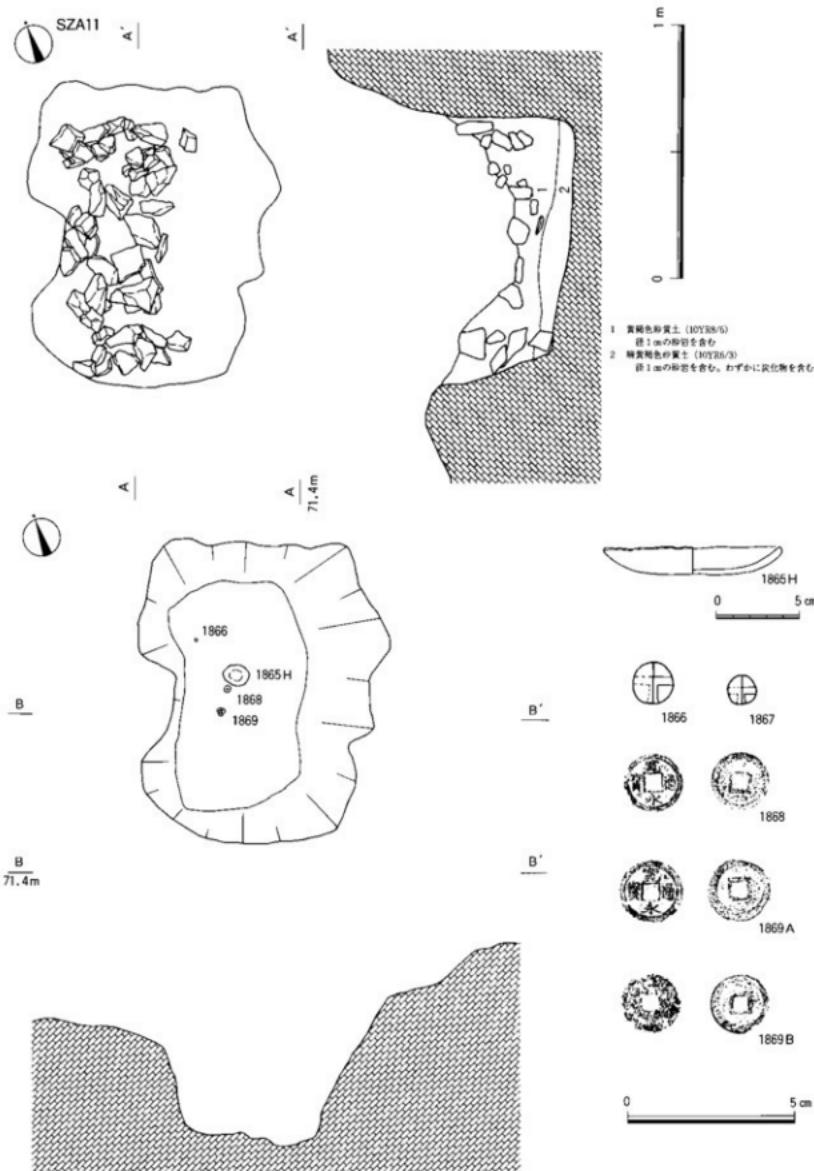
SZA11（第135図）

中央尾根上の11号墳南西側で確認した。主軸方向はN-20°-Eを向く。墓壇内には20cm弱のチャートの石材が充填されていたが、上半分の石材は検出中に誤って取り外してしまった。本来は墓壇上面まで石材を埋めていたものと思われる。平面形は長軸1.19m・短軸0.62mを測る隅丸長方形を呈す。断面は箱形をなし、深さは北壁側で0.98m、南壁側で0.5mを測る。遺物は床面上で土師皿1点（1865H）・寛永通宝2点（1枚1868・5枚1869）・数珠玉1点（1866）を確認した。1867の数珠玉は掘削中に出土した。土師皿・寛永通宝は床面中央で、数珠玉は中央からやや北へ偏ったところで検出した。

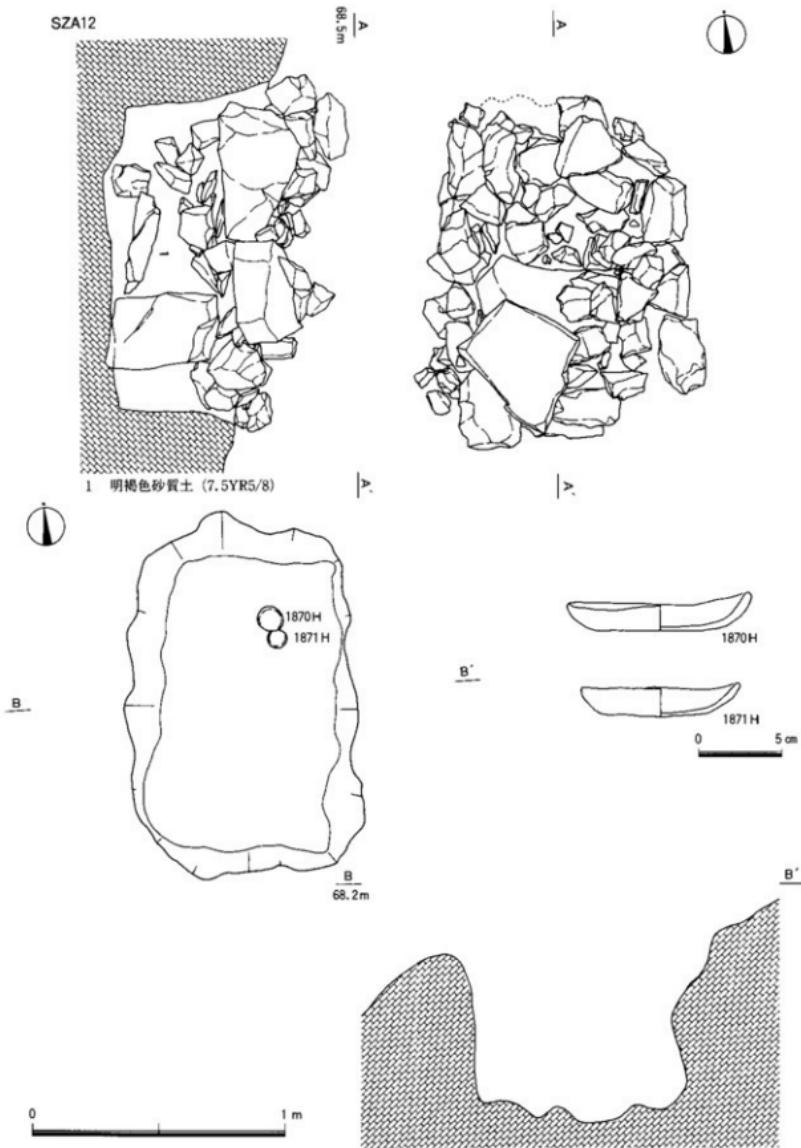
土師皿（1865H）は完形で、底部は平底で丸みを帯びて口縁部が立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられ、底部外面中央付近には指頭圧痕がみられるが、他の調整方法は不明である。口縁部は若干歪んでおり、色調はぶいい橙色を呈する。法量は口径10.4cm・底径1.6cm。寛永通宝はすべて古寛永に相当し、1枚（1868）と5枚（1869A・B）が鋳で付着したものが分かれて出土しが、六道銭として埋納されたと判断される。1868は外径2.53cm・内径1.91cm・孔径0.59cm・厚さ0.12cm・重さ2.4g。1869Aは表側1枚の外径2.32cm・内径1.89cm・孔径0.62cm・厚さ0.12cmで、重さは5枚全部（1869A・B）で12.1gである。数珠玉は1867は白濁するもののいずれもガラス製である。2点ともT字状の孔が認められることから、数珠の房の部位に相当する。1866は直径1.25cm・孔径0.3cm・重さ2.4g、1867は直径0.8cm・孔径0.15cm・重さ0.7gを測る。

SZA12（第136図）

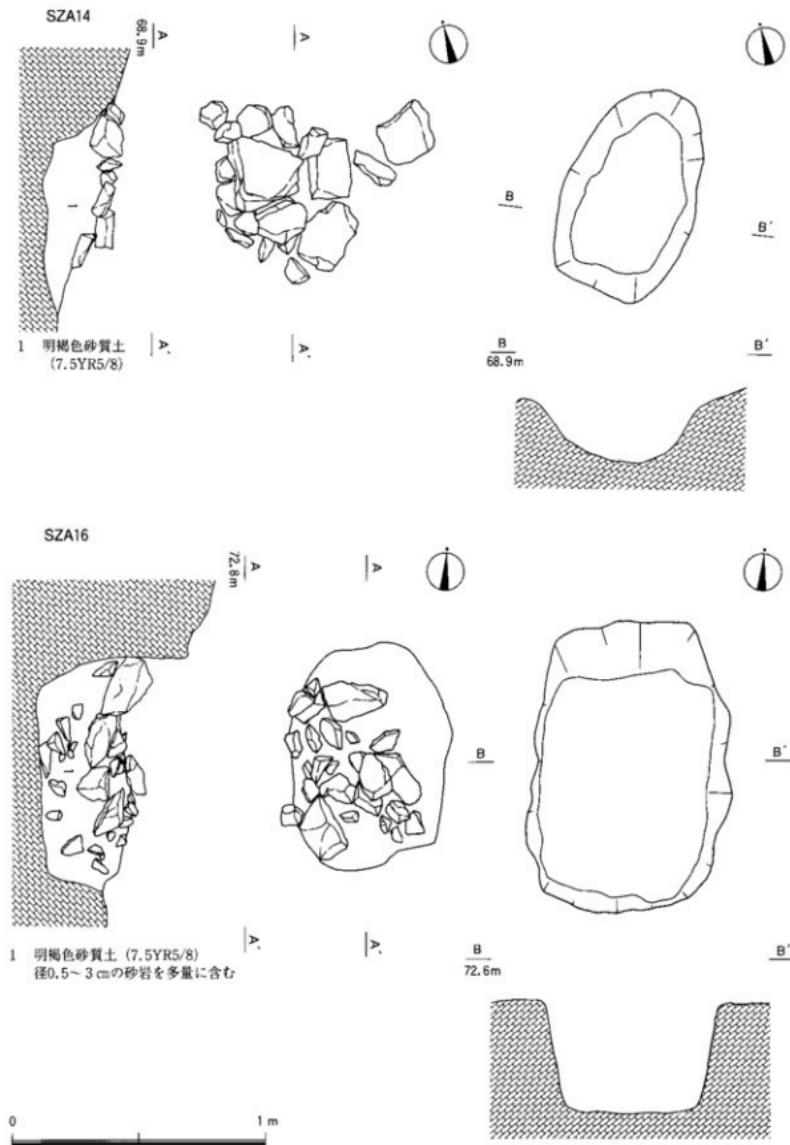
中央尾根の稜線からやや西側に下った東向き斜面上に位置する。主軸方向はN-4°-Eを向く。平面形は長軸1.34m・短軸0.93mの長方形を呈し、本類中では最大の規模をもつ。墓壇内部には大量の石材が充填される。断面を観察すると墓壇の下部は比較的石材はまばらで、上部で密集して積まれている。上部の石材はまず10~20cm大の石材が散かれ、その上に60cm大の大型石材を中央に置き、その周囲及び上部を10~20cm大の石材でさらに覆っているように観察される。これら上部に積まれていた石材は一部西側に転落している。石材を積み上げた高さは墓壇の上場より最大で40cm程度高いことから、石材を封土で覆った可能性もある。床面からは中央やや北側で土師皿が2点出土した。



第135図 SZA11平面図・断面図



第136図 SZA12平面図・断面図



第137図 SZA14・SZA16平面図・断面図

断面は箱形を呈し、壁面の整形が精緻である。

出土した2点（1870H・1871H）の土師皿はいずれも完形の資料。底部は平底で体部が緩やかに立ち上がる。口縁部は丸く仕上げられ、若干の歪みが認められる。底部外面周縁及び体部外面に指頭圧痕があり、底部内面には調整痕が認められない。色調は浅黄橙色を呈し、胎土中1mm程度の赤褐色粒を多く含む。

SZA13（第132図）

中央埋没谷で確認したもので、基盤より上のⅡ層中から掘削しているため、一部墓壙の周囲を掘り下げすぎてしまった。石材は墓壙の上部に密集してみられ、その大きさは10~30cm大まで様々である。北側に設置された石材は長さ50cmにちかく、とくに大型の石材を用いている。墓壙の平面形は長軸0.85m・短軸0.64mの楕円形を呈す。壁高は北側で0.4m程度で、断面形は箱形となるが南北方向では北壁の立ち上がりが緩やかなため逆台形状を呈す。主軸方向はN-8°-W。

SZA14（第137図）

長軸0.84m・短軸0.52mの楕円形を呈し、深さは0.35mと浅い。主軸方向はN-15°-Eを向く。石材が墓壙の上部に認められ、大きさは20cm強と10cm弱の大小のものが認められる。断面形は箱形ではなくやや皿形にちかく、南壁は立ち上がりはわずかである。

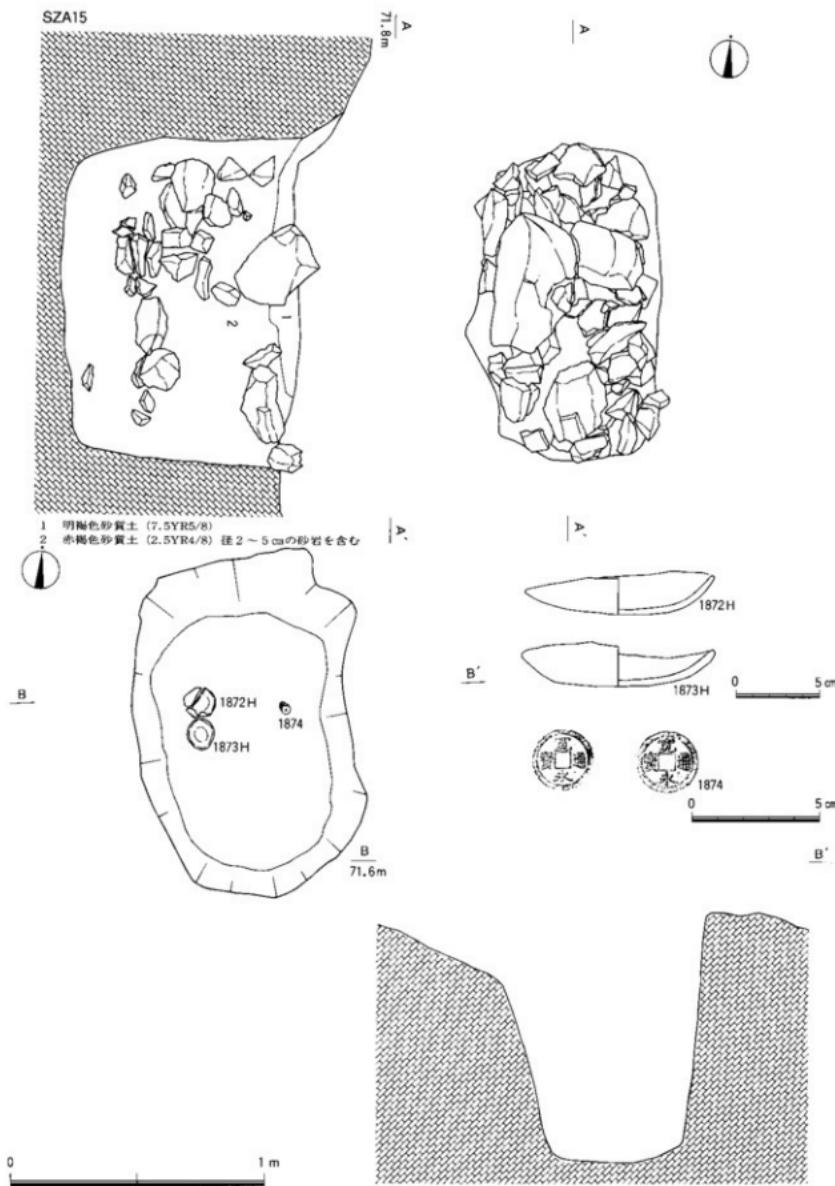
SZA15（第138図）

中央埋没谷の北端に位置する。石材は墓壙上部ではあまり密集していないが、下部では20cm内外の石材が密集する。断面では観察されないが上部の中央には50cm程度の大きな石材が配され、SZA12と類似する傾向がある。断面形は整然とした箱形となり、深さは最大で0.99mと本類中で最も深い。長軸1.2m・短軸0.84mで平面形は長方形を呈す。床面では中央の東側で土師皿2点（1872H・1873H）、西側で寛永通宝6枚（1874）が出土した。主軸はN-3°-Wを向く。

寛永通宝は6枚（1874）が付着するが、おそらくすべて古寛永と考えられる。表1枚は外径2.49cm・内径1.94cm・孔径0.59cm・厚さ0.13cm・重さは6枚で20.4gである。土師皿は2つ（1872H・1873H）とも完形品で丸底である。口縁部は底部から緩やかに立ち上がり、縁部は丸く仕上げられる。底部から口縁部外面にかけて指頭圧痕が残る。色調は1873Hが浅黄橙色、1872Hが灰白色でやや焼成が悪い。1873Hの胎土中には1mm程度の赤褐色粒がわずかに認められる。法量は1873Hが口径11.15cm・器高2.35cm、1872Hが口径11.05cm・器高2.25cmを測る。

SZA16（第137図）

中央埋没谷の北端にあり、SZA15の北側にある。主軸方向はN-4°-W。墓壙内の石材は10~20cm程度で、砂岩が多い。石材は墓壙の上部に多くみられ、墓壙掘り下げの土を戻す際に砂岩も一緒に乱雑に埋め戻したようにみえる。平面形は長軸1.15m・短軸0.72mを測る長方形を呈す。断面は南北・東西の両方向とも箱形を呈す。



第138図 SZA15平面図・断面図

SZA17（第139図）

SZA16の東側に位置する。墓壙の平面形は長方形で、主軸はN-31°-Wを向く。規模は長軸1.25m・短軸0.71mを測る。墓壙内にみられる石材はSZA11と類似し、墓壙上面にあわせて0.9m程度の板状の大型の石材が墓壙に蓋をするようにして設置される。この大型の石材の上下に20~30cm大の石材が認められる。上下の石材は砂岩が大半を占める。積まれた石材の上面は墓壙上面より高く、この上にはすでに流失した封土が伴った可能性もある。断面は箱形を呈するが、南北方向は壁面の立ち上がりがやや斜めとなるため、逆台形状となる。床面からは土師皿3枚・寛永通宝6枚が出土した。寛永通宝は床面中央やや東よりで検出し、六道錢と考えられる。土師皿は1875H・1876Hが床面中央より北東側、1877Hが床面中央より南東側と分かれて出土した。

出土した寛永通宝はすべて古寛永で、1880は外径2.39cm・内径1.95cm・孔径0.54cm・厚さ0.13cm・重さ2.2g。1879は2枚が付着し、表の1枚が外径2.46cm・内径1.97cm・孔径0.54cm・厚さ0.14cmで、2枚の合計の重さが5.6gである。1878は3枚が付着する。表1枚は外径2.45cm・内径1.98cm・孔径0.58cm・厚さ0.11cmで、合計の重さは8.9gである。土師皿は3点ともほぼ完形で、いずれも丸底の底部から口縁部が緩やかに立ち上がり、端部は丸く仕上げられるがやや歪んでいる。1877Hは底部～口縁部外面にかけてかすかな指頭圧痕がみられる。1875H・1876Hは底部～口縁部外面にかけて指頭圧痕がみられるが、その他の調整は不明である。色調はいずれもにぶい黄橙色を呈し、胎土中に1mm程度の赤褐色粒を含む。1876Hは口径11.05cm・器高1.8cm、1877Hは口径10.9cm・器高2.35cm、1875Hは口径10.95cm・器高2.3cmを測る。

SZA18（第140図）

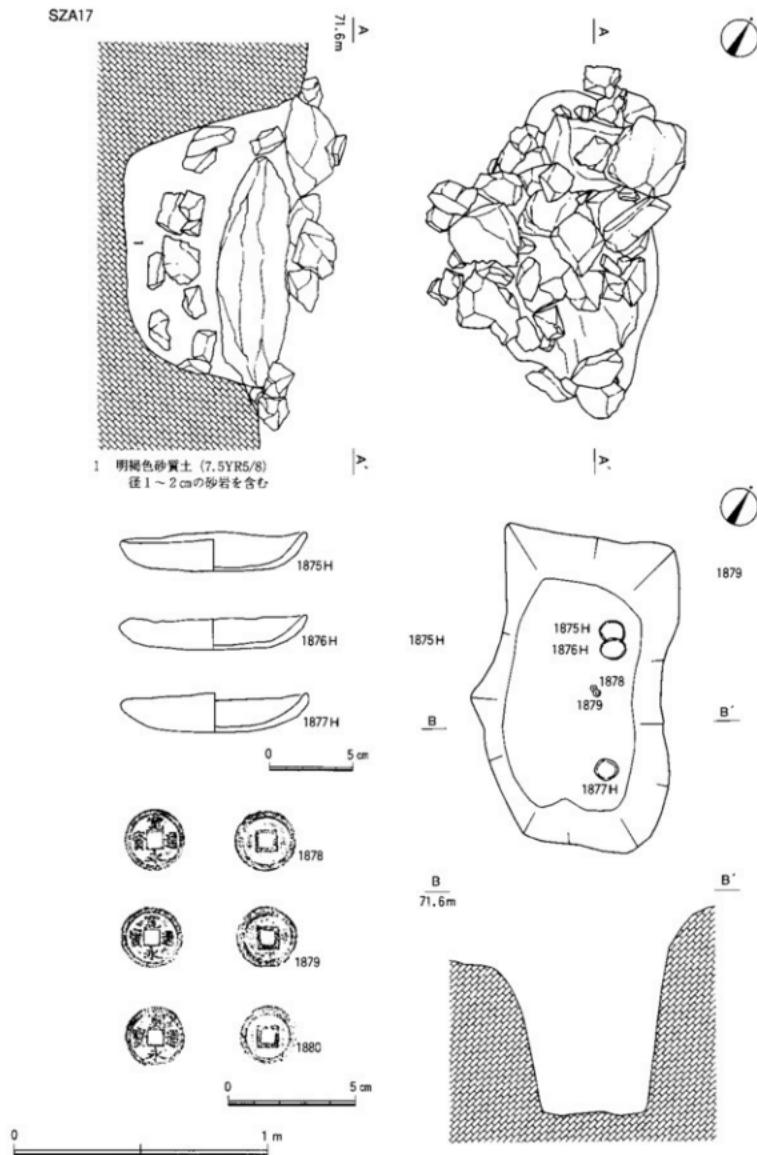
中央埋没谷の北東端で検出した。平面形は長軸0.77m・短軸0.44mの梢円形を呈し、小型の部類に入る。墓壙上面には10cm弱の石材が認められる。深さは0.4m程度で、東西方向の断面形状は箱形を呈するが、東西方向では壁面の立ち上がりが緩やかで床面が狭いため、桶形となる。主軸方向はN-13°-W。

SZA19（第140図）

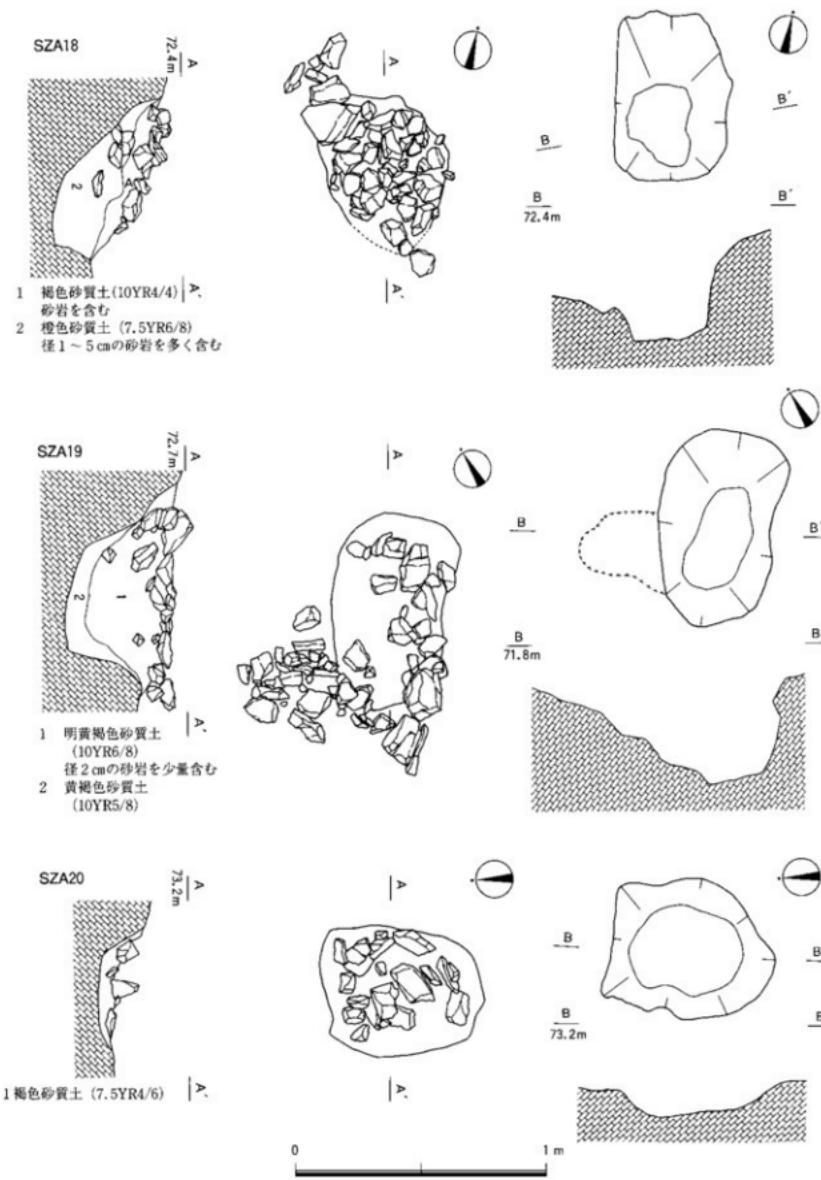
SZA18の北側に隣接する。墓壙上面には10cm程度の小型の石材が認められるが、一部南側の斜面下方へ流失している。平面形は梢円形で長軸0.78m・短軸0.43m・深さ0.48mを測る。断面形は東西・南北両方向ともそれぞれの壁面が非対称で、やや壁面の成形が難である。東西方向では東壁がオーバーハング気味に立ち上がり、西壁は緩やかな傾斜を示す。南北方向は北壁が緩やかで南壁が垂直気味に立ち上がる。主軸はN-31°-Eを向く。

SZA20（第140図）

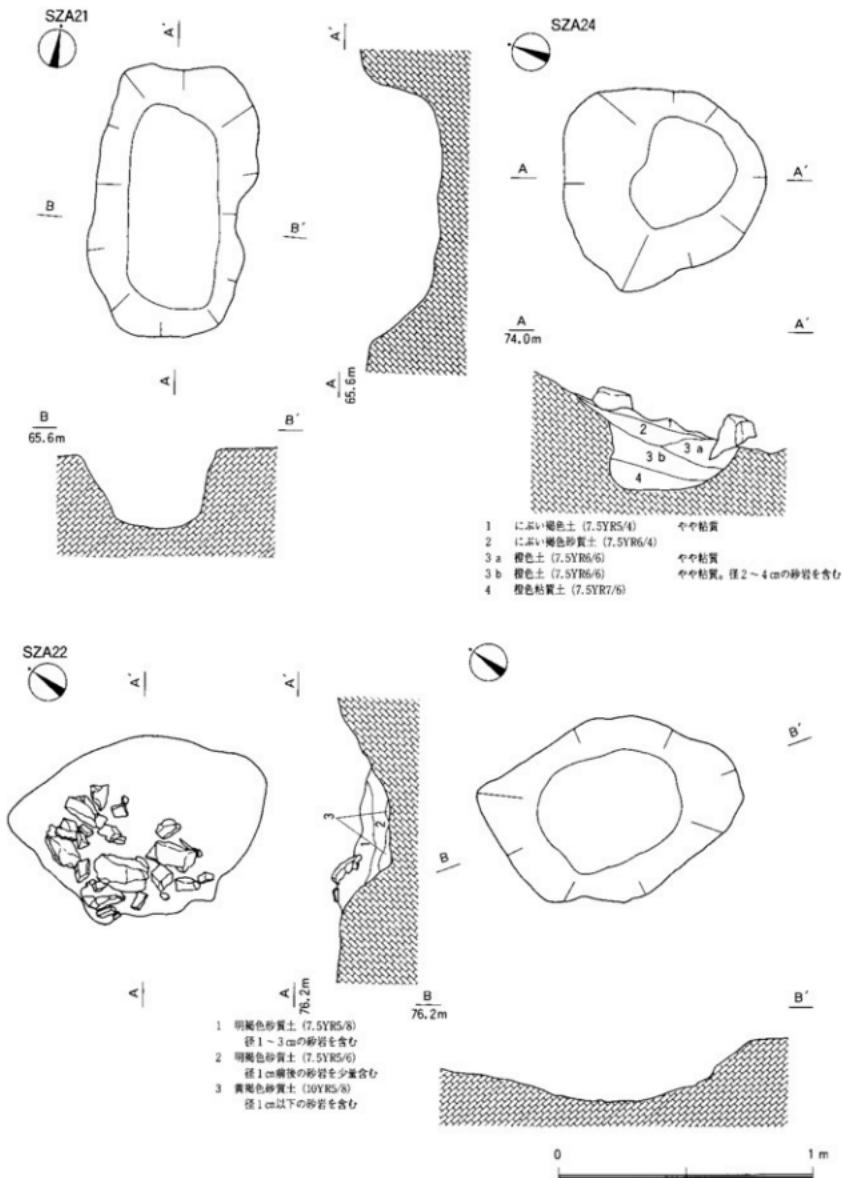
SZA19の北東側にあり、中央埋没谷の最北端に位置する。墓壙上面に10cm程度の石材を伴うがその数は少なく、すでに大半が流失したものと思われる。平面形は円形にちかく、長軸0.64m・短軸0.56mを測る。主軸方向はN-92°-E。深さは0.37m程度で、南北方向の断面形状は箱形にちかいが東西方向は壁高が低く皿状を呈す。



第139図 SZA17平面図・断面図



第140図 SZA18・SZA19・SZA20平面図・断面図



第141図 SZA21・SZA22・SZA24平面図・断面図

SZA21（第141図）

3号窯焚口の東側を削平して構築されている。3号窯の調査中は確認作業を怠り、3号窯の断割をおこなった際によく本遺構の存在を確認した。このために石材を伴うか判然としないが、平面形・断面形状からみて本類の他の事例と類似するため本類に含めた。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.16m・短軸0.63m・深さ0.4mを測る。埋土中には3号窯の土器片が混入していた。主軸方向はN-8°-W。

SZA22（第141図）

西尾根の北端にある。検出中一部石材を除去した後、本類の遺構であると判断したため、石材が南半分に偏在してみえるが、当初は墓壙上面を10cm~20cm弱の小型の石材が覆っていた。墓壙は長軸0.98m・短軸0.72mの楕円形を呈し、深さは0.2m程度と浅い。断面は壁面の立ち上がりが緩やかなため皿状を呈す。主軸方向はN-55°-E。

SZA23（第142図）

14号墳の南側、斜面下方に位置する。主軸方向はN-68°-Eを向く。墓壙上面にある80cm大の板状石材は大型で、当初は14号墳の石室の石材が転落したものと考えていたが、この石材を除去したところ下部から墓壙を検出したため、本類の遺構と判断した。東側には後述するSZB06が隣接し、本遺構はSZB06を削平して設営されている。墓壙上面を充填する石材は前記の大型石材の他は小型で10~20cm大のものが多く、大型石材の西側から東側にかけて集中してみられる。墓壙は長軸1.16m・短軸0.73mの長方形を呈し、深さは0.87mと深い。断面は壁面がほぼ垂直に立ち上がり箱形を呈す。

SZA24（第141図）

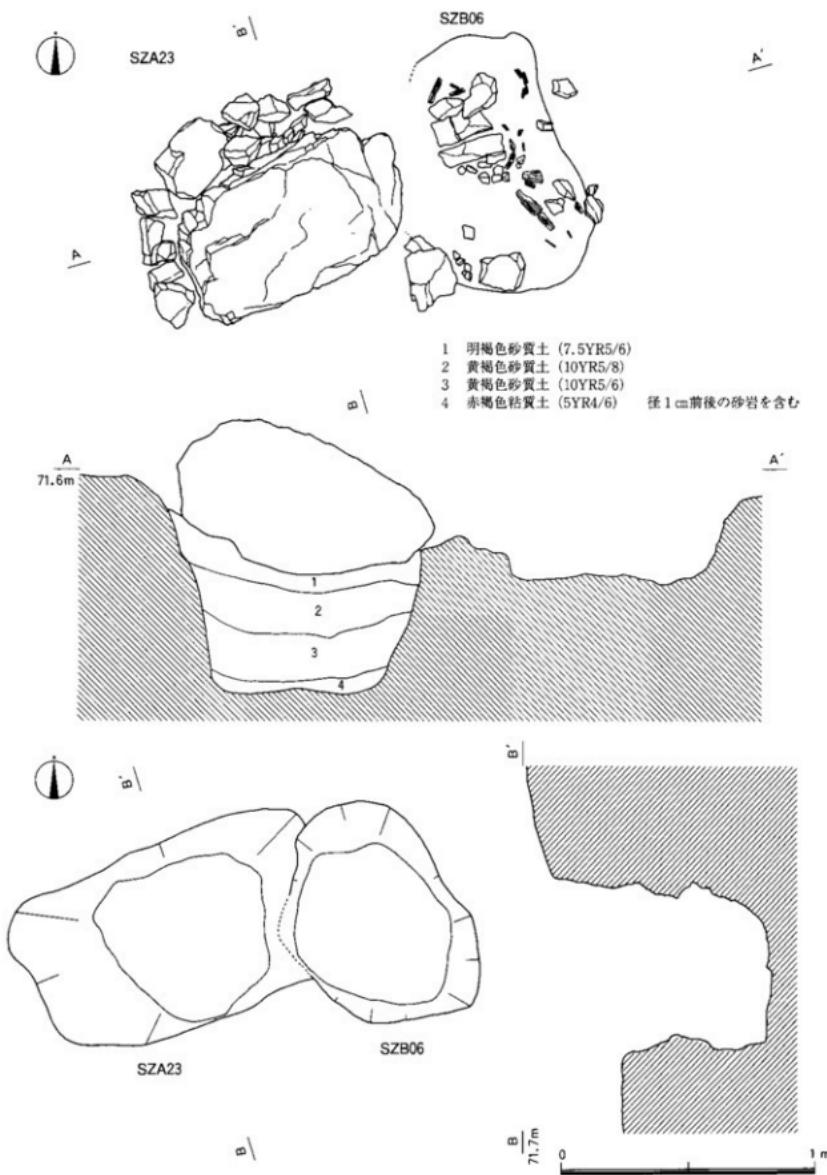
西尾根の14号墳東側で確認した。石材はわずかしか残存していないかったが、埋土からみて本類の遺構と考えられる。平面形は主軸をN-18°-Wに向ける楕円形で、長軸0.92m・短軸0.7mを測る。深さは0.3m程度。断面は箱形を呈するが、やや南壁の立ち上がりが緩やかである。

SZB01（第143図）

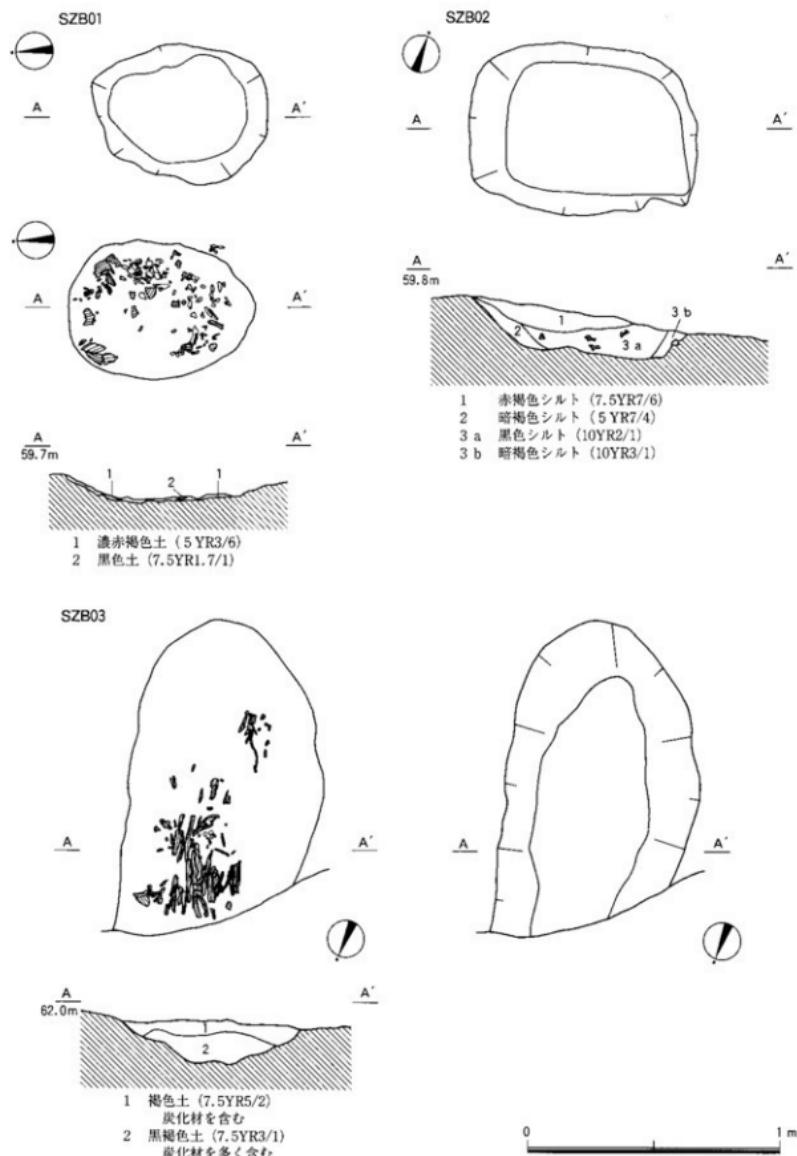
東埋没谷のはば南端に位置する。主軸はN-3°-Eを向く。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.71m・短軸0.53mを測る。深さ0.16m程度と浅い。炭化材・骨片が壁面の周囲に沿うようにしてみられ、壁面も被熱を受け赤色化している。遺物が出土しなかったため、時期は特定できない。

SZB02（第143図）

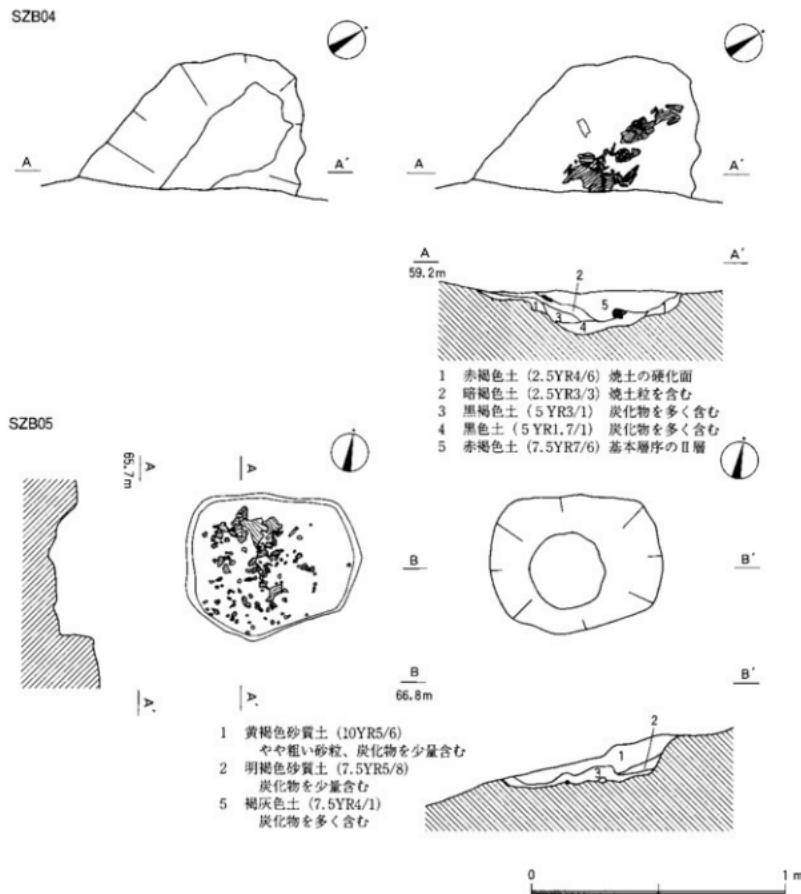
SZB01と同様に東埋没谷の南端で主軸をN-111°-Wに向けて位置する。平面は長軸0.92m・短軸0.67mの隅丸長方形を呈す。深さは0.15mと浅く、埋土の下層では炭化材が確認され、SZB01程ではないが、床面が被熱を受けている。



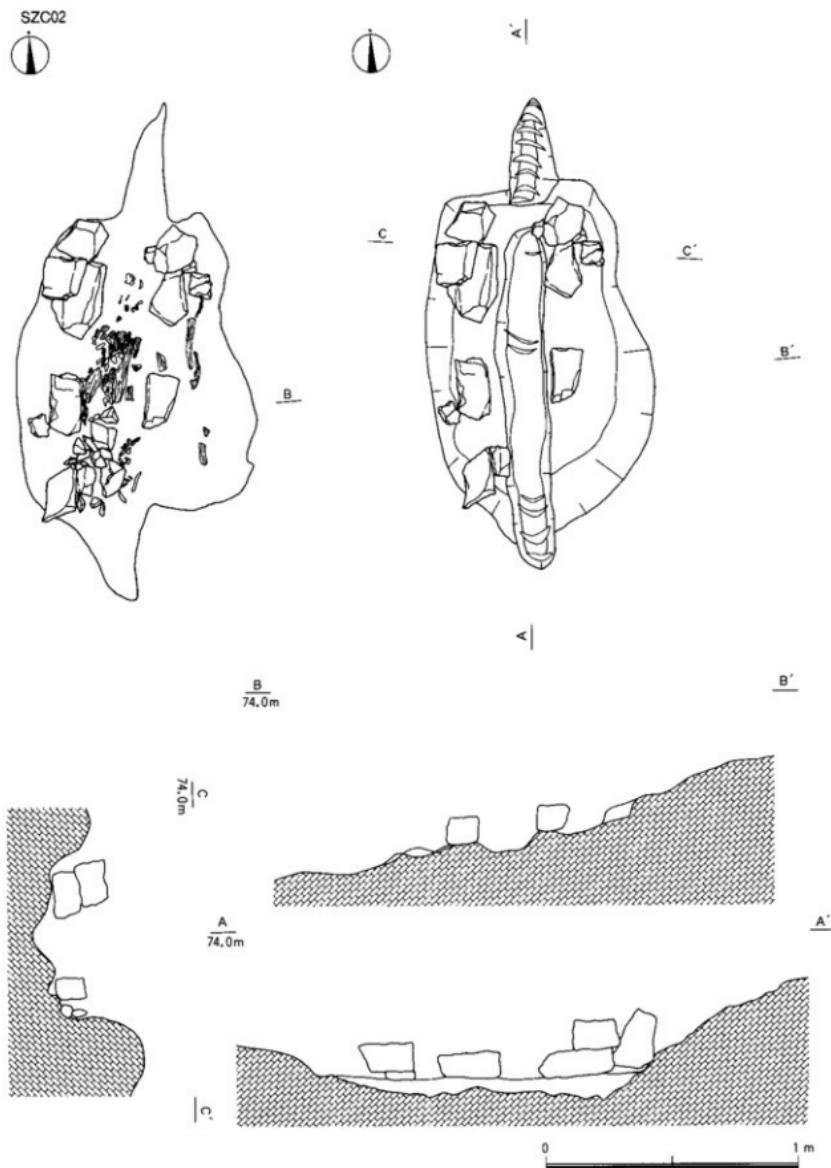
第142図 SZA23・SZB06平面図・断面図



第143図 SZB01・SZB02・SZB03平面図・断面図



第144図 SZB04・SZB05平面図・断面図



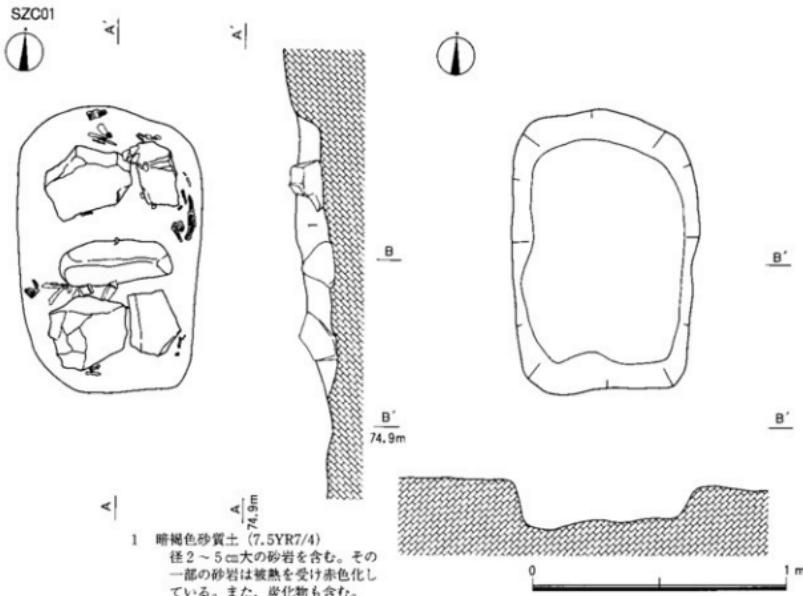
第145図 SZC02平面図・断面図

SZB03（第143図）

東埋没谷南端において調査区の排水用のためにトレーナーを掘削したところ、その南壁断面で確認した。このため、平面形の北半分はトレーナー掘削の際に削平してしまった。規模は現存の長軸が1.21m、短軸が0.78mを測り、おそらく実際の長軸は2m弱程度が予想されその平面はかなり細長い橢円形を呈するものと考えられる。主軸はN-22°-Wを向き、主軸方向にそって配された炭化材が検出された。床面は被熱し、炭化材の隙間及び下部からはわずかな骨片が出土した。深さは0.17mと浅く、断面は皿状を呈す。

SZB04（第144図）

SZB03と同じく排水用トレーナー南壁において確認されSZB03の西側に隣接しその主軸方向をそろえて位置する。その主軸方向はN-20°-Wを向く。平面形はトレーナーによって北半分が削平されたため全形は不明だが、現存では長軸・短軸とも0.73mを測る。おそらく平面形及び規模はSZB03に類似するものと考えられる。深さは0.16m程度で断面は皿状を呈す。内部からは主軸方向にそって炭化材が検出され、その下部からは骨片が出土した。



第146図 SZC01平面図・断面図

SZB05（第144図）

中央埋没谷の中央付近にあり、SZA12から西側に10m弱離れたところで確認した。平面形は長軸0.68m・短軸0.57mの楕円形を呈し、深さは最大で0.14mと浅い。断面は皿状を呈し、床面からは炭化材が検出された。遺物の出土は皆無である。主軸方向はN-78°-E。

SZB06（第142図）

SZA23に隣接し、その西側を削平されている。埋土中には多くの炭化材を含み、わずかに骨片も確認した。床面はあまり強い被熱部位が観察されなかったため、長期にわたる使用はなかったものと推測される。平面形は楕円形で、長軸0.93m・短軸0.7m（推定）を測る。主軸方向はN-20°-Wを向く。断面は深さが0.3m程度で、逆台形にちかい形状を示す。

SZC01（第145図）

10号墳の北側の中央尾根上に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.14m・短軸0.72mを測る。主軸の向きはN-2°-W。墓壙内には30cm大のチャートの石材4枚が四隅に配置され、中央には短軸方向にそって長さ40cm強の細長い石材が置かれている。中央の石材は強く被熱を受け赤色化していた。これら石材の周囲で炭化材・骨片が出土した。炭化材は石材と壁面との間から出土する傾向があり、骨片は大半が石材の上面に接して残存していた。深さは0.14mと浅く、壁面は被熱し赤色化していた。遺物は伴わないが古磁気測定の結果、1380±30年の年代と判明した。深さが浅く、墓壙としての機能を想定するには不十分であるため、火葬場の可能性も充分に考えられる。

SZC02（第146図）

11号墳の北側で検出した。長方形の平面形を有し、中央には南北方向に伸びる通風孔が認められることから火葬場と考えられる。通風孔はN-2°-Eを向き、規模は長軸約1.4m・短軸0.72mを測る。通風孔の長さは1.85mである。壁高は0.3m程度で、通風孔はさらに床面から0.1m程度掘り下げられ、南北両端が突出して緩やかに立ち上がり、自然地形に連なる。通風口の東西両側には20cm程度の石材がみられ、北側では2段に積まれている。南半分は砂防工事により削平を受けて、一部、石材が抜き取られていると考えられ、おそらく通風孔の両側には2段程度に石材が並べられていたと推測される。埋土中からは炭化材及び細かな骨片が出土し、壁面が被熱を受けていた。とくに北壁及び北側に伸びる通風孔が強く被熱されている。また、通風孔南北両端の床面では工具痕が顕著に残る。遺物は皆無だが、炭化材のC14年代測定よりその年代は1310～1390年と考えられる。

第6節 その他の遺構と遺物

本節では本章第5節までに触れなかった遺構・遺物について概観する（第147図）。

SD02（第148図～第150図）

中央埋没谷開口部の東側から東へ30m程度東西方向に伸びる溝を確認した。溝の伸びる方向及び断面形状・埋土の状況からみて、自然流路ではなく人為的な溝と考えられる。幅は確認面で2.5m程度である。深さは東端から次第に深くなり、A断面付近でその深さは最大となり次第に西側に向かって浅くなり、西端で自然地形に連なる。溝底面の絶対高は東西ではさほど変わらず、自然地形が東から西へ向かって下がる傾斜面のため、溝西端が自然地形に連なるものと思われる。東側のA断面では深さ1m弱程度、B断面では0.8m程度を測る。断面形はV字状にちかいが、壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土は上層では基本層序のⅡ層に相当する土層の堆積が認められ、下層で褐色を呈し遺物を包含する土層が認められる。下層からは多量の遺物が出土し、その接合状況も良好である。遺物の出土状況は東側に偏在してみられ、1886S・1888Sのように溝北側で出土した破片と接合する資料も認められる。遺物の出土が底面では認められなかったため、大半の遺物は何らかの要因で斜面上方より溝内に流入してきたものと思われる。1881H・1884Y・1898Y以外の遺物はすべて須恵器でその時期は古墳石室内出土須恵器と大差がない。1881HはSB01・02周辺から流入した松河戸式の高坏で、1898Yは3号窯に帰属する瓶Ⅲ類である。1884Yは脇之島3号窯式期の山茶碗。大半の遺物が古墳石室内出土須恵器とほぼ同時期であることからみて、本溝は古墳構築時期にちかい時期に構築された可能性が高く、その後に1884Y・1898Yが流入したものと考えられる。1898Yは3号窯からかなり離れた地点から出土したことになり、いかなる状況で本溝まで運ばれたのかその原因について知るべくもないが、偶發的な要因とにみるにはやや疑問が残る。

1881Hは松河戸式の屈折脚の高坏の脚部と思われる。調整は器面の摩滅が著しく観察不可能。1882S・1883S・1885S・1886Sは口縁部と体部の境が突出する坏身。口縁部は短く内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部はなだらかな弧をえがき、底部の処理はヘラ切り後は未調整である。1887S～1891Sはいわゆる無台坏身で古墳石室内から多く出土しているものに酷似する。丸底の底部から口縁部は外傾しながら立ち上がる。端部は丸くおさめ、外底面はヘラ切りの痕跡が残存する。1888Sは他の資料に比べてやや器高が低い。1892S・1894Sは高坏の資料。おそらく同一個体と思われる。坏部は無台坏と形状が類似する。脚部は裾部のみが残存する。端部を折り曲げ垂下させている。1893S・1895Sは短頸壺。いずれも口縁部がくの字に外反するが、やや外反が弱く直立気味である。壺部は若干肥厚気味に丸くおさめる。体部はやや胴長気味で肩部が強く張らない。1896Sは平瓶でほぼ完形の資料。偏球状の体部から、口頸部がわずかに外反しながら立ち上がる。口縁部は屈曲部をもって頸部から上方に立ち上がり、端部は丸くおさめられる。体部上半にはボタン状の貼付文が加えられ、2号墳石室内出土の資料（242S）にも類似する。1897Sは体部下半を欠損するが、口縁部は全周する。おそらく擂鉢の口縁部と思われる。端部内側には内傾面が認められる。1884Yは脇之島3号窯式期の体部の浅い無高台の山茶碗。口縁部は直線的に開き、外底面には回転糸切り痕をそのまま残す。1898Yは3号窯の製品で瓶Ⅲ類に相当する。口頸部・体部上半を欠損し全形は不明だが、残存する体

部の形状は瓶Ⅲ類に酷似する。外面の一部には自然釉が厚く掛かっている。

SX05（第41図・第13図118～121）

3号墳の開口部西側に隣接する土坑。規模は長軸3.1m・短軸2.5m程度で、平面形は楕円形である。主軸方向はN-179°-Eに向ける。深さが0.2m～0.3m程度を測り、東側から西側に向かって浅くなる傾向がある。埋土は褐色土が堆積し、小玉は4点が出土した。小玉以外の遺物はまったく認められないとため、小玉の所属時期を特定することはできない。また、小玉は埋土中からの出土中であり、土坑の性格に結びつくものは不明である。

SX05（第151・152図）

長軸0.65m・短軸0.56mの楕円形の平面形を有す。主軸方向はN-8°-E深さは0.15m程度で埋土には炭化材も含まれていた。壁面も被熱を受け、本遺構に伴う移動式竈（1901H）と須恵器の鉢（1900S）が出土した。検出段階では住居跡などの炉跡ではないかと想定して周囲を検出したが、本遺構と関係があると思われる遺構を確認できなかったため、SX05と呼称することにした。

出土した移動式竈（1901H）は接合の結果、掛け口～体部上半と基部～体部下半の破片に復元することができた。これを図上で合成復元し図示した。このため、法量などの計測値は推定値である。掛け口の直径は37.1cm、上面には2.2cm程度の平坦面をもつ。体部の外面には目の粗い縦方向のハケ目が認められ、中央には直径3.5cm程度の円孔が存する。把手が剥落したとも考えられるが、ほぼ正円で断面も面取り気味の調整が観察されるため、把手はなく2個1対の円孔を有するものと考えられる。体部内面にも縦方向のハケ調整が観察されるが、その後に棒状の工具によってナデ調整をおこなっているのが認められる。基部は端部が面取り気味で端部にもハケ調整が認められる。基部内外面のハケ目は横方向である。基部径は42.9cm。底はすでに剥落し、その剥落痕にはハケ目が残存する。剥落痕の位置からみて曲げ底の可能性が高い。1900Sは須恵器鉢の破片。1901Hの破片の下部から重なるようにして出土した。口縁部が内湾し、端部はやや尖り気味である。体部外面には格子目状のタタキ目が残り、内面はヘラ削りが認められる。1900Sが7世紀代と考えられることから、1900Hも同様の時期と想定し得る。

本遺構で移動式竈が出土した意味について少し触れておく。当然、住居内での使用を考えるのが自然だが、調査の経過からするとそのような状況はない。また、土器の表面には強く被熱を受けた部分も認められないことから長期にわたる日常的な使用は想定しにくい状況にある。移動式竈は「非日常的用の第二の竈」との考え方（稻田孝司 1978）もみられることから、何かの祭祀に関わるものであった可能性も考えられる。豊田市江古山遺跡の事例では古墳に隣接する地域から移動式竈が出土しているため、古墳との関わりのなかで祖先崇拜の祭祀用として移動式竈が使用された可能性を想定されている（森泰通 1997 三河考古10号）。本資料の場合も古墳群のなかで移動式竈を確認した事例として先の事例と類似するため、同様にして祭祀用として移動式竈の存在を想定しておきたい。

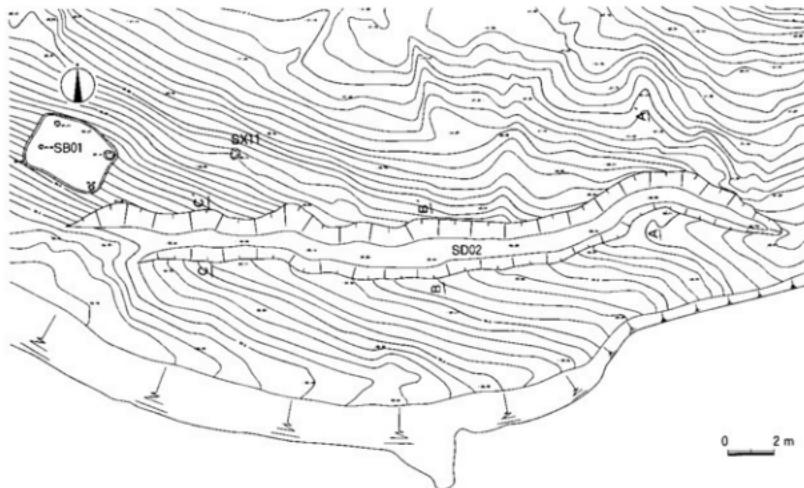
SX06（第151・152図）

長軸1.56m・短軸0.3m程度の規模を測り、平面形は細長い楕円形を呈す特異な形状を示す。主軸

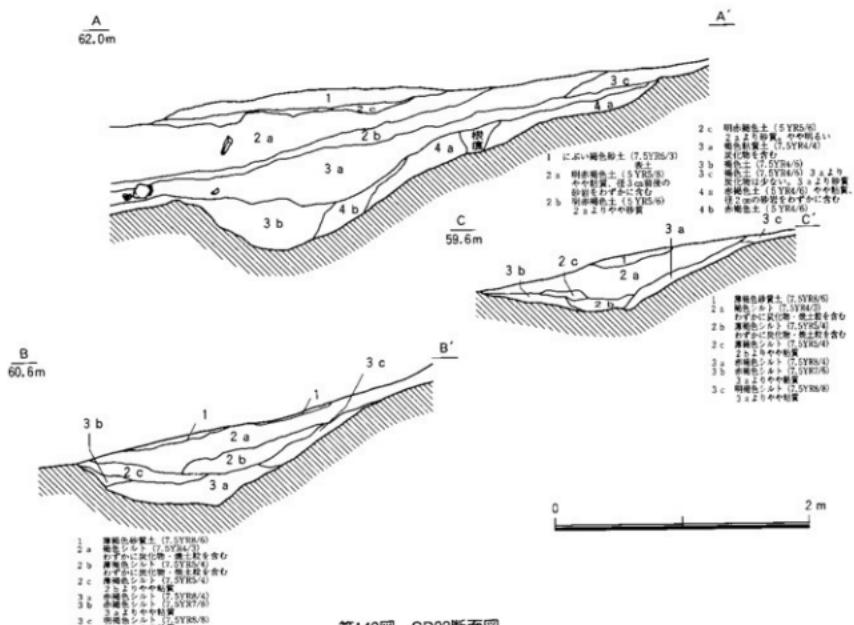


S = 1 : 1000
0 50m

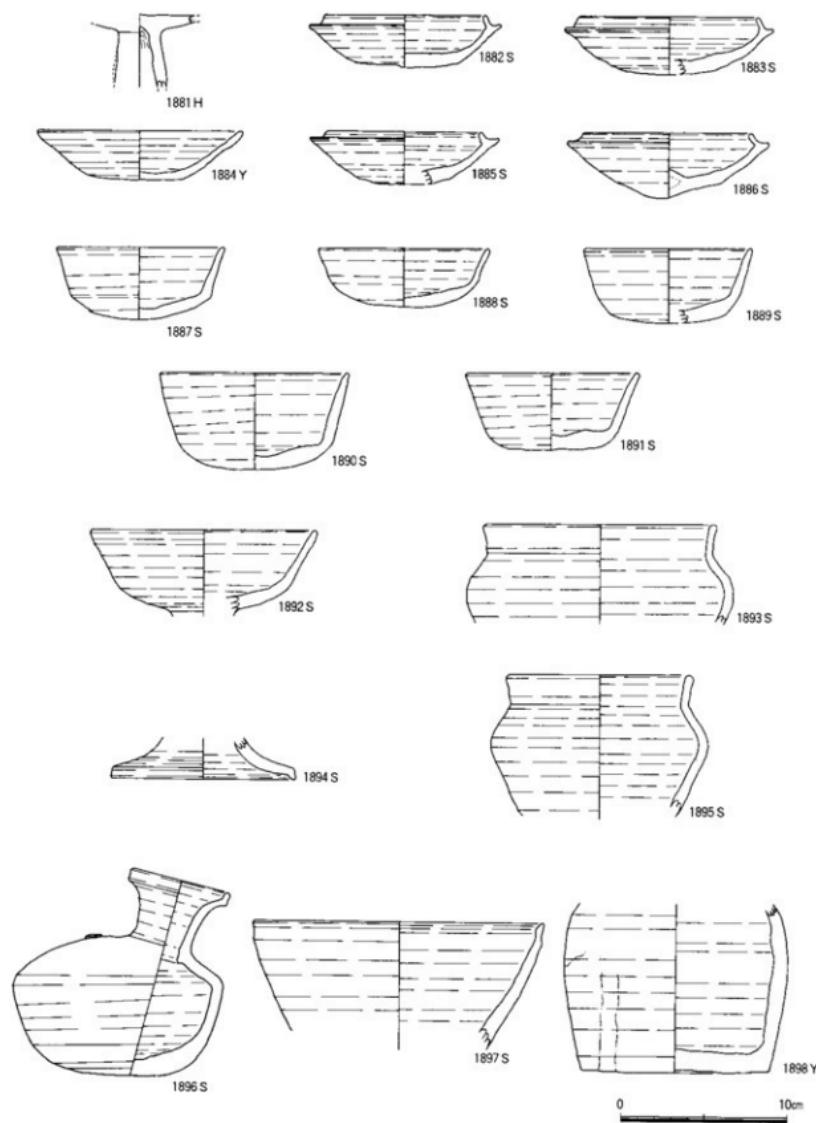
第147図 その他の造橋位置図



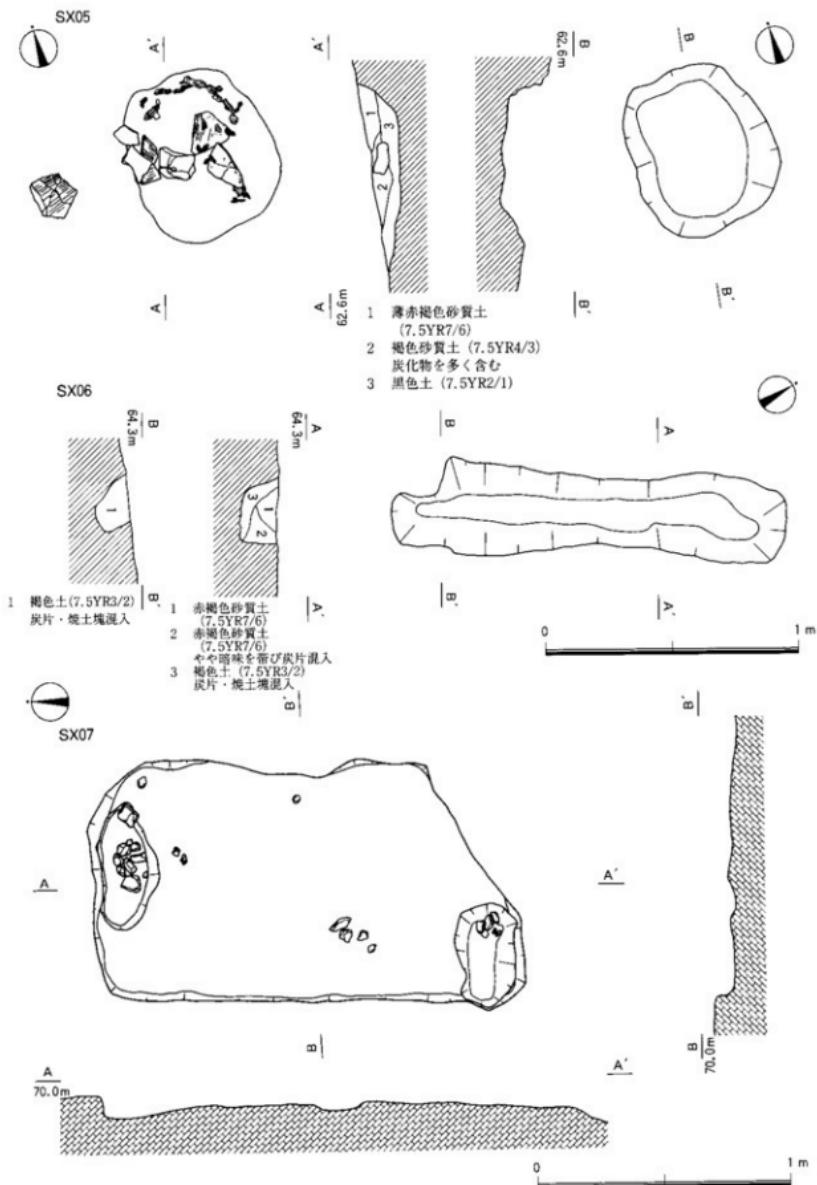
第148図 SD02平面図



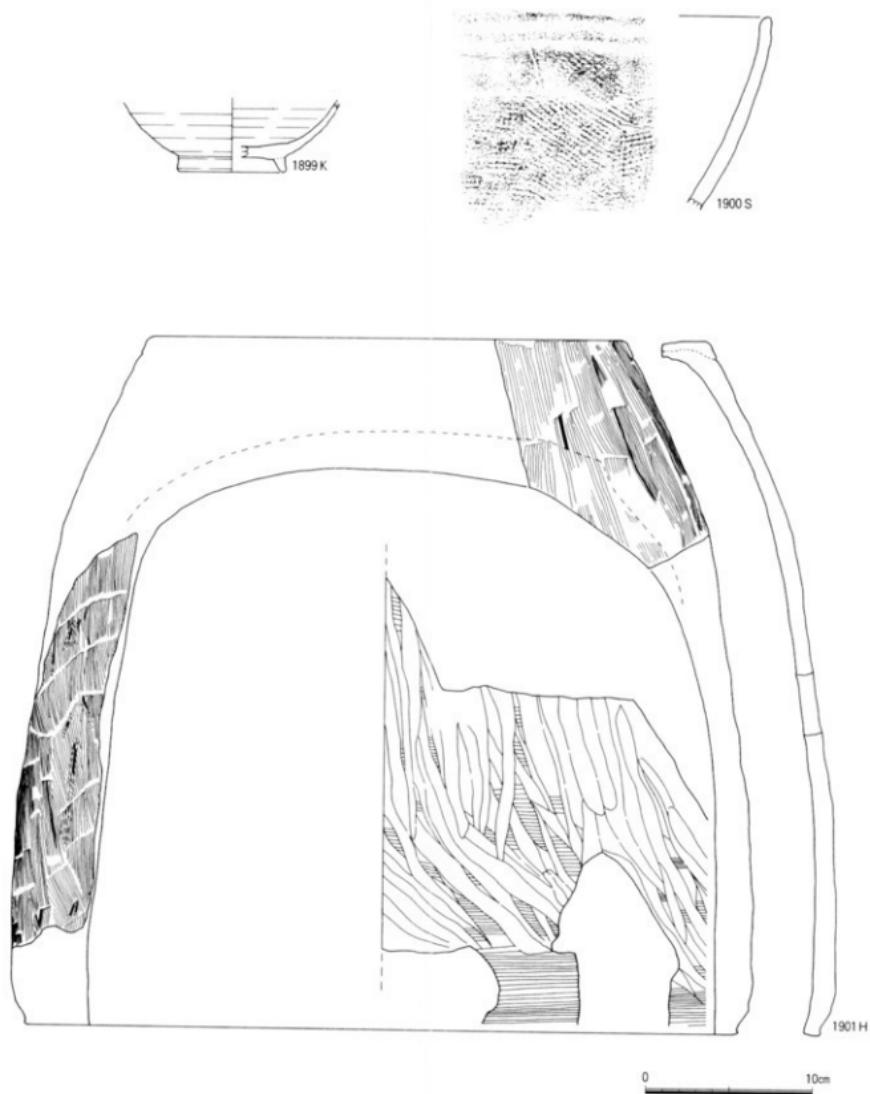
第149図 SD02断面図



第150図 SD02出土遺物



第151図 SX05・SX06・SX07平面図・断面図



第152図 SX05・SX06出土遺物

はN-31°-Eを向ける。深さは0.15m程度と浅く、断面は溝状でU字形となる。底面ちかくでは主軸方向にそった炭化材が確認でき、壁面は被熱を受け赤色化及び硬化していた。SZC02のような遺構の通風孔とも考えられるが、その上部遺構はまったく確認されず、また削平を受けた様子も観察されなかった。1号窯の灰釉陶器が埋土中から出土したが（1899S）、混入品である。

出土遺物の1899Sは口縁部を欠損するが、1号窯の碗ⅡB類の底部と思われる。やや短めの細長い高台がつき、外底面には回転糸切り痕が残る。底径は6.2cmを測る。

SX07（第151図）

東理没谷の北端にあり、SZA01～SZA03に隣接する。平面形は隅丸長方形を呈し、住居跡にもみえるが、ピット・炉跡は検出されなかった。規模は長軸3.4m・短軸1.85mを測る。壁面は北側を中心にして東西両側のコの字形に残存し、その高さは最大で0.1m強と低い。壁面はさらに東西両壁面では南方向に向かって低くなり、南東・南西の両端では自然地形に連なる形状を示す。北側及び南北隅は周囲の床面より2～5cm程度低くなる部位が認められる。この部位に10～20cm程度の砂岩が集中していたが、とくに人為的な行為によるものとは考えられなかつたため除去した。埋土は基本層序のⅡ層に類似する土層が薄く堆積し、遺物はまったく出土しなかつた。主軸はN-24°-Wを向く。

SX08（第153図）

7号墳の斜面上方で確認した。平面形は正方形にちかいが、壁面はL字状に北側と西側で認められる。斜面が東に向かって下がるため南側と東側の壁面が不必要であったと考えられる。平面形の規模は一辻4.8m程度である。壁面は北側で最もよく残存し、砂岩の基盤を削平して形成している。最大の壁高は20cm程度で床面から斜めに立ち上がる。埋土は基本層序Ⅱ層に類似する土層が認められ、北側には20～30cm大の砂岩が集中していたが、床面より浮いていたため本遺構に関わるものかは判断がつかなかつた。床面はほぼ平坦で、北側の北壁に沿う状況で周囲より10cm弱下がる箇所が認められる。仮に南北方向を主軸とすると主軸はN-51°-Wを向く。埋土中からは須恵器坏身の破片が出土したが、混入品で本遺構の所属時期を示す遺物とは考えられない。

SX09（第154図）

10号墳開口部の南西側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸4.0m・短軸3.8mを測る。基盤の砂岩を削平して平坦面を形成しており、南西方向に斜面が下がるため、残存する壁面は北側及び東側の二辺のみでそれぞれの北西端・南東端は自然地形に連なる形状を示している。最大の壁高は60cm程度である。前記のSX07・08と同様に、北壁・東壁に沿うようにして20cm大の石材が集中する傾向が認められ、これらの石材除去後の状況は周囲の床面より5～10cm程度低くなっていた。遺物はまったく出土せず、所属時期は不明である。主軸方向はN-25°-W。

SX10（第153図）

12号墳の西側にある自然の谷筋で20～30cm程度の石材を2～3段に積んだ井戸状の遺構を検出した。確認した石材上面は径0.4m程度の円形の形状が認められ、底面は砂岩の基盤を0.4m程度の方形

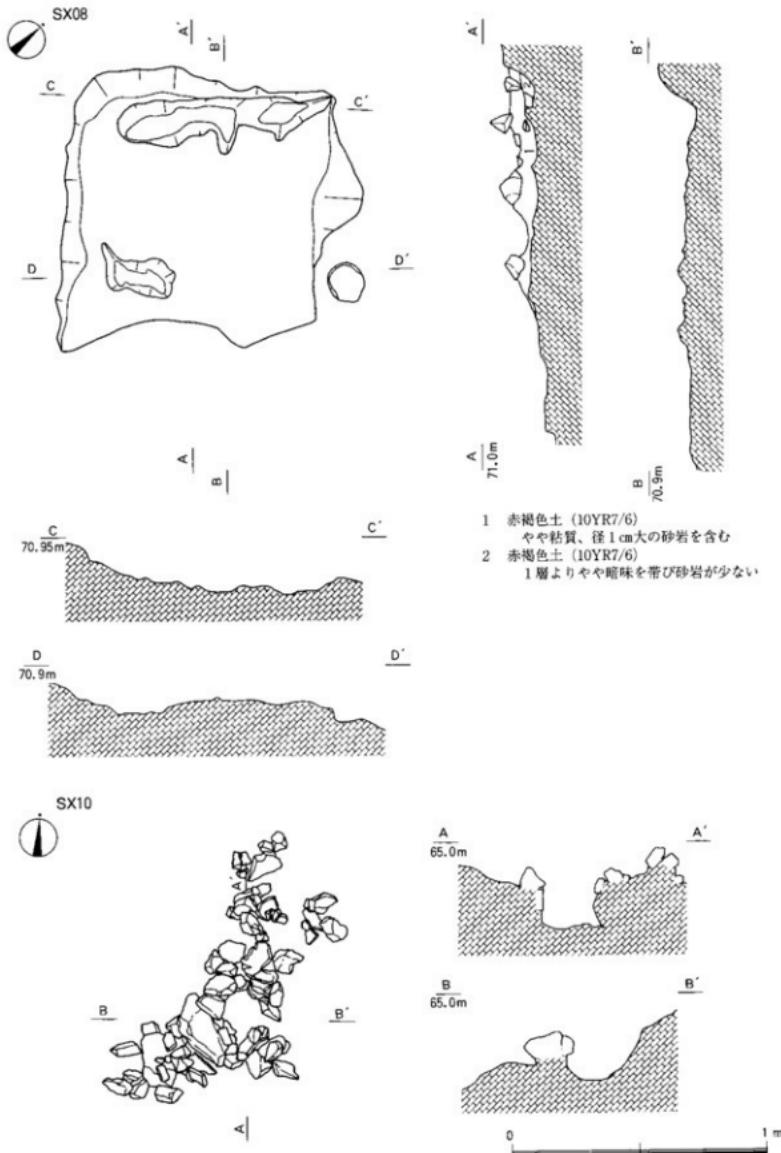
に削平し形成している。基盤は0.2m弱程掘り下げられ、その上から石材を積み上げている。周囲には石材が散乱しており、本来の形状は現状よりも高く石材を積み上げていた可能性もある。しかし、仮に井戸と仮定すれば石組の周囲の土を取り除いた状況で確認しており、その確信を得る状況には至らない。遺物は内部からはまったく出土せず、周囲からは須恵器片が出土している。その須恵器片は、斜面上方の古墳から流入してきたものと考えられる。

SX11（第154図）

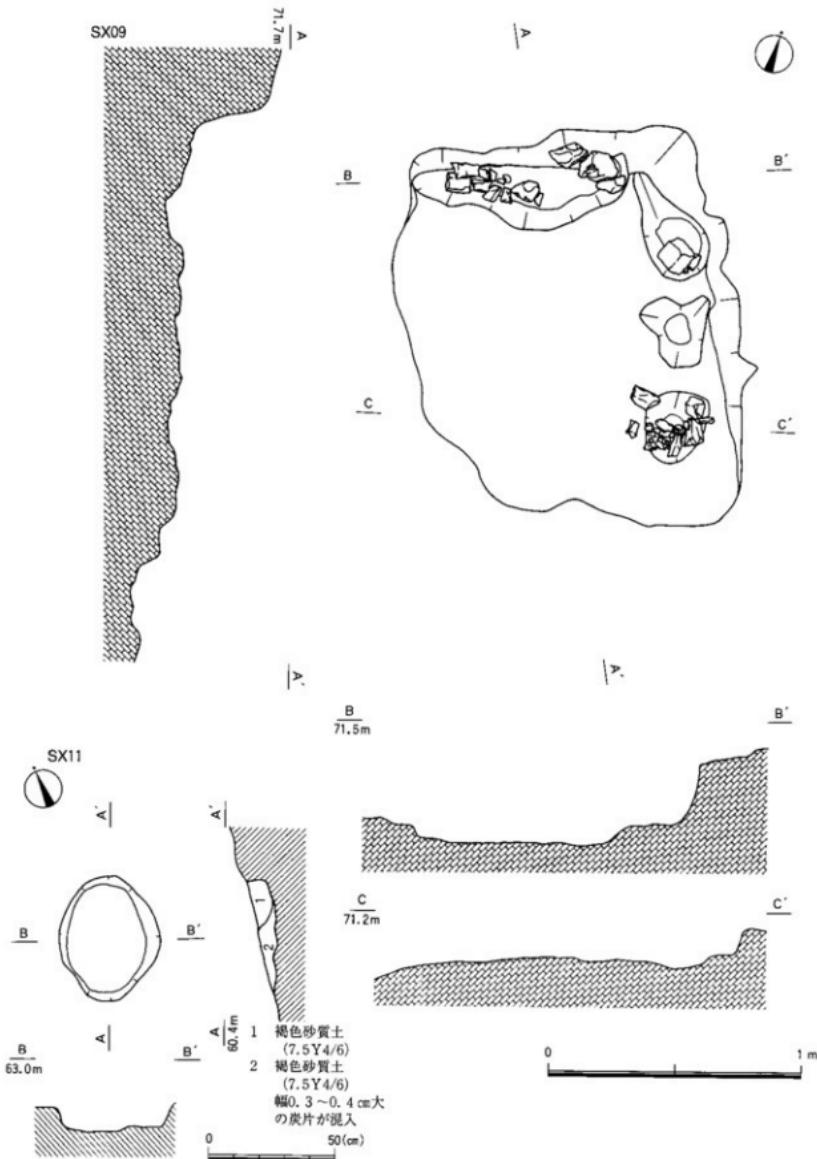
SD02の北側に隣接する。深さは10cm弱とかなり浅いが、埋土からは炭化材が認められ、壁面は被熱を受けていた。平面形は長軸0.98m・短軸0.8mの楕円形で、主軸方向はN-24°-Eである。断面は皿状を呈す。周囲からは松河戸式の土師器片が多く散布していることからみて所属時期が松河戸式期である可能性が高いが、埋土中からはまったく遺物が出土しなかったため断定できない。なお、出土した炭化材の放射性炭素年代測定からはBC530年の結果が得られている。

ピット群（第155図・第92・93表）

ピットは東埋没谷の南半分を中心に81基検出した。その分布は東埋没谷の南半分でも東斜面際に集中している。なかには第155図に示したように規則的な配置らしきものも3カ所で看取される。I群のピット群は2間×2間の建物跡のようにもみえるが、西側のピットの配列が不規則である。II群のピットは楕円形状にピットがめぐっているが、I群同様、ピットの配置が不規則である。III群は横列の可能性もあるが、間隔が等間隔でない。以上、I～III群のピット群は何らかの施設である可能性があるが、規則性がなく断定できない。また、前述したI～III群のピット群に限らず、すべてのピットにおいて遺物の伴出がなく、その所属時期が明らかにできない。しかし、いずれのピットの堆積をみても埋土は基本的土層のⅢ層に起因すると思われ、おそらくピットの埋没はⅡ層の形成段階と考えられる。仮にピットの埋没を基本層序Ⅱ層の形成時とみると、Ⅱ層あるいはその下層であるⅢ層中の遺物中で最も新しい遺物は大畠大洞4号窯期の山茶碗であることから、ピット埋没の時期は14世紀末頃以前との推定が成り立つ。この仮定はあくまで推測の域を出ないため、一つの可能性として指摘するにとどめておく。



第153図 SX08・SX10平面図・断面図



第154図 SX09・SX11平面図・断面図



第155図 東埋没谷ピット位置図

第92表 ピット一覧表(1)

番号	埋 土	規 模	深さ	断面
1	灰褐色シルト(7.5YR4/2)	0.33×0.26m・円形	0.1m	ゆるいV字形
2	にぶい茶褐色シルト(10YR5/3)・炭化材を含む。	1.06×0.95m・ほぼ円形	0.46m	ゆるいV字形
3	にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)・炭化材を含む。	0.55×0.48m・やや楕円形	0.16m	ゆるいV字形
4	にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)・炭化材を含む。	0.5×0.3m・楕円形	0.11m	ゆるいU字形
5	黒褐色シルト(7.5YR3/1)・焼土粒を含む。	0.5×0.41m・楕円形	0.14m	ゆるいU字形
6	黒褐色シルト(7.5YR3/1)・焼土粒を含む。	0.42×0.35m・楕円形	0.1m	ゆるいU字形
7	黒褐色シルト(7.5YR3/1)・焼土粒を含む。	0.6×0.49m・楕円形	0.16m	ゆるいU字形
8	黒褐色シルト(7.5YR3/1)・焼土粒を含む。	0.43×0.41m・円形	0.15m	ゆるいU字形
9	黒褐色シルト(7.5YR3/1)	0.38×0.35m・円形	0.15m	ゆるいU字形
10	黒褐色シルト(7.5YR3/1)	0.44×0.44m・円形	0.16m	ゆるいU字形
11	黒褐色シルト(7.5YR3/1)	0.37×0.36m・円形	0.14m	ゆるいU字形
12	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.22×0.19m・円形	0.11m	ゆるいU字形
13	黒褐色シルト(7.5YR3/1)	0.31×0.24m・楕円形	0.2m	ゆるいU字形
14	黒褐色シルト(7.5YR3/1)	0.42×0.31m・楕円形	0.34m	ゆるいU字形
15	黒褐色シルト(7.5YR3/1)・焼土粒・炭化材を含む。	0.38×0.38m・円形	0.4m	ゆるいV字形
16	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.2×0.18m・ほぼ円形	0.08m	ゆるいU字形
17	暗褐色シルト(7.5YR3/3)	0.38×0.19m・楕円形	0.31m	ゆるいV字形
18	暗褐色シルト(7.5YR3/3)	0.48×0.38m・ほぼ円形	0.2m	ゆるいU字形
19	暗褐色シルト(7.5YR3/3)・炭化材を含む。	0.22×0.15m・楕円形	0.19m	ゆるいV字形
20	にぶい褐色シルト(7.5YR5/4)・焼土粒を含む。	0.5×0.24m・楕円形	0.18m	ゆるいU字形
21	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.23×0.2m・やや楕円形	0.09m	ゆるいU字形
22	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.34×0.28m・ほぼ円形	0.14m	ゆるいU字形
23	にぶい褐色シルト(7.5YR5/4)	0.5×0.42m・ほぼ円形	0.14m	ゆるいU字形
24	にぶい褐色シルト(7.5YR5/4)	0.18×0.11m・やや楕円形	0.1m	ゆるいU字形
25	にぶい褐色シルト(7.5YR5/4)	0.62×0.53m・やや楕円形	0.32m	ゆるいU字形
26	にぶい褐色シルト(7.5YR4/3)	0.36×0.29m・楕円形	0.14m	ゆるいU字形
27	暗褐色シルト(7.5YR3/3)	0.2×0.1m・楕円形	0.12m	ゆるいV字形
28	暗褐色シルト(7.5YR3/3)	0.18×0.15m・円形	0.12m	ゆるいU字形
29	暗褐色シルト(7.5YR3/3)	0.34×0.22m・楕円形	0.17m	ゆるいV字形
30	にぶい褐色シルト(7.5YR5/4)	0.26×0.22m・円形	0.04m	ゆるいU字形
31	にぶい褐色シルト(7.5YR5/4)	0.34×0.29m・やや楕円形	0.14m	ゆるいU字形
32	暗褐色シルト(7.5YR3/3)	0.68×0.55m・楕円形	0.24m	ゆるいU字形
33	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.35×0.25m・円形	0.08m	ゆるいU字形
34	褐色シルト(7.5YR4/3)・炭化材を含む。	0.54×0.45m・楕円形	0.16m	ゆるいU字形
35	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.2×0.1m・楕円形	0.2m	ゆるいV字形
36	褐色シルト(7.5YR4/3)	(0.44)×(0.41)m トレンチで一部削平	0.3m	ゆるいV字形
37	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.14×0.11m・円形	0.15m	ゆるいU字形
38	暗褐色シルト(7.5YR3/3)	0.26×0.18m・円形	0.14m	ゆるいU字形
39	黒褐色シルト(7.5YR3/1)・焼土粒を含む。	0.26×0.18m・楕円形	0.25m	ゆるいV字形
40	黒褐色シルト(7.5YR3/1)・焼土粒を含む。	0.24×0.18m・円形	0.12m	ゆるいU字形
41	黒褐色シルト(7.5YR3/1)	0.57×0.45m・やや楕円形	0.18m	ゆるいU字形
42	黒褐色シルト(7.5YR3/1)・炭化材を含む。	0.72×0.49m・楕円形	0.21m	ゆるいU字形

第93表 ピット一覧表(2)

番号	埋 土	規 模	深さ	断 面
43	暗褐色シルト(7.5YR3/3)・炭化材を含む。	0.4×0.32m・ほぼ円形	0.15m	ゆるいU字形
44	黒褐色シルト(7.5YR3/1)・炭化材を含む。	0.58×0.48m・楕円形	0.11m	ゆるいU字形
45	暗褐色シルト(7.5YR3/3)・炭化材を含む。	0.3×0.28m・円形	0.16m	ゆるいV字形
46	灰褐色シルト(7.5YR4/2)・炭化材を含む。	0.18×0.12m・楕円形	0.12m	ゆるいU字形
47	黒褐色シルト(7.5YR3/2)・炭化材を含む。	0.32×0.28m・円形	0.16m	ゆるいV字形
48	灰褐色シルト(7.5YR4/2)・炭化材を含む。	0.4×0.22m・楕円形	0.26m	ゆるいV字形
49	灰褐色シルト(7.5YR4/2)・炭化材を含む。	0.18×0.15m・円形	0.09m	ゆるいV字形
50	灰褐色シルト(7.5YR4/2)・炭化材を含む。	0.32×0.18m・楕円形	0.11m	ゆるいV字形
51	黒褐色シルト(7.5YR3/2)・炭化材を含む。	0.3×0.25m・円形	0.23m	ゆるいV字形
52	灰褐色シルト(7.5YR4/2)・炭化材を含む。	0.2×0.18m・円形	0.22m	ゆるいV字形
53	灰褐色シルト(7.5YR4/2)・炭化材を含む。	(0.48)×0.28m	0.18m	ゆるいU字形
54	灰褐色シルト(7.5YR4/2)・炭化材を含む。	0.22×0.17m・ほぼ円形	0.13m	ゆるいV字形
55	黒褐色シルト(7.5YR3/2)・炭化材を含む。	0.26×0.23m・円形	0.1m	ゆるいU字形
56	灰褐色シルト(7.5YR5/2)・炭化材を含む。	0.7×0.58m・円形	0.25m	ゆるいU字形
57	黒褐色シルト(7.5YR3/2)・炭化材を含む。	0.66×0.4m・楕円形	0.53m	ゆるいV字形
58	黒褐色シルト(7.5YR3/2)・炭化材を含む。	0.56×0.41m・楕円形	0.2m	ゆるいU字形
59	黒褐色シルト(7.5YR3/2)・炭化材を含む。	0.25×0.2m・円形	0.11m	ゆるいU字形
60	暗褐色シルト(7.5YR3/3)・炭化材を含む。	0.24×0.2m・円形	0.15m	ゆるいU字形
61	暗褐色シルト(7.5YR3/3)・炭化材を含む。	0.32×0.28m・ほぼ円形	0.21m	ゆるいV字形
62	暗褐色シルト(7.5YR3/3)・炭化材を含む。	0.18×0.14m・円形	0.18m	ゆるいV字形
63	褐色シルト(7.5YR4/3)・炭化材を含む。	0.5×0.42m・円形	0.17m	ゆるいU字形
64	褐色シルト(7.5YR4/3)・炭化材を含む。	0.26×0.22m・ほぼ円形	0.13m	ゆるいU字形
65	褐色シルト(7.5YR4/3)・炭化材を含む。	0.28×0.25m・ほぼ円形	0.15m	ゆるいU字形
66	褐色シルト(7.5YR4/3)・炭化材を含む。	0.26×0.21m・円形	0.15m	ゆるいU字形
67	褐色シルト(7.5YR4/3)・炭化材を含む。	0.3×0.18m・楕円形	0.16m	ゆるいU字形
68	褐色シルト(7.5YR4/3)・炭化材を含む。	0.3×0.21m・やや楕円形	0.24m	ゆるいV字形
69	褐色シルト(7.5YR4/3)・炭化材を含む。	0.18×0.15m・円形	0.09m	ゆるいU字形
70	にぶい褐色シルト(7.5YR5/3)・炭化材を含む。	0.28×0.18m・楕円形	0.07m	ゆるいU字形
71	にぶい褐色シルト(7.5YR5/3)・炭化材を含む。	0.26×0.23m・円形	0.2m	ゆるいU字形
72	にぶい褐色シルト(7.5YR5/3)・炭化材を含む。	0.28×0.23m・ほぼ円形	0.04m	ゆるいU字形
73	にぶい褐色シルト(7.5YR5/3)・炭化材を含む。	0.24×0.2m・円形	0.07m	ゆるいU字形
74	褐色シルト(7.5YR4/3)・炭化材を含む。	0.24×0.2m・円形	0.23m	ゆるいU字形
75	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.2×0.12m・楕円形	0.1m	ゆるいV字形
76	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.16×0.14m・円形	0.08m	ゆるいV字形
77	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.56×0.42m・やや楕円形	0.25m	ゆるいU字形
78	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.56×0.48m・楕円形	0.31m	ゆるいV字形
79	褐色シルト(7.5YR4/3)	1.1×0.6m・楕円形	0.38m	ゆるいV字形
80	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.94×0.62m・やや三角形	0.23m	ゆるいV字形
81	褐色シルト(7.5YR4/3)	0.31×0.36m・楕円形	0.15m	ゆるいU字形

報告書抄録

ふりがな	ふなやまきたこふんぐん・こようあとぐん・いせき							
書名	船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡							
副書名	VRテクノジャパン開発事業に伴う緊急発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター 調査報告書							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	藤田英博・青木健太郎・小塩康真・近藤大典・山形秀樹・藤根久 植田弥生・新山雅広							
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058-237-8550							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
船山北古墳群	岐阜県各務原市須衛町	2113	03670~03 681・0879 6~08797 ・08798~ 08802・08 803	35° 25' 13"	136° 53' 20"	19930603~ 19931022 19940112~ 19940325 19940516~ 19950324 19950413~ 19960327 19960327~ 19960730	17,600m ²	VRテクノジャパン開発事業に伴う
船山北古窯跡群								
船山北遺跡								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
船山北古墳群	集落跡	古墳時代	竪穴住居	2軒	石器・石製品	終末期の古墳群を調査した。 「建久五年」の年号をもつ資料を確認した。		
船山北古窯跡群	古墳	~	古墳	13基	弥生土器			
船山北遺跡	生産遺跡	近世	古窯跡	5基	土師器			
	その他の墓		近世墓 ビット	24基 81基	須恵器 灰釉陶器 山茶碗 土師皿 錢貨			

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第52集

船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡

2000年3月31日

編集発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 西濃印刷株式会社